生田春月全集

第　九　巻

感想・書簡

新　潮　社

生田春月詩碑（米子市勝田町法城寺境内）

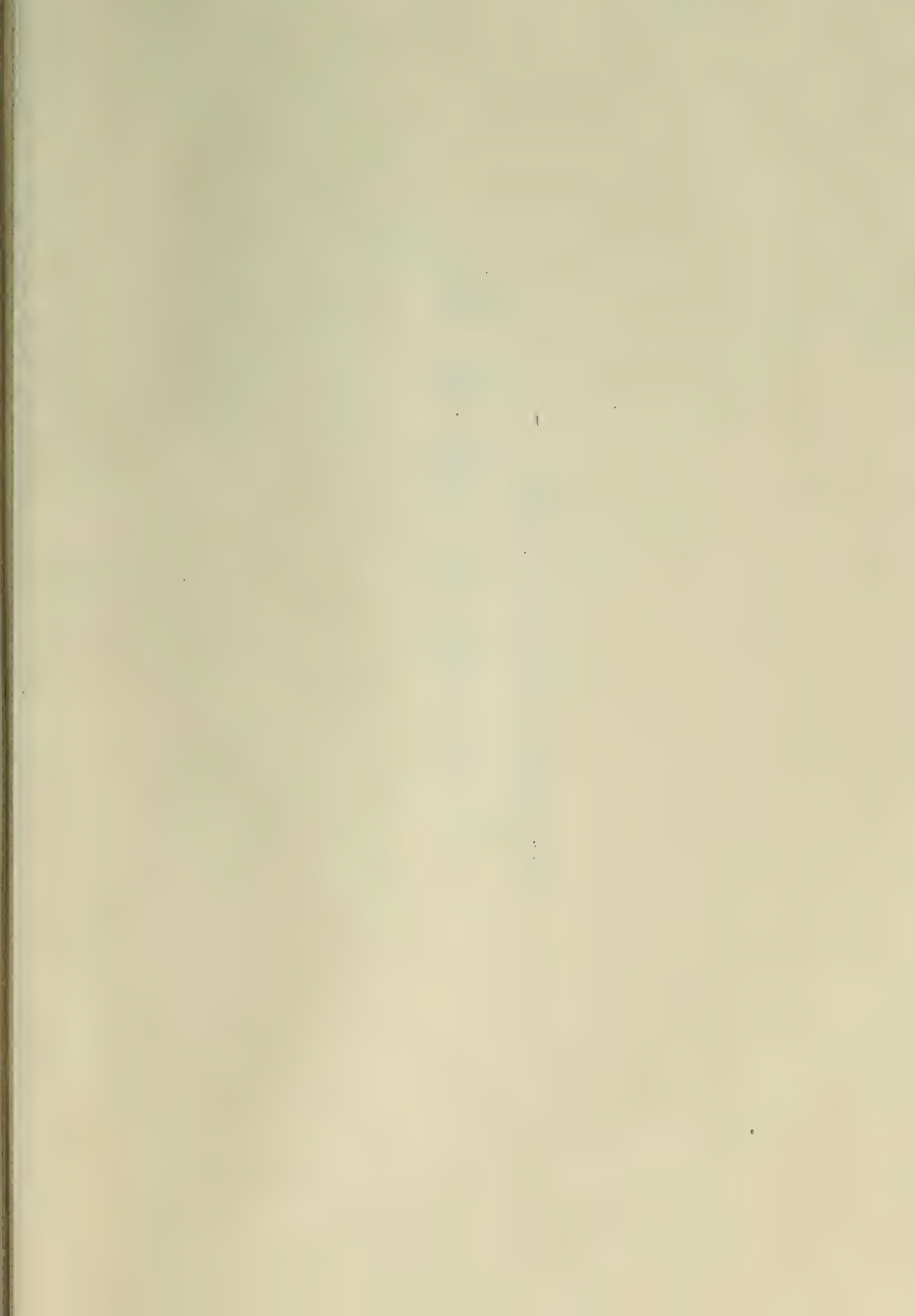
生田春月詩碑（米子市勝田町法城寺境内）

目次

詩の作り方

感想・書翰及び雜篇

阿呆理詰 (Aphorismen)

――場末の支那料理店の炒雑碎（チャプスイ）――

阿呆の自家辯護

人間は阿呆になつた時でなければ、眞理を語る事は出來ない。

厭世主義の訂正

人生が厭はしいのではない、自分が厭はしいのだ。

對立

人生は二通りの存在から成立つてゐる。政治家と、人間とから。

最も幸福な男

彼は友人の戀した女に必ず戀した。そして、友人がその女を斷念すると、自分も一緒に斷念してしまつた。
彼は人の噂ばかりして日を暮した。そして、何でも賞め、何にでも感心した。
人は彼を個性のない男だと云つた。人間としての虛無だと酷評したものもある。然し、彼等は彼が最も羨まるべき幸福な男である事を氣付かなかつた。

唯物主義の勝利

唯物主義は、最後に、人間を機械のもとに屈服させてしまふであらう。つひには最後の一人の人間が、機械の中を

歩くであらう。彼は最後の勝利者であらうか？　いな、敗北した人間の最後のものなのだ。

唯一眞正のユウトピア

古來のあらゆるユウトピアは、人間の悲しい制限と失敗との記念だ。個人性がいかに超越しがたいものであるかを暴露したのにすぎない。そこでは常に、私、汝、彼の區別が失はれてゐなかつた。すべては一人稱の主格をもつて語られてゐる。

最大の哲人のユウトピアも、つひに痴人の夢に如かない。夢に於ては、自他の區別が判然としない。個人性の區別がない。甲であるかと思へば、乙のやうでもある。從つて、そこには人間の自由な轉身があり、眞のアナルシイがある。個人と個人との區別より生ずるあらゆる固定と、その制約とがない。一切が自由で平等である。

夢こそ人間の窺知し得る唯一の眞のユウトピアである。哲人のユウトピアが夢に如かないのは、それが醒めた理性で見るユウトピアだからである。

漫讀と漫生

書物は漫然と讀むのが、最も面白くもあり、利益もある。漫讀を有害となすのは、功利的なフィリスティン根性か、腐儒根性かである。然し、人生を漫讀するのは？　多分、ここでも漫然と生きる方がより賢いであらう。何となれば、人生が糞勉強に値するか否かは疑問だからである。

途　中

行き着くところでは、萬事が空である。然らば、我々のために意義あるものは、その途上である。その途上の或日或時である。我等の心の最も充實した瞬間が、眞の生である。

罪惡としての才能

才能の認められない事を嘆くものは、その才能に値しない。彼が有用の才であつたならば、才能の罰せられない事を喜ぶべきである。高貴な心の貴族が、その身分をうしろめたく感ずるやうに、精神的貴族である才能の人は、その才能をうしろめたく感ずるに違ひない。

ダブルベッドの效用

世に最も安易な快樂は、ダブルベッドの上に一人で寢る事だ。そのくつろぎは、女の抱擁の與へ得ないものだ。そして、人生はなぜ獨身者のダブルベッドのやうに廣くあり得ぬのだらうか？

女の謎

女の眼には、抵抗と願望とが同時にあらはれる。或ひは、身體が抵抗し、眼が願望する。

戀愛と果實

戀愛は枝に垂れてゐる果實である。あまり早くむしりとると、かたくて食へない。おそすぎると、腐つてしまふ。

後日譚

どんな熱烈な戀愛でも、ある時期がすぎると、義務になる。いな、熱烈な戀愛ほど。

現代のエピキュリアン

戀愛とは苦痛の享樂である。戀愛に於て快樂を求めるものは、最も粗大な心である。のみならず、また愚劣である。苦痛が享樂となるところに、戀愛の不思議な力がある。

ユウディッド族

女はユウディッドである。次ぎの瞬間には、殺害する意志を抱きつつ、男の抱擁を受けてゐる……

「彼女達」の仕事

「彼女」が自分の生涯に現れなければ、自分は現在とは違つた自分であつたらう。
それはさうであるかも知れない。だが、その違つた自分は、一つの幽靈に過ぎない。今のこの自分の外に、自分のありやうはないのだ。
「彼女」が自分を今の自分にしたのだ。ことによると、自分は「彼女達」の編み上げた一つの襯衣の類ゐに過ぎないかも知れぬ。

出雲の神樣

人生は「彼」と「彼女」との組合せだ。そして、「彼」と「彼女」との組合せは、殆んど全く偶然によつて成される。だから、滿足に行く場合は極く稀れだ。そして、たまたま他の偶然によつて組み直されるか、又は、そのまま惰性的に持續される。

この組合せを結婚と呼び、この偶然の名を、出雲の神樣といふのだ。

ドン・フアンの

婦人の寵愛について喋々と語るものは、一度びも婦人の寵愛を得なかつたものである。眞のドン・ファンは、決してその冒險の成功を語らない。それは次ぎの成功を阻害するからである。

女を通して

彼は女を通して男を知つた。

いろいろな男を知つた。

男の本性がどうであるかを知つた。

女を間に置いて、相對したとき、はじめてその男が何者であるかも知り、自分が何者であるかも知つた。

男が男を知るのは、女を通してだ。

女は男から男へと架けた橋のやうなものだ。

女にだまされる術

だまされる。それが戀の甘美な蜜を吸ふ最も賢い方法である。女に對して始終、だまされはしまいか、ウソではあるまいかと、心を鎧つてゐたのでは、つひに戀愛の法悦に浸る事は出來ない。

戀は利巧者が莫迦になる修業である。だまされる事の喜びが分らないうちは、情交は出來ても、戀は出來ない。だましてやるのは樂しいが、だまされてゐるのはなほ樂しいと云つたハイネは、這般の消息に通じてゐたのであるかも知れない。我が柳里恭も、この眞實を彼らしい言葉で表白してゐたやうに思ふ。だまされてゐよ。その時が、我々の生の最も樂しい一時である。然し、そのあとに來る苦い幻滅、堪らない後味をどうするか。それを感ずるのは、意識してだまされなかつたからである。だまされる術の達人は、だまされつつ、心の一角に、鋭い眼を光らせてゐる事を忘れないのである。

賣女性

賣淫の中に戀愛の要素の含まれてゐる事は稀であるが、戀愛の中には、必ず賣淫の要素が含まれてゐる。何となれば、女性は選擇するものでなく、選擇されるものである。女性の本質は、受動的適應性である。そして、これは既に賣淫を豫想せしめる。

不死の賣淫

金錢の存するうちは賣淫はやまない。社會主義者は、このゆゑに賣淫の絶滅を確信する。然し、賣淫は金錢が廢せ

られてもやむものではない。物々交換の時代に、既にそれはあつたからである。

大震災の當時、新橋一流の藝妓が、握飯一つでその貞操を賣つた事は有名な話柄である。今も、黒人の女は、ブリキのかけら一つでそれを賣るのである。金錢の用をなさぬとき、まづ最も低下するものは、女性の貞操である。なぜならば、必要は無限の價値である。そして、女性の貞操はその必要の爲に存するので、それ自身價値はないからである。

賣淫がやむときは、女性が全然的に男性となる日である。婦權論者はその爲に努力しつつある。然し、不幸にして、その時には、男性が女性となるであらう。そして、賣淫は依然として行はれるであらう。ただ、男性と女性とがその位置を交換するに過ぎない。

フェミニストは語る

女の打算的な事は、男がみんな口にする苦情である。然し、その苦情は、たまたま、女のその態度をジャスティファイするに過ぎない。何となれば、此事が既によく男のエゴイズムを證明するからである。勿論、女の大部分は、算盤を持たないで戀するものではない。然し、女とても生きなければならぬのだ。

×

戀愛は究め究めて、究めつくしえず。愛を弄ぶものは、その本質に徹せず、眞に愛するものは、その情熱にめくるめく。

戀愛は陶醉すべく、語るべからず。醉中は醉を語るひまなく、醒後に醉を思へば夢の如くである。醉を語るは酒を語るのであり、戀愛を究めるは女性を究めるのである。戀愛の究め難きは、女性の究め難きである。

そして、この攻究癖は男性の惡癖であり、同時にその弱點である。女性はそんな愚行には墮さない。彼女はただ本能の命ずるままに行動するのみである。

人生は書物によつて學ぶべしとの、アナトオル・フランス、並びに芥川龍之介の說にして眞ならば、書物によつて、戀愛と女性は知るべきものであるかも知れない。だが、若し書物がなかつたらどうするか？　戀愛と女性とを論じた書物は世に多い。然し、「自分の彼女」について語つた書物は未だ曾つてなかつた。

無智の鞭

無智は鞭だ。惠まれないものが惠まれたものを打つ復讐の鞭だ。神經の太いものが、神經の細いものを打つ鞭だ。文化に對する自然の復讐の鞭だ。

風流の動と靜

風流は一つの狀態でもあり、また一つの行爲でもある。「あそび」の三昧にして、「あそび」が同時に「行」となつたものである。その結果を主とするとき、狀態をさし、その過程を重んずるとき、行爲を意味する。

圓

禪僧は一つの圓をゑがいて、斯中に一切あり、ただ人の用ひ得ざるのみと云つた。

圓は宇宙そのものである。圓滿具足の象徵である。

圓の中に一切が含まれる。圓の外は無である。

今や、圓タクの時代、圓本の時代、圓の時代である。一圓はその最少限度であり、最大限は百億圓より、なほその上に及ぶ。恐らく無限であらう。

アメリカの弗に全く征服せられない以上、我々はただ圓の中にのみ、一切を見出すであらう。ただ愚かなるものは、これを用ひ得ざるのみ。

美しき魂

美しき魂の惝怳は、ロマンティシズムの一つの病氣であつた。ゲエテですらも病んだ病氣であつた。

世界を眞に把握するものは、「美しき魂」にあらずして、「醜き魂」である。

「美しき魂」の故郷は他界に屬する。それは現世では、影の存在にすぎぬであらう。

現世はただ「醜き魂」に屬する。彼こそしつかと地上に足を踏みしめるであらう。

ゲエテですらも、ひそかにその心中に「醜き魂」を育成した疑ひがある。でなければ、社會の上層に八十歳まで身を保つ事は出來なかつたであらう。

情實國

ルドルフ・ロタアルの『スペイン魂』を讀むと、スペインほど情實に支配されてゐる國はないらしい。あらゆる官職や地位が、悉く個人的關係で定るのだ。だから、一つの政府が斃れると、全國の官省の役員が全部入れ代るといふ。

だが、これはスペインだけの事だらうか。日本はどうか。內閣と一緒に行政官の代る日本はどうか。會社はすべて重役の姻戚を以て滿されつつある日本はどうか。日本の方がことによるとスペイン以上の情實國であるかも知れな

い。然し、情實に支配されるのは、ひとりスペインと日本だけであらうか。我々は不幸にして、ソヴェートロシアに於てすら、その事實を傳聞する。現幹部派の姻戚知己が官職を專有しつつある風評を耳にする。
所詮、情實は人間の本性である。あらゆる變革は、一黨に代る他の一黨、情實に代るに他の情實を以てするのみであらう。

藝者と幇間

文學に携はる女性の第一の資格は、美貌である。美貌の外に、文學上の制作に必要なものは何一つないのだ。
文學によつて立つ男性の第一の資格は、社交術である。幇間的才能である。これなくしては、その存立すらも危い。
自分が二十年の文學生活で體得した經驗は、これ以上に出でない。ブイ！

御座附文學

閨秀文學者は、今や文學藝者の一種である。文學藝者の意味を有たずしては、存立を許されない。そこで、藝娼妓と同樣に、美貌と媚術とを併せ具へた女性は、此の社會に於ても、「上玉」である。そして、今後その「上玉」がますますその裝飾的意義を發揮するであらう。
歌の一つも詠め、小說の一つも書けるマダムやマドモアゼルは、それによつて退屈から救はれるであらう。然し、彼女の「單なる作品」を與へられるに過ぎない讀者は、同時にまたただ退屈をうつされるに過ぎないであらう。なぜなれば、かういふ作品は、謂はば藝者のお座附のやうなもので、客の求めるものはそれではないからである。讀者は彼女たちの推奬者である文學大家や、雜誌編輯者のやうに、彼女たちを全的に鑑賞し得る利益を有たないからであ

る。

失戀の進化

金の威力について最も痛烈な言葉を聞きたければ、失戀した男に聞け。紅葉山人の時代には、彼は高利貸になつたかも知れない。大正の時代には、彼は社會主義者になつた。現代では、彼はカフェで曹達水をのんでゐる。そして、次ぎの女を探してゐる。

高速度文學

高速度の時代と云はれて、文學上のジャンルも、テンポの速きをこれ競ふに至つた。文學上にテンポの早いといふ事は、ジャアナリスティックといふ事だ。そして、ジャアナリズムの完全なる支配は、この高速度文學を生んだのである。

×

物には再極端がある。また、兩面がある。アナキズムに於いて、ピョトル・クラポトキンのやうな明朗な無政府共產主義があると思へば、强盜殺人を敢て辭さない激烈な「爆彈アナキズム」がある。社會主義には、必ず右翼と左翼とがある。例へば我國の無產黨の右翼たる社會民衆黨の最右翼は、ブルヂョア政黨なる民政黨の最左翼と袖を接し、無產黨の左翼たる勞農黨の最左翼は——と通るが如きである。

修養書の效用

世の中で一等危險な書物は、所謂る修養書だ。そんな書物を正直まともに信じた日には、破滅の外はなくなるのだ。

修養書は、道德上の法律文だ。法律の網に引つかかるものは、常に雜魚(ざこ)であつて、呑舟の魚は、巧みにそれをのがれるやうに、智者は修養書が他人のためにのみ必要な事を知つてゐる。

修養書は他人を說法するためにのみ必要なのだ。自ら準守するためには、自己の經驗から編み出された處世哲學が最も確實だからだ。

×

人生は矛盾で出來てゐる。矛盾は石塊をつなぎ合せるセメントのやうなものだ。若しこれらのセメントをすつかりはらひ落してしまつたら、地球はばらばらになつて飛び散つてしまふだらう。

矛盾からは有意識無意識の欺瞞が生れる。人生の、××をつなぐものは、また欺瞞である。

恐怖の小說

何が恐ろしい、物凄いといつても、此の人生、此の現實の世界ほどのものはない。ポオやホフマンの想像の世界なんぞは、屁みたいなものだ。一等リアリスティックな、一等トリヴィアルな、一等退屈な小說が、實は一等恐ろしい、物凄い小說なのだ。例へば、德田秋聲の小說……

影

一讀、此世には名ばかりのものが多い。うるさく人の口に上つてゐながら、まだ一度もお目にかかつた事がないものが。例へば、人魚だとか、幽靈だとか、正義だとか、自由だとか、平等だとか……神だとか。

偶然

文學者の名聲ほど偶然的なものはない。人生萬事みな偶然とするも、これは偶然の中の偶然である。しかも、このはかない偶然に、その全生命を托するのが文學者の運命である事を思へば、悲慘の極と云はねばならない。名聲を超越せよ。それを云ふのは易い。しかも、それが直ちに竈に關聯する事を思へば、急いでその廣告の口をふさぐ方が賢明である。反省的な人は、この危險な問題に對しては、眼を閉ぢる事の卑怯を、むしろ選ぶであらう。人が死よりもに生を選ぶやう。

英雄即俳優

ロマン・ロオランは、何故にトルストイに惹付けられて、ドストエフスキイに惹付けられなかつたか？

即ち、彼の英雄主義のためである。英雄主義は同時に俳優主義である。英雄はしばしば舞臺上の俳優である。俳優が看客の熱狂裡に登場するとき、彼は即ち英雄である。

ドストエフスキイは、一生自己を片隅に置いた。他人の注目を一身に集める事を極力恐れた。彼の青年時代の受難すらも、彼には華々しい英雄の事蹟ではなくして、無思慮な青年の過失に過ぎなかつた。彼は俳優たるべくあまりシャイであつたと云へる。

反之、トルストイは一生俳優で押通した。彼は俳優らしく名聞を愛した。彼は大聲疾呼を愛し、仰山な身振りを愛

し、一生自己を語るに倦まなかつた。彼は手紙にも一々控へをとつた。卽ち、最もプライヴェートな手紙をも、實は一般公衆のために書いてゐたのだ。彼は常に最上の俳優であつた。故に常に最上の英雄であつた。

ロマン・ロオランは、この一等俳優の演技に魅惑された無邪氣な大向であつたかも知れない。或ひは、人間の眞の偉大が、その世間に及ぼす影響の奈何に懸る事を看破して、最上の俳優が最上の教育者である事を知悉してゐたのであつたかも知れない。

ゴオリキイの『トルストイの思出』は、エッケルマンの『ゲエテとの對話』をもこめての、古往今來、あらゆる天才の日常についての記錄のうち、比較なき絕品である。これはゴオリキイがトルストイとほぼ同格の、少くとも堂々四つに組む事の出來る藝術家であつたからであるかも知れない。然し、その最大の理由は、トルストイがすぐれた俳優であつた事に存する。

情熱

不合理なるがゆゑに我信ずは、すべての信者の信條でなければならぬ。宗教的情熱は、理性を超えたところにあるからだ。

無產者解放運動もまた、その根柢に於て宗敎的運動である。

但、それは中世的信仰の如く、合理の世界を超越したものではなく、極めて常識的な、形而下の、唯物的なものである。その點、甚だ合理的信仰である。

然し、玆で問題になるのは、合理不合理ではない。その情熱の力である。

無產者基督

一切の宗教は、常にプロレタリアの精神から出發した。然も、その衰頽墮落の日には、必ずブルジョアの玩弄物となる。今や、弗に拜跪するものは、ひとりアメリカの教會のみではない。或る宗教團體が存立するためには。必ず長者の萬燈を要とするからだ。

基督の壯烈な精神は、今や、反宗教の、宗教否定の無產運動の中に於いてのみ見出される。

好々爺の資本

我々が生存を繼續し得るのは、あだかも他人が非難するやうなさらした惡が我々の中に存するからに外ならぬ。若し我々が全く他人の非難から免かれ得たなら、忽ち我々の全生活は崩壞するであらう。反之、他の非難が痛烈を極めれば極めるほど、我々の存在は確固不拔である。

例へば、我々は、壯年時に無慈悲な行動をして財產を殘した人物が、子煩惱の好々爺として、平和と好評の晩年を過して、めでたく大往生するのを屢々目擊する。此際、彼の善は、彼の惡の結果に過ぎない。彼の善は彼の惡の投資の收穫に過ぎない。

個人主義の徵候

最も詳細な日記を殘す人は、自叙傳を書く人よりも、更に深い個人主義者である。彼はその一日をも失はざらんとし、その生の一滴をも惜むものである。

×

個人主義者の生活樣式は、必然的に孤獨である。孤獨者の信條は、即ち個人主義である。ニイチエ、スタンダアル等は、徹底的に個人主義を生きた孤獨者であつた。

個人主義は不死の願望を生む。ニイチエが久遠輪廻の思想に逢着したのは、それが個人の不死を豫想せしめるからである。しかも、孤獨の究局は死か狂かである。

個人主義の最大限は、誇大妄想であり、個人主義者の良心的な解決は自殺である。しかも、スタンダアルが發狂もせず、自殺もせず、平凡な卒中で斃れ得たのは、彼が戀愛病者であつたからである。

「あらゆる苦惱から救ふもの、早き死か、長き戀か」と言つた狂ニイチエの言は正しい。ニイチエも戀に熱中することスタンダアルの如くであつたならば、狂氣にならないですんだかも知れない。その代り、自殺したかも知れない。スタンダアルすら、かの伊太利女に裏切られた後、長い間、自殺の考へを抱いてゐたのだ。

所詮、個人主義者の生涯は悲劇である。ドン・ファンの如き個人主義者はない。彼の如き悲劇の主人公もまたない。

孤獨の結末

どんな孤獨者でも、その孤獨の重みに堪へられなくなる時が來る。そのときは、彼は戀愛をするかも知れぬ。自殺するかも知れぬ。ことによると、卑しいゴシップメエカアの中に入つて、ゴシップを樂しむかも知れぬ。恐らく、孤獨の對症療法としては、この最後の方法が、最も賢明なものであらう。

なぜなれば、戀愛と女性とは、孤獨者にとつて、あだかも(以下十六字空白)以外の何ものでもないからである。自分の經驗を云つても、十何年一緒に住んだ自分の妻さへ自分を理解しなかつた。否、理解しないから妻でゐられたの

であらう。それから、自分の愛した女たちは、おなじく自分を理解してゐなかつた。理解したならば、自分の戀人にはなりえなかつたらう。

それから自殺は？　死は一切の解決である。そこには、最早、云ふべき事の何もない。ただ、問題はすべての人が自殺を敢行しえない事である。

そこで、殘るはただ、ゴシップメエキングの外はない。

ペトロニウス

羅馬第一の才人が生に別れるときに何と云つたか。Valete curae ―― 惱みよ、さらば！　ペトロニウスの「サティリコン」を讀むと、この著者のこの最後の言葉が、暴帝ネロに死を命ぜられる前に、準備されてゐたに違ひないと知る。

人　神

人の一生には、あまりにも悔が多い。あまりにも悔の多いのは、特種な人間で、最も不幸な人間であるかも知れない。いな、悔のない人こそ、特種な、且つすぐれた人である。悔を知らない人間こそ英雄だ。自分の一生は悔の連續の外の何ものでもなかつた。憫れむべき阿呆よ。

ジアマモ・カサノヴアは、一生悔いを知らなかつた。映畫俳優の演出するラヴ・シインよりも、更により多くの場面をつくりながら、下男にすら輕蔑せられる寄食者として、廢殘の老軀を一貴族の憐憫の下に托しながら、彼はその一生と、一生の情事とを悔いなかつた。

悔いる事を知らない人間は神だ。

自分はその末期の一瞬に、神となり得るだらうか。覺束ない事だ。だが、自分はこの悔の卑小から免れる道を知つてゐる。それは、悔の底まで徹する事だ。卑小のどん底まで落ちてみる事だ。おそらく、そこに卑小の壯大があるかも知れない。

最大の絶望

人生は自分には、七つの封印を施した寶庫であつた。オプン・セサムの呪文を自分は知らなかつた。その人間が、どうして人生について何等かの意味ある言葉を吐き得たらう。自分は自分の最善の貢獻は、何も書かない事だと知るに至つた。

引退道德

社會は自分を必要とせず、この一切の事情が自分に與へた決定は、これに盡きる。必要とせざるものに、自己を强ゐる事を欲してはならぬ。これが自由人の自己律法である。

二挺のピストル

二挺のピストルがあつたら、頭と胸とを同時にぶちぬきたい。この二つは最惡の敵だつた。どちらか一つだつたら、まだ助かつた。二つが相戰つて、一生を滅茶々々にしたのだ。えこひゐきなしに、二つを罰することによつて、はじめて自分を救ひ得るのだ。

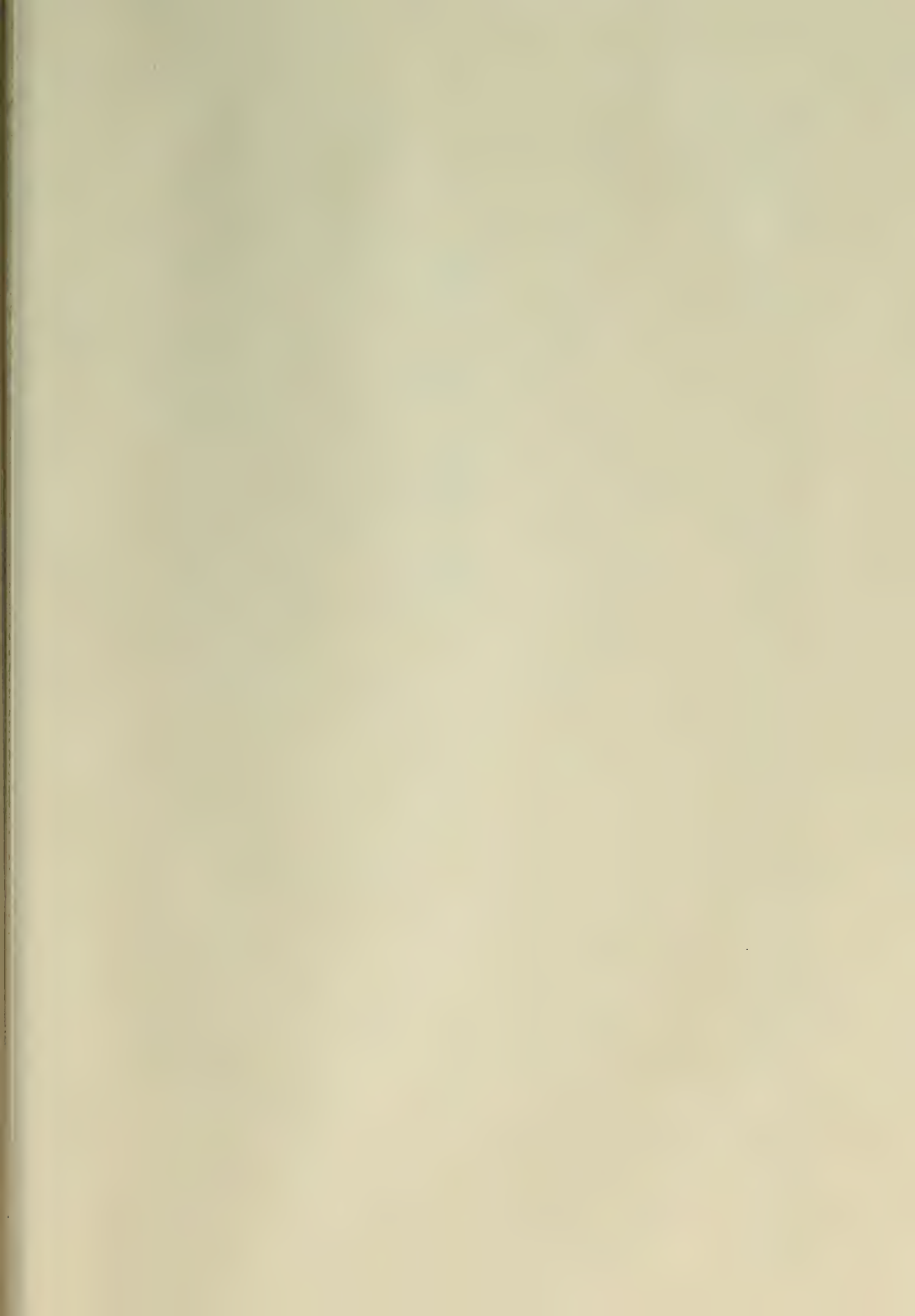
永遠の疑問

一體、この全苦痛が何の意味があるのだらうか。何のための苦痛であらうか？
此の苦痛の中に、なほ生きねばならぬとは、一體、何の理由からであらうか？
その生涯の或る瞬間に、我々は常にかうたづねずにはゐられない事がある――この何千年來の陳套な疑問を、しかも、未だ曾てその囘答は與へられなかつた。

人間的絶望

社會組織がどう變らうと、此世では、利巧者が勝つにきまつてゐる。世才と世智とに長けたものが成功するにきまつてゐる。
現に、最も非利己的なるべき革命運動に於てすら、熱誠、眞實な純情の鬪士は、概ね犧牲者として斃れ、その生き殘つた人達すら、最後には恐怖政策の辣手によつて、屠殺又は生埋めにされて、ジェスイット的狡智を有する老獪な陰謀政治家が、革命の收穫者として、神樣に成上るのだ。同僚意識の高調される無産文學者の陣營で、ブルジョア的狡獪と利己主義とに充ちた利巧者が、濟輩を凌いで、ひとかどの革命家らしく振舞ひつつ、そのプチ・ブル的名譽心を滿足せしめるのである。
なぜなれば、現世は利巧者と狡猾者とに屬してゐるからである。正直で、善良で、無策な人々にとつて、現世は一つの長い失敗と苦境との連續に過ぎない。彼には他界しかない。死後の世界しかない。しかも、現象の世界以外を信

少數の同志に賞讃せられ、理解せられる事しか與へられない。そして、その少數の同志は、彼と同樣の失敗者で、その聲は勝利者の絹叫の中に沒却せられるであらう。

感想雜篇

虚無の徹底境

宮島資夫兄。病中に頂いたお手紙を拜讀して、いろいろな事を思つたので、その一端を、茲に書きつけて置きたいと思ひました。僕はこの一月あまり病臥してゐるあひだ、いろいろと古い交遊の事を思つたのですが、いつか兄と卜部哲次郎君と三人で、神樂坂を飲み歩いた時の事なども、なつかしく思ひ出しました。卜部君が大阪で自殺をしかけたといふ事は、ずつと前に耳にした事ですが、彼はやつぱり老莊と酒とで生きてゐますか。卜部君の事を思ふと、いつも列子の「且つ久しく生きてなにをか爲さん」といふ句を思ひ出すのです。僕はどういふものか、卜部君は列子、むしろ楊朱風のニヒリストのやうな氣がしますね。もつとも、これは何も卜部君に限つた事でなく、老莊風の虚無恬澹など、今日の意味の虚無思想には入らないほど、今のニヒリストは楊朱の徒なのです。そして、僕だつて、結局はやはり同じ事かも知れませんよ。

いつか兄は僕の『山家文學論集』を評してくれたとき、僕がいろいろの努力と彷徨の後に、つひに到達したのが、虚無の一點であつた事を書かれた。實際、僕も今や最後の一點に到達したのです。喜ぶべきでもなく、悲しむべきでもなく、これが僕としての自然の推移であり、當然の歸結だつたのです。ただその一點は、兄の考へられた意味ではなくて、虚無の中の虚無、その最後の一點だつたのです。この五月でしたか、兄と和田軌一郎君と三人で話したとき、僕は抽象的に、その氣持を少し聞いて貰ひたかつたのですが、あのときは、外の話があまりはづんだので、それも出來ませんでした。

おもへばこの十年來、僕はいろんな思想に觸れて來ました。また、自分でも目に見えぬ推移のうちに、いろんな立

場に立つて來ました。社會主義的情熱から出發して、基督教的な人道主義に傾き、それから更に一轉して、ニイチエの權力意志說に傾倒し、或る時は片隅の幸福のエピキュリアニズムを唱へ、或る時は東洋流の超脫を冀求しました。然し、その底にあるものは、いつも懷疑主義であり、悲觀主義であり、虛無主義でありました。つまり、アイデアリズムの要求が、絕えずニヒリズムの抑制と戰つて、肯定と否定とが相抗爭し、その二つの力が消長して來たのです。

善惡の價値問題が、長い間、僕の問題でした。道德主義と非道德主義との間を、梭のやうに往き來したのです。僕は生れながらのモラリストだつたのです。僕はたうとう最後になつて、不道德なあやまちもしましたが、然し、現代にあつて、自己の不道德を責めるほど、僕は古い道德家だつたのです。非道德を謳歌するとき、僕は一層モラリストだつたのです。だから、ニイチエと同時に、ワイニンゲルを愛したのです。僕は二元論の暗礁に難破したワイニンゲルの苦悶を、身にしみて感ずる事が出來ます。實際、僕ぐらゐ二元的な自己分裂に苦しんだ人間も尠いでせう。僕の中には、いつも二人の人間が對話してゐるのです、爭鬪してゐるのです。「あれか、これか」ですね。そして、それが最後には、きまつて to be or not to be の問題に歸着するのです。

アイデアリズムとニヒリズムとは、僕の生涯を貫く二筋の色絲のやうなものだつたかも知れません。そして、この場合、僕がアイデアリズムといふのは、勿論、哲學上の觀念論の意味ではなく、理想主義、精神主義、或ひは宗教的な求道心と云つた位の意味ですが、普通ニヒリズムと云はれる思想でも、隨分多端で、これを分解してみると、かなり相反する要素が含まれてゐるかも知れません。が、とにかく、大體に於いて、前者は肯定の思想であり、後者は否定の思想です。僕が生を肯定する意力の強まる時は、前者が力を得、生命力が衰へると、後者が鎌首をもたげるのです。僕は一生懸命に、ニヒリズムを抑へ付けようとして來ましたが、いつもそれは多くの効果がなかつたのです。內面的よりも、外面的の事件が、實世間の經驗が、人間性の觀察が、いつも僕をしてニヒリズムに傾かせた。しかも、

一方では、それを引止める強い力が働くのです。かうしていつ止むとしもない葛藤は續き、僕はこの二元の對立、不斷の自己分裂に、ほとほと困憊してしまつたのです。

そこで僕がつひに、その窮境に於いて、一條の活路を求めたのは、禪でした。無礙自在なる禪の境地でした。禪は思想ではありません、それだけ生きた力の源泉です。禪で云ふ無は、おそらくいかなるニヒリズムも及ばぬ否定であると共に、また最大の肯定でもあるでせう。これ位ゐ恐ろしい思想（と云ひ得れば）はありません。曾つて柳宗悅氏が、西洋中世の神祕主義を研究して、それを東洋に及ぼして、禪の思想に觸れて、そこで止めなければならなかつたのも尤もの事です。

禪の深いところは、もとよりよくは分らなかつたが、とにかく、僕はそれによつて、平等無差別の境地をうかがつたのです。一元の世界を瞥見したのです。そして、茲に、この長い間自分を矛盾撞着で苦しめてゐたアイデアリズムとニヒリズムとの、統一融合され得る境地があると考へるやうになりました。つまり、いかなる幻滅にも破碎しない盤石のアイデアリズム、絶望を透過した能動と信仰とのニヒリズム、さういふ境地が目の前に見えて來たのです。そして、僕はこれをかりに虛無的生命主義と名付けました。否定によつての肯定、ニヒリズムを涌過してのアイデアリズム、といふよりも、否定も肯定もない、善も惡もない、樂天も厭世もない、一如不二の世界です。若し、この信念と安心とに到達すれば、僕も力強く生きられるだらうと思つたのです。そして、そのとき、僕は絶望的勇氣といふ事を考へたのです。これが虛無的生命主義の根本の力です。絶望のどん底に陷つたとき、人はそこで一つの決意を得る、一つの勇氣を得る。死に向ふ決意、生の執着を斷ち切る勇氣。その勇氣もて、ふたたび生に向ふ、死身の生、捨身の覺悟です。背水の陣、決死の鬪ひです。そこまで行けば、もう to be or not to be などは問題ではないのです。

然し、これは虛無的生命主義などと、今更のやうにやかましく云はなくとも、實際は極く平凡な思想です。例へば

戰時の軍人や、乾坤一擲の大勝負をやる相場師など、現にこの思想を生活してゐるでせう。普通の人でも、腹のすわつてゐる人は、みなこの達觀の上に立つてゐます。これは思想としては第二義で、實際生活上の體得によつてのみ意義があるのです。僕は凡ての思想が實踐に現れなければ無意味だと思ふものですが、特にこれは生きて行く上の覺悟であり、人生の達觀です。だから、虛無的生命主義者は、同時にアナキストとして直接行動に從ひ得べく、マルキシストとして闘爭の渦中に飛込み得べく、また天下の良民として、その職業に殉じ得るのです。否、それでなければ意味のないものです。重要なのは、その腹です。その點で、禪の境地です。大死一番の境地です。

その後、僕は西班牙人ミゲル・デ・ウナムノの『悲劇的生命感』といふ書を讀んで、そこに自分の考へに非常に相似た說が述べられてゐるのに驚いたのです。ただ、ウナムノは中世的な基督教の、カトリックの信仰の上に立脚して、神を說き、靈魂不滅を說く、その點はいかにも西洋人の考へ方なので、どうも同感出來なかつたが、それを除いて、自分の共鳴できる部分だけを取つて、僕はこれをかりにナダイズムと名付けたのです。それは西班牙で「ナダ」といふのは無の義なので、在來のニヒリズムの普通の概念と區別するために、ニヒリズムに非ず、ダダイズムにも非ざるナダイズム――これは一寸面白い洒落でもあるんです。ウナムノはこれを聞いたら、驚いて抗議するに違ひありません、私はニヒリストぢやないよと云つて。彼はアイデアリストだがそのアイデアリストから神を取つてしまへば、ニヒリストだ。そこで僕の攝取したウナムノはナダイストです。西洋崇拜の現代で、僕が自分の說に權威あらしめようと思へば、ウナムノとナダイズムの名を借りるべきです。

アイデアリストは、多少ともあれ、ドン・キホオテで、ニヒリストは、ハムレットのペシミズムが、世紀末の絕望のるつぼに投込まれて、更に極端化したものです。ウナムノはドン・キホオテ主義を唱へる。彼によれば、ドン・キホオテは絕望者であり、絕望からして大業を企てるものです。卽ち、僕の所謂る虛無的生命主義です。絕望がニヒリスト

の屬性ならば、これは强者のニヒリズムです、英雄のニヒリズムです。元龜天正の英雄兒、織田信長のニヒリズムです。ニイチエはニヒリズムを分類して、昂揚せる精神力の徵候としてのニヒリズム、卽ち、アクティーヴのニヒリズムと、精神力の下降退嬰の證左としてのニヒリズム、卽ち、パッシイブのニヒリズムとの二つに分けた。その前者に當るものです。ニイチエのニヒリズムの解剖は、なかなか暗示的なものですが、この分け方の如きは、『悲劇の出生』で强者のペシミズムを說いた時から、彼は知つてゐた筈です。

茲で個人の精神力の强弱といふことが問題になつてくる。アイデアリズムといひ、ニヒリズムといふも、要するに、その他人の性格に根ざすもの、その個性の現はれです。思想は內から生れるものです。性格の影です。それでなければ、單なる概念にすぎず、借物にすぎません。とすると、僕がいかにアイデアリズムとニヒリズムとの相剋を云はうとも、それは自分といふものの性格の中で、おのづとその特質を決定せられてゐる筈です。おなじアイデアリズムでも、弱蟲のアイデアリズムは、ニヒリズムとゑらぶ事なく、强者のニヒリズムは、强くアイデアリズムの色彩を帶びて見えるでせう。僕が弱者である限り、その二つとも、力の弱いものです。さういふ見方からすれば、アイデアリズムとニヒリズムとの融合調和などゝいふのは、今更迂遠の事で、自分自身が强くなり、强靱な精神力を得て、盤石のやうな信念と、覺悟との上に立つとき、自然と融和して行くべきで、その自己完成、禪の方で云へば、悟り、卽ち生きて働く力を得る事こそ緊要で、單に思想として、文學の上で統一したやうに見せてもつまらぬと思つて來ました。

僕はまつたく一切の思想などいふ事が、ひどくつまらなくなつてしまひました。元來、さうした概念の整理は、自分の柄にも合はない事でもあらうが、一切の思想的表白といふものは、骨折つてまとめて見たところで、要するに、それはそれだけの事で、自分の現實の生活とは、大して關係はないのです。思想といふものは、生きて動く力とならなければ、何の意味もない事で、しかも、觀念に沒頭してゐると、その力が衰へるだけなのです。その點で、さうし

た一切の思議を排し、一切の理窟を排する禪の境地をたふとぶのです。我々はどんな事でも云ふ事は出來る、が、それが生活上の實踐とならなければ、半文錢にも値しない、これは僕のますます痛感して來たところです。

だが、かう云つても、僕自身、もとよりそれが實現出來たわけではありません。ただ知識として了解出來たのみで、眞の智慧とはなつてゐないのです。やはり一つの客觀的解釋であつても、個人的の體得とはなつてゐないのです。僕が今日までいろいろと求めて來たものも、要するに、この智慧であり、體得であつたのです。それは僕としての飛躍でなければなりません。卽ち、或る意味で、自己克服であり、同時に、自己解放でもあります。アイデアリストも、ニヒリストも、共に世界をその儘に承認しないものです、現狀を否定するものです。ただ、一は將來に希望をもち、よりよき世界の可能を信ずるものであるし、他は絕對に希望を有たず、無を以て有にまされりとなすものです。僕は長い間、希望と絕望との間の振子でした、それが絕望を見ること、なほ希望の如くなるべき事を思ふに至つたのです。その點で、僕はパピイニの言葉に同感しました。彼の自叙傳を讀んで、此の男は自分と同質の人間だなと感じたのです。

今度の手紙の中で、兄はパピイニが、萬事空しく、虛無なる事を知つて、なほかつ努力をする、宇宙から何等の報酬をも求めず、自分の事業の空しい事、世界のつひに空しい事を自覺しつつ、敢てその空しさのために全力を盡すと云つた言葉の眞實を、果してどうであらうかと疑はれた。僕も同じ事を思つたのです。パピイニのあの言葉は、彼の詩にすぎないのだと思つてゐます。その點で彼は僕同樣の人間ではないでせうか。彼が生存してゐる限り、自叙傳を書き、基督傳を書いたとき、宇宙から(少くとも世間から)何等の報酬をも期待してゐなかつたと云へるでせうか。それは超脫の高僧のこと、詩人文學者などには、得て望むべき事ではないのです。それは勿論、ある瞬間、強くさう思ひ込む事はあるでせうが、それだけでは、やはり一時の感情であつても、體得とはなりません。いかに強い言葉を用

ゐようとも、依然として知識の範圍に止まつて、智慧とはなりません。殊に、執着力の強い西洋人などが、そんな事を云つても、まづは言葉で終るのが普通でせう。

執着と云へば、兄はつまらない執着にとらはれてゐる自分の腑甲斐なさを歎じて、それにつけても、その朝の新聞で、中國の臨濟宗某派の管長である老禪師の自裁の記事に接して、かなり奇異な感に打たれたと云はれた。然しながら、生れた限りは生きてゐなければならず、まことに「野火燒不レ盡、春風吹又生」だと思ふと云はれた。僕もあの記事を見たときは、しばらく考へ込んでしまつたのです。死の前に、野火燒不盡と人に書いて與へた老僧の心事はどんなものでせうか、それは分りませんが、然し、禪僧の自殺は案外めづらしい事でないやうにも思はれます。支那でも、華亭の船子和尚は、夾山を接得すると共に、もう用がすんだと云つて、水中に飛込んだと云はれてゐるし、その船子和尚の高風を慕つて、自ら入水して果てた普首座といふ風變りの和尚もあつたと云ひますが、我國でも、ときどきそんな例は聞いてゐます。

これはその宗門からは、虚證妄說として否定されてはゐますが、關山國師（だと覺えてゐます）は、「どれこれから一寸行つてくる」と云つて、夜中に尻端し折りで、池の中にざぶざぶ入つて行つて、入寂されたといふ一說があつたやうに思ひます。また、友人の中村詳一君がよく話して聞かせてくれる高隱自的禪師の例もあります。それから座脫立亡、これらは自然死でせうが、また一種の死の征服であり、死の統御でもあつて、よし時間的にはわづかであつても、意識的に天壽を縮める場合もあるでせう。ここまで考へて來ると、自殺と自然死との區別も、一寸曖昧になつて來ます。勿論、座脫立亡は立派な大往生でせうが、たとひ自殺だとても、人によつてその心境はそれぞれ違ふのでせうから、その境界に至つては、他から忖度する事は出來ますまい。が、とにかく、禪僧の自殺とは、一見矛盾のやうで、奇異の感もありますが、また、肯かれるふしもあるやうな氣がします。

禪といふものは、僕にはたうとう分らないでしまひましたが、その分らない僕の心から云へば、生死の關を透過した人にとつては、生も死も差別はないのだから、天命に從つて生きるのはもとよりよいが、又、その生命の根を斷絕しても、それも別に差支はない筈ではないでせうか。禪宗では時節因緣といふ事をよく云ひます、時節因緣を明らめるのが佛法の極意です。そして、人の死はたとひいかやうであらうとも、結局、みんな時節因緣なのではないでせうか。もつとも、自殺は、たとひ基督敎ほど嚴格ではなくとも、佛敎からも簡單に肯定はされないとは思ひますが。この點、僕にはまだ知識が不十分です。

　これで思ひ出しましたが、去年の秋か冬の事でしたらう、或る機會から、京都の有名な禪宗本山の塔頭の和尙に會ひました。わざわざ訪ねてくれたのですが、その無雜作な童顏の和尙は、いかにも修行の出來た人といふ印象を受けました。そのとき、和尙は此の近所に芥川といふ標札のかかつてゐる家（うち）を見たが、あれは芥川龍之介さんの家かといふやうな事から、芥川氏の話になつて、あれだけ立派な人があんな最後を遂げた事は惜しいと云ひ、もつと生き長らへていい仕事をしてくれねばならない人だつたと云つて、いろいろ自殺否定論をした。

　僕もその說に同意して、芥川氏も禪でもやつたらよかつたかも知れないと云つた。それは僕自身、自己救濟の試みとして、その事を痛切に思つてゐたからでした。が、その後になつて、和尙がその時同伴した人に後で語つたといふ言葉を聞いたら、和尙は僕の顏を見るや否や、この人は自殺する人だ、尋常の最期は遂げないと見たので、ああして芥川の事を話して、それとなく諷諫したのだが、その話を聞いて、それだけ分つてをれば、まづ大丈夫だらうと安心したと云はれたさうで、僕は和尙の明にすつかり服してしまつたのです。實際、僕の相貌はとにかくとして、あの時分、僕の心の中には、その念が底に抑へ付けてあつたのです。僕が芥川氏の死を人事ならず感じて、いろいろと複雜な氣分の上の影響を受けたのも、そのゆゑなのです。そして、當時僕が和尙に云つた事は、嘘ではなかつたが、今の

僕にはもう云へぬ事です。
　兄は本を讀めばあれもこれも讀みたくなり、長い間徒らに怠け通した愚かさを、つくづくと身に沁みて考へると云はれた。僕も長い間、その執着と焦躁にとらはれてゐました。あらゆる本が讀みたかつたのです。殊に、この四五年は、殆んど讀書に沒頭した感がありました。貧乏な中から、家のものの苦情も頓着なしに、毎月丸善に五十圓、七十圓と海外註文をして、アナキズムの本など隨分集めましたし、何分無茶苦茶に興味が多方面で、調べたい範圍が廣いものですから、人の驚くやうな飛んでもない本まで取寄せて、とにかく、讀めるだけは讀んだのです。然し、讀書は少しも自分を賢くしてはくれませんでした。(この事も既に人が云つてゐるのですが)かへつて自分の頭を支離滅裂にして自分の心を悲しい死灰の中に沈めてしまつた。つまり、僕は本に負けたのです。それで、長年讀みたいとあこがれてゐた戀人のやうな本が揃つた時分には、もう見るのも厭やになつてしまつたのです。まるで人の垂れた糞を頭の上に飾つてゐるやうた氣がして來たんです。そして、「多く書をつくれば果しなし、多く學べば體疲る」といふ舊約の箴言の句を、しみじみ本當だと思ひました。
　書物といふものが恐ろしくつまらなくなつてしまつた。それは僕にとつては、人生がつまらなくなつたのと同じ事なのです。それと同時に、僕の頭を打つたのは、こんなに書物がつまらなくなつたのに、やつぱり書物をつくらねばならぬのだらうかといふ反省の聲でした。他のすぐれた人の書物を讀むのさへ、つまらなく感じて來たものが、つまらない自分の書物をつくるとは、大變な矛盾です。事實、僕は自分の本をこしらへる事にも倦いたのです。自分の才能の乏しさは、既に昔から氣付いてゐた事ですが、そして、その與へられた天分の範圍で、精一杯の仕事をするのを、自分の本分だと思つたのですが、今年になつて、それが全く無意味に思はれて來ました。土龍の穴掘り、賽の河原の石積み、それがいつまで續くのか。濕地に生える菌のやうなかうした暗い生活が、過去十數年の生活だつたばかりで

なく、また今後の、一生の生活だと思ふとき、僕は深い絶望を感ずるのです。

　パピイニの云つたやうに、何の報酬をも求めないで努力をし、萬事の空なるを知つて獻身する壯嚴。空觀に徹した佛者は知らず、一凡夫なる僕には、それは眞空の世界での呼吸です。何の希望も夢も有たないで生きること、絶望を生きる絶望的勇氣、それは何たる力、何たる達道、何たる大悟徹底でせうか。駄目、僕は駄目。思想的にやうやく到達し得たと思つた虛無的生命主義、それはただの言葉に過ぎなかつたのです。思想なんてものは空だ、知識も、理窟も、みんな空だ。ただ、只管打座、辨道二十年にして、僕ははじめてその力を獲たでせう。然し今、僕はもうその修業をする氣力がないのです。僕の辛うじて見出した一道の光明は消失し。わづかに見た統一は痴人の夢となり、その內生活は破綻しなければならないのです。僕の力は盡きたのです。僕は病褥の夜々、額から、頰から、横腹から、したたる鮮血に、血みどろになつて、折れた刀を地に突いて、がつくり斃れ込んだ一人の男を幻に見ました。それが僕の姿なのです。

　なぜ僕がこんな姿になつたのか、それは長い物語です。ヂッケンスの小說よりも長い物語です。然し、それを說明すれば短い、つまり、僕は此世に適しなかつたのです。いつも僕に對して、兄の弟に對するやうな愛をもつてくれてゐる加藤武雄君は、この春以來の僕のこの意氣沮喪、悲觀絶望を見るに見かねて、もつと勇氣を出せ、誇小妄想に陷るな、自信と希望を持て、君も當り前の道を踏んで來た人間ぢやない、艱難辛苦を凌いで來た人間だ、身體に筋金が入つてゐる筈だと云つてくれました。が、刃はこぼれた、ボキリと折れた、巖を打碎かうとした刀は打れてしまつた。メエテルリンクは、夭折すべく運命づけられてゐる人間を、宿命者の名のもとに呼んだが、世にはさうした夭折者の外に、また別に、戰ひ敗れて、敗北者たるべく運命づけられてゐる宿命者があるのです。北村透谷がさうでした、僕もまたその一人だつたのです。

思へば長い文筆生活、迷ひと苦惱のこの年月、はじめからの僕の歩みをよく見守つてくれてゐる兄は、（その長い温かい友愛を思へば、瞳は感謝におのづから濡れる……）虚無の一點に到達した僕の心事を、よく理解してくれるでせう、この云ふべからざる寂寥と叛逆とを。僕の生涯はかうあるべきではなかつた、それは訂正されねばならない。これがかの知られざるものへの僕のプロテストです。そして、凡てのプロレタリアのプロテストです。僕も結局、一人のプロレタリアだつたのです。自分があるべからざる境遇に置かれ、なすべからざる生活をなさねばならぬといふ致命的な意識は、內心、僕をして叛逆せしめたのです。しかも、この叛逆を外に表白する力を僕は全く缺いでゐたのです。兄は二十年の昔にかへつたやうに、センチメントが不思議に生じて來て、平常の鬪爭性を幾分か減じてくれる事を喜ぶと云はれたが、僕はまた反對に、兄のやうな鬪爭性の不足に、自分の消極性にいかに惱んで來ましたか。僕は昔から、かの軍服なき戰士となつて、勇ましく戰ひたいといふひそかな欲望を、常に、常に、心の底に抱いて來ました。しかも、それに必要な資格が自分に全然缺けてゐる事の自覺、實際的に無力なる文學が、自分の片輪車だといふ認識が、無慘にそれを壓伏してしまつたのです。僕が斷然、實際運動を斷念したのもそれがため、近時の文學者の慌しい左傾を諷刺したのもそれがためです。だが、かの人々はなほ力を、夢を、希望を有つてゐる、僕にはない。

僕は實に早くから洞察してゐました、僕のニヒリズムが、蛇が、僕に囁いたからです、人間といふものが棲息してゐる限り、この地球上には、平和もなければ、幸福もないと。自由もなければ、平等もない。勿論、正義などのありやうがないと。この地球を濕地の菌のやうに蔽つてゐる人間を滅ぼせよ、そしたら、これらのものは、それに代つてこの地球を蔽つてしまふだらうと。然も、これらのものを求めるものは、ただ人間ばかしなのです。僕はまた知つてゐました、金錢が存在する限り、人間は救はれない、奴隸であると。ひとり無產階級ばかりでなく、資本家階級もまた奴隸であると。いな、彼等こそ黃金の手に拜跪する奴隸であると。然も、人間が原始の混沌にかへらぬ限り、金錢

は全能の神として、この地上を支配するでせう。然し、僕の中のアイデアリズムは、鷲は、それに反抗したのです。救はれ難い人生、救はれ難い人間、永遠に續く不合理――これを知つて、それに堪へられるでせうか。それは行止りです、袋小路です。百尺竿頭です。更に一歩、一飛躍――僕はどうしてそれをやらうかと、長いこと考へたのです。絶望的勇氣をもつて、チタアンの戰ひを戰ふ絶望者ドン・キホオテ、それは消えがての蠟燭の火光のやうに、一瞬、ぱつと僕の眼に閃いた最後の光明に過ぎなかつたのです。

今日の日は夕榮もなくて暮れて行きます。見るまに夕闇は迫つて來ます。暮れ脚はやい秋の日の、その慌しいたそがれを、僕は茫然としてイんで、四顧して、樹々の聲を聽き、わが心の囁きを聽くのです。僕を此所まで導いて來たものは何か、アイデアリズムでもなく、ニヒリズムでもなく、時代でもなく、思想でもなく、ただ、僕の性格であり、僕の運命だつたのです。僕はもう自由意志說など云ふ事が出來ません、今は無氣力な宿命論者です。小さい無力な人間、もがいても、もがいても、何が出來ますものか。琉球の芋酒を飲んだ醉つぱらひです、頭だけははつきりしてゐても、足腰は立たないんです。人生といふものも、やつぱり酒を飲むやうなものでせう。痛飲淋漓、夜を徹する人もあり、醉ひつぶれて、正體を失する人もあり、一杯の酒に陶然となる人もある。兄と飲んだ時分は、まだ僕は酒に强かつた、今僕は酒精を一切禁ぜられた横臥の病人に過ぎないのです。人生はだんだん僕には味はひ難いものとなりました。自分の無價値と無力とに堪へるほど、僕にはその價値がなく、その力がないのです。虛無と知つて努力する人間の心は莊嚴でせう。然し、虛無そのものの方が一層莊嚴です。その虛無の中に虛無として融け込んで行くのは、最も僕にふさはしい事ではないでせうか。

傳道者は言く、空の空、空の空なる哉と。人間の自己欺瞞は、この空を補ふに神を以てしたのです。猶太人はかくして幸福でした。二千年の間、猶太人を排斥した歐羅巴人も、猶太人よりも愚かではなかつた。彼等もこの空を補ふ

に神を以てしたからです。神。何といふ重寶な發明。だが、神。何といふ空虚な言葉。或る獨逸人は、神の死がニヒリズムの必要條件だと云ひました。何といふ歐羅巴的の囚はれた考へでせう。僕等には神なんど、初めからてんで問題ぢやないんです。神即ち虚無、虚無即ち神ではありませんか。神なき宗教こそ、僕の宗教です。大乘佛教こそ、すばらしい深い宗教ではありませんか。地獄極樂總に閑家具、みんな心の迷ひですね。また、迷ひがあつて、人生の味もあるのでせう。味噌も食べれば糞になる、それでも味噌は味噌、糞は糞、糞袋から糞をひらなくなると、御愁傷さまと云つて弔ふのです。

　そこで、僕もたうとう御愁傷さまです。虚無の虚無に到達して、有から無に生れる虚無の赤ん坊になつて、僕はおめでたうです。僕は高い聲で云ひました、神の代りに、僕は死だ。虚無は死だ、死は救ひだ。然し、そんな事は今更僕が云ふまでもなく、誰でも心の底でよく知つてゐる事です。しかも、それが病的な思想として、この人生で大きい意味をもち得ないのは、人間の本性に反するからです。生命の愛着が、人間をその迷ひと苦惱の中に引止める、いかなるニヒリストも、ペシミストも、そこで不徹底な饒舌家として止まつてしまふ。僕自身もさうでした、長い年の間、さうでした。だが、これは決して恥づべき事ではないのです。僕とても決して生命を輕視し、玩弄しはしませんでした。僕とても、生にとどまらんがために出來るだけの事をやつたのです、戰へるだけは戰つたつもりです。實際、僕はもつと早く切り上げるべきでした。少しは時期を失したと、悔がある位です。

　虚無の徹底境――それは生でせうか、死でせうか、生死の海を越した正覺の彼岸でせうか。僕は虚無に徹して、はじめて全一の、盤石の生が得られると思つた、虚無の彼岸こそ最も堅い生の地盤であると思つたのですが、それを生に實現する事は、況んや、正覺の大悟に達する事は、僕より力量ある人の事。僕は虚無に徹して、虚無を得、死中に活を求めて死を得たのです。神、靈魂不滅、死後の生活――それを信ずる人には、みなそれは眞實です。僕はただ絕

滅をのみ信じます。自己意識の完全な絶滅、肉體の完全な壞滅、四大は分散し、元素に歸す。完全な解體。醜い死骸なんぞ、北極へでも流れて行つてしまへです。僕はいつのまにか、唯物論者になつたのでせうか。エンゲルスが、自分の死骸を燒いて、その灰を海中にふり撒かしたのを、いかにも唯物論者らしくて、さつぱりしてゐていいと、強く同感したのです。

いつのまにか、とりとめなく、こんな事を書いてしまひました。こんな事を書かずにゐられないうちは、どちらにしても、お話になりません。僕がなんにも書けなくなり、なんにも喋れなくなつたとき、僕ははじめて偉大になれるでせう。僕は元素に復歸して、大自然の一部となり、雨になり、風になり、火になり、土になるでせう。そのとき、僕ははじめて眞の文字を書くでせう、偉大な詩を歌ふでせう。だが、その前に、僕は小さな、劣弱なこの僕といふ一人の人間として、兄が長い愛顧への感謝を、兄に述べたかつたのでした。

昭和三年十月二十六日（「未發表原稿」）

×

慘敗記

三十七年を費して、つひに自分は何者にもなれないでしまつた。
現代は專門家の時代だ。何等かの專門に屬しないものの存在を許さない。
そこで、自分の座席は何處にも見出せなかつた。
自分は十年の間、立ん坊を勤めたのだ。

×

自分は自分の尊敬した人々から、多くの場合、侮蔑の眼を以て見られた。はじめ、自分は長いこと、それに氣が付かないでゐる。が、つひにそれに氣付いたとき、自分はつねに激烈な叛逆者であつた。自分が背いて來た先輩知友は、性格や思想の上で、到底相容れぬものがあつたかも知れないが、彼等にとつて自分が無であつた事が、一層よくない事ではなかつたらうか。

だが、彼等は間違つてゐたのではなかつた。自分は侮蔑に値する人間だつたのだ。その人間が侮蔑を感じて腹を立てた事が、むしろ驚くべき事であつたかも知れない。が、一寸の蟲にも五分の魂だ。そして、この五分の魂が、いつも自分の蹉跌と失敗の原因であつた。

×

自分は憐憫に値する人間だつた。

自分が多分に叛逆的傾向を有しつつも、とにかく、今までその存在を許されてゐた事の、隱れた理由を、今、自分はこの點に於いて發見した。

自分は人に憎まれるやうな多くの愚昧をやつた。が、それでも、自分は憎まれるよりは、憫れまるべき人間だつたのだ。

おそらく、自分を憎んだのは、最も無力な民衆詩人位なものだつたらう。

×

著書が賣れるといふので、自分は文壇から輕蔑され、詩壇から憎惡された。

自分の著書は、それほど多く賣れはしなかつた。が、多少目立つて賣れた本もあつた。それで辛うじて今日まで生活が出來たのだ。

若しちつとも本が賣れなかつたら、多分もう數年前に、自分は死んでゐたであらう。

×

子供向きの著者——それが自分の名の得た一般的概念であつた。

甘い、センティメンタルな、小曲詩人——それが自分の得た名譽の稱號であつた。

その定評を打破するために、自分の拂つた努力は、牛の如きものであつた。

しかも、何の甲斐もなかつた。

最後に、今、自分は結局、その世評が正しくて、自分はその世評以外の何者でもなかつたのだと考へるやうになつた。

三十七歳に及んで、自分が生に絶望したとて、意志薄弱の誹りを受けねばならぬのだらうか。

×

もう自分が自分の意志を表明するみちは、たつた一つしか殘らなくなつた。それは死だ。

今まで自分の書いたものは、みな失敗の作品のみだつた。ただ一つ、多少意味のある作品を書く事が出來る。それは死だ。

こんなに思つた自分は、やはり甘いセンティメンタリストだ。

自分の死なんぞに、何の意味があるものか。それは自分の生と同様に無意味なのだ。

×

滿洲の馬賊は、殺人を打碎了、自殺を睡了と云ふと、新聞で讀んだが、その端的にして、いかにも適切な事に驚いた。

人間の生活する方向は、打碎了か、睡了かのどちらかだ。自己を主張し、自己を擴大して、他人を壓迫し、他人を征服するのは、小規模の打碎了とも云へる、それが出來ないで、自分が萎縮するのは、緩漫な睡了だ。

考へてみると、自分の一生は、間斷なき、なしくづしの睡了であつた。

睡了、睡了――それに徹すれば自分も幸福になれる。人間は自分の生き方に徹すればいいのだ、たとひそれが死であらうとも。

×

小鳥のやうに死ねないものか。或日、冷たくなつて、落葉の下に見出される小鳥のやうに。

×

悲劇の缺點は、生と死とをあまりに重大に取扱ふ事だと、シャンフォールは云つたが、人間の缺點は、たしかに、生と死とをあまりに重大に取りすぎる事だ。

とりわけ、自分は人並以上であつた。

人生をあまりに重大に取るなといふのは、老成した人の人生智である。生きるものの生きるためには、聽かねばならない箴言だ。

それをも自分は知つてゐた。が、自分にはそれが守れなかつた。

今やうやく自分は、自分の無價値を知る事によつて、生と死が論ずるにも足らぬ事をさとつた。無論、自分の生と死である。

×

この人生から、偉大なもの、高貴なもの、至醇なものを見出さうとした自分の探求は、完全に失敗した。

その失敗の主たる原因は、おもふに、自分の裏に、偉大なもの、高貴なもの、至醇なものが存しなかつたからであらう。

人間がどんな高遠な理想や主義を口にし筆にしようとも、その實生活を見ない以上、それが信ぜられなくなつたのは、自分の陷つた最大不幸であつた。國家のため、社會のため、民衆のため、こんな美名を標榜する事によつて、一身の榮達を圖るものは政治家である。

文學者も、だんだん政治家になつて來た。

×

人間に對する信頼を有たぬものは、人生と絶緣したものである。人生の敵である。彼ははねのけられなければならぬ。

然し、彼とても、ひとたびは人間に對して、絶對の信頼を抱いてゐたのだ。人並以上に、人間を信じ、愛してゐたのだ。

それは經驗によつて、無慘に破られてしまつた。誰れでも破られてしまふのだ。

ただ、力ある人は、ふたたび希望を盛りかへす。また、一切の期待を棄てて、所詮人間はこんなものだといふ悟りをひらいて生きるのだ。

自分は然し、人間が厭はしといふより、ただこの自分自身が厭はしいのだ、この自分一人が……

×

自分の愛した自然も、今は心を惹き付けない。昔、自分の魅せられた風景も、今ひとたび見たいとは思はぬ。人生に絶望したと同じやうに、自然にも無感覺になつたのか。

自分はこんな心の狀態、生命力の衰頽、生の車輪の破碎を、悲しむのだ。

ノンシャラントな心の狀態、人生百事に對して、インディファアレントになつたもの、ニル・アドミラリ、そんなデッド・ライフに對して、云ひ知れぬ嫌惡を感ずる。

生は感激である。熱狂である。躍進である。本能的でも、盲目的でも、ただ前へ前へと、――それが生だ。その外は、生の影にすぎない。

眞に生きるものは、故大杉榮が云つた「正氣の狂人」だけだ。

×

×××事件ほど、自分の心を躍らせたものはなかつた。

自分はその運動に、全部的に共感するものではないが、そこに躍動してゐる生命力に打たれたのだ。

細かい事は、勿論、外部の自分には分らないが、たしかに、そこには生きた、生きた、生命が躍動してゐるのを感ずる事だけは出來るのだ。

活潑な細胞よ。

最も尊い靑年の情熱の方向は、もはや文學の方面にはなく、――そこには藝術に殉ずる、あの明治人の熱意は全く滅びて、當て込みの商業主義だけが榮えてゐる、最も若い人の心にさへも――一國の精華は、既にこの方面に集注してゐるのだ。

日本中の××所を、自分たちで埋めてしまふまでといふ意氣込みで、その中にすわつてゐるものは、あまり長から

ぬ日の後に、勝利を得た同士によつて救ひ出される事を、確く信じ切つてゐるのだ。

自分はそれを聞いたとき、現代の日本人に對する自分の悲觀説を、しばらく掌の上ではかりつつ、自分の眼が甚だ狹い範圍に低徊してゐたのだと思つた。

×

文學などといふものは、所詮、天下泰平の産物だ。

生活に餘裕あつての文學だ。經濟的の好況時代が、同時に文學の好況時代だ。

社會がこんなに激動し、生活がこんなにも不安になつた時代に、文學が衰頽したのは、少しも不思議な現象ではない。

恐らく、文學が全く滅亡してしまふ時期が來るであらう。遠からぬ將來に、必ず來るであらう。一度は來るであらう。

丁度、維新前後の動亂期のやうに。佛蘭西革命の當時のやうに。

筆を投じて××を。

インキでなくて血を。

制作でなくて××を。

それが出來ないものは、餘計者だ。死ね。

×

藝術家だとか、文人だとか、名はいかに美しくとも、所詮、資本家の奴隷に過ぎない。公衆の幇間に過ぎない。

資本主義の社會にあつては、文人墨客の風流も、またあはれむべき自己欺瞞に過ぎないのだ。

我々の才能が、金錢で換算される事を考へてみるがよい。自分の大切な心の祕密を、わづかな鳥目に替へて、その日の暮しを立てねばならぬ人間――自分はあまりに自分をみじめに思ふ。

然し、商品として取扱はれる不愉快さ、そんな事を考へるのが、既に時代おくれの人間の證據だ。

確乎たる自覺を以てなされる商業主義――古い文士氣質の曖昧な唯心主義を嘲笑して、算盤片手に筆を走らせる唯物主義に徹した文學者の、うそいつはりのない、キビキビした態度こそ、むしろ爽快だ。

人氣を蔑視すると號しながら、絶えず人氣の消長に焦心せずにゐられぬ藝術家、風流韻事を口にしつつ、他人の收入を氣にせずにゐられない文人――だがそれもこれも人情の機微だ、最も人間的な事として、寛容せねばならぬ。ただ、唯物史觀は、その自己欺瞞の垂幕をひきちぎつて、赤裸々の現實――經濟的機構を暴露する。まつたく、この厄介な奴は、一切の美しいお化粧をはがしてしまふのだ。

美しい藝術家、文人生活の眞相は、決して羨むべきものではないのだ。自分は嘘は云はない。たとひ劣弱ながらも、自分も文筆によつて衣食してゐた以上、その苦汁の底のをりまで飮んだ一人だつたのだから。

然し、かうした厭はしさも、結局は、みなこの資本主義社會の不合理から發する、些末事にすぎない。多分、さうであらう。然しながら、これをいかに厭はしく思はうとも、この資本主義社會の組織を變革する事は、文學者の任務ではない、いな、無力な文學者の企て及ぶべき事ではないのだ。

何と云つても、文學者は餘計者だ。そして、その中の最も劣弱なものが何であるか、云ふまでもない話だ。

×

生命がけで藝術を。死か藝術か。

そんな風に、多くの人が考へて、その意氣込みで精進した時代があつた。今では、そんな事を云ふと、わらひもの

にされるだらう。

だが、自分はかうした一向きな情熱を愛するものだ。自分もそれだけの熱意をもちたいと思つた。けれども、自分はかうした「悲壯な覺悟」に、果していくばくの意義があるかを疑つて來た。

餓死を覺悟で、いい藝術を殘す。それは勿論、わるい事ではない。けれども、その意義は、當人の考へるほど大したものではないのだ。

それは單なる自己滿足のためにすぎない。社會的事業などといふものでは勿論ない。その藝術が、他人を喜ばせ、社會的に貢獻をするならば、それは作者にとつては、偶然の事件なのだ。

はじめから他人を喜ばすつもりで書くのならまた別だが、その場合には、生命がけなどと云つた筋合ひのものではあるまい。

とにかく、自分の好きな事を書いて、貧乏して死ぬか、大衆向きの物を書いて、一人前の暮しを立てるかだ。どちらでも、結局同じ事だ。みんな好きなやうにやればいい。

自分は藝術家とか、文學者とかいふものが、お百姓さんや、大工さんや、左官さんやより、一段立ちまさつた人間だとは思はれない。

自分は昔から「藝術」なるものの分らない人間であつたかも知れない。

ともすれば、文學の意義を疑つてばかりゐた。そのため、激しい非難をさへ受けた。

だが、今や時代全體が、文學否定に傾いて來た。文學至上論者は、小さな自分如きものの頭ならば、打つ事も容易だらうが、この時代の風潮をば何とするぞ。

×

自分の書きたい事だけを書いて、それで生活の出來た時代は、既に去つた。

×

詩は食へないものであつた。詩人は昔から貧乏と相場がきまつてゐた。今や、餓死しないものは、詩人ではないのだ。

×

文學者が自己の世に認められない事を訴へるのは、全く理由のない事だ。誰も文學者になつてくれと頼んだものはないのに、自分の勝手で、好き放題に文筆を執つてゐる以上は、既にその事によつて酬いられてゐるのだから、それだけで滿足していい筈である。

自分の好きな事を書いて、世に認められて、名聲を博して、富を得て、生きながらの古典作家になつて……それではあまりに虫のよすぎる話だ。それが思ふやうに行かないのが、むしろ當然なのだ。

自分なども、好き勝手な事を書いて、それで報酬を得て、今日まで生きて來たのだから、少しも不遇だなどと訴へる理由はないのだ。

人に惡く云はれた位、身分相當の租税を納めたやうなものだ。それなのに、その明白な理が分らなくて、絶望に陷るとは、何といふなさけない人間だらう。

×

だが、自分だつて、いたづらに絶望はしない。實際、自分の租税はあまりに重すぎた。

自分ほど無價値を宣告され通して來た人間はない。その出發の日から、最後まで。

自分の作品は完全な失敗と云はれ、最も近いところから、その無意義を布告された。

自分はそれらの侵害に反抗して來た。長いこと、これを祕密の動機から發した惡意の宣傳だと信じてゐた。だが、今は、それらの批評が、たとひいかなる動機から發したにしても、結局正しかつた事を、悲しいかな、自分は認めなければならなくなつた。

自分は全く何の價値もない、取るにも足らぬ人間だ。その人間の書いたものに就いて、氣の利いた人が常に沈默してゐたのは、理由のある事であつた。

×

失敗、失敗……

慘敗……

力の伴はない欲望。自業自得の蹉跌。

無力の意識。自己嫌惡。絕望。

自己の價値を確信して、全集の指定までして死んだ人は幸福だ。

自分の死は、徹底死だ。

慘敗死だ……

×

この近年、自分は人間の自由意志を重く見るやうにして來た。身の程知らずの骨頂であつた。井中蛙の思ひ上りであつた。

人間が地球を操縱する事が出來るやうになつたら、自由意志說もよからう。

太陽の黑點次第で、地震の震幅次第で、人間の生活も、事業も、どんどん變つて行くではないか。でんぐり返つて

しまふではないか。
自分は今、全く、極端な宿命論者になつてしまつた。
大膽、自分の道すぢなどは、三十七年前に、もうちやんときまつてゐたのだ。

×

自由はない。平等はない。正義はない。
ないから一層やかましく云はれるのだ。
多分、人間が終つたとき、それは出て來るだらう。
自分にも、自分が虚無に歸したとき。

×

自分が悲劇的生命感について說いたとき、或るアナキスト・ニヒリズム（？）の詩人が、呪はしい甘さと題して、詩は死である所以を說き、言葉の幻術で生にとらはれる人間たちを――その代表者は自分であつたが、彼は彼自身をもこめて――嘲つてゐた。その心持は眞劍なものであつたので、非難されながらも、自分にも十分同感出來るものだつた。

いろいろな事を云つて、生命を惜み、生きようとするのを、呪ふべき甘さだといふその人の言葉は、自分には實に手痛い痛棒であると共に、或る寂しい微笑を自分に與へたのだ。その微笑の意味は、やがて、その人も知つてくれるであらう。

自分も出來るだけ生きようとした。自分は決して生命を輕視はしなかつたつもりだ。いつも暗いペシミズムにとらはれながらも、どうかして生を肯定しようとした。たまたま、その努力が、他の人にあつては、賞讃に値する事であ

るやうに、自分にあつては、呪はしい甘さであり、いやみなポオズであり、たまらないセンティメンタリズムであつたのは、また止むをえぬ運命である。たしかに、自分の生の上には、呪ひがかかつてゐた。

他人にとつていいものも、自分の手にうつると、すぐ悪くなつてしまふ。他人にあつては、賞讃せらるべき事も、それが自分の上にあると、輕蔑すべきものとなつた。これは自分の性格の中に、何か大きな缺點のあつた證據なのではないかと、今自分は考へてみる。それとも、自分の出發點の悪かつた事が、これらすべての不祥事を結果したのだらうか。たしかに、自分の生の上には、呪ひがかかつてゐた。

×

人の生涯が終りに近づくと、いろんなものが、異つた形象(かたち)をとり、異つた色彩(いろどり)をもつてあらはれてくる。自分の生涯も終りに傾いた。いろんなものが、新しい意味をもつて、自分の前にあらはれてくる。今迄見なかつたものが見える。生はその終りの一日で、自分にその眞實を敎へようとしてゐるのであらうか。

海の上の月が、曉近く、西へ傾いて、影淡くなるすがたが、丁度今の自分の心のありさまだ。寂しい殘んの光。然し、それは人の思ふほど悲しいものではない……

×

水中の魚が、水がだんだん減つて、アップアップやつてゐるやうなものだ。たうとうひつくりかへつて、腹を白くさらして、死んでしまふ外はないのだ。

その前に、少し早く切り上げようと思ふのみだ……

昭和三年十月四日、(病床にて「未發表原稿」)

形影相弔録

×

人間の最後の強い欲望は、自己を語る事である。自己表白である。自分もこの誘惑に抵抗する事が出來ない。

六月、七月、八月と、苦しい飜譯と校正との三月の間に、これがすんだなら、極く簡單でいいから、自叙傳を書かうと心に定めてゐた。ところが、身體の弱つてゐるのに、無理な働きをしたためか、九月に入ると、がつくり寢付いてしまつて、まるひと月の間、手紙一本書く氣力もなく、日夜呻吟し續けて、自叙傳の一行さへも筆を着け得ないで、たうとう十月といふ月が來てしまつた。

然し、今自分は、それを少しも遺憾には思はない。むしろ、書かなかつた方がよかつたと思ふ。自分のやうなつまらないものの自叙傳に何の意味があらう。エゴティズムも、もうおさらばだ。多年、個人性に執して來た自分も、今や自己の無價値を確信すると共に、個體を全體の中に沒却せしむる事を、あだかも老廢物を海中に投棄するが如く、最も道徳的の事と認むるに至つた。

元來、自分は人生の相を白と黒の二つに截然と區分して、一を全的に肯定して、他を全的に否定するが如き事を欲しなかつた。常に盾の兩面を見る事を正しとした。しかも、衷心、かかる微温的な客觀主義に反抗するものがあつた。自分の本質は、感情的な急進主義だつたからだ。個性と超個性、個人主義と超個人主義との對立の場合にも、自分のこの兩面が、心の中で闘つてゐたのだ。自分はいつも自己分裂に惱み通して來た。自分の論文や感想を本當に讀んでくれた人は、諷刺がしばしば讃美であり、抑下（よくげ）がしばしば卓上（たくじやう）と現じて、相反する見解が、ときどき對話的に連結さ

れてゐる事を見出すに違ひない。それが曾つては自分の特殊の才能の如く信ぜられたが、今や、自分の救ひがたい病所だと知つて來た。

自分の敬愛する小說作家の友は、この自分の自己否定的傾向を、誇小妄想であると云ひ、自信を持て、自己の正當の價値を認知せよと云つた。それは溫かい友情の言葉として、自分は深く感謝した。そして、この一切の疑惑と昏迷を、神經衰弱の徵候ではなからうかと、自分はしばしば反省した。然し、自分が一切の希望をかけた未來が、その未來に奔流する時代の潮流が、自己の才能と教養との全部と相容れぬ方向に轉換する事の確知せられた今日、自分の全き價値が失はれねばならぬ事は、悲しいかな、自分の冷靜な理性の認識である。

萬事は終つたのだ。恐らく自分の衷なる最も堅硬なるものが、脆くも破碎したのであらう。計畫してゐたいろいろの仕事も、みんなつまらないものになつてしまつた。辛苦してしあげてみたところで、どれだけの意味があるだらう。やつぱり自分の過去の仕事と同じやうに、「失敗」であり、「無意義」であるだらう。糞の上に糞をひり足すやうなものだ。臭に臭を加へるだけの事だ。かやうに思ふときに至つて、自分が準備してゐた仕事を放擲するのに、些の遺憾をも感じないのは、當然の事である。

×

終りのはじめといふ言葉がある。自分の生が傾いたと、強く、強く胸にこたへたのは、愛弟を失つたその日であつた。忘れもしない、一月の十九日、彼は自分を棄てて逝つてしまつた。

その日、自分は非常に元氣だつた。今年こそ、まつたく自分の生活を一新させ、積極的にはたらいてみたいと思つて、それについて重大な相談もあつて、郊外の砧村に、小說作家の友をたづねたのであつた。

然るに、その晩、非常に力づけられ、希望をもつて、遲く歸つて來たとき、思ひもかけぬ悲報が自分を待つてゐた

のだ。自分は頭からグワンとなぐりつけられたやうに思つた。弟が死んだ！　それが信じられようか。それほどの容態ではなかつたのに、徐々に快復するものとばかり思つてゐたのに……閉ぢた眼、蒼ざめた顔、冷たく乾いた皮膚、その皮膚に手を觸れて、自分は彼の靈魂が、永久に自分の世界から飛翔し去つたのだと信ぜねばならなかつた。
多聞院の和尚が、廻向の後で、お經の文句を說明して、菩薩が假りにいろいろな姿をして現れて、無常の世の相を示して下さるのだと說いて聞かせてくれたとき、自分は彼が自分の生活にとつて、何ものであつたかを、深く深く考へた。
自分は行李に一杯入つてゐる彼の遺稿を見た。最初、詩集の一册を手に取つて、何氣なく頁をめくつたとき、一つの斷章が目についた。

春の日は土に消え去り
夏の日は河に流れき、
杳かなる空を飛ぶ鳥、
幸ありとわれに告ぐるも
など行かん今日この秋に。

それを見た瞬間、自分の眼から、ばらばらと淚の粒が迸り落ちた。彼はその言葉で、自分に嘆き訴へるのだ……だが、悲しみに負けてはならない。さう思つて、初七日もすまぬうちに、毎日のやうに、自分は勇氣を起して、人に會ひに出かけた
一月の下旬に、雪が降つて、そして消えた。はかない春の淡雪が……。その雪の降つた夜、あひにくと電車が途中で停車して、

「ちよつと動きませんよ」と車掌が云ふままに、若松町で降りて、白く輝いてゐる雪を踏んで、自分は家に歸つた。そのみちで、急に潮のやうな悲しみが、胸を襲つて來た。涙が眼鏡の下をつたはつた。この悲しみは、自分のまだ知らなかつたものだ。悲しみといふより、あだかも自分の身體の一部を失つたやうな痛みである。

夜更けるまで、ひとり火鉢にもたれて、彼の遺した詩稿を讀んで行くと、ひとりでに涙が眼のはしににじみ出して、そして、冷たく頰をつたつて、あとからあとからと落ちてくる……ああ、不覺の涙だ、落ちて甲斐ない涙だ。三十七にもなつて、こんなに泣かうとは、思ひもかけぬ事であつた。

自分が旅に立つ時には、トランクを持つて、停車場へ送つてくれた、眞先きに車室に入つて席を取つてくれた。もうその人はゐない。もう誰もさうして送つてくれる人はないのだ。自分の持つてゐる古びた澤山のレクラム本を、製本してくれた。もう百冊ほど製本してゐた、あともおひおひ全部製本したいと云つてゐた。もう誰もその製本をしてくれるものはない。

この八年間といふもの、自分と苦樂を共にして來た彼。いつになつても止む事のない貧乏を共に分ち、珍らしい事でもなかつた、煙草錢にも窮する時には、近所の煙草屋から借りて來てくれた彼。あの震災の折りには、一緒に廣場に野宿をし、主人に代つて夜警に出てくれた。そして、機敏なところを有つてゐた彼は、路次の入口の詰所にかかつてゐる大提灯の蠟燭の新しいのを渡されると、それを古いのと取り替へて持つて歸つてくれた。そのあかりの下で、自分はあの宿命的な長篇の下卷を書いたのであつた……

ああもしてやりたかつた、かうもしてやりたかつた……それもみんな、今となつては、云ふも甲斐ない愚痴である。彼はまつたく、自分によく似てゐた。自分のやうな陰性な性質をもつてゐた。それが二人の不幸であつた。彼の遺稿や日記を讀んでゆきながら、なぜもつとその心を自分に打明けてくれなかつたのだと、自分は何度叫んだか知れなか

つた。

生きてゐる間は、それほどにも思はなかつたが、彼がゐなくなつて、はじめてどんなに自分に近く、自分の中に彼が入り込んでゐたかを、自分ははつきり知つた。あまりに自分に近くゐたために、その存在を忘れてしまつてゐた。それが悔だ。

　　杳かなる空を飛ぶ鳥、
　　幸ありとわれに告ぐるも
　　など行かん今日この秋に……

から聲に出して誦する毎に、自分の眼は涙ぐむ。センティメンタルとか、泣虫とか、歔欷者とかいふ罵詞に極力反抗して來た自分であるのに、彼はその自分を、すつかり泣虫にしてしまつた。

など行かんと汝は歌つた。我れは行かん、汝の如く、今日この秋に……

×

愛弟の死は、自分の心に大きな空虚をこしらへてしまつた。今はすべてが味氣なく、自分の生命力は、驚くべく衰へてしまつた。然し、それはひとり愛弟の死にのみ基因するのではなかつた。かなり長い前から、自分の心の中に強く根を張つてゐた絶望が、それに乘じて、堰を切つて溢れ出して來たのだ。一切の事情が、自分の期待を裏切つて變化した。世間と周圍の狀態が、日は日を追うて、自分を片隅に追ひつめて來るのが、犇々と身に感じられた……

二月二十二日、それもまた忘れられない日となつた。

その日、思ひがけのない人が、自分の家を訪れて來た。五年ぶりの再會、――曾つて自分が最も愛した爽かな、いきいきした、快活な一人のマドモアゼル、それが今、自分に歸つて來た、歸つて來たと云ふのが最も適切であるやう

な自然な足どりで入つて來た、——それぞ自分の宿命であつた。

ミス・ロビンは、自分に何を求めたのだらうか。自分はミス・ロビンに何を求めたのだらうか。彼女は生と戯れを、そして、自分は死と戀を。

そのころから、自分は切實に死を考へるやうになつた。心の底に隱れて、死のをさた兒を育て、遊ばせた。ミス・ロビンは自分の破滅であるだらう。——それゆゑに、自分はその深淵に突き進む事を、わが唯一の救ひとして見出したのだ。だが、勿論それは彼女とともに死なうと考へたのではなかつた。全く一度も、自分は彼女と死を語つた事すらもない。ただ、彼女のゆゑに、自分は破滅するであらう……

なぜ彼女は自分を引出しに來たのであらうか。しかも行くところまで行つたとき、なぜ慌しく歸國を云ひ出したのだらうか。なぜ別れの前夜、あんなに悲しい歌をうたつて聞かせたのだらうか。なぜ最後まで、車窓から首を出して、見えなくなるまで別れを惜んだのだらうか。そして、歸ると矢のやうな文で、自分を呼び招いたのだらうか。その心理を自分は幾分か推察する事は出來た。そして、その場合、恐らく世上の男子は、彼女を歸さなかつたであらう。また一旦歸した上は、どんなに呼ばれようとも行かないであらう。だが、自分は違つてゐた。自分は生の土臺の上に立つてゐる人間ではなかつたのだ。

三月の半ばに、自分は關西に發つた。ふたたび生きて歸れるとも思はれずに。それは狂氣であつたであらう。大阪に着くと、新聞社の友を訪ねて、友の敎へてくれた六甲の苦樂園に行つた。郵便の不便な山から、夜おそく自動車で下つて、手紙一本のために、西の宮まで、松並木の砂路。苦樂園口で、電車を待つ男、カメラを持つて電車を下りた女、山路をのぼる二つの影。香櫨園から蘆屋まで阪神電車。二つのトランクを二人の手で提げて、踏切を渡つて、大きな郵便局と警察とを兩方に見たときの不思議な感じ。そして、それからの侘住居、何といふ苦しい日々夜々であつ

たらう。
「また憂鬱におなりになつたのね、なぜそんなにおなりになるのか、わたしよく分つててよ」
「さう、分つてゐるの……そんなら、憂鬱にならなくてもすむやうにしてくれればいいぢやないか」
「だつて、わたしはこんなにして二人きりでゐるだけでうれしいんですもの」
「ほんとにこれが二人きりだらうか」
こんな對話をする男女が、濱蘆屋に、海岸の別莊を探しに行つて、空屋の疊や敷居の埃で、足袋の裏を眞黒にしてしまつて……
惡夢は長くは續かない。破滅は急激には來らない。家と人との重みと自責とが一層早く來る。その錯綜の重なりの後の破滅である。つひにふたたび、二つのトランクと、須磨明石の惡夢を乘せて、俥が夜の堤下路を、阪神國道を越えて、驛まで走つたとき、かの不思議な感じと、この侘しく切ない思ひとの間に、千百の氣分の動搖――それは影がたはむれ、影が惱み、影が悲しみ、影が夢みた。
その夢はなほ續く。京都には自分を待つてゐる人があつた。そのマダムと、自分は關西に出發する數日前に、東京で、晩餐をともにした。その折り、自分が今の身の上を打明けて、關西へ行く事を告げたとき、その人は、まつたく意外の事を語つた。その人は、自分と一緒に生を樂しんで、そして一緒に死にたいと云つたのである。然し、それは今の場合、可能ではなかつた。それでその人は、あなたが死にたいとお思ひになつたら、いつでも誘つて下さい、わたしは一緒に死にますからね、どうぞそれを約束して下さいと云つた。自分は半ば戲れにそれを約束した。
京都で死のみちづれを自分は容易に得る事が出來る。今、マダムを呼び出すべきであらうか。だが、自分は食堂車を離れなかつた。濱名湖の波の白かつたとき、一秒、自分の墓をそこにと思つたものを。――それは芝居氣澤山のそ

の人のシンセリティを信じなかつたからか、自分の深く愛してゐない女性と死ぬ事を、單なる怯懦と思ふからか。さうだ、自分は男子でありたい、そして、孤獨を愛するのだ。情死を小說には書いたけれど、自分はそれを以て自分にふさはしからぬ死であると信じてゐるのだ。

かうして生きて歸つた。さらに空しく、さらに破れ傷ついて……。曾つて戀愛について問はれたとき、自分はかう答へた。男子にとつては、戀愛と仕事とは兩立しえないもの、相極であり、シイソオであると。事業に幻滅したとき、戀が來ると。正しくさうであつた。そんなら戀に幻滅したとき何が來るのか。また仕事か。仕事の骨やすめの戀もある。だが、自分は一切か無かだ。そして、もうみんな無だ。みな苦々しい。指の間の砂だ。五月になつて、その砂はすつかりこぼれ盡した……

×

そして、六月、七月、八月。今年の關東地方の天候は、わが沈鬱な心に照應して、まさしく、呪咀であつた。三月にわたる梅雨、太陽と絕緣した夏、それがさながらに、わが一生の象徵のやうに思はれた。そして、秋になつての暑さ。それからまた霖雨。冬のやうな冷氣。今年の秋は、秋ではない。死だ。今年の米作は不作であらう。わが一生も不作であつた。

自分は掌の上に、蟻を一匹載せて、そのあはてふためくのを見て笑ふやうな氣持だ。子供が蟻や蟬をもみつぶすやうに、自分自身をもみつぶす。それで澤山だ。

自分はニヒリストとして、徹底するつもりだ。ニヒリストは、一思ひに死ぬべきだ、――ロシアのニヒリストのやうに、爆烈彈の一擲に、敵とともに自れをも粉碎して果てられたら更によい。虛無的生命主義と稱して、ニヒリズムの積極的出口を、絕望的勇氣をふるひおこして生に向ひ、希望せず。酬いを求めずに、今ひと度び、また今ひと度び

と、ころんでは起き、ころんでは起き、文字通りに、矢盡き刀折れて、再び起つ能はざるまで戰ふ、ニヒリストの積極的生活を主張した時には、自分は死を覺悟しつつも、なほ生に執着をもち、多少生の勇氣をもつてゐた。もうその勇氣はない。自分とても、戰へるだけは戰つた。矢盡き刀折れたのだ。再び起つ能はぬのだ。ところで、この生命力の衰頽は、ただちに肉體の衰弱を結果した。重荷になつてゐた仕事を終つて一息ついたとき、自分は既に病床の人であつた。この十何年の間、床に就くほどの病をしなかつた自分は、長い一月(つき)あまりを、焦心と沮喪との中に過した、心の中に死を熟せしめつつ。

たまたま温かい日の照つた午後、緣側に蒲團を敷いて貰つて、その上にごろりと横になつて、日向ぼつこをした。亡弟が衰へた日にしてゐたやうに。そして、一寸の間起き上つて、すわつてみた。そして、かうして緣側にすわつて、ぼんやり庭を眺めて暮したのも、幾度びであつたらうと思つた。再びは見るか見ないかと、何くれとない四方山(よもやま)の話をしたのも、幾度びであつたらうと思つた。友をここに引いて、庭の木々をなつかしく見廻しながら、庭の面をゆきかへりして、どうだんの木の丸い刈込みのあたまを撫で廻したのも、おもへば、もはや半歳の以前となつた。今まで、自分は生きて來た。どうやら、生きのびた……

櫻の花の散るころに、砧村の友が、自分の身の上を氣づかふあまり、心のやさしいI君を、自分の家に慰問に來させてくれた。あの日は、實に、花が散つた。庭椅子の上にかけてゐる友の肩に、膝に、眞白な花びらが、點々と落ち零(こぼ)れた。友は洒脫な江戸ッ子であるから、憂鬱な自分の心を明るくする話題を、いくつもいくつも持つてゐた。友は故澄江堂主人に接近してゐたので、その人の逸事をも、いろいろと聞いた。

その時分が、いちばん苦しい時であつた。自分の生は、その時に絕えるかと思つた。その苦しみを絞つて、自分は詩を書いた。四月、五月、六月、三月(つき)のうちに、殆んど三百の詩を書いた。自分は禁斷の詩を書いた。人には見せら

れぬ詩を書いた。かくて自分は呪ひの詩人の極印を打たれるだらう。然し、自分の痴人の生は、それで完うされただらう。今は、自分も、滿足だ。

一匹の黑い蝶が、自分の眼の前をひらひらと横ぎつて、芙蓉の花をかすめて、芭蕉葉の上を飛んで、隣家の葉のしげみに隱れてしまつた。その蝶の消えた方を、自分はぢつと見入つて、ふと北村透谷の蝶の歌を思ひ出した。あの悲愴な、傷つき破れた人の歌を。

破れし花も宿かれば
運命(かみ)のそなへし床(とこ)なるを、
……………

ただこのままに「寂」として
花もろともに滅(き)えばやな。

この歌はいつも自分の耳に響く。殆んど二十年の昔、はじめて島崎藤村氏の『春』を讀んだ日から、靑木駿一の悲愴な笑ひは、慘憺たる敗北は自分を蠱惑した。透谷は明治文學で自分の最も愛好する詩人であつた。

何が自分をあの人に惹き寄せたのだらうか。人が何と云はうとかまはない、冒瀆であつてもいい、自分は二人の間に、或る本質的な類似があつたのだと思ひたい。馬場孤蝶先生は、透谷を、世渡りの修練など乏しい人のやうだつたので、あまり敬意を表する氣になれなかつたと云はれた。丁度その點に於いて、自分は透谷に似る事の光榮と悲慘とを享有するものである。

パピイニは、恐らく生涯を棒にふつた人間のうち、自分よりもひどい失敗をした人間を見出す事は困難な事だらうと云つてゐる。その言葉は、パピイニ自身よりも、むしろ自分自身に適合する。古語に曰く、內に智無く、外に才無

き者、是れを自棄の人と謂ふと。自分こそは、正しく自棄の人である。自分は文字通り自ら棄つべきものだ。絶望して死ぬのが、自分らしい事だ。智慧も要らぬ。悟りも要らぬ。安心も、達觀も、その他多年自分の求め來つたものは、みな自分にはそぐはぬものだ。虛無こそ、自分のエレメントである。虛無からの出發は、ふたたび虛無への到達である。潔く失敗を告白して死ぬのが、自分の救ひだ。見榮や負け嫌ひから、悟つたやうな事を云つてみたり、滿足して此世から別れるなどと云つてみたりしても、つまらない事だ。飽くまで迷ひ、負けて、負けて、負け盡して、冷然と自分の拙劣な生涯を葬る。それが自分の悟りだ。自分の智慧だ。自分の眞實だ。

鼠入ニ錢筒ニ伎已窮。十年蹤跡眼頭空。

昭和三年十月八日（病床にて「未發表原稿」）

孤獨の極北から

×

僕は目立たずにゐるのが好きだ。

蔭に隱れて、一人の生活を味はつてゐたい。

自分を相手に、對話したり、詠嘆したり、消化てゐたい。

華かな舞臺に上つて、大芝居を打つたりする事は、自分の天分でなく、また、自分の性分でもない。

片隅の幸福が、自分の安住の地だ、自分の寢床だ。

僕の孤獨三昧の思慕もそこから出る。

だが、僕のこの氣持を、誰も分つてはくれないらしい。
片隅の幸福と云へば、自分の生活に得々としてゐると云つて罵られる。
孤獨について語れば、衆を睥睨して、獨り自ら高しとしてゐるのだと云つて攻擊される。
僕の書いたものを少しでも讀んでくれれば、そんな事は云へない筈だ。
惡く云ふ人は、大抵、讀んでゐてくれないらしい。たまたま雜誌に載せた感想のそこここを拾ひ讀みするか、題だけを見て、合點してしまふ位なところらしい。
はじめから、讀むだけの價値がないと定めてあるのだらうから、それもいいだらう。
惡く云はれるのも、何も云はれないよりはましな事は、既にワイルドの喝破したところだ。
何とか評判されるうちが花かも知れない。
僕はさう思つて、自ら慰める。

×

人間は何にでも慣れるものだ。
惡く云はれる事にも慣れる。
まだ、無疵の時分には、一寸の事でも刺のやうに痛んだのに、今では、ああ、またか……と思つて、苦笑して止む。
惡く云はうと思へば、何とでも云へる。
さういふ事も分つて來た。
何かやつてをれば、何とか云はれる事は分り切つた事だ。
日本國民である以上は、いくらかの稅金は納めなければならない。

たまたま、稅務署の査定が重すぎても、それは泣き寢いりする外はない。
現代を支配するものは、力の道德だ。
僕はその力に服從しようと思ふ。
負けたる人の幸福は、消極的なものであらう。だが、幸福は所詮消極的なものだ。
それは場合によつては、僕だつて戰ふつもりだ。生を賭してもやるつもりだ。
ニヒリストにも絕望的勇氣はある筈だ。
彼が生き得るのは、ただ、それあるによる。
然し、無事に如くはない。
それでなくてさへ、人生はあまりに煩はしい、苦しい……
その苦しみを十倍にするのは、つまりは、虛名のためである。
しかも、その虛名ゆゑに、辛うじて生活し得るといふのは、何といふみじめな存在だらう。
僕は自ら憫れむ。
多少の財產さへあれば、僕はこんなしがない渡世は、綺麗さつぱりやめたいのだ。
僕は自分が何等かの人に語るのに値する事を有つてゐるとは信じないのだから。
僕は自分で、隊伍の中の一兵卒にすぎないと思つてゐる。
それなのに、大家を氣取つてゐる稚氣わらふべしなどと云つて罵つた匿名氏があつた。
さうも見えるものかと、ただ驚く。

×

「なぜ、僕はこんなに悪く云はれるのだらう、僕のやうなものが、一人位ゐたつて、格別邪魔にもならないだらうのに」

から僕が、さう三四年も前だつたか、友に云ふと、彼は笑つて云つた、

「だから君は莫迦だよ、抵抗力の薄弱な方面に動くのが、凡ての運動の方則なのを知らないのか」

「抵抗力の薄弱……さう云はれれば、成程と思ひ當る事もあるね……」

「さうとも、君のやうに何の背景も持たないで、孤立でゐるものは、踏んだり蹴つたり、勝手氣儘にされたつて仕方がないよ、いたづら小僧は通りがかりに、ポンとくらはせて行くのを面白がるまでサ、別に君に悪意はなくともね…」

から云つて、友は僕を憐憫の眼で見た。

ああ、確かに、僕はその憐憫に値する。

然し、これが僕の運命だ。僕はそれに堪へねばならぬ。

そして、それが堪へられなくなつたなら……その時は死ぬのだ。

さうだ、死が僕の救ひだ。僕の無價値、無能、悲慘、滑稽……死はそれを消してくれるであらう。

だが、まだ僕は生きてゐたい、生きてゐる限り、僕はどんなに罵られようとも、やつぱり仕事をしなければならぬ……

『自死自葬論』といふのを書きかけたが、出來なかつたので、これでも代りに……自死自葬論と云つても、僕自身それを主唱しようと云ふのではなく、僕が曾つて小說のモデルにとつたその論者の意見を解說してみる迄だが、それはいづれ他日。

大正十四年十一月二十日（雜誌『虛無思想研究』へ送らうとして、發表を見合せたもの）

無爲を求めて

何も書かずにゐられるのは、幸福だ。物を書くといふ事は、つまりは恥さらしだ。

こんな氣持が、心の底に動く。

金さへあれば、何もしないで、好きな本を讀んで、一生を送りたい。

本も隨分退屈だ。が、さう云ひながらも、讀書だけはやめられない。

自分の貧しい腦髓から出るものよりも、人の書いたものの方が意味があるし、興味もあるのだ。

フィロロオグになりたいとは、自分の長らくのあこがれだつた。それも所詮、駄目だ。

學問は資本次第だ。自分のやうな境遇ではそれこそ大それた野望だ。

すべては見果てぬ夢である。

自分のした事は、水に描いた畫にすぎなかつた。

それが自分の運命だ。それが惡いといくら非難されても、仕方のない事だ。

何と云はれても、力が足りないからだと答へる外はない。

力が足りないのだ。それをどうしようと云ふのだらう。

人物が駄目だとか、いかものだとか、甘いとか、卑屈だとか、何だとか、かだとか……

みんな本當だ。力が足りないのだ、たしかに此事は、現代道德の標準から見て、惡であるには相違ない。

かうしていろんな非難は受けるが、ただ一つ、勤勉といふ事だけは、みんな認めて下さるらしい。

僕は勤勉だらうか？　さうかも知れない、始終何かコツコツやつてゐる事は確かだから。
が、それは決して決して、今の僕の本意ではない。
僕はもう今は、何の希望も、夢もない。
ただ、何もしないで、なまけてゐたい。
僕はもう働くのに飽きた、この何の効果もない、無意味な仕事には……
でも、働かなければ食へない。一日作さざれば一日食はずでなくして、一日作さざれば一日食へずなのだ。
もつと報酬が多ければ、こんなに働かなければならぬ必要はない筈だ。
が、それは分外の不平だ。おまへのやうな才能では、かうして毎日米の飯が食へるだけでも感謝しなければならぬのだ。
それはよく知つてゐる。身の程を知つてゐるから、僕は辛いのも、苦しいのも、みんな我慢して、コツコツ働いてゐる……
自分に天分のない事も、僕はもう嘆きはしない。
自分が何の取得もない人間だといふ事にも、何か意味がありさうにも思はれる。
雑兵があるので、大將が引立つ。
雑兵なのだから、うつちやつといて貰ひたいと思ふ。
自分のやうなつまらないものをも、何とかかとか評判して下さるのは有難いが、實は多少有難迷惑でもある。
僕は片隅に引込んで、蝸牛のやうに暮したい。
孤獨を口にするといふので、いろいろと非難を受けた。

だが、人と人との間に、正しい理解が到底望み難い人生に於いて、孤獨を感じないでゐられるだらうか？
人間はしよせん、みんな孤獨だ。
隱遁氣分のわるい事は知つてゐる。山林趣味が、現代の精神に反する事も知つてゐる。
だが、それでも、僕はやつぱり東洋人流の無爲恬澹を求めてゐる……

大正十四年十一月二十日（未發表原稿）

逆說的時代？

私は特に逆說を愛する人間ではない。また、かかる才能は、私の最も短とするところである。然るに、その私が逆說家のやうに考へられる場合が多い。これは奇異なる事實である。それ自身、一つの逆說的事實である。

私から云はせれば、私が特に逆說的なのではなくして、現代そのものが逆說的なのである。周圍がすべて逆說的になつてゐるがために、至極あたり前の事をあたり前に云ふ方が、反つて逆說的に見えるのではあるまいか。左にその二三の例を擧げてゐる。

マルクスの一大失錯

ロベスピエールは其詩集を引き裂いた。マラアはそのセンティメンタルな小說を、デムウランはその詩作を、ナポレオンはその『エルテルの悲しみ』を模倣した小說を破棄した。近くは、共產主義者の祖師、マルクス宗の開山なるカアル・マルクスは、その靑年時代の詩作を悉く破却してしまつた。かくて、彼等はその理想に從つて、世界を變革せん

と奮起したのだ。

然るに今や、「世界を變革せんとする意志」を以て、詩を作り、小說を書けと主張する人々があらはれた。マルクスの道を逆に取つてかへさうといふのだ。我々は無益にマルクスと違つた世紀にゐなかつたのだ。地下のマルクスがこれを知つたなら、あのときあの詩稿を破るんぢやなかつたと、地團太ふんでくやしがるに違ひない。

小說入門としての資本論

小說を書からとするならば、まづ、マルクスの經濟學を學ばなければならぬと、眞面目に靑年に訓戒する小說作家があらはれた。經濟學は確かに學ぶ甲斐のある學問であらう。が、小說作法としては、少々不適當な學問ではあるまいか。(なほ又、その經濟學の中から、特にマルクスの資本論を選ばねばならぬのはどういふわけか？　改造社の資本論が、一大センセイションを起してゐるのを、おまへは知らないのか？)が、その作家は確信を以て小說志願者に資本論をすすめた。

そこで經濟學博士こそ、小說家として最良の資格ある人となる。かくて、新居格氏の小說がおもしろいのは、彼が文學士でなくて、法學士であるからだといふ批評家も出るかも知れない。(しまひには、西鶴は經濟學の知識がないから駄目だといふやうなすばらしい卓見も生れるかも知れない。

いつその事に、社會學者、經濟學者と、小說家との入れ替りをやつて見たらどんなものか。前者は必ずや小說家を凌駕する手腕を示すであらう。何となれば、彼は十分に經濟學に精通してゐるからだ。そして、事實、新明正道氏の(この推定は新居格氏に據る)『夜の影』など、その適例である、さてそこで、一番憫然なものは現在の小說家である。人間修業など云つて、いい氣になつて遊び廻つてゐたおかげて、何の所得もない始末だ。後進のいい見せしめではあ

るまいか。
曾つて、文學に志したブルジョアの子弟は、爭つて帝國大學の文科に入つた。今、彼等は法科をゑらばねばならぬ。まづ、資本論を正しく理解するために、その基礎知識を積むために、アダム・スミス、リカァド等の古典的經濟學を知るために。(最近この問題で論爭があつて、その小說作家の眞意が決して資本論を小說入門と看なしたわけでなく、單に流行の尊重にすぎなかつた事も判然したが、しかもなほ私は、依然それを逆說的見解と看なす事に躊躇しないものである)

讀まない批評家

書物を讀むのが、批評家の任務であつた。然るに今や、讀書を輕蔑する批評家があらはれた。讀まないで、どうして批評家かと疑ふのは無用である。彼が批評家として愛せられてゐるのは、彼が讀まないからである。
書物を讀まないで批評する術は、近代の發明だとリヒテンベルクは云つたが、彼はまだ、批評をする最良の術は、その本を讀まない事だといふ眞理には想ひ當らなかつたらしい。
讀まない事、これ現代の最善の批評の方法である。その證據には、創作の合評會などの速記錄を見るがよろしい、讀まないで來た人が最も多くしやべつてゐる。

軍人としての批評家

批評家は須らく偏頗なるべし、不公正なるべしといふ說が、頗る眞面目に、頗る愼重嚴肅に主張せられた。卽ち、批評は主張たるべし、鬪爭たるべしといふ主張である。

ボオロには、世界は基督教徒と反基督教徒との二つしかなかつた。ボルシェビキには、ボルシェビキと反ボルシェビキとの二つしかない。マルキシストには、マルキシストと反マルキシストとの二つしかない。世界は黒と白である。反對のものはこれを擊破しなければならない。

かくて、赤衞軍をひきゐて、白軍を擊破するトロツキイは、最高の批評家である。メレジュコフスキイ、アンドレエフ、アルツィバアシェフ等は、即ち彼の白軍である。

かくて、文學上にも、獨裁主義が現出する。かつての自然主義全盛當時とおなじやうに、ムソリイニやリヴェーラの鐵腕が、あらゆる批評の自由を禁壓するのは、もとより不公正の甚だしきものである。現代の文學批評は、幾分その不自由さの中にある。が、それが更にプロレタリア獨裁の勞農露西亞の如き、通稱ピリ公的同伴者文學、追隨文學をのみ許すやうになつたらどうか？　我が自然主義獨裁時代はさうであつた。あの時分の鬪爭的批評は果して公正なものであつたか？

偏見なく、公正に事物に對するのが批評の道であるといふが如き見解は、今日の逆說的時代からは、滿場の嘲罵のもとに葬り去られるであらう。

昭和二年十一月(「不同調」所載)

書齋からの眺望

一、カメレオン一世

先づ、窓の外に一匹のカメレオンが目につく。それについて書きたい。が、その前に云ふ事がある。

このごろ、人道主義の時代に、人道主義の作家としてあらはれた人が、マルキシズム全盛の時代にマルキシストとなり、唯物論者となつたのを、一部では嘲笑してゐる人もあるやうだが、他人の行動に對して、好んで悪意の解釋を下さんとするのは、日本人の弱點として、正に悲しむべき事態ではあるまいか。私がその作家のために、敢て辯護の勞を取らずにゐられない所以である。

彼は決して意識的に豹變したのではない。ただ、自然の推移に從つたまでである。いかに外面からは、唐突とも見え、政略的とも見えようとも、彼としては、頗る自然の推移なのである。彼の讀むもの、聞くものが、悉く人道主義の色彩に輝いてゐた。感激性に富んだ彼が、どうして人道主義にならざるを得よう。そこで、彼は人道愛を叫び、人類の爲めに唱へたのだ。

然るに、時勢は一轉して、マルキシズムの時代が來た。彼の讀むもの、聞くものが、悉く階級鬪爭を說き、唯物史觀を說く。彼たるもの、どうしてマルキシストにならずにゐられようか？　人道主義の作家だから、永久に人道主義でなければならぬといふ理由はない筈だ。殊に、それがプチ・ブルジョアの憫むべき自慰である事が、マルキシストの手によつて暴露せられた今日に於いてをやである。

かくて、彼はマルクス・ボオイとなつたのである。凡ては自然である、自然に推移したのである。綠の葉の上にとまつてゐた綠のカメレオンが、赤い果の上に移つたと思ふと、忽ち赤くなつた。あいつもマルキシストになつたねえ。そして、それだけである。そこに何等罪すべきものもなく、嘲笑すべきものもない。

ナポレオンの時代には、ナポレオンのアドマイヤラアになる。デカメロンが持て囃されれば、デカメロンの愛讀者になる。ロマン・ロオランが……だが、カメレオンはカメレオンの本能に從はねばならぬ。彼もまたその生命を保つた

めの保護色を要するのだ。

今や、ナポレオンの時代は去つて、カメレオンの時代が來た。看板の塗り替へといふ言葉が曾て流行つた。その表白たるや、正にカメレオン以前である。向日葵は日に添うてめぐり、水は方圓の器にしたがふ。カメレオンは周圍によつて自づと色を變へられる。人爲的なる塗り替へと同一に斷ずべきではない。凡ては自然である。自然の推移に從つたのである。要するに彼は藝術家である。藝術家の感受性の鋭敏について了解するところあるものには、何の不思議もないのだ。

窓の外のカメレオン一匹、おまへが現代の英雄だつたねえ。

二、思想の虛無と思想の共產

ブルウドンの『窮乏の哲學』に對して、『哲學の窮乏』を著したのは、マルクスであつた。勿論、その兩者とも、私は讀んでゐないが、いづれも思想の窮乏を示すものではなささうである。然るに、私の問題は、實にその點にある。

虛無思想もいいが、私は虛無思想を說くよりも先に、まづ、自分の思想の虛無を嘆く。私の虛無思想が、その實、思想の虛無を現すにすぎぬならば、まことに恥しい事である。人前に顏出しも出來ない不始末であらう。

だが、また、かういふ自己欺瞞もある。卽ち、思想の虛無は、あらゆる思想の合財袋である、無思想は同時に全思想であると。然し、宿なしは世界の主人であるなどといふ事は、詩人の詩句の中でなければ通用しない。それは苟くも評論家の口にすべき語ではない。空の蟇口を以てしては、燒鳥一串も食へやしない。

おまへの蟇口にも、白銅一枚位はあるだらう？　それはさうだ、私にも思想はある、少くとも思想らしいものはある筈だ、私が生きてゐる事ほど左樣に。

思想は何も論理的構成物ではない筈である。その人の人生、社會に於ける行動が、換言すれば、その生き方が、即ちその人の思想だとも云へる。いや、行動は直に思想ではなくとも、行動の原動力となるものは、思想である。原動力とならぬやうな思想は無意味である。實際と隔離した思想は空想である。實踐の伴はない思想は、單なる知識である。知識とは、即ち借物の義である。

これが大切な事である。此一點を閑却するところからして、現在の如き借物文化が發生したのだ。さきごろ、或文藝日記を見たら、文藝家名簿の外に、別に思想家名簿といふものが載つてゐたが、それには現在の名ある社會學者、經濟學者を網羅してあつたので、それによつて私は、思想家とは今は專ら社會思想家を指す語となつてゐる事を知つた。それは別にわるくはない。が、未だ飜譯時代、祖述時代にある我國の事ゆゑ、曾て哲學紹介者即ち哲學者であつたやうに、思想家即ち社會思想祖述家であらざらん事を祈るものである。

トルストイの説は、獨斷や矛盾や誤謬を多く含み、結論もまた極めて平凡でありながら、多くの人を動かす力を有したのは何故か？　それが彼の人格の根柢から發生した苦悶の聲であり、生活の體驗の中から出た思想であつたからである。學者としてのトルストイには、一文の價値もない。然し學者でなければ思想家と見なさぬのが、現在の常識である。知識の萬能！

共產主義は思想の共產をも意味さなければならぬとすれば、共產主義の實行はまづこの邊から。但し、その場合、この説に贊するもの、田吾作、權兵衞、みな思想家であるのは云ふ迄もない。人あり、マルクス・ボオイに問うて曰く、

「君の思想はどんなだい？」

「僕の思想か？　マルクスとおんなじだ」

三、ジヤアナリズム

ジヤアナリズム、またジヤアナリズム……今や、ジヤアナリズムは、あらゆる「文壇悪？」の根源のやうに云はれるやうになつた。果して然るか？　ジヤアナリズムを排除して、文壇なるものがあり得ようか？　私には、文壇即ジヤアナリズムとしか思はれない。文壇意識なきところには、ジヤアナリズムの精神はない。そして、ここに云ふジヤアナリズムの精神とは、作品の眞價よりも、それに付隨する各種の條件を尊重する精神の義である。そこで、あらゆる流行、あらゆる幻影、その尊重が、あらゆる政治的努力と鬪爭とを生むのである。かくて、本質的なるものから離れて。人は目前の効果に沒頭する……

然し、ジヤアナリズムとは、本來、かかる狹義な文壇意識の埓內に卷き籠められるべきものではない。いな、かかる偏狹な自己偏重を全く破却したところに、眞の意義ある指導的ジヤアナリズムは發生する。私が文壇ジヤアナリズムを排擊するのは、それが自己本位の、追隨的のジヤアナリズムだからである。

エチ・ヂ・ウエルズや、バアナアド・シヨウなどは常に社會に關心を持たずにはゐられない文學者である、單に作家であるばかりでなく、また社會批評家でもある。このゆゑに、彼等は一面ジヤアナリストとして看なされてゐる。然らば、私はジヤアナリズムを讃仰せざるを得ない、私の支持するジヤアナリズムとは卽ち之に外ならないのだ。また、私の尊敬する故ゲオルク・ブランデスは、獨逸的學究精神から、ジヤアナリステイツクだと呼ばれた。その高遠な抽象論を避け、あくまで實際に卽して、文明批評を行るが上に、その批評が學究精神に囚へられず、極めて藝術的であるからであらう。あの廣汎な興趣がジヤアナリズムであるならば、私はジヤアナリズムこそ、詩人の、藝術家の、從つて社會批評家、文明批評家の立脚地であらねばならぬと思ふものである。

今や、何等かの意味で社會批評家でない文學者は、單なる職人にすぎなくなつた。彼は職人なるがゆゑに、偏狹な文壇意識のジヤアナリズムに終始せざるを得ない。かくて、淸高閑雅な詩人と定評ある人が、その實、文壇意識の握飯を盛つた銀の皿であり、流行と個人的政略とに敏感なるジヤアナリストにすぎなくして、日夕繁忙の中にある新聞雜誌記者の中に、かへつて脫俗の詩人が隱れてゐるといふやうな、皮肉な事實も生じてくるのだ。いや、或る見方からすれば、彼れ人が淸高の士として高く値ぶみされるのは、實は彼が卓越したジヤアナリストであるからだとも云ひ得られる。

かやうなジヤアナリストは好ましくない。また、新聞雜誌の編輯者のみをジヤアナリストときめてかかるのも、あまりに形式的だ。その意味ならば、小說家だつて、人生の編輯者にすぎないではないか。

一體文壇には讀書を輕蔑する人が多い、作家にも批評家にも。ところがさういふ人に限つて、文壇雜誌などの熱心な愛讀者であるのは、どういふわけか。傍人曰く、「つまりそれが文壇的ジヤナリストなんですね」

四、雜誌「農民」について

雜誌「農民」は、吉江喬松氏、中村星湖氏、加藤武雄氏等によつて組織されてゐる農民文藝會の機關誌である。まだ第二號までしか出てゐないが、今年になつて創刊せられた雜誌の中でも、最も有意義な雜誌だと思ふ。私はまづ題名を「農民文學」などとしなかつたのを喜んだ。ここに此雜誌の將來を期待せしめる或物があつて存するからである。

「農民」は發刊後間もなくして、未だその重點が確然たるには至らぬが、その思想的立脚點は、大體既に決定してゐる。即ち、マルキシズムよりアナキズムに傾いてゐる。無政府重農主義がその基調のやうである。そして、これは農民の本質的意義より云つても、もとよりその所でなければならぬ。

ストリンドベリはマルクスやベエベルが、産業主義の中心地に生れ、また居住した事實を擧げて、「人間の精神には限度があつて、何人もその環境から脫する事は出來ない」と云つてゐるが、これ私の深く首肯するところである。そしてここにまづ、マルクスとバクウニンとの、またマルクスとプルウドンとの相違があると思ふ。マルクスはトリエルの辯護士の子であるが、バクウニンは未だ産業のはじまらない以前の露西亞の田園の子であり、プルウドンに至つては自ら農民の子で、十二歳まで家畜を飼つてゐた。この事は他の幾多の事實と同樣、この三人の思想について甚大の關係がある。また、それがなければ人間的でないかも知れぬ。

現在では、社會思想にあつて、單にその主義のみを問うて、その人を問はぬ傾向が强い。政治家の權略としては至當であらう。本質的に點檢する場合には、その人本來の人格や、個人的閱歷は極めて重大である。故有島武郎氏は、自らブルジョア階級の出身者であるがため、つひにその階級の精神を脫却しえぬ事を表明した。思想は借物でもすむ。感情はつひに欺くを得ない。ゆゑにプロレタリア論客は、「まづ自己の心中のブルジョア精神の超克よりはじめねばならぬのである。

この人間性の嚴しい制限よりして、マルキシズムは都會居住者、機械勞働者の主義となつた。農民はマルクスその人の目にすら、既に反動的傾向に富むものとして、多くの共感に値しなかつたのだ。

そこで、再びストリンドベリを引用すれば、「なぜ農業社會主義は勞働黨の主領から、そんなに憎まれ、且かういふ連中から早速保守的だとして排斥せられるのであらうか。それは恐らくこの主義が、社會の仕事を靜かに解決して、破產を避ける事に役立つからである。」

必ずしも農業社會主義ではなくも、「農民」の運動が、實にかやうな事に役立つべき事を私は期待する。マルキシストの側の非難攻擊は或は免れまい。然し、私たちは日本といふ特殊の國にゐるのだ。私たちは直譯的空論を避けて、

常に實地に卽して行かねばならぬ。この點「農民」は一號より二號と、私たちの期待に添ひつつある事を喜びたい。

昭和二年十一月（「都新聞」十一月二十四日——二十七日所載）

眞理を求めて

この何年といふもの、私の心は始終ふるへがちで始終かき亂され、始終激動してゐた。身世の事、すべて辛く、くるしく、憤ろしく、不合理な社會と人生との、あらゆる暗面と暴虐とを嘆いた。私の眼が廣い範圍に及ぶにつれて、私の憤りも強くなつた。だが、それも、これも、結局、忍ぶ外はないのだつた。いくら世の中が憤ろしくとも、耐へ忍ぶ外はない事を私は知つた。社會改造の大望も、それが單なる夢想にすぎないうちは、詩としての外の意義はない。それはそんなに誇るべき事柄ではない。それを悟つた時、私はただ耐へる外はなかつた。

けれども、その隱忍の氣持は、あまりに苦しいものである。まるで窒息しさうな心の狀態である。私はそんな暗い氣持が堪へられなかつた。もつと明るい、ひろびろとした心持、そんな心持にならなければいけないと思ふやうになつて、私は心を鍛練することを學んだのだ。心、ただ心一つである。世を革めるのは、自分の心を革める事から始められなければならない。自分の心境さへすすめば、新しい世界は展けてくるのだ。世俗の不合理と迫害とを超絕した高い世界は、そこに展けてくるにちがひない。然し人間は愚かなもので、十步進んだと思つても、次ぎの瞬間には、またちやんと十步退いてゐる。知識ではよくわかつてゐても、その思慕の境地へは、なかなか進んでいけない。

我々が人間として、眞實は僞りなく生きるために何よりも大切な事である、一切の卑しい欲望や、野心を全く征服してしまふことは、なかなか一朝一夕の事ではない。いや、一生かかつても出來ないかも知れない。殊に、それが私

のやうな鈍根なもの——人一倍その性格の中に、わるいものを持つてゐるものには、難中の難であらうも知れぬ。けれども、それに努力しなければならぬといふ事を、だんだんに私は思つてくるやうになつた。

私の求めるものが、美であつたならば、私は安易な氣持で、自分をあまやかしてもゐられる、自分の魂からは目をそらして、いつも外の方ばかり見てゐてもすませる。また、私の求めるものが善であつたとしても、私はまだそんなに苦しまなくてもすむかも知れぬ。なぜかといふと、世に謂ふ善などといふものは、それは人間の中の約束から生れる、方便的なものでもありうるからだ。だがこの善が、さうした相對的、便宜的、習俗的のものでなく、永恒的なもの、不變なもの、絶對のものとなる場合には、それはまさに眞と云ひえられる。そして私の專念に求めてゐるものこそ、その眞である。

眞を求めるもの、眞理の探究者、一意專念の求道者は、苟くも自己を欺くが如き事があつてはならぬ。私は何よりも、この事を自分に警告せずにゐられない。ともすれば自己欺瞞に陷る自分に對して。

詩人であるがために、ともすれば、詩に醉うて、自己陶醉に陷る自分に、私は、私の醒めた理性を、私の意地のわるい批評的能力を、看視に附してゐる一種の偏見からして、感傷詩人として、一も二もなく片付けられる事の稀でない私が、この自分の中の感傷家に、こんな嚴重な看視を附してゐる事を聞いたなら、人は驚くであらう。然し、私は此事を行つてゐる、なほ一層それを嚴重にしようとさへ考へてゐる。さうでなければ、私はつひに眞を逸し去るであらうから。そして私をセンテイメンタリストとして非難する人たちが、自分に對して、どれだけ看視の勞をとつてゐられるかは、私に興味がなくもない、なぜなれば、今後の詩人は、單に詩に醉ふ人であるだけでは十分でなくて、嚴格なる自己批評の鍛練を經た、眞實の生活者でなければならぬからである。

虚無思想と私

前號の本紙に、虚無思想研究といふ私の舊著の事で、ゴシップやうの記事が出てゐた。一體ゴシップのたぐひで、かつて事實をあやまりなく傳へられた事がないが、今度のはあやまりも特に甚しいやうであるから、一寸事實を書いて置きたい。と同時に、虚無思想研究が、私にとつて方面違ひの仕事のやうに云々されてあつたから、虚無思想が私に對してどんな意義をもつてゐるかをも、一言述べてみたいと思ふ。

問題の『虚無思想研究』といふのは、もとより云ふに足らぬ小著である。今から十餘年前大正五年に、天弦堂の「近代思潮叢書」中の一篇として出版されたもので、自分で最も不滿なものであるから、白楊社（當時は三德社と云つた）から、その紙型を買取つたから出版したいとの交渉のあつたとき、當惑したのである。氣の弱い性質からして、斷然拒絶する事が出來なかつたので、とにかく訂正させてくれるならばといふ條件つきで承諾して、一應讀み返して見ると、到底一部分の訂正位では滿足出來ないもので、訂正する位ならば全部書き直す外はなかつた。が、それは不可能の事であるから、そのむね新たに序文に書き記して、不本意ながら同社から刊行させた、それは大正十一年の終り頃と憶えてゐる。ゴシップ記事のやうに、闇から闇に葬られた方が、私の本意にかなつたのであるが、仕方がなかつた。

その白楊社版（當時の三德社版）は一部手許にあつたのを、中央新聞文藝部の吉田孤羊氏がほしいと云はれるまま、同氏に贈つたので、今私の手許にないから、正確な刊行年月は分らないが、まもなくあの震災で、その紙型が燒失したのだから、震災以前である事は確實だ。そして、この紙型燒失のため、それきり絶版になつたので、書肆には氣の毒であるが、私自身は幸と思つてゐる。白楊社主人との交渉の實際については、主人と私とが知るのみである。それ

ゆゑ、「ゴシップ子見て來たやうな嘘をつき」の一句をもつて答へるにとどめておかう。著者としては出版者の態度に快からぬ印象を受ける事もない事はないが、みなそれぞれ社風があつての事なのだから、甚しい不當な處置のあつた場合の外は、著者として寛容の態度をとるべきものと私は思つてゐる。同社からは『虛無思想研究』出版後、更に『ハイネ傳』の執筆を依頼されたが、それを謝絶したのは、別に感情の問題でなく、私にその準備が未だ十分に整つてゐなかつたからにすぎない。

虛無思想研究が、私にとつて不思議な方面違ひの仕事であるやうに記されてゐるのは、心得がたい事である。ニヒリズムは私の思想の基調となつてゐるもので、私の詩にも、小說にも一貫して現れてゐるのである、私の近年の努力は、それに對する超克であると信じてゐたが、結果に於いては、その深化としての虛無的生命主義とでも云ふべき思想に到達してゐる。即ち、否定によつての肯定である。虛無思想は、かやうに私の身肉に喰ひ入つてゐるのだ。然しその事は、もとより當時の私の研究の良好を證するものではない。あの當時はまだ力も不足であつたし、いい參考書もなく、その上檢閱が特に嚴しくて、內檢閱を受けた結果、ロシヤのニヒリストの運動を叙した最も主要な部分全部の削除を命ぜられた爲め、骨ぬきのものとなつたので、私として、再び世の中に出したくなかつたのであるが、その後私の思想も多少は熟し來り、この十年間にそれに關する文獻も出來るだけ蒐集したので、他日閑暇を得たらば、ゴシップ子の嘲笑とは意味の違つた「大著」として、世に問ふ事もあらうと思つてゐる。

私は偏見、先入見の根强さに時々驚く。「やさしい詩人」なる名は有難迷惑である。その爲め、詩の外のものを書くのは自己に不忠實であると、ある詩人に云はれたことさへあつたが、自己を全的に生かさない事こそ、自己に不忠實な所以ではないか。私はどうして自分だけこんな窮屈な制限を受けねばならぬかが理解出來ないのだ。私は小說も出した。今また評論集をも出す。今後更に勉勵してこの不合理な偏見と戰はうと思つてゐる。

調子の高い文學

二三年前は、旅に出ると、よく隣の部屋などで、ストトン節といふはやり唄を聞いたものであるが、實にだらけ切つた、頽廢氣分の唄で、間のびのした節をあの間のびのした聲で唄つてゐる男などがあると、聞いてゐていらいらしてくるのであつた。

然し、あの節もたしかに時代の產物であつた。大正末期の氣分には、あの頽廢したストトン氣分が確かにあつたと思ふ。そして、その文學にも、あの氣分がよく反映してゐはしなかつたであらうか。何となくだらけ切つた、調子の低いものを感じさせはしなかつたであらうか。そして、現在でも、そのダルな氣分が、なほ續いてゐるやうな事はないであらうか。

自然主義の文學は、のちにだんだん平俗なトリヴイアリズムに墮したとは云へ、その習俗打破の强い信念をもつて唱道せられた當時にあつては、何處か調子の高いところがあつた。田山花袋氏の當時の作品など、今から見ると、缺點の多い作品ではあらうが、さう調子の低いものではない。島崎藤村氏の『春』や『家』などに至つては、單純に自然主義として片づけられない程の象徵的階段に達した、極めて調子の高い藝術である。

人道主義の文學は、幼稚なところもあつたらうし、未熟なところもあつたらうが、武者小路實篤氏や有島武郞氏の初期の作品など、實に調子の高い、熱意のこもつたものであつた。第一、あの當時は文學者の生活態度からして違つてゐた。緊張した努力精進の生活であつた。

島崎氏や武者小路氏が、自ら自然主義とか、人道主義とか標榜されたか否かは、ここではもとより問題でない。當代の代表的作家として一般に認められてゐるのでここに擧げてみたのであるが、然しまた二氏はともに大立者である。故にその人によつて、當時の一切を律するわけには行かぬとの抗辯もあるであらう。亞流は常に低俗である事は否定しがたいかも知れない。然らば、その時代全體が亞流の時代もあり得るではないか。

大正末期はおそらく最も萎靡沈滞したエピゴオネンの時代であつたであらう。それが創造的よりも、回顧的の時代であつた事は、各種の事情がこれを證明してゐる。一通り決算がすめば、次ぎには新しい創造の時代が來なければならぬ。そして、今後與るべきものは、その流派や傾向はいかにともあれ、調子の高い文學でなければならぬ。

調子の高い文學とは何か。必ずしも理想主義的であるを要しない。ロマン・ロオランの『ジアン・クリストフ』が調子の高い文學ならば、レイモンドの『農民』もまた調子の高い文學である。ホイツトマンの詩が調子の高い文學ならば、ボオドレエルの詩は、それに劣らず調子の高い文學である。

調子の低い文學とは何か。私はまづ江戸末期の文學を擧げたい。春水の『梅暦』や、一九の『膝栗毛』など、どう見ても調子の高いものとは云ひ難い。一體に、江戸末期は頽廢した調子の低い時代である。そして、大正末期が江戸末期氣分と、極めて相近い氣分を示してゐた事は、私の屢々指摘した如くである。

調子の高い文學は、調子の高い生活から生れる。その生活が張りのない、だらけたものであつたならば、どうして人を動かす力ある文學が生れよう。調子の高い文學とは、即ち生命を打込んだ文學である。創造的の文學である。端坐して書いた文學は、端坐して讀ましめる。寢そべつて書いた文學は、寢そべつて讀ませる。作者と讀者との間には、一種の磁氣が通ふとおもふ。それだけの共感作用はたしかにあると思ふ。

大正末期の文學には、寢そべり文學が多かつた。ストトン的文學が多かつた。もう寢そべり文學の時代ではあるま

い。ストトン節は既に忘られたではないか。今や一切は更新されなければならぬ。また、さうした新機運は、今たしかに動きつつある。たのしい期待をもつて、私は明年、明後年、なほその先きの年を望む。

(「文藝時報」昭和二年九月第四十五號)

新時代と無道德

近頃、我が文壇では新時代の呼聲が頗る高いが、その新時代の概念たるや、私には、まだあまりハッキリしてゐないのである。私も今の靑年の間に、以前とは全然違つた考へ方なり、生き方なりがあらはれつつあることは、たしかに事實であるやうに思ふ。しかし、それが澎湃たる新興の機運を示すものであるか、又は、舊時代の老衰の結果である一種のデカダン氣分を示すものであるかどうかは、未だ大いに疑問である。

今、一派の人々によつて主張せられる新時代なるものは、以前の人道主義の主張の反動ではないかとも思はれる。そして、今の時代にさうした主張の起るのにも、必然的なものがあるに相違ない。

それらの言説は兎に角として、現在の靑年の一部に、一種のニヒリズムに近い氣分の存在してゐるのは、たしかのやうだ。その中からは、カラマゾフさへ出現してゐる。これは、このすこし前までは想像も出來なかつた事實である。

道德を振かざすのは素より舊時代であらう。しかし、またニイチエのやうに、反道德を叫ばざるを得ないのは、等しく道德に囚はれてゐるわけだから、矢張り古いと云つてよい。

大體、道德などいふものとは、てんで交渉のないところの、アモラルな、無道德な世界が增大しつつあるのが今の時代の特徵ではあるまいか。

加藤武雄氏は、今日は科學の時代だと云はれたが、科學的精神、即ち、無道德の精神ではあるまいか。ここに云ふ無道德といふのは、不道德といふのとは、全然意味が違ふ、それを混同してはならない。これらの事に就いては、なほ深く考へて別に書いてみたいと思つてゐる。

大正十四年二月（讀書人）

詩人地獄

わが長く敬慕の情を捧げ來りしかの老詩人をはじめて訪ねしとき、詩人は思ひもよらぬ侘しき住居の、飾りだもあらぬ狹き書齋に、ひとり靜かに古人の書を繙きつつありしが、われをその座右に引きてさて、わがきれぎれに語り出でし志望を聽きて後、おもむろにかく語り出でられぬ。

「おんみは詩人たらむとす。されど、おんみは未だ詩人とはいかなるものかを知らざるが如し。われ、そをおんみに教へむとす。詩人とは自らつくれる地獄に住む人なり、いな、自らつくれるとにはあらねども、おのづと彼はそこに陷りて、つひにはその中に安住の地を見出づるなり。げに、かかるはかなき生涯は、愚かにもあさましき極みなるべし。されど、咎むるも嗤ふも詮なし、彼は詩を愛すればなり。」

彼は詩を愛すればなり、かく云ひ切りし時の詩人の眉目と口角との顫きを、われつひに忘るる事能はず。そは限りなき矜恃なりき。されどその底には聲なき嗚咽の如きものを聞くがやうに、われには思はれぬ。

さて、語を繼ぎて詩人の云へるやう。

「おんみもし、わが世の幸を希ふ心のつゆほどもあらば、ゆめ詩の道には踏み入り給ふ勿れ。そは不幸と險難との道

なれば。げにや、俗流の嘲笑と誹謗とによりて、日毎にその胸に矢を受けつつ、その友と呼ぶ人々にすら、理解さるる事なく、自らの周圍にゑがける詩の光輪の中に、養ひ乏しき日々を送ること、これまことの詩人の必ず受くべき運命なればなり。

おんみもし、數多の財寶を得て、家富み榮え、親々の心を安んじまゐらせ、人々の聞えをよくせんと思ひ給はば、ゆめ詩の道には入り給ふ勿れ才ある人の創作家となりて、小說、戲曲のかずかずを物して、幸ひに世の迎ふるところとならば、巨萬の富は及ばずともせめては世の嗤笑を免るるだけの門戶を構へて、折りふし每の衣裳にも事を缺かず日々の食卓の上にも豐かに海山の美味もて充たし得べけむも、ひとたび詩人として立ちなばたとへいかに名を擧げ、世に迎へらるる日はありとも、かかる望みだに絕えてなしと知り給へ。

詩は藝術の中の繼子なり。詩は最も酬いらるることなき技術なり。ただ世のつねの業にいそしみて、そのひまびまのなぐさみとするには如かじ、そはあだかもかの童らの心なぐさみに弄ぶ笛、手風琴のたぐひのみ。さるをわが如く止み難き熱望に驅られて、この地獄に陷りしものは、涙に濕ひし麵麭を食ひ、つづれを錦に思ひなして、膝を屈するに足る書齋のある事をも、こよなき惠みと感謝すべきなれ。

さるを世には、詩によりて善き衣食を得、華々しく樂しく世を渡らむと企てて、徒黨を結び、他を排して、さまざまにきたなき業する人々もあれど、そは恥づべき事なるのみならず、また愚かなる事なり。

まことの詩人は、つとめつとめて、しかもただ辛うじて餓を免るるのみ。君は知らずや、かの佛蘭西のボオドレエルが逸話を。彼れ一夜、その友カテュウル・マンデスを訪れしとき、しばしの沈默の後に彼にはかにいといと暗き顏して語り出でしは、君はわが詩人となりてよりこのかた、幾何の金を得たるか知り給ふまじとて、その得し額を指をり數へてありしが、やがて、一萬五千八百九十二法と六十仙なりきと云ひて後、この六十仙をも忘れ給ふな、これ葉卷

二本の値なればと、いと苦々しうも附け加へぬと云ふ。

後にマンデスの計算によれば、この『惡の華』の詩人の一日平均の收入は、わづかに一法七十仙に過ぎずと云へり。恐るべき事ならずや。しかもそは藝術の國なる佛蘭西の事なり。また、かかる稀世の大詩人の事なり。況んやこの國にして、我等才なきものにして、なほ詩人として生くるを得るは、いといと不思議なる事に非ずや。いないな、わがあはれなる生計さへも、まことは、もばら詩の外なる本意なき書きものによりて、わづかに支へ來つるものなるを。さればこそかの詩を糊口のしろに當てんがために、相犇めく人々を愚かものとは呼ばんとするなれ。かくてもなほ、おんみ詩人たらむと思ひ給ふや。然らばわれ敢て君をいさめじ。君はまことに詩を愛すればなり。

かく詩人はわれをいさめ、且つ勵まし給ひぬ。

その言葉は深くもわが心に沁み通りぬ。わが志は、されども挫けざりき。いかにわれ餓ゑ渴きて路に斃るるとも、詩のために殉ずるなれば、敢て悔いじとぞ思ひ定めぬ。

（文章往來二月）

問答

「社會主義、結構である。私はそれに反對すべき何等の理由も有たない。」

「そんなら、おまへは社會主義者か。」

「或る意味ではさうだ、或る意味ではさうでない。」

「曖昧ではないか、そんな言ひ方は。」

「そんならもつとはつきり言はう。社會主義的思想は、今の時代の常識だ、もはやそれに反對すべき正當なる理由はない。その意味で多くの人間は、その自覺してゐるのとゐないのとに關せず、それぞれの度合でみな社會主義的傾向を有つてゐる。然し、殊更に、ことごとしく社會主義者だと宣言するには、その理論の無條件的肯定、その意義に對する絶對的確信、特に、進んで實際運動に携はるだけの決意と獻身的努力とが必要である。これなきものは、社會主義者と僭稱する事を許されない、然るに、僕には未だそれがないのだ、と云ふよりは、既にそれを失つてしまつたのだ。そして、口先ばかりの社會主義者や、筆先ばかりのプロレタリアとなる事を、自分は恥ぢる。」

「然し、既にさうした社會主義的感情と傾向とを有つてゐる以上、それを口にし、筆にしたとて差支へないではないか。議論もまた宣傳の道ではないか。言説もまた實行ではないか。」

「言説もまた實行である。よろしい、他の場合ならば、それを肯定しよう。然し、社會主義についてだけは、その言は適用されない。千百の論議も、ここでは實行とは呼ばれ得ない。なぜならば、社會主義は他の抽象哲學や、藝術などと違つて、物質的方面からの人間生活の改善、社會制度の根本的改革を目的とする最も具象的唯物的な主張であるから、總て形の上に現れない、單なる思想をもつては、實行と呼ぶことを得ない。よし頭の中で、どんな美しいユウトピアを築き上げても、それは單なる藝術に過ぎない。また、どんな周到緻密な議論をしても、それは要するに議論であるに過ぎない。實行と呼ぶものは、もつと違つたものでなければならない。また、宣傳と言つても、今の公刊雜誌で發表を許される範圍内で、書かれたものから與へられる位の刺戟なら、大抵の人間がその實生活の上で、毎日毎時間、いやと云ふほど與へられてゐる。そして理論ならば、いくら聞かされたとて仕方がない。だから、今の資本家雜誌なんかに出る抽象的な論議などが何の宣傳にならう。自覺したプロレタリアは、そんなものを輕蔑してゐる。」

「では、默つてゐろと言ふのか。實際運動をやらない以上は、何も論議してはならないと言ふのか。どんな平凡な、

平穩無事な論議でも、沈默よりはましだとは思はないか。」

「默つてゐろとは言はない、然し、萬年筆を百本書潰したつて、單にそれだけの事に過ぎないと言ふのだ。どんなに尤もでも、理論はつひに理論だ。そして、これだけは遂に理論で決せられる問題ではないからだ。もうとくの昔に分り切つてゐる事を、いつ迄もくどくどと繰返してゐたつて仕方がないではないか。また、理論の上の多少の異同差別を、額に青筋立てて論じ合つてゐたつて仕樣がないではないか。理窟はもう分つてゐる。みな、尤もだと思つてゐるのだ。今は、さあそれから、愈々今度こそは……と、その次のものを待つてゐるのだ。然るに、蓋が開いて見ると、やつぱり元の議論の蒸返しだ。それではうんざりする。」

「ぢや、どうしたらいいのだ。實行實行と言ふが、そんならどうすればいいと言ふのだ。」

「僕には分らない。分つてゐても、言へない。言つても、仕樣がない。」

「そんなら、初めから、そんなつまらぬ事を言はなければいいのだ。」

「さうだ、日本は島國だよ。」

兼好哲學

兼好の『徒然草』が、佛蘭西語に譯されたと聞く。歐羅巴人があのエッセイに對して、どんな批評を下すか、聞きたいと思ふ。

私は先年、兼好論を書いて、兼好を哲學者として論じたところが、或る國文學者は、兼好の何處に哲學があるのか、思想があるのかと云つて嘲笑された。

思へば、兼好法師を單なる趣味の人と見るのも、內海月杖氏以來、久しい定評である。然し、批評は定評に盲從したのでは面白くない。そんならいつそ書かない方がましではないか。

兼好は人生哲學者だ。そして、私たちに大切でもあり、興味のあるものは、人生哲學だ。哲學とは大學で講義されるやうなものと思ふのは、無邪氣な盲信である。概念分析をやつて、むづかしい術語を用ひて、細說詳論されるから、おそろしく專門的なわかりにくいものとなるが、その核心を引出してくると、案外簡單なものになる。また、それだからこそ、意味があるのだ。が、世間ではみやすく書けば書くほど、有難味が薄い。そこで、つひにはシエリングの天啓哲學などのやうなものが出てくる。

哲學は人間の宇宙人生に對する解釋である。酒屋の親爺だつてもつてゐるのだ。ただ淺いか深いかの相違だけだ。然し、言葉だけの深さはつまらぬ。ゴオリキイは、人生の苦難に打ちひしがれてゐる人間は、ショオペンハウエル以上の大哲學者だと云つたが、私はこの言葉が好きだ。

兼好哲學は常識哲學であり。苦勞人哲學である。それが一般人に愛讀せられる所以でもあり、深遠たりえぬ所以でもある。然し、兼好は自由思想家である。彼は最も早く中世の夢から醒めた人である。そこに彼の意義がある。

私はモンテエニユや、ラブリユイエールの國で、彼がいかに見られるかに興味がある。恐らく私たちの看過してゐるやうなところから、何かを發見されるかも知れない。そして、かつて私の拙論を讀んで驚かされた國文學者のやうに、私たちはそれを讀んで、あきれるかも知れないと思ふと興味がある。

昭和四年八月十三日（「國民文學」九月號所載）

創作の實際

創作と言つても、詩と小説とは（尤も、創作と言へば小説に限られてゐるやうだが）すつかりちがふ。詩の方だと、特にどんな時出來ると一言には言ひ惡い。いつでも感情を刺戟された時にはノートに斷片的に書き込む。その斷片が自然と纏つてゐることもあるし、又纏つてゐないこともある。その纏つてゐないのは、そのままにして置く場合もあるが、又後に幾つかの斷片を纏めて一つの詩にする場合もある。小説の方だと、詩のやうに一時の感激から、多く努力を要しないで自然と湧き出すといふやうなことは勿論ない、當初プランを遂うて、丁度石を一つ一つ運んで來て積み上げるやうな工合に、勤勉にこつこつやるだけである。その時その氣分に出來るだけ支配されまいと努めてはゐるが、餘り疲れてゐたり頭が照るかつたりすると、どうも思ふやうに行かない。毎日日課のやうにして書いて行くつもりでゐながら、非常に書ける日と一向に書けない日とがある。短篇ならば知らず、兎に角千枚位の長篇になると要するに根氣だと思ふ、粘りづよく持ちこたへてゆく持續力が何よりも必要である。

一年のうちにどんな時が一番書けるかは、小説の上からは未だ言ふ資格がない。けれども一般に私は、春は餘り出來ない方である。特に花見時分の、いやにどんよりとした花曇りの、机の上がざらざらするやうな日には、全く閉口である。暑いなら暑い、寒いなら寒いと小氣味よく徹底した夏冬の方が仕事のはかが行くやうに思はれる。秋は勿論よい、特にだんだん蟲の音が繁くなつてゆく、單衣では肌寒く感じられるやうな初秋の夜などに、私は多くの詩を得た記憶を持つてゐる。

私は今午前中に書くことにしてゐる。そして、餘り疲勞せず氣の向いてゐる時には、そして來客などの妨げのない

時には、十五枚位書けるのであるが、色々な邪魔があつたり、作中のつまらぬ故障に屈托したりして、ぼんやり過す日も多いので、平均すると五枚位になつてしまふ。我ながら愛想が盡きる。

私は變つた場所ではどうも書けないらしい。第一自分の書齋以外の場所ではどうも氣分が落ちつかない、あたふたしたやうな氣持で執筆どころの話ではない。

書齋の好みは貧乏人には贅澤が言へないから、北向きがいいとか、東向きがいいとか、云ふやうなことは論外であるが、光線は出來るだけカーテンによつて調節したい。私は一體に眩しいやうな明るさよりも、稍薄暗く、色彩なども青い方が好きである。青い部屋といふやうなものがあつたら、それが理想的である。電燈も天井からぶら下げたのはどうも工合がわるいので、青い笠をつけた卓上電燈を用ゐてゐる。これは氣分が落ちついてよく纏まるのと、今一つは、私には本を讀みつつでないと寢られないといふわるい癖があるので、卓上電燈だと寢る時に造作なく消されるからである。

書齋は餘りごてごて裝飾しない方が好きである。ただ自分の好きな畫家の繪と、自分の尊敬してゐる文學者の肖像を掲げ得ればそれで十分である。

筆を執る前に馬鹿のやうにぼんやりしてゐる。といふよりは、馬鹿のやうにぼんやりしてゐるのが理想である。角力取りなどが、土俵に出る前に一生懸命力瘤を入れてゐて、組んだと思ふとコロリとこかされてしまふのでは、飽氣ないこと夥しい。尤もこれは串談であるけれど、長篇などでは冒頭の一枚二枚を書き出すまでが大變で、途中で毎日々々筆を執り初める前には、ぼんやり無念無想にしてゐた方が一番いいやうに思ふ。それで、その無念無想には煙草とお茶とが大いに役に立つわけである。

さて書き初めてから、初めのうちは無闇に色々なことが氣になるが、だんだん進むとそれほどでもなくなる。ただ

筆が、油をさしたての機械のやうに走つてゐるところへ訪問客があると、一寸閉口する。一體に雜音は閉口であるが、地面がゆらゆらするに至つては遣りきれない。近所に何んかの工場があつて、何でも家の者の見て來たところによると、地面に穴を掘つてそれを杵で搗いてゐたのださうである。一とつづきの地面のことだからその杵が落ちて來る拍子に、ピンと私の頭へ響いて來る。しかし、それが影響しないやうに今大に修養中である。

執筆中は、行きつまると煙草を吸ひお茶を喫む。この頃はすつかりお茶好きになつて、紅茶、綠茶、番茶、あらゆる茶を喫みわけてゐる。それだけ酒はだんだん飮まなくなつて、時たま金が入つて何だか寂しいやうな氣のする時だけ、思ひ出したやうに飮む位なものである。それから香が好きで時々焚く。

行きつまると無闇に煙草やお茶を喫むが、氣力が盡きたり、氣分が散漫になつて、愈々書けなくなると思ひきりよくやめてしまふ。そんな時は散歩に出ることもあるし、愛讀の書を取り出して讀むこともあるし、李白や高靑邱やその他色々な詩を聲を上げて誦する。これは中々運動代用になつていいやうである。西洋音樂がこつちの氣の向いた時に聽かれたら、どんなにいいだらうといつも思ふ。

一番筆が澁るのは、要するに自分の一番柄にないところである。柄にないことはなるべく避けるようにしてゐるけれど、さうも出來ない場合がある。しかし、その時の氣分では、どんなことでも柄にあるんだと盲信することもあるし、又その反對に、どんなことでも柄にないとしをれかへることもある。

一篇の作品を構成する上からは、誰しもあらゆる點にわたつて非常な苦心にちがひない。ただ人によつて重きをなす點がちがふであらうが、私は要するに自分の短とするところに最も苦心すべきと思つてゐる。

大正十年（文章倶樂部所載）

現文壇を無視せよ

文壇の革新、そんな事も以前には問題にして眞面目に考へてゐたものだ。そして隨分さう云ふ事も論じて來た。然し私も疲れた。疲れたのみならず、さうした問題については百の論議も結局餘り大した効果を齎さない事を悟つたのだ。

今の文壇は今の文壇のままで結構である。我々は別に今の文壇と違つた、今の文壇とは全然沒交渉な、新らしい文壇を建設しなければならない。

その爲めには、我々自身が深く自ら戒めて前車の覆轍を踏む事なき樣にしなければならない。あらゆる不純な誘惑を斷乎として斥けて、精進努力を怠らないように心がけなければならない。それには先づ心中に確乎たる信念を抱懷する事を要する。信念のないものは容易に墮落する。

文壇といふ言葉を、所謂大雜誌の創作欄といふ意味に限定するとき、それは確かに寄席と比較して過たぬと信ずる。寄席には寄席の約束がある。寄席藝人には寄席藝人の資格が要る。この資格のないものは、その仲間入をする事は出來ない。

寄席藝人の資格とはどんなものか。

先づ、藝人氣質、お愛嬌、客受に對する敏感、目から鼻に拔ける利巧さ。組合中で幅がきくだけの聲望、所謂押し。とりわけ席主の氣受けがよくなくてはならない。これを以て第一と心得て然るべし。

どんな寄席藝人が客に受けるか。

これは自分のやうな寄席に通じないものには分らないが、面白可笑しい人情ばなしや、氣の利いた小ばなしや、凡てわかり易く、呑み込みやすいものでなくてはならぬらしい。のちにはなにも殘つてはならないらしい。輕薄であればある程よし。小器用であればある程よし。

之れに反して、眞劍であればある程寄席には容れられないのである。肩が凝るやうな御談義は平に御斷りを食ふにきまつてゐる。人間として本當に考へなければならない第一義の問題に觸れる事深ければ深いほど異端視せられる。

然しながらそれでいいのである。かうした文壇があり、今の樣な作家があるといふ事も客觀的事實として、何等かのそれ相當の理由をもつてゐるに違ひない。

私はかうした今の文壇を無條件に肯定して見たい。彼等をしてそのあるが儘にあらしめよ。彼等をして思ふ存分その幸福に舌皷打たしめよ。彼等をしてこの人生及びこの文壇を地上の樂園と讃美せしめよ。ただ、我々をして彼等の幸福の卓の下に蝟集して、そのパン屑のこぼれを爭つて拾ふの醜態に陷らしめるな。それに上越す恥辱と醜惡とはない。

かくて我々は全然違つた道を歩まうとするのである。今の文壇などといふものを全然眼中に置かないで、もつと考へねばならぬ事を考へよう。常に自分の生活に內省を加へ、少しでも正しい道に近づくよう努力しよう。そのため、世に顧みられなくならうとも、敢て恐れないだけの勇氣を涵養しよう。それこそ我々の何よりも第一に心がけなければならぬ事だと私は信ずる。

（「文藝旬報」大正十年十一月所載）

雜感

文壇人の文壇といふ觀念は、最もブルジョア的の觀念であつて、一日も早くこれを絕滅せしめなければならず、又、事實、消滅に瀕してゐると思ふ。

本來、すべての文學的作品を制作する人々は、一樣に文學者である。そして、この人々の努力のあらはれる範圍が、文壇であるべき筈である。

然るに、この近年、文壇といふものが、特殊な、特權階級の意義となつて、あだかもかの寄席の藝人のお株といふが如き有樣となつてしまつた。

かうして、或る黨派に屬し、又は或る勢力ある文學者に附隨する人々の外は、あだかももぐりであり、無鑑札であり、從つて無價値無力のものの如く、文壇から斥けられるやうになつた。不合理極まる事である。

然し、かかる不合理が永久に許さるべき筈はない。そこで、その結果は、この文壇人と呼ぶ特權階級が、大衆とは全然相異る思考法を有する特殊なる階級として、社會に孤立して、民衆的進行の列外に取殘される事となるに至つたのだ。

これが所謂る文壇の現狀である。本誌編輯部の所謂る「轉換期、解體期」の實相である。思ふに、今日はその點で極めて意味多き時であらう。朋黨の力によつて事を成さうといふが如き傾向も、今日がその頂上であらう。また、漸次、凡ての價値の幻影は打破されるに至るであらう。

力ある人は、その爲め努力し、健鬪してほしいと思ふ。たしかに、今日は働き甲斐のある時代であると信ずる。

かの所謂る「文壇悪」(と呼ぶべきものかどうかは知らない、とにかくいろいろの不合理や不正義)に對して、愚かな一靑年が、齒に衣きせぬ論評を加へて、いたづらに由なき敵を作つたのも、もう殆んど十年近い過去となつた。幸ひに、今では、所謂る文壇なるものの權威が、その權威に屈從しないものを排斥する術も、昔ほど容易ではなくなつ

たやうに見える。

祝すべき事である。

自己の個性を保持し、自己の言葉を有する人は、愈々自己の信念に忠實に、愈々自己の生涯の事業に沒頭する事が出來る。私は昨日に比して今日を幸ひに思はずにゐられない。

（「文藝公論」昭和二年十一月號）

ハンマアを以て談れ

毎月毎月、資本家雜誌の上で社會改造論社會主義謳歌論をしてゐられる諸君よ。もう議論は十分です。議論にはもう食傷しました。どうか、實行の方を見せて下さい。手形でなしに——信用のない銀行から振出した手形はとかく不渡の虞れがある——現金を見せて下さい。名古屋で大詐僞をはたらいた明治天一坊事松平慶承でも、いつまでも現金の顔を見せなければ、つひには化の皮があらはれる。堂々たる一代の思想家を、市井の詐僞師に譬へるのは非禮でもあり、不倫でもあるが、毎月毎月、資本家雜誌の上で諸君の果てしも知れぬ長廣舌を拜聽してゐると圖らずも明治天一坊の葵の紋服を想起せずにはゐられなかつたのである。然し、諸君の紋服は葵の御紋ではない、その御紋は葵でなくてハンマアである、プロレタリアの御紋である。今やプロレタリアといふ言葉は、昔の權現樣公方樣といふ言葉ほどの威嚴をもつて響く。そして今や、ハンマアの御紋をつけたプロレタリアの代辯者が、毎月毎月、資本家雜誌で、堂々めぐりの議論をされてゐるのである。議論で決しないことを議論で決しようといふのが諸君だ。ハンマアをもつてフイロソフアイズせよとニイチエは言つた。若し諸君がプロレタリアの代辯者を以て宣稱しようと思へば、よろし

く文字通りハンマアをもつて談るべきである。ハンマアは紋章にすべきでない、手にとつて揮ふべきものだ。

一つの思想は一つの實行であるかも知れない。カントが純正理性批判を書いた時一つの大革命を行つたのである。それはさうかも知れない。だがそれは結局頭腦の上である。ブルジョアの重んずる抽象の世界に於てのみである。哲學は畢竟ブルジョアの産物に過ぎない。プロレタリアの世界では具象でなくては通用しない。坐食白手の徒はプロレタリアの敵である。その憎惡と輕蔑を以て酬いられるのは敢て資本家と異らないのだ。若しその言を疑はしいと思ふのならばこれをレエニンに問へ。またこれを街頭の一プロレタリアに問へ。彼等は毎月毎月資本家雜誌で社會改造論をしてゐる人達を罵倒するにそのプロレタリアらしい齒に衣着せぬ皮肉な名文句の無きに苦しまないであらう。

大正十一年二月(「時事新報」所載)

文學とプロレタリア

上

よく停車場なんかで、カメラを携へて、髪を分けて縮らした若い女を、いろいろにポオズをとらせては、パチンパチンと撮影して得意がつてゐるハイカラな靑年が邪魔さうにもしないで片手に持つてゐる本を、何かと思つて見れば『死線を越えて』である。電車の中で銀行員らしい瀟洒な背廣服に、ハロルド・ロイド式なセルロイドの眼鏡をかけた男が、勿體振つた樣子で讀んでゐる雜誌を、何かと思つて見れば「改造」である。そしてこの「改造」にはプロレタリア讚美論と一緒に、ブルジョア氣分の最も濃厚な創作がずらりと並んでゐるのである。

此頃、ブルジョアの文學とか、プロレタリアの文學とか云ふ事がやかましい問題になつてゐる。だが、私には、さうした差別は、容易に理解する事が出來ない。そして一體、プロレタリアの文學といふものが、果して成立し得るものだらうか。本當のプロレタリアならば、文學などに關與したり、これを鑑賞したりする餘裕があるだらうか。プロレタリアは、抑も文學的教養を享受するだけの資力を何處から得るのだ。また、一册二圓もする雜誌や、三四圓もする本を、やすやすと購求し得られようか。プロレタリアが文學と結び付く時には、もういくらかブルジョアに近づいてゐるのではないか。その日の飯にさへ事缺く者に何の文學ぞ、その點で、私は文學などいふものを一切無用のものと斷じたバザロフ的ニヒリストの心事に同感せざるを得ない。若し、コンミユニズムをその畢生の理想として第三世界主義(?)を主張する人あらば、文學などいふ迂遠なまどろつこいものを尊重したり、プロレタリアの文學を唱道したりするやうな餘計な道草を食つてゐないで寧ろ文學などを全て否定して、ブルジョアとプロレタリアとの差別をなくするために、あらゆる手段を講ずべきである。この種の實際運動に全く何等の貢献もなさぬのみか、むしろその障害になる。私は社會改革には、直接行動の外に途なきを確信してゐるものだ。

下

今の文學書類の讀者は、大部分ブルジョア靑年である事は言ふ迄もない。それはかの停車場で若い女を撮影して得意がつてゐる若い男や、電車内で「改造」を讀む銀行員などによつて代表されてゐるのだ。今の社會改造雜誌が、ブルジョア小說を滿載する理由もまたここにある。卽ち、彼等ブルジョア靑年は、その理智に於てはよく左傾思想を了解し興味を有つてゐるから、社會改造的論文を提供されなければならないが、然し彼等の感情に於ては、プロレタリアの氣分に共感し同化する事が出來ない。ここに於てか、ブルジョア小說を提供する必要があると云ふわけである。そ

れに元來、人間といふものは、陰慘な悲痛な貧困や苦難の訴へを厭忌して、ロマンテイック文學とか呼ばれる骨董的な貴族的な趣味の文學や、輕快々活な樂天的文學や、華族や富豪の華やかな生活を描いた通俗文學やを愛するものである。つまり、文學は、一面から言へば、人間の現實生活に對する不滿から生れ、その悲しい制限の代償をなすものである。だから、プロレタリアの文學がよし成立したにしても、それはブルジョアからもプロレタリアからも、あまり歡迎されないで終るのは必然だ。

私は今のプロレタリア論を見てゐると、日本人特有の共食ひ現象——私がむかし朝鮮にゐた時、その一地方に住み着いた日本人が、直ぐ仲間同志で賣り買ひをやつて生活する樣を目擊したが、丁度あの狀態を想起せずにゐられない。ブルジョア氣分の生活をしてゐる人によつて說かれて(眞正のプロレタリアが文學者をブルジョアと同一視して、之を敵視してゐるのは正に明白な事實である)ブルジョア若くはブルジョア氣分の生活をしてゐる人によつて讀まれる。それだけだ。プロレタリアの代辯者を以て任ずる文學者の生活を支持するものもまたブルジョアである。この事實は、どういふ譯か知らぬが、私に、子供の掌ではね廻つてゐるゴム人形を想ひ出させる。

單行本と同人雜誌

「改造」とか「中央公論」とか云つた風の雜誌は、私は殆んど全く讀んでゐない。さう云ふ雜誌に載る創作を、特に一段立ちまさつた有難いもののやうに思つて讀むやうな人も、今なほ尠くはない事を目擊する。然し、それは丁度、自動車に乘つてゐる人間を、步いてゐる人間よりも、一段立ちまさつたえらい人間のやうに思ふやうなものだ。考へて見れば、それは愚かな全く理由のない事であるのみならず、それは一種の事大思想であり無意識の盲信とも言ふべ

きものであるから、速かにそれを破毀する必要があらう。さうした雜誌の編輯者の見識に對する無意識の信任ほど無意味なものはないのだ。しかも一應は皆その無意味に陷る、そしてその雜誌と作家との名に信用を置いて、これを讀む。そしては失望する。然し、それが何遍も重なれば、たうとう倦いてしまふだらう。

そこからはもう何物も期待し得られないと思ふだらう、私だつてさうである、さう云ふ雜誌に載る創作を、待ちかねたやうにして、讀んで批評するなんて云ふ興味は今は全くない。毎月殆ど同じやうな作品、それについて毎月殆んど同じやうな批評、そんな根氣のいい反覆は堪らない、私にはさうした永遠の囘歸の中から我々の內生活に資するに足るやうな、意味のあるものが、抑もどれだけ期待せられたらうかと疑ふ。

もつとも、それらの雜誌に於て、編輯者にお百度を踏ませてゐる流行作家でも、彼等がまだ無名で、何處の雜誌に持つて行つても、その作品を載せて貰へなかつたやうな時代には、隨分、眞劍な、魂を打ち込んだ、本氣のものを書いてゐる。私はそれ等の價値をも否定しようとするものではない。然し、人間は弱いものだ、直ぐ疲れてしまふ、しかもその時なほ、よく自制して、その藝術的良心を失ふまいとする人は、案外少いやうに思はれる。殊に、大資本家雜誌の大資本は、作家といふあはれな勞働者を籠絡するために、あらゆる魔力を奮ふのを敢て辭しないのであるから。かくて、文壇は茶毒される。

沈滯する水は腐る。流れよ、流れよ。文壇はよろしく激流であつてほしい死んだ泥沼であつてはならない。然るに、資本家雜誌は、文壇を泥沼にしてしまふ。そこでは眞劍な努力、嚴乎たる對人生の態度、外部的の一切の條件を蔑視する非妥協的態度、一言にして云へば眞個の藝術愛、そこから生ずる藝術的價値よりも、他の附隨した藝術にとつては害惡なる外部的條件を尊重するからである。そしてその名聲に對する保守的態度は、新陳代謝を阻止するの結果を來す、從つてそこから生ずる一種の特權意識は、作家の努力精進の念を消滅せしめる。然るに今の月評は雜誌によつ

てその批評すべき作品を選ぶ。これ、月評の意義を疑ふ點で、私は福士幸次郎氏の說に全然同感である。

私は泥沼を愛しない。今の文壇に新しい機運を誘致するものは、恐らく「改造」とか「中央公論」とか云つたやうな無意識の中に文壇の權威とされてゐるやうな商賣雜誌の創作ではあるまい。勿論例外はあるであらうが、大體に於て、私はそこから新しい光明が來ようとは思はぬ。私の好んで讀むものは、反つて單行本と同人雜誌とである。この二つにこそ、常に私の衷心からの期待はかかつてゐるのだ。そしてその理由は奈何。

人生は奇妙な矛盾の上に成り立つてゐるものであるが、文壇にもまた奇異なる矛盾が屢々ある。眞劍に制作しつつある時には作家は毫も酬いられないで、その價値ある作品は雜誌記者の虐遇を受け、闇から闇に葬られる。然るに漸くその眞價を認められて、雜誌記者が陸續伺候して隨喜渴仰するに至れば、旣に作品の方は駄目になつてゐる。これは悲しい矛盾である。

私が單行本と同人雜誌とを尊重するのは、そこに眞劍な努力を見出し得る事を信ずるからである。單行本として現はれる長篇、同人雜誌に現れる短篇、この二つの物質的に酬いられない作品の中から、私は來るべき文壇の基礎となるべきすぐれた作を見出し得ん事を思ふ。人生の凡ての物は或ひは金で計る事が出來よう。藝術上の製作だけは然らず。否、反對に、市價高まるに從つて、その眞價は下落する。見よ、最も高い原稿料によつて書かれる作品が最も無意義無價値である事を。これは悲しい矛盾である。

文壇は行きつまつてゐるとか、作家が疲れてゐるとか、一昨年も去年も、今年も、いつまでも言はれてゐる。然し、文壇は實際行きつまつてゐるか。私から見れば、「改造」や「中央公論」が行きつまつてゐるのだ。「改造」作家や「中央公論」作家が疲れてゐるのだ。「改造」や「中央公論」に載る作品を文壇の最高水準を示すものの樣に思ふのは無智な偏見である。さうした偏見が此二雜誌に作品を出さない作家を此二雜誌作家よりも一段劣るやうに思つたりする。

然し、事實を見よ、曾て文士を酒樓に誘ひて書かしめ居催促して原稿をとる事の手腕を以て聞えた編輯者のゐる雜誌は何であつたか。今日、文士を帝國ホテルに監禁して筆を執らせしめてゐる雜誌は何であるか。かやうな編輯者は文壇の敵である。かやうな文士は藝術の冒瀆者である。そして、かやうにして書かれるものが、どうして眞の藝術であり得よう、どうして文壇の最高水準を示すべき傑作であり得よう。かかるものは、ただ看て過ぎよ。それについて語るものも、また愚人である。

眞の藝術家は酬いられる事最も薄い。また酬いられる事を望んではならない。彼の報酬はただ彼の作品、ただ彼の操守の誇り、それに過ぎぬ、そして今、玄人用語の所謂書き下しの長篇を單行本として出す作家ほど物質的に酬はれないものはない。彼を待つものは永遠の貧窮である。また、同人雜誌は、同人で金を出し合つて自己の作品を發表するものである。それで今のやうに無視されてゐたのでは酬いられないどころの話ではない。しかも彼等はなほ制作する。私がここに藝術愛の直接の證左を見出し、それを尊重しようとするのは果してあやまりであるか、しかも、「改造」「中央公論」の作品を待ちかねたやうに讀んでは文壇の沈靜を嘆ずる人が、單行本と同人雜誌とはきれいに忘れてゐるのはどうした事だ。いやいや彼等は忘れてゐるのではないが單行本や同人雜誌をわざわざ買つて讀んで批評する程自らを空しうして文壇を思ふ氣にはなれないのである。そしてそれは無理のない話である。かくて「改造」「中央公論」の作品だけが永久に榮えるのである。

ひとり私は單行本と同人雜誌とを愛する。

單行本の長篇では、最近に中村武羅夫氏のその量だけでも驚くべき十六卷の大作『人生』が愈々現れ初めた。いろいろの意味から日本人ばなれのした此の大作は、必然的にいろいろの意味から文壇の問題となるべきものである。然し、この大作については、他日もつと落付いた氣持で書き度いから、今日は私は最近の同人雜誌に現はれた諸作品を

批評紹介して、この稿を結びたいと思ふ。
『地上の子』は獨逸文學の研究に、奬すべきものが多く載る。龜尾英四郎氏のエッケルマンの譯の如きは眞に模範的の名譯で、御手洗修氏の淸澄な詩とともに、私のいつも愛讀してゐたものだ、創作では菅藤高德氏と坪田譲治氏とを記憶する。菅藤氏の散文詩風な暗示的な『海のほとりを』や、幼年時代を描いた『母の死と其前後』の如きは今なほ忘れえない。

十月から創刊された「現代文學」は「所謂コンマアシヤリズムに支配されてゐる商品雜誌の弊に陷らず、所謂同人雜誌の眞面目さを以て」進みたいと云ふ意氣からして私の共感を喚ぶ。十一月號の石川淳氏の『銀瓶』は、カトリツク信者で齡不惑を越えても獨身でゐる小學校敎師が、その止宿してゐる八百屋の、のらくら息子に祕藏の銀瓶を盜まれるといふ話で、その鷗外式の作風には、自分として或る不滿もあるし、終りの銀瓶の紛失に氣付いた時の作者の說明が餘りに容體振つてあるのもどうかと思つたが、八百屋の息子の二階に上る前後の極不用意に書いたところに、此人の作家としての旨味はあるやうに思ふ。香川辰二氏高橋邦太郎氏の作は、いづれもやや稀薄で、强い印象を受けるまでには至らなかつたが、なた相當のレヱルには達してゐるものである。

新井紀一氏の『盜難』と『或日の退却行軍』とは、いづれも軍隊生活から材を取つたもので、『盜難』はたつた一つ水筒が足りないばかりに、順ぐりに盜み合ひ、次ぎ次ぎに犧牲者になつて行くといふ、軍隊生活特有の事實を描いてユウモアをにじみ出させ、そこに人間生活に對する一つの暗示を與へてゐるが、「或日の退却行軍」の方が私にはずつと藝術的な感銘を與へた。之は「演習日誌の一節」と斷つてある如く殆んど無技巧に書き流してあるが、然し、一兵卒の眼を借りて描いた行軍狀態の苦澁、その間のユウモア、とりわけ實戰を經て來たと云ふ誇りをもつてゐる中隊長の風貌などは、はつきりと殘る。此人の筆が十分に鍛え上げられてゐて、しつかりした把持力を見せてゐる事は、何

人と雖も承認するに違ひない。

「十三人」は同人雜誌の中ではかなり長く續いて、武藤直治氏、下村千秋氏などの數氏を旣に文壇に送り出したが、最近廢刊するやうに聞いたのが、事實とすれば惜い事と思ふ。「十三人語」などは、同人の誠實な生活態度を思はせて私は好きであつた。九月號に出た柏通明氏の『四十八歳の眞齋』は五十頁に亙る作品で、看守長といふ職務をもつた男の一種特別な生活氣分嫁入前の娘や試驗中の息子をもつた初老の家長の苦勞の多い生活の中の氣分、さうした生活味がよく出てゐる、とりわけ四十八歳といふ年齢をいかにもはつきりと感じさせる。大雜誌に出たならかなり評判になつたらうと思ふ、此人の作をもつと讀んで見たいと思はせるいい作であつた。病氣になつてゐる嫂が死の觀念に脅かされてそのため不快を與へてゐたのが、床上げの祝ひによつてポックリ死んでしまふと云ふ淺原六朗氏の「死」も氣持のいい作だつたが、大戸喜一郎氏の『幸福者の一夜』のひかへ目なおとなしい筆致にも心を惹かれた。その他『純情』や『蜘蛛』や『象徴』や『無名作家』などについても言ひたいが、あまり長くなつたから次ぎの機會にゆづりたい。

同人雜誌はいろいろの困難からして永續し得ない。また同人の多くの努力も、その内面的な効果を除いては、外部的には殆んど酬いられない。私はそれを殘念に思ひこの致し方のない人生の不合理を悲しむ。然し同人雜誌の作品が、現在の流行作家の作風に追隨し、その亞流たるに甘んずるやうな傾向を示してゐる場合には、更にそれ以上に同人雜誌のために悲しまざるを得ない。諸君こそ虛名を尊重する文壇の叛逆者でなければならない。この行詰れる文壇の新局面の打開者でなければならない。この誇りを以て、更に苦悶せられん事を望みたい。

大正十年十一月二十三日――二十五日（時事新報所載）

詩魂禮讚

確かに我等が詩人に要求するものは詩人が己れ自ら
に要求してゐるものである——即ち何よりも先に眞
實性を要求する。

エマスン（戸川秋骨氏譯）

見よ、薔薇の燃ゆるを！
火を消す火を呼べ！
ああ！　火焔吾等と共に來る！
吾等、願ひを抱いて死す。

ハフィス

眞の詩人を知らんとする人に
私はこの書をささげる……

「詩は詩人の性格と生活との投影である。そこで、詩を愛する人は、また、詩人を愛する人である。ひろく詩を讀む人は、自分の愛好の詩人を容易に見出すであらう。人間は誰れでも、好き嫌ひがある、肌合ひのあふ人とあはぬ人とがある。交際上に於いてもさうであるが、讀書の上でもさうである。そして、その好惡は人として止むを得ない事で、また或る場合には、毅然として保持すべきものである。それゆゑ、たとひどんなに世間から賞讃されてゐようとも、嫌ひな詩人を無理に讀まなければならぬ必要はない。その代り、好きな詩人ならば、いくら傾倒しても悔いるやうな事はない筈である。」

「その上、その詩がいかなる背景をもつて、いかなる生活狀態から生れたかを究めてみると更によい。詩人の傳記をしらべてみると、一層よくその人の詩がわかつてくるものだ。それに一人の人の生涯を究めるといふ事は、自分が生きて行く上から云つても、多大の教訓と啓示とを受けるものである。殊に、それが自分と肌合ひのあつた、自分と共通してゐる點の多い詩人であるならば、猶更の事である。」

曾つて、私は『詩を生きる人』といふ感想の中に、かう書いた。

ここに選ばれた詩人のすべてが、世の多くの詩人のうち最もすぐれてゐるといふのではないが、それがいづれも生れたる詩人であり、詩を生きた人であり、そして、多くの意味に於いて魅力ある人々である事は疑ひがないであらう。私自身、これらの詩人に最も心を惹かれ、最も傾倒せずにゐられないのは、また、何よりも、まづそのためである。

そこで、私は自分の愛する詩人のために、熱き讃歌をうたはうとしたのである。彼等の生涯と運命とに對して、私の詩の網をかけようとしたのである。從つて、獨立した研究としては、不行屆きの點も多からう。が、さうした精緻な學的要求には、他の博學な著作があるであらうと思ふ。

篇中、獨逸の詩人が比較的多いのは、自分が平常その國の詩に最も親しんでゐるからにすぎない。佛蘭西の詩人中には、なほ、アルフレッド・ド・ヰニイや、シャルル・ボオドレエルなどのやうな、私自身最も高く評價する、またその眞實性のゆゑに玆に逸しがたい人々があるが、その國の言葉にうといため、殊に前者の如きは、その作品を知る事餘りに尠きがために、自分の知識の不足のゆゑに、わざと避けた。但、その原詩につかなければ詩人を解する事は、絶對に不可能であるとの説は、あまりに極端ではあるまいかと思つてゐる。

この書をかくために、私の參照した書物は、百を超えるであらう。煩はしいのと博識を衒ふやうに思はれたくないのとで、わざとその書目は擧げないが、中でも特に私の負ふところの多かつたのは、ブランデス、キトコオプ、セインツベリ、エンゲル、バアル、シャアプ、フォスレル等の諸家の著作であつた。その他の諸家の名も書中隨所に現れる引用句によつておのづから明かになるであらうと思ふ。ハイネ、及びタイゼからは一部分逐語的に移し

た。殊にハイゼの『ネリナ』は讀者の愛讀を乞ひたいものである。日本語の書物では、ダンテの章に於ける上田敏、柏井園二氏の著作、ゲエテの章に於ける龜尾英四郎氏の譯書、キイツの章に於ける平田禿木氏の譯などである。その他、引用の詩も、すぐれた譯のあるものはすべてそれによる事にして、止むをえないもののみ私自身の拙譯を以てした。(譯者の名前の特に附記されてゐないものがそれである。)これらの事は、茲に特記して、謹んで謝意を表したく思ふ。

この書、禮讃とはいへ、幾分、私自身の批評の加はつてゐるものもないではない。そして、單なる評傳たるにとどまらず、一面、私自身の感想集でもあり、時にはまた、私自身の小説になつてゐるものすらもある。然し、書中ノヷリスの章にも書いた如く、かかる小説がまた一つの批評でもありうる事を私は信ずるものである。

その他の事は、すべてこの書中に盡してある……

見よ薔薇の燃ゆるを
火を消す火を呼べ！

詩人の魂は燃ゆる薔薇であらう、――彼等も火、我等もまた火、燃え盡きるまで燃えるのが、その共通の運命であるであらう……私はこの書の校正を通覽して、幾分、憂鬱な氣持になつてゐる

一九二六年六月

サッフオの悲戀

地中海に突出した希臘の本土は、三方を海に圍まれて、その海には、無數の島が散在してゐる。殊に、その東方の、小亞細亞に面する方は、多島海の名を得てゐるだけに、アポロンの神殿に名高いデロスの島を中心としたキクラデス群島、その東に連なるスポラデス群島などの島々が、砂子(いさご)のやうにばら撒かれてゐるが、更にその東の小亞細亞の海岸に沿うては、レムノス、レスボス、キオス、サモス、ロドス等の島々が横たはつてゐる。

この中のレスボス島こそは、世界最古の女詩人なるサッフオを生んだ幸(さち)ある島である。元來、このレスボス島に住んだアイオリア人は、はやくより音樂と抒情詩とを以て聞えてゐた。後世と異つて、古代にあつては、抒情詩は音樂と離す事の出來ないもので、抒情詩の原名 Lyric が、もと Lyra から出てゐるやうに、抒情詩はリラ琴に合せて唱はれたのであるから、詩人は同時に樂人でもあつたのだ。

リラ琴に合せて唱つてゐるサッフオの壯麗な容姿は、幾多の畫家の手に描かれて、我等の眼に親しいものとなつてゐる。彼女はいかなる容姿の婦人であつたらうか、もとより確實な事は分らない。我等は彼女が希臘風な端麗な、方正な容貌であつたことと、色が白いと云ふよりむしろ淺黒い方であつた事とを知るのみである。

「菫の花のかざしを髮にまじへて、あえかにほほゑみ給ふきよきサッフオの君、おもふことききこえむとすれど、羞(はぢ)はあやにくにわれをままならしめず。」(文藝論集中の上田敏氏の譯による)

おなじレスボスの詩人アルカイオスが、かやうな詩(うた)を贈つて彼女を讃へてゐるのを見ても、彼女がただその歌の譽のみならず、その容姿によつても際立つてゐた事は想像される。そして、この詩人の意味ありげの歌に、サッフオは答

へて次ぎのやうに歌つてゐる。
「君のねがひ望みたまふもの、もし道にかなひて尊きことならば、または、くちに正しからぬ言葉をたくみたまはずとならば、いかでか羞は君の眼を蓋ふべき、あからさまにいひいでたまふべきに。」（上田敏氏の譯による）
かうした贈答は、あだかも我が萬葉の詩人と女詩人との贈答を思ひ起させる。けれども時代は我が萬葉のそれよりも、もつと古いのである。サッフォが世に生きてゐたのは、基督世紀前六百年のころ、あだかも我國の古事記に取扱はれてゐる時代に當るのだから。
サッフォが既にその生時に、いかに持て囃されてゐたかは、かのアルカイオスの歌によつても知られるが、後の希臘人によつては、既にホメロスに次ぐ高い位置にあげられてゐたのである。プラトオンは、彼女をミュウズの列に入れて、第十のミウズと呼んでゐる。その後、彼女の名は世紀から世紀へと傳はつて、希臘の抒情詩の花冠とされるに至つた。
彼女の詩は、そのわづかな斷片の外は殘つてゐない。然し、ウォッツ・ダントンの言葉のやうに、「その不朽の詩句のわづかな斷片によつて、あらゆる抒情詩人の首位に置かれる」のである。
彼女の生涯についても、極めて不確かな傳說しか傳へられてゐない。その傳說の中には、いはゆるレスビアン・ラヴの如き、後世奇怪な意味を附せられた如きものもある。が、彼女の名聲に悲劇的な光彩をめぐらして、後の詩人の感興を限りなく惹かしめるものは、彼女がその愛するものに裏切られて、巖頭より海に投じたといふ傳說である。
その傳說に基づいて、サッフォの名譽と戀との葛藤を描いた最も名高いものは、墺太利の詩人フランツ・グリルパルツェルの悲劇『サッフォ』の一篇である。これは夙にバイロンがその日記の中で激賞した作であるが、我國にも、高山樗牛の『わが袖の記』によつて、かなり一般的に知られてゐるかと思ふ。
「嘲風、グリルパルツェルが悲曲サッフォの一卷を携へたり、熱海より南の方、にしきの浦をつたうて、網代の港に漣

なる所の一角、之を魚見ヶ崎と名づく。嶄然海を抜くこと一百尺。斷崖直に下りて斧もてけづりたらむが如し。ある日われ潮風と共にここに上りてサッフオを讀む。是の女詩人が入水せしと傳ふるリュカデッアの岩はこの魚見ヶ崎のそばにも似たらんかと思ひたればなり。」

こんな風に樗牛は書いた。筆者も曾つて熱海に遊んで、魚見ヶ崎の巖頭に立つた時、ゆくりなくもこの文字を想ひ出で、また、サッフオの傳說を想ひ起した事があつた。けれども、サッフオの運命に萬斛の涙を注ぐあまりに、ひとへにファオンの背信を憎むべくは、我等の年齢は、既に十分長じてゐた。我等はむしろ、彼がこの光榮に繞らされたる貴婦人の寵愛に甘んずるに堪へずして、彼女の傍へに影うすき可憐なる女奴隷のメリッタを、死をもつて愛せんとした男らしさを同感したいと思ふのであるが、また、それだけに、なほさらに、高き譽れに上つた女性の悲劇を——彼女が愛せらるるためには餘りに敬せらるる事の、止み難き人生の約束を——傷ましと思ふのである。

頭にはオリンピアの勝利の月桂冠を戴き、肩には眞紅のマントをかけ、手には黄金の竪琴を持つて、白馬に曳かせた馬車に乘つて、群衆に迎へられて、宛かも凱旋將軍のやうに、意氣揚々としてレスボスに歸り來つたサッフオも、ひとり戀の勝利の冠を戴く事は出來なかつたではないか。

彼女が連れ歸つたファオンは、「私はこの人を愛してゐます。この人を選びました。」とレスボスの人々の前に引き合せたこの美しい靑年は、彼女の數限りない愛の言葉にも、ただ「崇高いサッフオよ。」と答へ得るのみである。

「そのやうな言を。お前の眞心からもつと親しい名は出ないのか。」とサッフオは怨ずる。

「何うしたらいいのか、何う言つたらいいのか。」とファオンは惑ふ。「ペロプの島のはるかな海邊から、トラキアのうねうねとした山々が、麗かなギリシヤの國に連なつてゐる邊まで、クロニオンの手がギリシヤの海に投じた人里はなれた如何なる所でも、アジアの豐饒な麗かな海岸でも、ただギリシヤ人の口が、晴れやかな神の言葉を歌ふやうに話

してゐる所では、どこでも歡呼の叫びを高くあげてゐる」氣高い婦人の愛が、彼を當惑させてしまふ。

然るに彼がサッフオの住居の傍らにある洞窟のほとりで、サッフオの女奴隷であるメリッタと呼ぶ可憐な娘が、家郷を慕うて悲しい身の上を嘆いてゐるのを見ては、あはれと思ふ心が、いとしと思ふ心となり變る。

「サッフオは親切で柔しいから、私が一言いへば身の代金なしに、おまへの身内へなり、父親の許へなり歸してくれる。」とファオンは云ふ。メリッタは默つて頭を振る。そして、

「ああ、それより、私の故里は何處か知らして下さい。」と願ふ。彼女はまだかよわい子供の頃、賊のためにかどわかされて、このレスボスでサッフオに贖はれたのであつた。

薔薇の茂みの薔薇の花、あまりに高すぎて、手の屆かない枝に殘つた一つの花を、「私が手傳はう。」「いいえ、どうか關はないで。」

「では今度こそ――ああ滑る、倒れちまう。」「いや、いや、私が支へてやる。」

枝がメリッタの手からはね上り、メリッタよろめき、ファオンの擴げた腕の中に倒れる。

「ああ、はなして下さい。」「メリッタ。」ファオンはすばやく、メリッタの肩にとくちづける……

花冠も竪琴もなく、質素な身なりをして、サッフオが出てくる。洞窟の中なるミュウズの神を祀るために出て來た彼女は、二人の嬌態を目にしなければならなかつた。

「さつさとお行き」と云つて、メリッタを追ひやつてから、「ファオン。」と複雜な思ひを籠めて彼を呼ぶ。ファオンは云ふ、「怒つてゐるのか。」

「お前はメリッタとふざけてゐた。私は――許して下さい、あの心ない一寸したたはむれが、あの娘の胸にかなはぬ望みをおこさせて、きつく苦しめたくはない」

再び洞窟から出て來たサッフオは、その間にとつおいつして、芝生の腰掛にうとうと寢入つてしまつたファオンの額に、「可愛い裏切り者」の額にそつとくちづける。ファオンははつと目をさまして、腕をひろげ、眼を半ば開いて呟く、「メリッタ。」サッフオは思はず後退りして叫ぶ、「ああ。」

その後、サッフオの嘆き、「弓弦(ゆづる)は鳴つた、矢は當つた、――もう疑ふ餘地はない。」「あの奴隷のためにサッフオを棄てるのか。棄てる、誰れが、ええ、誰れを。」「全ギリシヤの人々が、高い歡呼の聲で彼等の寶として迎へたあのサッフオではなくなつたのか。」「神の仕へに選ばれた人は、この世の人との仲間になつてはならぬ。」「それともあの人をあんなに強くひきつけたあの美しい娘をこの眼から遠ざけたら。」

メリッタが呼びやられる。

「私にこの花環をくれ、お前の記念に取つておかう。」「どうあつても。」「逆つても駄目だ、その薔薇を。」「命をおとり下さい。お助け下さい、神樣。」

ファオンが來る。

「はねつけたと。本當にうまくやつた。あの娘の薔薇は誰れにも取らせるものか。あれは私がやつたのだ。」メリッタ、「泣いてゐらつしやいます。」ファオン、「かまふな、泣いて別な魔法をつむぐのだ。」メリッタ、「御主人樣のお嘆きをほつておけますか。」ファオン、「私も氣を動かされさうだ、だから、さ、いそがう、あの仏蹄がお前のまはりに投げられぬうちに。」

たうとうメリッタを連れて、小舟に乘つて逃げ出したファオンは、百姓達のために追ひつかまへられて、引き戻される。ファオンはメリッタを後にかばつて、「この娘には手をふれさせぬぞ、武器はとられても、防いでみせる。」と云ひながら、サッフオの方へと行く。彼女は祭壇の階段に倒れ伏してゐる。

「サッフオよ、氣高きものとお前は交はるがいい、神々の宴から人間の仲間に下る人は、罰を受けずにはすまぬ。」とファオンは罵る。
「この世のものが得られるとなら、黄金の琴を海の底に棄ててもいい」とサッフオは嘆く。
「お捌き下さい、サッフオ樣、私とこの人とを。」とメリッタは訴へる。
ファオンは更に、「人間には愛を、神々には畏れを、我々には我々の道を與へ、お前はお前の道をゆくがいい。」と云ふ。
サッフオはその最後の言葉で跳び上つて、ひざまづける二人をじつと見、すぐに向き返つて行つてしまふ。その後で奴隷のラムネスが二人をさとす。

再びサッフオが、かのきらびやかな裝ひして、眞紅のマントを肩にかけ、月桂冠を頭にし、黄金の竪琴を手に持つて、嚴かに、また重々しく、圓柱ある廻廊の階段に現はれた時、既にその間にラムネスの言葉に感じて、詫び入る二人の言葉を斥けて、「私に手をふれるな身は神に捧げたもの」と云ふ。
「愛といひ、憎みといひ、その他にはもうないのか、お前は可愛いかつた、今でも可愛いい、この後とてもさうだらう。丁度懷かしい旅の道伴れのやうなものだ、運命のめぐり合はせで短かい舟旅の折り、一つの舟に乘合ふが、岸につけば皆別れ別れの道をたどるのだ——靜かに、お互ひに穩やかに別れよう。」
ファオンの額にくちづけ、メリッタをかき抱いてから、祭壇に近づいた彼女は、岸の高みに上り、兩手を伸ばして、「人間には愛、神々には畏れを、お前方に惠まれたものを樂しめ、そして私を思ひ出してくれ、」と云つて、忽ち岩から海へと身を投ずる……
ファオンとメリッタの驚き、人々の騷ぎ、岸に下つた奴隷のラムネスは、「待て、もう遲い」と叫ぶ、「桂の冠はしぼみ、竪琴は鳴りを止めた、——この世にはあの方の故郷はなかつたのだ。（兩手をさし上げて）神の國へお歸りなされ

た。

サッフオの悲劇はかくて終つた。然し、この悲劇は永遠に新たである。詩人のある限り、詩人に戀のある限り、戀か藝術かの惱みは、その委曲こそは變れ、常に新しく繰返されるであらう。また、神の寵兒であるものは、屢々人間の寵兒である事は出來ない。たとひサッフオの如く世の譽れを凡て得たとしても、ただ一つの心臟を得る事が出來ぬならば……

「この世にはあの方の故鄕はなかつたのだ」我等は屢々この言葉を想ひ起さねばならぬ。(グリルパルツェルの詩句より引くところは、主として龜尾英四郎氏の譯による)

わかきダンテ

伊太利フィレンツェのポデスタ廳――この自由市の最高官廳であつた建物――の中、會堂の祭壇に近い壁上に、わかきダンテ・アリギエリが面影は、今もありありと殘つてゐる。

それはダンテの友であつたジョットオが、フィレンツェの光榮を耀かすために、その市の名譽ある人々の姿を、天國に在る聖者の集ひに描き入れたもので、氣高い基督の顏が上の方に現れ、その下にフィレンツェの紋章をつけた楯を天使の群れが捧げてゐる兩方に、男女の聖者が二列に分れて侍してゐる。その前には、市の大官の一群が立つてゐて、冠を着た二人がこれを率ゐてゐる。この二人の中の一人に接して、右の方に立つてゐる人の姿が、即ちダンテで、手には柘榴を持ち、頭には當時のはやりの風雅な垂帽をかぶつてゐる。

この畫はジョットオが、その大名を揚げはじめた頃の作と云はれて、かのヴサリも、その『ジョットオ傳』中に、彼が寫

生の妙腕をたたへて、その寫生したる人の中、今觀らるべきは、フィレンツェのポデスタ廳のダンテ・アリギエリもその一であると云つてゐるものであるが、その後このポデスタ廳は、罪人の獄舍に宛てられ、はしたなき倉庫に用ゐられて、むかしの誇らはしい壁畫は、あたら白堊をかけられてしまつた。かくて全く世に忘られて、空しく三四世紀を經たが、十九世紀に至つて、熱心なダンテ學者の努力によつて再び發見される事となつた。そして、その後また、この繪は實はジョットオの作ではなくして、その弟子なるタッデオ・ガッディの作であらうと推定されるに至つた。然し、彼が亡師のわかきダンテを寫した畫を所有してゐて、それにもとづいて畫いたものであらうと云はれて、これがわかきダンテの面影である事は、未だ何人からも否定されてゐない。

上田敏氏は、その『詩聖ダンテ』中に、この面影を描いて、「今このダンテの姿にむかひて、諸の思を構ふるに當り、先づ、いたく吾等を動かすは、つよみとやさしみとの一致なり。この顏の線には、女子にみまほしき溫柔もあれど、口元締り、鼻高く、眼に戀の潤ありて、しかもまた愛憎の燃ゆる如く、落つきある口の優雅なるもさすることながら、脣は卑みの影を湛ふ。」と云つて、ボッカチオの描けるダンテ晩年の姿、「色淺黑く、髮も髯も濃く、黑く、縮れて、顏はいつも憂はしく物思ある如し」とあるとひきくらべて、「一生の閱歷、尋ね來れば、彼は終に架上の古書にあらず、秋の夜の燈挑げ盡し、香ひよき衣などひきかけても味ふべし。」と云はれてゐる。

まことに、この滑かな無髯の若姿の、ましてやベアトリチェの色、新伊太利の色と等しく、綠、靑、紅の三色の裝ひの、今は色こそ失はれたれ、みやびやかな裝ひをして、いささかは微笑みの影も見えるかと思はれるこの面影にむかふとき、かの『新生』の、幽麗なる數々の詞章を誰か想起しないものがあらう。

ボッカチオの『ダンテ傳』は、そのわかき日のダンテの戀をかく描いてゐる——

「天は淸美にして、萬の飾もて地を裝ひ、百花靑葉の間に散點して、地微笑むが如き時節となれば、我が都の風俗とし

て、隣々の男女殘らず打ち群れて祝をなす。茲にフォルコ・ボルチナリと云へるは、市民の中にも別けて敬はれし人なるが、五月一日の節莚を祝はんとて、隣家の人々を己が家に招きたり。來客の中には、上に云へるアルチギエリもありて、其時まだ九歳なりしダンテも隨ひ行けり。祝宴の席などには、幼き小兒は父親に隨ひ行く風なりけり。斯くてダンテは宴會の主人の家にて齢同じき數々の男兒女兒に打ちまじり、初の饗の濟みし後は、小兒らしく年に似つかはしき戯に加はりぬ。

さて群れ居る小兒の中に、上に云へるフォルコの小さき娘にビイチェと云へるあり。こは略名にて、ダンテはいつも略せずして、ベアトリチエと呼べり。年は八歳ばかりなりけん、年に比べては最としとやかにて、其の擧動極めて靜に且つ快く、言葉立居ともに年並より落ち着きて控へ目なりき。其の姿と云へば、最と濃纖にて恰好良く、ただ美しと云ふのみならで、淸き愛らしさの充ち滿ちて、多くの人は小天使かと思ひしほどなり。」（柏井園氏の譯による）

これがダンテとベアトリチェとのはじめの邂逅であつた。はじめてではなくとも、ボッカチオの云へるやうに、「愛情を起さしむる力の出でし初なりしならん。」

然し、この戀のもとすゑは、ボッカチオよりも、ダンテ自身に聽かねばならぬ。わかきダンテが心の肖像は、ジョットオ、又はガッディならずして、彼自身によつて書かれてゐるのである。

『新生』は正しくわかきダンテの心の自叙傳である。それは散文と詩とを交へて、その戀のはじめよりかつ物語り、かつ詠嘆した尊き靑春の記念である。まづ、序の一節があつて、次いで、「われ生れおちてよりこのかた、光の空、既に九たび、その大なるめぐりを遂げたる時、わが心の榮ある君は、まのあたりに現はれ給ひぬ。世の人はこの君をベアトリチェとよべども、眞義を知らずしてただいふなり。」（上田敏氏譯）とて、ベアトリチェとの邂逅を語る。このベアトリチェとは、祝福の意ある言葉で、その少女の實の名であつたか、或ひは彼女にふさはしとてダンテの名づけたもの

かは、よしボッカチオの傳はありとも、未だ學者の疑ひを存するところである。

かくて、その後も、ダンテは度々彼の少女を見て、その面影身を離るる事はなかつたが、かの初めて相見てより九年の後、一日、彼女がダンテに會釋したので、そのめぐみを受けたダンテは祝福の限りを得たかの如く思はれて、直ちに一篇のソネットを詠じて、更にその會釋を受けた後に見た幻想を書き記した。この幻想は、後年の『神曲』中の幻想と、數十年を隔てて相映ずるものである。そして、その時のソネットは次ぎのやうなものである。

心も空に奪はれて物のあはれをしる人よ、
今わが述ぶる言の葉の君が傍に近づかば、
心に思ひ給ふこと應へ給ひね、洩れなくと、
綾に畏こき大御神「愛」の御名もて告げまつる。

さても星影きららかに、更け行く夜も三つ一つ
ほとほと過ぎし折しもあれ、忽ち四方は照渡り、
「愛」の御姿うつそ身に現はれいでし不思議さよ。
おしはかるだに、その性の恐しときく荒神も。

御氣色いとど麗はしく在すが如くおもほえて、
御手にはわれが心の臟、御腕には貴やかに
あえかの君の寢姿を、衣うちかけて、かい抱き、

やをら動かし、交睫の醒めたるほどに心の臓、
さゝげ進むれば、かの君も恐る恐るに聞しけり。
「愛」は即ち馳せ走りつ、馳せ走りながら打泣きぬ。（上田敏氏譯）

この上田博士のあまりに巧緻に過ぎた譯の後に云ふとも、信じ難い事であらうが、原作はダンテの處女作として、未だ後年の獨自の色彩をあらはし得てゐないと云はれてゐる。もつとも、それが十八歳の作としては、聲調、寓意、共に見るべきもので、かつ羅典語ならずして、伊太利俗語の新調である事も注意すべく、同じ新派の詩人グイドオ・カヴルカンティに贈つて、その同情深き返歌を得て、これより深く相交るに至つたと云はれる。

それよりして、ダンテの愛の思ひは、いやさらに深み行つたが、しかもそれは世のつねの、外なる行ひに出るものではなかつた。ただ遙かに、高き星を仰ぐが如き、稀れなるあこがれであり、氣高き崇敬であつた。

その間に、『新生』には語られてゐないけれども、ベアトリチェはおなじフィレンツェの市民シモン・デ・バルデイの妻となつたが、まもなく、若くして神のふところに歸ることとなつた。その後のダンテの悲嘆を、ボッカチオは次ぎの如く語つてゐる――

「最も美しきベアトリチェは、二十四歳の暮に近き頃、天地を治むる者の御心により、此世の苦痛を離れ、生前の德操に報いらるべき光榮に移りぬ。ベアトリチェ世を去りし爲に、ダンテは哀傷と涕涙に沈むこと深く、彼に接する親戚知己は、死のみ獨り能くダンテの悲嘆を止め得べしと思ひたり。ダンテが人の慰藉に耳をかさざるを見ては、彼等は死の遠からざるを期したり。夜尙ほ晝の如く、一時も呻吟、歎息、滂沱たる涙なくして過ぎしことあらず。雙眼は湧き出

づる泉となりて、かほどの涙何處より發するか怪しむ人多かりしほどなりき。——泣涕と、中心に感じたる痛苦と、自愛することなかりし爲め、ダンテは一見殆んど蠻夷の如き姿となりぬ。肉瘦せ髯のびて、全く故と相似ず、其の友人のみならず、彼を見し人は此の相貌に接して憐みの情を動かさざるはなかりき。(柏井園氏の譯による)

ダンテ自身はその感情をまづ、次ぎの句もて始まるカンツォーネに託した。

あはれ、今、「愛」の路行く君たちよ、
止りても君よ、世の中に、
われのに似たる悲をする人ありや。
願はくば、わが言ふところ、聞き終り、
さもこそと、憐み給へ、
われこそは憂愁の宿なれ、戸なれ。(上田敏氏譯)

かくて、ベアトリチェを悼む歌が、長く、數多く續く。實に、『新生』一卷は、はじめの一篇を除く外、すべて彼女を失ひて後の詩篇を集め、その思ひをば叙したものである。そして、これが一二九〇年ダンテ二十五歳の事であつた。そして、その幽婉なる一卷の最後のソネットは、次ぎのやうな言葉にはじまる——

いとひろく運りゆく天輪のかなたにまで
わがむねよりいでて歎きはのぼりゆく、
愛がこのなげきをひそめ入れし
あたらしき智恵にたかく惹かれて。(久保正夫氏譯)

「このソネットを書き終りて後、いとも奇しき幻を得たり。ここに意を定めたるやう、かの君の事、今よりも、なほ、ふさはしく叙べ得むその時までは、このいと福ひなる者をしかしかせざるべしと。かの君のいとよく識り給ふらむ如く、われは、このあてもて、いそしまむ。われに數年の餘命あらむこと、若し、萬物の命の主なる大君の御意に適はば、いかなる女人についても、未だ書かれざりしことを、かの人について記さむこそ、わが望みなれ。かからむのち、わが心、天かけりて、かの君、卽ち、とこしへに讃美すべき御顏を目守り奉る福ひなるベアトリチェの榮を眺めむこと、無量慈悲なる大神の御意にてあらなむ。」（上田敏氏譯による）

この言葉をもつて、『新生』は終つてゐる。そして一二九五年のころ、世に公けにされたものであらうといふ。そして、この結末の一節は『神曲』の意匠すでに此の時ダンテの胸中に、やや形をなしてゐた事を推定させてゐる。

然し、『新生』の時代の過ぎるにつれて、ダンテは漸く若き日の優雅と詩情とを離れて、古典の學にいそしみ、哲學に慰藉を求むると共に、漸く世間的生活に入り、妻をめとり、公人として立つて、政治上の舞臺に上るに至つた。そして、十年の後には、フィレンツェの六議政の一人となり、かのグェルフォ、ギベリイネ兩黨派の激烈な黨爭の渦中に投じて、つひに一三〇二年に至つて、フィレンツェを追放され、詩人は此時より死に至るまで、つひにフィレンツェに歸る事を得ず、ヴェロナ、ルニギアナ、ラヴェンナ等に諸侯の客となり、つぶさに流竄の苦を嘗めつつ、かの大作『神曲』に筆を進めたのである。

『神曲』はもとより規模廣大、また、詩人がつぶさに世態を眺め、人生の苦楚を味ひての作であるから、かの『新生』の時に於けるやうに、ひとへにベアトリチェの榮光を讃へむがためとの單純なる目的には止まらぬのであるが、しかも、ベアトリチェは今なほ、彼を導く愛の星かげとして、煉獄篇（淨罪界）の第三十歌に至つて、詩人ヴィルギリウスの手を離れたダンテにあらはれる。今上田敏氏の『詩聖ダンテ』中の梗槪によつて掲ぐれば、

「われは歷々見たり、朝ぼらけ、東はさうびの色、西天靜冽の影涼しきに、日の面、朝霧の幕に和らぎ、永く眼のえ眺むるを、之と同じく天人の手より投げられ、うちそとに散らばふる花雲の胸より、橄欖にほはせたる白雪の帕(おもぎぬ)かいやり、燃えたつ朱(あか)の衣(きぬ)のうへ綠袿(みどりうちき)の女こそ現れたれ。」

「この時天女の梵音尊く、哭くこと勿れ、また哭く勿れ、噫ダンテと、幼年のおもひ人、青春の焔をみておのが一生のおろかしきに恥ぢらひ、とかくは伏目がちなるに、眺めよ、われこそは、われこそはベアトリチェなれ。」

これよりダンテはベアトリチェの導きを得て、天堂に上るのである。地獄、煉獄は理性の師ヴィルギリウスに導かれ來つたが、天堂は既に理性の至りえぬところ、ただ、ベアトリチェが愛の手のみの、よく導き得るところだからである。

かくて、ダンテの愛は全うされ、また、ダンテの生涯も完うされる。それは、後のゲエテが久遠女性（Das Ewige Weibliche）の思想に外ならない。が、これがその一生のたて絲となつて、かくも鬱然と相照應する事は、驚くべき事である。實にダンテほど、その生涯を完璧たらしめた人はない。その際に我々は、彼の死後、人々の求め得られなかつた『神曲』の最後の十三章が、その遺子ヤコポの幻想に、亡父みづから現れて、壁の隱し處を敎へた爲め、漸く發見されて、ここにはじめて首尾を完うしたといふ事實をも想起するのである。

ゲエテの最後の戀

今ひと度び、われは愛し、熱中し、
幸はれんとねがふ——されど喧嘩なしに。（ハイネの最後の詩集より）

詩人もいつかは老を迎へねばならない。

若くして逝ける詩人は、永遠の若さを、後人の記憶に止める事の幸福によつて、その夭折の不運を償はれるであらう。

けれども、幸か不幸か、詩人のすべてが みな早世の運命に委ねられはしない。多くの人は、その心の中の詩人を夭死せしめて、詩を失つた形骸のみをもつて生き殘るのである。が、中にはまた、永遠に若い心を失ふ事なく、詩人として老いる惠まれた人もないのではない。

生れたる詩人は、その心老いる事なく、若々しい感情をいつまでも保つてゐる。然し、悲しい事には、その心の若さも、その外貌に現はれる老を隱す事は出來ない。

いつしか老人の姿が身にまつはつてくる。しかも、その白頭にも拘はらず、なほその胸に、再び若き日の情熱を感ずるならば、——もとよりそれは靑春のそれとは、全く違ふ種類のものであるかも知れないが——それは果して幸福であらうか？ いかなる葛藤が、そこには展開しなければならぬであらうか？

私はいつであつたか、暫く前に、島崎藤村氏の『蠅』と題する感想を讀んで、この老年の詩人の若さといふ事に考へ至らずにはゐられなかつた。

島崎藤村氏は、生れたる詩人の一人である。氏は既に既に、遠い昔に、その詩作の筆を絕たれたのであるが、然し、氏の最近の感想などを見ると、私はそこに依然として詩を見出すのである。形式に囚はれた、詩形をもつて書かれたものならば凡て詩であると思ひ、散文の形で書かれたものは、決して詩でないかのやうに感じもし、言明もしてゐる詩人もあるやうだが、私はさうした詩人は、果して眞に詩を解する人であるかどうかを危まずにはゐられない。眞の詩人は、小說を書かうとも、評論を書かうとも、依然として詩人でなければならぬ。

そこで私は今日もなほ、島崎氏を詩人と呼ぶことを喜びとするのである。三四年前であつたか、島崎氏の誕辰五十

年の祝賀會のあつた折りに、私は初じめて氏にお目にかかつたのであるが、鬢髮霜を交へつつも、なほ青年の如く輝かしい眼をしたこの老詩人に對した時――五十歳と云へば、歐羅巴では未だ壯年に屬するであらうが、我國では、既にかうした祝賀會の催されるのでも分るやうに、老年の端緒と見られてゐる――私はその生涯の戰ひを偲んで、畏敬の念を抱かずにはゐられなかつた。

この考へ深い人の言葉は、常に重々しく私の胸に響く。

「『蝿』とはアクセル・ルンデゴオルといふ人の書いたハイネの最後の戀物語から來たもので、ストリンドベルクがそれに因(ちな)んで『わたしの蝿』と呼び呼びしたといふその最後の愛人のことを指した言葉である。」とかう書き出して、島崎氏はかの瑞典の大作家の最後の愛人であつたファンニイ・ファルクネルといふ婦人によつて書かれた『ストリンドベルクの最後の戀』について談られてゐる。

「この老年にもまた春がめぐつて來る。……しかしその春は私達が讀まずに想像したよりも、もつと靜かなものだ。もつと自然なものだ。」とも書かれてゐる。また「いづれにしても私はあの『蝿』によつて、もつと老年といふものを見直さなければならない。もう長い命でないといふ老人にも、もつと血の氣の通つた人を見つけねばならぬ。」とも書かれてゐる。

『ストリンドベルクの最後の戀』は既に譯本が世に出てゐるから、それについては、私自身何も言及しない。また、この「蝿」といふ言葉の出典であるハイネの最後の戀――エリイゼ・クリイニッツへのそれについては、私は既に前にも書いた事があるし、それに、その戀の悲劇性の核心は、單なる老齢といふ點に存するのではないから、それもここには述べぬ事として、今ここで私が書きたいと思ふのは、ゲエテの――あの「永遠に戀する人(デル・エヲイゲ・リイベンデ)」と呼ばれたゲエテの最後の戀である。ゲエテが幸福な、豐かな戀の人であつただけに、それによつて、我々は老年といふ姿をはつきり眺

め、且つそれが示す悲劇的意義を容易に看取する事が出來ると思ふからである。で、私は主としてヰトコオブによつて書いて見ようと思ふ。

一八二一年、七十二歳の老詩人は、マリエンバアドで、――それはボヘミアにある有名な温泉場で、夏になると浴客が集まる事は、丁度我國の伊香保や箱根などと同じ事である――その三人の娘を連れたフオン・レフェツォオ家の未亡人と出會した。その娘たちの中には、丁度ストラスブルヒの寄宿舍を出たばかりの十七歳になるウルリイケもゐた。彼女は碧い眼と褐色(とびいろ)の髪とをした可愛らしい娘で、ゲエテは直ちに、彼女の若さと無邪氣さによつて惹き附けられた。

彼は『ヰルヘルム・マイステル遍歴時代』の第一卷を、彼女に贈つてやつた。けれども、十七歳の娘には、勿論それを讀み味ふ事は出來なかつた。

「わたくしにはよくわかりませんわ、」と彼女は云つた、「もつと前に準備をしてからでなくては……」

するとゲエテは答へて云つた。

「さう、あなたの云ふ通りだ、あなたは自分で讀まなくてもよろしい、私が話してあげるからね」

かう云つて、詩人は一つの腰掛の上に彼女と一緒に腰をおろして、『ヰルヘルム・マイステル』の內容を、何時間もかかつて、彼女に話して聞かせた。

ゲエテはその晩年の詩集『ディワン』(西東詩集)に盛られたあの自由な快活さをもつて、この若い娘を愛してゐた。そしてその『ディワン』の詩句の中では、彼は自分のことをいろいろと戯れてゐるのである。

次ぎの年、彼が再びマリエンバアドに赴いて、ウルリイケの傍にあつた時は、前よりも一層眞劍であり、情熱的であり、一向(ひたむ)きであつた。マリエンバアドからイーゲルの方へ出發する時、彼はかの『アイオルスの竪琴』の『愛の苦みの對話の歌』を書いた。

晝もわれには心に染まず、
夜、灯の入るときもなぐさまず。
われに殘れる唯一の快樂はただ
汝が優しき姿を永遠に新しく思ひ出づること。（大意）

けれども、三度目に、一八二三年の夏に、長く一緒にゐた時に至つて、ゲエテの愛着は、悲劇的な激烈の度合にまで高まつた。

ゲエテは七月二日に、レフェツォオ夫人と娘たちとは十一日に、マリエンバアドに到着した。彼等は相接して住んだ。五週間といふもの、毎日々々、一緒にならない事はなかつた。獨逸と墺太利とから來た無數の客人が、その仲間に活氣を添へた。その中には、ワイマル大公のカルル・アウグストもゐられたのである。

八月十七日に、レフェツォオ家はカルルスバアドに移つた。これは我國の浴客が、伊香保から鹽原へ、箱根から修善寺へと移るやうなものであらう。ところが、その二十五日には、ゲエテも彼の人々の後を追うて、カルルスバアドへ移つて行つた。

今その再會の日に、われ何をか望む、
この日のいまだ閉せる蕾の花に。
汝に開くは天國か、はた地獄か、
いかに定まりなくも心は搖げるぞ……（大意）

ゲエテはそこで、レフェツォオ家の人々の住んだおなじ家の二階を借りた。日は樂しい賑はしさの中に過ごされた。遠足、茶話會、舞踏會、そんな催しもあれば、また家の前のベンチに腰をかけて、靜かな饒舌をしたり、夜には一緒

に集つて書物を讀んだりもした。溫泉地の習ひは何處もおなじ事で、そこでは一層人々は親しくなり、初めて會つた人も十年の舊知の如くなるのであるが、ゲエテとレフェツォオ家の人々とは、今や既に三年越しの舊知である。

ゲエテはその所謂「可愛い小さな娘」の謙遜な、そしてしとやかな尊敬の念を喜んだ。その喜びは、彼の誕生日、彼の所謂「公然の祕密の日」に至つて、その絶頂に達した。その日、彼はレフェツォオ家の人々と、或るそれに繋がる家族の人々と一緒に、エルボオゲンの方へ遠足して、それを誕生日の祝ひとした。

九月の五日に、つひに別れの日が來た。

これより早く、一八一八年に書いた『ディワン』の詩句によつても分るやうに、ゲエテは壯年時代から老年時代への推移を、深く感じてゐた。彼は手紙の中で、時々戯れに、自分を呼ぶのに「祖父さん」をもつてした。彼の一人息子のアウグスト夫婦には、既に愛兒の――ゲエテには孫の――ウォルフが生れてゐたのである。

「私は既に老いた、それゆゑ自分の遭遇した一切の事を、ただ歷史的に觀察し得るばかりである。」と彼はミュルレルに宛てて書いてゐる。また、リイメルに向つては、「靑春はヴライエテエト（多樣性）とスペチフィカティオン（細目）のみであるが、老年はゲネラ（總體）を、ファミリアス（全種屬）を有つてゐる」と云つてゐる。

ところで、「この感情から反省への、ヴライエテエトからゲネラへの推移が、ゲエテにとつては戰ひなくしては經過しないほど、重要なものであつた」と、キトコオプは云つてゐる。彼に從へば、ウルリイケへの戀が、その戰ひの端緒であつたやうに思はれる。

「感情と反省との、感覺と觀念との直接的な融合一致は、彼の性質と世界觀との最高の表白となつた。壯年の成熟の後にも、彼はその二つを、豫覺した調和の中に結合する事は出來なかつた。そして今や老年が來た、そしてまづ彼をこの調和から引出さうとした。無意識な渴望と不安とが、彼の心を搔き廻しはじめた。」

一八二三年、まだマリエンバアドに赴かない前に、彼は既にシュルツに宛てて「今度の滞在はどれ位續くか分らないが、私の豫定では、八月の初めまでそこにゐて、それからエーゲルからして、山々や土地や、さまざまの人間の狀態を直接目撃するのにある。抽象や絕對の中に自分を失はぬためには、外部の感覺的の刺戟ほど私に必要なものはない。」と書いてゐる。

この氣分で、彼は再びまたウルリイケに出會つたのである。彼の中の男子は、老年の敷居の前で、彼の身を引止めてゐた。彼はそこから振返つて、ウルリイケの靑春を眺めて、彼が今や諦念しなければならない人生のなべての美と調和とを、彼女の中に見出したのである。彼女の傍らで、彼は再び生々しい生命の中に還るやうに思つたのだ。

けれども、別れの時は來た。かくて、彼はまた更に老いるであらう、そして、ウルリイケは愈々靑春の花盛りへ伸び出づるであらう。そして、この悲劇的な心の爭鬪の中に、彼の存在の避け難い凋落の恐怖の中にあつて、ゲエテはつひに狂氣とも見れば見られる奇矯な決心をかためるに至つた。七十四歲の老人として、十九歲のウルリイケを妻にめとらうと考へたのである。かくて、大公カルル・アウグストは、彼に代つて、レフェツォオ夫人に、その希望を申出でられた。そして、ゲエテ自身はウルリイケの承諾に對する不安な希望を抱きながら、マリエンバアドを立去つたのである。

かの名高い『マリエンバアドの哀歌』はこの時の作で、彼はこの詩の中にウルリイケに對するその感情を殘りなく投げ込んだのである。この詩については、エッケルマンの『ゲエテとの對話』中に注意すべき記事がある。それはまた、當時のゲエテを偲ばしめるよすがにもなると思ふから、ここに掲げて見よう。幸ひこの立派な書物は、龜尾英四郎氏のすぐれた譯があるので、氏の譯を拜借させて頂く。

一八二三年十月二十七日の條に、エッケルマンがゲエテを訪うた時である。

「ゲエテは私に灯の前に坐るやうに要めた。私に何か讀んで聞かせたいと言つた。そして彼はまあ何を見せてくれたらう、彼の最近の、最愛の詩、彼の『マリイエンバアドの哀歌（Elegie von Marienbad）』であつた。

私はここでこの詩の內容に關して數言を附加しなければならない。ゲエテが此度上述の溫泉場から歸るとまもなく當地で評判が立つた。彼は彼地で姿も心も共に可憐な一人の若い婦人と知合つた。そして彼女に對して激しい愛情を持つた。浴場の並木路で彼女の聲がすると、彼はいつも素早く帽子を取つて、女のもとへ急いで下りて行つた。彼は時さへあれば女の側にゐた。彼は樂しい日を送つてゐた。まもなく、別れるのが彼に非常に苦しくなつた。そして、彼は斯ういふ熱情的な狀態で非常に美しい一つの詩を作つた。けれどもそれをお守りのやうに大切にして誰れにも見せなかつた。

私はこの評判を信じてゐた。それは彼の身體の丈夫な點だけでなく、彼の精神の創造力や、彼の心の健全な若々しさに全く相應しかつたからである。（中略）

彼はその詩を自筆の羅馬字で、丈夫な犢皮紙の上に書き、紐を以て赤いマロキン皮の表紙の中に綴ぢこんでゐた。そこでその體裁を見ればすぐ、彼がこの原稿を他の何ものより大切にしてゐるのがわかつた。

私はその內容を非常なよろこびを以て讀んだ。そしてその一行每に世間の評判の確かなことを知つた。」（龜尾英四郎氏の譯による）

同じく十一月十六日にも、この詩の事が出てゐる、その時、ゲエテは自分でから云つてゐる。

「その詩をマリイエンバアドを出發するとすぐに書いた。それでまだあそこで經驗した水々しい感情の中にひたつてゐた。朝の八時に最初の宿場で第一節を書き下ろした。かうして馬車の中でたえず想をめぐらし、宿場につく每に心にまとまつたものを書き下ろして、夕方にはすつかり書き上げた。だからどことなく直截なところがあり、一氣に流

しこんだやうだ。云々」（鍋尾英四郎氏の譯による）

ここで『マリエンバアドの哀歌』の譯を掲げればいいのだが、まだその譯されたものがないし、私もそれを譯出する勇氣はないから見合せておくが、それが老年の詩人の作とも思はれない情熱的なものである事は、エッケルマンがバイロンの影響を云々してゐるのでも察せられるであらうと思ふ。（附記。最近この哀歌には三浦吉兵衛氏の譯ある事を知つた。）

かうして、三ケ月以上も、殘酷な、殆んど壓倒的な危機が續いた。ワイマルの友人達は、危惧の眼をもつて、詩人の樣子を見戍つてゐた。「かやうな人物の心內の分裂を目擊するのは、彼の靈魂の平衡が、學問によつても藝術によつても、激烈な戰ひなくしては、恢復し得ぬ事を見るのは、いかに傷ましい事であらうか」とミュルレルは云つてゐる。

元來、音樂の世界はゲエテにとつては、本質的に親しみのないものであつたが、それが今やまた彼の慰藉として現はれた。ワイマルには、十月から十一月にかけて、ゲエテがマリエンバアドで相知つた波蘭のピアニスト、シマノフカ夫人が滯在してゐた。この夫人と毎日相會して、彼女の靈妙な演奏に耳を傾け、彼は心を解き放たれるやうな恍惚感を味はつた。

彼女の出發を、深い苦痛と、甲斐なき淚と、長い無言の目送とによつて送つた後の夜から、ゲエテは五週間にも亙つた重い病に襲はれて、彼の肉體もまた、悲劇的な危機へと引き入れられたのである。

十一月二十四日、ゲエテの友ツェルテルがワイマルに來た時には、彼はゲエテの中に、「愛を、青春のあらゆる苦惱を伴うた殘らずの愛を、身うちに持つてゐるやうに見える一人の人間」を見出した。

その苦惱の悲劇性は、ゲエテを破碎するやうに見えた。そして、ワイマルの隣者はゲエテの死を豫期したのである。けれども、彼は隣者の驚異した程の恐ろしい勢ひをもつて、再び快癒の方へと向つた。十二月の中頃には、彼はすつ

かり晴れやかな病癒えたる人であつた。

かくてゲエテは、戰ひに打克つた。彼は今や自然の法則を確認して、意識的に反省へ、ゲネラへと向ひ、感覺的のものの中に、もはやただ觀念の表白をのみ求めるに至つた。彼はただ個々の事物に於ける諦念のみならず、總體的のそれへと攀ぢ上つた。今や彼は「永遠の相の下に」世界を見ようとするのである。「意識的な一面性をもつて、ゲエテはこの完全なるスピノザの諦念にまで達せんと圖るに至つたのである。」と、キトコオブは論じてる。「ウルリイケへの戀に於いて、彼は感覺的世界の永遠に若い多樣性と直接性を諦念しなければならなかつたが故に、また同樣の葛藤をこれを限りに避けようと欲して、この諦念を容赦なく完うするやうに自らを強ひたのである。」

その時から、ゲエテはあらゆる旅行を避けるやうになつた。年を越えても、ワイマルの市から外へは出ず、曾つては長期の滯在を常としてゐたイエナへさへも、四年間も行かなかつた。「宮廷へも特別な大事件の生じない限り出頭しなかつた。彼は自分の家へ、その「僧院」へと閉ぢ籠つて、その彫版(スティッヒ)や、蝕鏤版(エッチング)や、筆蹟や、貨幣や、メダルや、プラケットや、マジョリカや、鑄型(アブギュッス)や、鑛物や、植物や、化石や、骸骨やの研究材料に取繞らされて、自然科學や、藝術や、哲學や、神學や、歷史や、地理や、その他の學問に心を專らにし、身を委ねた、丁度未だ若返らない前のファウスト博士のやうに。

ゲエテの運命となつたウルリイケは、ひとりゲエテの求婚を辭退したのみならず、生涯結婚をしなかつた。丁度彼の青年時代の戀人であるフリイデリイケ・ブリオンと同じやうに。彼女は結婚しなかつたばかりでなく、マルク領の修道院の尼になつて、後にはボエミアにある彼女の家の所領地なるツリブリッツに、靜かな愛された保護者として、一八九九年に、九十五歲の高齡でなくなつたと云ふ。

ゲエテほど幸福な詩人はないと云はれてゐる。然し、その幸福なゲエテも、老齡はこれを奈何ともする事が出來な

かつた。詩人がいかに青年と等しい熱烈な愛を注がうとも、愛せられる少女は、老詩人の名聲と白髪とに對する畏敬の念をこそ抱いても、無邪氣に愛を返さうとは思はない。畏敬と愛とは常に並立する事の出來ないものであるから……

そして、これがストリンドベルクの悲劇であつた、イプセンの、ラスキンの、その他多くの老偉人の悲劇であつた。ゲエテに於いても、それはかくばかりの悲劇性と心的葛藤とを示したのである。ここで私は、ゲエテ自身の言葉を思出さずにはゐられない。

併し仕方が無いでは無いか、
あるなら云へ。
誰でも長生はしたいと思ふが、
歳を取りたいとは思はぬ。（片山孤村氏譯）

青年は青年らしく、老人は老人らしく……それこそいい智慧である。東洋人は長い苦闘と努力となしに、はじめからそれをよく知つてゐた、よく行ふ事が出來た、かくて陶淵明は「菊を東籬の下に採り、悠然として南山を見る」のである……然し、かく云へばとて、私は老齡の日の情熱について、否定的な見解を示さうとするのではない。また、たとひそれを企てたとしても、私には未だその資格がないのである。自らそれに對する斷定を下し得る日は、ずつと遥かな未來の事である……

狂詩人ヘルデルリン

草の中に靜かに横たはつて、底ひ知れず靑々と澄んだ空を眺めながら、果て知れぬ夢の中にと沈んで行くのが、孤

獨な子供の樂みであつた。

　わが童なりしとき、
　神は人々の叫びより、
　その鞭よりわれを救ひ給ひき、
　われは心善く安らかに
　森の花もて戲れき、
　空吹く微風は
　われと戲れにき。

かうして彼は、世間と人間とから遠ざかつて、自然とのやさしい親しみの中に人となつた——ヰルヘルム・ディルタイが、「月光のやうなやはらかな材料から織りなされたこんな詩人の生涯が、他の何處にあらうか」と云つたフリイドリッヒ・ヘルデルリンの生涯は、かくしてはじまるのである……

　ささやく森の
　妙音に育まれて、
　われは花の間に
　愛を學びぬ。

まことに、森のそよぎと花の間で、自然の愛を學びつつ……ゆるやかな丘と、靜かな谷との間で、ネッカル河畔のラウッフェンで……

河畔には古い寺院が聳え立ち、河中の岩の上には古城の塔が流れる水に影をゆだね、葡萄畑の連なつた對岸にも古

い僧院の建物が見える。その遠い山々の眺め、流れる河のさやけさが、彼のあこがれを誘ひ、彼を一人の詩人に育て上げた。

二歳のときに父は亡せ、母が再縁したニュルティンゲンの市長だつた繼父も、九歳のときになくなつて、彼は母の手一つで生ひ立つた。彼の女性的な性質も、幾分かうした事情に影響されるところがあつたかも知れない。

まことに彼は、この世の戰ひにとつては、あまりにやさしく、あまりに弱い人であつた。外貌も、性格も、あまりに女性的であつた。

ヘルデルリンは美しかつた。

彼がその同級生の前を往き復りしてゐるのを見ると、彼等はアポロンの姿を見るやうに思つたと云はれる。

貧しい家の子であつた彼は、デンケンドルフの僧院附屬初等學校に入り、嚴しい世の法則に相面しなければならなかつた。

テュビンゲン大學でも、給費生として、折り返された白い襟のついた黑い上衣を着て、古い僧院の中に起居して、不自由と屈辱との中に學修した。

後に哲學者として世界的名聲を博したヘエゲルと、シェリングとが、彼の學友であつた。同年輩であつたヘエゲルとは、とりわけ深く交つて、互ひに啓發し合つた。

やがて、この仲の善い三葉草は、離れ離れになる日が來た。

早熟のシェリングは、早くも哲學者としての第一歩をあげて、浪漫主義の哲學者としての光輝ある道を踏みはじめた。

ヘエゲルは長く瑞西其他で不遇の日を送りながら、思索につとめて、つひにかの大なる哲學體系を組織するに至つた。

我がヘルデルリンは、それとは全く違つた道へと上るのである。

一七九三年に、彼は試驗に合格して、母の望んでゐた牧師の職に就く事も出來たが、更に大きな豫定が、彼を故郷の狹い範圍(クライス)から、靑いエーテルの波の上へと導いた。

彼はひとまづ家庭教師か、說教師になつて、しづかにその詩人的開展を待たうとした。あだかもよし、彼の尊敬するシルレルが、彼が生涯の間、特別にやさしい、殆んど弟の兄に對するやうな傾倒を有つてゐたこの『ドン・カルロス』の詩人が、病を養ふために、シュワアベンに歸つてゐたので、彼は極めて幸福であつた。

シルレルはその女友シャルロッテ・フオン・カルプ夫人の家庭教師に彼を推薦した。マイニンゲンに近いワイテルスハウゼンの彼女の別莊で、一年あまりの間、彼は落着くことが出來た。然し、世故に長けたカルプ夫人の親切が、反つて彼を窮屈がらせ、その敎へ兒の學業に適せぬ性格が彼を惱ました。

つひにヘルデルリンは、カルプ夫人の許を辭して、イエナに出た。

それは空想的な詩人の一つの冒險であつた。當時の彼の窮迫がいかに甚だしいものであつたかは、一日わづか一囘、かたばかりの食事をするのみであつたと云ふ事によつても想像されよう。

そのうへ、當時のワイマル、イエナに於けるゲエテ、シルレルのオリンピッシュな雰圍氣の中に生活する事は、ヘルデルリンにとつては、幸福とならなかつたのだ。大なる精神の直接的の近傍にあつた事が、彼を高める代りに、彼を壓倒した。

「ヘルデルリンのやうな天性にとつては、ゲエテ、シルレルの時代は、藝術的文化の頂上は、危險とならねばならなかつた」とキトコオプも云つてゐる。

シルレルはこの內氣な同鄕の靑年のために、能ふ限りの好意と盡力とを吝まないで、その小說『ヒュウペリオン』斷篇を自分の雜誌に揭げたり、書肆に紹介したり、物質的の援助を與へたりした。が、ヘルデルリンの精神狀態の危險

に瀕してゐるのを見て、この靑年を十分救ふ事の出來ぬのを頗る憾みとした。
シルレルの鋭い眼は、ヘルデルリンとジァン・パウルとを同列に見て、その危機を危ぶまずにはゐられなかつたのだ。しかも後者が身を完うする事を得たのは、「その天賦のユウモアのためであつた」とはキンデルバントの觀察である。然るに、そのユウモアの緩和劑はヘルデルリンには、全然缺けてゐたのである。ジァン・パウルが幾分スタアン風なユウモリストとして、感傷と諧謔との奇異なる混交によつて、散文生活の平野に開展したのに反して、古代希臘への甲斐なき思慕に終始したヘルデルリンは、徹頭徹尾の抒情詩人であつた。その小說に於いても、戲曲に於いても。

一七九五年の夏の初め、彼はニュルティンゲンなる母の許に歸つて來た。この二年あまりの間に、彼の大きな不幸が、自己の才能の限界のための絕望的苦鬪が橫はつてゐたのだ。それは傷つけられた虛榮心でもなく、充たされぬ名譽心でもなく、自己の無力の確認、自己の實際とその理想との間の撞着の意識に外ならなかつた。かくてまるで破船者のやうな慘めた樣子で歸つて來た姿を、人々は幽靈を見るやうに思つた。その年の終りまで、母の許にあつたが、その家庭の窮乏は、長く彼の安息を許さなかつた。

やがて、友人シンクレエルの斡旋で、彼はフランクフルト・アム・マインの銀行家ゴンタルトの家に、家庭敎師として入る事になつた。ここで、彼の前には、更に大いなる運命の深淵が開かれた。

ゴンタルト家で、彼は住み心地のいい隱れ家を見出した。その敎へ兒たちは、敎へやすい素質を有ち、また彼によくなづいた。が、とりわけその子供たちの母親——二十七歲になる女主人のズゼッテ・ゴンタルトが、彼の心に大きな魅力を投げかけた。

彼女は詩人クロプシュトックと親交のあつた人の娘で、高雅な美貌ばかりでなく、こまやかな敎養とすぐれた才能とを有つてゐた。然るに、彼女の良人は、les affaires avant tout!（商賣第一）を標語とする事務一點張りの極めて散文的

な實業家であつた。彼のいかなる人物であつたかは、彼が彼女の死後直ちに再婚したのでも知る事が出來よう。從つて、彼女は不幸であつた。

ズゼッテはヘルデルリンに於いて、その求めてゐた善き友を見出した。全く、二人はその性質も生ひ立ちもよく似てゐたのである。そして、ヘルデルリンは彼女によつて、これ迄いかなる女性からも見出し得なかつたものを見出した。彼女の中に、その日頃あこがれてやまぬ古代希臘の美と理想とを完全に具現した「われと聖なる緣ある姉」を――ズゼッテはヘルデルリンよりも一つ歳上であつた――見出したのである。

彼は彼女に與へるに、プラトオンがその『饗宴篇』の中で、ソクラテスに愛の眞義を敎へしめた、あのミネルヴァの不思議な巫女ディオティマの名を以てした。

互ひの理解と同感と愛との中に、幸福な日がしづかに經つて行つた。その間に、ヘルデルリンはその『ヒュウペリオン』の稿を進め、更に情劇『エムペドクレエスの死』の構想をも立てた。

一七九六年六月に、ズゼッテが佛蘭西軍の侵入を、ヘルデルリンと彼女の子供たちと一緒に、カッセル並びにドリブルヒの溫泉に避難した時の三ケ月が、この戀の花時であつた。

その後、だんだんとヘルデルリンの友人に書いた手紙には、その不幸を歎く聲が高まつて行く。彼はその無限の憧憬と、有限の世界の桎梏との間に轉々して、苦悶しなければならなかつた。

彼のズゼッテへの戀は、純粹に精神的なものであつたが、それはだんだんに、危險な、破壞的な威力を振ふものとなりはじめた。

第三者の口からその嫉妬心を挑發された主人のゴンタルトは漸次狂暴になつて行つた。彼はヘルデルリンを罵つて、家庭敎師は雇人にすぎぬ、何等要求を提出する權利はないと辱めたり、詩人が妻に詩を朗讀して聞かせてゐるのを妨

げたりした。

つひに一七九八年に、ヘルデルリンは、自發的に、その三年間住み馴れたゴンタルトの家を見捨てた。それから、彼の止む事なき漂泊がはじまつた。ストウットガルト、ハウプトヰイル――何處にも彼の安住の地はなかつた。ピイゼが、「ディオティマと共に彼の生涯は止んだ」と云つた通り、彼の上には、來るべき最後の内部的の豫覺が、暗い憂鬱が重たく蔽ひかかつた。

一八〇一年の秋、ヘルデルリンは、ボルドオにあるハムブルヒの領事の家に、家庭教師の職を得た。そのクリスマス時分に、彼は出發したが、途中で旅行劵の事などで抑留されたり、いろいろの困難に遭つて、翌年の一月の末に、やつとボルドオに着いた。

母に到着を報じた手紙には、その途中の終りを「美しい春の日に」歩いた事、「オーヴェルニュの雪の降り積つた上で、荒涼たる嵐の中で、氷のやうに冷めたい夜を彈丸をこめたピストルを傍らに置いて、粗末な寢臺の上に」眠つた事を告げてゐる。「その後なほ一回、復活祭前の頃に、母の許にとどいた手紙があつたきりで、その時から、彼の消息は全く絶えてしまつた。

その六月の中旬に――突然、ヘルデルリンは思ひがけなくも、慘めな、乞食のやうな姿になつて、まがふ方なき狂氣の姿で、家族のもとに歸つて來たのである。

この完き精神の錯亂が、抑も何に基づくかは、かれを推測する外はない。その旅行劵で察すると、ヘルデルリンは五月十日にボルドオを發つて、六月七日にシュトラスブルヒを通過した事は確實である。そして、そこからその荷物の一部をストウットガルトに送り出してゐるところを見ると、その時までは、まだ本來の狂氣は發してゐなかつたと思はれる。

多分、燃えるやうな烈日の下を、佛蘭西から獨逸へとさまようた事が、この發病の直接の理由であつたらうと推せられてゐる。それゆゑ、キトコオプは、これを形容して、「アポロンから打たれて」と云つてゐる。

その六月の下旬に、ディオティマの死去の報が、狂氣の詩人の許に屆いた。一說によれば、彼はボルドオでズゼッテの病氣の報を得、巴里でその死去の報を得たであらうとも云はれる。然らば、彼女の死報をもつて、彼の狂氣の直接の原因と看做し得られるであらう。とまれ、彼が佛蘭西に漂泊して行つた時、その苦痛の量は既に充ちたのであらう。

キンデルバントも、「獨逸の生活からの逃避とともに、彼の生涯の上に暗黑がひろがつた」と云つてゐる。

キンデルバントによると、ヘルデルリンを以前知つてゐた詩人マッティソンが、一月、かつてのアポロンの姿が、痛ましい、襤褸のやうな姿で、狂氣のあらゆる徵候をもつて、彼の部屋に入つて來て、恐ろしい冷たい聲で、ただ一語、「ヘルデルリン」と吐き出すやうに云つて、また消えてしまつた事を、後に驚愕をもつて談つてゐると云ふ事であるが、全く今度こそ、彼は全く字義通り影であり、幽靈であつた。

わづか十年足らずの詩作生活の後、三十臺のはじめに、「人生のみち半ばにして」萬事は休したのである。

爾來、三十六年間の狂氣——

ゲエテ、シルレルの時代は過ぎて、浪漫派の時代も過ぎて、更に新しいものがその光榮の舞臺に上り、かくて、人變り時の移る世の片隅に、彼は生なき生を生き續けるのだ。

彼は一八〇七年の夏、療養所から放たれて、テュビンゲンの慈善家であつた或る指物師に引取られて、ネッカルの河岸に沿うた、綠野と河流と遠山の見渡される家の角なる部屋を與へられた。そして、はじめの間は、時折り狂暴の發作もあつたが、のちには歌をうたつたり、橫笛を吹いたりして、靜かに、しかも不幸ではなく、日々を過してゐた。

そして、指物師の歿後は、その寡婦によつて看護されて、七十三歲で、はじめてその故鄉なる天に歸り、完全に自然

と合一した。
ビイゼはヘルデルリンを、彼よりも生活力に於いて遥かに立ちまさつてゐたクライストと同樣に、時代の犧牲者と看做してゐる。また、キトコオプは、「ヘルデルリンは、地上の眼をもつて、あまりに深く永遠の光の中を見入つた。死ぬべき耳をもつて、あまりに近く無限の諧調を聞き入つた、人間の口をもつて、あまりに大膽に神の祕密を啓示した」と云つて、これを彼の破滅の理由と看做してゐる。

ヘルデルリンの遺作は、讃歌風の高揚せる多くのユニイクな詩篇の外に、小說『ヒュウペリオン』と劇詩『エムペドクレエスの死』の斷篇とに過ぎない。けれども、それは年々より高き評價をその國の評家から受けてゐる。彼はゲエテ、シルレル時代の希臘思慕の浪漫的代表詩人として、かの大家等の異敎傾向に反して、基督敎的情操の抱懷者として意味を有つてゐる。

彼の『ヒュウペリオン』斷篇では、この惱みの世にあつて、あらゆる別れたものを一つにし、あらゆる惱めるものを鎭め、あらゆるディスハルモニイを解くもの——死のみがひとり勝利であり、解決である。かくて、『ヒュウペリオン』は、死への、自然への復歸への醉讃歌をもつて終つた。人間をも愛をも、哲學をさへも疑ふもの、彼の最後の救ひは、諦念による自然への愛であつた。そして、自然のふところから出た彼は、ふたたび自然のふところに歸つたのだ。

「音樂的抒情詩人」とキトコオプは彼を評した。ヘルデルリンは靑年時代から音樂に傾倒してゐた、彼はヴァイオリンも、ピアノも彈いたが、とりわけ横笛を巧みに吹いた。

「彼の書いた各頁は音樂であり、各行は內部のリズムから湧き上る」のである。然し、彼自身はその中の最も纖細な樂器であつた。人生のあらゆる不諧音は、彼の心のやはらかな絃を、より烈しく顫はせて、つひにはそれを斷絕せしめずには措かなかつた。ヒュウペリオンの運命の歌を見よ。

おんみらはかのやはらかなる空をふみて
光の中をぞただよへる、霙き精靈！
光りかがやく神々の氣は
いとかるくおんみらにぞ觸るる、
あだかもいみじき女性のたくみの指が
聖なる絃に觸るるごとくに。

眠る幼兒のごと、運命も知らず、
天なるおんみらはただよひて、
つつましやかの蕾の中に
きよくまもられつ、
ふかきおもひは花咲きて
萎るるHなく、
幸はは〈れし眼は
しづかにぞ澄む、
永遠にくもることなしに。

されどわれらは何處(いつこ)にも
いこひやすむことをゆるされず、
惱みの子なる人間は
このひと時よりかのひと時へと
目さきも見えず、
かつまろび落ち、かつ消ゆるのみ、
あだかも水の岩より岩に
投げられていつかはつひに
底知れぬ淵に消え去るがごと。

ノヴリスの青い花

「ノヴリスは一七七二年五月二日に生れた。彼の本名はハルデンベルヒである。」私はかくハインリッヒ・ハイネをして語らせようと思ふ。「彼は肺患を病み、この病のためになくなつた或る若い婦人を愛した。彼が書いた凡てには、この悲しい物語の息吹(いぶき)がかかつてゐる、彼の生涯はただ一つの夢のやうな消滅にすぎなかつた、そして彼は肺患のために、一八〇一年に死んだ、その二十九歳の年齢と、その小説とを完うする前に。この小説は、その現在の形では、一つの大きな比喩的な詩の斷片にすぎないが、それはダンテの神曲同樣に、地上と天上との一切の物を記念する筈であつたのである。有名な詩人のハインリッヒ・フオン・オフテルディンゲンが、この小說の主人公である。我々は彼をかの古き

ワルトブルヒの麓に横はつてゐる好ましき小都市、アイゼナッハに於ける靑年として見る。このワルトブルヒでは、既に最大の事件が、然しまた最も愚昧な事件が生じたところである。即ち、ルウテルが聖書を飜譯し、また若干の愚かな獨逸主義者が、カムプッ氏の憲兵法典を燒却したのである。この城砦に於ては、また、曾つてかの歌戰さも行はれた。その折りの詩人達の中には、ハインリッヒ・フオン・オフテルディンゲンもあつて、匈牙利のクリングソールとともに、この詩作に於ける危險な競爭に參與したのである、そしてその作品は、マンネスの集の中に收められてゐる。この歌戰さの敗者の頭は首斬人の手に落ちる事になつてゐて、テュリンゲンの伯爵が、判者であつた。今やそのワルトブルヒは、彼の後代の名聲の舞臺は、主人公の搖籃の上に、意味深く聳えてゐる。そして、ノヷリスの小說の冒頭は、上述の如く、彼をアイゼナッハの父の家に於いて示してゐる。「兩親はもう横にたつて眠つてゐる、壁の時計は單調な拍子を打つてゐる、がたがたいふ窓の外には、風がざわめいてゐる。時折り部屋は、月の光に明るくなる。

靑年はその寢床の上に落着きなく横たはつて、見知らぬ旅人とその物語の事を考へてゐた。「こんな云ひ難い渴望を私の心中に呼び起したのは、寶のせゐではない」と彼は自分に云つた、「私にはあらゆる貪慾は遙かに遠い。けれど、その靑い花を私は見たいのだ。それが絕えず私の心に横たはつてゐて、その外の事を私は考へる事が出來ない。私はまだこんな氣持になつた事は一度もなかつた。まるでずつと昔の事を夢みるか、他界へと眠り入つたかのやうな氣持だ。なぜなら、これまで私が生きてゐた世界では、誰が花なんぞに頓着するだらう。そして、一つの花に對するこんな不思議な情熱は、私はこれまで聞いた事がない。」

こんな言葉をもつて、「ハインリッヒ・フオン・オフテルディンゲン」は始まつてゐる、そしてこの小說には、至るところに、その靑い花が輝き包うてゐる。この書物の中の最も奇怪な人物でさへも、まるで我々がずつと昔、既に親しくしてゐたかのやうに、馴染深く思はれるのは、不思議でもあり、また意味深くもある。古い記憶は眼醒める、ソフィア

さへもまことに見慣れた容貌をもつてゐる、そして、我々が彼女と一緒に散歩をしたり、樂しく愛撫をしたりしたあの山手欅の並木路が記憶に浮んでくる。けれども、その凡ては、半ば忘れられた夢のやうに、そんなにおぼろ氣に、我々の後に横たはつてゐるのだ。

ノヷリスのミュウズは、ほつそりした色の白い少女で、靑い眼と、ヒヤシンスのやうな金の捲髮と、微笑む唇と、左の頸に小さな赤い黒子をもつてゐた。私はノヷリスの詩のミュウズとして、「オフテルディンゲン」の入つた赤いモロッコ皮の金縁の書物を、彼女の美しい手の中に見た時に、始めて私にノヷリスを敎へてくれた、あの少女を考へるのである。彼女はいつも靑い着物を着て、ソフィアと云つた。ゲッティンゲンから幾驛遞か離れたところに、彼女はその姉の、驛遞局長の妻のところに住んでゐた。その姉といふのは、氣さくな、肥つた、赤い頰をした女で、そのぎざぎざになつた糊のこわい絹レエスによつて城砦のやうに見える高い胸をもつてゐたが、この城砦は然し難攻不落なものであつた。この婦人は德のジブラルタルであつた。それは働き好きな、家庭的な、實際的な女であつた。ただ然し、彼女のたつた一つの樂みは、ホフマンの小說を讀む事であつた。ホフマンに於いて、彼女は彼女の頑固な天性を動かし、こころよい興奮に移す事の出來る男を見出したのである。彼女の靑白い、ものやさしい妹は、それに反して、ホフマンの書物を見ただけでも、不愉快な氣分になつて、何氣なくそれに手を觸れたばかりでも、顫へ上るのであつた。彼女は含羞草のやうにやはらかだつた、彼女の言葉はそんなに匂はしく、そんなに淸らかに響いた、そして、それを綴り合せてみると、詩の句になつた。私は彼女の云つた多くの事を書き留めておいた、それは不思議な詩である、全くノヷリス風で、ただもつと靈的で、もつと消え易いものである。私が伊太利へ旅立つために、彼女に別れを告げた時に、彼女が私に語つたこれらの詩の一つは、とりわけ私には好ましいものであつた。イルミネエションの行はれた秋の園の中で、最後のランプと、最後の薔薇と、野生の白鳥との間に對話が開かれる。朝霧は今や立罩めて、最後のランプは

消え、薔薇は散り、白鳥はその白い翼をひろげて、南の方に飛び立つた。

ハンノオヱル領には、澤山の野生の白鳥がゐて秋になると温かい南の國へ旅立つて、夏にはまた我々の方へ歸つて來る。彼等は冬の間をアフリカで送るものと見える。なぜなれば、我々は一度、一羽の死んだ白鳥の胸に、一本の矢を見出したが、それをブルウメンバッハ教授は、アフリカ人のものだと斷定したからである。あはれな鳥よ！　胸に矢を受けながらも、彼は北の古巣へと、そこで死なうとて戻つて來たではないか。けれども多くの白鳥は、こんな矢を受けて、その旅を果す事が出來なくて、大方、燃えるやうな沙漠の中に力なく取り殘されるか、または、今も翼をぐたりと垂れて、埃及のピラミッドの上にとまつて、北の方を、ハンノオヱル國の涼しい夏の巣をあこがれ望んでゐる事であらう。

一八二八年の晩秋に、私が南の國から歸つて來た時に（しかも、胸に燃えるやうな矢を受けて）私の道が私をゲッティンゲンの附近に導いた、私は馬を換へるために、かの肥つた女友達、驛遞局長の妻のもとに立寄つた。私は彼女を長い事見なかつたが、この人の善い女は、大變變つてゐるやうに見えた。彼女の胸はやつぱり城砦に似てゐたが、それは既に奪取されたそれであつた。稜堡は開放されて二つの主塔は、垂れ下つた廢墟にすぎず、一人の番兵ももはや入口を見張つてはゐなかつた。心は、堡砦は破られたのだ。馭者のピイペルから聞くと、彼女はホフマンの小説に對する興味さへも失つて、今では寢床に入る前に、一層餘計に火酒を飲むといふ。それはまた一層手輕な事である。なぜなれば、火酒は人々が自家に於てすら常に備へておくものであるが、ホフマンの小説は、それに反して、四時間もかかるゲッティンゲンのドイエルリッヒ貸本屋から取寄せねばならぬからである。馭者のピイペルは、小さな男で、その上まるで酢(す)をあふつて、それですつかり縮んだやうに酸つぱく見えた。私がこの人間に驛遞局長夫人の妹の事を訊ねると、彼は、「マドモアゼユ・ソフィアは、追つつけなくなられませう、今でももう天使(エンゼル)そつくりでさあ」と答へた。い

かにそれは上品なものであつた事だらう、酸つぱいピイペルさへも、彼女が天使であると云ふのだ！　そして、彼はその長靴を穿いた足で、ぶんぶん飛んでくる羽蟲を追ひながら、この事を云つたのである。曾つては笑ましい白色であつた驛舍は、その女主人同樣に變化して、病氣のやうに黄色くなつて、そしてその壁には、深い皺が寄つてゐた。中庭には壞れた馬車が横はつてゐて、馬糞の山の傍らの棒杭にはずぶ濡れになつた眞赤な馭者の外套が、乾してあつた。マドモアゼユ・ソフィアは、上の窓のところに立つて、本を讀んでゐた、そして私が彼女を見上げた時に、私は再び彼女の手の中に、モロッコ皮の表紙の金縁の本を見出した、それは再びノヷリスのオフテルディンゲンであつた。彼女はやつぱり繰り返し繰り返しこの書を讀んでゐたのだ、そして彼女はそこから肺患を讀み出したのだ、彼女は輝かしい影のやうに見えた。けれども、彼女は今靈的な美しさをもつてゐて、その目撃は私の心を最も傷ましく動かしたのである。私は彼女の蒼白い痩せた兩手を取つて、彼女の青い眼をぢつと見入つて、つひに彼女に問うた、「マドモアゼユ・ソフィア、お加減はどうですか？」――「ええ、いい具合ですわ」と彼女は答へた、「そして、今にもつとよくなりますわ！」そして彼女は窓のむかうの家から遠からぬ小丘の新しい墓地を指さした。このあらはな丘の上には、たつた一本の小さな見窄らしい白楊が立つてゐて、その枝には僅かばかりの葉がまだかかつてゐた、樹は夕風の中に、生きてゐる樹のやうではなく、樹の幽靈のやうに動いてゐた。

この白楊の下に、今、マドモアゼユ・ソフィアは横はつてゐる。「そして、彼女の殘した記念（かたみ）は、赤いモロッコ皮の金縁の書物、ノヷリスのハインリッヒ・フオン・オフテルディンゲンは、今現に私の書卓の上に横はつてゐる。そして私は、この章を書くために、それを利用したのである。」

この靈活なハイネの文章は、その儘、美しい詩として讀む事が出來る。これは彼の卓拔な批評『浪漫派』中の、ホフマンとノヷリスとを比較論評した一節で、ホフマンと火酒とを點出したのは、ここに譯出しなかつたこの章の前半

に照應させるための彼の技巧である。マドモアゼユ・ソフィア其人も、もとよりハイネの小説に外ならない。が、それはノヴァリスの詩人としての特質を明確にするには、極めて適切な案出ではあるまいか。

ノヴァリスのソフィアは、まことは、ゾフィイ・フオン・キュウンと云ふ。ノヴァリスが知つた時、彼女はまだ十二歳の少女であつたけれども、大變早熟で、怜悧であつたので、彼女は二十三歳の靑年に、あだかも一人の處女の如き牽引力を及ぼしたのである。彼女の容貌は氣高く、大きな表情に富んだ眼をもつてゐた、その氣高さは、ノヴァリスの如き詩人ならぬ人々からも、天女と呼ばれた程である。しかも彼が全人格を打込んで愛したこの少女は、僅か十五歳で死んでしまつた。若しゾフィイが永く生きてゐたならば、世間的な平凡な女と思はれるやうになつたかも知れない。が、彼女の夭折は、ノヴァリスの頭の中に、彼女を完全に理想化して、眞に天女のやうに思はせたのである。ゾフィイは今や、彼のミュウズ、彼のベアトリチェ、彼の理想の象徵となつた。

ゾフィイが死んだ時、ノヴァリスは絶望のあまり、自分も一緒に死なうと思つた。そして夜になると、彼女の墓の畔りに行つて、深い冥想に沈みながら、曉を迎へた。そして、深い悲哀の籠つた日記を書いた。その日記には、毎日、ゾフィイの死後何日と記された。

今、その頃の日記の一節を掲げて見よう。

「五月五日、ゾフィイの死後四十八日。朝、いつものやうに君を想ふ。散策す。途中心地爽かにして冷靜なり。我は今、更にすぐれ、更に深遠に到らむとするが如し。深夜、我はさながら生けるが如き君が横向きの面影を目にしたり。特長ある身振りと服裝にて、我は容易に君なるを知りしなり。夕暮、何事につけて、しみじみと君のことのみ思ひ出でぬ。神は今に到るまで、いとやさしく我を導けり。今より後もまたしか爲したまふべし。

五月十日、ゾフィイ死後五十三日。食後園に出でて心地よき散歩す。天氣麗かなり。君のこといとど思ひ出ださるる

に、花を摘みて、君が墓に詣づ。我はいと冷靜なりしかど、涙なほ頰を傳ひぬ。ややしばし墳墓にすわりゐしに、夕の鐘鳴り響きぬ。晩餐の後、またしても心動かされて、その席にして、激しくも打ち泣きぬ。」

この氣分のもとに、彼はかの『夜の讃歌』を書いた。そして、彼の死へのあこがれは、歴史的な基督教の信仰と結びついて、基督とゾフィイとは、一にして二、二にして一となつたのである。今も神祕家(ミスティケル)として重んぜられるノヴァリスの信仰は、もともと異端的な傾向をもつてゐた。

ゾフィイの死んだ一年の後、ノヴァリスはその心の傷も稍や癒えて、鑛山監督フォン・シャルパンティエの女(むすめ)ユリエと婚約した。ユリエはゾフィイよりもずつと年長の處女であつたが、ノヴァリスには、ゾフィイの再生のやうに見えたのである。この觀念は、やがて彼が稿を起した小說『オフテルディンゲン』の中にも表白されてゐる。

オフテルディンゲンは、かのワルトブルヒの歌戰さの詩人ではなくして、實はノヴァリス自身であるところのこの靑年は、その見知らぬ旅人の話に聞いた靑い花——それは完全な滿足、一切の幸福の象徵に外ならない——をたづねて、遠い旅に出る。そして、かのクリングゾールの娘のマティルドの眼の中に、つひにそれを見附けるのである。そして、ゾフィイに外ならないマティルドは、オフテルディンゲンを殘して、溺れ死んでしまふ。ゾフィイ死後の悲嘆、『夜の讃歌』の情調、そして再びの漂泊の後に、死の國から離れて、彼は一人の神祕的な、不思議な女性を愛するやうになる、チュアーネと呼ぶその少女が、——ユリエ・フォン・シャルパンティエを想起させる——マティルドの再生と思はれる。

ゲエテの『ヰルヘルム・マイステル』のあまりに世俗的な事に、換言すれば、詩が現實に屈服してゐる事にあきたらなかつたノヴァリスが、詩の神格化(アポテオゼ)を志して書いたこの小說は、最後に、一つの深奧な比喩となり、神韻縹渺たる夢幻境に入つて、夢が世界となり、世界が夢となる。オフテルディンゲンは、ノヴァリスの言葉を借りて云へば、「詩人中の詩人となる」のである。けれども、ノヴァリスは、その生涯とともに、その小說をも、空しく未完のままに捨てなけれ

ばならない。彼はその婚約の女をも殘して、胸の病のために死んでしまふのである、わづか二十九歳で……

私はこれを書きつつ、若くしてみまかりし一人の哲學者を念頭に置いたのである。私が想ひ起さずにゐられなかつたその人は、『聖フランシスの小さき花』の譯者である久保正夫君に外ならない。彼が未だ一高にあつた時に、私は偶然、一人の文學者の書齋で、彼と知合になつた。ロマンティシズム——殊に獨逸浪漫派に對する愛が、同年配の二人を接近させた。私は彼と書翰を往復し、その招きによつて、駒込の奥にあつた彼の家を訪ねた。有名な漢文學の大家である兄のもとにあつた彼の書齋には、彼のゑがいた水彩畫があり、彼の奏でるヴァイオリンがかかつてゐた。それらの修得のために、おのおのその師のもとに通つてゐる事をも、その時私は聞いた。けれども、久保君はそのために書物を讀む時間を失ふやうな事はなかつた。その事は、君の豐かな文學上、並びに哲學上の知識によつて知る事が出來るのであつた。

君は殆んどあらゆる——と當時の私には思はれた——文學に通じてゐた。が、タウレルやエックハルトの如き中世の神祕家より、ストリンドベルク、ペラダンの如き近代の改宗者に至るまで、その興味の中心は、宗教的文學に、神祕主義の方面にあつたやうで、就中、セント・フランシスは君の愛好の聖者で、君はその時、既にヨェルゲンセンの『聖フランシス』を譯してゐたと思ふ。(その外にも、君はまだ澤山の譯稿を持つてゐた)で、ノヴァリスの話も、勿論二人の間に屢々取交された。君は『オフテルディンゲン』を愛好してゐた、また『斷想』をも。ノヴァリスは醇乎たる抒情詩人であるけれども、また哲學者としても重んぜられてゐるが、それは主としてこの『斷想』によるのである。

當時の貧弱な屋根裏の自炊生活者であり、不完全な文學の徒弟であつた私は、かうした君の生活と知識とに對して、殆んど崇拜に近い感情を經驗した。そしてある時、君がその詩稿と、小說の草稿とを示してくれた時、私のその感情は更に一段高められたのである。それらの幾分は、第一高等學校の校友會雜誌に掲げられて、私もその二三册を君に贈

られて今なほ所持してゐる筈だ。そして、それらの作品は、極めてロマンティックな、中世的氣分と、幾分近代風な感情との不思議な混淆を示してゐたやうに思ふ。殊に、私の注意を惹いたのは、その新しい、殆んど完全に歐文化せられた文體であつた。とにかく、その内容の意義は姑らく措くとしても、かうした君の努力だけでも私を驚かすには十分であつたのだ。

その後、私の身の上に變動が起つたのと、君が京都に赴いたのとで、二人の交際は打絶えてしまつた。近年、私はある書肆の好飜譯を求めるに會して、ふと當時の君の努力の數々を思ひ出して、舊稿の飜譯もあらばと、遙かに書を京都なる君のもとに致して懇望すると、君は久濶の辭とともにダンテの『新生』の譯を送つてくれた。けれども、その時分には、君は最早以前のやうな詩作には耽る事なく、專ら純粹の哲學者風になつて、更に大學院に入つて、より精緻な思索を續け、ナトルプなどを譯してゐたやうである。かうして私はまた、長い事君の消息を聞く事がなかつた。ところが其後偶然にも、私は君がもはや此世の人でない事を耳にした。それは君がみまかつたずつと後であつた。が、私は事の意外に驚いたのであつた。

私はノヷリスを思ふとき、かの私が君の才能と生活とに對する嘆賞に包まれてゐた頃の君の風丰を想はずにはゐられない。ノヷリスはかの主の膝にやすむ事を許された聖ヨハネの面影があつたと云はれる。久保君の當年の面影は、そのノヷリスをさながらのやうに、當時の私には思はれたのだ。おなじく廣く高い額、おなじくまろやかな顔——ただノヷリスの如く「殆んど透明な」代りに、君はむしろ色の淺黒い人であつたけれども。それで、私は嘆賞の念からして、或時、

「君は何處かノヷリスに似てゐますね」と君に云つた。すると、君は少しはにかんで、

「あんなにガイスティッヒだといいんですが……」と云つた。

しかも當時、私は君がノヴァリスの如くそんなにも夭折すべき人だとは夢にも思はなかつたのである。君の死を知つた時、私はこの既に忘れてゐた對話をゆくりなくも思ひ起した。

今、私は久保君を思ふと、自分が君を知ること、ノヴァリスを知る程にも至らなかつた事を思はずにはゐられない。そして、今はまた知る道もない。然し、久保君が別に纒つた業績を殘す事が出來なかつたにしても（彼の研究の未だ發表されぬものがあるかも知れないが）、そのセント・フランシスに關する飜譯だけでも、君が我々よりよく生きん事をねがふもののために寄與したところは、決して輕少ではない。そして、君の多くの青春時の記念は、一人のロマンティケルの面影を懷しく思ひ偲ばしめるであらう。それを思ふと、私は君と共に讀んだフランツ・ブライの『ノヴァリス』の最後に置いた「第三帝國の殿堂は遲々として建設される。その土臺にロマンティケルは第一の石を置いた。そしてその上に、ノヴァリスは彼の血を一杯充たした盞杯をうつして云つた、これは私の酒であると……」といふ言葉を想ひ起すのである。

これをもつて、この一文を結び、そして、それを久保正夫君の靈に捧げて、その記念にしたいと思ふ。

シェリイの愛の哲學

一八二三年、八月十四日。

伊太利ピサの海岸。

そこに、三人の男が立つてゐた。

彼等は目を擧げて、前に横はる眞蒼な海の、眞夏の日光に輝く波を眺めやつた。

ゴルゴナ、カプラヂ、エルバの島々が、そのきらめく波の間に、美しく繪のやうに浮き上つた。彼等のうしろには、アペナインの山なみが、鮮かに、滑かな肌を、くつきりと靑空に高めてゐる。その三人の男は、トリロオニ、リイ・ハント、そしてバイロン卿である。彼等は今日しも、その水死した友人の――我がパアシイ・ビッシュ・シェリイその人の――死骸を火葬しようとするのである。

それは美しい日であつた、壯麗な眺めであつた――

彼等はその周圍の壯麗た風景と、その足もとの砂中に橫はる靈魂なき一つの肉體とを思ひ合せて、暫く沈默を守つてゐた。

シェリイがその新造のヨット、エーリエル號に乘つて、レリチからレグホオンに行つて、ハントの一家に會つて、彼等をそのピサに借りた家に移らせて、再びレグホオンに歸り、それから友のヰリアムスと二人、レリチをさして出發したのは七月八日の午後であつた。

エーリエル號が出港してから、望遠鏡もて友の船を見送つてゐたトリロオニは、その友の水夫が、水平線上に現れた雲や、海上を立罩めた靄を指して、彼に注意した。シェリイの船はその靄の中に全く姿を隱してしまつた。

やがて、彼がただならぬ物音に晝寢から眼を醒ますと、港內は恐ろしい騷ぎで、船といふ船はあはてふためいてゐた。海の方から恐ろしい響がして、空は鳴りはためき、雨と風と雷とに、耳も聾せんばかりであつた。二十分程して、その恐ろしい暴風雨が一過した後、彼は友の船が見えはしないかと沖を凝視してゐたが、つひに見出す事が出來なかつた。それで今度は、港に逃げ歸つた船を調べたが、何の手がかりもなかつた。

不安と捜索との七八日を過ぎて後、海岸に二つの死骸が上つた。その一つは、ギア・レッヂオに程遠からぬ處にあが

つた。顏や手など外に現れてゐる部分は、もはや肉が失せてゐた、けれど、そのすらりとした身體つきと、そのジャケツの一方のポケットにソフォクレスの一卷、他のポケットにキイツの詩集を見出したので、それがシェリイの死骸である事は、最早や疑ふ餘地がなかつた。それで、死骸はひとまづ砂の中に埋められた。

シェリイは異常に水を愛してゐた。彼はその生涯の半ばを水の上で過したと云つてもいい位である。旣に少年の頃から、彼は水を愛して、水のあるところには、必ず舟を浮べようとした。紙がない時は、五十磅の紙幣で舟をつくつて、池に浮べた。

そのくせ、彼は泳ぎが出來なかつた。

ジェネエヴの湖畔に夏を過して、バイロンと湖上にボオトを浮べて、周遊した際、一日、風が強くなり、波が立つて、今にも舟が覆らうとした時に、彼は靜かに落着き拂つて、從容として死を待つた。彼は水を恐れなかつたのだ。

ピサでは、木框に防水布を張つたばかりの舟に乘つて、アルノオに浮んで、その生命がけの舟遊びで人を驚かした。また、その舟で深いところまで漕ぎ出して、同乘者に玆で死なうと云つた事さへあつた。

とりわけ、海はシェリイの情熱であつた。ブランデスの所謂「サラマンデル・ナトゥール」なる彼は、海の上で、燃える日光の下に、ボオトの中に橫はつて、その靈的な顏と、しなやかな手とを日に焦がせながら、美しい詩を書いたのだ。

水に死ぬのは、或ひはシェリイの豫定された運命であつたかも知れない。

然し、今かうしてまざまざと、見るも無慘な死骸を見た時は、友人思ひのやさしいトリロオニの心はどんなであつたらう。

當時、その地では、ペストの豫防のために、海から打上げられた死骸は、すべて燒却される規則になつてゐた。そ

れでバイロンたちはこの事情を利用して、その友の死骸を、故人の性格にふさはしく、希臘風に、異郷的な埋葬をしようと決議した。

香料、酒精、鹽、油などが、積上げた焚木の上に振りかけられた、古きヘラスのならはしのやうに。

一羽の小さな鳥が焚木のまはりを飛びめぐつて、飛び去らうともしなかつた。

火が點ぜられた。焔はさつと金色の條となつて立ちのぼつた。

トリロオニが、淸らかな砂の中から掘り出すのが、無慘な惡業のやうに思はれて躊躇しながらも、やうやく勇を鼓して、掘り出した死骸は、その焔の間で燒けて行つた。

けれども、不思議な事には、その心臟だけは燒け失せなかつた。心臟だけがその儘の形で燒け殘つた。

トリロオニは、この遺物を燃える火の中から引き出した、引き出さうとして彼は手を焦がした。

その心臟は、トリロオニが貰つた。そして、後に、それを詩人の妻のメリイに贈つた。彼女はそれを絹布に包んで、「アドネエス」の卷の中に挾んでゐた事が、彼女の死後に發見された、そして、それは遺子のフロオレンスが死んだ時、一緒に葬られたといふ。

火葬がすむと、シェリイの遺骨は、彼が生前、これ迄見た最も美しく神々しい墓地と呼んだ、羅馬のピラミッド形をしたセスティウスの墓碑の下なる英人の墓地に埋葬された。彼の愛兒ヰリアムの墓の隣に。そして、その墓標を、リイ・ハントが羅典語もて書いた。

Percy Bysshe Shelley, Cor Cordium, Natus IV. Aug. MDCCXCII Obiit VIII Jul. MDCCCXXII

パァシイ・ビッシュ・シェリイ、心の心、一七九二年八月四日生、一八二二年七月八日歿。

Cor Cordium（心の心）とは、いみじくも云はれた言葉である。

トリロオニが焔の中から奪ひ取つたシェリイの心臓は、並ならず大きかつたと云はれる。火も焼き難かつたこの心臓こそ、まことにシェリイの中のシェリイであつた。詩人シェリイのあの近代の臭氣に染まぬ高揚せる詩篇の崇高美もそこから生れた。彼の生涯の苦難と破綻ともまたそこから生れた。

十九歳にして、オックスフォードにあつて、周圍の僞善と墮落とを概して、『無神論の必然性』なる小册子を印刷して、教授や知名の人々に送つて、ために學校を放逐せられ、つひには父からも勘當されたシェリイ。

そのおなじ年の若さで、マウント・ストリイトの珈琲店の娘、わづか十六歳のハリエットの境遇に同情するあまり、義俠心から無分別な結婚をして、その罪を重く償はねばならなかつたシェリイ。

ゴドキンの過激な無政府主義的の思想に共鳴して、自ら新妻とともにダブリンに赴いて、愛蘭解放運動を激勵したパンフレットを撒き、政治演說をもして歩いたシェリイ。

貧民救濟を發願して、彼等の看病をするために、倫敦の病院に通つて、醫學を研究して、自ら重い病氣にかかつて、肺病のために死ぬ事を――それは快癒したけれども――醫者に告げられたシェリイ。傳染病の蔓延してゐる村々の貧民を訪ねて、自ら危險な眼の炎症を得たシェリイ。

マアロオの佗住居で、その僅かな收入をさいて、附近の貧民に惠み、彼等の病床に附き添ひ、貧しい女にその靴をやつて、自分は跣足で歩いたシェリイ。

ハムステッド・ヒイスの丘で、痙攣に惱んで倒れてゐる貧しい婦人を抱き起して、遠き灯かげを目あてに、そこなる農家の戸を叩いて、その女を瞞着者だと云つた主人と爭つたシェリイ。

しかも、そのシェリイは、當時の英吉利人には、危險な無神論者で、恐るべき不道德な男で、厭惡すべき惡魔派の詩人であつた。

彼はその最初の妻ハリエットとの中に生れた子を、法律の手に奪はれて、第二の妻メリイとの間に得た子を再び奪はれぬために、永遠に英國を見捨てねばならなかつた。

ピサの郵便局では、その名を聞き知つた一暴漢のために、これが「呪はれた無神論者のシェリイか」と唾棄されて、無禮な凌辱を受けなければならなかつた。

生涯、公衆から迫害され、嫉忌されて、その詩集は百部を賣り盡す事を難しとし、『アドネエス』や『エピサイキディオン』に至つては、十部をさへ賣る事を得なかつた。

彼の友トリロオニは、はじめてシェリイと會つた時、その處女のやうな纖細な容貌と、はにかんだ態度と、細く華奢な姿とを見て、これがあの不道德な怪物、惡魔派の首領と罵られてゐる人であらうかと疑つた。

今、英吉利には、シェリイを當時の定評の如く考へる愚者は一人もゐないであらう。偏見の力の恐ろしさよ、愚劣さよ。

彼は或る機會に、詩句の一行を希臘語で書いた、「われは博愛主義者なり、民主々義者なり、無神論者なり。」と。そして「これがシェリイの生涯と作品とへの序樂である」とブランデスは云つた。そして、思ふにこの一行に、彼の全不幸がかかつてゐたとも云ひ得られるであらう。

ブランデスはシェリイの社會思想を論じて、「彼のラディカリズムは、彼がその時代から五十年進んでゐたからのみに過ぎない」と云つてゐる。恐らく、さうであらう。然し、彼の不幸は、單なる五十年の差異にのみは基かなかつた。

彼はあまりに純潔で、あまりに誠實で、あまりに愛に燃えてゐた。それが謂はば、彼の罪過であつたであらう。何となれば、此世はあまりに純潔なる人の適地ではなく、あまりに誠實なるものは傷つき、あまりの純愛は難破すべき運命に置かれねばならぬからである。そして、その純眞な愛すらも、人間性の桎梏の中に在つては、屢々、隱された

るエゴイズムの影と見える場合があり得るのである。

シェリイの如き人にとつては、人間世界の空氣はあまりに混濁に過ぎ、人生は彼にとつて、元來、一つの追放に類するのではあるまいか。そしてただ死のみが、眞のエリジウムであり得るのではなからうか。シェリイの失敗した理想美の探求者が、社會改造の熱望者が、常に死に憧憬し、死に到達し、死に救濟されるのも理由のない事ではなかつた。と同時に、彼が熱烈に靈魂の不滅を信じてゐたのも、十分の共感をもつて理解されるのである。

シェリイはプラトニストであつた。彼は自らプラトオンの『饗宴（シムポジウム）』を英譯した。彼は社會改造に於いても、人と人との愛をその基礎と見て、「人々の間に愛がなかつたならば、いかなる制度をつくらうとも、依然、不平等の繼續に役立つに過ぎぬであらう」と云つた。いな更に、「愛は單に、人と人とに止まらず、一切の事物を結び附ける羈絆でもあり、又法則でもある」と云つた。正義も自由も、彼にとつては、畢竟愛の發露に外ならなかつた。

シェリイは『愛の哲學』と題する詩に於いてかく歌つた――

一

泉は河と溶け合ひ、
河は海と溶け合ふ、
空なる風はとこしへに
たのしき思ひとまざる。
ひとりなるもの世にはあらじ。
すべては神の法則（おきて）によりて

ひとつの靈と溶け合ふを
など相寄らぬ、君とわれのみ。

二

見よ、山は空とくちづけ
波はかたみに抱き合ふを、
もしそのともを斥けなば、
花はいかでかゆるされむ。
日かげは地をばかいいだき
月かげ海にくちふるとも、
何かせん、このくさぐさも、
君だにわれにくちふれずば。

しかも、愛するものは惱まねばならぬ。その愛は屢々、常に、裏切られなければならぬのだ。爾餘は措いて問はず、彼はその結婚生活に於いて、女性への關係に於て、ハリエットにまづ幻滅し、理想的の妻であつたメリイにさへも未だ滿足せず、かの「エピサイギディオン」の理想の女性エミリア・ヴィヴィアニにさへ幻滅しなければならなかつた。愛の哲學の、眞實は苦い！

「エピサイギディオン」――この靈魂の詩人の靈魂の歌について、よりよき人の、より知識に富んだ言葉が聞かれるであらう、また聞きたいと思ふ。私だけで云へば、その奥で再びレオパルヂの「愛と死」に遭遇して、胸の底なる憂愁

の思ひを更に新たにせられたのであつた、シェリイは決して悲観主義の詩人ではなかつたのに――。

キイツのこひぶみ

「今は夕暮のしゞまです。しづかにペンを持つ手にも、冬の冷たさが沁みて來ます。新しい春のけはひも見えませぬ。からだにはよくありませんが、冬には冷たい慰めがあります。バアンズが冬を一番愛したやうに、冬の夜木枯を聞きつゝ、キイツの一句一句を味つて行く事は、私には、どんな事にもまして大きな喜びです。」

片瀨に孤獨の生活をしてゐる私の若い友達が、今年の正月、私にくれた手紙にかう書いてゐた。私と同じやうに、ハイネを愛し、シェリイを愛し、レオパルヂを愛してゐる友は、今、またキイツに親しんでゐるといふ。

「ノヴリスのやうに、キイツもまた美しい、きはめて美しい人生の幻を愛してゐました。幻を見てゐたのです。私は人生に對して、今は幻を持つてはゐません。然し、キイツと共にかう云へるならば、どんなに幸福でせう。

Farewell! I yet have vision for the night, and for the day faint visions there is store:

夜は夜であるが故に存在するのではなく、靜思の境に幻を築くために與へられたのです。私は此頃非常に晝を恐れ、嫌ふやうになりました。」

「私は又キイツ全集千二百頁の研究をしてゐます。隨分沒頭してゐます。殊に書翰集が飛立つてすぐれてゐます。トルストイやドストエフスキイの書翰ばかりが、價値がある事しか知らぬ人は問題になりませんが、あなたには是非お奬めしたいものです。屹度いゝとお思ひになりますよ。」

こんなに友達は書いてゐた。私はそれによつて、絶えて久しいキイツに對する古い親しみが再び蘇るのを覺えた。

若くして逝ける詩人は、それだけでも、當時の若かつた私には、こよなき魅力を有つてゐた。ノヴアリス、シェニエ、はたシェリイ、中でもキイツは、最も若き詩人らしい詩人として、殊に、その不如意な境涯の同感から、私になつかしい名であつた。キイツと呼んだだけでも、一つの美しい世界が私の目前に現れるのであつた。

けれども、キイツの詩そのものは、私にとつては開かれぬ寶庫のやうなものであつた。それを開く鍵を私は有たなかつた。英語の學力を。もつとも、當時すでに田山花袋氏の飜譯もあつたけれども、私はもつと親しくキイツを知りたかつたのである。が、今でも私はその名だけはかくも親しいキイツの代表作の『ハイピリオン』をすらまだ通讀してゐないのである。そして、今は語學力も語學力であるが、キイツの世界は、本質的に、自分の世界とはかなりかけ離れてゐる事を知つて來た。私にはシェリイの方がファミリヤアなのである。だが、またそれだけ私はキイツをより高く評價するのである。但、それは英國に於いて、キイツの評價が漸次高まつて來たからといふやうな事情のためではない。

湘南の友の言葉によつて、私はキイツを私に始めて親しいものにしてくれた、平田禿木氏の『薄命記』と題する文章を想ひ起した。幸ひ、この曾つて私が繰返し愛讀してゐた文章が、一友の書架から借りて來てゐた或る雜書の中に收錄されてゐたので、私は今英學界の耆宿である平田禿木氏の若書きを――この三十年前の文學界の若い才人の筆のあとを、再び讀み返して見る事が出來た。

「行く河の流は去てかへらず、ここに果敢なきほまれをとゞめて、墓邊の幽花影ばかりのかほりを添ふ、才はアポロオのみたちに輝き、歌はエオリアンの曲を奪ふ、彼の薄倖多恨の詩人キイツの如き、豈にこの血と火の間に身をおきて、花の如き天才を燒きつくしたるにあらずとせむ、春夜雨の音靜なるを聽き、燈火をかかげてエンディミオンを讀めば、幽草風に搖らぎて露香溢るゝばかりに、幽かなる草間の流に影をうつしては、我を追ふ天地の悲哀に瘦せたる如

く、誰かこのアドオネーを想ふて、其才の美しく、其運の拙きを嘆かざらむ。まことにその詩を見れば、靜なること秋の水の如く、美しきことヴエネシアンが畫像を見るが如し、然かもその一生を見れば慘々として殆んど語るに堪へざらむとす、アルビオンの詩神が擅に桂の冠とらむことを想ふては、野心の焰愈々熱し來り、これとともにウエントウワースに心に染めし幻影の去るべくもあらず、あはれ一生は果敢なき夢なり、いみじき迷ひなり、ただ炎の紅なるは、眞珠の爐中に燃ゆるが如く、孤蝶金色の羽をひるがへしては、秋風の寒きにもひるまず、さればアヴオンの揚柳長に青く、ワイマルの愁ひは年とともに艷なり、さもあらばあれ彼の才のわかく、運の拙きもの末の世に生れて、花の如きかよわき心には、春の雨のしめやかなるをも愁ふ。まことアルペンの風の冷に、なほ夕暮の空の艷なるにあくがれて、秋風病の袂を吹きてそぞろ寒く、永く故國を辭してイタリヤに向ふ。頃は耶蘇曆千八百二十年九月十八日、ナポリにつきしは十月の末なるべし、ピサの都にありしシエレーはあつき文寄せて、ともにその薄命の運を分たむとせしも、そこには行かず、羅馬に來りてトリニタア・デル・モントのふもとなる茅舍に入る、病魔いよいよ瘦骨を襲うて、翌千八百二十一年二月二十四日曉の空にこの多恨の生は終りぬ。」

まことに、薄命の詩人も數多いけれど、キイツの如き、その典型的な一人であると云ひ得られよう。彼はその併稱せられるバイロンやシェリイの如き貴族ではなくして、倫敦の貸馬車屋の息子であつた。殊に、彼の父はその家の奉公人が、主人の娘と結婚したもので、その素性は全く分らなかつた。それをキイツはひどく氣にしてゐた。彼の貴族に對する反感は、さういふ處から生れてゐるとも云はれる位である。ところで、この父は彼が九歳の時、落馬して死し、母は彼が十五歳の時、肺を病んでみまかつた。母の死とともに、彼は學校を退いて、エドモントの外科醫——當時の風習によつて、醫者と藥劑師とを兼ねてゐた——の書生となつた。が、そんな散文的な職業には辛抱が出來なくなつて、文學で身を立てようと思つて、當時詩人として名の有つたリイ・ハントの知遇を得、二十二歳の時、處女詩集『ポ

エムズ』を出し、翌年『エンディミオン』を出した。

しかも、この『エンディミオン』は、いかなる憂目を見なければならなかつたらう。「ブラックウーヅ・マガジン」と「クォータリイ・レヴュウ」との批評家は、無理解と云はうか、亂暴と云はうか、惡意ある酷評をこの若き詩人に投げつけて、「この著者は詩なんかを書くより、藥局にすつ込んでゐた方が氣が利いてゐる」とか、「同じ飢ゑるなら詩人よりも藥劑師の方がましだ」とか云ふやうな嘲罵を恣まにした。この種の批評家は、いつもいかなる處にもゐるので、自分の揮ふ鐵槌の下に、弱い詩人の心臟の碎け散るのを、獸的な快感を以て眺め樂しむのである。我國の現在の文壇では、その惡罵や誹謗は、とてもこれ位の生やさしいものではなく、地獄の鬼ですら眞蒼になりさうな恐るべき暴言が横行してゐるが、バイロンやシェリイなどは、これだけでも激昂して、その頃キイツが肺患になつたのは、この酷評のためとひとへに思ひ込んで、シェリイは「クォータリイ・レヴュウ」の主筆に書を送つて、不遇の若き詩人をかくも苦しめる批評家の冷酷を詰らうとさへした程である。然し、それは誤解で、キイツはそのため心を傷つけられたのは確かであつたが、かかる妄評のために破滅に陷るほど脆弱ではなかつたと云ふのが、今では定説になつてゐる。彼の母と、弟のトムとを奪つた病氣は、内部から徐々に彼の身を蠶食してゐたのである。

二十四歳の二月、キイツは始めて咯血した。そしてその七月に、彼の名を不朽ならしめる『レエミア、イサベラ、セント・アグネスの逮夜その他の詩』が出た。しかも、これより先き、一八一八年に、彼はその一生にたつた一人の戀人であつたファンニイ・ブロオン孃と相知つた、彼が二十三歳、彼女が十八歳の折りに。禿木氏が「ウェントウワアスに心に染めし幻影」と云はれたのは、この東印度生れの少女の面影に外ならなかつた。

當時キイツはこのウェントワアス・プレエスなる友人ブラウンの家に住んでゐたが、その前庭と後庭とをもつた二軒の家の一つには、ブロオン一家の母と娘とが住んでゐた。ここで彼はその戀のはじめの半歳を、幸福の中に過した。そ

して、翌一九年の春の初めに、かの一生の傑作と云はれる『ナイティンゲエルに寄するオード』を、ブロオン家の庭園の李の樹の下にすわりながら書いたのである。この作は我國でも、厨川白村氏の評釋によつて廣く知られてゐるもので、彼の官能的な、繪畫的な、華麗な詩風をよく示してゐる。

かの湘南の友が私に推奨してくれた書翰集は、實に、このファンニイに與へたものによつて、高い文學上の價値を附與されるのである。私は未だそれを讀む暇を持たないが、ブランデスの言によれば、その幸福なりし最初の短かい期間には、殆んど一通も戀文らしいものがなく、その年の夏、はじめてファンニイに書き、そしてだんだん悲しく痛ましくなり、最後の分に至つては斷腸の文字であるといふ。

ただし、ファンニイは最後まで、キイツに對して不親切ではなかつたと云はれる。けれども、彼はつひに彼女と結婚する事が出來ない身であつた。病詩人は、その秋、友人の畫家セヴアンに伴はれて、伊太利に轉地し、翌年の二月セヴアンの手に抱かれながら、羅馬に死んだ。その死に際して、彼はその自ら讀む勇氣のなかつた愛人の手紙を、柩の中に入れてくれるやうに友に頼んだ。また、墓碑には、次ぎの言葉を刻んでくれと遺言した。Hore lies one whose name was write in water.（その名を水に書きしもの玆に眠る）

然し、「シェリイの魔杖の一觸れに、水は氷にかたまり、その名は水晶に刻まれたやうに、未來永劫に止まるであらう」とブランデスは云ふ。キイツを悼んだシェリイの『アドネエス』は、彼のために不朽のモニュメントとなり得るだらう。然し、私から見ると、アドネエスは、キイツよりもむしろシェリイ其人にふさはしいのである。キイツにとつては、ただ彼の詩あれば足りるであらう。

友の言葉によつて、私もキイツの書翰集を、そのうち讀みたく思つてゐる。然し、今私が久し振りで讀んだ平田氏の『薄命記』の中に抄出された氏の美しい譯は、キイツの全集を繙讀してゐる湘南の友にも、少からぬ喜びを與へる

に違ひない。で、私はそれを書き寫して友に送らうと思ふ。

「今日少しばかり歌うつさむとて、机に向ひたれど、心は堪へがたきまでに惱みて、筆すすみがたく、御もとへといささか認むれば、せめて暫の間君を忘るるを得むかと、おして筆とり候ひぬ。今我心に思ふこと何物もあらず。我一生の曉のいともおぼつかなきを思ひて、我忘れよと君にすすめしは昔なりけり。まこと我戀は我を愚とやなしたりけむ、世に君なくて長らふを得べきや、ただ又君と相見む折を思ふて、何事も心につかず。我生はここにやみ、我にはこれより外何物も見えず、我身も魂も君が心にひきよせらるる心地して、我は今何とはなしに、とけゆくやうに思はれ候。我は今にも君を見む望なくば、悲しきに堪へ難く、遠き旅路に別れゆく心地いたし候。君が心のいつも變らぬにや、はたさる事もあるにや、我戀の今はてしも知れぬやうに思はれ候。

今君が文手にいたし候ひぬ、君と離れてかくばかりうれしき事のあるべき、眞珠の籠手にしたるよりゆたかにも覺え候。たはむれにも我につらくし給ふな。我はむかし宗教のために人々の命捨つるを見て驚きぬ、げにおそれをののきぬ。今こそ知りつれ、我は我宗教のために命捨つるを得べし、戀は我宗教なり、そがために我は死すべく、君がために我は死すべし。げに堪へ難きまでに我心ただよはし給ふ君の心にくさよ。されど君見むまでは堪へ得べしと我は思ひぬ、否、逢ふての後も、我はわが心の道理をかき起して、我戀の道理と戰ひし事あり、今は苦しさにそれをもなし得ぬやうに思はれ候。我戀の愚なることよ、君なくて片時もながらふを得べきや。」（平田禿木氏譯）

「今日朝より頭いたくなやみ、思ひは千々に亂れて何をいはむよしを知らず、かく苦しみのうちに閉ぢられても、御もとに文したためむは、心すがすがしくよその遊びにふけるにまして、我心樂しく覺え候。我心は極みなきまで君を

戀しぬ。君がやさしき姿を心に浮べて、絶え間もなきを思ひたまへ、朝には君の來りたまはむけはひして、夕には我窓に君の立ちたまふ思ひをなす。我はかつて眼に見しことを心に描きて、絶ゆる間もなし。我心樂しききはにあれば、我は悦しき苦しみのうちにあり、我心うたてききはにあれば我は悲しき苦しみのうちにあり。

我なす事いふ事君につらしと怨じ給ふ。まこと我も君が心惱ませしをいたく悔ゆる時あり。ゆるし給へ、こは皆わが感情の鋭きよりなす心なき業なるを、こは皆わが罪なり。かばかりの心なく、われ知らず知らずなせしと信ずるを得ば、我はいと誠ある罪人にてあるべく候。君が文に彼の言の葉だになかりせば、我はさらさら疑ひの心を捨てて、身も魂も一つになり得べしと思はれ候。我君を捨つるを得べしと君思ひ給ふにや。我いかにわれを思ひ、また如何に君を思ふかは、君知り給ふべし、されば我より君をかてむ事の、いかばかり苦しきかを思ひたまへ。

我友の君をそしるといふ。我はその人々を知らざるにあらず、まこと其輩の明にならむには、我は固より友とは思はざるべく、否知り人とも思はず候。我友の多く何事につけても心を盡しくるれど、ただこの事のみは我爲す事をさぐり、我爲す事を笑ふて、我死すとも明かさずと定めし心の祕密をあばかむとす。こをゆるせよと我はいひ得ず、我は再びその人々を見むともせざるべしと思ひ候。もし我をばうはさの種とし笑はむとならば、私は固よりその仲間を脫すべきのみ、我らが戀のあやしき鏡にうつされて、かかる輩の觀物とせられむこと、如何にはづかしき事ならずや。ただ世にひとり、たとへば再び君を見ぬとも、必ずや心の記念(かたみ)と永く君を忘れぬものあるを思ひ給はば、それらのそしりもさらさら心にかけ給ふな。我になみならぬ情ありといつはりて、今は我を惡むべきわけある二三の人々を我たしかに知りぬ、折あらば君に告ぐる時あるべく候。これらの人々はただ君を好まず、君が美はしきをそねみて我を永く君より離さむとし、つとめて君より遠ざけむとするなるべし。人の心は果敢なきものなり。これらに心止めたまふな。ただ我を想ひたまへ。君が心よろずを捨てて我にのみあらば、生きてこの世にあらむこと、如何ばかり樂しかる

べき、死するもさまで苦しからずと思はれ候。我は靈魂の滅びざるを信ぜむとす、君と永く別れむことの如何ばかり苦しきを思へば。君と樂しまむこと、ただこの世にのみありと思へば、いとも長き生涯もまた短夜の夢にすぎず。我は靈魂の滅びざるを信ぜむとす、ただ永く君とあらむことを願へば。我名そしる彼の輩の言きゝ給ふな。我世に出でてただ君を戀するより外なす事なき身なりとも、そは早や我名の聖くこれらの人々の口にすべきものならぬに足る。我もし君につらき事あらば、我戀はつらきにまされりと思ひたまへ。彼はただ束の間にして、これは幾世の後までも變らぬものなれば。もし我に心ゆるし給ふこと君を汚すことあらば、我君を想ふ時、我心の如何にひくく、つゆばかりの傲りもなき事を想ひたまへ。我人の前にて君が名をいはざるべく、君もまた必ず我名口にし給ふな、彼の人々の我を好かぬと思はれ候。

この文を見て君の我見たしと思ひ給ふや。病も快よく今は早や歩むをも得べけれど、我はそをなし得じ、再び君と別れむことの如何ばかりつらきを思へば。まこと君と相見る事の如何にや。我病の快れど、まだ君と逢ふほどにあらぬを思ひ給へ。我身君が傍らにあることのあらば、また君の傍を去らねばならぬ時あるにや。

君がはじめての文想ふ時、我はうれしともうれしき思ひいたし候。君が身も魂も我上にのみありと思へば、我如何ばかり樂しく暮すを得べき。我君につらしと思はば、よくよく思ひかへして我心の奥を察したまへ。我戀は眞理(まこと)のかざりなきよりまことに、眞理(まこと)の幼きよりもかざりなきなり、こはかつて君に告げしところに候。我いかで君につらきを得べき、つらきもつらき心にはあらず、ただ我心の――これもみな我心のおちぶれ果てたる故と思ひ給へ、いとも美しきわが心の人よ、かかる賤しき彼を信じ給ふな、我は我が病を忍ぶごとく、つとめて我戀のまことなるを信ずべく候。」（平田禿木氏譯）

悲劇——レオパルヂ

このあらはなる丘ぞわれには常に好ましき、
また遠き地平のながめを
わが眼に遮るこの生垣も。
ここに坐して四方を見渡し、われは夢みる、
果てなき廣さ、世の常ならぬ沈默、
いとも深き安息の、かなたにあるを、
かの低き垣根のかなたに。
かくて、心は恐れにふるふ。
枝の間にうそぶく風を聽きつつ、
かの限りなき靜寂と、この高き聲とを
くらべ見て、われは思ふ、永遠を、
死せる歳月、なほ生けるこの瞬間と、
またその聲のいかに響くかを。
窮みなき萬有の中に心はしづみ、
この海に難破せんことぞ、われにたのしき！

彼はこの詩句を、その膝の上に載せてゐた小さなノオトブックに、一息に、一語の消しもなしに書き下した。いつもはその一行々々を彼は丹念に推敲した。それでも、彼は十分だとは思はなかつた。性急な書き下しによる、その思想のあやまれる表白に對して、彼の耳は十分精妙であつたし、彼の心は十分敏感であつたのだ。けれど今、その詩を聲をあげて讀み上げて見たとき、それは彼の感じた凡てを彼に云ふやうに見えた。ノオトは手から滑り落ちた。彼はうしろの丘に凭れるやうにして、兩腕を頭の下に支へて、靑く輝く、雲切れ一つない空へと眼を向けた。頭上の樹々の戰ぎは靜まつて、四邊一帶には、鋭い蟋蟀の歌と、この荒地に無數に棲んでゐる蜥蜴の一つが、その輝く眼で、この見知らぬ人を物珍らしげに見ようとて近づいた時に、石塊や乾草の間に起つた戰ぎとの外には、何の物音もなかつた。

　彼は全くこの蜥蜴よりも、もつと賢いものの眼にも、好奇に値した。彼は若いのか年寄なのか？　醜いのか美しいのか？　眠つてゐるのか醒めてゐるのか？　この大きな、靜かな、靑い眼の光りは、エーテルの反映なのか、それともまた曇りの無い心の反映なのか？

　一つの微笑も、その蒼ざめた顏、その陰鬱に半ば開かれた口の上には浮ばなかつた。眼はデリケエトな眉根の下に深く落ち窪んでゐた。その上には、一つの皺も、刻苦の思索の痕もない廣い額があつた、あだかもこの精神の氣高い棲家には、より力のないものが、苦鬪と心勞とをもつて辛うじて闡明するものについて、決して辛苦がなかつたかのやうに。ただ、落ち込んだ頰と、目蓋の輕い痙攣とが、大なる苦痛の絶えざる現存を示してゐた。

「この海に難破せんことぞわれにたのしき！」と彼は小聲に誦した、今や傷ましい微笑がその色の無い脣に浮び、一つの歎息がその胸を洩れた。彼は一瞬の狀態に促された感情を、永遠の言葉に捉へる事の出來た時に生れるあの快樂を味つたのだ。

　鐘の音が遠くから響いて來た。彼はこの少年時代から親しみ深い響が、その醒めた意識を眠らすかどうかを待ち通

すやうに眼を閉ぢた。海岸の近くで難破した舟夫の傳說が彼の心に浮んだ。その舟夫は今、海底の女怪のもとにゐて、日曜日に寺院の鐘が響く每に、海底のあらゆる喜びもその記憶を消し得ないあはれな地上への鄕愁を感ずるといふ。この傳說の虛僞が、苦々しい表情によつて罰せられた。アヹ・マリアの鐘の響くところへは、何一つ彼を引戾すものはない、故鄕への鄕愁もなく、その冷たい海底を、再び人間の棲家と取換へるべき願ひはない筈である。

鐘の音は鳴りやんだ。低い生垣の影はだんだん長く伸びて、彼の膝の上に這ひ上つた。冷つこい風が藪を通して、この高みの露はな岩のまはりを吹きはじめた。やすんでゐる人の身體を、輕い戰慄が掠めた。ゆつくりと彼は立上つて、帽子を額にのせて、岩の多い傾斜を下りて行つたが、あだかも歩みがだるくなつたか、又は家路につくのに、またも新しい克己が必要であつたかのやうに、彼は幾度びとなく立止るのであつた。

今や自然がいかに繼母のやうに、かくも親しくその胸に身を寄せたその息子に對して、肉體上の寄與を惜んだかを見る事が出來た。彼の體格は小さく、畸形で、背中は曲つて、大きな頭はかぼそい身體にはあまりに重いやうに見えた。彼が時折りその高い額から汗を拭きながら、時折り石の上に憩ひながら、苦しさうにふらふらと歩いて行くさまは、あだかも大患からやつと癒えて、はじめて外出してみて、未だその步行の力の十分でないと知つた人間かとも思はれたらう。

丘陵の上を走つてゐる道路まで出ると、荷物を積んだ牛車が、市街へ行くその道は、平坦で、前ほど狹くも歩きにくくもなかつたけれど、彼は前より一層步調をゆるめた。彼の前方には、凡そまだ半時間の道程で、彼の生れた市街のレカナティの白い家並や、灰色の屋根が見えてゐた。見る度びに心をしめつける眺めである。たとひそこには彼の愛する兩親と同胞とが住むとは云へ、彼はこの市街を、彼のあらゆる苦惱の源泉として、その濕つぽい銳い空氣を、彼の病氣の原因として、その住民を、あらゆる非人間的な、厭惡すべき性質の原像として見てゐた。この性質こそ、彼

をして、人間社會を憎惡せしめ、既に少年時代から、書物の世界へと隱れ家を求めしめたものである。

彼は彼方の古い山の巣が、夕日の中に横つてゐるのを見ると、思はず足をとどめた。再びあの牢獄の中へ歸るのか！　と、彼の眼の陰鬱な表情が云ふやうに見えた。彼方、左手には、遙かな海が暗碧色の線をもつて輝いてゐた。アペナインの高い鎖が、南に向いて彼の目の前へと延びてゐた。この壯嚴な高所に於いて――どうしてかくばかりの卑小な狹量な心、かくばかりの鈍い偏狹、かくばかりのあらゆる永遠的なものに背いた貧しさが增大して、數限りない縛めもて、一つの自由に生れた胸をからんで、息づまる思ひにさせ得ることぞ。

既に一度ならず、彼は自分を救ひ出す試みをした。彼の本質を理解してゐない父に懇願するよりも、むしろその堪へ難いものを堪へようとした、臆病な、片意地な少年時代を過ぎるや否や、彼はそれまで夕紅（ゆふやけ）や朝紅（あさやけ）の香りの中に於いてのみ、寂しい窓から、そのあこがれもてさまよふてゐた世間へと出發したのである。羅馬の方へ彼は行つた。そんなにも年若かつたが、彼の名前は、その國の最良の人々の間に、最早や未知のものではなかつた。人々は、彼のやうにさやうに深く、希臘羅馬の教養の鑛坑へ下りて行つたものの多くはない事、普通のものが學校の腰掛の上で、厭や厭やに綴字を口にし、文章を綴くり合せる年頃に於いて、この孤獨な少年が、その道の大家の研究題目である學問上の謎を解いた事を知つてゐた。教師もなしに、彼は古代語の外に、佛蘭西語、英吉利語、西班牙語を學んだ、またアンコナの猶太人と伯希來語で對話をした。自ら一個の學者を以て任じてゐる彼の父の書庫は、云ふ迄もなく、その地方では最も豐富なものであつた、そして老レオパルヂ伯爵は、それを一般に公開してゐた。けれども、この寶庫をもつて、そのあらゆる靑春の憧憬の襲來に對する、そのあらゆるいなまれたる生の喜びに對する楯としてゐた彼の息子の外には、曾つて何人もそこに入つて行くものはなかつた。既にずつと早く、一つの密かな聲が彼に囁いたのだ、汝が敬虔に信頼してよりすがる運命は、汝に、麵麭の代りに石を、幸福の代りに智慧を與へる、そして、この智慧もまた

堅くして苦いものであると。

彼は凡てはこの土地のせゐであると思つた。彼は然し、羅馬に於いて、彼はその運命を到る處に伴つて行くのであると悟らねばならなかつた。その光輝もて彼を慰めるべく約束した名聲が抑も彼に何であつたらう？　それは彼と彼の苦惱とを他人の眼に照らし出すばかりで、彼の心を溫めもせず、彼の精神を明るくもしない炬火にすぎない。彼は幻滅を感じて、面をそむけて、父の屋根の下に逃れ歸つて來た。そこには少くとも、彼のあはれな肉體を二重にも憐れむべきものに見せしめるところの愛らしいものは何も見えなかつたし、彼はその隱栖に於いて、かの偉大なる死者の靈とともに、アスフォデロスの野で對話して、そして、光の中をさまよふものの幻の幸福を呪ふ事の出來る、一人の死者とも自分を思ひ得たからである。

けれども、彼はその生きながらの塚穴に、永遠に堪へて行くにしては、まだ餘りに年が若かつた。また、山中の嚴しい冬が、再び彼をフィレンツェやピサのよりやはらかな空氣の中へ避け下らしめた。そこでは彼の抑壓された胸は、より輕く呼吸をし、より精妙なる人々があつて、徒らに惱んでゐる彼の心の諦念の苦をなだめるのである。より燃えてゐる靈魂は、より熱い美への要求は、より烈しい情熱への渇望は、決して息づいてゐる胸の底へ沈む事はなかつた。そして今や、この求める眼は、チャアミングな姿に出會ふ毎に、刺すやうな親しみのない眼付を受取つた。健かな靑年は普通殘酷なものであるから、大抵の場合には、露骨な嘲笑に出會つた。その最上の場合でも、それがより愛すべき靈魂から湧き出づるがために、嘲笑よりも一層心を傷ましめる同情に出會つた。

彼はそれをもまた堪へ忍び、つひには、それだけがなほ仕甲斐のあつた呼吸をし、思索をする事だけを、天の恩寵と思ふやうになつたであらう。けれども、このわづかな恩惠ですらも、彼が最も苦痛の少い狀態で、呼吸し思索する事の出來る場所を選擇する自由を缺いてゐる事によつて、彼には制限されてゐたのである。

彼の父、伯爵マナルド・レオパルヂは、家運の傾いた田舍貴族であつた。彼の經濟狀態は、その半分は既に成長してゐた五人の子供達が、家の食卓の下に足を差入れ續けてさへをれば、やうやく身分相應の生活ぶりを保つ事が出來るだけのものに過ぎなかつた。また、彼はこの貧弱なレカナティで、貴族の役目をつとめてゐる事に滿足してゐた。けれども、その息子達を世の中へ出してやるのには、たとひ彼等が、長男のジヤコモのやうに、宮廷で立身しようとの野心を有たないで、ただ學者や詩人達と交際するだけの事しか望まなかつたにしても、それはに伯爵レオパルヂは、あまりに貧しかつた。それに娘のパオリイナの嫁資をつくる手段も取らねばならなかつたではないか?

彼の子供達のうちで、このジヤコモほど、彼の愛してゐるものはなかつた、誇りに思つてゐるものはなかつた。外の子供と違つて、この不幸な子供の精神ほど、彼にとつてわけの分らないものはなかつたのだけれども。この子供が父の家から離れてゐると、彼は物足りなさを感じた。いらいらして、彼は息子の手紙を待ち兼ねた。そして、若しその手紙に、畏敬と愛情との表白の足りない時は、息子の冷淡さを、さかんにこぼしてゐた。然し、そんな事はあまり多くはなかつた、息子もまたこの父を愛してゐたからである。彼はその父には殆んど似てゐなかつた。けれども父は彼を永遠の被保護者としてその傍らに置いて、彼が凡てを自分に負ひ、彼がその要しまた望むところの凡てを自分に乞ひ願ふ事を望んだのである。息子は書物の外の何物をも父に乞はなかつた。ただ一度、ひどい窮乏が、フィレンツェから父にかやうに書くやうに彼を強ひた事があるばかりである、「私は家の暮し向きが、それを許すかどうかは知りませんが、月に十二スクヂの仕送りをして頂けませんか。十二スクヂ位では、この何處よりも生活費の要らないフィレンツェでも、人間並の暮し方は出來ません。けれど、私は人間並に暮さうとも望みはしないのです。勿論私には、死の方が望ましいのです。けれど、死は神に與へて貰はねばなりません。」

父はその願ひを許した。たとひ「人間並に」ではなくとも、顏を赧くしないですむだけのところで、生命を保つて

行くために足りないだけは、仕事の乏しい收入をもつて補はねばならなかつた。その仕事の價値は、國民の中の最も高貴な人々のみが、尊重する事の出來たものである。しかも彼はこの他郷の苦勞な重荷の生存を、故郷のつれない空氣の中に於いてよりも、一層容易く堪へ忍んだ。もつとも、年とつた兩親に對する義務の感情と、彼の運命の苛責をやはらげるためには出來るだけの事をしてくれる同胞に對する愛情とに驅られて、彼は再三そこに歸つて行かずにはゐられなかつたのだけれど。

一八二五年にも、彼は又も家へ歸つて行つた。彼の最初の十篇のカンツォーネの集が、伊太利の到る處で見出した喝采によつて、いくらか元氣づけられ、心を高められながら。その詩集はその前年に、ボロニャに於いて刊行された。最も權威ある人々が、二十七歳の詩人を祝福した。彼は少くとも、彼の外部的な心勞を輕減するであらう未來を期待しはじめた。あらゆる苦惱の時を通じて、彼には彼が無益に惱んだのではないといふ意識、また、彼がその情熱的な愛を注いでゐる彼の國に、古代の偉大な選ばれた人達がさうであつたやうに、なくてかなはぬ人間になるに違ひないとの意識が心を去らなかつた。彼の苦鬪の生活に一種の休戰狀態が生じた。彼は彼の不幸のこの稀らしい休息時を彼等と共に味はんがために歸つて來た。

彼の夢想はいかに裏切られねばならなかつたであらう！

レカナティへ入つて來た彼のカンツォーネ集の四部のうち、二部が僧侶の手に入つた。そして、彼等はこの書物の中に、あらゆる都會の權威に對する反抗の精神を、彼等の慰藉の苦い輕蔑を、神の攝理の子守唄とは鋭い矛盾を示してゐる世界とその創造主とに對する見解とを嗅ぎ付けたのである。老伯爵は息子の異端的見解を、別に惡いものとは思はず、彼の古典の研究が詩に反映したものにすぎないと思つたので、はじめは何の懸念も有たず、かの僧侶の解釋をも敢て問題にはしなかつた。そして、歸つて來た息子に祈禱をさせるのを以て、その義務だと思つた。偏見に囚はれ

てゐるこの父に對してふさはしい顧慮をもつて、息子はその云はれた儘にした。またも心にもあらぬ妥協をしなければならなかつた。その代り、病人の感じ易い靈魂には、妹のあらゆる愛撫も、弟のあらゆる溫情の樂しさも癒やし得ないやうな傷を殘した。前よりも一層彼は、自分が家族の間のストレンヂアにすぎぬ事を感じた。話すのが苦しいと云ふ口實のもとに、彼は大抵部屋の中に閉籠つたり、寂しい山の上に行つたりして、この土地を再び見捨てて、ただひとりで彼の靈感と交る事の出來る日を待つてゐた。

かうして彼は今日も、かの荒地へと逃れて來たのであつた。何時間も、その愛好の場處に憩うて、そして、そこで彼の憎む世界と、彼の最も殘忍な敵である彼自身の心とを忘れる事の出來る觀相の底へと沈んでゐた。そしていま、夕の鐘が彼を家路に呼んだのである。父は晩餐の時に、家族の者が一人でも缺ける事を好まなかつたからである。

今一度、彼は最後の一瞥を海の上へ投げた。海は夕靄の中に限りも見えず、天と融け合ふかのやうに見えてゐた。それから、彼は姿勢をととのへて、街道を歩いて行つた。けれど、二十歩と行かないうちに、彼は後から自分の名を呼ぶ一つの明るい聲を聞いた。

彼は立止つて、振り向いた。

一つのほつそりした少女の姿が、急いで、けれども走りはしないで、小鳥のやうなかはゆい歩みをもつて、街道を近づいて來た。彼女は色の褪せたすり切れた麥稈帽子で日を避けた頭の上に、何か載せてゐた。彼が立止ると、彼女も同じく息を繼ぐやうに一寸立止つた。そのとき彼は彼女が、彼がかの丘の上で詩を書き込んだノオトブックを、その差出した手に持つてゐるのを見た。それと同時に、彼は何處で見たか直ぐには思ひ出せなかつたけれど、何處か見覺えのある氣持のいいその姿をぢつと眺めた。その少女はレカナティの貧しい家の娘の服裝をしてゐた、けれども、その麥稈帽にさしてゐる野花が、大變いい裝飾になつてゐて、それが今、この展けた丘の上の輝く夕空をうしろに立つて、

眼の白みときらめく小さな齒との外は暗く見える姿は、十分の鑑識力をもつた畫家の眼をも魅惑したであらう。
「これはあなたの御本でございませう、伯爵ジヤコモ樣！」と彼女は云つて、なほ二三歩彼の方へ近寄つた、「これをわたし、あの丘のところで拾ひましたの。あなたの御本でございませう？」
「ええ」と彼は云つた、「僕のですよ。有難う、よく拾つてくれましたね。けれど、どうしてそれが僕のだつて事が分つたのですか？」
「まあ」と彼女は笑つた、「あなたのでなくつて誰のでせう？　あんな處へは、羊飼ひのペツポしか行きはしませんもの、そして、ペツポなんぞが本なんか持つてる筈がありませんわ」
彼はそれを彼女の手から取つた。その手は小さくつて、靑白かつた。彼女の若々しい顏も日に燒けてゐるやうには見えなかつた、同じやうなやはらかな靑みを帶びてゐて、それがその黑い眼を一層きらきらさせて、時折りぽつと紅みが走るのであつた。彼女は十七歲を越えてはゐなかつたであらう。やはらかな、無邪氣な風ではあつたけれど、その顏には、脣を閉ぢると共に、考へ深さうな眞摯の色があらはれた。彼女の頸のところには、眞黑な編細工の大きな荷物が載つてゐた。小さな耳は淸らかな象牙で彫つたやうにそこから輝き出てゐた。
「僕の外には誰もあの丘に行かないのなら」と彼は一寸默つたあとで云つた、「どうしておまへはあんな處へ行つたの？　この山にはずつと平野を見渡せるもつと美しい場所はいくらもあるぢやないか。おまへの帽子の花も、あの岩のところには咲いちやゐないよ」
「わたし？　わたしは道を間違へたのですわ」と彼女は答へて、こめかみのところまで眞紅になつた、「わたしは隣の村へ行く用事がありましたの、そして、わたしの母の叔母さんに引止められて、やつと歸らうとして氣が附いてみますと、もう遲くなつてたので、家で叱られないやうにとあんまり急ぎましたので、道を間違へてしまひました。あの丘

の上で、やつと本道に出たのでございます。そこでこの御本の落ちてゐるのを見附けましたので、それを拾つて、これをあなたの、レオパルヂ様のお家へ持つて上らうと考へましたの、すると途中であなたにお會ひいたしました」

「けれどなぜ、それを落したのが僕だと考へたのですか？」

「なぜつて——わたしはあなたが前にあそこにすわつてゐらしつたのを見ましたもの——わたしはあなたのお邪魔をしないやうに氣を附けてゐました。それから——わたしが拾はうとした時、自然と中が開いて、詩が書いてあるのが見えましたもの。讀みはいたしませんでした、ほんたうに、けれど讀みたくつて仕様がありませんでした。誰のための詩でせうかとわたしは考へました。」

「ではどうして僕が詩を書くのを知つたの？」

「まあ」と彼女は云つて、その髮を撫であげた、「あなたは詩人ではございませんか、伯爵ジヤコモ様、それは誰でも存じてをりますわ。それにわたしもあなたの御作を拜見いたしましたわ。でも、もう申上げません——これはつい口が滑りましたの。あなたのお母様におつかへしてゐるソフィヤが——けれどソフィヤをお叱りにならぬやうに約束して下さらないと——」

「それは約束する。何か惡い事でもあるのかえ？」

「あの人がわたしにあなたの詩集を一度こつそり讀ませてくれましたの、ほんの一夜きり。奥様はお氣付きになりませんでした。わたしはその夜、まんじりともいたしませんでした、讀み終ると、またはじめから讀みはじめましたの。朝になつて、御本をソフィヤにかへしました。汚しはいたしませんでしたわ、ハンケチで包んでゐましたもの。ねえ、おおこりになつては厭やですわ」

彼女はなつかしさうに、また、ふざけたやうな色を浮べながら彼を見た、彼は一寸の間、このチャアミングな顔に見

惚れて、返事をしないでゐた。
「ねえ、おまへは名は何と云ふの？」とたうとう彼は訊ねた。
彼女は晴れやかに笑ひ出した。
「あなたはほんたうにもうわたしを御存じないのでせうか？　もつとも、何年も他處へお出でになつてましたから、それに——この頃になつてわたしが大變大きくなつたつて皆な申しますから。あの頃はまだ半分子供でございました。でも、あなたはよくわたしとお話になつて、一度なんかは、小さなお菓子を包んだ紙を窓から、あなたのバルコンからわたしに投げて下さつたぢやありませんか、それにもう——」
「ネリナ！」と云つて、彼はその言葉を遮つた、「僕の眼は一體どうしたと云ふのだらう？　おまへだつたね！　だがほんたうに、おまへもすつかり變つたねえ。おまへがそんなに美しくならうとは、僕はつひぞ考へもしなかつた。さあ、手をお出し、ネリナ、僕の小さな隣人よ」
彼女は少しもどぎまぎしないで、また、その若さの美を讃へた彼の言葉に顔を染めもしないで、彼にその手を差出した。彼女は自分が美しくなつた事をよく知つてゐた。それは彼女があの折りより二つ歳をとつたのと同樣、當然の事なのであつた。
「わたし嬉しいわ、伯爵ジヤコモ樣、あなたがわたしを覺えてゐて下すつたんですもの」と彼女は云つて、彼に親しさうにうなづいて見せた、「あなたが他處へいらしつて、わたしを思つて下さらなかつたのは不思議はありませんわ。あなたは立派な事をなさつてゐらしつたのですもの。あなたは今度は少しこちらにおいでになりますか？　この頃どんなお具合ですか？　でも、それはつまらぬお訊ねでございますわね。あなたがどんなお具合か、わたしよう く存じてをりますわ。あなたの詩の中にお書きになつておいでになりましたもの。お氣の毒でございますわ、伯爵ジヤコモ

樣！　誰よりも幸福でゐられる筈のあなたですものを！」
「幸福だつて？　そして、なぜわたしが他人より一層さうでなくちやならないつて云ふの？」
「なぜつて――なぜつて、あなたはそんなにお不幸なのですもの――いいえ、」と彼女は急いで云ひ直した、「なぜつて、あなたがそんなに善くつて、賢くつて、詩人なんですもの。けれど、わたしは家へ歸らなくちやなりません。わたしと一緒にお歸りになりますか？」

彼はすぐには答へなかつた、けれども、彼女がまた歩き出した時、彼も歩き出した。彼は彼女が彼の遲れぬやうにと歩調をゆるめてゐるのを知つてゐた。

「おまへはまだほんとに若い、ネリナ」と彼は云つた、「若しおまへがもつと年をとつて、もつと幸福と不幸とについて知つたなら、おまへはおまへが云つたやうに、善くつて、賢くつて、詩人であるものが、實は一番不幸であらねばならぬのが當然であることを知るだらう。若し彼が實際にその凡てであつたなら、他人よりも一層、自然がその子供を幸福にまで作らなかつた事を感ずるだらうし、彼の智慧はそれが常にこの通りであり、また常にこの通りであるだらうと彼に敎へるだらう。そして、若し彼が詩人ならば、彼は自分でさへも恐れるやうな言葉でそれを語る事が出來るだらう。それともおまへは、人がそれをはつきりした言葉で自分に告げるならば、禍ひがそれによつて堪へられるやうになるとでも思つてゐるのかしら？　おまへは僕が鏡を見るとき、この僕の病氣と、この不具な身體とを辛く感ずる事が少くなるとでも思つてゐるのかしら？」

「わたしにはわかりませんわ」と彼女は一寸考へてから答へた、「でも――あなたは鏡であなたのお眼を御覧になりやしなくつて？　そして、あなたがそれがどんなに明るくつて、その中にどんな精神が生きてゐるかを御覧になるなら、それがあなたを慰めて、もつといい事の希望をお持ちにはならないでせうか？　詩集だつてそれと同じだと思ひますわ。

わたしは學問のない娘ですもの、あなたはわたしの饒舌をお笑ひになるでせう。でも、わたし人の讀む他の本とは何處か違つてゐて、中の精神が見えるやうに思ひますわ。そして、美しい詩を書く人は、それが悲しい詩であつても、鏡の中で自分の眼を眺めるのと同じやうなほんたうの慰めを見出すに違ひないと思ひますわ。こんな事を、頭に浮ぶままを出まかせにしやべるのをお許し下さいね。わたしはいつもひとりぽつちで、誰もわたしにどう考へていいか教へて下さる人はないんですもの。」

「いい兒だ」と彼は云つて、彼女の手を取つた、「おまへが人の考へなんかでおまへ自身の考へを曲げられたりしないですむ事を神樣に感謝をおし。おまへが自分の心から出たこんな可愛らしい事を云つてくれたのを感謝するよ。ただ、おまへがあの凡て悲しい、賢い人達からは單調だと叱られた詩集を好いてくれたのを驚いてゐるよ。それともおまへは、詩人といふものは賞められるのが好きだと聞いてゐるので、そんな事を云ふんだらうか？」

「いいえ、いいえ」と彼女は力をこめて云つた、「わたしの云つたのは皆ほんたうです。正直に申しますと、殘らずは分りませんでした。けれど、その分らないところさへ、知らない名前やむづかしい言葉でさへ、みんなわたしは繰返して讀まずにゐられませんでした、ただ眼で讀むばかりでなしに、聲をあげて讀みましたわ。そして、澤山にたくさんにわたしは覺え込みましたから、お祈りのやうに口誦む事が出來ます。それはあなたの仰しやるやうに、みんな悲しい詩ですけれど、わたしがこれ迄聽いたり歌つたりした歌よりも、ずつとずつと嬉しうございます。わたしは――わたしももう前のやうに快活ではございません――なぜだか分りませんけれど。この一年も前には――どうしてあなたの詩集がこんなに好きになれると思はれたでせう。あの頃のわたしは踊つたり、祭日に野へ行つて花を摘んだりするよりも樂しい事はなかつたんですもの、それが今は――」

彼女は默り込んで、道の傍らに身を屈めて、小さな花を折り取つた。

「おまへは幾歳になつたのだね？」と彼は訊ねた。

「もう三週間と三日すれば、十七になります。わたしも年をとつたでせう？まだ踊れないほどぢやありませんが。ネンナやマリアはもつと年とつてゐて、わたしよりももつと樂しさうですわ。もつとも、ふたりとも大きくつて丈夫ですけれど、わたしは――今若しも腹一杯に歌つたり、笑つたり、まはりのものが一緒にぐるぐる廻るほど踊つたりしたいと思ふと、不意にわたしは胸をチクチク刺されるやうな氣がします――それで――わたしは不意に立止つて、考へ込まずにはゐられませんわ。わたしの父の從兄弟の外科醫のマテオさんが、その徴候は無くなつてしまふだらうが、若しそれがいつ迄たつてもなくならなければ、そして若しわたしが――」

彼女はまた云ひ淀んだ。彼等は二人とも道の曲り角に立止つた、そこからは暗紅色の日輪が今しも落ちて行つた海が再び望まれた。彼は彼女の若やかな顏を眺めて、今、彼女の小さな口がいかに色が無くて、彼女の眼の輝きがいかに暗いかを看て取つた。

「ねえおまへ」と彼は云つた、「この山の空氣はおまへにもよくはないよ。今僕は前におまへの踊つてゐるのを見た事を思ひ出した、あの折りはおまへはみんなの中で一番活潑だつたね。髷がくづれて、おまへと一緒に踊つてゐた少年の頭に卷きついたので、その少年がからかつちやいけないと云ふと、おまへはますます烈しく笑つて、樂しさと生々しさとでおまへの顏が眞紅になつたのが、僕は今でも目に見えるやうだ。それにおまへは今ずつと物靜かになり、青白くなつた。おまへはお母さんに、この冬はアンコナにやつてくれるやうに賴まなくちやならないよ。あそこに親類はないのかえ？」

「ええ」と彼女は云つた、「わたしも一度あそこへ行つてゐた事があります、具合がよろしいので、ずつとゐたいと思ひました。でも」と彼女はまた翳くなつた、「たうとう家に歸つた時は嬉しうございました。あそこのわたしの親類の

人達は、金持ですのに、わたし達は貧乏です。あのきらきらした家にをりますと、わたしは何だか落着けない氣になります――みんな親切にしては下さるんですけれど。それで、たつたひとりこつそり家を出て、海邊へ行つて一時間位もすわつてゐますと、いつも山のやうな胸の重りも取れてしまひます。あなたは海を御存じでせう？　さうですとも、あなたはわたしよりもずつと澤山旅をなすつてゐらつしやるんですもの。ねえ、海岸を歩きまはつたり、そこに横になつて、波が寄せては引き、また寄せるのを、陸が一々はねのけて、かうして永遠に繰返してゐるのを見てゐるほど好きな事はありませんわ。それだつて心が躍るといふ程ではありませんし、あなたの詩集とおなじやうないつもおなじ音ですけれど、いつ迄聽いてゐても飽きやしません、わたしは自分の苦みも、自分が年をとつた事も、すつかり忘れてしまつて、幸福がいつか來るか、それとももう行つてしまつたかも分らなくなつてしまひます。こんな事はこれまで思つても見た事もない事です。それからわたしが立上つて、また皆なのところへ歸つて來ますと、わたしは身うちに力が充ちてゐるやうに感じます、もう何にも動かされもせず挫かれもしないやうな落着きを感じます。人間の事は恐ろしい海や、その海を治めておいでになる神樣の御心よりも力のないものだと思ひますから。」

「おお、ネリナ」と彼は彼女の靈に充ちた聲と、この物悲しい告白との魅力に心を動かされて叫んだ、「おまへは自分が詩人だつて事を知つてるかね、おまへの今僕に云つた事を書きさへすれば、ソフィヤがおまへに讀ませてくれた本と同じ位の慰めと喜びとを味はふ事が出來るのを？」

　彼女はほつと溜息をして頭を振つた。

「わたしは書く事が出來ません」と彼女は云つた、「たとひ書く事が出來ても、その暇がございません。わたしは何でも好きな事の出來る伯爵の奥樣ではございませんもの。絲を紡いだり、裁縫をしたり、ぬひとりをしたり、家の手傳ひをしたりしなけりやなりません。あなたはおからかひになるんですわ。何の學問も習はなくて、ただペトラルカの

本と、古い繪本と、それからあなたの詩集との外には、何一つ讀んだ事のないわたしが、どうしてそんな事が出來ませう？　ええ、それは冗談ですわ、あなたはネリナがほんの子供らしいもので、云つて聞かせた通りになるつて事を御存知ですのね。おや、太陽の餘光(ひかり)もすつかり消えてしまひました。急にみんなが灰色になつてしまひました。わたしは急いで家へ歸らねばなりません。」

彼女は歩を早めた。そして、もはや彼と歩調を合せようとは思はないやうであつた。レカナティの市(まち)の男たちが二三人、市へ歸らうとして、二人を追ひ越す時に、若い伯爵に鄭重に挨拶をしたが、その傍らにゐる少女を驚いたやうな眼で眺めやつた。それを彼女は見逃さなかつた。

けれど、彼も彼女におくれぬやうに、同じやうに歩みを早めた。

彼女は日が落ちると、頭が熱くなつて來たやうに、麥稈帽を取つた。房々した黒い髪で蔽はれたデリケエトな頭は、今や一層チャアミングであつた。小さな顔の輪郭はやさしくて氣高く、あらはな腕を組んで歩いて行くほつそりした姿は、彼の眼を絶えず惹き附けた。

「こんなに若くて、」と彼は半ば自分に云ふやうに云つた、「なぜもうこんなに老成(ませ)てゐるんだらう。」――彼の心はこれ迄になくこのかあいいものに惹かれた。それは愛であつたか、悲みであつたか、同情であつたか、それとも驚くべき美の魅力にすぎなかつたか、この寂しく咲き初めた靈(たましひ)から彼の方へと匂ひを寄せたものは？

今しも明るい金色をした月が、靑ざめた夕空に浮び出た。

「ねえ、ネリナ、あれを御覧」と彼は暫く默つて歩いて行つてから云つた、「靑春が消えてしまふと、人生はあんなに、あの空のやうに見えるのだよ。凡ては靑ざめて、靜まつて、燃え上る焔もなく、辛うじて行く道が――眠りの床に行く道筋が分るだけの光しかないのだ。これが僕の生涯だよ、ネリナ。だがおまへには、まだ美しい太陽が照してゐる。

おまへはまだ若い、そして靑春は我々あはれな人間に與へられるたつた一つの幸福なのだ。おまへはそれを臺なしにしてはいけないよ、ねえ、明るい晝間、戸を閉めて、暗い中で物思ひに沈んで、自分の心を恐れるやうになつて、日蔭の草のやうに靑くなり、病氣になつてはいけないよ。ねえネリナ、そんな物思ひは捨ててしまつて、また笑つたり歌つたり、前のやうに眩暈（めまひ）のする程でなくつていいから、おまへの血管の血が、まだ若くて溫かい事が分るやうに踊つたりするように約束をしておくれ。ねえ、おまへは僕のためにさうしてくれるだらう？」

彼女は彼の顏を眺めやらないで、重々しげに頷いた。

「それがあなたのお望みでしたら、そんなにするやうにいたしませう。でも、自分が好きでするのでなければ、むづかしいのね。あなただつて、また日向の方にお向ひにならなくちやなりませんわ、あなたもまださう年とつてはゐられませんもの。あなたが一度でもお笑ひになるのを聞いたら、わたし、また快活になるのがどんなに容易いか知れないと思ひますわ。」

「僕が！　僕は誰からも愛せられず、誰からも必要とされない不幸な人間だ！　おまへは今に分つてくるよ、ねえネリナ、おまへが僕に求める事が、どんなに無理な事かつて事がね。おまへが味はへる幸福は、僕には永遠に禁ぜられてゐるのだ。おまへは胸に燃え上る焰が、その眼から輝き出し、心は胸の中に笑ひ出すだらう、おまへは美しくて、若くて、愛らしくつて、愛せられてゐるからね。そしたら、おまへは、なぜ僕のやうな人間が、泣くよりも惡い響を立てないでは、笑ふ事が出來ぬかが分るだらう。けれど、そんな事はおまへにはどうでもいいのだよ。僕もこぼしはしない。僕は自分があらゆる人間の受けてゐる運命にあづかつてゐるだけなのを知つてゐる。人間といふものは、晩かれ早かれ、この世の夢の空しさを悟るのだ。ただ、なぜ僕が一度も若い時がなく、一度も樂しい醉ひを味はふ事の出來ない運命を授かつたのか、僕も幸福にまでつくられたのに——いやいや——僕も一度は若く愚かであつた、それ

ゆゑ僕はおまへが長くその儘でゐてくれるように、僕の詩集から學んだあの餘計な、悲しい智慧を忘れてくれるように望みたい！」

彼は立止つた。忙しい言葉に彼は息切れがした。彼女も一寸立止つて、はげしく息づく胸の上にうなだれた。

突然、彼女は頭をもたげて云つた。

「わたしは先きへまゐりますわ、伯爵ジヤコモ様。市街には閑人が澤山ゐて、何かいつもと違つた事が起ると、すぐ喋り廻りますから。わたしがあなたと並んで街を歩いて行くのを見ますと——誰だつて、あなたがわたしに仰しやつた事が、どんなに悲しい事だつたかを、本當にするものはないでせう。では、おやすみなさいませ！」

「おやすみ、ネリナ！　さあお行き！　おまへの云ふ通りだ。僕はおまへが一緒に歩いてくれた事をおまへに感謝するよ。おまへがこの世にゐて、こんなに愛らしく美しくつて、おまへの姿を見、おまへの聲を聞くのが、どんなに嬉しい事なのかをね。では幸福でおいで、僕の小さな友達よ、さやうなら！」

彼女はこの最後の言葉を、ただ遠方から聞いた、そんなに早足に、彼女は彼から遠ざかつて、黄昏れそめた通りを、もう既にかなり先きへと行つてゐたのである。彼が一つの深い溜息をついて、姿勢をととのへて、遲々とした歩みをはこんで、市街へ入つて行つた時には……

——さて、私は思はず知らず、ここまで來た、パウル・ハイゼの甘美な筆について、レカナティの夕暮の道を、かうして市街の入口まで辿つて來た。まことに我がレオパルヂを語るために、私はどうしてこのハイゼの「ネリナ」を閑却する事が出來たであらう。私をして、始めてレオパルヂに親しませてくれたのは、實にこのノヹルレであつたのだから。そして、それはまた、私の若い友達にとつても、必ずやこれと著しく異つた効果を及ぼす事はなからうと思ふ。

獨逸に於けるレオパルヂの有力な紹介者で、その詩集の飜譯者であるパウル・ハイゼは、また自ら優雅な詩人であり、靈活なノヹリストである。されば彼の筆は、他の浩瀚な研究書にもまして、レオパルヂの面影を眼前に髣髴たらしめると思ふので、殆んど全く文字通りに、その筆を追つて來たのであるが、ここで私はひとやすみしよう。そして、更にこれより溯つて、この不幸な詩人、伯爵ジャコモ・レオパルヂの生ひ立ちを語り、更にその一生の悲劇と、その文學史上の地位とを書き記す事としよう。

ここに描き出されたレカナティの地は、アンコナの南方、アドリアティックの海に近く、丘陵の上に横はる法王領の小市街で、伊太利の市街の中でも、最も退屈な市街(まち)と云はれてゐる。レオパルヂはそこで、一七九八年に生れた。彼の生涯を不幸にし、暗鬱にした彼の病氣は、必ずしも生得のものではなかつた。彼はそのはじめは、當り前の可愛らしい少年であつた、そして彼の眞面目な、夢みるやうな顏付は、町の婦人達の寵愛を得たと云はれる。けれども、十七歳頃から、變化が來た。彼の脊髓の彎曲が見えはじめて、視力が弱つて、讀書や執筆がだんだん困難になつて、はじめて失明の危險に遭遇した時には、彼は自殺を考へた程であつた。

この肉體上の苦惱は、生涯彼の身から去る事はなかつた。彼の手紙は、眼や、頭や、胃や、腸や、呼吸や心臟の故障に對する愁訴に充ちてゐるのである。けれど、かくも病弱な不自由な身體の中には、何といふ大望と、矜持と、負けじ魂とが潛んでゐた事であらう。既に子供の時の遊戲の折りにすら、彼は大將とならないでは措かなかつた。常に英雄であり、勝利者であり、また騎士的な愛をもつたタイラントであつたが、人と成つた後には、彼は世間に對して、またそれたらんとした。外部的に制限されてゐただけ、それだけ彼は內部的に——その詩作と思索の世界に於いて、力強く生きようとした。彼の弟のカルロの語るところによれば、おなじ部屋に寢てゐた彼は、その兄が夜屢々寢床から出て、消えかかつてゐる燈火の下で、机に向つて、深更までうつむいて何か讀んだり書いたりしてゐるのを見たと

いふ。このあまりに強烈な精神と、あまりに脆弱な肉體との相剋こそ、このデスペレエトな勤勉刻苦こそ、彼の生涯を悲壯なものとするのである。彼の生涯を一篇の悲劇とするのである。

レオパルヂの不幸の他の原因は、彼が異性の知力と美との魅力にあまりに感じ易いパッショネエトな心を有つてゐた事であると一評家は云つてゐる。つまり、レオパルヂが單なる學究でなくして、眞の詩人であつたのが、彼の不幸だといふのである。まことに、それは思ふにあまる重い試練であつたであらう。"Give me love, love, love!" といふ彼の弟カルロに宛てた手紙の中の叫びは、ストイック風な諦念の、厭世主義の哲學者の中に潜むディオニゾスの氏子の面目を傷ましくも想起せしめずには措かない。

はじめ彼が未だ二十歳の折りに、その無經驗な心を囚へたこの烈しい感情を、彼はその戀の日記の中に、不氣味な程の明察を以て書き記した。當時彼の相知つたジェルトリュウド・ラィザリと呼ぶ美しい若い婦人が、彼の心を動搖させて、その戀の――彼の所謂る「病氣」の――感情は、彼に一つの苦痛の深淵を窺はしめた。しかも、彼はその數日後には、机に向つて自分の感情を分析しようとしてゐる。

後年の彼の女性に對する見方は、著しく皮肉になり、侮蔑的になつて來たが、なほその內心の渴望の消え去らなかつた事は、彼が教養ある婦人との交誼に多くの價値を置いたのでも知られるのである。一八二六年にボロニヤで知つた伯爵フランチェスコ・マルヴェッツィの夫人テレサとの交際が、「彼に尠からぬ喜びを味はせた事は疑ひがない。しかも、それは固より友誼以上に進む事はなかつた。第三の、そして最後の激烈な情熱は、フイレンツェに於けるそれで、化學の教授アントニイ・タルジョオニ・トゼッティの妻で、美しいファンニイの名で呼ばれてゐた婦人に對するそれであつた。この美しい女性の面影は、彼の『アスパシア』中に歌はれてゐると云ふ。しかも、レオパルヂは反省の冷たい光に照らして、その盲目的な情熱を鎭め得るだけの克己力をもつた人であつた。彼が若しも或人の云ふが如く、「哀しんで毀

る」の人であつたならば、彼の人物の悲劇的尊嚴は失はれたであらう。

實際、レオパルヂはその熱烈な詩人的天分にも拘はらず、理性の人であつた。彼はその確固たる明晰な理性力によつて、常にその不幸と逆運との支配者たる事を失はなかつた。そして、彼はその破滅から救つたものは、彼のペシミズム、彼の哲學そのものに外ならなかつた。これは宛かも彼の同感者であつたショオペンハウエルの場合と同樣である。「彼は自殺の考へを、間斷なくまじろぎもせずに死そのものを凝視してゐた事によつて克服し得た」とカルル・フォスレルの云つたのは至言であると思ふ。

サント・ブウヴは、彼を「詩人中の最も高貴なる、最も沈靜なる、最も嚴肅なるもの」と呼び、「彼こそ英雄的なる希臘の、自由なる羅馬の、眞の古代人である」と評してゐる。恐らくそれは動かぬ批評であらう。英獨の評家中には、彼の悲觀主義のために、稍や貶黜の意向を示すものもないではないが、しかも彼の詩篇の古典的完成と、抒情的高揚とを、また、彼の散文の稀有なるスタイルの完備とを否定し得るものはない。ニイチエがメリメエ、エマスン、ランダアと共に、彼の散文の大家として敬意を拂つた事は、人の知るところであらう。そして、これは主としてかの獨創的な"Operette morali"（敎訓的一幕樂劇）の哲學的對話と、"Pensierie paralipomeni"（斷想と遺稿）とによるのである。これは既に柳田泉氏の明快な譯があるから、（前者の大部分は『大自然と靈魂との對話』の題下に、後者の一部はメエテルリンクの『人生と草花』の附錄として）志しある人は一讀せられるとよい。私もまた彼の詩に劣らぬ愛着を以て、この對話に親しむ一人である。心理分析家としてのレオパルヂは、恐らくラ・ブルュイエール、シャンフォール以來の人であらうと思ふ。

ハイゼの取扱つた時代は、未だ彼の生涯の眞の嵐の前にすぎなかつた。そして、それは痛烈なる彼の實際經驗よりも、少しく和げられてあるやうに感ぜられる。その後、レオパルヂは、ミラノの書肆ステルラのために古典纂修の仕

事をして口を糊し、更にボロニヤ、フィレンツェ、ピサ各地に流浪して、つぶさに生活の苦を嘗めたが、後ち少壯の文學者アントニオ・ラニエリと相知り――このラニエリのレオパルヂの生涯に於ける意義は、キイツに於けるセヴアンのそれであつた、否それ以上であつたらう――ナポリなる彼の家に、晩年の七年間を送り、三十九歳にしてその地に歿した。ラニエリが彼の苦痛に重くなつた目蓋をふさいでやつた時には、彼の肉體は酷使し盡されてゐたが、その精神はなほ十分の明晰を保つてゐたといふ。「窓をあけてくれ、もつと光が見たい！」といふのが、彼の最後の言葉であつたと傳へられる。

これが彼の友なる詩人、伯爵アウグスト・プラアテンをして、「偉大なる伊太利の詩は、ダンテの唇に生れて、レオパルヂの唇に死んだ」と云はしめた不幸な詩人の一生の輪廓である。

――然し、かのネリナはどうなつたであらうか？　レオパルヂと彼女との關係はいかにして終つたであらうか？　それは讀者の知らうと思ふところであらう。ネリナがレオパルヂの生涯にさして重大な役割を勤めた女でない事は既に分明した。然し、彼女はまたハイゼの空想の生んだ假空の人物でもない。それはこの物語りの終に於いて、自から了解せられるだらう。然し、それを前のやうに、文字通りに移して來たのでは、「レオパルヂ」だけで、この書の三分の一以上を占めてしまふであらう。で、少しく惜しい氣はするけれども、その物語は、大筋だけを極くざつとかいつまんで話して見よう。

家へ歸つて行つた詩人は、いつもよりは快活に、兩親に挨拶し、妹の額にキスをし、弟たちに手を差し伸ばしたが、いつもよりも一層寡默に、食卓を急いで離れて、自分の部屋へ引取ると、直ぐバルコンの扉をあけて、月光の蔭になつてゐる差向ひの小さな家――ネリナの家を眺めやつた。どの窓にも燈火(あかり)一つ見えない。月光の中に空しく立つてゐ

る詩人の胸には、萬感交々に起る。ふと見上げると、彼の頭上には昴がかかつてゐた。眼の痛くなるまで、ぢつとそれを見上げてゐるうちに、彼の心は充ち溢れる。急いで部屋に入つて、蠟燭の火をつけて、彼は次ぎの詩を書きつけるのである。

美はしき星よ、昴よ、おもひきや、われ、
わが父の園生の上高く輝やきならぶ
おんみらとまたかくも禮せむとは。
わが既に童の折りより住み來つる、
またわが喜びのいち早き終りを見つる、
この家の窓よりかくもおんみらと語らんとは。

…………………………………………

このあと數十行の長い句を書き記してのち、彼は暫く寢臺に身に凭せて、眼を閉ぢた。寺院の塔から十時の鐘の音が打つた。もう戸外にも屋内にも何の物音もない、彼はまた身をもたげて書き續ける。

風はもて來る、この小さき市街の塔より
時告ぐる鐘を。思へば、この響こそ、
わが童どき、わが暗き部屋にこもりて、
身をとりめぐる恐れの中に眠りもやらで
朝待ちかねし夜々のわが慰めなりき。
われをめぐるもの、わが眼、わが耳に入る

ものの凡ては、われに一つの面影を齎らし、
いと甘き思出ぞ、心に喚び起さる。
さはれそが中には、今の苦しさ、過ぎにし時の
あだなりしあこがれぞ、苦しくも混ぜられたる、」
我が事過ぎぬとの苦きその思ひこそ！——

……………………………………………………

おお汝等凡ての希望よ、汝やさしき青春の日の
まぼろしよ！　心はつねに汝等にかへる。
いかに時は急ぐとも、いかに思想と感情とは
變ずるとも、かつてわれは汝等を忘れざりき！
まぼろしよ、われは知る、名譽と光榮とは。
幸福と快樂とは、ただ空しき願ひのみ。
益もなき生はあだなる苦痛。さればこそ、
たとへわが歳月はすべて空しからむとも、
わが死ぬべき命はくらくすさびてあらむとも、
幸福は——われはよく知る——われに僅かを奪ふのみ。
されどああ、わが汝等を思ひ出づるごとに、
汝等青春の希望よ、かつてかくもやさしく

わが前に漂ひしものよ、われはわがみすぼらしくも
悲惨なる生を思ひて、かくも多かりし美しき希望のうち、
ただ死のみが、今日なほわれにのこれるを知る。
心はをののき、かかる運命にはただ一つだに
慰めのあらじとぞおもふ………

……………………………………

その時、不意に戸外に、やはらかな少女の聲が、南方の小唄を、戀の歌をうたひはじめた。レオパルヂは飛び上つて、バルコンに出た。彼のよく知つてゐるその聲は、彼の窓より少し低いかの窓から起つて來るのであつた。微かな灯かげに、小鏡の前で髮を束ねてゐる彼女の姿が見えた。

「ネリナ!」と詩人が呼んでも、娘は聞えぬ風をして、なほも歌ひ續けたが、忽ち窓のところへ出て來た。そこで再び、二人は月光の下で話をはじめた。

詩人が「今日はおまへにやる菓子がないよ」と云ふと、ネリナは「わたしそれより外のものを下さい、今日あの丘の上でお書きになつた詩を言つて聞かせて下さい」と云ふ。それでレオパルヂがそれを持つて來て、讀んで聞かせた。すると少女は、「この海に難破せんことぞわれにたのしき!」と小聲で繰返した。そして、「どうぞそれをわたしに下さい」と云つたので、彼がその紙片れを自分の詩集の間に挾んで投げてやると、彼女はその代りに、その部屋の石竹の花を殘らずむしり取つて、その長い黒髪の一束を鋏で切り取つて、それで花を卷いて、彼のバルコンに投げてから、「おやすみなさい」と云つて、窓を閉めてしまつた。

その夜、彼は眠らなかつた。

すると、その翌朝、思ひがけなくネリナが父親のルイギが彼を訪ねて來た。轟く胸で、この帽子造りを迎へると、その用向きは、自分の家にあるラファエルの畫が本物かどうか鑑定してほしいと云ふのであつた。が、實際の用向はその後にあつた。雜談の末、彼は自分の零落した身上話をした上で、アンコナの從兄弟の息子のアントニオが嫁に貰ひたいと云ふのに、娘がどうしても聽かないといふ事を話して、娘は伯爵樣を大變尊敬してゐるやうですから、伯爵樣のお言葉ならば何でもききませうから、どうか娘をさとして下さらないかと云ふのであつた。

それでその日の午後、詩人は帽子造りの家に出かけて行つた。彼を出迎へたネリナの母親は、一見、その良人よりもいい家柄の出である事がわかつた。彼女の靜かな靑白い顏と黑い眼とは、娘を想はせた。この訪問の口實になつた繪は、勿論、問題になる程のものではなかつた。そこへネリナが入つて來た。そしてこの思ひがけない客を見ると、眞赤になつて、微かな叫び聲をさへ擧げた。けれど、ただ手で髮を一寸撫でて見ただけで、すぐ彼女は平靜になつて、父親の繪についての勿體振つた說明を笑ひさへもした。

母親が部屋の外へ出て行つてから、まもなく父親も妻に呼ばれて出て行つた。レオパルヂは、その部屋にネリナと二人ぎり殘された。やがて彼は彼女の手をとつて、

「ネリナ！　おまへは僕を少しでも信じてゐてくれるだらうか？」と云ふと、

「ええ、すつかり信じてますわ」と彼女は淸らかな眼で云つた。

それから彼は、おまへはお父さんお母さんを愛してゐるかといふ質問から切り出して、だんだん彼女を說きはじめた。

「おまへのお父さんの話では、そのアンコナの從兄弟といふのは、大變しつかりした人で、この結婚はみんなにとつて幸福な事だといふのに、おまへはどうして承知しないのだえ？」

話が結婚の事になると、彼女は顔をそむけて、俯向いてしまつた。やがて、彼女はレオパルヂが、「その人はおまへを愛して、幸福にしてやらうと云ふのに、おまへはどうして幸福にならうとは思はないのだえ？」と云つた時、その言葉を遮つて、

「わたしに幸福？」と彼女は赧くなつた顔を擡げて云つた、「ジヤコモ樣、あなたはそれを御存知の筈ぢやありませんか、誰れでも本當はただ自分の幸福だけしか考へないと云ふ事を……」

彼女はよく詩人の言葉を知つてゐた。それで彼はたうとう閉口して、では、誰か外に愛してゐる人でもあるのかと訊く。すると彼女は頭を振つた。そして、かのアンコナの從兄弟を外の若い男よりも嫌ひなのではないと云つた。ただ三ケ月前に、わたしはソフィアからあなたの詩集を借りて讀みました、そして……と彼女は一寸默つてから、ぢつとかの繪の方を見つめながら、頰を赧くしながら、歌ひはじめた。それはレオパルヂ自身の、初戀の惱みをうたつた詩であつた。

「あなたはわたしを狂人(きちがひ)だとお思ひになつたでせう」とやがて彼女は突然歌をやめて云つた、「ジヤコモ樣、わたしはどんなにこの初戀の詩を讀んだとき、これまでにないやうな嬉しいやうな悲しいやうな氣持になりましたでせう。わたしはわたしが、あのアントニオを、これ迄愛した事がなく、これからも愛しない事が急にはつきり分りました。そして、本當に愛するとはどんな事かも分りました。くり返しくり返し讀んでゐるうちに、あなたのお感じになつた事が、その儘分るやうな氣がしました。この苦しい苦しい喜びは、この世のあらゆる喜びにも超えたものだといふ事も分りました。」

かう云つて、彼女は窓邊へ行つて窓越しに天の方を見上げた。レオパルヂは彼女の肩に手を觸れて、窓から連れて來て、彼女の夢想を取り去るために、不幸な詩人の世界が、決してそんな望むべきものでない事を云つて聞かせた。

すると突然、彼女は彼の方に向いて、彼の頸に飛び付いて、はらはらと涙を流しながら、燃えるやうな顏を彼の肩にうづめた。

　彼は愕然として、一瞬、氣を失ふやうに思つた。烈しく痙攣する身體をその胸に押し付けながら、彼の口は彼女の軟かな髮の上に憩うた。彼の心は苦痛と悅樂とに破れんばかりであつた。が、彼は正氣に還つた、同時に斷つやうな苦痛の感じが氷のやうに身うちを走つた。

「ネリナ」と彼は懸命の力で起き上りながら囁いた、「ねえ、正氣におなり、僕はあはれな人間だ、幸福を避けて、惱みから惱みに走る逃亡者だ。さあ、もつと強くおなり……僕はおまへがこの僕に幸福を與へてくれた事を決して忘れはしないから……」

　彼女はその手を彼の身體から離した。その顏は眞蒼になり、脣は開いて、白い齒はあだかも叫びを抑へてゐるやうに喰ひしめられてゐた。

「僕は行かなければならぬ」と彼は名狀し難い努力をもつて、やつと云つた、「それが僕の宿命なのだ。われわれはもう二度と會ふ事はないであらう。けれど、おまへの思出が、永遠に僕の胸から消える事のないために、僕にたつた一つ約束をしておくれ」

　彼女は彼の方に振向かないで、ただ黑い睫毛を動かしたばかりであつた。

「僕が行つてしまつたなら、他の人と同じやうに生活をするやうに約束をしておくれ、ねえ、ネリナ、おまへはまだ若いのだ、人生はもつと華やかに變つてくるのだから……」

　彼は彼女の方に手を差出したが、彼女はそれには觸れなかつた。彼女は暫く沈思してゐるやうであつたが、深い溜息を一つして、そのすらりとした身體を一寸振つて、彼の靈にしみ通るやうな聲で云つた、

「さうなるやうにやつて見ますわ……あなたのために……では、さやうなら！」

かう云つて、彼女はゆつくり部屋を出て行つた、一度も彼の方へ振返る事なしに。

彼女の兩親が再び部屋に入つて來た時、レオパルヂは窓邊に立ちながら、ぢつと思ひに沈んでゐたので、暫くは二人の來たのにも氣が付かなかつた。やがて彼は、よく云つておいたから、彼女も考へるに違ひないから、あまりに急に迫るやうな事をしないでくれるやうにと、くれぐれも頼んで、二人の手を握つてから別れを告げた。母親は眼に涙をうかべてゐるし、父親は感謝のお辭儀をあまた度びして、彼を送つて來た。レオパルヂはルイギの家を出てから、上の窓を見上げたけれど、それは閉まつた儘であつた。

その窓は、その晩もその夜も開かなかつた。ただ翌朝早く、若い伯爵を連れに來た馬車の音のした時に、青褪めた顏がその窓硝子の後に現れた。旅立つ人は、家族の者の抱擁から身を引放して、出發する時に、馬車の中から今一度その小さな窓を見上げた。そして、そこに小さな手が窓枠の上に組まれてゐるのを見た時、再びとは會ひ難い事の苦痛が、彼の心を貫いた。彼は後へ身を投げて、涙の湧き上る眼を兩手で蔽うた。

彼はこの慌しい出發の口實には事を缺かなかつた、が、兩親をなだめるための直ぐ歸るとの約束は守れなかつた。重い病氣が彼を襲うたのであつた。彼はピサで冬を過した。そして、家へと努めて手紙を書いた。パオリイナへの手紙を書く時は、いつもネリナの事を訊ねようと思つたが、わざと差しひかへた。春になつて、やうやくレカナティの人人の安否を訊いた末に、あの美しく歌ふ小さな隣りの娘の上に言ひ及ぶ事が出來た。

パオリイナの返事には、隣家の小さな歌女（うたひめ）は、あの夏以來歌はなくなつてゐましたが、この春のはじめに、この可哀さうな娘は永遠の沈默の庭へ搬ばれてしまひましたとあつた。レオパルヂはこの報知を得た後の數日は、親友にも會はないで引籠つてゐた。

次ぎの年になつて、彼はやうやくその青春の希望の墓場を訊ねる氣力を得た。彼が再びレカナティの自分の部屋に入つた時、かの窓に面したバルコンの戸を開ける勇氣がなかつた。重い悲しみの夜を過して、朝方僅かに眠つて起きたところに、再びあの折りのやうに戸を叩いて、かの隣人のルイギが入つて來た。彼はあの折りからみると十年も年をとつたやうに見えた。顔には皺が寄り、髮は白くなつてゐた。彼は元氣のない聲音で、伯爵樣をまたも煩はしてすまない事のお詫びをしてから、「實はまだお覺えでございませうが、私の娘のネリナめが……あれもたうとうなくなりまして……」といふのをきつかけに、悲しい親心を述べたあとで、そのネリナが、なくなる前の夜、母親を傍に呼んで、若しわたしが死んだ後で、伯爵ジャコモ樣がまたこの市街へお歸りになつたら、この袋をお渡しして、ネリナがよろしく申しましたと傳へて下さいと申しましたので、母はそれを大切に藏つておきました。あれも娘が伯爵樣をどんなに尊敬してゐましたかをよく存じてをりますので…… 娘はあなた樣の詩集を枕の下に入れてくれと云つて、その上でなくなりましたやうなわけで……これがその袋でございます」

かう云つて彼はポケットからハンケチに包んだ小さな四角な袋を取出して、深く心を動かされてゐる詩人に手渡した。それは黑い絹切れで巧みに縫ひ合せ、金絲で緣を綴つて、その一方には小さな月桂樹の葉の輪を緣の絹で縫ひ取りした眞中に、金絲でLの字を出してあつた。そして、その袋の中には、大切に折つた一葉の紙が入れてあつた、それは彼があの晩に、かの日丘の上で書いた詩を彼女に書き寫してやつたその紙であつたが、その詩の最後の行は、細い鉛筆で、三重にアンダアラインが引いてあつた、宛かも彼女がこの言葉をどんなに屢々唱へたかを彼に知らせようとするやうに——「この海に難破せんことぞ、われにたのしき!」と……

夕が來て、再び昴が眠れる街の上に輝いた時、レオパルヂはバルコンの上にすわつて、膝の上にマップを開けた、その中にはかの長い思出の詩が書かれた上に、かの幸福な夜の記念が見出された。石竹の花束は、花はすつかり萎れ

て、からからに乾いてゐたけれども、その黒髪の紐は、彼がそれを持上げて眺めた時、ランプの光に艶々と輝いた。それらのものは、かの折りに、あまりに急いだために、彼は置き忘れて行つたのである。その記憶が彼の苦痛を一層鋭くした。

眞夜中の鐘の打つた時、彼の上には一つの靜けさが來た。彼はそのマップを取つて、彼の『思出』の長い告白の下に、なほ次ぎの詩句を書き記したのである。

　あはれネリナよ！　いかなれば、汝が思出を
　ここなる人々はつひに語らざる？　いかなれば、
　わが心より汝れは消え失せしか？　何處へ行きし？
　いとしきものよ、ただわれのみ、ここにひとりして
　今もなほ汝れを思ふに。ああ、汝が故郷は、
　また汝れを見じ。かつて汝がわれと語りし
　その窓は、今はた星の光りを覺束なくも
　ただ悲しげに映せるのみ、中はも空し。
　何處へ行きし汝は、汝が聲を、いま、
　われは再び聞くを得じ。汝が唇より出づる
　遠き聲音のわれに迫りて、わが血を
　胸より頬へとのぼらせしかの日のやうに。
　はや過ぎぬ！　過ぎ去りぬ、汝が生は、

いとしきものよ、汝れは逝きぬ。
今また異（こと）なるもの來りて、この世をわたり、
この匂はしき丘に住むならん。
おお、速かに汝（なれ）は逝けるよ、汝（な）が生涯は
ただ夢の如くなりき！　汝がかしこにて踊りし時、
喜びに汝が額は輝き、眼には思ひも深き
安らぎの、青春の光の輝きしを――
そのとき運命は、いち早くそをば消しぬ、
今ぞ靜かに汝れはやすらふ。ああ、ネリナよ、
常になほわが心には、古き愛こそ消えやらぬ。
あまた度び、祭りに、人のつどひの中に、
われはみそかに自ら云へり、おおネリナよ、再び汝れは
踊りにも祭りにも、身を飾るなく、交る事なしと！――
かくて五月來りて、綠の枝と善き歌とを
愛する童（わらべ）のその少女子（をとめご）にささぐるとき、
われは云はん、ああネリナよ、汝（なんぢ）のためには
春は再び還らじと、愛は再び還らじと！

…………………………………………

ハイネと墺太利皇后

ハイネについて語りたい。

けれども、この詩人の生活と、その天分と苦惱とについては、既に屢々語つたし、また、これからも、もつと全面的に、これを描出したい私である。

で、ここでは、彼そのものではなしに、彼の投げた光彩について、彼に與へられた一つの禮讃について語らうと思ふ。

世界大戰がおこつた時、交戰國の王室について、新聞雜誌に樣々な記事が現はれた中で、最も興味のある筆をもつて語られたのは、今は絶えた墺太利の王室、ハップスブルグ家の不幸な歴史であつた。歐洲の王室中最も古い由緒ある歴史をもつたハップスブルグ家は、また最も不幸な王室で、代々不祥な事件が續いたが、中でもあの不幸な老帝フランツ・ヨセフの皇后エリサベエトの最期こそ、今なほ懷古の詩人の心を動かすものである。墺匈國の國民から慈母のやうに愛され慕はれた皇后は、一八九八年九月十日、瑞西で、伊太利の無政府主義者ルイギ・ルケニの匕首のもとに斃されたのである。

皇后はバイエルンのキッテルスバッハ大公家の出であつたが、その維納に嫁せられる時の國民の歡歌を、ハイネの作のやうに、かの歐洲戰當時の記者の筆で誤り傳へられた位、皇后のハイネに寄せられた傾倒の情は有名なものである。

皇后はまだ文學に對する嗜好もめざめない時分から、ハイネを知つて、年ふると共に、いよいよハイネに惹き付けられた。ハイネの詩の中に、皇后自身の苦惱と幻滅とが、さながらに見出されたからである。

皇后は後にハイネの全著作を讀み、詩集の外では、特に、その旅行記を好まれた。そのハイネを愛好されたのは、第一にハイネの卒直のためであつた。「ハイネが大部分の詩人と異るのは、そのあらゆる僞善を輕蔑するところにある。彼はいつもそのありのままの自分を示し、その人間らしい性質と缺點とを決して隱さない」と皇后は書かれてゐる。

ハイネに對する愛好は、皇后を驅つて、獨逸の一都市に、彼の立像を建立する計畫を立てさせた。然るに、獨逸聯邦の宰相ビスマルクの一翰の書は、維納の內閣を驚かした。その中でビスマルクは、友邦國の皇后陛下が、我々のホオエンツォルレルン王家を嘲弄した詩人を、公けに祝賀されるのには驚愕してゐると書いた。そのために、獨逸國內にハイネの立像を建てる企ては中止となつたが、皇后はそれに報いるため、大理石像をそのコルフ島の離宮の前に建てられたのである。

それは當時、丁抹の彫刻家ハッセルリイスが、羅馬でハイネ像の原形を完成した報が傳はつたので、皇后はそれを直ちに大理石にうつしてくれるやうに彫刻家にたのまれた。かくてその愛する詩人の像は、アヤ・キリアーヒ山下に建てられたのである。詩人の眼は海に向けられてゐて、その膝の上に置いた手には、彫刻家が皇后の依賴によつてハイネ自身の詩を彫りつけた一枚の石板を持つてゐる。その詩句は、かの「詩の本」中のすぐれた詩中の一節である――

そんなにわたしの目をくもらせて
一體どうしようと言ふのだらう？
このさびしい涙は昔から
わたしの目からはなれない。

この『詩の本』は、就中、皇后の愛讀せられたもので、毎夜九時に、皇后が寢床に就かれるとき、その枕もとに置かれたものは、實にこの『詩の本』であつた……

曾つて、未發表のハイネの諷刺詩の原稿を發見した獨逸のある文學者が、政治的の理由から、これが公表を躊躇した時、「ハイネの讀者は一の國民からではなく、あらゆる國民から成立つてゐる、彼の讀者は彼のあらゆる作品を知るべき權利を有つてゐる」と云つて、彼は勵まされた程の皇后の、かうしたハイネの著作への愛好は、直ちに人間としての彼に對する興味と嘆賞とになつた。巴里のモンマルトルなるハイネの墓には、屢々、「皇后エリサベエトよりその愛する詩人へ」と記された花環が捧げられた。その巴里に行啓せられた時には、手づから詩人の墓を飾られた。ここにこの墓參の記念の詩がある——

わがいためる人よ、わがつひに相見ざりし人よ、
ただそのなきがらのみ、わが跪けるもとにぞ憩ふ。
そが惱める魂もつひにその幸福を得ぬ、
「惱み疲れしものはわれに來れ」と
のたまへる主のみもとに今はとどまれば。

更に彼の詩をより詳しく知るために、皇后は自らハムブルグに、當時九十歲の老齡であつた、詩人の妹シャルロッテ・フォン・エムデンを訪ねられさへもした。

「皇后樣はわたしのところに、皇后樣ではなくて、愛らしい娘さんのやうにおすわりになられた」とこの老婦人は語つてゐる、「どんな批評家も、どんな傳記者も、エリサベエト皇后がわたしの兄を理解して下されたやうには理解した人はない」とも云つてゐる。

これ程の愛、これ程の理解――しかも、それは決して、かのハイネを愛讀する一般の女性に見えるやうな、ありふれたセンティメンタルな詩人としての愛好ではなくして、幻滅の詩人として、皮肉の詩人として、譏笑の詩人としてのハイネの眞の特質に對する理解であつたのだ。まことに、ショオペンハウエル全卷の新希臘語への巧妙な飜譯者であつた皇后、シェクスピアの『眞夏の夜の夢』のティタニアとその驢馬の頭をした愛人との畫をその宮殿の壁にかけて、「私たちの愛してゐるイリュウジョンの本當の姿は、この驢馬の頭なのですよ」と云つた皇后は、確かにハイネを眞に理解されてゐたに違ひない。

皇后自身の詩で世に知られてゐるものは、極めて少數である。そのうち次の詩は、イシュル附近のマリア像の銘として書かれたもので、皇后の作とも知らないで、通行のものの讀んで行くものである。

おお、あなたのお腕をおひろげになつて、
マリアさま、あなたのお膝もとの
この谷間の家をまもりたまへ！
おお、この小さな巣に祝福を垂れたまへ！
どんな嵐が吹き荒れようと
あなたの御加護のもとなら安らかです、
なさけぶかくまもつて下されば。

また、匈牙利の片隅の或る温泉に滯在中に、そこの上の山頂に立つてゐる牧者の小舍に行つて、そこの卓子の上に、鉛筆で書かれた次ぎのやうな匈牙利語の詩も知られてゐる。

この世のものはみな變つてしまふ

まことといふのも空しい言葉、
いつもまことの變らぬものは
けだかい自然よ、おまへばかり！
おまへにたよるものは仕合せものよ、
かなしい失望を味ふことはない、
おまへのまことのためならば
その慰めのためならば、
わたしは何でも惜しまない。

詩人は崇拜者を求める。詩人はいかに賞讃にあこがれる人間であらう。詩人にとつては、喝采がその感興の源泉であるかとさへ思はれる。現に我國の詩人の中にも、その眞僞は知らないが、賞讃がなければ詩興が湧かないといふ逸話の傳へられてゐる人さへある程ではないか。

しかも、詩人は彼が本質的な詩人であればある程、かかる幸福を期待し得ない。ハインリッヒ・フオン・クライストの破滅は、この不愛好に基づくとはニイチエの觀察である。ニイチエ其人は、かかる一般的愛好を一蹴して、山頂の人の光輝ある孤獨寂寥を誇つたが、しかも彼の書翰は、かかる矜持を全く裏切る言葉に充ちてゐる——詩人は弱い！

そして、より幸福な場合にも、彼の報酬はあまりに遲く來る。世はその無視し、誹謗し、拒絕した詩人の墓を、記念の花環をもつて飾るのである。見よ、かの眞の詩人、薄倖なりし石川啄木を。「石をもて追はるる如く」追はれし故郷の澁民村に、彼は今や一つの記念碑を得てゐる。彼が苦難と侮蔑とに戰はねばならなかつた函館の市街（まち）にも、今一つ

の記念碑がある筈である……

ハイネは啄木ほど不幸ではなかつた。然し、彼の生涯も、賞讃や愛好よりも、惡罵と誹謗と迫害とに對する、反抗と戰鬪とによつて過されたのだ。そして、彼はこれ程のよき理解者のある事を知らずして死なねばならなかつた……そして、彼は今なほ獨逸國内に、一つの記念像をも有つてゐないのである。

漂泊の詩人レナウ

日はかたぶきけりあなたの岸に
ひねもすつかれしひるもねむりぬ
この池の面にみどりの色の
ふかくもうつれる靑柳のいと

はるけき空なる人をしのびて
袖はうるほひぬ涙の露に
ここにはあはれに柳そよぎて
夕暮のかぜにふるふあしの葉

深くもつつめる我かなしみを

さやかに照らせるなつかしの君
あしと青柳の葉をもれきて
照わたるほしの影のごとくに

『あしの曲』その一、『於母影』より

名狀しがたい一つの渴望が、一つの惝怳が、彼を先きへ先きへと驅り立てて、しばらくも一所にとどまらしめぬ。心は絕えず不安と憂悶とに鎖されて、遙か彼方の地平線の上に、その幸福の微光を望んで、足はいかに疲れ、身はいかに困憊するとも、彼の心はただ先きへ、先きへと叫ぶ。

これがあやまつて此世に生れ來つた人間の運命である。彼の故鄕は、思ふに此世の何處にも存しないであらう。彼の心は常に、今日にはかからなくて、明日にかかつてゐる。何處にあつても、彼は at home ではあり得ないと共に、いかなる時にも、彼が「とどまれ!」と呼び得べき時はない。

かくて彼の生涯は絕え間なき流浪であり、漂泊であると共に、彼の內部生活もまた、絕えざる不滿と、憧憬と、希求とに終始しなければならぬ。これがこの世の異邦人(ストレンヂア)の運命である。そして、我がニコラウス・レナウはかやうな種類の人であつた。彼は言葉の二樣の意味をもつて、漂泊の詩人と呼ばれるに値してゐる。

この憂鬱の詩人の本名は、ニコラウス・フランツ・ニイムブシュ・エドレル・ツウ・シュトレエレナウで、ニコラウス・レナウとは、その長い名の前後だけを取つた筆名である。

彼は一八〇二年、南匈牙利の Csatád に生れた。父方からはスラヴと獨逸との、母方からは匈牙利の――彼の血管には、この三民族の血が混じてゐた。早く父を喪ひ、或る醫師のもとに再嫁した母と共に、十六歲まで、アルトフェン、トオカイ、ペスト等の匈牙利の各地を轉々し、のちキインに出て、學窓に入つたが、一つの科目を倦まず專攻す

ゐ事は、心多岐なる人、彼の堪へ得るところではなかつた。

靑年時代のレナウは、後年のやうな憂鬱家ではなくして、學友とともに宴樂し、愉快な冗談や、遊びを好んでゐたと云ふ。——もつとも、エムマ・ニインドルフの記事によると、後年の彼も、隨分ハイネ風な皮肉と冗談を弄した事もあつたやうであるが——それが別人のやうになつたのは、彼の友にして妹婿なるシュルツの語るところによると、當時彼が戀してゐた、ベルタと呼ぶ美貌の外には何の長所もない一少女の不純な愛に對する幻滅に基づくといふ。レナウはこの女と同棲して、子供まで出來たが、レナウが彼女のふしだらに幻滅すると同時に、彼女もレナウに見切りをつけて、富裕な希臘人の商人の持ち物になつたといふ。

レナウが詩人としてのキャリヤアをはじめた後、南獨シュワアベンに赴いて、ストゥットガルトの地に、ウーランド、シュワブ、ケルネル等シュワアペン派の詩人に認められ、その歡迎の客となつた日に、シュワブの姪のシャルロッテ・グメリンと呼ぶ愛らしい少女に、まじりのない愛を捧げられて、自分でもそれを受けながらも、つひにその愛を完うするに至らなかつた彼の不可解な逡巡をも、このベルタより受けた深甚な印象によつて解釋する人もある。

レナウの『蘆の曲』五章は、このシャルロッテに捧げられたもので、そのため彼女はその交友の間に、「蘆のロットヘン」と呼ばれてゐたといふほどで、彼は彼女を尠からず愛してゐた。それで彼の友のクレンムは、ストゥットガルトの附近に小さな地所を買つて、ロッテを妻に迎へるやうにと彼に勸告した。けれども、レナウはそれとは反對に、この少女を斷念しようと決心した。彼は自分が幸福でなく、他人を幸福にし得ない事を感じたのである。當時、彼はその友マイエルに宛てて、「私の內奧の本質は悲哀であり、私の愛は傷ましい諦念である」と書いてゐる。

かうしてこの可憐な少女は、レナウより引離すために、旅に連れ行かれて、詩人は憂鬱と銷沈との中に、悄然として立つてゐた。けれども、このレナウの不可解な態度のために、仲に立つたシュワブ夫妻は、困難な立場に置かれねば

ならなかつた。その結果、この二人の詩人の間の交情も疎隔しはじめた。レナウはシュワブの家を遠ざかると共に、その終生の善き友であつたラインベックの家に隠れ家を見出し、特にラインベックの妻のエミリイによつて、利己心を絶した、戀愛ならぬ友愛の柔手(やはで)を見出した。彼女の家の一室は、彼のために與へられて、ストゥットガルトにゐる時は、彼はそこに住んだ。

レナウはその地で詩人としての名聲を確立した。「ヰインでの三年よりも、この地の三ヶ月で一層有名になつた」とシュルツに書いた通り、ここでその最初の詩集を公けにし、その天分を一般的に認められる事が出來た。しかも、深い精神的のディプレッションは、當時、彼の上にのしかかつてゐた。彼がその熱した心を冷やさんがためにはじめたスピノザ研究も、反つて一層の意氣沮喪を結果したにすぎなかつた。彼の心に今や影の如く伴ふ憂鬱と絶望とは、益々昂進して來た。そして、彼は突然、アメリカに渡らうといふ計畫を立てるに至つた。しかも、彼は新國土については、僅か二三冊の書物を讀んだのみで、殆んど知るところはなかつたのである。自由の國、溌剌たる人間、爽快な生活、美しき自然、とりわけ壯大な原始林と、ナイヤガラの壯觀とが、彼の空想を刺戟したのである。

けれども、一八三二年の十月、バルティモアに上陸した時には、彼は最初の計畫通り五年間そこに止まらうと思ふ代りに、即時に歐羅巴に歸らうと思つた。ただ、原始林とナイヤガラとを見たいと云ふ一念が彼を引止めた。バルティモアで、クウルヘッセンから來たヴァイオリンに堪能な一學生が、一緒にアメリカ、濠洲、東印度を演奏旅行をしないかと彼を誘つた。漂泊性に富んだレナウは心動いたが、それを斷つて、一頭の白馬を買ひ入れて、それに跨つて、オハイオ州へ乘り込んで行つた。然し、そこではすべては失望であり、幻滅であつた。夢想してゐた共和國の自由も、望ましいものには見えず、そこの生活は餘りに乾燥無味で、散文的で、人間は餘りに殺風景であつた。その上、オハイオ州で送つた冬は嚴しく、氷雪を冒しての原始林探勝の結果はロイマティスの痛苦となつた。

ペンシルヴァニアで若干の土地を購つて、耕作に從事しようとしたが、彼には經營の才も、刻苦の忍耐も缺けてゐた。で、それを小作人の手に委ねて、彼は白馬に乘つてナイヤガラを見物に出かけた。この大瀑布の印象は彼の詩の中に適當の表白を見出してゐる。かうして、彼は翌年の六月には、再び歐羅巴の陸を踏んでゐた、再びストゥットガルトとヰインとの間の、轉々たる漂泊をはじめるために。

レナウがアメリカから歸つて來ると、彼の恐ろしい運命が彼を待つてゐた――ゾフィイ・レエヱンタアルへの情熱が。

ゾフィイは彼の青年時代の友フリッツ・クライレの妹であつた。彼は彼女の少女時代に、一度見た事があつた。友の家を訪ねた時、庭園を通りすぎようとして、庭に向いた一つの窓に、十歳か十一歳位の少女が、長い鳶色の髪を肩の上に垂らして、むかう向きにすわつてゐる姿を見つけて、そのこころよい眺めに、暫く立止つて見入つてゐた。十三年後に、レナウは彼女に再會した、しかもこの度びは、顏と顏とをぴたりと見合せて――會はない前から彼女の打ち克ち難い魅力について聞いてゐたレナウは、忽ち彼女の魔の網の中に囚へられてしまつた。ゾフィイは既にシュワアベンで婦人の心を魅したこの詩人によつて、深い印象を受けると共に、この有名な詩人の生涯に、大きな役割を勤める事を誇りと思はずにはゐられなかつた。

しかも、そのとき、彼女は既に人妻であつた。彼女の良人のマックス・レエヱンタアルはヰインの高級官吏で、自ら文學者でもあつた。そして、特に、レナウの熱烈な崇拜者であり、歡待者であつた。この戀が悲劇的の色彩を帶びなければならぬ所以は、またそこにあつたであらう。友人の妻といふ一事が、詩人の身に桎梏をかけた、しかも、彼の情熱は刻々に昂まつて行くばかりであつた。ゾフィイもまた、自分の詩人に及ぼす魅力を享樂するだけに止まらなくなつた。レナウがヰインを離れて、ストゥットガルトにある日には、熱烈な文通が二人の間に取り交はされた。この時代の手紙は、レナウの著しい詩作以外の詩作で、殆んど散文詩とも云ふべきものである。

「葉卷を喫ひながら、私はこの挨拶をおまへに書いてゐる。葉卷の灰は一喫ひ毎に長くなる、私の生涯の灰も一息毎に長くなつて行く。こんなに灰になつて行く葉卷は悲しいものだ。灰は落ち去らないで、燃え失せた形その儘に殘つてゐる。我々が慰藉と見てゐるものも、すべてこんな灰にすぎないのだ。おお、女よ！　我々が全く相抱く日なくして、こんなに燃え失せて行くのだと思ふと、私は泣きたくなる……」

そして、その日はつひに來なかつた。ゾフィイはそれを詩人に與へなかつた。レナウがキインにあつた時は、絶えず愛する女の蠱惑的な顏を見、誘惑的な聲を聞きつつ、悶々として、屢々、晝頃まで床に横はつて、强い葉卷をふかし、强い珈琲をのみながら、憂鬱な夢想を追ひ、午後はキインの文士や記者達の集るカフエで、おなじやうに葉卷と珈琲とに時をすごしてゐた。

音樂は常にレナウの情熱でもあり、慰藉でもあつた。が、この苦悶のときに、とりわけ彼の心をなだめ、やはらげた。彼はその靈魂の昏迷と、自己分裂と絶望との底から、音樂の力によつて、自由と和解との世界へ逃れる事が出來たのだ。彼は自分でも巧みにヴァイオリンを彈いた。然し、それはアカデミックた敎養を經たものではなくして、天性の生む自然なものであり、空想であり、概ね卽興であつた。謂はば彼の故鄕の匈牙利のチゴイネルの彈奏であつた。

ケルレルといふ當時のすぐれたヴァイオリニストは、レナウの演奏を聽いた時、驚いて叫んだ、

「あなたの手腕(うで)はすばらしいものだ、あなたが専門にヴァイオリンの方をおやりでしたら、どんな名人になられた事だらう！」と。

この音樂の魅力が、レナウをゾフィイ以外の一人の女性の膝下に跪かせるに至つた。その女性とは、當時の有名なオペラ女優であつたカロリイネ・ウンゲルに外ならなかつた。

一八三九年の夏、レナウは伯爵クリスタルニッグの家で、彼女と相知つた。食卓につく時、彼女はレナウを嚮導者に

たのんで、相並んで席についた。彼は彼女の歌を聽いた時、感激して、「彼女の情熱的な歌を聽いてゐると、全人類の悲劇的運命をさながらに聽くやうに思はれる」とも書き、「この女性の血管には、眞に悲劇の血が流れてゐる」とも書いた。

カロリイネがリンツに出發すると、レナウもその後を追つた。リンツで彼女はレナウの部屋に入つて、前夜ドレスデンで詩人ティイクに贈られた花環を、彼の足もとに跪いて捧げた。しかもその地の劇場では、詩人を崇拜者として取扱つて、

「ニイムブシュ、わたしに帽子をかぶらせて頂戴」「外套を直して下さいな」「ニイムブシュ、望遠鏡を持つてて頂戴、」「氷を云つて來て下さい」といふ風に、際限なく用事を云ひ附けたのである。

或日、二人で遠足の折りに、谿を通つて行くときに、彼女は彼に自分の結婚の困難な事を語つたが、突然、「ねえ、御覽なさい！ どんな困難でも、わたしはこんなに飛び越しますよ」と彼女は叫んで、大膽にも路傍にあつた積石の上を飛び越した。

レナウは彼女と婚約しようと決した。

彼女は彼の『ファウスト』中のマリイとして自分の肖像を描かせて、その上に、

わが上にとどまれ、汝暗き眼よ、
ふるへ、汝がまたき力を、
嚴かに、やさしき、夢のごとき
きはめがたくこころよき夜よ！

といふ彼の詩句を書き、その下に、何のつもりでか、「カロリイネ・フオン・シュトレエレナウ、舊性ウンゲルン」と記

した。

しかも、彼女がドレスデンに出發したのち、レナウの送つた手紙には何の返事もなかつた。そしてレナウは彼の手紙が、ドレスデンのティイクの許で朗讀されたといふ事を耳にした。

彼は彼女にやつた自分の手紙を殘らず彼女の手から取戻した。そして、それを燒き棄てる前に、夜、自分の部屋で今一度通讀しながら、自分自身に對する怒りのために、あまた度び額を打つて、

「この驢馬め！」と叫んだ。

この女優の最後のいたづらは、或る立樹の幹に自分の名を彫りつけて、その下に二つの日附を書く事であつた――一八三九年七月二十四日生、一八四〇年七月十四日歿。それは彼女がはじめてレナウに會つた日と、その別れた日とであつた。

レナウは悲劇の神のやうに讃美したこの名高い女性の背後に、不眞實な、喜劇的な、虚僞な一個の人間を見出したのである。そして、彼はその傷手に堪へずして、再びかの宿命的なゾフィイの戀へと身を以て逃れた。

ゾフィイはその間にも、他の女への詩人の情熱を冷却せしめるのに全力を盡し、不幸な詩人を絶えず手許に惹き付けて、離さなかつた。はじめは高名な詩人を友とする事の虚榮心の手傳つてゐた彼女の戀も、後には全く眞の情熱に變つてゐた。しかも、彼女は不貞の妻となる事を欲しなかつた。その眼付と、言葉と、接吻とで、彼の神經を極度に緊張せしめながら、その緊張を解く事を敢てしなかつた。彼女は常に最後のものを詩人に拒んだのである。

レナウは幾度びか彼女から脱れようとした。カロリイネ・ウンゲルへの戀も、その一つの試みであつたらうし、また一八四四年になつて、バアデン・バアデンで相知つたマリイ・ベエレンヅとの婚約もそれであつた。しかも、この婚約すら眞の情熱となるいとまもなく、彼の文通は漸次ゾフィイに繋く、マリイに冷淡になつて行つた。彼は謂はば、彼女

のまはりをめぐり、その血の流れる情熱の薔薇を、彼女の足もとに蒔いたのである。ゾフィイのこの戀を、あだかも猫が鼠をもてあそぶやうな殘酷な戲れであつたと、或る批評家は云つてゐる。

かやうにして、レナウは一定の住所を持たないで、依然として、キインとストゥットガルトとの間を往復したり、また、ミュンヘンや、バアデン・バアデンや、フランクフルト・アム・マインなどの各地に漂泊を續けてゐた。その移動がいかに烈しいものであつたかは、彼が二ケ月の間に、六百四十四時間を驛遞馬車の上で過した事によつても、理解されるであらう。

一八四四年に、明白に狂氣の徵候が現れた。

ストゥットガルトのラインベックの家にあつた時、朝餐の席で、神經的の發作が起つた。彼は鏡の前に行つた。左の口角が吊り上つて、右の頰は耳のところまですつかり硬直し、痲痺してゐた。彼の神經は今やすつかり震蕩され、異常の恐怖と、絕望とが彼を捲き込んだ。彼は自殺を決意して、その草稿を燒いた。或夜の事、眞夜中に、彼は突然起き上つて、主人のラインベックの部屋につかつかと入つて行つて、彼等が自分を裁判所に告訴した事を非難した。

「それは夢なんですよ、」と彼等は云つた、「惡い夢を見たんです」

「夢、夢だつて！」と彼は叫んだ、「若しこれが狂氣なら、恐ろしい事だ」

翌朝、朝餐の時、彼は非常に昻奮して、そのヴァイオリンを取つて、いつもよりも一層巧妙に奏でて、自ら踊りさへもした。醫者が來てからも、やはりそれを繰返して、音樂の健康に及ぼす効能を讃美した。

翌日、一友に伴はれて外出した時、彼はバザアで上衣をぬいで、それを街路にひろげて、その上に横たはらうとした。その夜、最初の自殺の試みをして、縊死を企てたが果さなかつた。

一度などは、その夜の七時に死ぬであらうと思つて、すつかり白い服裝に着かへて、ソフアの上にぐつたりと身を

横たへて、手を拱いて、皆に別辭を述べた。けれども、死が來なかつた時、彼はエミリイ・ラインベックに靑酸を求めた。

「私は生きてゐたくない」と彼は叫んだ、「私の生涯はノンセンスだ。私は幾らかの美しい詩を書いた、だが材料の選擇をあやまつたのだ……」

彼の婚約の妻であつたマリイ・ベエレンツは、カルルスルウエで、レナウの發狂の報知を新聞で讀んで、母親とともにかけつけたが、醫者はマリイを彼の部屋に入らせなかつた。病人の發作を虞れたのである。

病人はやがてヰンネンタアルのツェルレル博士の病院に送られ、四七年の夏には、オーペル・デエブリングのゲルゲン博士の療養院に入つた。

ある日、ゲルゲン博士の母が、彼を伴うて歩廊を行つた時、その欄干を飾つてゐる胸像をさして、

「ニイムブシュさん、これが大詩人のホオマアですよ」と云うと

「ああ、ホオマアか、ニイムブスも大詩人だ」と彼は云つた。

「これはプラトオンですよ」

「ああ、これが莫迦げた戀を發明した男だナ」と云つて、彼はからからと笑つた。

この言葉を傳へ聞いた時、かのゾフィイ・レエヱンタアルはどう思つたであらうかと、或る文學史家は疑問を發してゐる。彼女自身は、もはやレナウと語る機會がなかつた。醫者がそれを許さなかつた。それでも、彼女は度々、病院を訪ねて行つた。そして、半ば開かれた病室の扉口から、その愛する詩人の後姿を眺めるだけであつたといふ。

レナウの最後に語つた明瞭な言葉は、

「かはいさうなニイムブスは、非常に不幸であつた！」といふのであつた。その後は、ただ時々泣く聲が聞えたのみ

であつた。

一八五〇年に、レナウはその友であり、妹婿であるシュルツの腕で死んだ。

レナウはハイネの如き人氣ある詩人とはなり得なかつた。それにしては、彼はあまりに寂しい、あまりに暗い、あまりに沈痛である。彼の詩を評して、オスカアル・エーワルトは云つた、「それは感傷のない世界苦であり、愁訴しない憂鬱である」と。彼の詩はその屢々併稱せられるハイネとは——後者の晩年の詩を除いて——等しく厭世的であるとは云つても、相接するよりも相距るものが多い。レナウにはハイネの特長であるあの感傷と機智とが缺けてゐる、また、あの輕快と奔放と、特に、あのヘレニズムが缺けてゐる。彼はむしろ佛蘭西のアルフレド・ド・ギニイや、伊太利のレオパルヂに近いやうに思はれる。その哲學的なストイシズムに於いて、その沈痛な世界觀に於いて。

漂泊の人レナウは、また自己分裂の人であつた、その點はギニイなどよりも反つてハイネに近い。彼は懷疑的であると共に、宗教的であつた。彼は絶望的な悲觀主義者であると共に、また、素朴な信者でもあつた。彼の長篇詩『フアウスト』は、懷疑家の絶望の表白である、殆んどニヒリズムの高調である。ゲエテのフアウストが夜の燈のもとに、聖書を飜譯しようとするのに反して、彼のフアウストは聖書を火に投ずる、そして、自殺が一切の解決であつた。然るに、彼のおなじ長篇詩『サヴォナロラ』は、燃ゆるが如き信仰の書である。彼自身の神への憧憬を、彼は人類の間に見出さうとしたのだ。

然し、レナウの作品については、簡單に解說するを得ない。今は再び、私の愛誦する彼の『蘆の曲』中の一篇を誦して、この稿を終る。

靜かにすめる池のおもてに

月のやさしき輝きはやどる、
蘆のみどりの穗のなかに
蒼白き薔薇の花環を編みつつ。

鹿はかなたの岡邊にさまよひ
暗き夜の空をうち見やる、
をりふし鳥は身うごきす
夢みつつふかき蘆の中にして。

涙せきあげつつも眼ふすれば、
わが胸のふかきそこひに
しづかなる夜の祈禱のごとき
甘き愛慕のおもひはかよふ。

牧歌詩人メリケ

ポケットに一册の書物を入れて、丘や森をさまようて行く一人の牧師がある。その顏には、何處となく疲れたやうな色が見えるのに、殆んど子供のやうな、世間とはこれ迄一度も接觸した事のない人のやうな、物やはらかなところが

あつて、その眼は美しく澄んでゐる。
彼は傾斜に立つてゐる花盛りの櫻の樹下に腰をおろして、小鳥の歌に聽きとれたり、山毛欅の樹の繁みの間から、空飛ぶ雲を眺めたりしながら、靜かに何か冥想でもしてゐるらしい。そんなときに、ふと村人でも來かかると、彼は驚いたやうに振向いて、やさしく微笑む。そして村人の丁寧な挨拶に、自分からも親切な言葉を返す……。
これがシュワアベンの牧歌詩人エドゥアルド・メリケであつた。彼は古代のやうな牧羊者ではなかつたが、人間の牧羊者であつたのだ。
彼は希臘の牧歌詩人テオクリトスの有つてゐたやうなユウモアと愛とを有つてゐた。然し、この弱々しい位に敏感な詩人は、當時の獨逸詩人には珍らしい程、近代的の微妙な情調をうつし出すことが出來た。彼の多くの詩篇の中には、近代の象徵詩のそれを思はせるやうな、殆んど飜譯しがたい、言葉と氣分とのニュアンスをもつものも尠からず見出されるのである。
然し、根本に於いて、メリケは健全なシュワアベン人であつた。彼もその先輩の詩人ヘルデルリンと殆んど相似た學程を踏んだ。けれども、いかに異つた方向に、二人は展開して行つた事であらう。
彼は曾つて、テュビンゲンで、狂氣のヘルデルリンが、白い帽をかぶつて、その部屋の中を不安げに往きつ戻りつしてゐる姿を、窓越しに眺めた事があつた。
彼はかの狂詩人の帽子が、あの窓に現れ、またこの窓に現れるその目擊から、『火の騎者』といふ童謠風な詩を書いた。
それはダギッド・フリイドリッヒ・シュトラウスが、傳說上の子供の基督にたとへた才能である——彼が一つかみの土を取つて一寸握ると、すぐに小鳥が飛び出す……

然し、彼を多年の孤獨と內面的葛藤との中に助け支へたものは、その才能にはとどまらなかつた。彼は敬虔な信仰とユウモアとを、また、總じて牧歌的な、中庸人的な性格を有つてゐた。かうして、彼は靜かに、さして危險な波瀾もなしに、老年を迎へる事が出來たのであつた。

とは云へ、この牧歌詩人の生涯にも、苦惱と爭鬪とが全くないのではなかつた。彼の藝術は、むしろ長い苦鬪の後に、一切を內部生活に向けた人の、諦念と冥想とから生れた一つの勝利の表白に外ならないのである。

十一歲で父を失つたメリケは、二十歲前後の時に、それにもまして彼にとつて恐ろしい經驗をしなければならなかつた。

激烈な半ヶ年――彼のやはらかな心の調和を破り、苦痛と愉樂との失心の中に彼を投じた情熱の波浪――それはペレグリナへの戀であつた。

謎のやうな、不思議な、美しい、見知らぬ少女――ペレグリナと彼がその詩の中で呼んだその女への……

復活祭のころに、メリケの故鄕のルウドヰッヒスブルヒに、その少女はひとりさまようて來た。

この女の異常な美貌と、その不思議な、神祕的な素性とが、メリケの感性と空想とをすつかり魅惑してしまつた。

彼女は瑞西の生れで、マリア・マイエルといふ名で、その婚約者の死を悲しむだあまりに、クリュウデネル夫人の遊行僧團に加はつたが、その團體の解散された爲め、途方に暮れてゐるのだとも云つた。

兩親にその罪をつぐなふために、三年間、他國で女中奉公をしなければならぬのだとも云つた。

メリケには彼女が女中の姿をした聖者のやうに思はれた。彼の心に抱いてゐるあらゆる夢想や、理想やが、彼女によつて充たされるやうに思はれた。

彼の物羞ぢ心も、ひかへ目な用心深さも、彼女の前には引き退いて、彼は彼女を熱烈に愛しはじめた。彼女もそれに愛を答へる事を知つてゐた。

けれども、彼はあまりに柔和で、あまりに弱かつた。彼はこの戀を成就するために、一切を犠牲として戰ふ事が出來なかつた。ペレグリナを自分の懷にかかへ込む事も、その戀のために世間を無視する事も出來なかつた。

マリアの惡い評判が、彼女が不良の女であり、詐欺(かたり)の女であるといふ風評が、彼の耳に入つて、彼の心を掻き亂した。彼は彼女の素性と貞潔とを疑はずにはゐられなくなつた。

彼女もそれに氣づいた爲めであるか、彼女を入れたその親切な友達の兩親の家から、突然姿を隱してしまつた。

ハイデルベルヒで、彼女は浮浪人として逮捕された。そして、また再びテュビンゲンに姿を現して、メリケに手紙を書いて、會つてくれるようにとたのんだ。

けれども、メリケはそれを拒んだ。そして、彼は恐ろしさに、テュビンゲンから母の家へと逃げ歸つたのであつた。

このペレグリナの經驗は、すつかりメリケの心の平衡を失はせてしまつた。彼はその傷手から癒えるために、再びその夢想の中に逃げ歸る外に道を知らなかつた。

二十二歳のとき、メリケは、その神學の學修を終へて、副牧師としての遍歴時代(ワンデルヤアレ)に入つた。

「凡てのものになつてよい、ただ、牧師にだけはなりたくない！」と彼の心の中から叫ぶものがあつた。

「オルプリッドよ、おお、オルプリッドよ！」と彼の憧憬は乞ひ願つた。遙かな海のかなたに、神々によつてつくられた美しい島を彼は夢想した。

一年の忍耐の後に、メリケはやうやくその奴隷の境涯から免れて、專心に藝術に從ふ事が出來るやうになつた。

彼は悲劇に筆を染めようと思つた。

だが、それは何といふ傷ましい幻滅であつたらう。彼はそこで藝術家としての自分の力の限界を自覺しなければならなかつた。そこで彼は、「一切齒と涕泣をもつて、古い食物を嚙むために」再び元の副牧師の職にかへつて行くのである。

田舍の靜かな孤獨の中で、より單純な、より容易な仕事にと身をゆだねて、謙遜に忠實に、自分に與へられた藝術家としての天職を果たすために――。

かくして、その諦念の間から、メリケのすぐれた抒情詩は生れ出たのである。

主よ、御意のままに與へたまへ、
愛の惠みでも、惱みでも。
ふたつともわたしは喜びます、
あなたの御手から出たならば。
たとひ喜びにせよ、
また惱みにせよ、
あまり餘計に下さいますな!
ちやうどその中ほどが、
何よりの程あひです。

三年の後に、メリケはルイーゼ・ラウといふ牧師の娘と婚約した。それは熱い情熱や、燃え上る幸福の欲求からでは

なかつた。彼は力添へになる同伴者を得て、その生活を落着かせて、靜かな家庭の平和の中に安息を得ようとしたのであつた。

けれども、彼女はメリケを理解しなかつた。彼女はメリケの詩人的な性格を、その人間としての弱點として見た。そして、彼がいつまで副牧師より上に昇る事を得ない腑甲斐なさに愛想を盡かして、彼から離れ去つてしまつた。かうしてメリケは、その母と妹のクララと一緒に、寂しい孤獨者の生涯を續けた。

漸く四五年の後に、彼はやつとクレヴェルズルツバッハに、牧師の位置を得る事が出來た。それはシュワアペンの片隅にある牧歌的な村で、彼がその牧歌「古塔の上の鷄」によつて、理想的に歌つたところである。

その村での彼の生活は、極めて寂しい、地味なものであつた。百姓達からは愛されもし、敬はれもしたけれども、彼にはその牧師の職務は、どうしても心にかなふものではなかつた。

かうした間に、彼の長篇小説『畫家ノルテン』は世に出でたが、その眞價を認められるまでには至らなかつた。華かな才人の華かなチェステュアやトリックに眩惑される世間は、この孤獨な牧師の小說などを顧みはしなかつた。

九年間の牧師生活の後に、メリケは健康を害したために、その職を辭した。その後彼は、快癒と休息とを求めて、メルデントハイムに隱栖した。そして、詩集を出したり、また、古代の詩人、カツルス、ティブルス、ホラティウス、とりわけ牧歌詩人のテオクリトスに慰籍を見出して、それらの飜譯を出したりした。

それから後、マルガレエテ・スペエトといふ少女と結婚して、靜かな家庭をつくり、カトリックの信者である妻の感化によつて、一層强い信仰に導かれた。そして、しばらくストゥットガルトの女學校の教師の職を續けてから、再び隱栖にかへり、孤獨な詩人としての長い一生を終つた。

おお世間よ、わたしをこのままに!

愛のたまもので誘はずに、
ただこの心にもたせておいてくれ
その樂しみと、その惱みとを！

メリケの詩の數多くを作曲して、彼の名をポピュラアなるものにした、あの夭折の作曲家フウゴオ・ウォルフは、この詩人の靑年時代の詩について、「何といふ病的なほどのインニッヒカイトが、何といふ苦痛の上での樂欲的なくつろぎが、その模倣しがたい詩句の中に現れてゐる事であらう」と書いた。

このインニッヒカイト――靈魂（たましひ）の中から出てくる飾り氣のない、眞卒さこそ、メリケの詩の何よりの特徴である。かくて、彼のディメンションは、深さに、感情の深さに在るといふ事も云ひ得られるのだ。

メリケは早期には、直接的な現實よりも、藝術の中により多くの生命を求めた。それは彼のあまりに柔かな感性が、粗雜な現實から、あまりに烈しく觸れられるのに堪へられなかつたからである。

彼は『リヤ王』の上演を見物しても、翌日は床に就かねばならなかつた程、纖細で敏感な人であつた。その母の危篤のをりは、その枕頭に止まる事に堪へず、自分の部屋に逃げ歸つて、母が死んでも直ぐに知らせてくれないやうに妹に賴んだ程であつた。說教の壇上に立つと、危虞の念に胸を壓される人であつた。一言に云つて、彼は人生の悲劇に堪へ得ない人であつた。

晩年の彼はそれ程ではなくして、現實に接觸する事をも樂しんだが、然しそれは何處迄も平和な、靜かなものでなくてはならなかつた。それゆゑ、彼は牧歌を愛し、牧歌的生活を好んだ。そして、人間の交涉よりも自然の靜寂を愛し、社交裡の談笑よりも孤獨の冥想を愛した。彼の理想は、その靑年時代に空想した、かの女神ワイラによつて庇護

されてゐるオルプリッドの島であつた。

ブラウニング夫人

ハアトフォード州なるホオプ・エンドの丘陵の起伏した牧歌風な風景の中に、彼女は生ひ立つた。
この廣大な父の豐かな莊園のただ中で、兩親の寵愛を一身に集めて、その誇りとなつてゐた、美しい、愛くるしい少女は、何といふ幸福な惠まれたものであつたらう。
蒼色の捲髮の房々とした、暗色の燃えるやうな大きな眼をしたこの少女には、まはりの自然も人間も、すべてフェアリイ・ランドの愛しい俤かとばかり思はれたのである。
リットル・ベェは――さう彼女は呼ばれてゐた――快活な生々とした少女で、活潑な遊びが好きで、どんな遊びにでも、その弟や妹たちの先きに立つてゐた。が、とりわけ好きなのは乘馬であつた。
けれども、學問の方でも、彼女はそのはらからを凌いでゐた。彼女はポオプのホオマアの譯を讀んで、片手に人形を、片手にその本を離さなかつた。
十一歲のときに、もう四卷の敍事詩を書き上げた。それを彼女の父は喜んで、印刷に附した。その詩は『マラソンの戰ひ』といふのであつた。
彼女の盲敎師ヒュウ・ステュアート・ボイドが、この世の何人にもまして愛してゐたその敎へ兒を、希臘語の勉强へ、古典の研究へと導いて行つた。
日は日と過ぎた、庭に落ちる春の日影のやうに、樂しく、喜ばしく、晴れやかに……平和なホオプ・エンドの莊園の

館の中に、愛しい一人の少女詩人は、かうして育つて行つた、春の若芽の育つやうに。

これが――英國第一の女詩人と呼ばれるエリザベス・バレットの幸福な幼な姿であつた。

彼女が十五歳の時に、彼女の一生を支配した、あの恐ろしい運命の變化が來た。

一日、彼女はあやまつて馬から落ちて、脊骨を折つてしまつた――そして彼女の言葉に從へば、「ありふれた咳」が、彼女の長い、痛苦のはじまりとなつた。

彼女はもはや一人の病人であつた。

打撃は續いて來た。十九歳のとき、彼女の母は死んだ。それがこの惱める子の傷ついた健康を、恢復しがたいものとしてしまつた。

續いて、彼女の父は、奴隷解放の結果、その財産の一部を失つたため、ホオプ・エンドを賣拂つて、倫敦に移住したので、彼女の狀態は一層の危險の中に投込まれたのである。

それは何といふコントラストであつたらう。

朗かな少女時代と、慰めなき年月と。

大都會の石垣の中に圍まれて、薄暗い部屋に病み伏しつつ、昔のホオプ・エンドの草やはらかな庭や、綠の牧場をあこがれつつ……

「美しく、美かつた、私の故郷の丘は」と彼女はその頃書いた、「けれども、私はこの世のありとあらゆる美に代へても、あの丘の日光と影との中にまたと立ちたいとは思はない。それは嘲弄であらう――一たんむしり取つた花を、ま

たその塞にかへさうとするならば……」

家族のものは、あらゆるやさしさの限りを盡して、この病人を看護した。

彼女の幼い時代のいちばんの友達であつた父は、——彼女の最初の詩集は、「讀者並びに批評家」としての父にデディケエトされてゐる——その倦く事のない配慮によつて、幾度びか將に消えなんとするその娘の生命の火をとりとめたのである。

彼女はその心からの愛によつて、彼に感謝してゐる——けれど、父によりも、その弟のエドワアドに、より多く彼女の愛は注がれてゐた。子供の時の遊び仲間であつた彼は、今では彼の最も親しい心の友達であつた。

一八三八年に、醫者は、この冬はとても倫敦ですごすのはむづかしいと云つたので、彼女は妹と叔母との保護のもとに、タアキュエイの海岸に連れて行かれた。そこでこの弟のエドワアドの訪問は、彼女にどんなに嬉しい事であつたらう。

一度、彼は三四日目に再び訪ねて來た。病人の涙が彼を動かして、父にその滯在期限を延ばしてくれるように頼んだ。そして彼は彼女を最早や見捨てないとさへ約束した。その十日目に、彼は三人の友達と一緒に、ボオト遊びをして、海に溺れて死んでしまつた。

この苦痛の重荷のもとに、エリザベスはすつかち打ち挫がれて、長い間、生死の間をさまようてゐた。彼女はその愛するものの死を自分の罪だと思つた。幾週も、幾月も、熱にうかされて、意識を失つたり、また半ば意識に返つたりして……

「神はその手の打擊の下には、祈るためには餘りに近い……」

倫敦に歸れるほどに恢復するまでには、三年を要した。

彼女は寢臺から長椅子に行くばかりで、もう氣絶するやうな事はなかつたけれども、その旅に堪へられるかどうかを醫者が疑問としたほどに、まだ弱かつた。

それでも家へ歸りたかつた、歸らなければ、ノスタルジアのために死んだかも知れない……

かくて今や彼女は、再び倫敦の彼女の部屋に閉ぢ籠つて――日向に出る事も稀らしく――來る年もまた來る年も、ひたすらに讀み、且つ書いた。

彼女は「殆んどあらゆる讀み得られる言葉のあらゆる讀み得られる書物」を讀んだと云はれる。彼女のあの驚嘆すべき古典と近代の書との知識は、實にこの長年月の孤獨生活のたまものなのである。

彼女は英國と米國との定期刊行物の執筆者であつた。彼女の名前は、最早や英國以外に廣く知られてゐた。あの心を打つ悲痛な詩篇『子供の叫び』がブラックウッド・マガヂンに發表せられて、それによつて兒童勞働に對する保護法案の動機を與へて以來、米國に於いても、彼女はあらゆる時代の最大の女詩人として、同時に新世界の自由の理想の協力者として、嵐のやうな崇拜の的となつた。

一八四五年の一月に、寂しい墓の中のやうな彼女の生活の中に、雲間を洩れて、思はぬ日影が落ちて來た。

彼女は思ひがけなくも、當時詩人として名をなしてゐたロバアト・ブラウニングの手紙を受取つたのである。詩人はその中で、彼女の詩に對する熱狂的な嘆賞の情を述べて、述べ盡さぬやうに見えた。

これより先き、ブラウニングは、その知人によつてこの女詩人に紹介される事を承諾してゐたが、初對面の人に逢

ふ事を好まなかつた女詩人の同意を得ないで終つたのである。 が、彼が伊太利から歸つて來た時、その妹の手に彼女の詩集を見出し、それを一讀して感嘆に堪へず、その上、その中のロマンス「レディ・ゼラルディンス・コオトシップ」中には「鈴と石榴」の詩人の名が擧げられてゐたのも、彼には嬉しい事で、手紙を書かずにはゐられなかつたのである。

彼の手紙は、彼女の稍やひかへめながら、歡びに溢れた返書(かへし)によつて酬いられた。

一月から五月まで、相互に親しい、理解と同情とに充ちた手紙は幾度びとなく交はされた。 彼は彼女の作品を批評したり、彼女は彼の詩才の世に認められない事を憤慨したりして……

そして、このまだ見ぬ二人の詩人のなかは、彼女にとつては、友情にすぎなかつたが、彼にとつては、旣に熱い戀であつた。

その年の五月二十日、ロバアト・ブラウニングは、エリザベス・バレットの――ほんの僅かの心友の外は誰も入れない病室へと迎へられた。

彼はそこのソフアの上に、靑白いまる顏をした、大きな情熱に燃えるやうな、しかも悲しげな眼をした、小さな弱弱しい一人の婦人を見出した。

全く、彼女は小さかつた。まるで子供のやうで、長い暗色の髮に蔽はれたその面(おもて)も、すでに三十歲を越してゐる婦人とも思はれなかつた。そして、彼女の聲は弱々しく顫へて、あだかも消えなんとする焰のゆらぎ、靈の翼の微かな羽音かとも思はれた。

彼は今目の前に、この不治の病に囚はれて、そのソフアから離れる事さへかなはずに、一生このままに送らなければならぬやう運命づけられてゐる女性を見た時に、云ふべからざる惻隱の情が、胸をしめつけた。 つれなき運命をか

こつよりも、どうかして、彼女のために力を盡したいとの一念が、抑へ難く詩人の胸に湧き起つたのである。

彼はあまり長く話さなかつたか、またあまり聲高く話さなかつたかと氣遣ひつつ、その日は辭し去つた。越えて二日、ブラウニングは歡びと望みとに充ちた手紙を送つた。それはエリザベスによつて、結婚の申込と解せられた。彼女はいかにその夜を、苦しみと心の亂れとの中に送らなければならなかつたであらう。

彼女は彼自身の幸福のために、願ひの手紙を書いた。彼女は、不治の病に惱んでゐる、不具のあはれな女で、しかも既に三十九歳の老孃である自分との配偶は、六歳も年下の前途の春秋に富んだ壯年の詩人にとつて、ただその生涯の不幸にすぎぬ事を、深くも確信してゐたのである。

かくて、河瀨の淀み、水のせきが續いた。

長く、且つ勇敢に、彼女はその謙遜な諦念を固守し、來るべきその幸福に對して、抵抗し續けたのであつた。

つひに、新生の日は近づいて來た。

彼はただ彼女のためにのみ生きようと云つた。

彼女は自分のために彼の自由を束縛する事を好まなかつた。けれども、彼に對する彼女の信愛は日毎に深くなつて、未來はただ神のみぞ知りたまふと心に囁いた。

翌年の夏に、醫者はエリザベスを南方の暖地に送らなければ危險である事を告げた。しかるに、彼女を愛してゐるとは云へ、頑强な壓制者であつた父は、その旅を承諾しなかつた。

彼女は南歐に冬を過して、健康を恢復したかつた。今や彼女の生命は、一層大切なものに——自分よりも他の人にとつて——なつたからである。けれども、父の意に逆らふ事は、彼女にはどうしても出來なかつた。

ブラウニングは彼女に逃走をすすめた。彼女の生命を救ふのが、父の意でなく、彼女自身の意に從ふのが、彼女の義務である事を云つて、そして、自分を信じて、自分にたよつてくれる事を願つた。

然し、彼女の心は、既に十分彼のものであつたのだ。

彼等の親しみの加はるにつれて、彼女の健康はにはかに恢復しはじめた。新しい希望が、新しい興味が、いかにいい影響を彼女に及ぼしたであらう。

あまり寒さのきつくなかつたその年の冬が明けると、彼女は少しづつ歩く事が出來た。四月に、彼女は一つのボンネットを貰つた――それは美しい希望と勇氣の象徴に外ならなかつた。

五月には、彼女は馬車から下りて、公園の綠の草を踏んだ。

愈々ブラウニングが絶えず奬めて止まなかつた伊太利行の計畫は熟した。

秋、一家が暫く田舍に住む事となり、ドオヴア附近の別莊が探されて、移轉の準備の取り行はれ出した時、その報を得たブラウニングは、直ちに結婚の事を告げた。

翌日、結婚許可證は得られた。次いで、バレット孃は腹心の女中に助けられて、父の家を出て、車をメリイ・レボレ敎會に馳せて、そこで二人の證人の前で、正式の結婚式は擧げられた。

そして、次の月曜日に、夫人は永遠に父の家を捨てて、ブラウニングと途中に落合つて、サウサンプトンよりアーヴル行の汽船に搭じて、巴里を經て伊太利のピサに赴き、のちフィレンツェに家をかまへた。

彼女の前には、今やはじめて、一個の女としての生活が――そして幸福が花咲くのである、あだかも春に忘られた立木の花が、秋の日影に咲くがやうに。

空靑く風軟かな南歐フィレンツェの生活は、たとひ父の意に逆つた事の苦みはあつたとしても、彼女にとつては、二十餘年の長い病臥の日に、夢にだも思ひがけなかつた幸福な喜びの生活であつた。

フィレンツェなるカサ・ギデイの古い邸宅に、幸福な詩人たちの家庭生活は送られた。そして、彼女の健康は、その朗かな空氣の中で、日毎に恢復して行つた、彼女の靈魂の華やかに若やぐとともに。

四十三歳のときに、一人の男の兒を良人に贈る事が出來たとき、彼女の幸福は完きものとなつた。

然し、このフィレンツェに於て、肉體上の子供のみならず、彼女の最も成熟した、最も熱烈な作品が生れた。南歐に赴いて暫くの後に、まだピサにあつたとき、夫人は何か詩集を編みつつあつたが、一日、ブラウニングが、朝餐の後、二階より街上を眺めてゐた時、その後に忍び寄つた夫人は、恥かしさうに顏をそむけながら、一つの包みを彼の手におしつけて、

「若しおいやでしたら、破つて棄てて下さい」と云ひ捨てて、急いで自分の部屋に逃げ歸つた。

それがかの名高い "Sonnets from the Portuguese." であつた。彼が戲れに「彼の小さなポルトガル人」と呼んでゐたので、今一つは、世間の眼に自分の姿を隱すために、『ポルトガル人のソネット集』と奇異な名をもつて呼ばれる、情熱溢るるが如きすぐれた愛の詩集である。

それは女性の純潔な靈魂の奧底より湧き出でた貴い祕密である。愛によつて死より生へと蘇つた女性の愛の讚美であり、男性への感謝の言葉である。

不幸にして、ブラウニング夫人の詩は、未だその譯出されたものを見た事がないので、すぐれた人のすぐれた譯を引用する事の出來ないのを殘念に思ふ。せめては、無きにはまさるとの思ひから、今この集中の一篇の大意だけを玆

に掲げてみる事とする。もとより、その中の代表的なものではないと同時に、この大意に、原詩の高調の俤だも偲ぶ事の出來ないのは、斷るまでもない事である。

重き心をわれははこびぬ、
幼き日より、君を見るまで。
ただ惱みに惱みのみぞつらなりつつ、
舞踏に胸のとどろくままに、
眞珠の飾りのゆらめくやうに
樂しくもをどるかの喜びならで。
望みもわれには苦きものとなりぬ、
神のめぐみも力なきまで
わがこの重き心をはこび行くとき。
さはあれ、たふとき救ひの君よ、君こそは、
その君がみ胸のふかき底ひに
急ぎ下りてやすらへとぞ。君がまにまに。
さて、君はその胸の戸をとざしつ、
つれなき運命の前にわれをかくまひたまふ。

十五年の幸福な結婚生活の後に、夫人は五十五歳を以て、その再生の地なる南歐の空の下に逝いた。

愛し愛された事に滿足して……

その良人の腕にいだかれて、めでたき世をば祝福しつつ……

妻を失つたブラウニングは、身も心も引裂かれる如き斷腸の日を送つた後、妻の遺子を教育するために、英吉利に歸つて、孤獨の生活の中で、妻の嗜好した希臘の古典をひもときつつ、また、夫人と共にありし日の記念なる『指輪と書卷』の雄篇の筆を進めつつあつた。

伊太利のフィレンチェ――

そこの舊居のあとには、伊太利語もて左の文字が記されてゐる、

「こはエリザベス・バレット・ブラウニングの住めるところなり。彼女の詩は、英吉利と伊太利とを結びつけし黃金の絲なりき」と。

彼女の美しき長篇詩『オーロラ・レイ』は、その輝く黃金の絲の名であつた……

ミュッセとジョルジュ・サンド

思ひ出よ。もし運命の永遠に、我を君より別ちなば、我が悲しき戀を思ひ出よ。別れし折を思ひ出よ。
我が心の響く中は、我が心君に語らん、「思ひ出よ」と。（永井荷風氏抄譯）

一八三三年の八月十五日、當時二十二歳のミュッセの『ロルラ』が「兩世界評論」に發表された。その數日の後で

ある。この新聞の創立者であるビュロオが、その執筆者たちを、バレエ・ロアイヤアルの有名なレストオラン、トロア・フレエル・プロヴンソオの午餐會に招待した時、その多くの客の中に、たつた一人の婦人がゐた。主人はミュッセにむかつて、彼女をその席に同伴するように頼んで、そして、彼女をジョルジュ・サンド夫人だと云つて紹介した。これが抑もの二人の初對面だつたのである。

「それは美しい一對であつた。」と、ブランデスは當時の二人の姿を描いてゐる、「彼は美しく、すらりとして、暗色の眼をしたブロンドで、鋭い面長なその横顔は、くつきりと浮いてゐた。彼女はふさふさした黒い髪をして、美しいオリイヴ色の頰には、仄かにブロンズ色の赤みがさしてゐて、大きな暗色の眼をもち、腕と手とは完全に美しく、白かつた。その額の後には、一つの世界が宿つてゐるやうに思はれた。しかも彼女は若かつた、美しかつた、女らしく物靜かで、才女らしく振舞はうともしなかつた。彼女の衣裳は單純で、いくらか空想的で、着物に金のぬひとりした土耳其ジャケツを着て、その帶には一振の短刀が垂れてゐた。」

一八七〇年に、巴里で、ブランデスは、この宴會に出席した僅かな殘存者の一人から、この二人を落合はせるのが、ビュロオの狡猾な商賣上の術策だつたのだと聞かせられた。何でも彼はその會の前に、「あの二人が一緒に席に着けば、婦人はのこらずあの男にまゐるだらうし、男子は男子で、必ずあの女にまゐつてしまふ、そして勿論、二人は相愛の仲になるのだ、そしたら何といふ面白い作品を私は受取るだらう」と云つて、兩手をこすつたといふのである。

「しかもその並んで坐わつた二人は、すつかり違つた種類の人間だつた。二人が共に文學者である事の外には、何の共通點もなかつたのである。」とブランデスの云ふのは誇張ではない。

彼女の心は健全で、平衡を得てゐて、烈しい情熱に驅られる事なく、自制力強くして、平靜で、まるで編物のやうに、規則正しく小說を編み出す事が出來る。夜はよく眠つて、徹夜の疲勞も、朝の少許の眠りによつて恢復する。言

葉少くして、あらゆるものを聞き、聞いただけのものは、忽ち自分のものにしてしまふ。それについて、ハイネはその佛蘭西通信の中で、ミュッセ自身が、「サンドは對話の際に物惜みをする質(たち)で、常に與へないで取る方ばかり念(こゝろ)がけてゐる、だから彼女は、我々に對して、非常な利益を得てゐるわけだ」と彼に語つたと云つてゐる。

このむしろ膽汁質とも評したい位、人間としてしつかりしてゐた彼女とは反對に、彼は熱烈な藝術家肌で、克己の力を殆んど全く缺いでゐた。熱病のやうに仕事にかかるが、その群がり犇めく觀念に壓倒されて、忽ち絶望して筆を投げてしまふ。そして、その際、僅かの外部からの誘惑が、例へば、友達や美しい婦人の晩餐會や、遠足の招きでもあれば、直ぐに仕事を捨てて出てしまふのである。眠は不安定で、生活は不規則で、情熱には打克ち難い。その上、彼はその時、まだ二十二歳の弱年であつた。兩親の懷つ兒で、殊にその兄のポオルに深く愛せられ、保護されてゐるといふ幸福な境遇で、いくらかの戀愛事件の外には、何の經驗も人生に有たなかつた。そのくせ彼は「四十歳の男子のやうな」人間侮蔑と、人生への不信とを抱いてゐたのである。

彼と並んで坐わつた女――本名オーロラ・デュパンは、これに反して、年既に二十八歳、ザックセンのアウグスト王の子モリッツ・フオン・ザックセンの落胤である踊り子デュパンの孫で、王侯とボエミアンとの血を享けて來た女である、そして、既にデュドヴンなる男と結婚して、二人の子供までなした仲であるが、夫も子供も家庭も捨てて、ひとり巴里に出て來て、男性の名を名乘り、男裝をして、シガレットをふかして、文壇の波浪の中をくぐり拔けてゐるのである。

さて、その日の會見の結果はどうであつたらうか？　ミュッセは凡ての文學者の如く――一體、彼女達に「靑鞜者流(ブリュウ・ストツキング)」の名を與へたものは、彼等同業者ではなかつたか――女流作家といふものに對して、一種の隔意を持つてゐた。とは云へ、ミュッセは彼女に心を惹かれずにはゐられなかつた。相互の深い理解の齎らした喜びは、忽ち戀の情熱と變つてしまつた。サンドの方では、まだミュッセに會はない前から、一種の危虞を抱いてゐて、サント・ブウヴに、ミュッ

セとは會ひたくもあり會ひたくもないとか、それは好奇心で興味ではないとかいふ意味の事を云つた程であるが、彼に對する彼女のその好奇心の中には、危險な火あそびをする子供のそれが潜んでゐなかつたとは云へない。さすがにビュロオの慧眼はあやまたなかつた。かくて、この文學史上に名高い不幸な關係は結ばれたのである。

　この二人の戀愛生活は、奇異なるものであつた。彼等はその最初の沒頭の時期を通過すると、互ひに假裝して、その知友を面白がらせる事を樂しんだ。ポオル・ド・ミュッセが、はじめてこの二人の戀人を晩餐に招待した時、アルフレッドは十八世紀の侯爵の扮裝をし、ジョルジュ・サンドはアドリアンヌの、鯨鬚のコルセットの姿をして現れた。また、サンドはミュッセと知合つてからはじめて午餐會を開いた時には、ノルマンディの女中の扮裝をして、人目につかぬやうにそつと食卓に侍して見たり、また、正賓の哲學教授レルミニエの相客に、フェナンビュウルの劇場の名人と云はれた道化役者のドビュウロオを招いて、誰もその素顏を知らないのを幸ひ、これは英國の下院議員の方で、密使として墺太利へ行かうとしてゐるのだと云つて紹介した。そこで、この外交官のお愛憎に、盛んに政治上の話が出て、ロバアト・ピイルや、スタンレイ卿の名が口にされた。ところが、不思議にも、その見知らぬ客は、頑强に沈默を守つてゐて、一向話に入つて來ないのである。やがて、誰かが「歐羅巴の勢力の平衡」といふ言葉を使つた。すると、その英國人は急に口を開いて、「皆さんは、現在の英國と大陸との重大な關係のもとに、歐羅巴の勢力の平衡といふ事を、私がどんな風に考へてゐるかを、一寸御覽に入れませうか――そら」と云つて、この外交官がその前にあつた皿を上へ投げて、ナイフの尖でちよいと受けて、それで皿をぐるぐるぐるぐると廻しはじめた――その時の客人達の吃驚した樣子は、まづ、大凡想像が出來ようと思ふ。

　ところで、かうしたエピソオドは、二人の間の關係がいかなるものであつたかを想察せしめると共に、假裝を愛してゐたミュッセのサンドへの感化をも考へさせる。また、當時の浪漫派時代の――一八三〇年代の――一般的空氣のい

かに奔放な、子供らしいものであつたかをも會得させるであらう。で、とにかく、この關係に於いて、ミュッセが受けるよりも與へる事の多かつた事は確かだと云つていい。たとひ彼がはじめてサンドの「アンディアナ」を手にした時、その第一頁に於いて、二三十の餘計な副詞を鉛筆で何の氣もなく抹殺した事が、後でサンドに知れた時、その感謝よりもむしろその立腹を招いたといふやうな事實は、問題の外に置くとしても。

かくて、この關係は、つひにかの有名な伊太利への旅となるのである。この旅先きの事件はいろいろに報道されてゐるが、事件の眞相は十分に闡明されてゐるとは云ひ難い。二人が一緒に出發した事、彼が嫉妬をもつて彼女を苦しめた事、その代り彼女が彼の一擧一動を鋭い監視をもつて苦しめた事、二人の共同生活が幸福なものでなかつた事、彼がその病氣の間、彼女に裏切られて、ただひとり意氣銷沈して、巴里へ歸つて來た事……その大略だけは確實であるが。

ジョルジュ・サンドの『我が生涯の物語（リストワァ・ド・マ・ヴィ）』は、この事實をどう書いてゐるであらうか？　それは我々の知りたいところである。けれど、遺憾ながら、この書は行間を讀むの外なき書物である。サンドの云つてゐる限りは、眞實の證據を有つてゐる、けれど、彼女は凡てを云はうとしないのである。バルザック、サント・ブウヴ、フランツ・リスト、それらの人々については、いかに詳細に語られてゐるであらう。しかも、私たちの最も聞きたいと思ふミュッセとショパンとに關しては、いかに僅かしか語られてゐないであらう。殊にミュッセに關しては、ただ僅かな表面的の事實しか記されてゐない。そして、それは大凡次のやうな數行にすぎないのである。

サンドはその『レリア』を完成して、その長らくの夢想の國なる伊太利を見たいとの烈しい欲望を感ずる。彼女はリヨンからアギニヨンへの河蒸汽で、スタンダアルに出會ふ。彼の人物に對する長々しい批評がある。アギニヨンでスタンダアルに別れて、羅馬を經てヱネチアに着く。そこで突然、今迄何處にゐたとも知れないアルフレッド・ド・ミュッセ

の名が出る、彼がそこで急にチブスにかかつて、危篤に陥るのである。十七日の間、彼女は彼を看護する。その間たつた一時間、夜眠つただけだとサンドは云ふ。そして、病癒えると、ミュッセは直ぐさま旅立つてしまふのである。サンドはメストレまで、ゴンドラで彼を送つて行く。けれど、長らくの不眠のために、眼がぐらぐらして、歸りに小さなカナルの小さな橋が、あぺこべになつて見えたと云つてゐる。

ただ、それだけである。それだけの事實の裏に、我々は多くの心理的葛藤を、二つの靈魂の烈しい接戰を想像せずにはゐられない。然し、その解説は、これをサンドでなしに、他の著書に俟つの外はないであらう。

ミュッセがジョルジュ・サンドと伊太利に滯在してゐた期間は、一八三三年の秋から、三四年の四月までで、彼はその間に、二三の喜劇を書いてゐる。そして、その一つの題は『戀をもてあそぶな』といふのである。ミュッセの懊惱苦悶は、後に書いた彼のむしろ自己非難の書である『この世紀の兒の告白』（コンフエッション・デュ・ナンフアンヂ・ユ・シエクル）に描き出されてゐる、勿論事件はすつかり變更されてゐるけれども、彼の嫉妬は烈しいものであつたらうが、人も知る如く、ジョルジュ・サンドの方にもその罪がないわけではない。或ひはサンドの氣まぐれな行爲は、ミュッセの餘りの嫉妬の生んだ一つの反動であつたかも知れない。とにかく、ミュッセの兄のポオル・ド・ミュッセは、アルフレッドの病氣の重くなつた理由として、彼を診察しに來た若い醫者とサンドとの嬌態を、彼が偶然目擊したためであつたと斷言してゐる。また、實際、この若い醫者は――ジュセッペ・パジェロは、巴里のフィガロのカバニス博士に向つて次のやうに話したといふ。

或る晩、サンドが熱烈な三頁の手紙を書いて、宛名を書かない封筒に入れて、パジェロに渡した。彼は當惑して、これをどうしたらいいのかとサンドに訊くと、彼女は彼の手から手紙をひつたくつて、その上に「愚かなパジェロへ」と書いた。そして、數日の後に、サンドはミュッセに向つて、今後自分が彼にとつて一人の友達にすぎぬと云ふ事を告げたといふのである。このパジェロとサンドの關係は、極く短かい期間に過ぎなくて、その數年後には、かのショパンと

の關係が生れるのである。

とにかく、ミュッセは肉體の病ばかりではなく、その心をも傷けられて、ひとり巴里に歸つて行つた。その後の彼は、アブサントにその憂悶を忘れる傷心の人として傳へられてゐる。然し、彼が一個の男子となつたのは、この離別以後である。ブランデスの所謂「ドン・フアンの衣裳」をぬぎ捨てて、苦痛に燃える心臟をもつた詩人として、屑にあらぬ、心の燃える言葉もて、人間の深い惱みの歌を奏でたのである。

ミュッセに取つては、勿論、ジョルジュ・サンドとの關係が唯一の戀愛事件ではない。サンドに劣らぬ知名の女性に於いても、ラシェルの如き名を擧げる事が出來る。そして、また彼が女に裏切られたのも、またこれがはじめてではなかつた。既に、彼はその靑春の曙に於いて、一人の愛人と一人の友人とに裏切られて、それによつて人間への信頼を早くも喪失し、その不信の中から、かの苦々（にがにが）しさと嘲弄のシニシズムを得たのである。「あまりに熱き血、あまりに燃える心、あまりに早き幻滅」これが若き詩人としての彼の著しさである。然し、サンドとの經驗は、たしかに彼の杯を一杯に充たしたに違ひない。

ミュッセは自ら云つた、

「私の杯は大きくない、然し、それは私自身の杯である」と。

彼は全く獨創の人であつた。彼は何人をも學ばなかつた。彼の作品は、不斷の敎養や、批評力からではなくして、凡て天成の情熱の感興の中から生れたものである。意志力によつて、徐々にその世界を築き上げるなどといふ事は、彼から期待すべき事ではなかつた。それゆゑに、悲しいかな、彼はゲエテのやうな自己完成の頂點に到達する事は出來なかつた。十七八歳にして、不朽の名品を出して、三十歳にして、既にその詩人としての生活を終つてしまつた——

——その後彼が四十七歳をもつて此世を去るまでに、なほ三篇の戯曲と幾篇かの詩とを書いたが、それはその量に於い

ても質に於いても、勿論云ふに足らぬものである――彼は謂はば早熟早老の天才であつた。とは云へ、その十年あまりの年月の間に、しかも何等の自己强制もなしに、いかに多くのすぐれた作品を彼は殘した事であらう。その詩は云ふまでもなく、『アンムリイヌ』『フレデリックとベルヌレット』『ティティアンの子』等の如き小說、『マリアンヌの移り氣』『燭臺』等の如き戲曲を――そして、その彼の短かい喜劇の如きは、近代の文學中ユニイクのものと云はれてゐるのだ。

ミュッセはかの一八三〇年代の佛蘭西浪漫派の詩人である。

彼は十七歲の時に、ユゴオの義弟のポオル・フウシエによつて、この「エルナニ」の詩人のところに連れて行つて貰つた。また、サント・ブウヴの屋根裏の部屋へ上つて行つて、こわごわに「私も詩を書きます」と云つた臆病な少年でもあつた。彼が十九歲の時に出した『西班牙と伊太利との物語』は、その浪漫的發展の第一步であつた。

然し、彼は浪漫派の追隨者ではなかつた。エドゥアルド・エンゲルは、「ミュッセが佛蘭西の浪漫派に對する關係は、ハイネが獨逸のそれに於けるものと、殆んど嚴密に同樣である。彼等は決してこの軍勢に、またこの軍將に、揮下の誓ひは立てなかつた、ただその浪漫主義から、詩的價値あるものを利用したのにすぎず、その他の點では自分一個であつた。」と評してゐる。

彼とハイネとの比較は、文學史家の好むところで、既に『ハイネとミュッセ』と題する書物もある。彼の諧謔と譏笑とは、ハイネに似た點がある。彼の屢々惡評される『月のバラアド』の如き、十分その傾向を示してゐる。それはその內容に於いては、月を讃美し禮拜する浪漫派のマンネリズムに對する、詩形に於いては、舊則に拘泥する古典派のコンヱンショナリズムに對する天才的な嘲弄とも見るべきものである。

暗き夜の、

黃ばみし塔の頂きに、

月は、
iの字の上なる黑き點かと人や見ん。
如何なる憂ひの魂(たましひ)ぞ、
君が面(おもて)を絲にて引きて
闇の中にと導くや。(永井荷風氏譯)

かかる諧謔は、他の浪漫派の人々には見出し難いもので、しかもその中に眞摯な感情の隱されてゐる事を見出すとき、モオパッサンの云つたやうに、それが「不朽のバラアド」である所以を理解する事が出來るであらう。ミュッセとハイネとの比較は私にも興味がある。それは私が獨逸のゲミュウトと、佛蘭西のエスプリとを同樣に愛好するからである。そして、ハイネは獨逸詩人中最も佛蘭西的であり、ミュッセは佛蘭西詩人中最も獨逸のゲミュウトに近いものを持ちはしなかつたであらうか。

暫らくエドゥアルド・エンゲルの言葉を借りよう。

彼は「眞の抒情詩人には、靈魂と言葉との或る薄明が――夢の情調が附き物である。それをミュッセは十九世紀の佛蘭西人にとつては、十分珍らしくも所持してゐる」と云つてゐる。

一般に、獨逸の評家はこの點を、自國と佛蘭西との詩の優劣を定める一つの標準としてゐるやうに見える。獨逸の詩が、その國の森林のやうに幽邃な氣分を持つてゐて、朦朧たる薄闇に導いて、外國の讀者をして徒らにその迷路に彷徨せしめる事は、我々の屢々經驗するところである。ゲエテの如き、とりわけその特質が著しい。これに反して、佛蘭西の詩が極めて明快で、白日の客間(サロン)の如く、隅々までも見渡される事も、恐らく、事實であるやうに思はれる。これが原因は、その言語にあるか、その國民性にあるか、又はその兩者にあるか、今それを考究する事は私の任務で

はない。私はただ、ミュッセが、かのあまりに明快にして、屡々乾燥無味な雄辯に墮する傾向ある佛蘭西の詩人中にあつて、（この故に、私はかの幽韻朦朧たる象徴詩派が他ならぬ佛蘭西に發生した事に、十分の意義と必然性とを見出すものだが、それはまた別に論じたい）ユニイクな詩人となる所以の一つは、この點にある事をも首肯したいのである。

然し、ミュッセは何よりもエスプリの人であつた。ハイネも獨逸人中には、比類なきエスプリを有つてゐた、二人のキットも――もつともエンゲルは、ミュッセのはキットよりもより善く、ユウモアだと云つてゐるが――また類似點を有つてゐる。ただ、ミュッセには自然の愛が缺けてゐたやうに見える。彼は巴里のブルワアルの鋪道の外には、地面を見なかつた。旅行も殆んどしなかつた。ただ一度の例外は、ジョルジュ・サンドとのヱネチア行である。然し、その時彼は戀してゐた、そして、戀するものにとつて、自然は何の關心事であらう。戀人の目に映るものの外には何も意味はない。ヱネチアからの歸りは、成程ひとりであつた、だがその時、彼は不幸であつた、そして、不幸なものの眼は常に内部に向ふのである――と、こんな風に云つてくると、彼が自然をそのままに歌ふ事のなかつたのも領けるであらう。その點、人間的だつたハイネも、ずつとミュッセよりは自然に近づいてゐたと思ふ。

アンリ・リシュタンベルジエは、一九〇五年に、H. Heine, Penseur. なる書を書いた。それを獨逸の批評家は嘲つて、ハイネに思想ありや、哲學ありやと反問した。この非難は、またミュッセに對しても、屡々下される非難である。然し、それは正しいだらうか。これに對して、ギュヨオは敢然として答へてゐる、

「彼（ミュッセ）の哲學は惱める人のそれである。すべてこれ高調の悲歌である。絕叫である。嗚咽である。而て所詮斯の如きものこそ、また恐らくは眞に永遠の哲學であつて、かの紛々たる多くの哲學體系のやうに、一時的に生滅するものとは其選を異にする所かも知れない。」

「吾人は又偉大なる思想こそ、偉大なる詩を作る所以であることを忘れてはならない。且、ミュッセに於ける眞の價値

は、縦ひ如何に優麗でも、艶美でも、彼が其精神的苦痛と懐疑的懊惱とを極めて卒直に、往々人を毒する程にもあからさまに表白した點に存するのである。」（大西克禮氏の譯による）

詩人がその眞實の苦痛と懊惱とを語るとき、彼はまたその哲學を語るのである。詩人が深く動かされた生の感情こそ、眞の思想である。かの自己の生存苦と何等の交渉なき論理の構成物が、何の思想ぞ、何の哲學ぞ。かく、我々は時として云はうとは思はないであらうか——偉大なる哲人の著作より受ける感銘が、詩人の作品のそれに極めて相似たる事を思ふ時、なほさらにも。かくて、その苦惱から、ショオペンハウエルはかの厭世主義の哲學をつくつた。そしてミュッセは涙の詩を書くのである。

彼が「唯だあてもなく、思ひのままに、歌ひ、笑ひ、且つ泣きて、ただ涙の玉をぞ造る」と歌ひ、「絶望のきわみの聲は、うるはしききはみの歌ぞ、われはよく知る、さながらの涙の聲と聞かるべき不朽の歌を」と云ひ、「わが世に殘せる唯一つのかたみは、わが幾度びか涙に暮れし事のみ」と語る時には、彼はその涙の哲學を語るのである。しかも「涙は微笑(ほゝゑみ)のはらからなり、」彼はまた屢々微笑む。「四つん這ひになつて、八方にキスを投げる」諧謔の詩人は、ハイネや後のラフォルグの如く、道化の救ひを知つてゐたのである。月のバラアドには、既にピエロの影が仄めいてゐる。「ミュッセの戀はおろかし、されどめでたき歌もてその戀を嘆きぬ」とは、ヹルハアレンの批評であつたと思ふ。「詩人は——痴人」とは、わが常日頃なる呟きである。まことにミュッセは賢人ではなかつた。愚かな失錯、恥と悔と惱みと、——そして涙の玉をつくる彼であつた。そしてこの故にこそ、彼は私たちに最も親しい詩人となるのである。詩人は愚かでよい、ただ愚かなれば愚かなるがままに、ありのままの姿を僞る事なく、且つ笑ひ、且つ嘆き、且つ泣くがままを、小鳥のやうに歌ひ捨てて行くならば、彼はいかになつかしく、いかに親しく、いかに愛すべき詩人であらうか。かくて、我々の心は、屢々悲しい涙と同感とをもつて、あはれなる詩人を思出すであらう、心破れしその詩人を……

思ひ出よ。冷き地の下に永遠に、わが破れし心眠りなば、思ひ出でよ。淋しき花の徐に、わが墓の上に開きなば、君は再びわれを見じ。されど死なざるわが魂は、親しき妹が如くに、君が傍に返り來ん。心澄して夜に聞け。ささやく聲あり、「思ひ出でよ」と。（永井荷風氏抄譯）

若き騎士ペテフィ

獨逸のあの卵色をした假綴のレクラム本で、„Gedichte von Alexander Petöfi." といふ一册を見附けた時には、私はどんなに嬉しかつた事であらう。それまでは、その詩の二三篇位しか讀んでゐなかつた私は、これによつてペテフィにずつとずつと親しむ事の出來るのを考へると、微かに胸が躍つた。こんなにも私は、ペテフィの詩の仄見によつて魅せられてゐたのである。

この機會に、私はレクラム會社に、一片の謝意を表したく思ふ。貧しい私にとつては、その頃一册十錢で購はれたレクラム本は、どんなに有難かつたか知れない。私は金さへあれば、この叢書を購つた。四五册も一度に買つて來て、そのタイトルペエヂに自分の名を羅馬字で書き入れたり、その頁を切つて行つたりするのが、どんなに樂しみであつたか知れない。

アンデルセンの『メエルヒェン全集』の千頁以上の大册でも、十册分の價に過ぎなかつた。詩集などは、大抵一册分か、二册分である。そこで、いつのまにか古今の名篇大著が竹の細工の本立にずらりと列んだので、ある皮肉な友人には、

「日本でレクラム本を一番餘計もつてゐるのは、丸善を除けば、まづ、君だらう」などとひやかされたが、私はきまつて、

「ケエベル博士がもつと多い筈だ、ケエベルさんはクラシック物は大抵レクラム本で讀んでゐられるさうだからね」と正直に答へたものだ。

その後私は飜譯などをはじめてから、レクラム本の獨逸譯にも正確でないもののある事を知つたが、常時ケエベル博士が、レクラムの露西亞物などの譯を推奬されてゐるといふ事を聞いた時には、ひどく喜んだものだ。

こんな風にして、私はレクラム本で、露西亞の作品もかなり讀んだが、とりわけいろいろな詩集を隨分と讀んだ。ハイネ、レナウ、ノヴリス、アイヒェンドルフ……などの獨逸の詩人はもとより、希臘詞華集をはじめ、ダンテ、ペトラルカ、プウシキン、レルモントフ、ラマルティヌ、ボオドレエル、アレクセイ・トルストイ、ミイケヰッチ……そして、ペテフィもまたその中の一つであつたのだ。

だが、ペテフィとは、いつ、いづこの、いかなる詩人であらうか？

『アミエルの日記』の一八八〇年、一月二十七日の條に、次ぎの如く記されてゐる。

「私は、ペテフィの短詩十二篇か十四篇の飜譯を終つた。此等の詩章には、異常な香味がある。此等の詩章には、何やらステップを思はせるやうな、東洋を思はせるやうな、マゼッパを思はせるやうな、狂氣を思はせるやうなものがある、而かも騎馬鞭の打音につれて進むやうに思はれる。これには何といふ力と熱情、何といふ野生の輝やかしさ、何といふ奔放な壯大な影像があることであらう！　誠に、このマヂャール人は一のセンタウルであり、ただ偶然にキリスト教徒となりヨーロッパ人になつたもののやうに思はれる。彼の身裡の匈奴種は、アラビア種に傾いてゐる。」（柳田泉氏

の譯による）

アミエルがこの匈牙利の詩人を飜譯したといふ事は――勿論、獨逸譯からであらうが――私には非常に稀らしいと同時に、何となく興深く思はれた。殊に、この批評は面白い。マシュウ・アーノルドの云ふやうに、文學批評家として卓越してゐるアミエルは、ペテフィの特徴をよく掴み得てゐると思ふ。

ところで、このペテフィたるや、これ迄我國には全く知られてゐない。總じて、匈牙利の文學といふものは、我々には全く未知のものであるやうに思はれる。わづかに、高山樗牛が、曾つて一度、その國の作家ヨオカイを推賞した事がある位のものである。しかも、匈牙利人は、我々東洋人に近い血緣をもつてゐると云はれてゐるのである。

然し、かく云へばとて、私自身、勿論、匈牙利文學に精通してゐるといふわけではない。ただ、わづかにその中の、マダアチュの「人間の悲劇」と、このペテフィとを、以前から好んでゐると云ふのに過ぎない。殊に、ペテフィは愛好の詩人として、その幾篇かを、曾つては自ら拙い筆で譯出してみた事さへもあつたのである。

アレクサンデル・ペテフィは、一八二二年に、匈牙利のペスト領のキス・ケレスに生れた。一說には、二三年の一月一日の、最初の時間と共に生れたとも云はれる。彼の父は牛豚の屠殺業者であつた、そしてアレクサンデルをも、自分の業を繼がせようと望んでゐた。しかも彼は、父とは全く別の方へと逸出してしまつた。彼はいろいろな土地の學校を經てから、シェムニッツのリセウムに入つたが、學業を放擲して、劇場に入り浸つてゐた。この頃、一八三八年に、彼はすでに詩作をはじめてゐたといふ。ところで、かうした彼の行業が父の耳に入つたので、父はひどく立腹して、つひには彼の學資の仕送りを絕つてしまつた。

或る薄曇つた二月の朝、彼はシェムニッツを發つて、ペストに行つて、そこの國民劇場に仕出しの役に傭はれた。ま

もなく、彼の父は財産を失つたので、ペストの一親戚が、彼の面倒を見る事になつた。それでペテフィは夏期や休暇の時をその家に送つて、羅馬の古典文學を讀んだり、詩作をしたりした。次いで、エーデンブルヒに行つて、再び修學を續ける事になつたが、彼は今度は兵隊に應募して、エーデンブルヒと、後にはカルルスタットの兵營にゐたが、病氣をして、そのため一八四一年の冬に解雇せられて、次ぎの二年をパパで眞面目に勉強し、詩集を出して「マギヤール協會賞」を得た。

その頃、彼は俳優になつて、附近のいろいろな催しの際に登場した。一八四二年には、「アテノイム」でデビュウをして、多少の評判を博し、四四年には、「人生の面影」の同人になつた。詩人のフェレスマルシイと、エメリッヒ・マホットとが、彼を庇護して、それぞれ自分の雜誌に彼の詩作を紹介して、彼は今や詩壇の寵兒となるに至つた。それなのに、彼は又もや俳優の志願をした。けれども、國民劇場で見事失敗したので、つひにそれを機として、斷然この情熱を放擲して、著作に一身を委ねる事になつた。然しこの諦念が、彼にとつていかに苦しいものであつたかは、その詩『舞臺からの別れ』によく現れてゐる。

ペテフィはその生涯の短かかつた割りには、詩作の數が多く、その外、戲曲の作もあり、小說の作もあり、旅行記もある。小說では『首斬人の繩』など特に名高いものである。

その詩の中で最も感情の高調に達してゐるのは、『エテルカの墓のサイプレスの葉』と題する數十篇の抒情詩である。これは前出のエメリッヒの弟で、同じく詩人なるアレクサンデル・マホットの義妹にあたる美しい少女エテルカの早逝を悼んだもので、その少女を彼は愛してゐたのであつた。

手をこまぬきて、なきひとの
墓邊に來ては、墓のごと、
ものも言はずに立ちつくす、
ただ、墓石をながめつつ。

かくも海邊(うみべ)に、舟人(ふなびと)は、
その寶をばみな奪ひ、
彼を乞食となしたりし
海を眺めて立つらむか。

エテルカとは美しい名ではないか。私はこの名の響を好んだ、そしてこの名で一人の女性を呼びたいと思つた位である。

ペテフィは四六年にザトマアルの方に旅行をして、その旅でユリイ・ゼンドレイと呼ぶ令嬢と相知り、四七年に結婚をして、これ迄の不安定な漂泊生活を切上げて、靜かな家庭の幸福へと入つた。おなじ年に、彼の全詩集もまた出版せられた。かくて彼は暫く、幸福な豊かな詩作生活を樂しむ事が出來た。

四八年の七月に、彼は選ばれて、ペストなる國會の議員になつた。が、その年の九月には、はやくも軍隊に入つて、大尉となつた。當時露西亞の壓制に反抗して、自由の義戰がはじめられたので、彼は祖國の運命を座視するに忍びなかつたのである。彼は各地に轉戰したが、最後に、四九年の七月三十一日、シェッスブルヒの大會戰の折りに、彼は行

方不明になつてしまつた。

彼は多分その希望した通り、祖國のために死んだのであらう、それを戰友が彼である事を氣付かずに、共同の埋葬に附したのであらう。然し、その後長い間、何十年の長い間、彼が敵なる露西亞軍の手に落ちて、捕虜として西比利亞へ送られて、そこで多分今もなほ生きてゐるであらうといふ風說は、全く消滅しなかつた。

「ペテフィはまだ生きてゐる……」

時々こんな噂が、人の口から口へと傳はつたのである。若しそれが事實とすると……

　そは運命の神の手に
　惠まれし人よ、その人は、
　酒と女のために生き、
　祖國のために死ぬ人は。

と曾つて歌つたこの熱烈な自由の詩人が、西比利亞の牢獄で、一個の流刑人として死んだ事を考へると、それは恐ろしい事である。然し、幸福にも、それは單なる風說にすぎないのである。ただ彼が今なほ生きてゐる事は事實である、その奔放な詩の中に……

　人の名譽ははかない虹か、
　涙にくもる日のかげか。

かくペテフィは歌つた。

然し、彼は今、匈牙利の國民詩人である。匈牙利文學に於ける彼の地位は、あだかも露西亞文學に於けるプウシキンのそれに似てゐる。

ペテフィは早世の詩人であつた。彼の作品は、渾然たる完成味に缺くるところがある。彼は批評的でなく、反省的でなかつた。從つて、冥想的な詩篇にあつては、その深みと圓熟とに於いて、彼の同國人――たとひ獨逸語で詩作をして、獨逸の詩人として、認められてゐるとは云へ――ニコラウス・レナウの足もとにも及ばないであらう。然し、天眞な感情の流出に於いて、純眞な抒情味に於いて彼は獨特の世界を有つてゐると思ふ。私が彼を愛するのは、その點である。

特に、彼の爽快な性格を、私は愛するものである。おもふに、ロバアト・バアンズを好漢と呼ぶ意味で、彼もまた好漢の名に値するであらう。

「自由と愛とが、世の何物にもまして私には必要である。私の愛のためには、私自身を捧げ、自由のためにはその愛を捧げる」と云つた彼――彼は自由の詩人として死んだ。その死の前に彼は歌つた、靜かなる沒落の歌を……

　　われは棄てん、この華かに輝ける世を、
　　快樂と苦痛とのわれを囚へて放たぬ世を。
　　われは去らん、遥かにも人里はなれし、
　　物すごく、また美しき森の寂寥の中へ。
　　かしこにわれは木の葉の囁きを聞き、
　　さやかなる小川の音に耳をかし、
　　小鳥の歌に聞きとれて、
　　しづみ行く日をながめやり、

わが身も共に沈み行かまし。

クリスティナ・ロゼッティ

「君が家は音羽の町のそのおくの灯影まれなる垣つづきかな」

こんな歌を、一人の少年が捧げた人である。その人は、女子大學の生徒であつたが、女子大學よりも、むしろ何處か宗教學校にふさはしいやうな氣質を持つてゐた人であつた。

「華やかな瞳と寂しい頰と……」

そんな言葉が、その頃の若いロマンティシストの間に語られた。

「寂しい頰に慕はれて、華やかな瞳を慕ひたい……」

或る高踏派の詩人はかう云つて、何か會心の事でもあるやうに微笑んで、その後進の少年詩人の顏を眺めた。

少年はその詩人の薔薇の花に飾られた書齋で、度々、そのHさんとよぶ女の人に出會つたのであつた。言葉ずくなな人で、そのくせ物を言ふときには、熱のある早口であつた。でも、そのやはらかな聲には、何處か弱々しいところがあつた。

詩人とHさんの對話は、多くは英吉利の詩のことで、詩人はその華奢な手で長い髮をかき上げかき上げ、その豐富な知識を披瀝するのであつた。テニスン、ブラウニング、ダンテ、ロゼッティ・クリスティナ……とりわけクリスティナ・ロゼッティが、彼女の好きな詩人のやうであつた……

傍らから默つて彼女の横顏を見てゐたとき、少年は不圖、

「寂しい頬……」と心の中に呟いた。

或夜、小石川の富坂上にあつた詩人の家から、少年はHさんと一緒に歸つた事があつた。彼の下宿は牛込の方にあつたので、音羽の通りで別れるまで、彼は彼女と並んで歩いた。みちみち彼女はかの詩人の書齋にゐた時とは違つた人のやうに、よく話した。そして、いかにも姉らしく、少年の身の上をいろいろと聞いたり、彼の辛い境遇を慰めたりしてから、自分もおなじやうに悲しい身の上だと云つて、父は數年前にみまかつて、今は母と小さな妹と三人きり、寂しい生活をしてゐるのだと話した。そして、一寸笑つて、

「わたしの家は、この上の方ですから、いつか遊びにいらつしやいな」と云つた。

そんな話のあとで、どういふ拍子であつたか、彼女はその手に持つてゐた藍色の表紙の詩集を、いつか讀んでごらんなさいと云つて貸してくれた。それはクリスティナ・ロゼッティの『新詩集(ニユウ・ポエムス)』であつた。今ではもう、殆んど何處にも見かけない書物であるが……

少年はその日歸つてから、かの君に捧げる歌を作つたり、彼女の貸してくれた詩集を開けてみたりした。その本のタイトルペエヂには、クリスティナの肖像がついてゐた。それはダンテ・ゲブリエルが鉛筆で描いたものであるが、その寂しい頬のあたりが、何となくHさんに似てゐるやうに、少年には思はれた。その詩句はさまでむづかしい字もないやうではあつたが、少年の乏しい語學の知識では、辭書と首つ引きして見ても、なかなかその意味はくみとれなかつた。でも、彼はHさんがアンダアラインを引いてゐる詩句を一生懸命に拾ひ讀みしてみた。

その後、彼はHさんに會ふ機會はなかつた。彼女の家へ訪ねて行く勇氣はもとよりなかつた。それで、かの『新詩集(ニユウ・ポエムス)』を詩人のもとまで持つて行くと、詩人はHさんが田舍の方へ行つてしまつた事を告げて、

「あの人も可哀想な人だ……」と呟くやうに云つた。

それから幾年か過ぎた。當時の少年も、やうやく靑年期に入つて、クリスティナ・ロゼッティが、どんな詩人であるか、どんな生涯を送つたか、どんな作品を殘したかを、より詳しく知る事が出來た。けれども、彼にはいつまでもこの女詩人を、かのHさんの印象と全く切り離して考へる事が出來ないのであつた。

女詩人に富んでゐる英吉利の文學史でも、かの燃ゆるが如き情熱の詩人であるブラウニング夫人と相並んで、クリスティナ・ロゼッティは一段高い位置を與へられてゐる。クリスティナの詩も、生涯も、共に寂しい。けれど、その寂しい中に、何とも云へぬやすらぎと落つきとがある。靜かに草間を流れる小川のせせらぎのやうに、彼女の詩は、幽かながらも心に深く響く。

ダンテ・ゲブリエルのやうな藝術家を兄にして、P・R・Bの藝術運動の雰圍氣の中に生活しながら、何處までもつつましく、寂しく、生涯に二度出會つた戀愛事件にも、心を擾されず、いづれも信仰の相違のために結婚を斷念して、一生を孤獨の間に過した物靜かな、寂しい顏をした、信仰の厚い病弱なこの女詩人は、思ふにかのHさんのやうな寂しい、物靜かな女性には、いかに情ぶかい慰めの詩人であるであらう。

その故郷である南の國の濱邊で、Hさんがみまかつた事を耳にしたのも、はやずつと以前の事である。彼女を思ひ出す每に、當時の少年は、いつも次ぎのクリスティナの詩を想ひ起すのである……

おもひもいでず薔薇(さうび)さへ
おもひもいでずうばらさへ
さても麥刈つかれはて
積みし穗によりねぶるごと

しかせむわれも黎明(よあけ)まで
寒きは寒き臘月(らふげつ)の
過ぎしはゆきし日のごとき
その間(ま)も一人われをおもふ
世はみな忘れはつるとも
なほ一人のみわれを憶(おも)ふ。（蒲原有明氏譯）

ヴィリエ・ド・リイラダン

一日、ナポレオンのところに――それはアウグステンブルグ公が、ホルシュタインの、マキシミリアンがメキシコの王の候補者に擧げられた時の事であるが――一人の詩人がやつて來て、自分を希臘の王にして下さるやうにと懇願した。彼はヘレネ人の王になつて、その山のやうな借金を拂つて、確實な收入を得て、何の心配も不如意もなく、閑暇の中で詩作したいと考へたのである。ところが、その噂が擴まると、巴里中は大騒ぎとなつた。市民達は、そんな無賴な乞食が、空想兒が、そんな途方もない歎願をした事を憤慨するし、藝術家達は、苟くも詩人ともあらうものが、國を治めるといふやうな、そんな散文的な卑俗な職務にまで身を下さうと考へたことを憤慨した。けれど彼は少しも頓着しなかつた。彼は又も群衆を狼狽させ、憤慨させた事に滿足したのであらう。とにかく彼は、その懇願の結果には頓着なく、意氣揚々と、宮殿からモンマルトルの居酒屋へと歸つて行つた。

俗衆どもの度膽を拔いて、彼等を憤慨させ、侮辱する事を快としたこの詩人が、即ちヴィリエ・ド・リイラダンであつた。彼は詩人であり、小說家であり、劇作家であり、哲學者であつた。そして、佛蘭西の近代象徵派の先驅者であり、且つそのすぐれたる一人であつた。ヴィリエには、恐るべき獨創力があつた。その詩集、Premiè es Poésies（はじめの詩集）その小話集『殘酷なる話（コント・クリユエル）』の外『未來のイヴ』『アクセル』『イジス』其他は、一評家の所謂「最後のロマンティシスト、最初のデカダン」たる彼の天分の記念である。ペラダン、シャルル・モリス、アンリ・ド・レニエエなど、いづれも彼の弟子たる事を告白してゐるが、就中、メエテルリンクなどは、特にヴィリエから學ぶところの多かつた人で、彼が「私はヴィリエに負ふところが多い」と云つたのは至當である。

ヴィリエは佛蘭西の名家の後裔で、伯爵の身分であつたが、しかもボエミアンもボエミアン、全く、一個の浮浪人であつた。その一生は貧窮と困苦とに終始したのである。彼のまはりには、生前すでにいろいろの傳說が織りなされてゐた。けれども、間借をする金さへもなく、乞食や犯罪人と一緒に、何處かの穴倉にもぐり込んだり、公園のベンチに眠つたり、巡査に追はれると、夜すがら月下の路上をさまようて、夢想と詩とに耽つてゐた事は少くとも事實に違ひなかつた。一八八九年に、五十二歲で、彼がサン・ジァン・ド・ディウの慈惠院で、寂しくその生を終つた事によつても、それは推察されるであらう。

しかも、ヴィリエはそれを不幸とは思はなかつたであらう。なぜなれば、生の闇へと光明を投ずるものとして、多くの人間の感得しないものを告知する一種の豫言者としての藝術家の高貴な天職を、彼は確固として信じてゐたからである。そして、藝術家たる彼は、市民的の生活を蔑視してゐた。いつもいつも同じやうな日々の勤勞、職務、金儲けの仕事、それらのいかに空しいかを彼は骨の髓まで知つてゐた。それらが人間の眼を惑はす幻影にすぎぬ事を、彼ほど斷乎として信じてゐたものはなかつた。彼は平凡と慣習とを憎んだ。彼はただ夢より外には何ものをも愛さなかつ

た。夢のみが彼には眞實に見えたのである。

そこに彼の哲學があり、宗敎があつた。そこで、「アクセル」に於ては、或る寶を探し求めてゐた戀人同士が、つひにそれを見出したとき、實現されたものは幸福でない事を悟つて、死を求めるのである。そこで、「未來のイヴ」では、エディソンがその美と精神とが實際の人間のとても及ばない程の電氣人形の女を創る事に成功して、その腹に藏めた發聲器は、詩人や哲學者の最も賢明な意見を語る事が出來るのである。彼のアイロニイには、彼獨特の哲學が裏づけられてゐる。

晩年のヴィリエ——蓬々と亂れた頭髮(かみ)の灰白く風に靡いて、その下のなほ靑白い瘦せた顏には、俊秀なりし若き日の面影を何處かに偲ばせる、瘦せた、やや前屈みになつた姿をした詩人が——その鋭い、嗄れた、硝子の破片の相觸れて鳴る音のやうな高笑ひは、いかに俗衆を驚かし、恐れさせた事ぞ——食ふに物なく、泊るに家なき身でありながら、乞食と一緒に橋の下に夜をあかしながらも、遙かに華やかな燈火を見上げながら、「地球と呼ぶ一遊星の事も、たまには思ひ出してやらう！」と昂然として云ひ得たのである。

ヴィリエは名聲を蔑視した。遊びとして藝術に從ふものと同時に、仕事としてそれを取上げるものをも蔑視した。彼がどうして世間並の成功した文士になり得たらうか。それにしては彼は餘りに常識の、散文の精神に遠かつた。しかもこの詩人が、つひにその故鄕の夢の世界へ全く姿を沒し去つたとき、彼の名聲はいかに高く揚げられたであらう。ルミ・ド・グウルモンは、「ヴィリエ、この夢のアイロニイのエヴァンジェリストこそ、我等の師である。彼の遺稿は、小紙片一つでも、我々は貴い遺物として拜跪しようと思ふ」とさへ極言したのである。

ヴィリエの作品は、まだ殆んど我國には紹介されてゐない。嘗つて、その『殘酷なる話(コント・クリュエル)』中の一篇、あの恐ろしい蛇の話『カタリナ』が、大阪の新聞に譯載されてゐたといふ事を聞いた位のもので、その詩に至つては、未だ一篇も譯

されてゐない。で、今はその『昨夜』の中から、名聲に對する彼の侮蔑を表白した一節を、そが愛人の詩人への詞を、譯とは云はず、ただその大意だけを傳へて見よう。

　あはれ、譽れとや、その前にして力盡きむ。
　常春藤(きづた)はつねに涙にうるほさる。
　ただ行けよ、汝が愛するものへ。
　來れ、わが影に、とこしへの花のさなかに。

ヹルレエヌの獄中記

御覧、それはベクリンの畫だ……

一人の牧神(ファウン)が草の中に寢ころんで、一羽の小鳥を對手に、何か笛を吹いてゐる、そして、小鳥はそんな不思議なやはらかな物の音(ね)を、これまで聞いた事がないと云ふやうな顔をして、ぢつと聞き惚(と)れてゐる……

これがヹルレエヌの肖像畫だ。

彼はこんなにして、一生、笛を吹いてゐたのだ——彼の心の動くがままに。そして、佛蘭西の青年たちは、彼のまはりに輪をつくつて、ぢつとすわり込んで、醉心地で、彼の深い曲調に聞き惚(と)れてゐた……

彼のあの名高い奇妙な頭も、また、その肉感的な口も、牧神(ファウン)に似てゐた。少くとも、多くの人は、この比較をば好んだ。また他の人々は、彼の頭と容貌とを、ソクラテスの像に似てゐると云つた。してみると、彼は牧神とソクラテスとの中間者であつたかも知れない。

アナトオル・フランスの描いた醉漢チェスタスは、――それはヹルレエヌの溫かい模寫に外ならぬと云はれる――無邪氣に罪過に陷り、再びまた無邪氣に悔恨して、神の祭壇の前にその罪を懺悔しに來て、もはや戶を鎖された教會の門口で號泣するのである……

ああ、ポオヴル・ルリアン！

酒と女とアブサントとに、その身を持ち崩したこの罪人こそ、まことの聖者ではなかつたであらうか？　かくばかりの純眞、かくばかりの童心……それは他のいかなる詩人に、その對比を見出し得よう！

多年の放浪と困窮との後に、やうやく詩人としての名聲もあがつて、妻をめとつて、家庭を持つて、平和な生活に入つたヹルレエヌは、一日、その名を慕つて訪ねて來た一人の美少年――アルテュウル・ランボオの才能と美貌とに心を奪はれてしまつた。彼はランボオの愛を求めて、妻をも家をも振り棄てて、ランボオと二人で、白耳義に走つたのであつた。

曾つてワイルドの『ド・プロファンディス』が、獄中記の名によつて紹介された事がある。そして、このワイルドの過失は、これをヹルレエヌに學んだのだとの說は、私の屢々聞いたところである。恐らくさうも云ひ得られよう。然し、ワイルドの下獄は、英吉利のあの僞善的な社會の犧牲になつたのであるが、ヹルレヌは、むしろ愚かな、不思議な、彼らしい單純な怒りの發作のために逮捕されたのである。

彼の回想記『我が獄中生活(メ・ツピトオ)』は、ヨハンネス・シュラアフが獨譯してゐる。それによつて、この事件の前後に關するヹルレエヌ自身の記述の要領を讀むとしよう。

「一つの……過失。」

「かの哀悼に堪へぬアルテュウル・ランボオと私とは、私の覺え違ひでなければ、一八七……年の七月に、全くの旅心

に騙られて、A……の方へと旅立つた。(ここで彼はその市街の美觀を讃へてゐる)

私たちは夜の十時頃に、列車に搭じて、早朝に到着した。そして、直ぐ市街を歩いてみた。それは城寨のやうに狹かつた。そこで、目あてにして來た人々の起きる時分まで待つために、二人は停車場に引返して、そこで食事を攝る事にして、一杯やりながら快談した。ランボオはいつも不機嫌とも見える程の異常に早熟な眞面目さを持つてゐたが、恐ろしい狂暴な事や、途方もない出鱈目を云ひ出すし、私はもう二十五歳を越してゐたけれど、この日は妙にムシヤクシヤした氣持で、出來るだけ亂暴な事を話して、そこで肉汁や牛酪つき麵麭などを食べてゐる俗惡な旅客共の度膽を奪ふのを痛快がつてゐた。

その旅客の中に、今日でもまだ覺えてゐるが、我々の腰掛の右手のあまり離れてゐないところに、鈍重な意地惡さうな顏をした、中脊の俗物らしい男が、丁寧に撫でつけた頭の上に、古ぼけた麥藁帽を冠つて、安葉卷を喫つたり、一杯のショッペンを飮んだり、咳拂ひをしたり、唾を吐いたりしながら、鈍重といふよりは惡意のある注意をもつて、我々の話を聞いてゐた。

私はランボオに彼の事を注意すると、ランボオは時々彼の癖であつた、あの聲を立てない忍び笑ひをはじめた。ところが、この忌やな人間が、突然、まるで魔法のやうに影を消してしまつた。が、我々はそれには餘り氣もかけないで、やつぱり、元の强盜殺人の話を續けてゐた。すると、思ひがけなく、地からでも湧いたやうに、二人の憲兵が我我の前に立つて、二人に一緒に來いと命令した。」

そこでヹルレエヌ達は否應なしに、憲兵に連れられて、議事堂に行つて、官吏の訊問を受ける。その際、ランボオがいかにも神妙に泣いたり訴へたりして、係り員の同情を惹くところなどは、いかにも不良少年らしい當時のランボオの風手を想起せしめる。そこで、ヹルレエヌは、

「このA……に於いては、現に死刑の處分が行はれたばかりである……その際こんな當てつけがましい話を公衆の前でするとは不心得千萬だ……たとひ罪はなくとも嫌疑を招いても仕方がない……それに一體貴君は此地に何の用事があるのか？　こんな少年を連れたりして……兎に角、貴君はこの土地で何をなさうと云ふのであるか？　二人ともそんな服裝をして、荷物一つ持たないぢやないか？　えい！　どうしたわけだナ！」と云つた風な訊問を受けて、とにかく一應申開きをする。で、最後に、官吏は憲兵を呼んで、

「この人達を停車場へ連れて行つて、次ぎの列車で巴里へ送り還してくれ」と命ずる。忽ち、それが實行されて、二人はもうその晩に巴里に着く。そして今度は、他の違つた停車場から、より以上の用意をもつて、より嚴肅な冒險にと出發するのである。

　で、このA……での出來事は單なる序曲にすぎないので、次ぎの章に於いて、はじめて、かのピストル射擊事件が語られる。それをヹルレエヌは、どう書いてゐるだらうか？

「それは一八七三年の七月だつた。ブリュクセルで。街路での一寸した言ひ爭ひ、二發のピストルの發射、最初の一發が、爭論者の一人に輕傷を負はせた、その後で、二人の友達は、すぐ一人が許しを乞ひ、一人がそれを許したのであるが、元來、この悲しむべき行爲は、アブサントの醉ひのなした業で、一人が再び烈しい言葉を用ゐて、その上着の右のポケットを探ると、そこには不幸にもなほ四發の彈丸の籠められたピストルがあつた、その樣子がただならなかつたので、一人は仰天して、一目散に逃げ出すと、一人がそれを狂氣のやうに追つかけた、午後の燃えるやうな熱い太陽の下に、そのだるい身體を引きずつてゐた氣の善い白耳義人の驚きをも頓着せずに。

　近くを巡廻してゐた一人の警官が駈け付けて、犯人と證人とをつかまへた。簡單な訊問の間に、犯人は相手の訴へも待たずに、自分で自分の罪狀を述べる。そこで二人とも法律の型通りに、議事堂へ送られた。その折りに、警官は

私の腕をしつかりつかまへてゐた。今こそはつきり云ふ時だが、私がその犯行の當事者で、その相手は、昨年の十一月二十三日に不幸な死を遂げた、かの偉大なる特異の詩人アルテュウル・ランボオ其人に外ならなかつた。」

こんな風にヹルレエヌは書いてゐる。この事實の眞相を、傳記者の傳へるところに從つて、極く散文的に云つてしまへば、要するに、ランボオがその不自然な狀態に堪へずして、離別を申出たので、ヹルレエヌの失望と怒りとを刺戟して、ピストルの發射となつたのである。

かくて、一應の訊問の後に、ランボオは放免され、ヹルレエヌはそこから直ちに「アミゴオ」（監獄の名）に送られ、次いで、レ・プテイ・カルムの監房に送られる。罪狀は「殺人未遂」――

然し、この間にも、彼はさすがに妻子の事が氣がかりになつたと見えて、ギクトル・ユゴオに依賴の手紙を出し、この監獄で、「あはれなる詩人よ」ではじまるユゴオの返書を受取つてゐる。

さて、そこの獄中生活は次のやうである――

「監禁そのものは、私のやうな重大な場合でも、嚴格なものではない。が、監視は、その窮乏のため、又はその天性のために、容赦のない法網にかかつた囚人のそれと同樣に嚴重なものであつた。かうして、私が橫手の建物中に認めた監房の戶が開いて、荒凉とした草一つない敷石を敷きつめた中庭の上で、毎日、一時間宛の散步が許されるのにすぎない。

私の窓の外の（この窓には勿論、長い密接した鐵格子がはまつてゐた）塀の上には、私が謂はば致命の退屈をもつて飛出して行くこの物悲しい中庭の背景をなして、一本の高い白楊の樹が、その有難い梢の葉を顫はせてゐた、これは隣接した廣場か又は鋪道の立樹であらうと思はれた。それと同時に、遠方から一つの鈍い壯嚴な物音が私の耳に入つて來た。（ブリュクセルは私の知つてゐる最も愉快な、笑ひ戲れるところの市街（まち）である）そして、かうした折りに、私は

『智慧』の中の次ぎの詩を作つのたのである。

空は屋根のかなたに
　かくも靜に、かくも靑し。
樹は屋根のかなたに、
　靑き葉をゆする。

打仰ぐ空高く御寺の鐘は
　やはらかになる。
打仰ぐ樹の上に鳥は
　かなしく歌ふ。

ああ神よ。質朴なる人生は
　かしこなりけり。
かの平和なる物のひびきは
　街より來る。

君、過ぎし日に何をかなせし。
　君今ここに唯だ嘆く。

語れや、君、そも若き折
何をかなせし。（永井荷風氏譯）

私はまた塀の上を行つたり來たりする看守の姿を見た、これ以上メランコリイな光景はない。塀の中にも、鷄の羽で飾られた絹帽をかぶつた偵察隊の獵人兵が一人、その看視の二時間を、死ぬほど退屈してゐるやうに見えた。交替の時が來て、次ぎに來た男も、同樣に怠儀な樣子をしてゐた。この男は「何のためにおれは鐵砲を擔いだり、背嚢を背負つたりして、ここを歩き廻らねばならぬのだ、可哀相な奴等はちやんと錠前と鐵格子との中で、もう半分死んだやうになつてゐるぢやないか」と自分に云つてゐるやうに見えた。

ところで、私はそんなものを見る外に、隣の監房の書記と文通する事によつて、わづかに無聊を慰める事が出來た。文通と云つても、それは嚴密に云へば、物音のアルファベットとも云ふべきもので、當時思ひ付かれてゐたもので、人の話で聞き知つてゐる人もあらうと思ふが、それはAを知らせるために壁を叩くと、相手が答へる、また違つた叩き方でZを知らせる、また答へる、といふ風にするのだ。看守長に感付かれはしないかと心配であつたが、この人の善い男は、幸ひにそんな事には何の注意も拂はなかつた。」

こんな風にして、ヹルレエヌは、なほ幾度びか法廷に立たせられ、また幾度びか別の違つた監獄に送られて、いろいろな經驗を味はつてゐる。それらの中には、相當興味のある事もあるが、あまりに長くなるからこれ位にしておかう。

ランボオは、ヹルレエヌにとつては、一つの宿命のやうなものであつた。彼自身が、宿命そのものの如き人間であつたのだ。彼はこの事件の後間もなく、巴里を棄てて、そして永久に詩作を棄てて、瑞典に行き、瓜哇にまで漂浪して、つひにアビシニヤ地方の象牙商人となつて、數奇な生活を送つた後、蠻地の烈日の下で、熱病か何かで斃れてし

まつたといふ。つまり、彼は詩を作らないで、專ら詩の生活をしたのだと云つてもいいであらう。ランボオの死んだのは、ヹルレエヌがこの獄中記を書いた前年、一八九一年であつたから、まだ三十七歲であつた。

出獄後のヹルレエヌは、妻子とは別れ、既に恢復しがたい一個のポオヴル・ルリアンであつた。酒とアブサントとに困憊した一個の破產者であつたのである。しかも、彼のこの頽廢した、窮乏の生活の中から奏で出された『智慧(サアゼス)』の、『善き歌(ボン・シャンソン)』の『言葉なき歌(ロマンス・サン・パロオル)』の幽韻高致、黃絹幼婦(ぜつめう)の曲調は、いかに驚くべき神來の聲であつたらう。或る批評家はこれを讃嘆して、「佛蘭西語の滅びない限り、ヹルレエヌの詩は永久に滅びる事はないであらう」とさへも云つてゐる。

晩年のヹルレエヌに關して、なほ一つの面白い逸話がある。彼は衰弱してもはや外出が出來なくなつた時、一つの滑稽なひまつぶしの遊びをはじめた。それは刷毛と一罐の金粉とを買ひにやつて、それでもつて、椅子であらうと机であらうと、ランプにさへも、家財道具殘らずを、せつせと金粉で塗抹し始めたのだ。それで、彼の見窄しい部屋は、忽ちフェアリイ・ランドの宮殿のやうに輝いて來た。彼はなほ身體を動かす事の出來る間は一日塗りに塗りたくつた。

何といふ可愛らしい詩人であらう。賢い人はどんなにでも、この子供らしい詩人を笑ひも罵りもするがよい。然し、我々は彼によつて、大愚の、無垢の貴さを見るのである。彼のあの優しい、羊のやうなやはらかな眼つきは、彼がいかに善き魂の人であつたかを思はせずにはゐない。私もまたアナトオル・フランスと共に、このやうな人にこそ、天國の門は最先きに開かれるであらうと信ずるものである。

詩は彼の生涯の慰めであつた。そして、彼の最後の慰めは、この子供らしいいたづらであつた。これについて、或る批評家は、「然し、彼はこのつまらない戲れが、彼自身の本質をよく象徵してゐる事を、恐らくは悟り得なかつたらう」と云つてゐる。まことに、彼はその行くところ、觸れるところで、すべてを金に輝かしめた、卑俗なありふれた言葉も、彼の手に觸れると、忽ち黃金の言葉と化し去つたのだ……

月とピエロのラフォルグ

——ふふん、地球なんざあ、いけ好(すか)ない、
ありやあ、思想の臺ですよ。
それよか、もつと歴(れき)とした
立派な星がたんとある。（上田敏氏譯）

南アメリカに生れて、一八八七年、二十七歳で、巴里の陋巷で死んだこのペシミスト、道化の哲學者、ジュウル・ラフォルグ——

また、一人の不幸な詩人……

買物に店屋に入つて行く事さへ出來ないほど内氣で。

紅い頬をした若い賣子(ショップ・ガアル)が二人で、何かおしやべりでもしてゐるのを見ると、

「折角ああして話してゐるのに、邪魔をしてはすまない……」と呟いて、彼はそのまゝ行つてしまふ……

タルブにあつたその家をこつそり拔け出して、ひとり寂しく、巴里に出て、馴染のない巴里の街(まち)をさまようて、

彼は何を思ひ、何を惱んだ事であらう。

その家庭との關係をよくするために、彼はその部屋の壁の絨氈を一きれ切り取つて、妹に送つた。

妹へのやさしい手紙を書くのが、彼の慰めだつた。
日曜日に、郊外から歸つてくる遊山者のむれを、彼はセンティメンタルな嫉みの眼で眺めた。
夏の夜毎、ノオトルダムの寺院の大きな花形窓(ロゼット)が、秋は丘の彼方に消え去る笛の音が、彼の慰めであつた。
彼は圖書室の椅子に身を埋めて、メタフィジックの迷宮をさまようた。
海底の原にゆらめく樹林を分ける潛水夫のやうに、且つためらひ、且つよろめき、聲なき國にただ一人で、幾日も幾日も、たつた一言も云ないで……

彼は豫言者にならうと考へた。都市から都市に席捲する新しい聖書を書からうと夢想した。
一册の本の中に、ありとあらゆる苦惱を集中して、淸淨無垢な天空に遊星を引くり返し、古今のバッコス祭、亞細亞の華麗、巴里の手風琴、オリンポスのカルネヷル、死體觀覽所、デュピュイ博物館、病院、戀、アルコオル、スプレエン、虐殺、テバイード、狂氣、サルペトリエール……
それは一八八〇年の一巴里人の日記となるべきである、彼は惱み、疑ひ、虛無にまで到達する……
彼はこの書のすばらしい效果を夢みる、都市は見棄てられ、人々は互ひに抱き合ひ、岬の上に、灰の中に、凡てを棄てて、ただ無窮の天の眺めにのみ心をゆだねて、終る時なきコンツェルトに、巨峰のやうな大オルガンは、その嘆きの轟きもて、過ぎ行く雲をも掻き亂す、悲しみいたむ星宿は、涙の痕を天空(そら)のさなかにとどめるだらう……
不幸な彼……
ラフォルグは貧しかつた。ラフォルグは肺患であつた。
夜な夜な、恐怖の發作が彼を惱ました。二時頃、三時頃、彼は起き上つて、橋の上に出かけて行つた、セエヌの河

彼はどんなに嫉ましかつたらう。その寢床に思ふさま身を伸ばして、疲れも苦勞も忘れ果てて、ぐつすり寢込んでゐる凡ての人間が、に涙を流すために……

彼は知つてゐた、既に彼の父を奪つたこの病氣が、やがて自分をも奪つて行くであらうと……

彼は叫んだ。月よ、私は死にたくない、私は天才だ……

お月さま、そしらぬ顏をしてござる……

自殺者の眼のやうに、死つてござるお月樣、
吾等疲勞者大會の議長の席につきたまへ。(上田敏氏譯)

彼は月の詩人である。

我國の、西行を、曾つて私は月の詩人と呼んだ。西行の月の歌は、夥く、且つ、その作中でもすぐれてゐる。

ラフォルグも月に月、お月樣のなげきぶしから、月かげ、月見、月のソロ、ピエロの詞は月ばかり……

然し、ラフォルグは、いかに西行とは違つて月を見たことか……

西行にとつては、月はこの世のほだし、見ぬ世の姿、とりわけ西方淨土の象徴であつた。

ラフォルグにとつては、「へへのへ、のんだくれの御本尊、猫の戀のなかうど」(上田敏氏譯)であつた。

彼はそのあらゆる幻想もて、寂寞たる死滅したこの星宿を探險した。

彼は自らを、月世界のクリストフ・コロンブスと呼んだ、或る誇りをもつてさへも……

それはたつた一人のミサントロオプの……あらゆる白いピエロオの友達だ。

あらゆる哲學、あらゆる智慧も、行つても行つても……
依然として、その底からは、かの慰めなき叫びが響く、——すべては空し！
彼は神を求めて、世界を空虚に見出した。
世界は荒凉として、虚無である。
死は日毎に過去帳の名前を增やす。
時は一秒毎に終りを思はす。
すべてはマヤの面紗をかけられた眼の惑ひだ。
すべては幻影、幻燈、幻覺、幻視だ。
意志は、無意識は、物自爾こそは、大手品師だ。
不治の肺患の詩人よりも、誰か一層容易に、この洞察に達し得ようぞ。
惱みに惱む靈魂よ、つひに、
たつた一つの出口を見付けた……
頓智、思ひつき、ふざけ、冗談……道化者の道化……これが悲しい人間の藝術だ。
道化者だけが、眞の眞理に達するのだ。
ピエロオ、ピエロオ……ピエロティズム……ヒロイズムよりピエロイズムだ……
今や、ラフォルグはピエロオの詩人である。

ピエロの喜び、悲しい道化……
ラフォルグの救ひはここに……
彼は今ぞ道化の哲學者である。
これは巴里の夜中の橋を渡りきつたる靈魂のメタモルフォジス……
神はピエロに、ピエロは月に。
今は憎悪もない、涙もない。
泣き笑ひでも、笑ひは笑ひだ。
曾つては、聖なる眞劍であつたものが、今より聖なる戯れとなつた。
冗談から駒を出すんだ。
世界はオペラの舞臺であれ……
かくて、Heine français 佛蘭西ハイネと呼ばれる詩人が出來上る。
ハイネも昔、悲しい笑ひを笑つた。
だが、ラフォルグはラフォルグ、ハイネぢやない。
カミイユ・モオクレルは、巧みにショパンに比較する。
ショパンも多分、その悲しみを空氣の中へ笑ひ捨てたかも知れない。
だが、ラフォルグはラフォルグ、ショパンぢやない。
彼は唯一者――比較されぬがラフォルグだ。
彼は印象派（アンプレッショニスト）の人々と交つた、またポオル・ブルジエ、テオドル・ド・ヰゼワ、ギュスタアフ・カアン、エプルッシ

イ……

この最後のものの祕書であつた彼は、そのおかげでもつて、一八八一年に、獨逸の皇后の侍讀者の地位をつくつて貰つて、コブレンツを通つて伯林に行つた。

ウンテル・デン・リンデンのプリンツェシンネンパレエの住居――窓の外には、兵器廠、シュプレエ河、篠つく雨、希臘をまねた下手な彫像……

彼は妹に書いた、おれはもう昔のやうに、おまへのために絨氈の一片を切り取る勇氣がない、ここでは鍍金をされてゐるからナ……

日課――十一時頃には皇后の御前で、晩にはハッケ伯爵夫人のところへ行つて、新聞の記事を簡單に、要領をつかんで讀み上げる事、下卑たところは飛ばす事……それから過去分詞の敎授、綴字の誤りの訂正……

家では明日の下調べ、手紙と詩作、水彩畫を少し、後は夢……

彼は獨逸語と英語とを學んだ。英語の敎師は、リイア・リイ孃……彼は戀した。

五年間、彼は巴里にあこがれた、巴里の友にあこがれた。

親しみ難いプロシヤ氣分――士官、記念像、ペダントリイ、ゴティック文字、身振りも心も一向取り亂さない女たち、疲れを知らぬ頑丈な男たち……

もつと早いテンポ、一層せはしい疲れかた、官能の喜び、快活な言葉、樂しい身振り、流動する心、ああ、巴里……

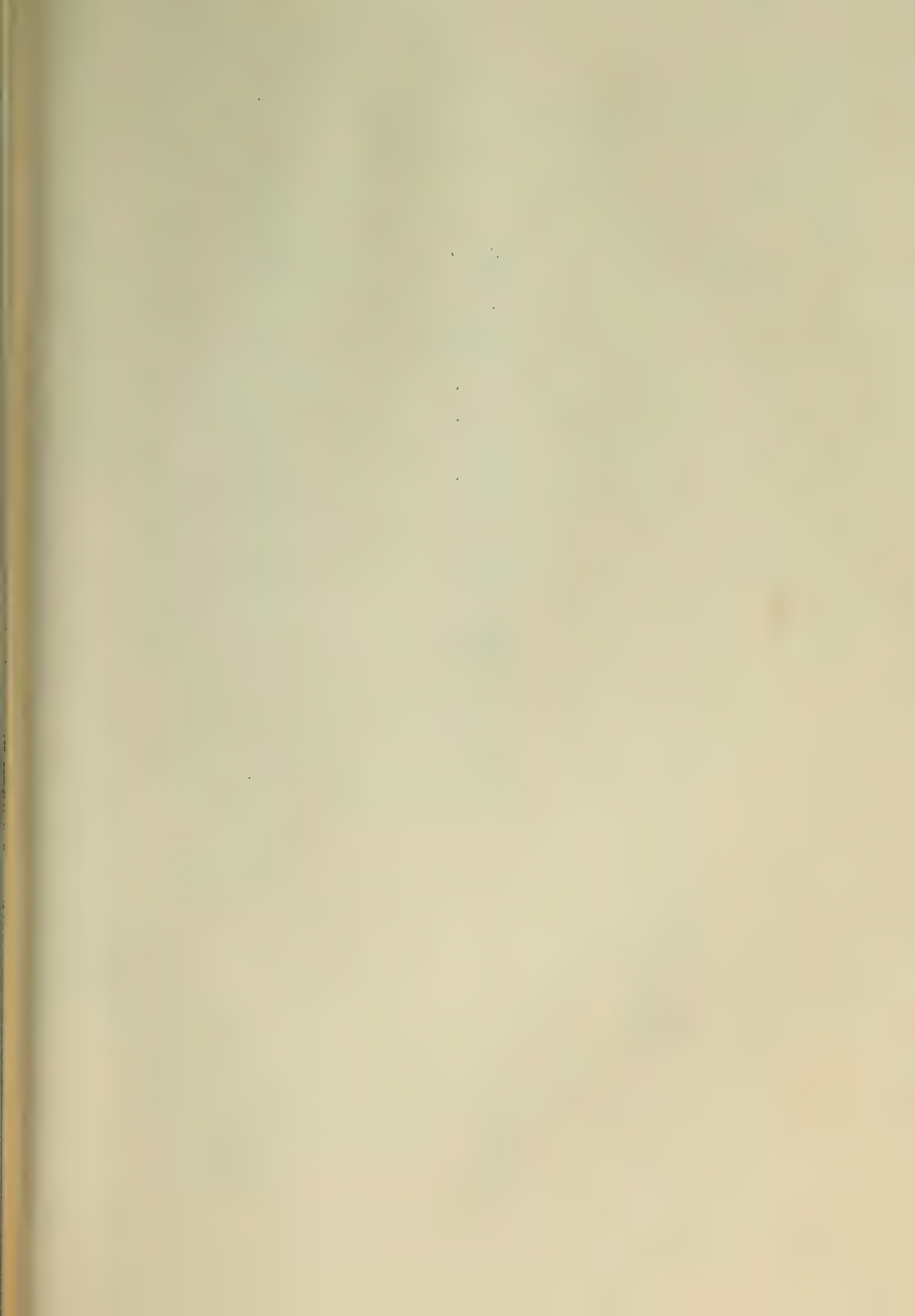
五年目に、たうとう彼はその職を辭して、リイア孃と結婚した。

彼女の驚いたやうな大きな眼……その眼が彼について行く――倫敦、白耳義、そして巴里……本屋への無駄足、貧

困、病氣、衰弱、死……

詩集が二卷、
ブルジエ論、
ホイットマンの飜譯、
モラリテ・レヂァンデエル——「古代の、ワグネルの、シェクスピアの人物との心おきなき親友附合ひ」と、ギュスタアフ・カアンの評した、なんと素晴らしい寶玉と、
發表してはならぬと云ひ殘した獨逸論、
そして、そのあとはほんの少しばかり、
そして、もうその次ぎは、「彼の中絶された作品は、ただ序說にすぎないが、しかもこの序說には、全作品の價値がかかつてゐる」(ルミ・ド・グウルモン)などと云ふ批評と賞讃とを殘して……

「また一人ピエロオが
慢性孤獨病で死んだ。
見てくれは滑稽かつたが
垢拔のした奴だつた。」(上田敏氏譯)

外國文學研究

青年獨逸評論文學

一

一八三〇年七月革命の前後から、一八四八年二月革命の前後にまたがつて、浪漫派と寫實派との間をつなぐ文學が、青年獨逸派、又は少年獨逸派（Das junge Deutschland）の文學である。

青年獨逸派の文學は、一時的の文學であつた。ジャアナリズムの文學であつた。政治文學であり、傾向文學であつた。その本質に於て、現在の我がプロレタリア文學の意義に照應する。青年獨逸派の代表的詩人と目せられてゐるハインリッヒ・ハイネが、戀愛詩人、甘い感傷詩人として、長い間我々の偏狹な詩壇に輕視されてゐたにも拘はらず、最近、プロレタリア詩人として、新しい觀點から見直されて來つつあるのは、その一つの證明とも云へよう。もつとも、現在の我がプロレタリア文學は、少數のアナキズム文學を除けば、專らマルキシズムの文學であるが、當時の青年獨逸派文學は、未だ第四階級の、階級鬪爭の文學ではなかつた。自由主義（リベラリズム）の熱望から出發して、漸次急進主義（ラディカリズム）に移つたのである。そして、專ら時事問題に卽してゐたので、その問題が解決すると共に、その大半の意義を失つてしまつた。然し、この派の文學が、文學史上に比較的重要の位置を占め得ない理由は、その事よりも、同派が大なる天分ある作家を有しなかつた事に據る。但しその唯一の例外は、ハイネであるけれども、ハイネの同派との關係は、內面的にも外面的にも、頗る複雜を極めてゐて、彼がその運動の先頭に立てられたにも拘はらず、ハイネを以て直ちにその派の代表的詩人と見做す事の出來ない事情もある。ハイネの文學史上の大いなる意義は、かへつて同派の主張に反する點

にあるとも見られるからである。

元來、靑年獨逸派は、有名な人物の一定の集團ではなかつた。この名は、まづ一定の人物に、崇拜の結果、及び氣まぐれな征服欲からして、奇妙に與へられたものが、次いで、次ぎ次ぎに現はれて、同一の方向にむかつて動いた、互ひに連絡をもたない若い文學者が、後その名のもとに一括されることとなつたのである。從つて、その見方によれば、數人にも縮小され、又、時代の進歩主義的な文學者の全體にも適用される。そして、むしろ後者の方を正しとしなければならない。靑年獨逸派はかやうに團結した黨派でなかつたばかりか、互ひに敵對さへもした。既にその先頭に立てられた同派の大立者が、相對立し、相敵對して、論難の火花を散らしさへもしたのである。

然しながら、その派の人々の間には、共通の思想と信念とがあつた。卽ち、それは人類の進歩に對する信仰である。精神的解放の熱望である。政治的自由、社會的自由の渴望である。基督教の傳統的な壓迫に對する反抗、新時代の新しい汎神教的宗教の夢想である。肉の解放、道德的因襲の打破、兩性の結合と離別との、より自由な樣式の冀求である。

靑年獨逸派を代表するものは、その評論文學であつて、詩でも、小說でも、戲曲でもない。それはこの派の主旨とするところから來た當然の結果で、ハイネの詩も、その一部の政治詩、傾向詩、諷刺詩を除けば、むしろ浪漫派の系統に屬すと見るべく、小說、戲曲に於ては、わづかにグツコオ、ビュヒネルに於て、その飛翔を示し得たに過ぎない。しかもなほ、同派の文學が、現代に新しい照明のもとに復活し得たのは、そのめざした正しい方向のゆゑである。浪漫派の反動思想に反抗して、人類の進歩思想の上に、力強い叫びを投じたがゆゑである。

靑年獨逸派の名は、ルドルフ・ヰインバルク (Ludolf Wienbarg, 1802—1872) に始まる。ヰインバルクは、靑年獨逸派の理論家であり、創唱者であつた。彼が一八三四年に出した『美學的征戰』(Aesthetische Feldzüge) は、「老年なら

ぬ、靑年獨逸にこの書を捧ぐ」といふデディケエションをもつた。今、この書はただこの獻本辭によつてのみ知られるに過ぎないが、當時に於けるその意義たるや著しいものがあつた。これはヰインバルクが　キイルでした一連の講演を集めたものであるが、彼はそのために私講師たるの權利を剝奪されてしまつた。が、その內容は至極穩和なものに過ぎなかつた。彼はその中で、當時の藝術、敎會、國家、社會の諸方面に於ける因襲を打破し、文學上に於て、その改革の意圖を表白した獨逸のあらゆる少壯の精神を、靑年獨逸の名のもとに結び付けたのである。ところで、この新文學のための綱領たるや、驚くべく普遍的なもので、新時代の世界觀は、理性と感性との調和的一致を基礎としなければならぬといふにあつた。彼は感能が希臘人よりもより多く精神によつて充たされ、精神的なものが基督敎徒よりもより多く感能によつて浸潤されてゐる新しいヘレニズムを生誕せしめんと欲した。然し、文學の前に、まづ、生活が再生されねばならない。そこで、この原理に從つて周圍の生活と內部の生活とを更新せしめるとき、はじめてこの新時代は、眞正の藝術を生み得べしといふにあつた。それは別に新しい宣言ではなかつた。ハイネは既に同樣の事を、屢々詩的に、又戲謔的に表白してゐたのである。ただ一つ、ヰインバルクの評論中に表白された新しい聲は、彼が靑年の代表者として、ハイネをはじめて時代の大なる作家として認めた事であつた。今一つの新聲は、散文を新時代の表現樣式として、韻文よりも價値ありとなす見解をはじめて表白した事である。この場合、ハイネは散文作家として、最大の散文作家として推讃された。

ヰインバルクの美學よりすれば、從前の、ゲエテ、シルレル、ジァン・パウル等のスタイルは、すべて世界の潮流より遠ざかつて、自分の魔法の圈內に蟠居するものにすぎない。今はじめて、獨逸の散文は、佛蘭西の影響のもとに、新しい形態をとりえたのである。ハイネ、ビョルネ、メンツェル、ラウベ等の散文を、以前の作家等の散文より分つものは、その安靜と適意との缺乏であるが、しかもこの缺乏が決定的の特長である。生の特長であるとなした。更に、ヰ

インバルクは、その韻文否定説からして、ハイネが、獨逸の散文がその巨大な、あらゆる地上の音響を兼ね備へてゐる樂器をもつて提供した、より大きな名聲のために、その抒情詩人たる儚ない名聲を擲つた事を極力賞讃した。この散文萬能說は、自ら佳句を爲し得ないムント、ラウベ等によつて支持された。ムントの如きは、それを以て新時代の福音として宣言したのである。然し、ハイネが全然ヰインバルクの註文通りにならなかつた事は云ふまでもない。この韻文樣式の否定は、靑年獨逸派の合理主義的傾向の一つの現はれであつて、ハイネの一面に投じえても、彼を全體的に動かし得るものではなかつたのだ。

ヰインバルクは文學者として餘り多くの意義を持たない。彼の今一つの著書『最新文學觀』(Zur neuesten Literatur 1835) はそれを證明する。當時雨の如き攻撃の的になつてゐたハイネに對して、彼が以前通りの忠實を示してゐる事のみが、その書の取得であつた。實際、ヰインバルクの意義は、彼が來るべき自由主義的歐羅巴の詩人としてのハイネの文學史上の意義を捕捉した最初の人であるところに存するのだ。

二

ハインリッヒ・ハイネ (Heinrich Heine, 1797—1856) の名は、我々の間では、ただ抒情詩人として知られるのみである。然し、彼の著作の大部分を占めてゐるものは、散文である。彼は散文家として、全く新しいスタイルを創始した。それは佛蘭西語のエスプリ (Esprit) 以外の言葉では、完全に表白する事の出來ないものである。香ばしくつて、ぴりつとした辛味を有つたスタイル。これはハイネ以前の獨逸の散文には見出せなかつた特徵である。詩的で、輕快で、機智に富んでゐて、文章の意外の轉向が讀者をあつと云はしめる。獨逸文學に於ける無類のスタイリストであるニイチエが、獨逸の散文家として、ハイネと自分とを擧げてゐる事は、ハイネのスタイリストとしての意義への觀念を與

へるに足るであらう。ハイネがいかにその散文のスタイルに苦心し、且つこれを重視してゐたかは、自ら佛蘭西語に堪能な彼が、その作品の佛蘭西譯に、なぜ他人の手を煩はしてゐるのかと人に訊かれた時に、佛文のスタイルに苦心して、そのため獨逸語に於ける自分のスタイルをこはされるのを恐れるからだと答へたのによつて知られるのだ。

ハイネの散文の諸作は、『ハルツ紀行』(Die Harzreise, 1824) にはじまる。これは『ライゼビルデル』(Reisebilder) の第一卷であつて、次いで、『北海』(Die Nordsee)『觀念、ル・グランの書』(Ideen, Das Buch Le Grand) 最後に『伊太利紀行』(Italien, 1828) 等が出た。これらは莫大な版數を重ねて、彼の詩集と同樣に、書肆のカムペを喜ばしたものである。ところで、これらの諸作は、文學として全く新しい種類に屬するもので、これを單なる紀行と見做す事は出來ない。むしろ、一つの新しい評論文學の一體と見做すべきが至當である。ハイネはその中で、諸般の時事問題を、特に、政治的、社會的 宗教的問題を、極めて熾烈に、靈活な筆をもつて取扱つてゐるからである。然し、それはまた、無數の個人的な告白や、小說的な描寫や、スケッチや、土地風俗の物語やを含んでゐる。同時に、『獨逸浪漫派』(Die Romantische Schule) や、『獨逸宗教及哲學小史』(Zur Geschichte der Religion und Philosophie in Deutschland) の如き純粹の評論に於ても、個人的告白や、小說的記述が隨所に點出されてゐて、從來の評論の型を破つて、興味津々たる詩的な讀み物を成してゐる。この事は、又、他のハイネの一切の散文的述作に適用される。巴里からの政治通信を集めた『佛蘭西の狀態』(Französische Zustände, 1832)、『サロン』(Salon) の名のもとに一括して刊行された『佛蘭西の畫家』(Französische Maler)『佛蘭西の舞臺』(Über die französische Bühne)、及び數篇の小說、『雜纂』(Vermischte Schriften, 1854) の名のもとに集められた『懺悔』(Geständnisse)『流竄の神々』(Die Götter im Exil) 巴里通信の續篇たる『ルテツィア』(Lutezia) 其他に至るまで、各その重點を異にする事を除けば、すべて自由なる無駄話 (causerie) の調子が強く出てゐて、すべてハイネの詩人的な主觀を反映し、且つ彼一流の社會批評、政治批評を含んでゐる點に於

て、評論とか、研究とか、小説とかいふ外面的な形式上の區別を超えて、すべて任意な隨筆として、全く、同一の風趣をもつてゐる。それはむしろ、總括して、エッセイ（Essais）の名を以て呼ぶべきものである。

エッセイの本質や意義に就いては、茲に云ふべき限りでないが、我國で近年特に注視されて來たやうに見えるこの重要な散文文學の一樣式に於て、それが專ら英佛の文學の專有物の如く見做されて、獨逸文學に於けるそれは、從來全く閑却されて來たやうである。然し、それは不當ではなく、英佛の豐富なエッセイ文學に對比するとき、獨逸のそれは絕無と云はれなくとも著しく貧弱だつたからである。そして、これには相當根强い理由があつた。佛蘭西人の多方面な興味と、輕妙纎細な趣味と、寸鐵殺人的の機智とが、このエッセイの樣式に於て、似合ひの服裝を見出したのは首肯せられる。これに反して、この服裝は獨逸人には最も不似合なものであつた、むしろ好ましからぬものであつた。獨逸人のシステマティックな傾向と、一つの坑道を何處迄も何處までも、掘り盡くし究め盡くさねば止み難い探求的な向內性は、花から花へ飛びうつる胡蝶のやうに、各種の問題に輕く觸れて、警拔な一句の警語のもとに捨て去る如き事に堪へられず、これを輕浮と見做し眞摯ならずとした。

然るに、ハイネはエッセイストとしての天成の資格をもつてゐた。彼はその個性をシステマティックに分析したり、その內面的轉成を、年代順に讀者の前に發展させたりする努力には全く遠いものがあつた。彼は輕い無駄話口調で、且つ物語り、且つ記述する。そして讀者は、彼が藝術的に並列する土臺石からして、はじめてその開展の建物を建てねばならぬのだ。ハイネに於ては、すべては並列してゐた、華麗な色彩が雜然として入り亂れて、時として、互ひにその效果を殺し合ひさへもする。それは丁度、彼の詩に於いて、感激の高揚が、しばしば皮肉な自己嘲笑によつて屑殺せられるのに似てゐる。從つて、或る一定の主題に對する、所期の效果を擧げ得ない場合が多い。卓子も腰掛けも飛び越して、一隅から他の一隅へと突進するハイネの筆法は、讀者をして送迎に遑なからしめる。讀者は氣の附かぬ間に、

筆者の興味が全く別の題目に移つてゐるのに吃驚して了ふ。ハイネは決して一定の事柄の上に停滯してゐる事が出來ない。彼の興味の對象は無限であり、一の論題を究極まで推究する事はそのよく爲し得ないところでもあり、又その爲すを欲しないところでもある。彼は全體として完成した一つのより大きな作品を提供する事には、一生成功し得なかつたが、又、これを企てようとさへもしなかつたのだ。それは詩人、文學者としてのハイネの弱點でもあつたが、又、その獨自の意義でもあつた。彼は戯曲にも、小説にも、敍事詩にも、完成した藝術品を殘さず、抒情的、批評的な多彩なスタイルを酷使したのである。敍事詩『アッタ・トロル』(Atta Troll)『獨逸、冬物語』(Deutschland, ein Winter-mär hen)の如きも、一面から云へば、韻文の形をもつてものした評論文と見做す事も出來る。殊に、後者は韻文を以て書いた『ライゼビルデル』の終篇とも見るべきで、その傾向が最も顯著である。かくて、ハイネにあつては、傳記ですらも、それ自身として獨立したものではなかつた。それは『ルウドキッヒ・マルクッス』(Ludwig Marcus)が證明する。激烈な論爭の因となつた『ルウドキッヒ・ビョルネ』(Ludwig Börne)は、ビョルネに對する囘想と云ふより、むしろ彼自身の政治的告白と見做すべきものである。これらは丁度、近代英吉利のエッセイスト、チェスタアトンの『ブラウニング論』などの放恣な、自由な主題の取扱ひ方を想ひ出させる。特に、ハイネの場合には、或ひはこれ、或ひはそれと、その眼を囚へた題目に躊躇なく飛び移つて行つて、暫くそれを弄んで、それから又、それを捨てたり打ち壞したりして、次ぎの題目に移る點が、あだかも子供の遊戯を見るのに似てゐる。ところで、かうした傾向は、ハイネの性向から出た必然的なものではあるが、一面には、ロオレンス・スタアンなどの影響からも來た。この英吉利十八世紀の奇異なる作家は、ハイネのスタイルにかなり重大な感化を與へた。その事は『ハルツ紀行』に於いて、既に十分に現はれてゐる。佛蘭西では、『ハルツ紀行』は屢々スタアンの『感傷(センチイメンタル)紀行(ヂャアニィ)』に比較された。『觀念』の中で、一章を全部點線をもつて充たし、「獨逸の檢閲官」「莫迦」の二語を存した如き、明かにスタアンの『トリストラム・シャンディ』中

の思ひ付きを模したものである。『獨逸文學中で、ハイネの直接の先蹤となつたのはジァン・パウルである。然し、ジァン・パウルのスタイルは、ハイネの如き佛蘭西風の輕快味を有たず、重苦しく、且つ佶屈を極めた。ハイネはその『獨逸浪漫派』中で、スタアンとジァン・パウルとを比較論評して、スタアンを擧げてジァン・パウルを抑へてゐる。「ジァン・パウルは大なる詩人であり。哲學者である。然し、人は彼の創造と思索に於けるより、より非藝術的ではあり得ない。」「感傷性は彼を常に克服して、彼の笑ひは忽ち涙に變ずる」といひ、一方スタアンに對しては、「スタアンはジァン・パウルよりもより深く感じたであらう。彼はシクスピアと同格である。」とまで云つてゐる。ハイネがスタアンの涙をもつて笑ふ特質に就いて云ふところは、その儘彼自身に適用されるであらう。

この散文の新しいスタイルが、ハイネをして新時代の散文の祖たらしめた。キインバルクがハイネを新時代の先頭に立たしめたのは、そのためである。ハイネ以後、獨逸は全く新しい散文の樣式を得た。獨逸のエッセイ文學の祖たるの榮譽は、まさにハイネに歸すべきものである。機智はハイネの鋭利な武器であつたが、批評は彼の第十のミュウズであつた。　この批評力のゆゑに、彼は時代の詩人ともなり、政治的、社會的問題の論客として健鬪をもなしえたのである。勿論、ハイネはその天分から云つて、政治家でなく、詩人であつた。その時代の苦惱をその身自らに感ずる詩人であつた。そして、それを感じたために政治家であるやうに思つたのである。それゆゑに、彼は『ライゼビルデル』を大膽なる大事業だとまで思つた。當時また事實さうでもあつたが、然し、彼が信じてゐたやうに、『詩の本』よりも重大な作品では確かになかつた。ハイネの意義は第一にその詩の上にある。然し、評論家としてのハイネは、現在思はれてゐるよりも遙かに重要である。政論は別としても、文藝評論に於けるハイネは、その犀利な批評と、詩人特有な纖細な鑑賞眼とによつて、特殊の位置を占むべきものである。『獨逸浪漫派』は、これが代表的作品である。その中のホフマンとノヷリスとを比較論評した一章の如きは、佛蘭西の靈活な批評文學中にあつても、尙且つ光彩陸離たる

文字であらう。

靑年獨逸派の方向は一面的であり、獨斷的であつた。多面的なハイネは、これと相剋するものを有つてゐた。ハイネを靑年獨逸に結びつけたものは、その合理主義的、理智的傾向であり、政治的、社會的變革の要望であつた。ハイネにあつては、常に靑い花がバリケエドの傍らに咲いてゐた。浪漫的な潤ひが、きらめく砂金を濡らしてゐた。しかも彼が、「現在の如き藝術は、破滅しなければならない。その原理は神聖羅馬帝國の過去に於ける古いレジイムに根ざしてゐるからである。それ故他の過去のあらゆる殘存物と同樣に、現代とは矛盾撞着してゐる。そして、藝術に障害となるものは、時代の動搖ではなくして、この矛盾撞着である。反對に、この時代の動搖が、茲では擁護されねばならない。曾てアテンやフロレンスに於て、兇暴な戰爭や鬪爭の嵐の中で、藝術がその最も壯麗な花を開いたやうに。」と云ふ時、彼は靑年獨逸の確信を最も明確に表白したのである。そして、現代の無產階級的文學者の確信をも、十分表明してゐるのである。

三

ハインリッヒ・ハイネと並んで、靑年獨逸の指導者として立てられたのは、ルウドキッヒ・ビョルネ（ベルネ）（Ludwig Börne, 1786—1837）である。靑年獨逸の精神は、ハイネよりもより多くビョルネに於て具現された。ハイネは詩人であつた、一面、ジャアナリストでもあつたが、ジャアナリストとしても常に詩人であつた。彼の衷には、靑年獨逸の現實的、實際的傾向と同時に、これを相剋する浪漫的、空想的傾向が多分にあつた。ビョルネにあつては、その相剋が全くなかつた。彼は主として政論家であつて、ジャアナリストとして終始した。ハイネは自ら雜誌の刊行編輯に携はつた事はないが、ビョルネは初め雜誌「時代の翼」（Zeitschwingen, 1818）を發刊し、後有名な「秤」（Wage, 1821）を刊行した。

七月革命後、巴里に移住して、『巴里書翰』(Briefe aus Paris) の第一巻（1831）を出したが、これは直ぐ禁止された。この禁止と反對者側の罵詈とが、この書の中に盛られた著者の熱誠を一層力強いものにして、異常な反響を喚んで、ビョルネをして自由主義的思想家の先頭に立たしめるに至つた。然し、この第一巻に於いて既にビョルネは、立憲政體の愛好から革命の翹望への轉向を示してゐた。彼の自由主義は、漸次急進主義に變化して、遂に、ハイネが適確に指摘したやうに、共和主義的の狂信主義に陷つたのである。

ビョルネはハイネと異つて、詩人ではなかつた。その詩的高翔を、詩人的天分から得ず、彼の不斷のエモオションから得來つた。彼が多くの弟子をもつたのは、次世紀の世界政策を包括する彼の政治的遠望に於てでなくして、この激情の炎上に於てであつた。ビョルネはいろいろな點に於て、ハイネとは對蹠的な人であつた。ハイネにとつては、この共和主義者の狂信主義は、政治的には小兒病的であり。美學的には醜惡であつた。ビョルネにとつては、そのタルムウド的の不寛容（イントレランツ）に於て、自己の見解以外に、他の見解のあり得る事を承認し得られなかつた。彼同樣猶太人であり、獨逸人であり、自由主義者であるハイネが、彼と同意見でない事が、理解出來なかつた。一は自主自由の詩人であり、他は主義と信念の人であつた。一は俗世の享樂者であり、他は基督教的な道德家であつた。ハイネの言葉を以てすれば、ヘレネ人に對するナザレ人の對立、當時の一般の信念に從へば、才能（タレント）の人に對する性格（カラクテル）の人の對立であつた。後年の二人の相剋と不和とは、直接の理由はいろいろあるとしても、根本に於ては、この本質的な對立から發生したものである。ハイネがその佛蘭西愛を以て一生を終始したのに對して、ビョルネが獨逸的愛國主義者として不變であつた事も、また著しい對比である。彼はその愛國主義からして、獨逸のあらゆる不幸と災厄とを、獨逸の君主達と、無批評な、殆んど無思慮な獨逸國民の英雄主義の罪としたのである。

ビョルネは政論家たるのみならず、また藝術批評家でもあつた。彼が青年獨逸の評論文學に於て、我々に重要な意義

を帶びて見えるのは、特にこの方面の活動によつてである、然し、これはビョルネの本意ではなかつたのである。彼は檢閱の嚴重のために、その政治的意見を端的に表白することが出來ず、止むを得ず藝術批評を藉りて、時事批評を企てたものである。從つて、作家、書物、音樂界、繪畫、若しくは社交界の批評に於ても、彼の主眼とするところは、政治的、社會的狀態の批評であつた。例へば、彼が不明瞭に歌ふグラアツの聲樂家の批評をして、「若しグラアツの代議士が、この婦人のやうに低く歌ふならば、シュタイエルマルクの自由は、惡い狀態にあるに相違ない」と云ふならば、人はみなシュタイエルマルクの、墺太利の、全獨逸の自由が惡い狀態にあるのを知つて、その打擊の效果を感ずるのである。この政治的傾向のために、ビョルネの藝術批評は、偏狹になり一面的になる害を受けてゐる。彼は言葉の嚴密な意味に於ける藝術的感覺を有しなかつた。彼には藝術家が何を表現するかが問題であつて、いかに表現するかはその關する所でなかつた。のみならず、さうした表現の技巧方法にのみ專心する藝術家は、彼には最も厭はしいものであつた。一言にして云へば、彼は藝術至上主義の敵であつたのだ。藝術上の政治的功利主義は、彼に於てその著しい萌芽を示したと云はねばならない。然し、彼の劇評に於て、その無數の戲曲の批評に於て、彼は價値あるものと、價値なきものとに對する卓越した常識を示してゐる。クライストや、イムメルマンや、グリルパルツェル等の劇詩人を遺憾なく尊重する事を知つてゐた。唯、その褒貶の根據を示さうとするに當つて、彼の非藝術的な素質が暴露され、理想主義者の激情的な偏見が暴威を振つたのは止むを得ない所である。かうしたビョルネの批評方法は、我々に後年の露西亞の民情派（ナロドニキ）の批評方法を想起せしめる。その點、ビョルネはベリンスキイ、ピイサレフ、ドブロリュウボフ等の文學批評の先蹤と見做すべきであるのみでなく、又、現代の無產階級文學批評の遠祖でもあるのだ。

　ビョルネの文藝批評の特質を最も鮮明に示すものは、そのゲエテ批評である。その忌憚なきゲエテ攻擊である。然し、このゲエテ攻擊に於て、彼はその時代の唯一の人ではなかつた。浪漫派の時代が去つて、自由主義の時代がはじ

まつたとき、ゲエテは激烈な攻撃の矢にさらされた。新時代の人々にとつて、ゲエテの高踏的態度は最もその反感をそそるものであつた。ゲエテ攻撃の急先鋒となつたのは、後年青年獨逸派と激しい敵對關係に立つた批評家、ウォルフガング・メンツエル（Wolfgang Menzel, 1798—1873）であつた。メンツェルの二卷の『獨逸文學』（Die deutsche Literatur, 1835）が、當時いかなる權威をもつてゐたか、今日では想像も出來ぬ位だ。この書中で、メンツェルは、ゲエテを、その道德性と、愛國心と、自由の愛と、宗教心との缺如のゆゑを以て攻撃した。彼はゲエテの才能を單なる表現の上に極限し、詩的天才なき、內面的に確固たる支柱なき模倣の才となし、誰にでも身をゆだねる娼婦の如きものであつて、讀者をその共犯者にする才能を高い度合に於て持つにすぎぬとなした。そして、常に流れに順應して、コルクのやうに表面に泳いでゐて、あらゆる流行の弱點と愚昧との奴隷となり、その作品のなめらかな假面のうしろに、享樂心と官能慾とを隱してゐるといひ、その作品は近代の世界のマテリアリズムの花であるとなして、一々の作品を引いてこれが實際を證明しようとした。例へば、『コリントの花嫁』に、ゲエテの快樂心の六種類を證明しようとした如きである。かやうにすべてを道德的、愛國的尺度ではかり、不道德の責めを歸せ得ないところでは、獨創性の缺乏を以て難じた。かうしたメンツエルのゲエテ攻撃に比するとき、ビョルネのそれは、その語勢の激烈を極めるにも拘はらず、その本質に於て全く異つたものである。ビョルネはゲエテの作品を審判し、否定しようとはしなかつた。ましてや、その性的不道德の罪を鳴らす程、身を下さうとはしなかつた。彼はその絕間なきゲエテ攻撃を、常にゲエテの政治的人格の上にのみ限つてゐた。

　彼は熱烈な人道主義者、民主々義者として、ゲエテの獨善的態度を是認する事が出來なかつたのである。彼はゲエテの能力と、高い社會的地位とを以てして、獨逸に於ける一般人民の實際的な生活條件の改善のために、一指をも動かさない超然的態度を非難せずにゐられなかつたのである。彼が、ベッティナ・フォン・アルニムの『ゲエテと一小兒との

往復書翰』(Goethe's Briefwechsel mit einem Kinde) の批評文の前に、そのモットオとして、ゲエテ自身の『プロメテウス』中の、「私が汝を崇ふ？　何のために？　汝は曾て重荷に惱むものの苦痛を鎭めた事があるか？　汝は憂慮するものの涙をなだめた事があるか？」といふ意味をもつた詩句を置いたとき、最もよくその感情を表明したのであつた。彼はゲエテよりもシルレルを尊重したけれども、後者の成熟後の態度にも甚だ不滿であつた。七月革命前、その『日記』(Aus dem Tagebuch) 中で、『シルレル、ゲエテ往復書翰』を評して、「リキュウルグラスの中の水」といひ、獨逸の最大の精神が、そこに於て、いかに小さく、「いかに無であり、無よりも少ないか」を云はずにゐられなかつた。確信ある民主々義の彼にとつて、この二人の貴族主義者を、許す事が出來なかつたのである。殊に、祖國のヘラクレスたり得べきゲエテが、その黄金の林檎をただ自分一人のものにしてゐる利己主義を許し得なかつたのである。そして、最後には、ゲエテを以て、進歩的獨逸の目の上の瘤、その進行を引き止める障害物とすら云ふに至つた。「ゲエテと共に古い獨逸の時代は葬られるやうに思はれる。その日にこそ、自由は生れるに違ひないと自分は考へるのだ。」

ビョルネがゲエテに於て最も許し難く思つたものは、その權力者に對する態度であつた。王侯貴顯に對するゲエテの恭敬は、十八世紀の雰圍氣に成育し、彼等の庇護のもとにその藝術の花を培ひ得たゲエテにとつては、當然かくあるべき理由を有つてゐたのであるが、十九世紀の一般公衆を相手に、ジャアナリストとして立つたビョルネは、その必然性を理解する前に、まづ民主々義者らしい反感を沸騰しめずにはゐられなかつた。然し、彼のこの反感、この攻擊に、彼はその生活、その實踐を以て、十分の權威を附與したのだ。ビョルネがその評論家としての活動を始めたとき、早くもかの大反動家等は彼の才能に着眼する事を怠らなかつた。このメッテルニッヒやゲンツの賞讃を知つたビョルネの父は、息子には祕密に運動して、維納で息子のために帝室顧問官の位階と收入とを得られる道を講じた。息子はこれを聞くと、斷乎として、父の言を斥けた。彼は權力者と會見しようとさへ欲しなかつた。後年、ハイネが好んで接近し

たロスチャイルド男爵の如き人物などにも、彼は決して接しようと欲しなかつた。ビョルネのゲエテ攻撃を讀むとき、我々はその苛酷な言葉の背後に、ゲエテの爲した事を敢て爲すを欲しなかつた一人物の呼吸を感ずる事を忘れてはならない。

ビョルネはゲエテを抑へて、ジァン・パウルを擧げた。彼はジァン・パウルの感化のもとに出發した、或る點から云へば、ジァン・パウルの繼承者を以て見做す事も出來る。彼はジァン・パウルをすべての卑賤の中に生れた者のための詩人として尊重した。すべての社會的不正に苦しむ者の擁護者として敬愛した。最初からジァン・パウルの政治的態度が彼を魅惑した。ジァン・パウルはヘルデルの世界市民的の感情と教說とを繼いで、全人類の一致結合を唱へた。ひとり個人のみならず、民族ももはや罪惡を犯さず、戰爭はあとを絕ち、あらゆる不正不合理の消滅する黃金時代、卽ち、理想社會の到來を夢想した。この壯大な未來の豫想のみならず、ジァン・パウルの才能の中にある諷刺的、牧歌的傾向も、またビョルネを強く牽引した。ジァン・パウルの奇峭なスタイルも、著しい影響を彼に及ぼした。彼はその小短篇や小論文のユウモラスなマニエルを模倣しさへもした。然し、ビョルネはジァン・パウルのスタイルの大きな缺點である夥多なる譬喩や華語の錯綜と、思想と光景との雜沓の混亂を免がれ、簡潔と明晰とに於て、より大なる特長を得る事が出來た。ビョルネは天成のジァアナリストであつた、獨逸文學の產出した最初の大規模なジァアナリストであつた。彼の內面的テムポは早く、彼の著作家としての呼吸は短かつた。彼は系統立つた大册の書物を書き得ず、斷片的な鋭利な文章を書き得たのにすぎない。彼の最後の著作『佛蘭西厭惡者メンツェル』(Menzel, der Franzosenfresser, 1836)は、彼の著作中最も平靜にして明晰なもので、死後の敵なるハイネも、その調和均衡を得たスタイルを賞讚せずにゐられなかつたものであるが、ビョルネはこの中に於て、彼の世界人的な信仰告白をして、遙かに現代の我等に呼びかけてゐるのである。

四

ゲエテ攻擊によつて不名譽た名聲を殘してゐるヴォルフガング・メンツェルは、また靑年獨逸派の最惡の敵としても忘るべからざる人物である。然し、彼はもともとから靑年獨逸派に敵意をもつてはゐなかつた。彼はビョルネと同じやうに、ジァン・パウルの影響のもとに出發し、ヴォルテエルの愛好者として、愛國者、道德主義者(モラリスト)であると共に、自由主義的の傾向を持つてゐた。從つて、當初は靑年獨逸派に好意を寄せ、兩者の間は圓滑な友誼的關係のもとにあつた。が、靑年獨逸の第三の大立者なるカアル・グッコオ(Karl Gutzkow, 1811—1878)が、メンツェルの主宰する「文學新誌」(Litteraturblatt)の助手たるに甘んぜず、これに背いて、フランクフルトの「不死鳥」(Phönix)に新しい地位を得たのみか、更にキインバルクと協同して、佛蘭西月刊雜誌の體裁にならつて、大雜誌「ドイッチェ・レヴュウ」の發刊を計畫するに至つて、メンツェルは自己の勢力の失墜を恐れ、靑年獨逸派に對して戰端を開くに至つた。彼はグッコオを佛蘭西化した „Jeune Allemagne"(靑年獨逸)の頭目として攻擊し、佛蘭西の不道德と無宗教とを獨逸に宣傳するものと誣いた。戰鬪の繼續につれて、メンツェルの論調は益々激烈になり、その「猶太人並びに佛蘭西人」に對する罵詈は狂的となり、つひに聯邦議會に向つて、彼等の行動に干涉すべき事を要求した。雜誌の計畫は挫折し、キインバルクは退去を命ぜられて丁抹に去り、グッコオは起訴されて、その小說『懷疑者ワリイ』(Wally, die Zweiflerin)の不道德のために、マンハイムに監禁された。これを見て、ラウベとムントとは大いに恐れ、その靑年獨逸に何等かの交涉をもつた事を否定した。聯邦議會は更に獨逸政府に向つて、この危險なる流派のあらゆる著作物を禁止し、將來の出版を禁壓する事を要求した。かくて、ハイネ、ビョルネ、グッコオ、ラウベ、キインバルク、ムント等は、未曾有の彈壓に遭ひ、靑年獨逸派は忽ち屛息(へいそく)せねばならなかつた。ひとり巴里にあつたハイネのみは、禁止のための收入減少に拘はらず、

敢てくだらず、勇敢に戰鬪を繼續した。

この青年獨逸派彈壓の直接の原因となつたグッコオは、小說と戲曲とに名を馳せて、評論に於ては取り立てて云ふべき物をも出さなかつた。けれども、彼の『ワリイ』は小說の形をとつた論文とも云ふべきもので、ジョルジュ・サンドの『レリア』に影響されて、エロティックの問題を取扱つたものである。グッコオは半ばジャン・パウル、半ばハイネのスタイルの模倣から出發した。それは獨創性のないユウモラスな『痴女に送る痴者の手紙』がこれをよく證明してゐる。グッコオはジャアナリストとして絕倫の活動をした。各種の雜誌の編輯に携はると共に、無數の論文を書いた。その中、「ゲエテ、ウーラント及びブロメトイス」は、シュワアベン詩派に特別の親近を有するメンツェルとの直接の不和の動因となつたものである。彼の『ゲエテ』(1836)はメンツェルへの抗議として書かれたもので、小册子ながら、理解の行屆いた作品である。又、多くの人物批評は、後年の小說作家としての開展を豫想させる性格描寫の能力を示し、『ビョルネ傳』(1840)は、この青年獨逸の父に對する榮譽ある記念碑として、又、ハイネのビョルネ攻擊に對する反駁として記憶さるべきものである。ハイネとビョルネとの戰ひに於て、グッコオがビョルネを支持したのに對して、ハイネを支持したのはラウベであつた。

ハインリッヒ・ラウベ(Heinrich Laube, 1806—1884)も、グッコオとおなじく、小說、戲曲の方面に働いた。特に劇場主事としての功績は偉大である。彼はハイネの弟子として文學生活を始めた。彼の『旅行小說』(Reisenovellen)は、ハイネの『ライゼビルデル』の模倣である。然し、評論に於ては、ラウベよりもテオドル・ムント(Theodor Mundt, 1808—1861)の方がより重要である。ムントが青年獨逸派の感情と思想との代表者としての頂點に立つてゐたのは、一八三五年で、同年『シャアロッテ・シュティイグリッツ』(Charlotte Stieglitz, ein Denkmal)を出した。これは無氣力な文學者であるその良人を激勵する爲に自殺した眞個青年獨逸的な女性の爲に築いた記念碑であつて、その題材と、共感

溢るるが如き題材の取扱ひ方とによつて、人心を深く動かしたものである。同年、『マドンナ、聖女との對話』（Madonna, Unterhaltungen mit einer Heiligen）を著した。これは散文詩と、旅行記と、個人的告白と、肉の名譽恢復についての理論とを含んでゐるもので、現在では何故に此書が危險視されたか理解に苦しむ如きものである。この外に靑年獨逸派の評論文學として特に擧ぐべきものには同派の第二流の著作家なるグスタアフ・キュウネ（Gustav Kühne, 1806—1888）の『女性と男性』（Die weibliche und männliche Charaktere, von 1838）がある。これはラアエル、ベッティナ、シャアロッテ・シュティイグリッツ等の女性をはじめ、シェリイの如きラヂカルな大詩人、アナスタジゥス・グリュンよりカアル・ベックに至る自由の詩人より、リュッケルト、シャミッソオ等の溫和な詩人をも取扱つて、獨創的なところはないが、一面的にもならず、偏見にも陷らぬ好個の批評文學である。

なほ、靑年獨逸の發達にとつて忘るべからざる二人の女性についても一言しなければならぬ。ラアエル・ファルンハアゲン（Rahel Varnhagen, 1771—1833）は、ファルンハアゲン・フオン・エンゼの妻で、ゲエテの崇拜者、クライストの友人として、より古い時代に屬するが、その進步思想によつて、一面、靑年獨逸派の母とも見做すべき人である。ビョルネ、ハイネは彼女のサロンに出入して、多くの配慮と指示とを得た。ハイネの如きは善き友人として、終生、この年長の婦人を德とした。そして、彼女を「宇宙の最も才智ある婦人」と呼んだ。ラウベは彼女の書翰集を獨逸文學中の最も率直なる書物と呼んだ。グツコオはその『ワリイ』中にラアエルの思想や言葉を利用し、彼女の感受性に驚嘆してゐる。彼女は自ら文筆を執らうとはしなかつた。唯一の例外は小册子『一伯林女の記錄』（Denkblätter einer Berlinerin, 1830）であるが、その死後、良人のファルンハアゲンが彼女の書翰を集めて、『ラアエル、彼女の友人等のための記念の書』（Rahel. Ein Buch des Andenkens für ihre Freunde, 1834）を刊行するに及んで、著作家としても彼女の高い意義が確立せられるに至つた。此書の中には、靑年獨逸の生み出した最良の評論文學が見出されるのである。

ベッティナ・フオン・アルニム（Bettina von Arnim, 1785—1859）は、ラアエルとは全く種類の違つた性格の女であるが、おなじく革命的なものをもつてもゐたし、その青年獨逸派に對する關係に於ても、ラアエルに劣らず深甚なものがある。彼女は後期浪漫派の詩人クレメンス・ブレンタアノの妹、同派の作家アルニムの妻であるから、その親族と結婚とに於ては、浪漫派に屬するが、作家としては青年獨逸の時期に屬する。彼女ははじめゲエテを崇拜し、良人アルニムと、ゲエテとの死後に、五十歳の老女として、『ゲエテと一小兒との往復書翰』（1835）を出したが、この書の中にも既に、ワイマルに於ける平靜な詩人の胸に、政治的自由の愛を喚び起さうとする努力のあとは現はれてゐた。彼女のこの自由のための鬪爭に對する感激は、つひに彼女をして青年獨逸の理想の姿、そのワルキュウレの女神たらしめた。グツコオの彼女を最初訪問した記事、ムントの彼女の本質を記述した筆、キュウネの感激的な人物批評、それらの中には、よくその氣分が反映してゐる。彼女はフリイドリッヒ・ヰルヘルム四世の宮廷に接近し、王とは最も親密な交りをした。そして、常に貧者の味方であつて、自由の語に魔力を感じてゐた彼女は、つひに國家社會主義者として、『この書は王に屬する』（Das Buch gehört dem König, 1843）を公刊し、王にその人民の苦惱を輕減すべき事を勸告した。この書は非常な評判になり、大いに人心を動かしたが、それと共にベッティナと王との好關係は破綻を來した。政府は此書の續篇が、更に人民の政治的不滿を增大せしめる事を恐れて、ベッティナの次ぎの著作を、何等かの口實のもとに沒收してしまつた。とにかく、この小冊子は、婦人によつて書かれた最も熱烈な政治的文字として、青年獨逸の文學中に光彩を放つものである。

參考書目

Georg Brandes, Die Hauptströmungen der Literatur des 19 Jahrhunderts. Band VI, Das junge Deutschland.

Alfred Biese, Deutsche Literaturgeschichte.
Henri Lichtenberger, Heinrich Heine als Denker.
Max J. Wolff, Heinrich Heine.
Kurt Sternberg, Heines geistige Gestalt und Welt.
Hermann Wendel, Heinrich Heine.
H. H. Houben, Gespräche mit Heine.
L. Börne's gesammelte Schriften. 3 Bde.
Victor Hehn, Gedanken über Goethe.
Egon Erwin Kisch, Klassische Journalismus.
昭和四年十二月（「世界文學講座」第七卷）

ハインリッヒ・ハイネ（Heinrich Heine, 1797—1856）

ハインリッヒ・ハイネほど、多く讃嘆され、多く非議された詩人は稀れだ。ハイネほど誰にも愛好される詩を書いた詩人も尠いが、また、彼のやうにその本質の理解されにくい詩人も尠いだらう。多くの批評家は、この猶太種の詩人の周圍に集つて、いたづらに一面的な毀譽褒貶を事とした。ウィクトル・ヘエンの如く、模倣の才として貶黜するもの、バルテルスの如く極度の罵詈を投げつけるもの、是等は論外であるとするも、ハイネの本質に浸透して、その獨自性を闡明し得た評家は寧ろ尠い。獨逸人でハイネを最も尊重し、理解し得た人はニイチエであるが、これは兩者の本質

上の或る類似、その共感性の致すところに違ひない。ハイネとニイチエとは、かなり種類の異つた人物ではあるが、その多面性、その矛盾性、その思想的の流動性に於て、相通ずるものがあるのだ。兩者が共に誤解せられやすく、理解せられにくい理由も、また茲にあつて存するのだ。

ハイネの特質は、從來猶太人としての彼の民族性によつて解釋されてゐた。これに對して、ヘルベルト・オイレンベルクは、ラインランド人として解釋しようとしてゐる。そのフレエズへの嫌忌、滑稽に見られる事の恐怖、自らの涙への羞恥、是等はデュッセルドルフ(ライン左岸のハイネの生れた市街)から來たもので、パレスティナから來たものではない。ハイネの佛蘭西びいきも、普魯西嫌ひも、みなラインランド人の特色である。ラインランドは、數百年間の直接的な接觸によつて、半佛蘭西人となつてゐるのだと、オイレンベルクは云つてゐる。それも一つの新しい見方であると思ふが、自分はハイネを一つの獨自な個性として見たい。彼は猶太人でもあり、ラインランド人でもあるが、その前に先づハインリッヒ・ハイネ自身であるのだ。

「世には冗談と眞劍と、惡と聖と、熱と冷とが、奇妙に結合してゐて、ために判斷を困難ならしめる心がある。」とハイネは自ら云つた。この言は直ちにハイネ自身に該當する。獨逸人は元來、糞眞面目な民族だ。嚴肅と、沈思と、向内性とが、その特色だ。その言説に多くの責任をもたないかに見えるハイネ、とかくミスティフィカティオンを喜んで、戯謔をたのしむハイネ、彼が獨逸に於て、常に激烈な反對者をもつたのは自然の勢ひである。然し、この故にハイネを直ちに不眞面目となし、輕浮と斷ずるのは、未だハイネの他の一面を知らないものである。彼はもとより、レオパルディや、シェリイや、ド・ヴィニイや、レナウの如き、深遠な世界觀の詩人ではなかつた。然し、彼がその痛切な情感を託した晩年の詩篇に於ては、世界苦(Weltschmerz)の詩人として、シェリイ、レオパルディの高調に達してゐる。その最終の戀人、ムウシュ(Mouche)と呼ばれたエリイゼ・クリイニッツに與へた『受難の花』三十七聯の長詩の高調に比

すべきものを自分はあまり多くは知らないのだ。ヘレニズムとヘブライズムとの永遠の爭闘をうたつたこの哲學的、象徴的な雄大な詩篇は、ハイネの白鳥の歌(スワンソング)であると共に、又その一代の傑作でもある。

元來、我國では、ハイネは特に不思議な運命に遭遇した。高山樗牛、登張竹風、尾上柴舟諸家によつて紹介されてから數十年を經て、依然、戀愛詩人、感傷詩人として、その一面觀によつて、通俗的に愛好されると共に、不當に蔑視されて來た。然るに、最近に至つては、屢々そのマルクスとの交遊を語られ、プロレタリア詩人として、マルクス主義の詩人としてすらも、持てはやされるに至つた。ハイネが新しい眼で見直される日の來たのは喜ぶべき事だ。然し、ここでもハイネのあらゆる矛盾性と複雑性とを容認して、彼を全面的に受け容れる用意を缺いではならない。然らずんば、再び他の誤解の波の中にハイネを投ずる結果になるからである。

ハイネは一八三〇年代の詩人である。今、一九三〇年來つて、我等は七月革命の百年祭の記念を迎へようとしてゐる。此際にあたつて、社會詩人、革命詩人としてのハイネの眞面目を語り得るのは、愉快な事である。七月革命は、ハイネを巴里に招き寄せた。當時、ヘルゴランドの島に孤獨な生活をしてゐたハイネは、巴里からのこの一大飛報に、ふるひ立つた。「ラファイエット、三色旗、マルセイエーズ……我が安息の渴望は消えた。私は革命の子だ。花を、花を！　私は死戰のために我が頭(かしら)を花環もて飾らう。戰ひの歌をうたふべき琴を與へよ……私は全身喜びだ、歌だ。全身劍だ、焔だ！」と彼は叫んだ。戰士としてのハイネの生活はその時からはじまつた、任意の流竄と、祖國の保守主義者との生涯の戰ひの幕は茲に切つて落されたのだ。「巴里へ！　巴里へ！」それが彼には唯一の救ひに見えたのだ。一八三一年五月一日、彼はシュトラスブルクに、佛蘭西の土を踏み、越えて二日、巴里へ入つて行つた。

當時の獨逸に於けるハイネの狀態は、出口のない袋の中のやうな行詰り方であつた。彼は大學を出て、商業の試みに失敗し、その伯父サロモン・ハイネの二人の女(むすめ)、アマリエとテレエゼとに次々に失戀し、英國及び伊太利に旅し、父

の死に遭ひ、今や、ミュンヘン大學の教授たる志望全く挫折して、一身の處置に迷つてゐた所だ。彼は既に『詩集』(Gedichte, 1821) を刊行して名を成し、これを擴大した『詩の本』(Buch der Lieder,1827) に著しいポピュラリティーを贏ち得、散文家としても『ハルツ紀行』(Harzreise) 以降の『ライゼビルデル』(Reisebilder) を刊行して、清新な散文家として、政論家として一世の注目を惹いてゐたにも拘はらず、獨逸は息苦しい空氣もて彼を壓迫してゐた。『伊太利紀行』(Italien) に於けるプラアテンとの危險な論爭は、中立的の人々をも敵方にまはし、忠實な友人達の眉をも顰めしめ。彼は猶太人として、自由思想家として、貴族と僧侶との敵意を痛切に感じた。獨逸に於て確實な地位を得る事は、彼には絶望に見えた。此時、革命の收穫者として彼の尊崇するナポレオンの國、自由の祖國佛蘭西が、彼を微笑をもつて招いたのは容易に理解される事でなければならぬ。

ハイネはヘエゲルに學んだ。然し、彼にとつてヘエゲルの哲學は餘りに難解なものであつた。フェルディナンド・ラサアルは、ハイネが自ら、ヘエゲルの哲學を理解しなかつたが、ヘエゲルの學說が時代の精神的極點を形成してゐる事を常に確信してゐると彼に語つたといつてゐる。そして、ハイネが伯林に遊學中、一夜、ヘエゲルを訪ねた折りのアネクドオトを語つてゐる。ハイネは主人の研究の一段落つくのを待つ間、開かれた窓から星空を眺めて瞑想に耽つてゐると、不意に、肩に手が置かれ、同時にかういふ言葉を聞いた、「君、あれは星ではないんだ、人間が置いた或る物なのだ！」振返つてみると、そこにヘエゲルが立つてゐた。この瞬間から、彼はヘエゲルの學說は十分に理解しえずとも、この人物の衷(なか)に、世紀の脈搏の打つてゐる事を信じたといふ。ハイネ自身その『懺悔』(Geständnisse) 中に語つてゐる、星についてのヘエゲルとの對話は、これとは聊か異つてゐるが、然し、このアネクドオトによつて、我々はその左黨からマルキシズムにまで發展したヘエゲル哲學に對する、マルクスやラサアルの敬意を、ハイネも亦分つてゐた事を知るのである。然し、ハイネの思想に對して、大いなる影響を與へたものは、ヘエゲルではなくして、サン・

シモンであつた。

社會思想家としてのハイネに決定的影響を與へたものはサン・シモニズムである。ハイネが巴里に赴いた當時、サン・シモニズムはその頂點に達してゐた。彼はその派の指導者なるアンファンタンと交り、彼等の迫害に遭ふだけ愈々彼等に同感をもつた。然し、サン・シモニズムの重要な部分である經濟組織の方面には、あまり多くの興味を寄せ得なかつた。專ら彼を惹き付けたものは、その社會組織の方面、貴族や教會の特權を打破し、精神的貴族を尊崇する點、これが彼の內部に存する民主的傾向と、貴族的藝術家的本能との間の矛盾を解決するものと思はれた。民衆の權利を高唱する民主々義者であると共に、天才の崇拜者である個人主義者のハイネは、玆にはじめてその適當の教說を見出したのである。殊に、サン・シモンが『新基督教』で說いた宗教と道德との更新に對する大膽な說は、最も彼を魅惑した。サン・シモンは永生に達する唯一の方法は、現世に於て全人類の幸福のために働くところに存するとなし、社會組織の缺陷を除去し、地上に天國を建設せんとする人道教としての新宗教を唱へたが、それは一種の汎神論として、基督教の分離せしめたものを一致せしめ、幾百年來蔑視され來つた肉の名譽恢復をし、肉の解放と婦人解放とを目的とする學說に開展した。ヘレニズムに傾いてゐるハイネにとつて、これは大なる福音でなければならぬ。彼は玆に於て、靈肉合致の第三帝國の夢を見るに至つた。ハルトヰッヒ、イェッスが、ハイネをニイチエ・イプセンの先驅者と目し做すのは、此の點からである。

然し、サン・シモニズムは現實の巖壁に觸れて難破しなければならなかつた。ハイネの後輩、マルクス、ラサアルが新しい時代を率ゐて、社會主義の先頭に立つた。ハイネとマルクスとの交遊には美しい逸話が數多殘つてゐる。マルクスはハイネの大なる崇拜者で、彼の政治的弱點をも寬容し、只管その作品を讚美した。『資本論』の脚註で、ペンサムを揶揄するに當り、「我友ハイネの勇氣あらば云々」の語をなしてゐるなど、最もよくこれを證明してゐる。ハイネ

の方では、著作中で特にマルクスの名を擧げてゐるところは一二箇所に過ぎず、マルクスの批評としては、モリッツ・カリエールの書簡中に、彼がマルクスを辯護して、「あの男は鋏なのだから、人間はどうでもいいぢやないか。」と云つた事だけが殘つてゐる位なもので、彼がマルクスに思想上の感化を受けたと云ふ事は出來ない。が、彼が「フォアウォルツ」に載せた敍事詩『獨逸、冬物語』（Deutschland, ein Wintermärchen）はマルクスの影響から出來上つたものと見做すべき理由がある。尤も、當時のマルクスは未だ自らマルキシストですらなかつた。當時いくらかコンミュニストではあつたが、未だインタナショナルの建設の考へすら抱いてゐなかつたのだ。個人的には、ラサアルとの關係の方がより密接で、ラサアルの姉がハイネの愛讀者であつたところから、その良人のフリイドラントと交り、後に投資事業に誘はれて、財政上の葛藤を惹起した位であるが、當時のラサアルは未だ紅顏の美少年であつた。しかも、ハイネは旣にラサアルを認めた、彼がラサアルの光榮ある未來を豫見した事は有名な話柄である。が、これら後年の科學的社會主義の創唱者や、社會民主黨の創設者よりも、當時のハイネの重視した人々は、フウリエであり、プルウドンであり、ピエール・ルルウであつた。特にプルウドンに對する敬意の尋常でなかつた事は、マイスネルの記事によつても知られる。マイスネルは又、ハイネがいかなる國家形態をも信ぜず、屢々、その絕對的の否定が、唯一の解決法であり、未來の準備であるやうに思つた事、何はともあれ、何物かが崩壞して、その大なる轉落の隧音を聞き、巨大な廢墟を目睹する事を希望するやうに見えた事を語つてゐる。後年のハイネには、ニヒリズムの傾向が顯著であるが、社會思想としてはアナキズムに傾いたあとを多く示してゐる。ハイネの禀性を以てしては、彼がいかにマルクスよりも遲れて出でようとも、マルキシストになり得たとは考へられない。それは彼が個人主義者であり、特に自主自由の詩人であつたからだ。

ハイネは政治家でなくして、詩人であつた。彼には護民官（トリブウン）となる資格もなく、また欲望もなかつた。ハイネはその

談論家としての無數の逸話にも拘はらず、內氣な人間であつた。その傾向が少壯時代特に顯著であつた事は、キインバルクのやうな在獨時代の友人によつて屢々その事が語られてゐるので知られる。從つて、少數の友人の間にあつては談論風發、機智湧くが如きものがあつたが、多數の集會にのぞむと、一語も發する事が出來なかつた。曾て、彼は伯林に於て「サロン・デマゴオゲ」と呼ばれたが、それは彼の信念の誠實を疑はれたからでなく、詩作によつて政論する詩人と見做されてゐたからである。彼は筆劍の戰士であつて、大衆を前に熱狂の雄辯をふるふ社會運動の指導者ではなかつた。彼は詩人として、一生、自由のために戰つたが、然し、彼は單純な黨派文學者ではなかつた。彼が屢屢その操守の點を非議せられる根本の理由は、主としてこの點に存する。卽ち、彼の多面性、矛盾性、複雜性は、自己を一面的に截斷し、一主義に限定し、自ら自己を束縛するに堪へなかつた。この事は、政治家的見地から云へば、信念の薄弱であるが、詩人的見地から云へば、自主自由の詩人の面目を把持し得たものと賞讃すべきである。況んや、他の社會詩人等が、後年變節して、反動主義の軍門に降つたのに反して、彼が自由の戰士としての晩節を汚さなかつたに於てをやである。

ハイネは常に局外の人である。傍觀者であり、批評家である。そして、第一に、嘲笑家である。嘲笑家としてのハイネは、アリストフネス、セルヷンテス、スヰフト、モリエール、ヴォルテエル等に敢てひけを取らない。その諷刺は毒矢の如く、一度びその矢に當つたものは、呻吟、夜も安眠し得なかつた。彼はこの矢をもつて、上は普魯西亞王、バワリア王をはじめ、大學敎授、政論家に至るまで、多くの反動主義者、保守主義者を射た。彼等の固陋と我意と卑小とを寸毫も容赦しなかつた。彼の著作が普魯西亞や墺太利で禁止の災厄に遭つたのは稀らしい事ではなかつた。と同時に、彼は彼の同盟者のやうに思つてゐる自由主義者や、急進主義者の弱點や、誤謬をも容赦なく暴露した。人間性の弱點を熟知してゐる彼は、ヘルウェークや、フライリヒラアトや、ディンゲルシュテット等の政治的傾向詩人のナイ

ーヴな感激を嘲笑せずにゐられなかつた。彼等が不名譽な敗北を示したとき、ハイネの嘲笑は最も辛辣を極めた。政治の實際運動の渦中に迷ひ込んだ詩人が、いかにみじめな役割を演じなければならぬかを熟知してゐたので、斷然詩人として、藝術家としてその限界の中に踏み止まる決心をしてゐたハイネにとつて、ヘルウェークが靑年の客氣に驅られて、政治運動の指動者として民衆の先頭に立つて、その無力を無慘にも暴露したのを見たときは、默視する事が出來なかつた。もつとも、これらは決してハイネの美點とはなし難い。が、善かれ惡かれ、これがハイネの特質だから仕方がない。ただ、かうした忌憚なき諷刺の結果は、屢々痛烈な報復として彼を苦しめた事は止むを得ない事だ。不幸にも他人の批評や嘲罵に最も敏感であつたハイネは、自ら多くの不愉快をいかに屢々受けねばならなかつたか。そして、率直無二の人として、彼は攻擊には必ず攻擊を以て酬いた。彼の生涯が不斷のポレミック、不斷の爭鬪をもつて終始したのは、まづこれがためである。アミエルがハイネを評して、「俗物根性のきらひな、戯謔好きのメフィストフェレス」といひ、「最初の過失のために、世間との不斷の爭鬪に身を投じ、孤立し、排斥され、罵詈されて死んだ、革命家。すばらしい才能の持主、ただ智慧が少かつた。」と云つたのは、此點から見るとき、頗る適切な評語であると思ふ。

然し、それは又、ハイネのより深い特質から來る自然の結果でもあつた事を忘れてはならない。即ち、彼は矛盾の子であつて、絶えず自己の中で爭鬪してゐた。彼は世間的にその安住の地をもたず、常に二つの椅子の間にすわつてゐたが、その內部に於いて、更に安んずるところをもたなかつた。彼は二元的な人間であつた。クルト・シュテルンベルクは、合理主義（Rationalismus）と浪漫主義（Romantik）との辨證法的關係をもつて、彼の特質を說明しようとしてゐる。そして、例へば、合理主義者として、彼は革命の支持者であり、民衆の權利を要求する民主々義者であるが、浪漫的な詩人として、俗衆に對して儼として距離感（das Pathos der Distanz）を保持する貴族主義者であると云つてゐる。理性と感情、批評と感傷、政治家と詩人、實際家と空想家、これが常に彼の裏で鬪つてゐた。彼の感傷性を裏切

る譏笑、皮肉もまたこの相剋の結果で、彼の詩は蛇のやうに結末に至つて、屢々その尻尾を噛んで、自らその効果を殺してしまふ。「調和と内部的均衡との缺如が、彼の無限に重大な缺陷である。」とリシュタンベルジェが評したのは、即ち此の點である。然し、同時に、この不安と自己分裂とが、近代の人間にとつて、ハイネの無限に重大な價値であるところのその近代性を決定するのである。ハイネは近代主義の詩人である。浪漫主義と近代主義との橋渡しをなす詩人である。當時の詩人で、彼ほど現代に於て力強く生きてゐる詩人はない。「私と共に獨逸の舊詩派は終る、同時に、新詩派は、近代詩は、私と共に始まる。」と彼が云つたのは、よく自己の意義を知るものと云ふべきである。

普通、彼の作品では、その詩のみが愛好せられてゐる。然しその著作の大部分を占めるものは散文である。小說、紀行文、いづれも自由な無駄話（causerie）の調子の強いもので、論文すら屢々小說の如く讀まれるのである。これらはハイネのその方面に於ける教養と、彼の透徹した批判力を示すもので、一般に信ぜられてゐる程淺薄なものではない。そして、その一部は彼の政治的見解を端的に吐露したものであり、又、屢々多くの問題を捲き起したものである。然し、ハイネがいかに散文家として卓越してゐようとも、彼の文學史上の大なる意義が、依然としてその詩の上にかかつてゐる事を奈何ともする事が出來ない。彼の詩は世界的に最も愛好せられるもので、その詩の作曲せられた數も、獨逸詩人中首位にある。『ロオレライ』の如きは、その最も有名なものであらう。

『詩の本』『新詩集』（Neue Gedichte）の外に、ハイネが生前公刊した詩集は『ロマンツェロ』（Romanzero, 1851）である。これはハイネの詩才の最も圓熟した時期に成り、その詩人としての最高調を示すものであるが、當時、ハイネは既にその健康を失つて、彼の所謂る『蒲團の墓』（Matratzengruft）に横たはつてゐた。曾つてアーノルト・ルウゲがゲエテ以後の最も自由な獨逸人と呼び、テオフィル・ゴオティエが獨逸のアポロンと呼んだ彼は、今や、多少のアイロニイなしにではないけれども、神への復歸を告白する『哀れな死に瀕せる猶太人であり』、蠟の如く透き通つた手を持つた、基督

を思はせる青白い精神的な風貌をもつた、痙攣に惱む病人であつた。不老不死の靈泉の湧き出づる絶海の孤島ビミニを求めて船出するファン・ポンス・デ・レオンの傳說を取扱つた雄大な詩篇『ビミニ』こそ、彼が眞の信仰告白である。この詩の主人公は、長い航海の後に、つひにその求めた不老不死の國に到達する、そこなる靈泉の水を飲む。「そのよき水は忘河(レエテ)といふ！　それを飲め、さらば汝は忘るべし、汝のあらゆる惱みをば——げに忘るべし、曾て汝が受けし苦しみを——そのよき水よ！　よき國よ！　そこに到りし者は、とこしへに去ることあらじ、その國ぞまことビミニの島なれば。」

ハイネのペシミズムは、玆に於てその結語を得たのである。彼がかの夢想的な少壯の社會詩人を嘲笑したのも、此のペシミズムのためであつた。彼は人間が救はれ難い利己的な動物にすぎぬ事を熟知してゐた。人間のあらゆる努力がつひに無効に歸する事を熟知してゐた。總ての美しく、高貴なものも、つひに痕(あと)なく滅び去らねばならぬ事を知つてゐた。彼がいかに熱愛しようとも、人生をつひに捨て去らねばならぬ事を知つてゐた。彼が愛した妻、無智なマティルドを捨て去らねばならぬ事を知つてゐた。彼は一生を回顧するとき、そこには只々苦(にが)い絶望と失敗の意識の存するのみなる事を知つてゐた。彼が人生から得たものは？　數十年の苦鬪によつて得たものは？　彼が多くの女から、その愛妻との結婚生活から得たものは？

　　やり損つた生、やり損つた戀！

それがハイネの一生のエピロオグだ。そして、また我等の、一切の敗北した詩人のエピロオグだ。

　　やり損つた戀、やり損つた生！

昭和四年十二月十二日（「世界文學講座」第七卷）

若きゲエテ

『若きエルテルの悲み』ほど、明治後半期の我國の靑年の心を奪つた小説はなからうと思ふ。大學や高等學校で、獨逸語を學んだ學生は、みなそのふところにあの小さなレクラム版の『エルテルス・ライデン』を入れて、靑い憂鬱な顏をして歩き廻つたものであるといふ。久保天隨氏の今から見ると古風ではあるが、詩的な譯本が出ると、靑年は爭つて讀んだ。當時、ある自殺した靑年の手に、その本があつたといふ事も聞いてゐる。これも「エルテル熱」であつたであらう。そして、そのころ華嚴の瀧で死んだあの有名な藤村操などにも、戀愛關係の有無はとにかくとして、いくらかエルテル熱といつた傾きも見えるやうに思ふ。

然し、この小説がはじめて世に現れた當時のエルテル熱と云へば、到底これ位なものではなかつた。獨逸の靑年は、あの有名なエルテルとおなじ服裝をして、女はロッテのやうに身をつくり、その中からは、自殺するものも多く出たといふ。それは時代の病氣であつた。それが『若きエルテルの悲み』にそつくりその儘表現されてゐたのである、この作品が忽ち全歐を風靡したのも、またそのためであつた。そして、これを書いたゲエテその人が、エルテルに外ならなかつたのである。然し、ゲエテはエルテルのやうに自殺しなかつた、彼はその情熱を克服し、その病から癒える爲に「エルテル」を書いたのである。併もその時分、おなじ土地で同じ樣に人妻への戀に惱んでゐたエルサレムといふ靑年は自殺して了つた。そして、それがエルテルの結末のモデルとなつたのである。エルサレムが自殺に用ゐたピストルは、ゲエテが前に借りたもので、若しどうかしたならそれはゲエテの身を擊つたものであつたかも知れないといふ。

然し、ゲエテは死ななかつた。彼は生きる道を選んだ。玆にゲエテの偉大なところがある。近代の批評家中には、

ゲエテがヱルテルの地位にあつた時、自殺しなかつたとて笑つたものがあるとて、ブランデスはその愚昧を指摘してゐるが、それは云ふ迄もなく正當な事である。しかも、ゲエテは自分の情熱を誇大して表現したわけではない、實際、その時分は幾度び死なうと思つたか知れないので、胸に短刀を當ててみた時もあつたことは、その自傳にも書いてゐるところである。ゲエテはロッテへの情熱をのがれるため、ヱッラルを去つた。ひとりロッテを去つたばかりでなく、その前にもフリイデリイケから逃れ、またリリイからも逃れた。女の愛に囚はれないところ、身を殉じないところは、何だかあまりに高く、冷かなやうな感じもするけれど、若し彼が一時の愛に溺れる人であつたなら、ヱルテルの詩人ではあつても、ファウストの詩人とはなれなかつたであらう。

昭和二年五月十五日(「世界文學月報」第二號所載)

文豪の國籍について

此間、仕事を持つて、信州の山の内温泉へ行つた折り、丁度その附近の須坂といふ町の生れの、原司法大臣が歸鄕されたといふので、大變な歡迎會で、土地の人の得意は羨ましいばかりであつた。文學者はまだ國務大臣ほど鄕國の誇りとはなり得ないやうだが、文學が普及して、そのすぐれた意義の認められれば認められる程、鄕人はすぐれた文學者を自分達の間から出した事を誇りとするやうになるに違ひない。ダンテ、シェクスピア、ゲエテ、これらの文豪を有する事は、伊太利の、英吉利の、獨逸の、それぞれの國の誇りである。さうした文豪を自分の國から一人も出さない事は、隨分寂しい事に違ひない。また、同じ國でも、さうした文豪の出生地であるといふ事は、他地方に對する絶對の優越である。そこで、ホオマアが希臘のどの地方の生れであつたかといふ事で、隨分はげしい爭ひが久しくつづ

いた。また我國でも、近松門左衛門の出生地は不定で、或ひは長門といひ、近江といひ、出雲といひ、また京都ともいふ。それぞれの土地に、墓があつたり、その他の由緒があつたりする。

古い時代の文豪には、その傳記の判然しない事が多いから、さうした爭ひも起りやすい。シェクスピアなどは、哲學者のベエコンの匿名であらうといふ說などが出た位である。が、近代の文豪に至つては、そんな事はない。ただ、その代り、交通の發達が國と國との距離懸隔を少くしたため、昔は考へられなかつたやうな事態が生じた。即ち、英國の作家のジョセフ・コンラッドの如き事態である。この人は英國人でなくつて、實は波蘭人であるが、それでも英國に住み、英語で著作してゐる以上は、波蘭文學に屬しないで、英文學に屬する。その點から云つて、我が國に住みついて、我が國に歸化したラフカディオ・ヘルン、小泉八雲は、英語で著作した以上、やはり英文學史中の人であつて、日本文學史中の人ではないであらう。が、我々として、ヘルンを日本人として見たいやうな氣もするのも、また自然であらう。もつともこの人は純粹の英國人でなく、愛蘭人と希臘人との間に生れた人で、世界の各地に足跡を印してゐる點からいつても、純粹にコスモポリタンである。

文豪の國籍は、單にその出生地によつてのみは定まらない。その血統、その人種といふ事が一層重大である。『ナナ』や『居酒屋』の作者のエミイル・ゾラの如きは、伊太利の血統である。ゾラといふ、末が母音ではね上つた綴りが、すでにそれを示してゐる。又『モント・クリスト』の作者のアレクサンドル・デュマは、佛蘭西のド・ラ・ペエユトリイ侯爵と、西印度のニグロの女との間に出來た男を父として生れた子で、黑い髮と、ブロンズの皮膚と、靑灰色の眼をしてゐたといふ。で、デュマと親交のあつた詩人ハイネも、人生の不如意を歌つた詩の中で、「アレクサンドル・デュマの雜種（メテイス）なる」事をその憾みの一つとしてゐる。ニグロといへば、露西亞の詩人プウシキンも、ペエトル大帝の寵愛の黑奴イブラギムの後裔なので、その肖像を見ても、ちぢれた髮といひ、容貌といひ、いかにもニグロの血の入つ

てゐる事を想はせるものがある。

同じ露西亞の詩人レルモントフは、スコットランド人の子孫だといひ、『復活』のトルストイ、即ち大トルストイ伯の家系も、もとは獨逸人の出であるやうだし、『罪と罰』のドストエフスキイも、大の獨逸ぎらひであつたにも拘はらず、その娘エイメイの思出の記によれば、その家系はリスアニアから出てゐるといふから、幾分獨逸系統の人である。こんな風に、先祖からしらべて行けば、歐羅巴の文豪中にも、その國籍がはつきりしないやうな人も多く出て來るだらう。然し、どんなに物好きの探索をやつて見ても、この一事だけは動かす事は出來まいと信ずる、即ち、文豪の眞の國籍は、精神の王國に屬するといふ事である。

昭和二年六月十五日(「世界文學月報」第三號所載)

彼等が友情の祕密

英雄雲の如くに起るといふ言葉があるが、一體に、人材といふものは、一時に蔟出する傾向がある、學校などでも、秀才が競つて出る時と、さうでない時とがある。文學史上にも、その例に洩れず、一代の大作家の蔟出する時期がある。たとへば、獨逸のゲエテ、シルレルの時代、佛蘭西の、ユウゴオ、バルザック、スタンダアル等の浪漫派の時代、露西亞のトルストイ、ドストエフスキイの時代など、その一例である。これはどういふ理由であるかそれを究めてみると、隨分おもしろいだらうと思ふ。が、それよりも一層興味があるのは、この時代をおなじうした大作家たちが、互ひにどんな關係にあつたか、友であつたか敵であつたか、またそのいづれであるにしても、互ひにどんな風に評價し合つてゐたかといふ事である。

その點で、私にとつて最も興味のあるのは、トルストイ、ドストエフスキイ、ツルゲエネフ、この三大作家の間の關係である。彼等の友情と敵意とは、私達にいろいろの事を考へさせてくれる。

トルストイとツルゲエネフとは、青年時代からの友人で、喧嘩をしたり仲直りしたりして、晩年まで續いて行つた。

グリゴロヰッチは二人がネクラソフの家で云ひ爭つた事を書いてゐる。トルストイは中央の廊下で、モロッコ皮の長椅子に横はつて、ブゥブゥ云つてゐる。ツルゲエネフはといふと、兩手を衣嚢に突込んだ儘、短い上衣の尻を後へ突出して、三つの部屋をぶつ通しに往つたり來たりしてゐる。それでグリゴロヰッチがトルストイをなだめにかかると、彼は鼻息を荒くして、「僕はあんな男に侮辱されて默つちやをられない、あの男は今わざと僕の前をあちこちしながら、あの平民的な腰を振つてゐるんだ」といふ。この爭ひの原因は何でもツルゲエネフが農奴の女に子供をはらませた事に關聯してゐるやうに記憶するが、この不和は、數年後にたうとう決鬪沙汰にまで及ばうとしたといふ。

然るに十七年後に、トルストイはその古い友人にまた接近しようとした。すると、ツルゲエネフは喜んでそれに應じて、トルストイに會見しに行つた。そして、彼は臨終の床でも舊友を思うて、トルストイに宗教的活動より文學的活動にかへるやうに勸告してゐる。この二人の間の關係を、メレジュコフスキイは評して、「相對して据ゑられた二つの鏡のやうなもので、二人は互ひに自分の祕密をはつきりと見せつけられる事を恐れたのである」と云つてゐる。

ツルゲエネフとドストエフスキイとの關係は、またそれとは著しく違ふ。この二人もおなじく青年時代から相知つたが、はじめから相合はなかつた。ドストエフスキイが『貧しき人々』を書いて文壇に出た時に、ツルゲエネフは既に作家としての立派な地位をもつてゐたが、彼はこの氣むづかしい後輩を議論に引出しては、澤山の友人たちの前で、やりこめて興がつた。或時なぞは、田舍で自分を天才だと思ひ込んでゐる男に會つたと云つて、その男の馬鹿らしさを面白可笑しく話して、ドストエフスキイに當てこすつたので、ドストエフスキイは眞蒼になつて、默つてその儘外

へ出てしまつたが、それ以來もうその仲間へは來なくなつたといふ。その後も、二人の間にはいろいろ面白い交渉があるが、その思想から云つても、傾向から云つても、二人は友人といふより、むしろ敵對の關係にあると云つてよい。ドストエフスキイとトルストイとの關係は、直接の交渉ではなかつた。精神上に相親しむべき一致點を多くもつてゐたにも拘はらず、二人はどちらも接近しようとは企てなかつた。もつとも、ドストエフスキイは、トルストイの『アンナ・カレニナ』について、極めて公明正大な立派な批評をしてゐる。それに比べると、トルストイがゴオリキイに話したドストエフスキイの批評は、おもしろくもあり、當つた處もあるが、隨分勝手氣儘なものである。ドストエフスキイも、トルストイを骨の髓からのエゴイストと見なす點に於いて不思議にツルゲエネフと全く一致してゐるが、トルストイの方では、ドストエフスキイを評して、「彼は孔子か佛敎かを學べばよかつたのだ。さうしたら落着きが出來たらう。彼は叛逆性の人だつた。腹を立てると、瘤が不意に彼の禿げ上つた頭にふくれ上つて、耳が動く。彼がそんなに讀まれるといふのは不思議だ」と云つてゐる。この三人の關係は、同時代者の避け難い或る運命について語るところが多いやうに思ふ。

昭和二年八月十五日(「世界文學月報」第四號所載)

ナポレオンとゲエテ

千八〇八年の十月に、佛蘭西皇帝ナポレオン一世と、獨逸第一の詩人であるゲエテとは、エルフルトで會見した。ナポレオンが、エルフルトに、歐羅巴の四人の國王と、三十四人の大公とを集めたとき、ワイマル大公國の大臣であつたゲエテも、カアル・アウグスト大公に呼ばれて、エルフルトに行つたので、その事を聞いたナポレオンは、翌日、

この有名な詩人を招いたのである。
　ゲエテが皇帝の部屋へ入るとナポレオンは大きな圓い卓に就いて、朝餐をしたためてゐた。その右側にはタレイラン、左側にはグリュウがゐた。ナポレオンは顔をあげて、ゲエテにもつと近くへ寄るやうにと云つて、詩人の顔をぢつと深く見てゐたが「見よ、何といふ人間だ！」と叫んだ。これこそほんたうの男子だといふ意味で、ゲエテに對してこれ以上適確な批評はないとは、多くの批評家の一致していふところである。それからナポレオンは、ゲエテにむかつて。
「幾歳になられるか」と訊いた。
「六十歳で」とゲエテは答へた。
「なかなか健康さうだ。」とナポレオンは云つた、「貴下はこの獨逸第一の劇詩人だとわしは思ふ」
　ナポレオンは時々侍臣に命令を下しながら、一時間あまりゲエテと話した、主として、ゲエテの戯曲の事や『エルテルの悲み』の事を。この『エルテルの悲み』は、ナポレオンが靑年時代の愛讀書で、自分でもそれを模倣した小說を書いた事さへあるのだ。その數日後、ナポレオンはワイマル大公の許に、その宮廷俳優を引連れて來て、ヴォルテエルの『シイザアの死』を上演させた。演伎がすんで、舞蹈會が催されたとき、ナポレオンはゲエテを傍らに呼んで、
「眞面目な戯曲は君侯にも人民にもいい教育になる。貴下にはヴォルテエルよりも、もつと偉大なシイザアの死を書いて貰ひたい」と云つて、なほ是非巴里に來るやうにと云つた。けれども、ゲエテは巴里に行かなかつた。やつぱり、小さなワイマルに止まつてゐた。また『シイザアの死』をも書かなかつた。その代り、靑年時代から着手してゐた『ファウスト』を完成する事によつて、ナポレオンが云つたやうに、眞に「獨逸第一の詩人」たるの實を示したのである。
『ファウスト』は、正に獨逸文學の誇りである。英國人が印度の富よりもシェクスピアの傑作を愛惜するならば、獨逸人は『ファウスト』のためには、いかに多くの犧牲をも忍ぶであらう。そして、シェクスピアがひとり英國ばかりでなく、

世界文學の寶であるやうに、ゲエテの『ファウスト』は獨逸ばかりでなく、廣く近代文學中の第一の傑作である事云ふまでもない事である。

「ファウスト」はひとりゲエテが書いたばかりでない。この中世の傳說を題材としてはじめて悲劇を作つたのは、英國のマアロオで、ゲエテも多少その刺戟を得てゐると云ふ。又人形芝居もあつて、ゲエテは少年時代に、故鄕のフランクフルトでそれを見た事があると云ふ事であるし、ゲエテ以後にも、グラッベ・レナウをはじめ、隨分澤山ある。が、それらはみな、月の前の星にすぎない。「ファウストは何もゲエテの專賣特許ではあるまい、俺だつて書ける筈だ」といかに多くの野心滿々たる靑年詩人が叫んだ事であらう。しかも、未だ一人としてゲエテを凌駕したものはない。『ファウスト』はそれ程の傑作である。

然るに、今私たちがはじめてこの千古の傑作に對すると、どんな風な感じがするであらうか。ゲエテの『エルテルの悲み』は當時の靑年子女を狂喜せしめたやうに、今私たちが讀んで見ても、まことに面白く、他人と婚約のある女への戀に惱んでつひに自殺する靑年の苦惱に惹き付けられる。『ヘルマンとドロテア』は敍事詩であるけれど、純潔な靑年男女の戀にしみじみと惹き付けられて、つひ一氣に讀んでしまふ。が、『ファウスト』はおなじく詩の形で書いてあるが、すつかり勝手が違ふ。まだ第一部のマルガレエテの悲劇は本筋だけ拾つて讀めば誰にも分るし、おもしろくもあるが、第二部となると、すつかり高級象徵の藝術で、普通の小說戲曲とは違つて、ゲエテの世界觀を盛り上げた、謂はば文學上の聖書と云つてもいいやうな意味を有つものであるから、何遍も何遍も繰返し讀まなければ、ほんとの妙味は分らないと思ふ。一遍位一寸拾ひ讀みして、つまらないもんだなどと云ふと、あとで後悔しなければならない。『ファウスト物語』などと云ふものもあるが、ほんとの妙味はやつぱり全譯を見なければわからないのである。とにかく、『ファウスト』は一生かかつて繰返し讀まねばならず、讀んで必ず得るところのある作品であると思ふ。

昭和二年九月十五日（「世界文學月報」第六號所載）

世界的女流作家

セルマ・ラゲルレフの傑作小說『地主の家の物語』其他に就て

北歐、殊に瑞典は女流作家に富んでゐる。が、そのうち世界的名聲を馳せたのは、婦人運動で聞える評論家エレン・ケイを除けば、ひとりセルマ・ラゲルレフあるのみである。ストックホルムの女子師範を出て、ランヅクロナといふ地方の小市街で女學校の教師をしてゐた、ラゲルレフの名を、つひに世界的な名前にして、ノオベル賞の獲得者とまでしたのはその處女作『ゲスタ・ベルリング』であつた。この作は、はじめストックホルムのある婦人新聞で、懸賞小說を募集したとき、これに應募して當選したものであるが、ラゲルレフは後書き足して今のやうな長篇にしたのである。近代生活の中に、ロマンティックな物語の精神を復活させた點で、「近代のオデッセイ」と云はれる作品である。

『ゲスタ・ベルリング』の後、ラゲルレフは益々物語の才能を發揮して行つて、その南方へ旅行して親しく踏査した、シシリイ島を舞臺とした『反基督の奇蹟』、ダラルネの農民の宗教的覺醒を取扱つた『エルサレム』等の大長篇に、大作家の手腕を示したが、その才能の最も圓熟した絕頂を見せてゐるのは、むしろ中篇の物語で、恐ろしい死人の復讐を描いた『アルネ氏の寶』『死の馭者』などかなり多いが、その中でも、代表的な名作と見做されてゐるのは、『地主の家の物語』で、美しい戀物語でもあるが、單にそれだけに止まらず、心靈の力を描いて、より深刻な世界を示してゐる。

獨逸の大作家トマス・マンは、特にこの作品を推賞して措かない一人だが、この作の女主人公のイングリッドが、愛

人へエデの狂氣を癒やさうと苦闘するあたり、殊にヘエデが再び正氣にかへつて、過去の自分のあさましい姿を思ひやつて、絶望のあまり地に身を投げ出して慟哭するとき、イングリッドが我慢がならなくなつて、涙を抑へながら、「ええ、それがいいんです、また氣ちがひにおなりなさい！　ほんの一寸した不安を恐れて、また狂人になりたいなんて、ほんとに男らしい事ですわね！」と叫ぶあたりの眞實性に打たれて、「婦人の理性の力と勇敢とをこんなに美しく描いたものはない」と云つてゐる。また、ヘエデの狂氣の描寫も、空虚なロマンティックな作り事ではなくして、立派に精神病學上の研究を基礎として、十分の眞實性を有つてゐると評してゐる。

この作品の魅力は、一寸說明し難い。一讀何とも云へない美しさに惹き入れられてしまふ。それは一つは、ポリッキイが云つた如く、「構想が最も巧妙に出來てゐて、『ゲスタ・ベルリング』に過剰であつた語句の上の感嘆が節約され、簡潔で」ある點にもよらうが、主として作者の豐富な空想力を濕ほしてゐる溫かいユウモア、溫かい心によるのではあるまいか。善良で、樂天的で、藝人の自尊心を有つてゐる曲藝師のブロムグレンの如きは作者の女らしい溫かい心を反映した、忘れ難い人物である。

ラゲルレフは獨創の人である。書物の世界から學ばず、直接自然と人生から、その創作の源泉を汲み出した人である。が、ただ一人、この女作家に感化を及ぼした作家があつた。それはビョルンソンである。然し、これは感化を及ぼしたといふより、むしろ本質的の類似が、共感作用を生んだと云つた方が正しいであらう。ビョルンソンの山岳小說、（若くは農民小說）の世界と、ラゲルレフの數多い田園小說の世界とを比較してみる事も興味のある事である。二人に共通する人生に對する信仰、健全な光明的な人生觀、自然の愛、ロマンティックな抒情主義等についても詳しく書いてみたいし『沼の家の娘』などに就いても言ひたいがそれは別の機會に讓る事とする。

昭和三年八月十五日（「世界文學月報」第十七號所載）

北歐二家雜感

ビョルンソンは何でもやつた人だ。ビョルンソンの競爭者であつたイブセンは戲曲と詩の外は何も書かなかつた。ビョルンソンは詩はもとより、叙事詩も書けば劇詩も書く。戲曲の外に小說を書き、小說作家として農民小說の道を開拓して、世界的名聲を獲得した。その一方では、或ひは新聞雜誌の記者として、或ひは劇場監督として活動し、更に進んでは政論家として政治評論の筆を執り、講演もするし政治演說もした。恐しく多方面な人であるが、同時に又恐しく精力的な人である。その寫眞を見ても、堂々たる偉丈夫で、熊の子の名に恥ぢない。(ビョルンソンとは熊の子の意である)

イブセンは母方から云へば獨逸人の血を傳へ、父の方からは一部分蘇格蘭の血統を傳へてゐるが、ビョルンソンは純粹の諾威人である。ビョルンソンの父は牧師であつたが、それは父の代にはじめて牧師となつたので、それまで、彼の家は代々農民であつたといふ。また、その一家は古代の王族から出てゐるといふ。ビョルンソンは國民の教育者を以て自ら任じてゐたが、それには因つて來るところがあるのである。彼の作に現はれる牧師的氣分は、牧師の子たる彼の現はれであらうが、同時に彼の描く農民の眞實性を考へる時、彼の血管に流れてゐる農民の血を思はずにはゐられない。

ラゲルレフは、ビョルンソンと異つて、小說だけしか書かない人である。『ツァハリアス・トペリウス』といふ芬蘭の童話作家の傳記を書いてゐるが、それもやはり一篇の小說として讀まれるし、彼女自身の生ひ立ちの記である『モオルバッカ』といふ回想錄も、やはり興味ゆたかな小說である。小說以外のものと云つては、わづかに、一九一四年、彼女が瑞典のアカデミイに入るとき、前任者であるアルベルト・テオドル・ゲルレルステットについてした講演と、一九二〇年おなじアカデミイでした講演とがある位のものである。一體、アカデミイ(翰林院、又は學士院)の會員に推薦せら

れると、それまでその席を占めてゐた故人に對して、頌德的な講演をしなければならない。例へば、最近平林初之輔氏の譯された佛蘭西の科學者ポアンカレの論集の中に、詩人シュリ・プリュウドンムについての大變面白い論があるが、あれなども、ポアンカレが佛蘭西のアカデミイに入つて、プリュウドンムの席をおそつたから、その功績をたたへるために講演をしたのである。

北歐人の倫理觀念の峻嚴な事には、驚かれる。南歐の作品に親しんでゐるものが、卒然北歐の作品に接すると、百花爛漫たる野邊から、いきなり斷崖絶壁の前に連れて行かれたやうな氣がするであらう。

ビョルンソンの戯曲『手套』を讀んだ人は、女主人公スワワの斷乎たる要求——男子もまた女子と同様の貞操を有しなければならぬといふ——に驚くであらう。殊に日本のやうに婦人が無自覺で、男子の奴隷となつてゐるやうな土地では、驚愕といふよりも、むしろ奇異の感が生ずる位だ。スワワの要求は、男子の本來の性質から云つて、全く無理な註文であるから、かうした要求を撤回しない以上、その婦人は結婚生活に破綻するか又ははじめから獨身で終る外はないであらう。いかに北歐といへども、それ位ゐ極端まで男女同權を主張した婦人があつたかどうかは疑問だが、少くとも、かういふ作品は、北歐人ではじめて書き得たであらう。ラゲルレフの『沼の家の娘』の女主人公は、その雇主の男と關係して、その子を生んだため、村人から排斥され、誰一人雇つてくれるものもなく、兩親にさへ出て行けがしに取扱はれてゐるが、それを見ても、その地方の人々の氣風が察せられるではないか。

昭和三年九月十五日（「世界文學月報」第十八號所載）

四大劇詩人の人物

シルレル、クライスト、ヘッベルは、獨逸の生んだ三大悲劇詩人だ。グリルパルツェルは墺太利の生んだ最大の戯曲家だ。彼等の戯曲家としての本質なり意義なりに就いては、その道の方々の高説があるであらうと思ふ。それで玆には、その人と爲りの一端を紹介してみたい。

シルレル――この名は、それだけで既に我等の胸に畏敬の感情を喚び起す。獨逸では、シルレルがあまりに國民的になり、普遍的になつた反動として、屢々不當にシルレルを貶黜する傾向がある。自然主義時代に特に甚しかつた。シルレルを最も扱下したのは、オットオ・ルウドキッヒとニイチエとだ。ニイチエは、シルレルの理想の渴仰をわらひ、眞、美、高貴等のフレエズの流布者としてシルレルを不當に蔑視したが、それには彼のソクラテスに對する憎惡と同樣に、自己叛逆的な、或る內面的な理由があつたやうに思はれる。然し誰が何と云はうとも、シルレルは大なる星だ。ゲエテ、シルレルと併稱する場合、シルレルが常により低い部分であるにしても、シルレルはゲエテに無い多くのものをもつてゐるのだ。シルレルは革命詩人だ。『群盜』は、その靑年時代の欝勃たる反抗精神を盛つてゐる。佛蘭西革命の代表的人物達が、この一篇に對する感謝の爲に、彼を佛蘭西共和國の名譽市民に擧げたのは、最もよくシルレルの大なる意義を認識したものと云はねばならない。彼等の時代にとつてのみたらず、又、我等の時代にとつても、シルレルは最も重要な詩人だ。彼は決して陳套にならないのだ。處女作『群盜』に於ける革命詩人は、その圓熟期の作品『ウイルヘルム・テル』に於て、依然として暴壓に對する燃えるが如き憎惡をもつた自由と正義の詩人、革命詩人なのだ。

クライスト――その名を口にしただけでも、悲壯な生の不諧音を聞く。三十四歲で、晚秋のワンゼエの湖畔で、人妻と情死を遂げたこの詩人の一生は、それ自身が一つの大きな悲劇である。それゆゑ、獨逸の多くの文學者は、彼をその小說や戯曲の主人公にえらんだ。その中の最も有名なものは、ポオレンツの作である。この悲劇の中のクライストは、相當に深味をもつて描かれてゐる。殊に、その相手のヘンリエッテ・フォーゲルといふ婦人との戀ならぬ戀は、一

種特別な心理的興味をそそるものである。クライストは常に自殺の考へを抱いてゐた。いつでも死と沒落とから指一本の間位しか隔つてゐなかつた。嘗て巴里で、彼の一友人が、夜彼を探して見出さなかつたとき、すぐさまモルグといつて、身許不明の死體を衆人に觀覽せしめて、知り人に見出させるために出來てゐる場所にかけつけて、自殺者の間から彼を探し出さうとした位だ。イプセンの所謂る一切か無か、それこそクライストの信條だつたと云つていい。彼は常に乾坤一擲の壯圖を夢みてゐた。一擧にして、不世出の大傑作を成さうとした。大ゲエテの額から、月桂冠を奪ひ取らうとまでも公言した。しかも、或る意味では、たしかに奪ひ取つたのだ。悲劇詩人として、ゲエテはつひにクライストに及ばないのだ。

オイレンベルクの『影繪』の中には、一八一一年十一月の或る夜、クライストの死報がワイマルに屆いた時の老キイランドとゲエテとの想像的對話があるが、その中でこの二先輩はクライストの偉大性について反對の意見を鬪はせてゐる。そして、ゲエテは云ふ迄もなくクライストを否定してゐる。彼は一生クライストを認めようとしなかつたのだ。ゲエテは天才の習癖として、自己に相剋するあたらしい創造を認めず、凡庸な典雅をのみ認めたからだ。だが、そこにクライストの偉大性があつたのだ、彼の眞の獨創性があつたのだ。

グリルパルツェル――ルッソオをのぞけば、この詩人ほど自己を苦しめた精神はないとは、これもオイレンベルクの說だ。苦痛に對する不思議な享樂慾が、自分の內心を鏡にうつして見させ、身ぶるひしてその姿から目をそらすやうに彼に强ひたのだ。嫉妬心や、虛榮心や、嘲笑癖や、虛言癖や、盜心や、淫慾や、無限の利己心やを、グリルパルツェルは自分の上に見出した。彼は自信が無かつた。自分で自分の作に滿足する事が出來なかつた。しかも又、自分でゲエテと同列に立ち得る詩人と考へる瞬間もあつた。彼の『サッフオ』を詩人バイロンが激賞したのは有名な話柄だ。

ヘッベル――獨逸戲曲史に於けるゲエテ、シルレルの黃金時代の後に來るのは、ヘッベル、ルウドキッヒの白金時代

だ。就中、ヘッベルは、その深刻な問題の取扱方に於て、大膽な思索に於て、イプセンの直接の先驅者といふべく、いかにも獨逸的な深みをもつた作家だ。その日記は、彼の内面生活の重要性を最も端的に示す。『ユウディット』を見るとメエテルリンクの『モンナ・ヷンナ』など甘く見えて仕樣がない。ヘッベル的要素は我が日本人に最も缺乏してゐるものだ。我々がヘッベルに學ばねばならぬ點は、無限に多いのだ。

昭和四年十二月二十五日(「世界文學月報」第二十一號所載)

ビョルンソンの山岳小説

ノールウェーは、世界的な大作家を可なり澤山生んでゐる。中で最も高い位置にあるのは、イプセンとビョルンソンであるが、私は特にビョルンソンを自分の愛好の作家の一人に數へてゐる。ビョルンソンは、隨分多方面な作家で、戯曲の方でも傑作と云はるるものも可なりあるやうだが、その方ではやはりイプセンには及ばないやうに思ふ。私がビョルンソンを愛するのはその山岳小説のためである。

ビョルンソンの山岳小説は、吉江孤雁氏などによつてかなり早くから我國に紹介せられたが、山國の信州に生れられた吉江氏などが、ノールウェーの山地を舞臺にしたビョルンソンの小説には取りわけ共感せらるるところの多かつたらうことは、容易に想像せられる。

山岳小説は同時に農民小説である。又獨逸で熾んであつたかの郷土藝術でもある。スカンヂナヴヤには殊に此の種の作品が多く、ラゲルレーフだとか、ネクセエだとか、其他重要な作家の作品も多いが、それらの先驅をなしたものは矢張り、ビョルンソンなどであると思ふ。ビョルンソンには後年、信仰問題を取扱つた作品もあるが、私は矢張りそ

の初期の山岳小說『アルネ』や、『ジンネーヴ・ゾルバッケン』なぞを、その傑作だと思ふ。ノールウェーの山の間に生れた一少年アルネが、遠い南の國を慕ふ心持、だんだん愛に眼ざめて一人の少女を慕ふやうになる經過、それらは遠い外國の作だと思はれないくらゐ、我國の農村の靑年や少年の、境遇や心持を想はせるものがある。農村の子女が『アルネ』を讀んだら、外國文學の飜譯だとは思へないくらゐ共鳴するに違ひない。

私の今の小說上の好みは、スタンダアルだとか、ドストエフスキイだとかいふ心理小說に傾いてゐる。人間の心底の黑い塊を、痛快に抉り出したやうな作品を好んで讀む。が、さうした深刻さのみが、尊いとは思はれない。ビョルンソンのやうな、健全で明るい、朗らかな作品も亦好ましい。殊にビョルンソンは專門的詩人ではなかつたけれど（もつとも詩集も一卷か二卷かある筈だ）『アルネ』などには、全體に何とも云へないスヰートた抒情味が漲つてゐて、まるで長い敍事體の民謠でも讀むやうな感じがする。そんなに全體が著るしく詩的であるばかりでなくその中に無數に挿まれてゐる抒情詩が、素朴で眞率で何とも云へず愛らしい。如何にも人の世の汚れを知らぬ、純潔な山鄕の少年少女が、ひとりでにうたひ出した歌だといふ氣がする。

昭和三年七月十五日（「世界文學月報」第十六號所載）

近代詩概觀

歐羅巴の近代詩は、百花その姸を競ふ一大花園にも似てゐる。これを僅々數葉のうちに說き盡すことは、世にも至難の業である。時に於て二世紀にまたがり、國に於て十數ケ國に及ぶ。その題目だけでも一册の著書をなすに十分である。それゆゑ、玆には一瞬時の鳥瞰圖を與へ、その大要の槪念を與へ得るにすぎないのである。

近代文學の中心點をかたちづくり、常に新流派、新詩潮を洴出するものは、佛蘭西である。ルッソオと佛蘭西革命とは、獨のゲエテ、シルレルに影響し、英にバイロン、シェリイを起たしめたが、その本國に於て浪漫派詩人の一群を生み出した。優婉なるラマルティーヌ、豪宏にして豐滿なるユウゴオ、輕快にして哀切なるミユッセ、沈痛にして深刻なるヴィニイ、これに華麗鮮明なるゴオティエ。ここに浪漫派の大旆は揭げられ、次いで精嚴なるルコント・ド・リイルを盟主とするパルナッシアン、所謂る高踏派出で、再轉して象徵派の出現となる。

佛蘭西詩の特長は、明晰と能辯とにある。修辭の妙を盡して、一切を說き、一切を盡さうとする。ユウゴオの詩の如き、その代表的のものである。詩に於ける不可說の境地はその關するところでないかの如く見える。しかもこの國に、暗示と音樂との象徵主義の詩が生れたのは意味深い現象である。

近代詩人中の覇者ともいふべき『惡の華』の詩人ボオドレエルに、近代主義と象徵主義との道は拓かれ、マラルメ出でて、象徵詩の理論を立て、天眞純情の詩人ヴェルレエヌ、天才的の少年詩人ランボオに、佛蘭西詩はその羨むべき花冠を戴くを得た。別に佛蘭西のハイネと云はれるラフォルグあり、エレディア、サマン、レニエあり。歌謠者ポオル・フォール、哲人グウルモン、加特力詩人ジャンム、クロオデル。この最後の人は、佛蘭西大使として我國にあつたクロオデル其人で、近代の大詩人と云はれる。次いで一般の讃仰の的となつてゐるのは、純粹知性の詩人ヴレリイで、日本にも來遊した篤實なるヴィルドラック、ジャン・コクトオの才氣もよく佛蘭西氣質を發揮したものと評すべきであらう。

白耳義のマアテルリンクは象徵詩人として完成し、ヴェルアーランは更に社會主義の詩人に展開した。英吉利の詩は、我國では最も多く讀まれ、最もよく知られてゐる。やや古きブレイクは、神祕主義の畫家詩人として、一部の人の最も尊崇するところであるが、廣く讀まれたのは自然詩人ワアヅワアスである。バイロン、シェリイ、キイツ、この天才的な三詩人は、英吉利の大なる誇りでなければならぬ。バイロンの名聲は世界を風靡し、ゲエテの後繼者を以て

目せられた。バイロンは所謂玄人仲間から屢々貶黜されるに拘はらず、その巨影はつひに抹殺するを得ぬのである。纖細な技巧美を鑑賞する者も、つひにはバイロンに還る日があるであらう。バイロンのより靈的な兄弟シェリイは、伊太利のレオパルディと相並んで、近代の最も高貴な詩人である。比較的閑却せられてゐる想像的對話の詩人ランダアは、今後再び發見せらるべき詩人の一人である。穩健平明なテニスンと、雄渾深邃なるブラウニングとは相對立するが、ブラウニングの偉大は、日を追うて發揚せられる。ブラウニング夫人と、クリスティナ・ロウゼッテイとは、英國の羨むべき女詩人の雙璧である。クリスティナの兄ダンテ・ゲエブリエル・ロウゼッテイに於て、英吉利は第二の畫家詩人を得た。

スキンバアンこそ疑ひもなく近英最大の詩人、しかもまだ我國には多く譯出せられなかつた人である。愛蘭は近英文壇に大なる聲を寄與したが、まづ『サロメ』の詩人ワイルド。次いで、イエエツ、エイ・イー等の、愛蘭文學復興運動の諸詩人がある。小說家として聞えるハアデイは詩人としてもまた遜色なき人、詩人より出て詩人に還つた人である。神祕主義の詩人フランシス・トムスン、また特視せらるべき詩人である。

米國は、ポオとホヰットマンとによつて、詩の世界に於ける市民權を獲得した。この二詩人は歐羅巴にも比類少き天才者である。ロングフェロウ、ブライヤント等の先進詩人も、これに比するとき頗る影薄く見える。現米詩壇では、フレッチャア、マスタアズ、サンドバアク等最も聞える。サンドバアク等はプロレタリア詩人として、注目すべき人だ。

獨逸詩は、ゲエテ、シルレルの二大家によつて近代の幕を開く。ゲエテは詩の王者、一言を以て盡し難いことこれ以上の人はなからう。ヘルデルリンとノヴリスとは、一は四十年を狂氣に送り、一は夭折したが、共に浪漫主義を代表すべき詩人。ウーラント、アイヒェンドルフに、獨逸的浪漫精神はそのよき歌謠者を見出し、リュッケルト、プラアテンに、東方的詩形の收穫を見た。

ハイネは、然し疑ひもなく、獨逸詩人中最も世界的にポピュラアな詩人である。彼の多面性、複雜性は、常に彼を誤解の波の中に投ずる。昨は感傷的戀愛詩人、今はプロレタリア詩人。共に一面觀にすぎぬ。レナウはその天禀に於てハイネに遜らず、メリケは當時の獨逸詩人中最も近代的の敏感を示し、象徴的な境地にも至つてゐる。

リリエンクロオンより獨逸の現代詩ははじまると云はれる。が、詩人としてのニイチェの影響こそ、更に決定的のものであつた。デエメルの如き、最もその影響を多く示してゐる。デエメルと對立する詩人に、リルケとゲオルゲとがある。リルケは茅野蕭々氏の名譯によつて、我國にも既に知られてゐるが、ゲオルゲは今回始めて譯出せられるのである。この藝術至上主義の詩人は、現代にもなほ或る意味をもつ。

墺太利のホフマンスタアルは、象徴派詩人であるが、ボエミア出のウェルフェルは表現派詩人として、最も新しい詩體を建てた。

露西亞詩は、プウシキンにはじまると云つてもいい。プウシキンの大は、我々には未だ十分に理解されてゐないが、米川氏の名譯はその理解を與へてくれるであらうと思ふ。西歐文化の感化を受けつつも、よく露西亞魂を發揮したこの詩人から、トルストイも、ドストエフスキイも出たと云はれるのだ。レルモントフは、プウシキンと同樣決闘によつて死んだ天才詩人、バラトゥインスキイは厭世の詩人、チュッチェフは深遠の詩人、コリツォフは民衆の詩人。然し、ネクラアソフこそ、眞に偉大なる民衆詩人であつた。我々は未だネクラアソフに學ぶべきものの多くをもつと思ふ。

メレジコフスキイや、その夫人のギッピウスや、バリモント、ソログウプ等の高踏詩人、象徴詩人の時期を經て、革命の露西亞、ボルシェヴィキの露西亞が來る。二つの時期にまたがるのは、ブロオクだ。『十二』の詩人ブロオク、彼は沒個性、集團主義の時代の詩人たり得ずして、空しく斃れた。農民の中から出た少壯のエセエニン、またつひにこの鐵と規則の時代に合ひえずして、自ら射て斃れた。未來派の勇敢なる叫びの詩人マヤコフスキイすらも、そのおなじ

道を踏んだ。これは彼等の個性が新時代に合ひえない故か、又は總じて彼等が「詩人」であつたが故か、考ふべき事ではなからうか。

南歐伊太利の近代の大詩人はレオパルディとカルドゥッチとだ。前者は無類の悲觀主義哲學の詩人、後者は雄健無比の好戰の詩人。アダ・ネグリはプロレタリアの詩人。西班牙のダリオ、マチヤード、ヒメネス、又現代詩壇に何物かを齎すだらう。

北歐諸國には詩人が多いが作家として知られるヤコブセン、イプセン、ビョルンソン、ストリンドベリイ等また詩人としても大いに論ずべきところをもつ。和蘭、波蘭、匈牙利、チエッコ・スロヴキア其他の中歐諸國にもすぐれた詩人が多いが、小國に生れた不幸としてとかく閑却せられがちである。和蘭のクロオス、ヴェルヴェイは象徴派以後の近代詩人、匈牙利のペテフィはプウシキン、レルモントフに比すべき大詩人として知る値がある。

昭和五年五月二十七日(「世界文學月報」第三十七號所載)

未知の四詩人

今度の『近代詩人集』では、今迄紹介せられなかつた詩人か、非常に多く紹介される。この未知の詩人中――未知と云つてももとより我國に於て未だ知られない意味である。名は既に聞えてゐても、その作品の未だ移植されてゐない詩人の意味である。――就中、私の興味を有する四人の詩人がある。第一が佛蘭西のヴィニイ、その名は既に十分に一部人士間に傳へられながら、その作品の片鱗も、今迄譯出されない事、この詩人の如きはない。私はこの詩人に惹付けられるところ多いに拘はらず、自ら佛語に遠いので、獨逸譯で辛うじてその數篇を見るを得たに過ぎない。獨逸

ですら、ミュッセの全集あつて、この詩人の集の譯ある事を寡聞にして未だ知らない。我國では上田敏博士すら曾て手を着けられなかつた。それが、ヴィニイのストイシズム、傲岸な個人主義、厭世的な世界觀を表白した詩篇が、內藤濯氏の名譯で移植されるとは、何たる喜びだらう。

第二に獨逸のゲオルゲが茅野蕭々氏の手ではじめて譯出せられるのも喜びだ。若し私などの手にかかつたならば、珠玉を瓦礫に變へてしまつたに違ひないが、茅野氏の名手を借りえたのは、ゲオルゲの幸福である。私ははじめこの詩人には親しみがなかつたが、年を經てやうやくその詩の氣息に觸れる事が出來るやうになつた。私が『靈魂の秋』といふ詩集を出した當時は、未だゲオルゲを知らず、この詩人に『靈魂の歲』なる詩集ある事を知らなかつたのだ。

第三の未知の詩人は露西亞のネクラアソフだ。ネクラアソフの名は、ドストエフスキイ、ツルゲエネフ等に關聯して屢々傳へられ、菊池仁康氏等の手で、その詩の一部の譯出せられたものはあるが、この眞の意味での民衆の詩人、『何人か露西亞にて幸福なる?』の作者、私の昔から好きだつた詩人の眞面目が、米川正夫氏の練達の筆で譯出されるのも喜ばしい。

第四は伊太利のパスコリ。パスカルと間違へられる位、この詩人は日本には知られてゐないが、いろいろな點で私は共感をもつ。獨逸では早くポオル・ハイゼ、ペンノオ・ガイゲル等によつて傳へられてゐたが、今や有島生馬氏の巧妙な直接譯でその一部分を知るを得る事になつたのだ。これら私の愛する詩人が、揃ひも揃つて立派な譯者の手で移植されるのだから、それだけでも此の『近代詩人集』一卷は貴重だ。

昭和五年五月二十七日(「世界文學月報」第三十七號所載)

創作家の苦しみ

どんなつまらない作品でも、それが纏まつた形になつて、世に現れるまでには、どれだけの人知れぬ苦心が籠められてゐるか知れない。一つの小說の著想を得てから、それを完成した作品に纏め上げるまでには、いろいろな手順が要る。そしてその執筆の方法も、人每にそれぞれ違つてゐる。ところでさうしたすぐれた作家の創作の手順、又は方法を知ることは、これから小說を書かうとするものには、大變いい參考になるだらうと思ふ。それで、泰西近代の名家が、どんな風にして小說を書いてゐるか、その仕事振りについて少し書いて見たいと思ふ。

まづ、創作家が創作に從ふにあたつて、一ばん必要なものは何であらうかといふ事を考へてみる。筆を執るにあたつて、一ばん必要なものは靈感である、卽ちインスピレエションによらなければ制作を生む事は出來ないといふ說は、古來專ら行はれてゐた。けれども、制作、とりわけ長大な長篇小說に至つては、單に感激や才能ばかりでは十分でない、不屈の辛勞と勤勉がなくては、決して完成することは出來ないのである。カントが「文學上の制作は、靈感や精神上の自由なる高揚の結果といふよりは、むしろ不斷の營々たる勞苦の生むものである。」と言つたのは、至言である、

もつとも作家がある著想を得る場合には、大抵の場合、作家が著想に到るといふより、著想の方でおのづと作者の心に飛び込んで行くと云つた方がよいかも知れぬ。だが、一旦、著想を得てから、それを表現し、具體化して行くにあたつては、一度くはへたら放さぬといふ、あのブルドックみたやうな執着力をもつて、一歩々々勞作の道を踏んで行くより外はないのである。ただ、その勞苦を積むにあたつて、人それぞれその遣り方が違ふ。第一、非常に遲筆な人もあるし、また非常に筆の速い人もある。ゲエテの如きは、異常に速い方であつた。ゲエテの靑年時代の如きは、眠か

ら醒めた時にもう一篇の詩が出來上つてゐるので、それを直ぐ紙に書いてしまはないと、後で思ひ出せないといふ有様で、全く靈感の所産であつたらしいが、後年になると、詩でも隨分苦心はした。『ファウスト』の如きは、殆んど一生かかつてゐる。が、それもその頭の中に醱酵するのを待つ間が長かつたので、一旦書き始めるとなると、急速度に書いた。ゲエテは、やはり靈感の人で、現に、その『エルテルの悲しみ』や『ヘルマンとドロテア』の如きは、僅か四週間乃至六週間で完成したものである。

後年のゲエテは、自ら執筆しないで、專ら口授した。『ヰルヘルム・マイステルの遍歴時代』を筆記したシュウバルトは、高齢になつても毫も衰へないゲエテの精神力の明晰と確實とに驚嘆してゐる。ゲエテはまるで印刷せられた書物でも讀むやうに、すらすらと淀みなく口授したのである。其上、時々ことわりなしに入つて來たりする訪問客に邪魔されても、客が去つてしまふと、何事もなかつたやうに、直ぐその續きを口授し續けたといふ。その上その口授の際に、何の覺え書やノオトのやうなものを必要としない事に、シュウバルトは大に驚いてゐる。そして、その驚きをゲエテの永年の友マイヤアに告げると、マイヤアは、それをさも當然の事のやうに言ひ捨てて、曾つてイエナからワイマルへ行く馬車の中で、ゲエテが彼に『親和力』の全體を詳細に、殆んどその印刷版でも讀むやうに物語つて聞かせた事を、話したといふ。

然し、ゲエテなどはむしろ例外で、大抵の作家は、もつと經營慘澹の苦を嘗めないではゐないのだ、殊に、近代の作家ほど、それが甚だしい。その極端な例はフロオベルであるが、フロオベルに限らず、ゾラでも、ドオデエでも、所謂ナチュラリズムの作家はみな澤山のノオトをつくつたり、いろいろな準備をする。英吉利のディッケンスのやうな、一時代前の作家でも、さうなのである。

ディッケンスは、亦、非常に勤勉な勞作者であつて、ある一つの作品の材料を蒐集するのに、隨分長い年月をかかつ

た。彼の晩年の作 "mudfog Papers" の如きは、三十年前に書き留めて置いた材料を本にして生れたものだといふ。若しディッケンスは、その蒐集した材料に、何か新しいものを加へないでは、殆んど一日も過ごさなかつたといふ位だ。若し、街路とか、交際場裡とかで、何か珍らしい人物にでも出會ふと、必ず、その奇妙な珍らしい點を書きとめておいた。また、異常な名前を聞いたり、街上で何か變つた光景を見たり、不圖面白い話を小耳に挾んだりすると、その度にちやんとノオトブックに書き留めておくといふ程、勤勉でもあり、注意深くもあつた。かうして四十年間もノオトを積み上げたのだから、すばらしいものである。それからもう一つ、ディッケンスの羨むべき癖は、何か一つの作品にとりかかるとすつかり書齋の中に閉ぢ籠つて、懸命に書き續けるといふ癖である。そして、一つの作品が出來上つた時には、作者自身はすつかり痩せて、病人のやうに蒼くなつてゐたといふ。これも極端だが、これ位の熱中力があつたからこそ、あんな大部の作品が澤山書けたわけである。

ノオトをとる點では、エミイル・ゾラが最も激しい。自ら實驗小說を唱道しただけに、ゾラの方法は頗る科學的である。彼は作品の主要人物が確定すると、まづその環境を研究する。それから、個々の人物の性格を、その細目に亙つてノオトにとる。それから、今度は、その環境を研究するために、その小說の舞臺に選んだ土地に出かけて、數週間乃至數ヶ月滯在して、詳細に研究する。その際、ノオトの一山をこしらへて、場面のスケッチをしたり、會話の斷片を作つたりする。次いで、その描かうとする社會にゐる人物に會つて、いろいろその話を聞いたり、その方面の事を書いた文書を涉獵する。それらの準備がすんで、始めて本式に執筆に取りかかるのであるが、さうなると、單にノオトを利用するだけではすまず、葛藤を組立てなければならないが、それにもゾラは空想力よりも推理力を重んじた。彼の取扱ふ人物の性格は、初めから確定してゐて、彼はかう、此はかうと、その人物の行動を定めるところは、文學者といふより、豫審判事のやうな態度である。がその事件の發展の連鎖を見出すまでに、三四日を要することも

稀れではなかつた、が、かうして一つの章を書き始める前に、その章全體の嚴密な豫定をこらしておくのだ。そしてそれから、毎日規則正しく三頁宛書いて行く。感興などといふものを、ゾラは認めないのだ。凡てが機械的である、飽くまで科學的である。

ゾラは毎日、四時間宛、執筆した。そして毎年きまつて大卷の作を一册宛、出版した。その研究を終り、一々の章を構成し、章と章との組み合せがすむと、彼は一章宛、印刷所に送るといふ風にする。だから、彼が「完」といふ字を書いた時には、もう殆んど全作の印刷が組み上つてゐるわけである。が、それですむのではない、それからの校正が一仕事なのだ。校正刷を見て、ウンと訂正し、改竄する。校正刷で推敲したバルザックほどひどくはなくとも、それに近い苦心をする、だからゾラは書き下しの時の草稿は、無價値の反古として、捨てて顧みなかつた。

ゾラの執筆法については、彼自身書いてゐるところが、興味があるから、煩を避けないで譯載してみる。「私は一卷の作品の著想を得ると、まづ、大體物語の筋の略記をする。それも手に筆を持つてやる、書きつつでないと、想が湧かないからである。私はぼんやりすわつてゐては、考へる事が出來ないのである。それで、自分自身に話すやうな風にして書いて行く、人物なり場面なり挿話なりを究めるこのスケッチは自分にあてた一種の雜談的な手紙のやうなものである。それがすむと、人物の表をつくり、極く詳細な場面の記述をやり、今度はそれぞれの人物の個々の研究をし、舞臺を調べに出る。“La Curée”のためには、馬車の研究に四日間費し、澤山の一流の馬車製造業者に質問をした。サカッドのホテルのためには、バルク・モンソオのホテルの外に數時間をすごした。ルネの溫室には、ジャルダン・ド・プラントの溫室をその儘描き、『アベ・ムレの罪』のためには、宗敎書類をいやといふほど讀んだ外に、セント・マリイの小寺院の法養に度々出かけてみた……。」

ゾラの未亡人によつて、巴里の國民圖書館に委托せられたゾラの遺稿の中には、彼のかうした創作の手順を知るの

に便利なノオトが澤山ある。その『ラッソンモアル』（居酒屋）の研究に用つたノオトをみると、二百三十三頁の大版のノオトが次のやうに用つてある。一、一般的計畫（一頁より三頁迄）二、詳細なる計畫（四頁より九二頁）三、酒精中毒の研究のノオト（九三頁より九九頁）四、市區、街路、料理屋、舞踏場のノオト（一〇〇頁―一一六頁）五、人物（一一七頁―一三八頁）六、デニス・ブウロオの "Le Sublime" 及びその語彙の略記（一三九頁―一五五頁）七、スケッチ（一五六頁―一七四頁）八、洗濯女、給仕女、日雇人、鎖製造人のノオト一七五頁―一九一頁）九、各種の覺え書、及び新聞の切抜（一九二頁―二二〇頁）と云つた工合である。

ゾラはこんな風に、頗る機械的な、科學的方法をとつたけれど、ゾラの觀察は自然科學者のそれではなく、彼の證券(ドキュメント)も、學者のそれでは決してない。若し單に學究的態度で、外面的な觀察や、新聞記事などにのみよつて材料を蒐集したばかりなら、いくら材料は豐富でも、皮相的なものになつたであらう。が、ゾラはマッシスの云つたやうに「觀察したよりも、より多く創出したのだ。」彼は自分の意識してゐるより以上にロマンティシストであつたのである。

ゴンクウル兄弟も、ノオトをこしらへた。が、彼等はまた特別の執筆法をとつた。即ち、彼等は二人共同で、一つの作品の腹案を立て、主要な場面をとりきめた。それから、二人でおなじ机にかけて、その二人で定めた章を、別々に書いて行くのだ。書き終へると、互ひに自分の書いた分を讀み上げて、二つのうちのいい方を選ぶか、二つの中のいい個所だけを選ぶかして、その二つの草稿を一つにしてしまふ。けれども、その一方の草稿を全然犠牲に供してしまふ場合でも、その中の微細な點で長所を拾つて、一方の足らぬ點を補ふといふ風にしてゐたから、結局どの頁でも、兄弟の合作と云ふ事が出來た。その上、彼等はその筆蹟さへ同一であつたほどに、互ひによく調和し、よく似通つてゐたのである。一體、佛蘭西には不思議と兄弟共同で書く作家が多い、（時には別々に書いてゐるけれど）ゴンクウルの外にも、ロスニイ兄弟、マルグリット兄弟などその一例である。

弟のジュウルが死んでからは、兄のエドモン・ド・ゴンクウルは、自分一人で創作を出したが、彼が一人でやつた遣り方は一つの新しい作品の腹案を立てると、まづ、最も主要な場面から極く簡單に書いて行く、かうして澤山の場面が出來上ると、その順序にはかまはないで、或ひはこの場面、或ひはかの場面といふ風に、その時の氣分にふさはしい分から、仕上げて行く。それから最後に愈々本式に纒める時に、作品の冒頭と結末とを完成して、その二つの間に、中間の章を、それぞれ適當の場所に投入するのである。そして、この勞作の間、彼は一日部屋に閉ぢ籠つて、その書齋を歩き廻る。通例、彼が執筆の氣分になるまでには、何時間もかかるので、大抵、夕方になつて、はじめて紙に書き下せるやうに考へが發展して行くのである。彼は每年、夏の二月だけは休養して、殘りの十月を働く事に定めてゐて、その間に小說を書いたり、歷史上の材料を集めたりした。（ゴンクウルは歷史家でもある）

ゴンクウルは大版の紙を用つたが、面白い事には、その歷史的の著作や批評論文などを書く時にに鐵ペンをつかひ、その小說を書く時に限つて、鵞ペンをつかつて書いた。モオパッサンも鵞ペンで書いた。が、ゴンクウルがその原稿を大切に保存したのに反して、モオパッサンは印刷さへすめば、その原稿は欲しがる友人にみなやつてしまつた。

アルフォンス・ドオデエも、自然派の作家の例に洩れず、盛んにスケッチをしたり、ノオトをこしらへたものだ。が、彼はゾラとは違つて、非常に感興に乘じて書いた方である。彼ははじめ多年、その日の觀察した事や經驗したところを、丹念に記錄しておいた。そして後年、そのノオトを十分に利用した。彼の遣り方は、やはりその主題に關聯したものについて、十分準備しておいてからかかる方であつたが、最初の落筆にあたつては、その考への逃げてしまふのを恐れるやうに、大急ぎで書いた。それから書き終ると、そのテキストの修正にかかる、かうして二度も三度も淸書して、もう十分といふところまで推敲するのだ。

ドオデエは一つの長篇を完成するまでに、大抵一年半位かかつた。

『カルメン』の作者のプロスペエ・メリメエは、また特別の苦心をした人で、その作も長篇は『コロンバ』位のもので（それも五百枚とない）他はみな珠玉のやうな短篇であるが、その苦心の程度は、長篇の『コロンバ』でさへ、もう印刷にかけてもいいといふ迄に十七度淨書した事でも察せられるであらう。

筆の速い方で有名な人には、佛蘭西では、ギクトル・ユウゴオがある。ユウゴオの達筆は驚くべきもので、恐らく多作で聞えてゐるスコットに匹敵するだらう。然し、スコットが筆記者が追ひつけないほど早く口授してゐながら、その書かれた原稿を修正する事さへあまりなかつたのに反してユウゴオは、あとで隨分訂正する方であつた。彼は特別自家用の原稿紙をこしらへてゐたが、それは隨分大版のものだつた。

ユウゴオは豐富な空想力をもつてもゐたし、達筆な人でもあつたが、隨分苦心をする方で、その殘つてゐる草稿をみると、彼の苦心のあとが歷々としてあらはれてゐるといふ。ユウゴオは、何か落想が頭に浮ぶと、そこらにあり合せの紙に、直ぐ書きとめておく習慣があつた。夜分ですら、何か思ひ浮ぶ事があると、直ぐ書きつけておくので、朝になつてみると彼のベットのまはりは紙きれだらけだといふ事も珍らしくない事だつたといふ。

ユウゴオの精力絶倫な事を證明するいい例は、彼が『ミゼラブル』を書いた時の事である。あの尨大な作品を、彼は片つぱしから印刷にまはして、一方にその前の方の校正刷を見ながら、どんどん先きを書いて行つた、何しろひどい精力に違ひない。然し精力絶倫の點ではバルザックも、ユウゴオに決して劣るものでない。バルザックは、そんなに筆の速い方ではなかつたが、大部の小說を百卷も書いた精力は驚くべきものがある。彼は大版の紙に、まづその腹案の筋を略記して、それにあとからあとからと書き足して行くといふやり方をとつた。原稿を印刷所へまはすのは、他の作家にとつては、作品の終末であつても、バルザックにとつてはほんの端緒にすぎないので、古來、印刷屋泣かせの文學者は、バルザックにとどめをさすと云つていい。何しろ校正刷で推敲をし、改作をし、補足するのだから、たまつた

ものではない。だから、バルザックの原稿だといふと、印刷屋がふるへ上つたのも無理はない。バルザックの原稿料の一半は、印刷費に取られてしまつたといふのは、少しも誇張ではないのである。

バルザックは晝間寢て、夜働いた。僧服のやうなガウンを着込んで（それはロダンの彫刻によつて不朽にされてゐる）、蠟燭の光で書いた、のちには口授した。そして、バルザックは單に小說を書いたばかりでなく、自己の書いた作品の中に生活してゐたと云つていい。彼は自分の書いた人物の事を話すこと、あだかも現實の實在の人物の如くであつた。ある時、その友人のジュウル・サンドオが、彼の病める妹の事を彼に話した時にバルザックは暫く傾聽してゐたが、やがて、「成程、それやよかつた、だが、今度は現實にかへつて、ユウゼニイ・グランデ（彼の作品、並びにその女主人公の名）の事を話さうぢやないか」と云つた。又、例へば彼の作品の中に擧げられてゐる土地へ旅する時なども、「コルモン孃（彼の作中の人物の名）の住んでゐたアランソンに旅をするよ」などと云つた。バルザック位、この作中の人物に愛着したものはない。同じ一つの人物が、この作にも現はれ、あの作にも現はれてゐるといつた風だ。

一吟双淚流る底の苦心をした人には、何と云つてもフロオベルの一事一語主義と、その苦作とはあまりに有名だから、ここに擧げるまでもなからうと思ふが、彼のすぐれた短篇『單純な心』の結果に、一寸鸚鵡の事が出てゐる。その數行を書くために、鸚鵡に關する十何册の本を讀んだ事だけでも、その一班は分るだらう。また、一々その文章を高聲で讀み上げて、音調に注意した點も、フロオベルの特色の一つであらう。

『クオ・ヴヂス』の作者として有名な波蘭のシェンキイキッチは、これまた、特殊の遣り方を示してゐる。彼にあつては、その作品の案を立ててから、それを書き上げるまでに、隨分長い期間を置く。ある新しい作品の著想が彼の頭に浮んでからも、それが書き下されるまでには、通例何年か間を置くのである。その間、彼は、それが歷史小說ででもあれば、その時代を硏究したり材料を蒐集したり、當時の文獻上の遺物を涉獵したりする。そして、その全體が、少くと

も大體の輪廓だけでも、その頭に明確に浮び上るに至つて、はじめて筆を執るのだ。そしてやはり、最初は　その主要な場面、謂はばその作品の頂點ともいふべき部分、彼の心をまづ魅し去つたその部分の確實化に、その精鋭な空想力と、清鮮な創造力とを用ゐる。それからのちに、はじめて一章又一章と本式の執筆に取りかかるのである。

シェンキイキッチは、自身の表現に永遠に滿足しない底の作家の一人で、一旦書き終つた章をも、新たにまた推敲をし、際限なく訂正の筆を加へる。だから、シェンキイキッチの作品が、定期刊行物、とりわけ新聞に連載さる場合は、それこそ大騷ぎである。編輯者は絶對絶命といふ程に弱らされてしまふ。ゾラがやつたやうな規則正しい執筆法は、毎日一定の時間必ず執筆して、必ず一定の枚數だけ書くといふやり方は、シェンキイキッチの性格の堪へ得ないところなのだ。しかも新聞小説といふものは、日本でも勿論さうだが、このゾラ式執筆法が出來なければ、書けないものである。休載又休載では、編輯者も讀者も弱つてしまふ。ところが、シェンキイキッチは、感興が熟するまで、辛抱强く待つてゐる方なので、創作中に、中途で長い間執筆を中絶して、讀者を焦らし切つてしまふ事が屢々なのである。かうして、かの『クオ・ヴヂス』の場合などでも、物語が波瀾重疊、緊張の絶頂に達した時に、プツリと中絶してしまつて、中絶のまま何ヶ月も經過して、讀者を待ち遠しさに弱らせてしまつたさうである。また、『パン・ウオロデイヨウスキ』の第二卷と第三卷との間にも、二三年讀者は待たされたといふ事だ。

一流の人ではないが、その一種獨特な執筆法のために興味のあるのは、英國のホオル・ケエンである。ケエンは　まづ最初に一つの根本思想をつかんでくる、そしてその上に事件を組立てるのだが、彼の場合は大抵、題材は近代の生活から取つてくる。そこで、例へば、近代の婦人問題を取扱ふとする。と、その全體のミリユウの研究からして、おのづと一個の主人公が現出する、そしてそのまはりに、他の副人物の群れが出てくる。それらの人物の特徴を目安において、それぞれの行動が、彼の心に形づくられてくると、彼はその作品の最初の書きおろしをやる。全速力で、そ

の藝術的の様式の完備などといふ事には全く顧慮しないで、その頭の中の素材を、速記者に一瀉千里の勢ひで口授する。それは全くその頭腦の中に成長し擴大する想念や場面の重荷から身を脱れようとするやうな勢ひなのだ。こんな風にして、三日間に無慮三萬語を口授し、四日間に、はやもう全作品の最初の草稿をこしらへ上げる。これは然しほんの粗雜なスケッチにすぎないので、これが更にタイプライタアできれいに淨書される、それも十分餘白を取り行間をあけて、訂正に都合よく淨書されると、今度は第二の勞作が始まる。今度は、その題材と環境との細目に亙つた研究で、若し主人公が勞働運動の指導者であるとすれば、ケエンは社會主義者の知人を訪ねたり、又、勞働問題に關する文書を出來るだけ澤山讀む。そして必要と思はれる事は、熱心にノオトにとる。彼がその有名な小說『永遠の都』(羅馬のこと)を書いた時の如きは、羅馬法王から、その私室に立入る許可を得て、その部屋々々のあらゆる物を、些細な器具にいたるまで、詳細に描寫した。彼の目的は、その作中の人物の周圍を、ホワイトホオルコオトの彼自身の書齋同樣に、詳細に知悉するにあるので、恐ろしい程の材料を積み上げて、その材料を二度目の勞作の折りに、遺憾なく利用して、全體の本筋の上に無數のデテエルを加へて、人生の多彩多樣な情調を髣髴せしめようといふのである。そこで、かうした準備が出來て、はじめて本式の執筆がはじまるわけだ。そして、この場合には、以前とちがつて、ケエンは口授でなく、自ら筆を執つて書き始める、一章又一章、一日又一日と。一つの適當な言葉を得る迄は、二三時間も熟考するといふ風にして。作品が完成すると、それは活版所へ送り出すまへに、もう一度讀み返して修正する。これがホオル・ケエン式執筆法なのである。

　これも一流の人ではないが、一寸奇抜だから擧げてみるが、獨逸のエミイル・ブラッハフオーゲルは面白い事をやつた。彼はある作品の想を得ると、その舞臺にとる土地の地圖又は眺望圖を書いて、その中に、城廓だとか、私宅だとかを、水色であらはす。そしてその地圖を書齋の壁に張りつける。それから今度は主要人物を繪に書いて、それを切

拔いて、小さな臺座の上に立てて、玩具の人形のやうに、机の上を進軍させるのだ。それから、はじめて筆を執る。これは我が曲亭馬琴の遣り方を想はせる。それで、作者の頭にそのイメエジを明確ならしめる効果はあるとしても、事件本位の通俗作家は問はず、近代の心理小說を志すものには極めて外面的な、そして子供らしい事にしか思はれない。

ツルゲエネフの如きは、その作中の人物の性格に親しまんがために、例へば『父の子』のバザロフを描かんがためには、自らバザロフの氣持になつて、『バザロフの日記』をつけた。この內面的準備こそ必要である。ノオトをとる事は、近代の長篇小說を書くには、殆んど絕對的に必要な事のやうに思はれる。佛蘭西の鄉土藝術の作家、かの『死ぬる土』の作家であるルネ・バザンの如きは、「ノオトなしには、すぐれた寫實小說を書く事は不可能である」と云つてゐる位だ。

また、推敲といふ事も、スコット時代の事件本位の小說なら知らず、近代の心理小說になるほど、ますます必要になつてくる。人間の心理は最も複雜で、いかやうにも考へ得られ、解釋し得られるからだ。この上はもう行けないといふところから、ドストエフスキイなどは、どんどんその奧へ入り込んでゐる。もつともドストエフスキイは推敲彫琢の人でない事は人みな知るところだが、これにはドストエフスキイの稀代の天才と、一種病的な精神力と、今一つは、その頭の中での長い問の準備とを考へて見なければならぬ。そこで、我々平凡なものは、何よりも心理的でなければならぬ近代の小說の道を進んで行かうとするに當つては、熟慮にも熟慮を要し、推究の上にも推究を費さねばならぬ事が、如上の例でも十分知れたであらうと思ふ。

大正十二年五月(「文章俱樂部」所載)

詩の作り方

序

詩の聲を聽き取ることのないものは
たとへどんな人にしても野蠻人だ。

ギヨオテはその詩の中にかう書いた。藝術を——詩を思ふ心ほど尊いものはない。詩を愛する心は、眞を求める心である。詩を愛することを知つてはじめて我々はこの世に生れて來た甲斐がある。詩はすべてのものを美しくする。詩を愛する人は、心の中に、かの高山樗牛の所謂美的生活を營む事が出來る。そしてかうした内部の美しい生活を人知れず生活してゐる人は二重に生きるのである。

そして一度びこの道に——この詩歌の國に入つた人は、もう引返して來る事はない、丁度かのツルゲエネフの『フアウスト』の熱烈な女主人公の言つたやうに——「神樣が御存じです、一度この道に入つてしまへば、二度とかへつて來る事はむづかしからうと思ひますわ！」

そして私もまた詩を愛する。私も亦この果て知れぬ詩の道をたどつて迷ひに迷ひつゝもなほ進まうとしてゐる、何處までも何處までも。私の二卷は、——『靈魂の秋』と『感傷の春』との二つの詩集は、その貧しい收穫である、その辛くもあり、樂しくもある旅の記念である。——そして今や、私は一個の詩人として詩の作り方を述べなければならぬことゝなつた。

だが、年若き諸友に、私は何を語らうか？——私は諸君に教訓する資格はない、諸君を指導する力はない。私は詩の作り方を述べるように頼まれた時、始めはことわらうと思つた。そんなことはとても私の任ではない、また私の身にとつては僭越至極な事である、私はたゞ自分ひとりで詩を作つてはひとり樂んでさへをれ

ばいゝ――詩は所詮自己享樂（ゼルブストゲヌッス）なのだから……と。然し、私は直ぐに反省した、「それは卑しむべきエゴイズムではなからうか、或は……」

私はまだ見ぬ年若き愛友の手から受取つた詩作について教を乞うた數々の書簡を――それを讀んだ度毎に、どんなに私は顏を赤くしたであらう！　どんなに羞恥を覺えたであらう！――思ひ起した。そしてこれまでそれに答へなかつた事が、答へたにしても十分の滿足を與へるやうな答をしなかつた事が、また新しく私の心を責めた――さうだ、私は出來るか出來ないかわからないが、ひとつやつて見なければならない！

そしてこの書物が出來たのである。詳しい事は「この書物の書かれたわけ」と題する初の一章に述べて置いた。私は多くを望まない、私の詩を愛する心が諸君の詩を愛する心に觸れゝば、そして諸君の心裡（なか）により多くの詩に對する愛を喚起すればそれでよい。私はこの中に詩に對する愛を說いた、詩に對する愛は卽ち人間（ヒユウマニテ）に對する愛である、人はこの愛によつて詩を解し得る、理解は愛ある處にのみ存するからである。

私は出來るだけ完全なものをと骨折つた、つひに所期通りのものとはならなかつたけれども、そしてなるべく平易にと思つて、むづかしい議論は避け、自由詩や内容律などについても、敢て異を樹てる事をしないで、現在の詩人間に行はれる定說に據つた方が多い。勿論、私の意見も出來るだけ記しはしたが、私の目的は詩論をする事ではなく、專ら自分の詩作の經驗より得たところを述べることにあつたのだから。

そして最後に。諸君が詩歌の國の薔薇の花咲く細徑（こみち）に踏み入らうとされるならば、私はそれを祝福する。そしてこの書がその道案内の一端ともなればまことに幸ひである。

一九一八年の初秋に

ギヨオテの若き日の肖像の下にて

この書物の書かれたわけ――大體の注意

「詩人らしいイントロダクション」――詩人と小鳥――技巧と内容――私自身について

一

詩人にとつては、詩を作るのは快樂ですが、詩を説明するのは苦痛な事です。

詩といふものは（我國で普通詩と呼ばれてゐるのは抒情詩(リリック)の事ですから、これから單に詩と呼ぶのは抒情詩(リリック)の事だと思つて頂き度い）微風のそよぎのやうに軟かく、嘆息の如く輕く、泉のやうに爽かに私たちの胸からおのづと湧き出して來(く)るものなのです。詩人はただそれを紙の上に書きうつしさへすればよい。そこに何等の努力も要(い)りません。それが小説や戯曲などと違ふところです。小説や戯曲は、一つはその形式が長いものであるせゐもありますが、普通、自然と生れるものといふよりむしろ作り出されるものです。その製作には努力が要(い)ります、意志の力が要ります。心情(ハート)だけでは出來ません、頭腦(あたま)の働きが要ります、批判の眼が要(い)ります、つまり、理智の力に俟つところが甚だ多いのです。然るに、詩はさうではありません。それは詩にも理智的な詩もある事はありますけれど、詩は原則として、感情や情緒や感覺の素直な、單純な記録です。詩人はただ小鳥のやうに歌へばいいのです。小鳥が歌ふのに何の努力を要するでせう？　そこには決して理智の働きもなければ、批判も、反省もありません。小鳥はただ歌ひたいから歌ふのです。小鳥はただ自分の本能の命ずるところに從つてゐるばかりです、歌ふのは小鳥の快樂(たのしみ)なのですから。

詩人もまた小鳥です。詩人は人間の中の小鳥です。詩人は見たまま、感じたままを何の修飾(かざり)も加へないで、素直に

歌ひさへすればいいのです。そこには何の理窟も要りません、何の顧慮も要りません、何の反省も要りません。自由に大膽に思つたままを歌へばそれでいいのです。私たちが正直で、眞摯で、誠實で、人間として愛すべきものであつたならば、血あり涙ある生きた一個の人間であつたならば、そこに何の恥づべきものがありませう。また、私たちの心が明鏡のやうに澄んでゐたならば、もうそれで立派な詩が出來るに違ひありません。詩人の心は自然の鏡に外ならない。曾つて私は、

あはれわが胸こそ
あめつちのあやしき鏡、
悲しくも、嬉しくも、うつるが儘に
くもりてはまた照れど、……

（春月）

と歌ひましたが、まことに詩人の心は大自然の前に置かれた小さな鏡で、その鏡の面には悲みも映れば喜びも映る、飛び行く小鳥も映れば散り來る花も映る、詩人はそれを、ただその映るがままに歌へばいいのです。

獨逸の大詩人ギヨオテ（ゲエテ）は既にかう言つてをります、「詩が私を作つたので、私が詩を作つたのではない」と。即ちギヨオテは一つ詩を作つてやらうと故意に努めたのではなく、歌はずにはゐられなくなつたから歌つたのです。それは全く小鳥と同じ事です。この場合、小鳥もギヨオテも、私たち人間を自由に左右してゐる或る知られざるもの、或る限りなきもの（大自然と言つてもよければ神と言つてもよい）の道具にすぎないのです、そのものによつて吹かれる笛にすぎないのです。詩人はこんな風に考へてこそ、はじめて眞實の詩人となり得るのです、人間の本眞の聲を發する事が出來るのです。それが內心の聲を閑却して、徒らに作爲に趨つたり、技巧を弄したり修辭の末に腐心して、言葉の戲れに陷つたりすれば、その純粹は失はれて、忽ち不純な、虛僞なものになつてしまひます。

それは技巧といふことも必要です。おなじ感情にしても一層巧妙な表現をした方が一層力づよくなつて、一層人を動かすに違ひありません。それには言葉の選擇や、言廻しの上に、文字の配合や、修辭の上に苦心しなければなりません。けれども、技巧は要するに末の末なのです。まづ大切なのは內容です、內容あつての技巧です、內容がつまらぬものであれば、いくら形式の美や、修辭の上に骨折つても何にもなりません。然るに多くの詩人はさうした技巧の末に腐心して、その詩を美しく飾り立てて人の目をくらまさうとする、いやくらまさうとするのではなくて、自分みづからもうそれで一かどの名作だと思ひ込んでしまふ。これは大變な間違ひです。詩は眞實を含んでゐなければ決していい詩とは言へません。然るに、さうした技巧の末に專心してゐると、その詩の肝心の生命をさへ殺してしまふ事になります。ましてやはじめから眞實でない、頭腦で作り出した、手先きででつち上げたやうな詩ならば、それはもう論外です。私はそんな詩を讀ませられ、そんな技巧詩人を、細工人を大詩人だと思はねばならないやうに權力ででも強ひられれば、まづ此世におさらばを言つた方が遙かに氣が利いてもゐるし、愉快だらうと思ひます。

そこで私はかういふ事を特に力をこめて言ひ度い――技巧はお化粧である、美人がお化粧をするのは、身だしなみとして必要である、その美しさを一層輝かせる爲に有用である。然しあまり美しくもない癖に、白粉をこてこて塗つて、口紅や頰紅をさしたり、高價な衣裳をまとうて、自分で大變な美人のやうに思つたりしてゐるのは醜の極である、そのお化粧はただその醜を一層醜にするだけである。深い眞實のこもつた衷心より迸り出た詩に技巧の磨きをかけたならば、それは一層美しい詩になるであらう、が、さうでない、不純な無內容な詩をあらん限りの力を注いで彫琢したものは、その技巧や修辭が巧妙であればあるほどその醜が目に立つて來ると。――これは私の確信なのです。私は技巧を斥けはしません、が、技巧に囚はれた技巧詩を愛する事は出來ません、作詩術や修辭學の助けを借りてやつと生れ出たやうな詩に何の價値がありませう？

詩人は素直でなければなりません。まるで笛や琴のやうに從順でなければなりません。さうです、大自然の與へた自分の本能のままに。――詩は本能の所産なのですから。だから詩作には何等の努力も要るわけはないのです、若し努力が要るとすれば、それは詩作の技巧の上の努力ではなくて、人間としての自己を作る努力です。詩人はまづ詩人となるまへに一個の人間とならなければなりません。人格即ち詩です。ギョオテの人格にしてはじめてギョオテの詩を作る事が出來、ヴェルレエンの人格にしてはじめてヴェルレエンの詩を生む事が出來、ホイットマンの人格にしてはじめてホイットマンの詩を出す事が出來るのです。要するに詩人はまづ自己を完成しなければならない、その外の凡ては、凡ての技巧は末の末なのです。詩人としての修養は畢竟人間としての修養に外ならない。詩作の祕訣は、詩を好んで、はじめて詩を學ばうとする人の切に聞きたいと願はれるところでせう。が、詩作の祕訣は、結局ただこの人間をつくれといふ一言に歸してしまふのです。

二

詩人が、本當の詩人がかうしたものであるとすれば、詩を作るのは快樂であつても詩を說明するのは苦痛だといふ事はよくわかるだらうと思ひます。詩は說明せらるべきものではありません。よしや說明して見ても、詩人の本當の感じはその百分の一も傳へる事は出來ますまい。詩は神來の聲なのですから、詩人自身よりも一層高いものです、だからその深い味ひはその詩人自らにさへ說明され得ません。ただ眞に詩を解する能力のある人ならば、一言の說明はなくとも、本能によつて、その眞趣を鑑賞し理解する事が出來るのです。直覺によつてその詩の眞實のものか虛僞のものかを直ちに鑑別する事が出來るのです。まことに、本能の聲はただ本能によつてのみ聽かれ得るのです。されば、詩人が詩の說明をするのは、單に苦痛であるばかりでなく、また不可能であるとも言へます、尠くとも詩人の說明は

その詩より必ずつまらない、價値が低い。
ましてや詩の作り方を詩人が述べる！——これはむしろ不合理な事ではありますまいか？ 技巧詩人、宗匠詩人ならば、それこそ得意の壇場かも知れませんが、眞の詩人ならば、「私は作詩法は存じません」と言ふに違ひありません。「私は誰にも詩の作り方を教はりませんでした、それゆゑまた誰にも詩の作り方を教へる事は出來ません」と言ふに違ひありません。それにまた詩作の祕訣は既に述べた如く、「自己をつくれ」「人間をつくれ」の一句に盡きてゐるのです。

然るに私はなぜこんな一見無用に見える著作をするのでせうか？ おまへは一體眞實の詩人でないのか？ 技巧詩人、宗匠詩人にすぎないのか？ いや、いや、どうしてそんな事が！ 世に私ほど純眞を求めてゐる詩人があるでせうか？ 眞實を重んじてゐる詩人があるでせうか？ また、自ら、それは僭越（せんえつ）な傲慢な事かも知れないけれど、純情の人、眞情の詩人（よしどんなに小さなものであるにせよ）を以て任じてゐる詩人があるでせうか？——さうです、私はギョオテと共に自分の詩を一つの「懺悔（コンフェッション）」としか思ひません、自分の生涯の反映としか思ひません、韻文で書いた自叙傳としか思ひません。私は自分の詩を立派な藝術品だとは考へません、自分を大詩人だとは考へません。ただ、自分の詩篇を以て一個の人間の正直な告白だと信じ、その誠實を以て誇るのみです。私の詩はただ涙です、歎息です、微笑です、哄笑です、歡呼です。私はギョオテと共に、（"An（アン） die（ディ） Günstigen（ギュンスティゲン）"）

私がどんなに迷ひ、どんなに努めたか。
どんなに惱み、どんなに暮したかは
ここなる花環の花となる。
老齢も、また青春も、

徳も、不徳も、
集めて見れば歌となる。　（ギョオテ）

と歌ひたいのです。

それなのに、私がかうした宗匠詩人のするやうな事を敢て企てたのは、詩人にとつてあまり樂でない事を敢て辭せなかつたのは、外にいろいろの理由もありましたが、自分の昔日の愚かな迷ひ、腹立たしい暗中摸索、馬鹿々々しい彷徨の苦い經驗の記憶があまりにあらたなために、曾つて私に詩作の道について質問して來た未見の若い友達の人々に答へないでしまふわけに行かなかつたからです。それでいささか自分の經驗をしるして諸君の參考に供し、諸君に再び私の失敗をくり返させまいと思ふのです。一體、若い心といふものは妙なもので、自分がそれと信じてゐる事でも、誰か先輩がそれをうなづいてくれたり、それと同じ意見を發表してくれないうちは安心出來ないものです。それで、私はそんな若い心に「私もさう思つてゐます」と告げるだけにすぎないでせう。私は教師ではありません、山路をころんだり、つまづいたりして行つた旅人にすぎません。ただ諸君よりは一あし先きに歩いて行つた爲めに、或は道案内でも出來るか、詩といふ遠い旅路について何かの注意でも述べる事が出來るかしらと思ふだけであります。

私が詩作を始めてから、早いものもで、もう十三四年にもなります。顧ると遠い旅でありました。「はるけくも來つるものかな」といふ感じがしみじみとします。海を見て隱岐の島を見て、網小屋の網の上に寢て、不朽の詩を思つた少年、殖民地の波止場を放浪して海を歌つた少年、大阪の煤煙と塵埃とに染まつて、福島の洋菓子舖の二階の暗い二疊の間に髮を長くして、せつせと東京の雜誌に詩を投書してゐた少年、それがこの私でした。その私が今かうしていかにも一かどの大家らしく詩の作り方などをお話するのかと思ふと、今更に時の推移に驚かれるよりもそれよりも何となくくすぐつたい氣恥しい思ひに堪へられない。第一私にそんな資格がありさうには思へません。が、ただ詩を愛す

る點に於ては、私はほかのいかなる詩人にも劣らぬと信じます。十何年といふ長い歳月の間、私は詩のことばかりを考へて來ました。日本の昔から今までの詩、西洋の詩、支那の詩、私の讀んだ詩の數はどんなに多いでせう。少年の時から今まで作つた私の詩、それはどんなに多いでせう、それは十卷の詩集にもなるでせう。して見ると、私はその經驗に於て確かに諸君に一日の長がある。私の多年の彷徨や、失敗や、無駄骨折りの苦い經驗は、これからあらたに詩歌の道に進まれる諸君に對して、いいいましめになるに違ひない。かう考へれば、この自ら測らぬ、烏滸な業も自分で許されます。私の不用意な言葉から何等かの敎訓を得られたなら、それはその得來つた人がえらいのです。日本の詩壇には今第二の曙が來らうとしてゐます、すぐれたる詩才と、よりすぐれたる詩魂とを有する若い詩人が現れて、その人間としての內的經驗を歌ひ、微妙な草笛の音をこの島國中に響かせてくれたならどんなにいいでせう。どうか眞實の詩人が出てほしい。そして私の經驗が未來の大詩人のために何かの役に立つたら嬉しい事です。そして私はその人々に今からして力強くかう叫んで置きたい、――ただ邪路に陷らぬように、邪路に陷らぬように！――と。

詩とはどんなものか？

一、詩の本質について

「一體、詩とはどんなものでせうか？」――これが先づ第一に生じて來る疑問です。詩はどういふ風にして作つたらいいかといふ事を考へる前に、先づ詩といふものの本質を明かにしなければなりません。

詩は我々の感情を一番率直に、一番單純に、一番直接的にあらはすものです。詩は一番原始的な藝術の形式です。

だからその起原は一切の藝術のうちで一番古いのです。紀貫之は「この歌（歌とは彼の時代に於ては無論「詩」の謂である）、天地の開けはじまりける時より出でにけり」と言つてゐる。本居宣長は伊弉諾、伊弉册ふた柱の尊がお出會ひになつて、「あなえやし、えをとこ」「あなえやし、えをとめ」と感嘆せられたのを以て詩歌の起原としてゐる。これなど確かに面白い見解で、西洋人の信仰から言へば詩はアダム、イヴと共に生れたのに違ひありません。最初の人間は卽ち最初の詩人だつたのです。

もつともそれが「詩」といふ藝術の一形式となつたのはもつと後の事に違ひありません。調子の助けを借り、音樂的に節づけられて、旋律を伴つて歌はれるやうになつて、歌謠となつて、はじめて獨立した藝術になつたのでせう。私は詩といふものは人間の感情の高潮に達した時の聲、卽ち感激の聲、感動の叫びだと思ふのですが、まつたく嬉しい時、悲しい時、私たちの心は決して平靜ではゐません、それは何等かの形をとつて現れます。笑ふとか泣くとか、飛廻るとか顔を伏せるとか、尠くとも表情となつて顔面に現れます。それが言葉となつて現れるとき、そこに詩は生れて來るのです。「あゝ嬉しい！」と言へば、それはもう詩だと言つて差支ない。けれどもただそれだけでは藝術としての價値がない、おなじ嬉しさでも、他の嬉しさとは違つたその時の嬉しさ、他の人の嬉しさと違つたその人の嬉しさを現はさなければ藝術ではない。尠くとも藝術としての獨自性が乏しいから、その價値が低いのです。かの俳句でいふ月並といふのなぞがやはりそれで、ありふれた陳套なものだからつまらないのです。詩にはまづ個性が大切です。その人でなくては、他の人には歌へないその人獨特のものでなければなりません。模倣したものの無價値なのはここです、單なる人の模倣なら、その人の個性から生れたものでないから、模倣された人がその個性に基いて歌つた詩の存する限り、その存在の意義はありません。同じ模倣でも、その人の個性が模倣された詩の作者の個性を沒却する位ゐ顯著に現れてをれば始めてその存在を許されます。そしてこんなのはもはや單なる模倣とはいはれません。むしろ暗

示を受けるとか、感化を蒙るとか言つた方が穩當でせう。ギヨオテが言つたやうに、「詩人は個性を發揮すべきである。そしてこの個性に何等か健實なるものあらば、詩人はその中に類性を叙するであらう」詩人があまり自分の個性を尊重して、一意それを發揮しようとすれば自然他人に理解の出來ないものになりはしないかと疑ふ人もありませう。が、田山花袋氏の所謂「一人の心は萬人の心」で、ある個性の極めて個人的な感情の叫び、例へば失戀の悲みを歌つた詩は、その詩人が極めて病的でアブノオマルでない限りまた萬人に通ずるから、何人にも理解され、同じく失戀に惱める人には無量の慰藉を與へるに違ひありません。

ところで感情の叫びと言つただけではまだ十分でないでせう。實際、詩の本質を一口に言ひ切る事は困難なことです。或る獨逸の詩人は「詩は氣息なり」と言つた。卽ち詩は呼吸だと言ふので、これは詩はリズムだと言ふのとよく似通つてゐます。リズムは要するに感情の波動であり、呼吸そのものだからです。詩は祈禱の言葉だと言つた詩人がある、宗教的な、敬虔な心持の詩人に取つては詩は祈禱の言葉である筈です。詩は心情の愛だと言つた詩人があります、まことに人間的な詩人に取つて詩は正にさうあるべき筈です。そして私もまた言ひ度い、詩は人間の聲であると。Suffering humanity——人類の惱み、詩はただそれを歌はんが爲めにのみ存するのだ！

然しこんな事を言つただけでは、確實な詩の概念は得られないでせう。そこで私は解說家らしい平明な散文的な說明を下して見なければなりません。詩といふ言葉は廣義には文學、より正しく言へば小說、戲曲等のやうなあらゆる文學上の創作の稱に用ゐられます、そしてこの意味では小說家、戲曲家と雖も詩人と呼ばれます。（藝術上の製作のみならず、人生のあらゆる詩的要素を有するものは詩と呼ばれ、創作家——詩作する人でなくとも、詩人的要素を有する人はあの男は詩人だなどと評せられるのは誰しも知るところである）けれども、今普通に用ゐられるところでは、詩とは散文に對する韻文——節奏ある言葉を以て書かれたもの——の事で、繪畫的彫刻的の作用のみならず、音樂的作

用を多分に有するものでなければならぬ。即ち詩は感情、情緒の音樂的表白とも言へるでせう。が、要するに詩の本質はかうした說明よりも詩そのものが最もよく說明するだらうと思ひます。

二、西洋の詩と日本の詩

西洋の詩と日本の詩とはどう違ふか？　どちらにしても、その詩たる本質に相違はない、詩そのものに二つはないからである。ただその形式が違ふだけです。西洋の詩は昔から抒情詩、叙事詩、劇詩の三つに大別されてゐます。抒情詩は單なる感情、情緒を歌つた短い詩、叙事詩は人物事件を描寫した物語詩、劇詩は韻文で書いた戯曲、脚本をさすのです。即ち、ハイネの小曲や、ヴェルレエンの詩の如きは抒情詩で、ホメロス（ホオマア）の『イリアッド』や『オデッセエ』、ダンテの『神曲』の如きは叙事詩、ギョオテの『ファウスト』の如きは劇詩です。ところが、近世散文の勃興するに從つて、叙事詩は小說にその地位を奪はれ、昔日叙事詩を以て歌はれた事は今や小說に描かれるに至り、現に叙事詩を作つてゐる詩人は英吉利以外の國では極く少數で、またさして傑作も出ません。近代第一の叙事詩と見るべきニイチエの『ツァラトゥストラ』の如きも韻文でなしに散文で書かれてゐます。また劇詩も今はあまり見當らず、多くの戯曲家は大部分散文劇を書いてゐます。かうして韻文はだんだん散文にその領分を蠶食せられて、あとに殘つて昔日の勢力を維持してゐるのはひとり抒情詩だけですが、その抒情詩すらこの頃は以前のやうに長つたらしいものはなく、いづれも短詩形のものです。北米の鬼才エドガア・アラン・ポオの如きは抒情詩は短詩形なるべきことを主張してゐたし、佛蘭西の象徵派はその藝術觀からして、刹那々々の情緒の表現を詩人の唯一の任務とし、勢ひ短詩形を尙び、十四行詩の形式などを愛用したものです。ところで、これは無理からぬ話です、長大な抒情詩は大抵叙事詩的抒情詩になつて、純粹の抒情詩とは言へないやうですから。

私も抒情詩は短いほどいいかと思ひます。それだけ無駄がなくて、含蓄が深くて、感銘が強いのです。その點から我國の俳句の如き寳に立派な詩形で、芭蕉の句の如きなまじつかの象徴詩人の作よりどれ程含蓄が深く、暗示的、象徴的であるか知れません。といつて、何も詩を俳句程度に短縮しなければならぬといふのではありません。

日本の新しい詩は西洋の詩の影響のもとに生じたものでした。外山、ちゆざん山、矢田部尙今、井上巽軒の三博士が所謂新體詩を興して、『新體詩抄』を出したのがその起原です。西洋の詩を模したもののゆゑ、ライン行を切り、スタンザ聯を分けして、この體裁は西洋そつくりでしたが、その韻律は七五調、五七調などといふ萬葉の長歌や今樣などと同じ舊來の音數律の制約を採用しましたから、一面から見れば短歌に壓倒されて一時滅びてゐた長歌の復興とも見られます。その後新體詩といふ名は世人の嘲笑のまと的となり、詩人はその名を嫌ひ、新詩社では短歌に對して長詩と呼んでゐました。その新體詩が今日の自由詩にまで發達したのです。

かういふ譯で、西洋の詩も日本の詩も詩の本質に相違はないが、言語の相違からして、その韻律上には非常なへだたり懸隔があるのです。

三　詩と歌との違ひ

一體、我國にはうた短歌といふ重寶な形式があるのに、なぜ詩の必要があるのかと言ふのですか？　それはかういふわけです。元來、短歌といふ詩形は極めて傳承的な、クラシカルな形式で、新しい時代の內容を盛るのには不便を感ずる點が多い。殊に思想や、觀念を取扱ふ事は非常に困難である。（我國の詩の發達が大變遲れたのも、一つは自由詩前の詩人たちがこの短歌的な技巧、音律の傳統に固守してゐたからだと思ひます）それに第一、あのやうなあまり單純すぎる短詩形ですから少し複雜な內容を盛る事が出來ない。近年連作體と言つて、澤山の歌を並べて、始めて一篇のポエム詩

としての意義を成すやうな作風の行はれるのもそのためです。私は前に短詩形なるだけいいと言ひましたが、それは理想論で、事實はさうは行きませんし、第一短歌といふ形式が自由でないから、どうしても詩といふ形式が必要なのです。

四、詩と散文との違ひ

詩と散文とはどう違ふか？　これもここで簡單に説明して置いてもよい。

詩と散文との形式上の區別は、一方が韻文――即ち節奏ある言葉を以て書かれてゐるのに對し、一方がさうでないといふところにある。が、今の自由詩の如きは、一寸見たところでは、その行（ライン）を切り、聯（スタンザ）を分ける事を除いては、一寸散文と區別がつかない。その區別をつけるものは、そのリズムである。即ち詩のリズムは散文のリズムより一層緊張した、一層强調せられたものなのです。私はすべてのさうした區別の甚だ困難なるを思はずにゐられない。私はむしろ散文とは詩に到る階段だと思ひたい、散文が淨化せられ、純化せられて詩になるのだと。

そして、誠に人が死ぬものならば、誠に生存は虛無の餌食に過ぎないならば、言葉も足らず、思ひも足らず、日夜の流れに搖れる魂のみが高く感じ取る此の生活の感は、畢竟するに何の甲斐ぞ！　此の生きた感動が何の故に死ぬべきであらうか！　私が眞に愛し、私が眞に慕つた者は何時も私の內に宿つてゐる。私が何時かは呼吸の止まる日に會ふのは明らかなまことである。けれどもその故に彼等が私の內から去り得ようとは、何で信じられよう！　彼等は私の心臟のあらゆる襞に行き渡つた永遠の感じそのものである。此の凡てが誠に消滅すべきものであるならば、人生は燃えない蠟燭にも遂に價しない。あゝ私に永遠を告げたものは何であるか？　愛慕の心である。私に生活を告げたものは何であるか？　愛慕の心である。慰藉は愛の眠りであり、微笑は愛の目覺めである。少くとも私を以て

すれば、愛の意識にあらざるよりは微笑は全く微笑ではない。愛の經驗に依つて聖な營みを啓示するもの！　私は御身を微笑と呼ぶ。（三富朽葉）

これは一九一七年の七月、銚子の海に於て、その友今井白楊と共に、かなしくもまた美しい水死を遂げた、尊敬すべき深遠な魂の持主であつた、あの貴族的な詩人三富火の鳥の絶筆『微笑に就いての反省』の一節です。私はこの意味の深い言葉を讀む每に美しい詩人の魂の祕密を開くやうに感じない事とてはない。詩人の書くものはすべて詩であるといふ私の信念は決して愚かしい妄見ではない。私はこれを單なる散文と思ふ事は出來ない。この中にはあの美しい容貌をもつた熱烈な詩人の呼吸がさながらに宿つてゐる、そのリズムは恐らく永遠そのものの息吹（いぶき）であつたかも知れない。私はかうした感想を讀むとき、詩と散文との區別を甚だ無意味に思はずにはゐられないのです。

五、詩と音樂との關係

音樂！　私はこの一語をこんなに感激的に叫ばずにゐられない位ゐ音樂が好きです。詩はもちろん好きですが、詩についでは音樂です。音樂の喚起（よびおこ）す感動は殆んど言語に絕するものがある、それは肉體的、感覺的な感動であると共に、また精神的な、いなむしろ靈魂（たましい）の顫へるやうな感動である。

そして私は思ふ、詩を愛する人はまた必然音樂を愛するに違ひないと。音樂を愛しない詩人は畢竟觀念の詩人である。いや、音樂を解しない詩人といふ概念はなり立たない筈です。なぜなれば、詩人は文學者中の音樂家なのですから。さうです、詩と音樂とは極めて似通つてゐます。似てゐるといつても、然し、決して同一のものではない。然るに音樂を尊重するの餘り、詩を直ちに音樂たらしめんとしたところに、かの佛蘭西象徵派（サンボリスト）の悲しい誤謬があつたのです。博學な詩人ステファン・マラルメが、全然思想を棄て、專心音調と韻律の技巧に沒頭し、晦澁朦朧（くわいじふもうろう）と言ふより、むし

ろ全然意味なき詩句の彫琢に腐心して、つひに一篇の外國語に完全に飜譯せらるべき作を出さず、つひにその詩を白紙にまで淨化して、怪奇な妄想家の名を殘した如きは、人間がこれ迄詩人として遭遇した一番悲劇的な運命ではなかつたでせうか。

詩人は詩の如く音樂を愛するでせう。然し詩と音樂とは違ひます。音樂に存するものは諸音(ハアモニイ)や旋律(メロディ)です。詩にあるものはリズムです。詩は諸藝術中最も音樂に近いといふだけで、單に音樂的なといふだけで、決して音樂そのものではありません。ある詩が作曲され、演奏される時、詩ははじめて音樂と融合します。けれども、このときでさへ詩の本質と、音樂の本質とは共存してゐるのです。

詩人とはどんな人か？

一、ワアヅワアスの言葉

「詩人とはいかなる人であらう？　また彼はいかなる人に語らうとする？　我々はいかなる言葉を彼に期待したらいいだらう？　詩人とは他人に語る人である、普通の人よりは多感にして、情熱さかんなる人である。人間の本性を知ること深く、鋭敏な心をもつた人である。自分の心意と熱情とを喜び、自分の精神を樂しむ事他にまさつてゐる。そして好んで萬象の變化の中に見える等しき情意の現れに心を潜(ひと)め、彼自らそれを見ないところにも、常にこれを創(つく)り出さうとする。なほまた、詩人には他人にまして顯著な特性がある。物なきところに、さながらその物の現在するのを見るかのやうに心を動かされる事である。換言すれば、彼は情熱をつくり出す力があるのである」その情熱は、實

在の事に觸れて起るものと同じいものではないけれど、これを他人が全然自分の心の働きだけで常に心に感ずるものに比べると、なほ遙かに見事に當つて起る情熱に似通うてゐる。(一般同情のうち、心を樂します者にあつてはとりわけさうである) かうしてなほこれに習練を積み、ここに彼はその想つたところ、その感じたところを抒べたならば、いよいよ巧みに力ある詩をなし得よう。殊に、――彼のえらぶところか、又はその心の構造がこれを然らしめるか知らないが――毫も直接外界の刺戟を蒙らないで起り來る感想を抒べるに當つて巧みにまた力あるに至るであらう。」これは國木田獨歩の私淑した英吉利の湖畔詩人ワアヅワアスの言葉であるが、この『われ等は七人』の詩人の言葉はまことによく詩人の特性を言ひ現してゐる。彼は詩人の普通人と異る點を的確に指摘してゐる。即ち、普通人は感動すべきところにも感動しない、然るに詩人は極めて平凡に思はれるやうな事にも感動する。

空にかゝる虹見れば我心躍る、
幼き時かくありき、
人となれる今もまた然り、
願くば老いてもまたかくあらなむ、
然らずばむしろ死よ來れ、
子供こそは大人(おとな)の父ぞ、
希くばわが生涯をして、
日々に自然を驚嘆せしめよ。

(ワアズワアス)

と歌つた詩人の心はまさに子供の心であり、永久の子供たらんとする願である。子供は何ものをも驚嘆する、子供にとつては此世のものはどんなものでも珍らしい、蝶を見ても鳥を見ても、蛙の聲を聞いても、水の音を聞いても、子

供の心はふるへる。空にかかる美しい虹を見れば、何處までゞも追つかけて行つてつかまへたいと思ふ、子供はその虹がはかない瞬間（つかのま）の幻だなどとは考へない。月を見てもそれが生物の一つとして棲息してゐない太陽系中の死せる一遊星で、地球にくつついて廻轉してゐるものだなどとは夢想もしない、そして唯その美しさに驚嘆し、無意識に「お月さまいくつ……まだ年や若いな」を歌ふ。これである、これである。詩人の心はまさにかうでなくてはならない。詩人が月について科學的穿鑿（せんさく）を企てるとき、その詩興は滅んでしまふ、ナイイヴに月の美を諧ずる事は出來なくなつてしまふ。科學と詩とは兩立しないからである。或る詩人が科學者となつた瞬間にその詩人は消滅してしまふ。哲學的な思索とても亦その通りで、詩人が純粹に悟性（インテレクト）を働かせて、人生宇宙について考察するとき詩人は哲學者となつて、もう詩人ではなくなる。形而上學（メタフイジック）は詩ではない、ルクレティウスの哲學詩のやうな悟性（インテレクト）からのみ生れてゐる思辨の詩は、いかに美しい言葉の飾りが附いてゐても純粹の詩とは言へない。これに反して、どんな哲理や瞑想を歌つても、どんなやかましい神學の教理を歌つても、それが心情（ハアト）から出て來れば、即ち冷かな思索ではなくして、熱烈な感動から生れてをれば立派な詩なのです。例へばダンテやシルレルの詩の如き、隨分抽象的な觀念を歌つてゐるが、それは單なる思辨や、理窟ではなくて、感情の聲だから詩として尊いのです。ラマルティンの『瞑想詩集（メディタティオン・ポエティク）』の如き純然たる感情の波動ですから、いかにその人生觀をあからさまに抒（の）べても非詩（アンティ・ポエティック）的なものにはなりません。

一體、普通人は「或る事象に對して、强烈な印象を受ける事は受けても、漠然たる識別しか有しないで、詩人がこれと深く共鳴して、これに正確な形を賦與する迄は理解し得る能力を持たない」のに對し、詩人に直接自己に關係のない事に於ても深い感動と理解とを持つ、實在しない事物をも實在する事物の如く觀（み）、またこれを再現する事が出來る。これは詩人が想像力にゆたかであるからです。情熱がありあまつてゐるからです。鋭い直觀力があるからです、詩的形成力があるからです。つまり詩人は深遠な靈魂の所有者（もちぬし）だからです。かかる人にして、はじめて立派な詩人と

呼ばれ得るでせう。然し、私はさうした言葉よりも、詩才と詩魂――二つとも詩人になくてならぬもの――との二つのよりわかりやすい言葉に於て詩人の特性を説明しようと思ふ。

二、詩魂と詩才と

「詩は別才なり」とは、古の支那の一批評家の言葉です。詩才、卽ち詩人の有する才能は一種特別の才能だと言ふのです。さうです、詩才は尊いものです、詩才はすべての人に與へられてゐるものではありません。詩といふ言葉を廣義に解釋して、廣く文學の意味に取つても、何人も文學上の才能を發揮するといふわけには行きません。一體日本は詩の國だと言はれてゐます、日本人はみな詩人だと西洋人は嘆賞してゐます。これは我國で、どんな田舍へ行つても、理髮店の亭主や、大工や、炭燒のやうな人たちでも、歌をよんだり發句をひねくつたり、狂歌だとか川柳だとか都々逸だとかいつたやうなものを作つてゐる人が尠くないのを見たからです。けれどもこれらの人が皆詩人かと言へばさうではありません。彼等は花鳥風月に遊ぶ心の餘裕を有つた人で、單なる俗人ではない、俗人の中にあつては尊敬すべき風流人です、さうです、風雅を樂しむ風流人です、が、詩人ではありません。それは彼等の中にも詩人的素質を有してゐて、その方に一切の努力を捧げれば天晴な詩人となり得たかも知れないやうな人もあるかも知れない。が、大抵の人はただ一個の風流韻事を樂しむ風流人にすぎないのです。もつともこれは必ずしも彼等に限りません。現に詩人、歌人を以て任じ、我が詩歌壇に相當の地位を占めてゐる人々の中にも、單なる風流人にすぎないのが、いろいろな關係から一かどの詩人となりすましてゐる樣な人が絶無ではありますまい。そして風流人とは畢竟多少の詩才あつて、詩魂のまあ無いといつていい人の謂なのです。前に言つた詩人的素質とはこの場合、詩才よりも詩魂をさしてゐるものと思つて頂き度い。

詩魂――これが私の詩人にとつて他の何よりも必要とするものです。「詩は別才なり」とは餘りに平凡にして、また今やそれほど重んずべき言ではない。私はむしろ「詩は別魂なり」と言ひたい。私は詩人の魂(たましひ)は普通の人と違つた一種特別の魂でなければならないと考へるのです。詩才は未だ尙(たふと)ぶに足りない、詩才は要するに才にすぎない、言葉に對して敏感で、自由に巧妙に文字を驅使する才、形式の美を認識して、これを自己の制作に發揮する才、韻律上の才、それらの才も必要な事は必要です、人間が肉體を有する如く詩が形式を有する限り、いかなる詩人も有しなければならぬところです。けれども詩才は要するに詩才にすぎないのです、詩魂なくして詩才のみを有する人は容易に技巧詩人となる、技巧詩人として大に成功して、一時は世にもてはやされるかも知れない、が、本當の詩を作る事は出來ません。詩魂はこれとは違ひます。

詩魂と詩才との關係は、天才(ジニアス)と能力(タレント)との關係にほぼ似通つてゐます。或は詩魂の人を天才と呼び、詩才の人を能才と呼んでもいいかも知れません。天才はたしかに完全な詩魂を有する人に相違ない、反之(これにはんして)、能才は特に詩魂が詩才より顯著なのではあるまい。そして天才にしてはじめて獨創性(オリヂナリテイ)を發揮し得るやうに、詩魂の人にして始めて眞の詩を作り得るのだと私は思ひます。

然し、詩魂とはどんなものでせうか？　それを少し說明して見ませう。

詩魂は詩人の魂です。一體、人間は多少の差はあれ、詩人的要素を持つてゐるかも知れません。とりわけ、戀愛が人を詩人にする事は一般に認められてゐる事實です。然し詩の魂を有する人は、その全身を於て詩人なのです。その人の書いたものは、散文でも、論文でも、日記でも、手紙のはしくれでも、悉く詩に外ならない。詩魂の人は所謂俗物の正反對です、俗物が詩魂を有するといふ事は考へられない事です。之に反して、詩才は俗物でもなほ且つ有し得るのです。いや反つて、俗物の方が詩才を發揮するかも知れません。詩才といふものは、もともと修練によつても十分

獲得する事の出來るものなのですから。ところが、詩魂は決して、いかなる事があらうとも後天的な修養によつて得る事は出來ない。全く天賦のものです。ここが天才(ジニアス)と同じものと見なしてもいい點であります。然しながら、世の中に絕對的なものは一つもありません。詩魂の人だとて、詩才の少しもない人はありません、詩才の人だとて、詩魂の少しもない人はありません。つまるところは、そのいづれが多きに居るかを考へて、その要素の多い方へ片附ける外はないでせう。が、かうした考へはかなり大膽な斷定かも知れません。兎(と)まれ、自ら詩魂の人と思ひ得た人は幸ひである。さう思ひ得なくとも、詩を熱愛し、詩の爲めに殉ずる事を敢て厭はない人は、やつぱり詩魂の人と言つて差支へはないかもしれない。

韻律の話

平仄法——押韻法——音數律、七五調、五七調——破格の詩(心律詩)——內容律(內在律)

詩は人間の思想の音樂的表白ですから、從つて、韻律は詩に缺くべからざるものです。と言ふより、韻律なき詩といふものはあり得ないと斷言した方が一層適切でせう。されば韻律の問題は詩人の心を潛めなければならぬところです。然しながら、私は持論として、韻律の法則はこれを學問的に硏究するよりも、多讀と多作とによつて、卽ち經驗によつて、實際的に了解すべきものだと思つてゐます。が、初學の人のためには、その大體を說明するのもあながち無益でもありますまい。

韻律の形式は平仄法、押韻法、音數律、內容律(又は內在律)の四つにわかれます。

平仄法は漢詩や西洋の詩に用ゐられる抑揚長短に基く韻律で、

When the moon is on the wave,
And the glow-worm in the grass……
(Byron)

試みに英詩の平仄の一例を示せばまあこんな風ですが、日本の詩には全然關係がないから、別に詳しく説明する必要もないでせう。

押韻法は反覆の韻律で、頭韻、胸韻、脚韻などにわかれ、西洋の詩には必ずこれが必要なのです。が、日本に於ては、押韻を施した詩といふものは殆んどない。稀れにあつても全篇を通じて押韻を施すと云ふやうな事は絶無である。例へば『暮笛集』の巻頭の一聯、

遲日巷の
塵に行き
力ある句に
苦みぬ
(泣菫)

の如き稀れなる押韻詩の例とすべきものも、全篇にわたつての押韻ではない。殊に脚韻を施す事は日本語の性質上全然不可能と言つてよい。日本語にあつては、むしろ西洋の詩にはあまり見かけない頭韻がより容易である。

いま見るはあどけなき
いにしへの姿にあらず、
いと脆き夜の蛾のごと
いたましき汝れが面影――

いまもなほさやかなれども。
　　　　　　　　　　　　　（春月）

の如き、なほそれの一段複雜になつてゐる
　あだし野の枯草は燃ゆる日なくて、
　とこしへの無言にこもる墓の一列、
　とぶ鳥のひとつだにも鳴けるはあらず、
　靑き火の消ゆるごとくに凄慘の
　　　光ただよふ。
　　　　　　　　　　　　　（春月）

の如きは、頭韻を踏んだ稀れなる例なのであるが、然し日本語にあつてはかうした押韻はさしたる効果はないやうである。私のかうした試みも、今から見れば單なるものずきにしてしまひたい位。若氣のあやまちと言つてしまひたい位。

　これに反して、音數律は日本語の詩に於て古から準據して來た韻律で、日本の詩の韻律と言へば、直にこの音數律をさしてもいい位です。所謂五七調、七五調などといふ律格が卽ちそれで、日本語の詩の約束は從來全くこの音數律に限られてゐたのです。古事記や萬葉集の歌からはじめて、德川時代の小唄や、淨瑠璃や、謠曲や、俳句や、俗謠や、すべて詩と名け得べきものは、すべてその例に洩れません。されば、新體詩を創始した矢田部、外山、井上の三博士が七五調、五七調を採用したのはさもあるべき事です、もつとも博士等の作中には漢文流の、演說口調の破格の詩もあるにはあるけれど。ところで、この音數律について岩野泡鳴氏は一つの面白い表を作つた、それを今參考の爲めに揭げて見ませう。

音脚結合表

五の句　二、三。
　　　　三、二。

七の句　二、二（乃ち四）、三。
　　　　二、三、二。
　　　　三、二、二（乃ち、四）。
　　　　三、四。
　　　　四、三。

二、三、四を以て單位とす。

泡鳴氏は日本語の韻律について一番科學（サイエンティフィック）的な研究を試みた詩人で、氏は單に五七、七五といつたやうな音律の差別に滿足せず、更にその五、その七を分析して、五が二と三とよりなり、七がまた五種類の結合のしかたをしてゐる事、二、三、四が音の單位たるべき事を說いてゐるのであるが、それはあまり專門的になるから、今はただ各種の律格を示すのに止めよう。

　處女（をとめ）ぞ經ぬるおほかたの
　われは夢路を越えてけり
　わが世の坂にふりかへり
　いく山河をながむれば　（藤村）

これは七五調です。七五調は一番廣く用ゐられたポピュラアな形式で、その特色は流暢で、やはらか味に富んでゐるところにあるが、その弊は上すべりのしたものになりやすいところです。

初期の藤村氏や、文庫派の詩人の如き、溫和な女性的な詩人は殆んどこの形式のみを用ゐてゐます。

　また秋かぜに帆を揚げて
　うらじほの海ねてわたる

星月夜こそをかしけれ
なにをあらぶるあら浪ぞ
をりをり船にくだけては
ほほ黒髪を濡らしける

（寛）

これは私の好きな詩の一つではあるけれども、『東西南北』時代の與謝野寛氏のかうした男性的な豪放な詩は、七五調にはふさはしくない位、それほど七五調は柔かい女性的な優美、典雅、纎細の趣きのある音律なのです。
七五調に次いで最も廣く行はれたのは五七調でした、

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす蘩蔞は萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る

（藤村）

五七調は七五調の優雅なのに對し、莊重、素朴の趣きをあらはす、何となく寂しい感じのする音律で、七五調より深味があります。後年の島崎藤村氏が七五調より五七調を多く採用されたのは極く自然な事だと思ひます。五七調は青春を葬つたのちの氏のやや大人びた感情にふさはしかつたのでせうから。

ゆきずりのわが小板橋、しらしらと
一重のうばら、いづこより流れかよりし、

君待つとふみし夕にいひしらずしみて匂ひき、
今はとて、思ひいたみて、君が名も
夢もすてんと嘆きつつ、夕わたれば、
あゝうばら、あともとどめず、小板橋ひとりゆらめく。

（石上露子）

この詩は近ごろ『美人傳』中に發見してから、私の愛誦してゐるものですが、いかにも女性の感情の溢れてゐるいい詩です。この律格は五七の變格であるが、かうした變格と雖も、五七の感じを失つてゐないかぎりやはり五七調です。兎に角五七と七五とは以前の詩を支へる二大柱石であつたのです。その他の律格はこの二つに比べるとその勢力が極めて微弱なものでしたが、單調を破るためには、それらの律格も必要ではあつたのです。

静かなる病院の
死のごときたそがれや
その壁の、その窓の、
色鈍びて……

（露風）

これは五五調。五五調は調子があまり短かすぎて、落着きがなく、慌しい感じがしてあまりいい律格ではありませんでした。

花薔薇、はなさうび、
汝は病めり。飛ぶかげの
見もわかぬ夜の蟲の、
凪さゆる闇にして

深紅なる歡樂の
汝が床を見出でたり。
そのくらく密なる戀に
戀にしも汝は死なむ、

（ヰリアム・ブレエク）

これは生田長江氏の譯した『病める薔薇』といふ名詩である。ところで、この譯のごときいゝ譯ではあるけれど、五五調を採用した爲めに（一行不規則なところ、即ち五七になつてゐるところはあるが）多少損をしてゐる傾きがある。――もつとも五五調の適した內容がない事はあるまいと思ふが。

日はかたぶきけりあなたの岸に
ひねもすつかれしひるもねむりぬ
この池の面にみどりの色の
ふかくもうつれる青柳のいと
はるけき空なる人をしのびて
袖はうるほひぬ涙の露に

（レナウ）

これは八六調の見本で、詩は新聲社の『於母影』中の『あしの曲』の一節で、憂鬱な詩人レナウの憂鬱な調子がこの律格によつてよく出てゐると思ふ。

夢は失せにし玉の如く
覺めて摑むとすれどあはれ、
艶も光りも跡を絕ちて

闇にのべたる片手ばかり　　（泡鳴）

これは七六調。この律格は七五を變化して、成功したものの一つでせう。

夢ながら窓見る
はなれ磯の海の家
春の扉に花ちり
こよひまた暮れゆく、　　（小林愛雄）

これは五四調。どうも無理のある律格で、次ぎの六四調と共に、四の音が不自然な感じを與へる。

闇に手あり、幾多の
生をもとめ、偶々
君が胸にやどりぬ、
無爲に飽けるその魂。　　（泡鳴）

これが六四調ですが、これまたどうもあまりいい律格とは思はれません。おそらく誰が見ても吟調（朗吟すべき調子のもの）とは言へますまい。

海原こえて、海原こえて、
幸ぞ夜行く。
薔薇をかざし、ほそき腰には
もつれて垂るゝ絹衣をまとひ、
海原こえて、海原こえて、

（アルノオ・フオン・ワルデ）

幸ある言のかずかずを擔ふ。

これは七七調（多少不規則ではあるが）。なほ以上の外に、七四調、六六調、八七調、七五七調、五五七調等一々枚擧の遑がない。岩野泡鳴氏の如きは、その獨特の韻律論からして六四調とか、七六調とかを盛んに用ゐ、蒲原有明氏の如きは更に七五の二行を一行の間に重ねたり、五七五、七五七といふ風に組合せたり、その他、今考へると多少馬鹿げても見えるけれど、その當時はいづれも眞面目に、眞劍に新しい試みをしたものです。これは皆、詩人が漸く七五調、五七調の單調に倦んで、どうかして新しい律格を工夫して、新境地を開拓しようとした努力の現れなのでした。けれども、悲しいかな、五七、七五は嚴として動かすべからざる日本語の韻律の原則なのです、どうしてもこれを脫却する事は出來ません。その證據には、五七、七五の律格をなるべく想起せしめまい爲めに四や、六の音を採用した律格はつひに一般的になり得なかつたではありませんか。また、五七五、七五七、五五七などの律格の如きは、要するに五七、七五の苦しい變形にすぎなかつたではありませんか。この五の音と七の音が日本語の、日本の詩の韻律の根本だといふ說は私の確信です、現今の文語はもとより、口語の自由詩でさへも、外形から見れば、やはりこの五と七の音の上にその律格の基礎を置いてゐるのです。

かうして七五、五七といふ音數律の單調に飽いて、詩人はいろいろの試みをやつたのですが、それは要するに試みたるに終つて、一として七五調、五七調に代るべき律格を作り得ないで、つひに破格の詩の時代となりました。もつとも、破格の詩——かりに破調と名けませう——は『新體詩抄』時代から存してゐて、國木田獨步の『山林に自由存す』や、與謝野寬氏の有名な『日本を去る歌』などの記憶せらるべき詩を既に出してゐます。ところでこれ等の詩は、專ら漢文調を多分に帶びてゐますが、この破調は現今に於ても、やはり漢文調が勝つてゐます。それは、漢語を自由に用ゐるから自然さうなります。ところで五七調、七五調は原則としてやまとことばを用ゐるべきもので、七五調に

漢詩の調を託した土井晩翠氏と雖も、やまとことばより漢語を餘計には用ゐてゐません。が、それでは十分複雜な思想を歌ひ得ない、ここに於てかいきほひ破調たらざるを得なくなります。

わが力は把手なき玻璃の手斧にして
わが智は煖爐の上に舞踏する黃蠟製傀儡なり
わが肉身は街頭に渦卷く漏電にして
わが業蹟は暴風のあしたの砂丘のやうなり

（耿之介）

例へばこの詩の內容の如き、決して七五調や五七調や其他の音數律では、歌ひ得ないでせう。破調は自由な詩形です、自由詩です。が、自由詩といふ名稱は專ら口語の詩に用ゐられるゆゑ、三木露風氏はかうした破調を心律詩と呼んでゐる。內心のリズムに從つた詩と云ふ意味です。

これまでは詩人は常に七五とか、五七とかの制約を意識してゐました。それだけにそれを脫却しようとして懸命に骨折つたのです、が、さうした音數の制約を根本的に無視し去らうとする考へはなかつたのです。ところが、一朝にしてその柵は飛越された。飛越して見ると、今まで音數律の不自由を忍んで來たのが（音數の制限には、一方に思想感情を誘致する利益もありますが）馬鹿らしく思はれるのです。前にも言つたやうに、詩人がその制限を飛越したのは、第一に思想が複雜になり、細緻になつて、音數の制限を默つて受けてはゐられなくなつたからですが、一つは七五其他の律格が一種の型となり、古い革袋になつて、生命を失つて來たからです。然し、かう言つたからとて、直に音數律の詩を棄て去るべきかと言へば、私は否と答へたい。ただ七五調をはじめ音律詩は、短歌や俳句と同じく既に完成した形式で、形式が主だからこれまでの作の反覆になりやすいのですが、然し若しさうした氣分——七五的氣分、五七的氣分といふやうなものはたしかに在る——になつたら大に作つていいと思ふ。ところでこの新しい破調の

詩は、既に音數律の方式にかなひません、尠くとも音律詩たるべくあまりに不規則です、然しその詩たる以上は、何等かの韻律を有してゐなければならない、然らば音數律に代るものは何かと言へば、即ち內容律（內在律ともいふ）です。（內容律を口語詩にのみ存するやうに思ふのはおろかな偏見です。）しからばその內容律とはいかなる韻律か、これは項をあらためて說明する事にする。

內容律の話

リズムとは？――自由詩と內容律――諸詩人のリズム

リズム！　リズム！　リズムといふ言葉は詩人の絕えず繰返して言ふところで、そして直ぐには呑込めない言葉です。リズムとは何でせうか？

リズム、即ち韻律には「韻律の話」の項目に於て說いたやうに、形式のリズムと內容のリズムとの二つがあります。七五調などといふのが形式のリズムで、內容律（又は內在律、心律）は即ち內容のリズムに他ならない。形式のリズムは、個性のリズムといふより、より以上に傳習のリズムですけれど、內容のリズム（即ち內容律）は、詩人の呼吸そのものであり、詩人の生命そのものであり、詩人の肉體そのものであつて、それはその內容――その思想感情と引離す事の出來ないものであります。

かうしてふだん神を信ぜぬ身ながらも
ただ何とはなしにつつましい祈りをあげて、
眠る氣持は、どんなに樂しからう。

一日のたそがれさへもさうなのだから、
一生の生のたそがれはどんなだらう？
ああ、そのために私はもつと、もつと懸命に働かう。

（春月）

例へばこの詩である。これなどこの內容を引離してこの詩のリズムを說く事は不可能なのです。ところが形式的なリズム——音律詩だとそれが出來る、七五調ならば七五調で、さう言へばもう內容は擧げなくてすむ。ここが外形律と內容律との相違なのです。

リズムは音樂です、然しそれは心の音樂です、內心に奏でられる節奏です、古い言葉で心の琴線といふのがあるが、あれがよくリズムといふ事を說明します。卽ち、胸の琴線に觸れて生ずる音色が、リズムであり、詩であるのです。是故詩とリズム（內容律）とは同じものと見てよい。內容律とは我々の感情の波動の外に現れたものに與へられる名前なのです。

特に韻律の問題について多年硏究をすすめてゐる福士幸次郎氏はこの內容律を說明して曰ふ、

梨の花が眞白に咲いたのに
今日もまた降る雪まじりの雨。
濁り水は早口に鍛冶屋の桶にをどり込み
眞裸な柳は手放しで、靑い若葉を濡らしてゐる。

（幸次郎）

「此の波線は語勢の緩慢を示し、直線は急速を示す。音樂上の motif といふ言葉を初頭の句が他の句に變化と續進を與へる意味にとれば、此の詩の形式が其れである。第一行第二行は波線一つで始まり、第三行第四行が語勢を變じて波線直線を代り〳〵に使つてゐる。自由詩形式の驅使者の要は此のモテイフを一に摑まへるにある。この作者

が時に應じて緩急の瓣を握る所が今後の新しい詩歌の進むべき所で、讀者はこの點に或る會得が行けば、七五調の日本在來の形式が却て煩さいものになつて來る。」

この語勢の緩急といふ事に着眼したのは、さすがに卓見であるが、日本語にあつては今のところ、これは未決の問題に屬するでせう。そして私の考へでは、これは科學的な研究よりも、詩人多年の實驗に俟たなければならないものかと思はれます。

なほ、現代の諸詩人のリズム（內容律）を示すために、ここに二三の詩人の作例を擧げて見ませう。

そのとき座にある友はみな唏いた
友はみな淚に充ちた目で
悲嘆と感激とに掩はれながら
どうにもならない運命を呪うた
しかもその畫家は旅館に呼び出しをかけて
一夜の中にさんざ弄んで
自分だけぷいと發つてしまふさうだ
その畫家のためにどれだけの處女が
淸い正純な魂を傷けられて
どんなに不幸な生涯を送つたことだらうか
（犀星）

これは野中の一本松のやうに野生的な愛すべき詩人室生氏の『地獄門』の一章中の詩句で、そのあまりに單純なのは慊らないが、またそれが尊いとも言へます。全く、この人は純粹な生一本の詩人です。そして氏のリズムはその人道

的の激昂にかかはらず落着いて平淡だ。時には散文のリズムに近いやうに思はれる位。

わたしは「昨日」を葬る、やさしい言葉もかけず。
わたしは合掌する、わたしの燃え立つ魂に。
わたしは瞑默する、靜かな夜にもきこえる皷動に。
わたしは火をかかげる、わたしの心の隅々を明るくするため。
わたしは歌ふ、大聲を張りあげて、わが心の動くがままを、言葉と響にして。
ああ過ぎゆくものの一切、わが前を消えさるものの一切、
われはそのために嘆かず、わが愛撫の心を生き動くものの上にとさし向ける、
わたしは一切の死滅を幻と信じて、
うつりゆく「時」の胎內にわが「生」をささげる。

（柳虹）

川路氏は優美な女性的な詩人で、そのリズムも過激なところは少しもなく、小川の水のやうに淀みなく、緩急なしに流れて行くやうに思はれる。何處となく柔かなチャアムのあるのが此の人の特色です。

わたし共にもやがて最後の時が來て、この人生と別れるなら、
願はくば有難うと云つて此の人生と別れませう。
灰色の粉雪、七むつかしい顰めつ面の迷ひ雲、
雪は下界のあらゆる聽覺を障ぎり、老と沈默と追憶の、
ひとりぼつちの古美術品展覽會、
ああ世の聾の老博士、無言敎の寡婦さん、子に先だたれた愁傷な親御達！

あなたがたの悔や嘆きもさる事ながら、
願はくば死ぬ時この人生にお禮を云つて御暇乞ひをして下さい。
それは慥かに人生に對する寛容の美德です。
惡に報いる金色の光放つ善です。
生はそれぐらゐ氣位高く、強く、明るく、情熱を以て、
鏡のごとく果つべきです。

（幸次郎）

これは『感謝』と題する一篇で、この作者の傑作の一つだらうと思ひます。私は心からの推讃の辭を捧げずにゐられない。福士氏は由來あらしのやうな激烈なリズムをもつて知られる。もつともこの作の如きは、その老成した落ついた思想のそれらしく溫和ですが、いかにもなつかしい感じを與へます。

自由詩—日本の自由詩とは？

ヴェエル・リブリスト——イマジスト——口語詩の運動と自由詩——現代の自由詩人について

自由詩とは佛蘭西語の vers-libre（ヴエエル・リイブル）の譯で、故三富朽葉氏や、加藤介春氏や、福士幸次郎氏等が自由詩社を起して、口語詩の詩作を試みたのが、多分我國に於て自由詩の名の用ゐられた嚆矢だらうと思ひます。

順序として、まづ佛蘭西の自由詩（ヴエエル・リイブル）のことを一寸話して見ませう。

日本の詩は元來法則がない。わづかに存するのは、五七とか、七五とかいふ音數の制約位なものでした。ところが

西洋の詩には、いろいろとむづかしい法則があつて、詩人の奔放な思想を拘束してゐたものです（もつともその制約が一面詩人の發想に便利であつた點も無視しがたいけれど）。それでこの法則を打破しようとしたのが近代の佛蘭西詩人の努力だつたのです。

自由詩の生ずるまでは、古典的な詩の法則——韻語法はすべての詩人を支配してをりました。ひとり、佛蘭西のみならず、英吉利も、獨逸も、伊太利も、其他の國も同樣です、國々に於て多少の相違はありましたけれど。で、今そのむづかしい法則の一例として擧げれば、佛蘭西の十二綴音詩、即ちアレクサンドリン調です、これなどは一行の綴音が必ず十二に限られてゐて（獨逸のアレクサンドリンは十三綴音ですが）、從つてその行の長さも大抵揃つてゐました。そしてまた、一行の終りと一つの意味の段落とは一致してゐなければならなかつたのです、即ち、その行で歌はれる意味は、その行で一きりついてゐなければならなかつたのです。そしてその意味が次ぎの行にまで及んでゐるやうな事があれば、これを enjambement と云つて、原則として許す可からざる事とし、それを犯すのは詩人の技倆が足りないからだとして、よくよくの場合でなければ用ゐられませんでした。ところが、さうした立法に服從する事を欲しなくなつた反逆者の一團は、ヴェルレエンや、マラルメや、ランボオを始めとし、フランシス・ジャンム、ジュウル・ラフォルグ、ヴィイレ・グリッフィン、レニエエ、ヴェルハアレン等の新詩人たちは、——所謂 vers-libristes（自由詩派）の名を以て總括されるこれ等の象徴派詩人は、つひにその一切の拘束を打破するに至つた。

彼等は從來の外面的な韻律法に代るに、內面的な韻律即ち內容律を以てした。自分の心の呼吸から生れるリズム、內部の節奏に從つて詩作するやうになつた。從つてアンジャンブマンの如きも極く普通の事になりました。自分の呼吸を外部の制約によつて律せられる事なしに、その儘、紙の上にうつすのですから、一つの呼吸が一つの句、一つの行となるからして、勢ひアンジャンブマンたらざるを得ないのです。そこでたつた二三綴音しきやない短い行があるかと

思へば、その次ぎには、これはまた馬鹿に長い句が來つて、まるで脊の低いエスキモオや、日本人や、脊の高い西洋人などがごちやごちや並んでゐるといつた風な詩が現れました。その上、其句その行の意味を現はす肝心な主格が次ぎの行にくりのべられてゐるといふ風な詩も稀しくはなくなりました。例へばヴェルレエンの有名な『秋の歌』の

秋の
ヴィオロンの
節ながき啜り泣きは……

（ヴェルレエン）

の如きアンジャンブマンもアンジャンブマン、大變なアンジャンブマンです。それから、詩句を單に聽覺（耳）に訴へるばかりでなく、視覺（目）に訴へるべきものとして、文字の配列を繪畫的に（詩句の長さを並木か何ぞのやうにきつちり揃へたりするのも、一つは繪畫的効果のためです）するといふやうな、例へばゴオチエの詩のやうなやり方も最早顧られなくなりました。それが外面的な技巧であつて、內部の節奏と何等相關するところがないからです。

かうして自由な大膽な新しい詩形、自分たちの個性によく適した、自分たちのリズムを生かすのに一番ふさはしい、一定の律格に支配されないで、めいめいの呼吸をさながらに寫し出す詩形が創り出されたのです。これが佛蘭西の自由詩の起原なのです。けれども、佛蘭西にあつても、自由詩が獨裁君主となつたわけではなく、まだアクレサンドリンや其他の音律格を用ゐる詩人もあり、自由詩派と雖も必ずしも自由詩のみを作るわけではありません、が、自由詩が詩界の大體の趨勢を支配してゐるのは事實です。

ところでこの佛蘭西の自由詩派以外に、亞米利加に於ては、かの大膽な『人間』の詩人ワルト・ホイットマンが夙に在來の詩形を破壞して殆んど散文と同じい詩を作つてゐました。これは自由詩以前の自由詩とも云ふべきもので、英米の詩人はこのホイットマンの詩と佛蘭西の自由詩派との影響のもとに、自由詩の完成を期して起つたのです。それが

かの Imagist の一團です。Imagism とは Image（影像、又は生々した繪畫的の描寫）といふ言葉から出たもので、事物の影像を正確に如實に表現せんことを期する主張ですから、寫象主義又は表象主義（この表象とは哲學及び心理學上に古くから用ゐられてゐる獨逸語の Vorstellung の義で、象徴の義ではない、岩野泡鳴氏の如きは Symbolism を表象主義と譯してゐられるから混同してはならない）と譯すべきもので、この運動は數年前より英米の詩壇に起り、その代表的な詩人は、アミイ・ロオウェル女史を始め、リチヤアド・オルディントン、ジョン・フレッチア、エフ・エス・フリント、テイ・エチ・ロオレンス等の人々です。

寫象主義の主張は左の如くです。

一、日常の用語を用ゐること。但、常に的確なる言葉を使用し、十分的確でない言葉又は單に裝飾的な言葉を使用しない事。

二、新しい氣分の表現として新しい旋律を造り、單に古い氣分を寫すのみなる古い旋律を模寫しない事。我々は自由詩を以て唯一の作詩法だと主張するのではないが、我々は自由主義のために戰ふやうに自由詩のために戰ふものである。我々は詩人の個性が舊來の詩形に於けるよりも自由詩に於て更に一層よく表現せられるものと信じてゐる。詩歌に於ては、新しい格調が卽ち新しい思想である。

三、詩題の選擇に於ては絕對の自由を許す事。

四、影像を表はす事（これ故に表象主義者と呼ぶのである）。我々は畫家ではないが、個々の事物を的確に表はし、いかに壯大明朗たりとも、曖昧な概括的辭句を使用しない事。

五、朦朧又は漠然としてゐない堅固明瞭なる詩を作る事。

六、最後に、我々は多くの場合集注が詩歌の本質なる事を信ずる。（山宮允氏の紹介による）

まあざつとこんなもので、これでほぼその主張はわかると思ふ。つまり、自在に各自の適意の題材を選擇して、それを自由なる詩形を以て的確明瞭に表現しようといふのである。然しこれは何も今更驚くやうな新奇な主張ではない、古來すぐれた詩人は凡て自分の好きな題材を捉へて明晰的確に歌つてゐる。ただ特に注意すべきは、やはり自由な詩形を以てすべしとの主張である。イマジストも要するに自由詩の主張者として以外にはさして重要なる意義を有してはゐない。

そこで今度は愈々我國の自由詩です。

我國にはもともと西洋のやうなむづかしい法則はありません。ただ音數の制約があつただけで、かの所謂七五調とか五七調とかいつたやうな律格がまづ西洋のアレクサンドリンなぞに比せられるものでせう。ところでこれを打破する第一の動機となつたものはかの口語詩の運動です。それまでにも七五調や五七調が習俗的なものとなり、單調に流れ、千篇一律な平板調に墮してしまつて、詩人の個性の顯著なる發揮を妨げることを自覺した詩人等は、その不滿からして色々な新しい試みをしたのですが、まだ音數律を全然一擲し去るだけの勇氣はなかつたのです。ところが、そこへ自然主義の思潮が入つて來て、今までの浪漫主義を壓倒し、在來の形式主義を破壞したため、詩歌は非常な衰頽に陷つたのですが、その衰頽の中から、一面にはその習俗打破の叫に動かされ、一面には片山孤村氏のデエメルの詩の口語譯などに刺戟されて所謂口語詩といふものが生れました。口語の制作を一番さきに試みたのは川路柳虹氏で、次いで岩野泡鳴氏や、相馬御風氏や、三木露風氏がその試作を發表し、また一方には自由詩社の運動が興りました。（私自身もその時代に少許の口語詩の作を出しました。私の二つの詩集のはじめに載つてゐるものがそれです。）これが卽ち今の自由詩の起原で、自由詩社の人々の中では、三富朽葉と今井白楊とが不幸にして世を早くしたが、福士幸次郎、加藤介春氏等は今になほ努力を續け、川路柳虹氏亦依然として力作を出し、更に室生犀星氏出でてドストエフ

スキイの愛を歌ひ、萩原朔太郎氏は病的な感覺を歌ふ外、ホイットマンの感化の下に立つ富田碎花氏、白鳥省吾氏、福田正夫氏等一々名を擧ぐるの煩に堪へない位です。最後に、現今の自由詩の模範となるべき二篇を揭げて諸子の參考に供する事にします。

この感情の伸びてゆくありさま、
まつすぐに伸びてゆく喬木のやうに、
いのちの芽生のぐんぐんとのびる、
そこの靑空へもせいのびをすればとどくやうに
背も高くなり胸はばもひろくなつた、
たいそう麗らかな春の空氣をすひこんで
小鳥たちが喰べものをたべるやうに、
愉快で口をひらいてかはゆらしく、
どんなにいのちの芽生たちが伸びてゆくことか、
草木は草木でいつさいに、
ああ、どんなにぐんぐんと伸びてゆくことか、
ひろびろとした野原に寢ころんで、
まことに愉快な夢を見つづけた。

（朔太郎）

×

友と語る最初の一時間はうれしい

話に隙がなくてうれしい
話がだれると
苦しい問題がいつも自分に乘りかかつてゐるので
そいつが友との話の邪魔をする
いろいろな事を考へさせる
くたびれる
すまないと思ひながらつい默つて終ふ
これをもゆるしてくれるだらう　友よ

（犀星）

共に二氏の代表作ではないが、そのいいところをよく現はしてゐると思ふから引いて見たのですが、これらの詩を以前の音律詩と比較して見たならば、そのいかばかりか自由な事に驚かれるでせう。然し自由詩は今のところまだ完成されてゐません。その完成は、今後詩壇に立つ若い人々の任務だらうと思ひます。

民謠詩——民謠の價値とその研究

俗謠調について——小唄——ソング、リイト、シヤンソン

一口に民謠と云つたのでは甚だ漠然としてゐますが、古來の民謠（俗謠）を始め、一切の俗謠調の詩をひつくるめて、便宜上から名附けたまでです。民謠詩は古來の純粹の民謠と、專門の詩人の手に成る民謠風の詩との大凡二つにわけられます。

先づ純粋の民謡そのものについて少しく話して見ませう。民謡はその名の示す如く民の謠(うた)で、いつ誰れが作つたとも知れず、口から口へ傳へられて、田野の間に、街道の上に、小舟の中に、隨所に歌はれる唄(うた)で、その唄の種類によつて、茶摘唄とか、馬子唄とか、舟唄とか、盆踊唄とか、童謡とか、いろいろの名稱はありますが、その僞らぬ人情の聲なのはいづれも同一であります。

民謡は世界中のどこの國にも無いと云ふ事はありません。民謡は詩の一番原始的(プリミティヴ)なもので、またその最も純粋なものであります。民謡には作者の名の知られてゐるものは殆んどありません、みな、胸一杯になつた感情が泉の水の溢(あふ)れるやうに溢れ出て歌になつたもので、作者は詩人としての名譽などといふ不純な考へはちつとも持たず、ただ小鳥の歌ふやうに歌つたのです。だからその歌は自由で、眞率で、純粋で、單純で、素朴です。なまじつか教養のある專門の詩人だと、自分より前(さき)に出た大詩人の模倣をしたり、むづかしい言葉を使つて人を驚かさうとしたり、技巧に腐心して天眞の感情を傷けたりして、不純なもの、虚僞なものにしてしまふ虞(おそ)れがありますが、無教育な田舎娘や、田野、山林の人達はそんな事はありません。ただ感じた儘を何の修飾(かざり)もなく、何の技巧もなしに、日常(ふだん)つかつてゐる平凡な單純な言葉で歌ふのですから、眞情流露、人の心を動かす名詩とならずにはゐません。詩作の祕訣は實際この外にはないのです。だから私はもう一度繰返して言ひます、民謡は詩の最も醇なるものであると。そして田園に隱れてゐる無名の作者——それはたつた一篇の民謡しきゃ作らなかつたにしても——こそ尊敬すべき眞詩人であると。

私は恐らく、他のいかなる人よりも、民謡を尊重し、民謡を愛します。愛せずにはゐられないのです。然し、これは私の極くかたよつた嗜好ではなからうか？　專門の詩人に抗(さから)ふためにわざと民謡を尊重するのではなからうか？
「否(いや)、否(いや)、決してさうではない」と私は力強く答へる。私の民謡尊重說はその由來するところ甚だ深いものがあるのだから。

私はここでもまたかのギョオテの詩について少しく話さなければなりません。ギョオテの詩は、用語が簡易平明で、結構が單純で、難解な詩語や匠氣の痕は何處からも見出せません。そしてさうした平凡な言葉と單純な形式とで出來てゐるにも拘はらず深く人の心を動かし、人の胸に沁みこまずにはゐません。さすがのハイネですらも「ギョオテの詩は一種言ふべからざる魔力を有してゐる。その調和した詩の句はやさしい戀人のやうにおまへの胸にまつはり、その言葉はおまへを抱擁し、その思想はおまへを接吻するだらう」と言つてゐます。然もこのギョオテの詩のうちに含まれてゐる魔力は抑も何處に存するかと云ふに、唯その單純と素朴との中に存するのです。平凡な言葉と單純な形式とで出來てゐるにも拘はらず人の心を動かすのではなく、平凡な言葉と單純な形式とで出來てゐるからこそ人の心を動かすのです。つまり、ギョオテの詩の魔力は、その民謠體を成してゐるところに存するのです、その民謠の精神によくかなつてゐるところに存するのです。

ところでギョオテはどういふ風にしてあのやうな詩風を創り出したのでせう？

ギョオテは青年時代にヘルデルといふ先輩に會ひました。ヘルデルは「抒情詩人はよろしく民謠に學ばなければならない、民謠は直覺的で、その用語や措辭の如き國民性の中心より發する天眞の聲であるから、簡易平明にして人を動かさずんば止まぬものがあるから、詩人の宗とすべきものである」と說いて、自ら率先して世界各國の民謠を蒐集して『民聲』(Stimmen der Völker)と題して出版した程です。で、若きギョオテはこの偉大なる先覺者ヘルデルの說に深く動かされて、自ら田園、山林に赴いて、或は獵夫、牧人、農民の歌に耳を傾けたり、或は古文書を探究したりして、研鑽大に努め、つひに民謠の眞趣を悟得して、かくてその詩風を創り得たのです。ギョオテの『あれ野の薔薇』や『牧者の嘆き』のやうな詩は、全然普通の獨逸の民謠とおなじやうな味ひをもつてゐます。ギョオテの語法がどれ位民謠に近いか、飜譯では十分わからないかも知れませんから、餘計な事ながら原詩を引いて見ます。

Die Nachtigall sie war entfernt,
Der Frühling lockt sie wieder;
Was Neues hat sie nicht gelernt
Singt alte, liebe Lieder.

春が來て、呼びもどされた夜鶯（うぐひす）は、
耳あたらしい歌でもならつて來たかしらと
思うてきけば、これはまた、
ふるい馴染の歌ばかり。

（ギヨオテ）

むづかしい言葉や言ひまはしなんかたつた一つだつて出てはゐません。いかにも單純で、深く心に沁みるではありませんか。なほ序ですから獨逸の民謠をひとつお目にかけて見ませう。

いのちのランプの燃えてるうちに
この世のくらしを樂しましやんせ、
薔薇（ばら）をつむならしぼまぬうちよ！
求めこのんで氣苦勞を買つて
いばらを探していばらをつかみ、
おぞやそこらの道ばたに
かあい菫の咲いてるを
かへりみもせずすぎて行く。

（民謠）

ギヨオテの態度はのちの詩人に影響せずにはゐませんでした。ウウラント、アイヘンドルフ、メエリケ等の詩人はいづれもそれに倣つて、盛んに民謠體を試みて、多くの名作を出しましたが、就中、傑出してギヨオテと比肩してゐるのはハイネです。ハイネの詩が獨逸のみならず世界中に廣く愛讀されて、既に幾千となく有名な音樂者に作曲せられてゐるのは、その詩想のあはれに美しく、多情多恨な詩人の胸の惱みをさながらに示してゐるからでもありませうが、またその形式が自由で、その用語が平明でその調子が音樂的で、つまり民謠の特長を遺憾なく發揮してゐるからだと思ひます。

きれいなあかるい黄金の星よ、
遠くのわが戀人に告げてくれ、
心いたみて靑ざめて
わたしはあなたを忘れぬと。

（ハイネ）

この私の拙い飜譯でも、さうした特長は多少わかる事と思ひます。

それから日本の民謠はどうでせうか？　自分が日本人である所以か、私は西洋の民謠より日本の民謠の方がずつとすぐれてゐるやうな氣がします。詩人の詩の中には、惡くすると美しい文字の累々たる死骸の谷としか思へないものがあるけれども、民謠はいかなる國のものでも生きた人間の聲です。ただ西洋の民謠は西洋の詩人の作の兎角さうであるやうに、冗長で、叙事詩風で、多くは物語詩ですが、日本の民謠は極く短い中に、たくみに人情の機微を歌つてゐるから、とりわけ生きた人間の本當の聲に接する思ひがするのです。

さまの寢姿けさこそ見たれさつき野にさく百合の花
しゆすの袴のひだとるよりもさまの機嫌のとりにくさ

來るか來るかと川しも見ればいぶきよもぎの影ばかり
わかいをなごのとのごのないは笠にしめ緒のないごとく
おもひ出す夜は枕とかたろ枕ものゆゑこがるるに
あはで寢る夜は夢こそたのめうつなつま戸を夜の雨

これらは「諸國盆踊唱歌」其他ですが、いづれも古今の絶唱だと思ひます。また小歌の『曉明星』

あかつきの明星の、西へちろり、東へちろり、ちろりちろりとする時は、扇おつとり刀さいて、太刀の鐔に手打ちかけて往うよ戻らうよと、いうては袂にとりついた、いなうとも戻らうとも、何ともわごりよの御計ひと、いうては小腰に抱きついた、最愛者には、きりんのきりんきりりん、かぎりりりんのもりりんの、ても力も無いもの。

の如きやはり民謠のすぐれたものと言ひ得べく、

夢の浮世の、露の命の、わざくれ、なり次第よの、身はなり次第よの。

などの名歌の多い隆達節唱歌や、端唄や、どゞいつや、すべての俗謠は皆民謠です。徳川末期の歌曲にはあまりに技巧に馳せすぎて、またその作者が一種の專門家であつて、民謠と言ひ得ないものもありますが。それからさかのぼつて、『萬葉集』の、とりわけ東歌の如き、民謠中の粹と言はなければなりません。

稻つけばかがるあが手を今宵もか殿のわく子がとりて嘆かん

など、今も昔も變らない田舍娘の飾りのない心持でせう。かうした日本の民謠の絶唱はもつともつと擧げたいし、擧げれば際限のない程多いのですが、ここでは割愛するとして、今度は專門の詩人の手になる民謠詩——即ち、俗謠調の詩について話す事にします。

日本の民謠は、今の自由詩に用ゐられる現今の日常語とは一寸違つた調子のもので、これが所謂俗謠調ですが、新體詩が始まつてから、この俗謠調を試みた詩人は尠くなく、平井晩村、野口雨情、福田夕咲、人見東明等の諸氏を始め隨分澤山ありますが、一番成功した人は恐らく北原白秋氏でせう。氏の名著『思ひ出』はさうした俗謠調の名作に富んでゐる。

そらにまつかなくものいろ
びんにまつかなさけのいろ
なんでこのみがかなしかろ
そらにまつかなくものいろ　（白秋）

これなどもなか〳〵名高い作ですが、氏にはなほ、近く「鄙唄」といふ俗謠調もあるし、有名な「さすらひの唄」もある。「さすらひの唄」より一層ポピュラアなのは相馬御風氏の手になつた『カチュゥシャの唄』です。

カチュゥシャかあいや
わかれのつらさ
せめて泡雪消えぬ間と
神に願ひをかけましよか

これなど、たしかに俗謠の調子をよく生かしたものと思ひます。あの唄があんな人氣(ポピュラリチイ)を得たのは、作曲がよかつたからでもありますが、唄もたしかによかつたからです。それから、これは詩人ではないが、泉鏡花氏の『靈象』中の「象うた」、

何處(どこ)も變らぬ戀路のならひ、

雨が降らうが、日が暮りよが。
何とそんなもんぢやないかないか象よ。
ほんに一寸さきや暗夜の世だけれど、
思や人目のないが增。

（鏡花）

などいかにも手に入つたもので、俗謠――とりわけ德川期の歌曲の眞髓に徹した人でなければからは出來ません。
それから譯詩に俗謠調を用ゐて成功したのは上田敏氏で、ポオル・フォオルの『海の戀』中の名詩を小唄に譯した『わかれ』

せめてなごりのくちづけを濱へ出てみて投げませう。
いや、いや、濱風、むかひ風、くちづけなんぞは吹いてしまふ。
せめてわかれのしるしにとこの前掛をふりませう。
いや、いや、濱風、むかひ風、前掛なんぞは飛んでしまふ。
せめて船出のその日には涙ながしておくりませう。
いや、いや、濱風、むかひ風、涙なんぞは干てしまふ。
えい、そんなら、いつも、いつまでも、思ひつづけて忘れまい。
おお、それでこそお前だ、それでこそお前だ。

（ポオル・フォオル）

これなどはどんなに感嘆していゝかわからない位の名譯です。
俗謠調の詩の基礎になつてゐるのは、主として德川期の歌謠や、小唄です。現代の口語はまだ十分なる洗煉を經てゐない言葉ですから、七五の制約にかなひ、且つ俗謠化され得る範圍内に於てのみ採用されてゐます。この體の詩は

その德川時代の小唄の直系といふところからであらう、專ら「小唄」と呼ばれてゐる。小唄は英吉利で Song(ソング) 獨逸で Lied(リイト) 佛蘭西で Chanson(シャンソン) と呼ばれる單純素朴な抒情詩の譯語としても用ゐられる。けれども、從來の音律詩はもとより、今日の自由詩もその七分通りはやはりシャンソンとか、リイトとかソングとか、呼ぶべき性質の詩のやうではあるが、その場合は小唄とは言はないのです。

自由詩と小唄とはどう區別するかといふと、自由詩が形式的な韻律を棄てゝ内容律に從(つ)き、音律上から見れば極めて不規則なのに對し、小唄は徹頭徹尾音數律により、七五調若くは七七七五の俗謠體などに基いてゐる。なほ此他、用語の相違といふ事もある。すなはち、自由詩は、日常語を標準とするに對し、小唄は專ら俗謠風な言葉を標準としてゐるのです。なほ小唄は自由詩とは違つて、自己のリズムよりも、專ら前代の傳統たる韻律の形式に據るところから、言葉の細工で容易に出來上る傾きがあつて、それだけに反つて本當の人間の聲が聞かれない、技巧的なものになりやすいのです。(白秋氏の如き失禮ながら幾分かその例になりさうな點がある。)人情(ヒユウマニテイ)のさながらの表白たるべき民謠の形式が、言葉の戯れの道具になりやすいといふ事は悲しいアイロニイですが、然し詩人が頭腦(あたま)や手腕(て)でなくして、魂で詩を作るならば、そんな慮(おそ)れはないでせうから、私はかの佛蘭西のポオル・フォオルなどのやうな雅致ある小唄の作者の出でんことを望みます。純朴(ナイイヴ)な天分を有する詩人は、少し修養すれば立派な小唄作者になれます。そしてその修養とは畢竟俗謠の研究に他ならないのです。

民謠の研究は小唄作者の第一の準備ですが、然し小唄を作らうと思はない人でも、民謠を研究する事は必要な事であり、又利益のある事なのです。民謠の形式を學ぶのもいゝが、民謠の精神を學ぶのは更にいゝ事なのですから。勿論我々の感情は今や民謠にある樣な單純なものでなく、大變複雜なものになつてゐる。然し其表白は民謠の如く率直で、簡明で、且つ音樂的でなければなりません。だから今の日本の象徴詩のやうな一種の技巧詩はむしろ詩の邪道で

はないかと云ふやうな氣がします、詩は萬人の心に觸れてこそ始めてその存在の意義があるといふ信條を抱いてゐる私には。

なほ終りに小唄の模範的な名作として、アルフレッド・ド・ミュッセの作を、我が友三上於莵吉の譯したものを掲げませう。これなぞ、譯がなかなか上手に出來てゐるからでもあるが、いかにも單純で、素直で、天眞な感情が流露してゐるではありませんか。小唄はこれでなくてはいけません。

サン・ブラジァスやズエッカでは
そなたは樂しく暮したね。
サン・ブラジァスやズエッカでは
みんな美かつた――ほんとうに。

おもひだすのも哀しかろ、
あすこで送つた戀の日を
おもひだしたらもう一度、
かへりたいとは思はぬか。

サン・ブラジァスやズエッカの
野べでは可愛い野の花を
摘んでふたりは暮したね。

あすこで、生きて、死なないか。

八、思想詩、哲學詩について

詩人と哲學者――感ずる人と考へる人――直觀と思索――概念と實感――觀念抒情詩――エピグランム

詩人は一面思想家(シンカア)でなければなりません、哲學者(フイロソフア)でなければなりません。けれども、それは普通の意味の思想家、哲學者ではないのです。普通の哲學者といふものは、鋭い論理的な頭腦を以て、推理し穿鑿(せんさく)する。一個の觀念を取扱ふにも、それを表から、裏からと、ひつくり返しひつくり返しして考へて、ひとへに矛盾のなからん事を期するのですが、詩人はさうではありません。詩は論理を超越したものです。詩人は決して推理を要しない。詩人は直觀の子です、頭腦(ヘッド)を以て考へるを要しない、心情(ハアト)を以て感じたところを歌へばよい。即ち詩人は感ずる人で、思想家（哲學者）は考へる人です、思索する人です。これがこの兩者の大體の相違ですが、無論詩人にも思想家の要素(エレメント)があり、思想家にも詩人の要素(エレメント)がありますから一概には言はれません。かのニイチエの如きは、この兩方面が渾然として融合してゐる、所謂詩人哲學者(ヂヒテル・フイロソフ)の理想的な人でせう。が、それですら哲學者の要素よりも詩人の要素が勝つてゐはしないかとも思はれないでもありません。そしてその詩人の要素(エレメント)の多い人が詩人と呼ばるべきだと思ひます。が、今かりに詩人と哲學者の相違をよくわかるやうに表にして見ると、まあかういふ事になるでせう。

詩　人――心情（感情）――直觀（感ずる）――實感――詩
哲學者――頭腦（理智）――思索（考へる）――概念――哲學

ところで、詩人が哲學者の要素を有しなければならぬ如く、哲學者もまた詩人の要素を有しなければいけない、でないと、その詩、その哲學は完全なものとは言はれません。そして私が詩人は一面哲學者でなければならぬと言つたのはの要するにこの意味で、詩人として論ぜられる場合、何等の思想も發見されなかつたならば非常な恥辱だらうと思ふのです。

感情が詩の根源であるとは言へ、理智を以てそれを抑制しないと、放恣に流れてしまふ虞れがある。それかと言つて、全然理智に制御せられては詩は死んでしまふ。けれども幸ひにこの感情と理智とがうまく融合したならば、その時、思想詩、哲學詩は生れ出るのです。所謂「觀念抒情詩」(Gedankenlyrik)といふのは、即ちこの思想詩、哲學詩を指したもので、例へばシルレルの詩の如き、我國では土井晩翠氏の詩の如きがそれです。

人生、理想、はた祕密
詩人の夢よ、迷よと
我笑ひしも幾たびか、
まひるの光りかゞやきて
望の星の消ゆるごと
浮世の塵にまみれては
罪か濁世かわれ知らず。
（晩翠）

佛蘭西のボワロオや、英吉利のポオプは、理智詩人と呼ばれた人々で、ポオプの如きその題からして詩だか論文だかわからないやうな『人間論』(Essay on man)『批評論』(Essay on Criticism)の如き作を出して、ある學者をして『形而上學者としてのポオプ』といふ論文を書かせたくらゐです。ところで、このポオプの詩は英吉利では格言として、

沙翁の句よりも一層多く引用せられてゐますが、それは何故かと言へば、極端に奔らない中庸を得た思想を詩的に、諧律をもつて、巧妙に歌つてゐるからで、この場合、その思想がボオプの創見でなくとも毫も差支ないのです。ボオプがその思想を概念としてでなく、實感として、即ち自分が深くその思想に動かされ、痛切にその眞理を感じて、換言すれば頭腦で了解したのでなく、心情で感得して歌つたならば、それで結構なのです。その場合その思想はプラトンの思想であらうと、アリストテレスの思想であらうと、それがボオプの内生命と交渉するところのある限り、またボオプの思想と言ひ得られるのです。もつともかうしたボオプのやうな詩人が、理智的、思想的で、哲學者の要素を多分に有してゐることは疑ひありません。そして、さういふ詩人もまたあつていゝのです。十九世紀の詩人では、佛蘭西のルコント・ド・リイルなど一個の哲學者と言つていゝ人です、伊太利のレオパルヂの如きは哲學者としても立派な人です。最近には露西亞のブリュウソフの如き立派な理智詩人です。それから、英吉利のマシュウ・アアノルド、あの有名な批評家のアアノルドの如きは、詩人としても第一流の人ですが、その詩は大部分觀念抒情詩と呼ばるべきもののやうです。

夢は醒めて去り、友は春の花のごとく、笑みて
　つひには逝く。
たのみに思ふ人の世も、長き葬儀にすぎず、
　人はかひなき希望のために
　苦き涙もて墓を掘る。
　疑ひてはまどひ、恐れては病みつゝ、
　人はみな月日を送る。

（マシュウ・アアノルド）

これは私の友人の譯した『疑問』と題する詩の一節ですが、これなど恐らく觀念抒情詩の模範的なものでせう。

歡樂ははやし、
哀傷はおそし、
世に甘き戀を
かなしみは蒔く。

日も暮れぬに
去にし戀、
戀をも知るべく
哀しみよ、我が有たれ。

（メレディス）

これは英吉利の詩人であり、小説家であつたジヨオジ・メレディスの『歡樂ははやし』といふ詩ですが、以上の二つを見ても、一つは人生の無常を歌つて、人生が長い葬儀にすぎず、人はみな恐怖と憂悶との中に日を送ると嘆じ、一つは歡樂の盡きやすく、哀傷の去りがたく、たのしい戀すら哀みの生むところだと道破してゐるが、いづれも決して單なる概念ではない、詩人は心の底からさう感じて歌つてゐるのです。つまり、理窟ではなくて、やはり感情なのです、實感なのです。だから詩になつてゐるし、また詩としての價値を有してゐるのです。概念には個性がない、「人生は苦痛の谷だ」といふ考へでも、それが概念である限りは何等個性がない、個性がなければ勢ひその人特有のリズム、生きたリズムが無いわけです。だから詩にはならない。然し、それが實感となつた場合には、その人のリズムが出るから、詩としての力を有することになるわけなのです。

アアノルドは有名な批評家であり、メレディスは小説を書いても哲學的で、一般に哲學者と呼ばれてゐる人であるから、かうした思想詩の作があるのも當然ですが、一體に西洋の詩人には思想詩の作が多く、どんな詩人でもそれのない人は一寸見當らない位で、あの小鳥のやうに歌つたポオル・ヴェルレエンにすら、晩年には『エピグランム』と題とする詩集がある位です。エピグランムとは警句風な奇拔な思想を託した短い詩で、例へばこんな風です。

「何故に我は滅ぶぞ、おゝゼウス？」と美はたづねぬ、
神は答へぬ、「我はただ滅び去るもののみを美となしぬ」と。

ヴェルレエンさへ既にさうです。どんな無邪氣な詩人でも、晩年には思想的、哲學的になつて行くやうです。そしてマシュウ・アアノルドのやうに初めから思想的であつた詩人は、のちには詩よりも論文の方に專心するやうに見えます。これは心情の働きが鈍くなつて生々した實感を失つて來るからとも言へるし、理智が感情より强力になるからとも言へます。そして、青年時代から思想詩を作る人はかなり理智の勝つた人なのですが、さうした傾向の人は、かまはず思想詩を作つていいと思ふ。が、ただその場合には、まづその歌はうとする思想が單なる概念であるか、それとも本當に實感であるかを十分吟味してかからなければなりません。いかなるすぐれた思想でも、それが概念である場合には、いい論文にはなつても詩にはなりません。之に反して、實感ならば、即ち心情から生れ出たものならば、どんなつまらない思想でも、詩の力をもつて人の心に觸れる事が出來るのです。

北米の哲學者サンタヤナは「哲學者がその最善の瞬間に於て、詩人である事を許容すとしても、詩人が哲學者たるに成功する時、彼はその最惡の瞬間に於てあるのではないかと疑ひ得られる。哲學は何かしら推理されたもの、重苦しいものであるが、詩は何かしら羽の生えたもの、閃くもの、靈感を受けたものである」と言つてゐる。詩人は哲學者ではない、詩人は思索するを要しない、詩人が哲學者となる時その詩は詩ではなくなつてしまふ。けれども詩人が

本當に偉大であれば、必然自己の內部に哲學者をも包括してゐるに違ひないと私は思ふ。ダンテや、ギヨオテや、シエレイはそのいい例です。

九、象徵詩——象徵主義の理論とその意義

象徵といふこと——象徵詩派の起原——デカダンとサンボリスト——象徵詩の味ひ方——日本の象徵詩と俳句——象徵主義の弱點

一

象徵詩といふ名前は我々の常に耳にするところであつて、そしてその說明に最も苦しむところのものです。象徵詩は恐らくあらゆる詩の中で一番むづかしい、また一番わかりにくいものでせう。それで、今ここで、なるべくわかりやすく、平易に說明して見ようと思ひます。

象徵詩とは象徵を用ゐた詩の謂ですから、象徵詩の說明はまづその象徵といふものの意義から始めなければなりません。

象徵といふのは Symbol の譯語です。シンボルといふものはなかなか深遠な意味を有してゐて、一寸簡單に說明する事は出來ませんが、これを一言にして盡せば、暗示又は喚起の要素の謂だと言へませう。美學上には聯想の一種として說明されてゐます。聯想は狹義の聯想、統覺、象徵の三種に分れてゐますが、月桂樹といふ言葉を見て、思ひを遙かに月桂樹多き南歐の風物に走らせるが如きは卽ち狹義の聯想です。また希臘神話にニンフの一つなるドライアッ

ドといふ女神がアポロンの神に追はれ、逃場を失ひ、身を月桂樹に化したといふ話がある、それで月桂樹を見てドライアッドの變身だと思ふなどは統覺です。それから月桂樹は昔から勝利凱旋の光榮を表彰するものとして用ゐられてゐますが、此の場合、月桂樹は勝利凱旋の象徴と云ふ事が出來るのです。で、今それらの區別を說明すれば、月桂樹は必ずしも常に南歐の風物を想はしめるものでないが、勝利凱旋の光榮は單にその葉の一片を手にしただけでも思ひ浮ぶ、これが聯想と象徴の區別です。また、月桂樹はその表はす勝利凱旋の光榮に比べると極めて價値少いものであるが、女神ドライアッドの化身と見れば、そこに輕重の區別は無くなつて來る、のみならず月桂樹は必然的にドライアッドを想起せしめるものでない、これが統覺と象徴との異る點です。

象徴は、さらにその象徴それ自體と、これによつて代表せられる事物との間に存する價値の懸隔によつて三種に分けられ、その間の價値の懸隔の最も甚しいもの、即ち外形と內容とに輕重の差ある事最も甚しいものを藝術の意味に於て象徴といふ。黒色が悲哀をあらはし、綠色が希望をあらはし、ダンテの「神曲」で豹や、牝狼や、獅子が人間の三惡、肉慾、貪慾、殘忍を表はすなどがそれです。それから此の外形內容の懸隔が全くなくなつて、象徴として取られた事物それ自らが獨立の價値を有するに至れば、所謂高級象徴（ダス・ホツホシンボリッシェ）です。高級象徴の作品はその表面の事件の進行だけですぐに藝術上の價値があるもので、ギヨオテの『フアウスト』や、ハウプトマンの『沈鐘（ヘーシンケネグロッケ）』などがそれです。然しそれは美學上の象徴なり、象徴的作品であつて近代の象徴主義そのものではなく、この原理を基礎にして、それを一個の文學上の主張としたものが即ちかの象徴派（サンボリスト）の唱へた象徴主義なのです。

なほ、象徴といふことは、もともと深い宗教的、神祕的な意義があつて、或る哲學者の言つたやうに、「如何なるものよりも深いものの象徴（シンボル）である。より以上なるものの暗示（サジエッション）である。路傍の木々もただ生ひ立つのではない。河はただ流れゆく水ではない。一枝の花も、一堆の土もそれ自らに終るのではない。如何なる存在も活動も何ものかの暗示で

ある。より優れたものを示し得ない存在は一つとして許されてゐない、有限に事象が終末するのではない。凡てものは彼が象徴の意義に於て永遠である。一切は象徴である。」即ち、この世のあらゆる現象は、例へばプラトンの觀念（イデア）の世界、即ち宇宙の本體の象徴だといふのです。不可見、不可說の世界を、具體に示すものにすぎないといふのです。象徴主義が思惟に絶した世界の消息を傳へんとする主張はここに根を置いてゐるので、その宗教的、神祕的方面に密接な接觸を保つてゐる事も、これによつておのづから肯かれるだらうと思ひます。

二

かくの如き象徴の原理を捉へ來つて、意識的にこれを主張したものがかの十九世紀末に現れた象徴派（サンボリスト）です。彼等の象徴主義即ち Symbolism（シンボリズム）（佛蘭西語で Symbolisme（サンボリズム））は、專ら情緒を喚起する情緒象徴の主張であつて、從來の詩歌が繪畫彫刻の作用と音樂の作用とを兼ねて、叙述的表現を以て直接に想念を歌つたのに對し、詩歌をして粹然たる音樂たらしめ、叙述や說明を一切避けて、我々の何事かに遭遇して生ずる情緒——その刹那々々の情緒を象徴を以て暗示しようといふのであつて、その主義を奉ずる人をSymbolist（シンボリスト）と云ひます。象徴主義はもと詩に始まつたので、象徴詩は既にジェラアル・ド・ネルヴルや、シャルル・ボオドレエルにその萠芽をあらはしたと普通言はれてゐるが、その一大勢力となつて佛蘭西の詩壇を風靡した一八八五年以來です。（象徴主義も他の多くの文學上の新運動、新形式と同じく、佛蘭西に創（はじ）まつたものです）然し、特に象徴詩と呼ぶべきものこそ前世紀末の產物であらうが、象徴的な詩句は決して新しく生じたものではありません。英吉利の十八世紀の詩人ヰリアム・ブレエク（彼は同時に畫家であり、また特に神祕思想家（ミスティック）であつたから、その象徴的な詩を出したのは毫も不思議でない）の詩などに餘程象徴的なものが多いし、獨逸の浪漫派の豫言者たる神祕詩人ノヴリスなどにもある。また沙翁（シェクスピア）と同時代の所謂大學才人の一人だつたトマス・ナッシュの

光匂はしく空より落ちて、
后の君わかく美しく死し、
塵はヘレンの眼をとざしぬ。
（ナッシュ）

の如きも、その容易に捕捉すべからざる悲哀を湛へてゐるところ、音調と色彩との微妙な配合によつて一種說明しがたい情緒を喚起するところ、疑ひなく象徴的な詩句と言はなければなりません。

佛蘭西に於て、ユウゴオや、ラマルティンや、ミュッセ等の浪漫派についで、詩界の權威となつたのは、所謂高踏派(Parnassiens)でした。ルコント・ド・リイル、シュリイ・プリュウドンム、フランソア・コペエ等によつて代表せられる高踏派は、專ら繪畫的、彫塑的効果を志して壯大の景や悲痛の情などを極めて雄辯に述べてゐたのですが、そのうちこの派の詩風に不滿足な詩人が現れて、ここにはじめて象徴派の旗幟を飜しました。それはステファン・マラルメ、ポオル・ヴエルレエン、アルテュウル・ランボオ、ヴィリエ・ド・リイル・アダン、ジァン・モレアス、ギュスタアヴ・カアン等の詩人で、彼等はその奇異なる詩風によつて、またその放恣度なき生活によつて（マラルメ等二三の人は勤直な學者的生活を送つてゐたが）時の新聞記者からデカダン（Décadents）だとか、Maudits Poètes（呪はれた詩派）だとか言つて冷笑されました。デカダンとは「頽廢」とか「墮落」とか言ふ意味ですが、彼等は反抗的にその惡口を進んで自分達の旗印にして、自らデカダンと呼ぶやうになりました。だからデカダンとは象徴派の別名に外ならないのです。尤もデカダンといふ名前には、世紀末的の頽廢した暗黒な生活を送つたヴェルレエン等の私生涯に對する常識家達の冷罵が大にこもつてゐますから、サンボリスト卽デカダンとは言へないでせう。兎に角、のちには專らサンボリストと稱したやうです。これが卽ち、象徴派――また、象徴主義の起原です。次いでメエテルリンクはこの主義の理論を戲曲に應用して、かの『內部』や『群盲』のやうな所謂靜劇を作り、ヒュイスマンズは更にこれを小說に應用して『途上』

や『逆に』のやうな作を出しました。そしてそれが更に進んでは、音樂、繪畫などの他藝術にまで及んだのですが、象徴主義の理論を採用して一番成功したのは何と云つても詩です。象徴詩を初めて我國に輸入した人は故上田敏博士です。またその作者には岩野泡鳴氏、蒲原有明氏、近くは三木露風氏一派の人々があります。

三

佛蘭西の或る有名な詩人は象徴詩を説明してから斯う言つてゐます。

「事物を靜觀して、これによつて喚起せられた幻想の中に、おのづから心象が飛揚する時『詩』が生れる。以前の高踏派の詩人は、物の全般を捉へ來つて、それをその儘殘るところなく説明してしまつたので、その詩に幽玄微妙の趣きを缺き、且つ讀者から自ら創作するやうな享樂を奪つてしまふ。事物をそのまゝ明示して、隈なく説明してしまつたのでは詩興の四分の三を沒却してしまふ。詩を讀む際の妙味といふものは、あれかこれかといろ〳〵推つて見るうちに、だん〳〵興趣が出て來て、さま〴〵の幻想が浮んで來るところにある。暗示するのは即ち幻想を與へる事である。かうした幽玄な作用を象徴と名ける。象徴はある一つの心狀を示さんが爲めに、おもむろに物象を喚起するか、或はこれとは逆に、一つの物象を採り來つて、いろ〳〵と推度したのちに、これより一つの心狀を脫離させる事、即ちこれである。」

すなはち、象徴詩は、詩人の心象に類似した一つの情緒をば讀者にあたへるのを目的とするもので、必ずしも、詩人と同一の心象を、讀者に傳へようとするのではない。從つて靜かに象徴詩を味はうとするものは、それぞれ自分の感興に應じて、詩人も未だ說き及ぼさなかつた言語に絕した妙味を感得する事が出來る。それゆゑ、その詩に對する解釋は人によつてそれぞれ違ふかも知れないが、要するにただ詩人の情緒と類似した情緒を讀者の心中に喚起すれば

それで十分なのです。

象徴はかやうに一つの情緒（情調氣分）を捉へて歌ひ、それに類似した情緒を讀者の心中に喚起させようとする一個の情緒藝術であるから、自然音樂と同じ効果を目的とするに至る。音樂を聽いてゐる時は、別に一定の概念を享ける事はないが、深く心を動かされ、思惟に絶した感動を受ける。象徴詩のねらふところもまたそれで、もと一定の思想や感情を敍べようと思はないで、調子のいい、色彩のゆたかな文字をもつて一種説明しがたい情緒を喚起せんとするのですから、是れを讀んでゐると丁度音樂を聞いてゐる時と同じ氣分になるわけです。だからその詩の內容は一寸(ちよつと)説明することが出來かねるのです。言語に絶した、謂はば、分解する事の出來ない綜合一致の狀態にある一觀念の映像であり、いかなる哲學者と雖も明かに述べる事の出來ない眞理の精體を含んだ獨特な印象の韻律的表白です。

曾つて上田敏氏がヴェルレエンの紹介文の中に譯載せられた後の『詩術(アアル・ポエティク)』の第四聯

何となれば吾等の望むところは
影にして色にあらざればなり。
あはれ影のみぞ夢を夢に結び、
笛と角とを調ぶべき。

（ヴェルレエン）

は、蒲原有明氏も言つてゐる如く、當時に於ける象徴の意義を簡淨に啓示した大切な詩句で、象徴派のプログラムとも見なすべきものです、影とは陰影（Nuance(ニエアンス)）で、象徴詩は畢竟ニュアンスの藝術と言へるでせう。で、今、象徴詩の特色を擧げると、（一）不可説の事物を暗示によつて傳へる事、（二）情緒を傳へて一定の思想感情を傳へぬ事、（三）音樂を聽くが如き思ひあらしめる事、（四）讀者をして自ら創作する如き快感を覺えしめる事等でせう。それから、次ぎに代表的な象徴詩として左に『內部』の詩人の「溫室」中の一篇を擧げて見ませう。

愁の室

メエテルリンク

わがおもひ、愁に靑し、
さらによき幻はあれど、
つかれたる靑き夢路に、
月影のよよと泣き入る。

色靑き愁の室は、
さしよりて人や見つらむ、
さみどりの玻璃のあなたに、
月を浴び、ぐらすに光る。

たけ高き草だち木だち、
宵宵はおぼろおぼろに、
煩悩の薔薇をわけて、
夢のごと揺がで立つを。

水ははた緩く噴き出で、
月影と空とをまぜて、

（上田敏氏譯）

薄曇るとはの吐息に、
夢のごと節もかはらず。

象徴詩は說明する事甚だ困難で、またその說明は讀者によつて一々違ふのですが（かやうに作者も讀者も極端に個人的なところから、ルミ・ド・グウルモンは象徴主義は藝術に於ける個人主義の表現であると言つてゐる）折角ですから試みに解說して見ると、私の心は靑い月影を浴びて眠つてゐる溫室である、その中には煩惱といふ薔薇も咲いてをれば、樣々の慾念や、思惟が茂つてゐて、靑い光のもとには愁が充ちてゐるといふのが根本で、それに色々の潤色が加はつてゐると解していいでせう。が、私自身でも此詩はまだ幾通りにも解釋が出來るのです。そこが象徴詩の象徴詩たる所以です。

四

日本の詩人によつてこれまで試みられた象徴詩といふものに對しては、私は多少疑ひの目をもつて見てゐる。どうもそれが必然的な內心の要求から出たと言ふよりは、多少「ものずき」といふ傾きがありはしないかと思はれるからです。岩野泡鳴氏の『闇の盃盤』中の象徴詩の如き氏の所謂心熱的な作もある事はありますが。で、私はかう考へる。ある詩が象徴的であるのはいいが、特に象徴詩といふ標榜でかかると、象徴といふ事に反つて囚はれてしまつて、かのマラルメのやうな事になつてしまひはせぬかと。マラルメは象徴の運用に生涯を捧げた詩人であるが、象徴の自覺からして反つて象徴を失つて最後に詩作を斷念しなければならなくなつたのです。

夕暮――「秋」はしばしがひま、やさしき
眼をあげ、微笑さへ浮べ、やすらふとき、

鴿あり、めぐし、かたへの水盤より
落ち散るしづくを羽うち戯れぬる。
あな、姫、そをば避けんとにほひ衣の
まつはる裾をふみ　がへ支ふるとて
手を解くひまを、緒琴の面より、見よ、
異形の象こそ照らせ、花のななつ。――

（有明）

これなど蒲原氏の象徴詩の代表的なものではない（氏の一番有名な作は、「朝なり――」ではじまる一篇だつたと思ふが、今手許にないから引用が出來ない。）から、作者には氣の毒なやうなものの、いかにも象徴のための象徴で、象徴に囚はれてゐるやうに感じられます。（技巧の完全してゐる事は言ふまでもありませんが。）私はかうした象徴詩よりは古來の俳句（特に芭蕉）の方がずつと象徴藝術として立派なものだといふ氣がします。象徴主義の理論は疑ひもなく貴重な眞理を含んでゐます。けれども、あまりに象徴を過重するのは、反つてその作用を殺すことに他ならないと思はれるのです。我々は情緒を尊重しなければならない、この情緒を他人に傳達したいとも思ふ。けれども情緒にのみ耽つてゐてはならない。弱々しい情緒藝術のために、人間の赤裸々の聲を忘れてしまつてはなりません。

私は第一、象徴主義そのものの弱點について切言せずにはゐられないものがある。アンドレエ・ジイドは「象徴主義に何等かの缺陷があつたとすれば、それはこの主義の美學の背後に何等の倫理も組織せられなかつた點にある」と言つてゐる。然り、象徴主義（象徴詩）は純粋に唯美主義である、技巧主義である、藝術至上主義である。そのため肝心の人間的といふ事を閑却して、生きた人間の聲を忘れて、血の氣のない、影の薄い、朦朧たる抽象的な字句の羅列となり、つひに一種の遊戯に墮するおそれがある。で、私は象徴詩を作らうと思ふ人は豫めこれだけの忠告をしておき

度い。

即ち、諸君はまづ人間であつて、しかるのちに詩人であるべきだから、いかなる場合にも自己の人間たる事を忘るべきではない。神秘的瞑想は、或は諸君をも象徴詩人とするかも知れない。けれども、特に象徴詩人をもつて任ずるといふ事は馬鹿げきつた事である。マラルメが漸次その價値を失つて、ヴェルレエンや、レニエエや、ヴェルハアレンが愈々その眞價を發揮して行くのはなぜですか？ それは彼等が單なる象徴詩人でなかつたからです。彼等の名聲は決してその象徴詩に基くのではなく、象徴詩以外の詩に基いてゐるのです。

象徴詩のみを作らうなどと考へてはいけません。象徴詩は、とりわけ作らうとして作るべきものではありません。もし諸君にして、心靈の奧所に忍び入つて、その祕密のささやきを聽き取るか、または刹那の氣分を歌ふことに興味を有するならば、象徴詩を作るのもよい。が、それは象徴的な詩といふだけで滿足するがよい。それを完全な象徴詩にしようと努力をする時は、もう象徴に囚はれてしまふ事に他ならぬ。そしてつひにはマラルメと同じ運命に陷るに違ひないのです。

十、散文詩――普通の散文との區別

散文詩の起原――散文詩と小品――散文詩のリズム――自由詩と散文詩
――ポオル・フオルの說

散文詩(Prose-poem 若くは Poem in prose)といふ詩形は、極めて新しい詩形で、謂自由詩よりもまた一段自由な、いはば自由詩以上の自由詩とも云ふべきものです。

散文詩といふ名稱は十九世紀の後半に、ツルゲエネフや、ボオドレエルが散文詩集を出してから、一般に用ゐられるやうになつたもので、「散文で書かれた詩」といふ意味なのですが、「散文で書かれた詩」とは、また「詩を散文で書く」といふ事は、はじめは一つの矛盾と考へられたものでした。が、今は誰れひとり散文詩の獨特の意義と價値とを認めないものはありません。のみならず、自由詩の運動の如き、詩を散文詩に近づける努力とも見れば見られます。そして我々の思惟と感觸とが益々複雜になつて行くと共に、散文詩の地位の益々高まつて行くのは極めてもつともな事です。私はむしろ、今後の詩は單純素朴な小唄と、散文詩との二つに大別されるやうになりはしないかと思つてゐます。尠くとも、我が國に於て、散文詩が自由詩よりも有力なものとなり得る事は想像せられます。

イワン・ツルゲエネフが、其晩年の五年間（一八七八年——八二年）の印象の斷片を“Senilia”（老衰）といふ羅典語で總括して、露西亞に送り、その初めて世に現れたのは一八八二年の十二月でしたが、それを發表した雜誌「ウェストニック・エフロピイ」の主筆は、作者の手紙の中に記してあつた「散文詩」の語をその集の標題に適切なものと認めて、その題下に發表しました。然し、散文詩といふ言葉は多分ツルゲエネフの創めたものではありますまい。これよりさき、佛蘭西の惡魔派の詩人ボオドレエルは“Petits poëmes en prose”（小散文詩、又は散文小詩）の作を出してゐますから。尤も、これはもと“Le Spleen de Paris”（巴里の憂鬱）と題せられる筈だつたといふ事です。然し、散文詩と呼んでゐたかどうかは知りませんが、散文詩の實を備へてゐたものは、ボオドレエル以前にもあつて、既にヂョンの神祕家で、薄倖な詩人であつたベルトランの“Gaspar de la Nuit”（これは而もボオドレエルの直接の模範となたものです）の如きあり、エドガア・アラン・ポオにあり、更に遡つては『一波斯人の書翰』の著書モンテスキュウにさへあります。けれども散文詩の隆盛を來したのは比較的新しく、マラルメ、ネルヷル、ワイルド等の作を經て、ボオル・フォオルに至り、獨逸にシュラアフ、フライシュレン等を出し、最近には露西亞のソログウブなどにもその作があります。

散文詩は極く平易に說明すると、その文字の示す如く、散文で書かれた詩で、まづ詩と散文との中間に位するものと見れば間違ひありません。ところで、普通の音律詩と散文詩との區別は一目瞭然ですが、普通の散文との區別は一寸はつきりしてゐない。

散文詩で一番まごつくのは此の普通の散文との區別で、次いで自由詩（口語の）との韻律上の區別です。散文詩はその形式から見ると普通の散文と殆んど何の變りもない、それゆゑ所謂小品(スケッチ)とは殆んど同じものと見なされて、一般に混同して考へられてゐるやうです。が、そこには確然たる差別があるのです。即ち、散文詩は形は普通の散文であつても、その內容は純然たる詩で、詩(ポエム)たるべき內容を韻文の代りに散文で書いたものに他ならない。これに反して、小品は散文の內容を散文で書いたものに他ならない。つまり、一種の短篇小說（Novelle(ノヴエル)）で、短篇小說の最も短いものと言つてもいい。例へば、チエエホフの作のやうなものであつて、人生の一橫斷面を示すものであり、客觀的な事件の描寫である。それゆゑ、槪して小品は客觀的であり、散文詩は主觀的であると言ひ得られる。ただその韻律が、形式が散文だけに散文のリズムなのは同一です。

もつとも詩と散文の區別といふ事は一朝一夕に定める事の出來ないもので、既にマラルメの如きは、「人々の散文と呼ぶものの中にも詩は存するので、絕對の散文といふものは、嚴密に云へばただアルファ・ベットがあるのみだ」と言つてゐます。が、大體に、普通に散文は散文的な內容を散文を以て書いたもので、散文詩は詩的(ポエテイカル)な內容を散文を以て書いたものと心得てをれば間違ひはないかと思ひます。

次ぎには自由詩との區分ですが、自由詩は音律詩から直接轉化して來た詩形であるから、そのリズムは散文のリズムよりも强められたものであるに對し、散文詩のリズムは散文のリズムで差支ないのです。即ち、散文詩は必ずしも吟調でなくてもいいのに對し、自由詩は必ず吟調でなければならない。それから、自由詩が從來の音律詩と同じく行

を切るのは言ふまでもない。それから次ぎに少しく散文詩の作例を掲げて見ませう。

ツルゲエネフ

明日は！　明日は！

過ぎ去つた日のすべてはいかに空しく味氣なく徒らなものであらう！　それはいかに僅かな痕跡を殘すのであらう！　今日から明日へと消えてしまふ月日と云ふものは、いかに無意味にいかに馬鹿らしいものであらう！

しかも人間は生きようとする。生命に執着して、その生に、その身に、來るべき日に、その一切の希望をかける……おお、いかに多くの幸福を人はその未來に期待するであらう！

しかしその未來の日もまた過ぎ去つた日に異らぬとは、何故また人は考へないのだらう？

彼はそれを考へもしない。考へる事を欲しないのだ。まことにそれはいゝ事である。

「明日は！　明日は！」と彼は自ら慰める、而もこの「明日」が彼を墓場へ搬んでしまふのだ。

さて、一度墓へ入つてしまへば、人はおのづから、もはや考へなくなつてしまふ。

ボオドレエル

港

港は人生の戰ひに疲れた人にとつてチヤアミングな場處である。天の廣い空間、雲の動搖する建築、海の變化する色、燈臺の光などは目を疲らさないで、眺めてゐるのに驚くばかり適した三稜形である。波濤に調子よく搖られる帆綱のもつれた船の高く聳え立つた形は心の中にリズムと美との觀念を保持する。そしてとりわけ、そこには好奇心と野心とにもはや動かされなくなつた人に對する祕密な高尚な樂みがある。展望臺に凭れたり、又は防波堤に肘を突いたりして、其處を往つたり來たりするものを、まだ旅をする氣持や、金持になる力をもつてをるもののあらゆる動作を觀察するといふ樂みがある。

いづれもこの二詩人の代表的な散文詩ではないかも知れませんが、散文詩の特色をうかがふには十分だらうと思ひます。もつともこの二つは全然主觀の表白なのですが、散文詩には勿論もつと描寫風なものもあります。けれども、それも空想や、諷喩や、象徴であり、また思想の婉曲な表現である。普通の小品のやうな現實を如實に描寫したものはむしろ尠ない。

愛

アンドレイ・ネモエフスキイ

しめやかな、いつまでも〱懐かしい歌のやうに、幼い時は過ぎ去つたけれど、今其調を捉へんとすれば、もう捉へられぬ。唯憂事(うきこと)繁き我生の一角に時々其斷續する節を聞くのみだ。これを聞いて懐かしさに聲を揚げたのも最う幾度にかなる。幼い時こそ私も幸福も一體であつた。私が體なら、幸福は其體を活かす魂であつた。……

賊の如く足音を偸(ぬす)んで來つて人に寄するものは年浪である。いつしか私も中年になつた。中人の大人びた心になつては、自ら我が智慧の淺墓であつたことを嗤(わら)ひ、我と我面(わがおもて)に唾(つばき)して、此身を百の義務の軛(くびき)に繫いで了つた。もう斯うなつては何事も決定して狐疑する餘地がない代り、前途に希望もなく、疲れ果てた心は冷時も冷殺せられず、熱時にも熱殺せられぬ。……

眼を放つて野を眺め、園を見渡せば、あゝ皆、しかし、この爲だと、私はこれが愛(いと)しくてならぬ。と、絶えて久しい、忘れたやうになつてゐた、遠い〱昔の調、戀しい、懐かしい春のやうな、幸福の充ち滿ちた調が微かに心の底で聞えた。……

今の愛(いと)しさは幼い時のそれとは違ふ。今のは幸福の聲ではない。止むに止まれぬ運命で、心の化石にならぬ者ならば、誰でも揚げざることを得ずして皆揚げる聲である。よしや、愛(いと)しいといふその聲が卽(やが)て死の宣告となり、身

首處を異にして、魂魄永く滅無に歸さうとも、誰か敢て此聲を揚げぬ者があらうぞ。

（長谷川二葉亭譯）

此一篇の作者は波蘭の愛國者だといふ。飜譯の立派なせゐもあらうが、いかにもしみじみした深い感情の籠つたいい文章で、散文詩と銘は打つてないけれど立派な散文詩である。因に德富蘆花の『自然と人生』中の諸篇や、國木田獨歩の小品の如き、いづれも好箇の散文詩です。さうかと思ふと、極めて散文的な作品に散文詩の名を與へてゐる人があるし、また岩野泡鳴氏の如きはホイットマンの詩や、今の日本の自由詩を散文詩と呼んでゐられる（今の自由詩をさう呼ぶ事には私も或點では贊成するが）。かやうに散文詩といふ概念は今のところまだ判然してゐないのである。

夜は來れり。諸の迸る泉その聲を高む。我が魂も亦迸る泉なり。
夜は來れり。愛する者の諸の歌今始めて醒む。我が魂も亦愛する者の歌なり。
鎭められざるもの、鎭め得ざるもの我が衷にありて、其思を語らむと欲す。愛の希求我が衷にありて愛の言語を發す。
我は光なり。嗚呼何が故に夜たらざりし。光ありて我を圍繞することこれ我が寂寥なり。
嗚呼闇ならましかば、夜ならましかば。我が心光明の胸に凭れて其乳を吸はむと欲すること切なり。（ニイチエ）

これはニイチェの『ツァラトゥストラ』中の『夜の歌』の冒頭ですが、これなどやはり散文詩です。なほニイチエの述作中には散文詩と呼ばれ得べきものが澤山ありますし、また『ツァラトゥストラ』そのものが既に立派な詩です、恐らく新代の叙事詩の模範とすべきものだらうと思ひます。

をかしき唄

「春」はやさしき色につゝまれて、「春」は綠に薔薇色に、また藍色の衣きて、訪れくれば、代言人の心さへ、狂へる戀に動かさる。小間物屋の女房の心さへ、「春」よ、君は綠にうつくしく、訪れくれば動かさる。

やさしき手に花の模樣をぬひとられ、柔く毛にて織りたる上靴や、煮ゆる茶の味ひ深き暖かさ。おお戀人よ、半ばまどろむわが心、わが身の肉を熱せしむ。

わがほとりの、あらゆるものは、床板に痩せたる猫の步むが如く、記憶の糸を曳き、追懷の夢をさまよはしむ。

咲く薔薇の黃ろき花に、昔の黑き大理石はかざられたり。……

巴里の女うつくしや。うつくしき衣をつけ繡の模樣の襟高く、外套の價稀れなる毛皮を着たり。

巴里の女うつくしや。ボンヌゥフの橋よりコンコルドの廣場まで、白粉ぬりし顏色よ。薄色の手袋したる優しき手よ。されど恐れざる浮れ男の身にとりて、巴里の女は美しき衣よりも美しき眼より、猶美しきものの主なりし……

これは作者がわからないが、多分ポオル・フォオルではないかと思ふ。この譯は七五調を基礎にしてあるところ、次にいふフォオルの初期の作風のやうなものです。

ポオル・フォオルは、佛蘭西の新詩人で一八九六年に“Ballades Françaises”といふ一卷の詩集を出しましたが、その詩體は普通の詩體と異つて全く散文のやうに書き流されてありました。けれどもよくしらべて見ると、それはちやんとした立派なアレクサンドリン調で、ただその四行をぶつ續けに書いたものにすぎず、中には押韻まで正確に施してゐるものがあつたといふ。我國の詩で言へば七五調をぶつ續けに散文のやうに書いたやうなものです。それが後になると、だんだん不規則になり、自由詩風になり、その內心の呼吸に合一した內容律を微妙に織出してゐると言ひます。彼はこの新樣の詩體の主張として、「自分は情緖のままに散文から詩へ、また詩から散文へうつりゆくことの出來る一個の詩形を探求したのである。卽ち律調ある散文がその變化を統一することを意味する。詩と云ふものは言葉の自

然な省略法に依るべきものである。即ち散文の如く表現するといふことによつて、あらゆる略語法をこの形式の下に消滅させるのである」(川路柳虹氏の紹介による)と言つてゐる。即ち、彼の散文詩は詩の形を崩さないで散文の形の中に容れた律調ある散文であり、散文に何等かの取捨を加へて出來上つたものだといふのである。これは直に散文詩といふ新しい詩形の定義としていいかと思ふ。尠くとも、今の我國の自由詩と散文詩とは、結局このポオル・フォオルの主張に於て統一せられるものかも知れないと思ひます。なほ終りに、彼の『地上の諸調』(川路柳虹氏譯)のはじめの一聯を參考のために掲げて置きませう。

來れ、わが感覺に、觸れ、眺め、聞き入れよ。わたしは山へよぢのぼり、私は大氣のなかにゐる。地上はわが目の下にある。おゝかくもわれを浮き立たすものは何ぞ。わたしの足下に霧はながれる、その霧を透かしてかなたに地は美しく鮮かに怡しげである。羊腸たる溪間のすがたにおのづから胸に動悸をうたせる。わたしは最もかがやかしい日の現在であることを感じる。來れ、わが感覺に、觸れ、眺め、聽き入れよ。

(ポオル・フォオル)

十一、言葉の問題について

言葉に對する敏感――言葉の魂――言葉の王と言葉の奴隷――日常語(文語と口語)――日本語の讃美

詩を作る人の一番心を潛めなければならぬのは言葉の問題です。言葉は詩の元素ですから、言葉の微妙な働きを無視しては、どんなに獨特な感情や、凊新な感覺を有つてゐても美しい詩を成すことは出來ません。だから言葉に對する敏感といふ事は、詩人の重要なる天分なのです。北原白秋氏の詩人としての成功の如きも、何よりも氏が言葉に對

ただ多く讀み、多く作つた上で、自分で悟るより道はありません。ある國の言葉の本當の味ひは、とても外國人にはわかるものではない。例へば、我々日本人が西洋の詩を讀むとして、よしその人がいか程その國語に精通してゐようとも、その微妙な言葉のニュアンスはとても味ひ得られるものではない。散文だとまだいいけれど、韻律を主とする韻文は、言葉の調子などの點からしてなほ更ら本當に理解する事が困難です。だから譯詩などは、その意味は違はなくとも、原詩とはまるで別のものと見なければならない位です。その點から言つても、日本の詩人は我國の古典を研究し、日本語の魂を捉へなければいけません。

我國は昔から言靈の幸はふ國と呼ればてゐます。日本語がそれほど立派な國語かどうかはしばらく別問題として、言葉に魂のある事は確かです。言葉は我儘なものです。我々が勝手に使ひ廻さうとしたつて言ふ事をきかない、それにはまたそれ相當の禮をもつてしなければならない。そしてその禮とは何か、言ふまでもなく、言葉を尊重して、無理な使ひ方や、氣儘な虐待をしない事です。言葉は生きたものです、固定した死物ではないから、始終變化し、流動して止まない。詩人はその流動に追隨して行かなければなりません。然し、かう言つたからとて流行語を盛んに用ゐよと言ふのではない。「草の葉つぱ」といふ言葉がはやるからとて、わけもなしにつかつたのではいけないのです。

詩人は「言葉の王」です、自由自在にあらゆる言葉を驅使するやうでなくてはいけまん。それが反對に、言葉に囚はれたり、言葉に驅使されるやうになつては駄目です。さうなるともう「言葉の王」でなく、「言葉の奴隷」です。例へばある言葉を面白く思つたからとて、無理にその言葉を持出して來たり、(人眞以に「草の葉つぱ」をつかふなど、正にそれです。)流行語を並べて器用な詩を作つたり、つまらぬ言葉の戯れをしたりするなぞは、非常によくない事です。

して非常な敏感を有つてゐる人だつたからです。

言葉のこまやかな味ひ、即ち語感といふものはとても口で說明する事の出來ないもので、

それから昔は詩語といつて、特に詩にのみ用ゐる言葉がありました。西洋で古典派の詩人が、海といふ代りにネプチユウン（海神の名）と言つたりしたのがそれです。我國でも、日常生活には勿論用ゐられず、散文にも大抵の場合用ゐられぬ古語や、耳遠い言葉や、勝手に案出した熟字をよく用ゐた時代がありました。薄田泣菫氏の「巖の噴」や「ありきの枝」の如きや、今はその名も擧げる必要のないやうな人々の新熟字の如きがその時代の記念ですが、こんな言葉はこれからは決してつかふべきではありません。

さうした言葉を持出さないまでも、今の日本語といふものは、非常な混亂の中に在ります。詩人の苦心は一通りではありません。蒲原有明氏、薄田泣菫氏、與謝野寛氏等の先輩が詩作を廢してしまはれたのも、一つはたしかにこの言葉の問題があつたからだと思はれます。今の日本語は大體に於て、口語と文語とに別れる。一體、いかなる國でも、日常卑近の俗語と、文語とは多少の相違があるものですが、今の日本語のやうなのは稀らしい。殊にその口語の蕪雜な事と言つては驚くべきものです。然し、それに辟易して文語を偏重するのはよろしくない。口語は何と言つても生きた言葉ですから、潑剌たる趣きがあつて、我々の死身の激烈な感情を託するには大にふさはしいものです。自由詩派の詩人が（イマジストの如きまたさうである）日常語を用ゐるべき事を信條の一つとしてゐるのはもつとも事です。また口語を採用する場合に、單に單語のみを採用しないで、福士氏の言つた如く「語法上にも及ぼさねばならぬ」のは勿論の事です。しかしここで一寸注意したい事があります、それは今の我が國語に於ては、文語と口語とは決して嚴重に區別されないといふ事です。口語が日常語で、文語が日常語でないとは一概に斷ぜられない事です。我々はたしかに文語で考へる事がある、「かはいさうな男よ」とあるべきを、「あはれな男よ」といふ言葉で考へる。その場合そのあはれなは日常語と言つていいと思ふ。元來單語の方は、文語がむしろ多く用ゐられてゐる。例へば、「馬鹿」といふべきところを、「愚人」とか、「痴人」とか言ふ事が多い。この場合、「愚人」「痴人」は口語である、日常語である、單

なる文語ではない。そして「なり」と「です」との相違で文語とか口語とかきめるのは馬鹿げてゐる。

之を要するに、私は詩を作る人にから勸めたいのです、自分の現在それをもつて考へてゐる言葉を以て詩作せよと。もし、我々が英語で考へる事があれは（そしてそれは極めて稀れでない）どしどし英語を用ゐてかまはない。「馬鹿」と言はないで「フウル」と言つてよい。文語で考へれば文語を用ゐてよい。それを形式的な考へからして、どんな言葉でも、日常の俗語に飜譯して詩作しようといふのは、反つて無理である、不自然である。それはやはり言葉に囚はれてゐるからだと言つていいと思ひます。それをもつて考へる言葉――それが卽ち我々の日常語である！

ツルゲエネフはその『散文詩』のをはりに露西亞語を讃美する一篇を添へて、「疑ひ惑ふ日にあつても、國運を思うて心傷む日にあつても、汝のみは我が杖であり柱である。おお、偉大なる、信實なる、自由なる露西亞語よ！」と言つてゐる。我が日本語にどれ程缺點があらうとも、私はまたその他國語に見出せない多くの長所を知つてゐる。いなその長短を度外視しても、この生れた時からの言葉は愛せずにゐられない。我々もまたツルゲエネフが露西亞語を讃美したやうに日本語を讃美したい。そしてこの言葉を更に純化すべく努力しようではないか！

十二、經驗と詩作――空想と實感

眞實の詩と虛僞の詩―ギヨオテとヴエルレエン―內部經驗―感激と心の活動

「詩人は眞實（ワアルハイト）を愛し、且つ眞實（ワアルハイト）を了解すべき心情を有たなければならぬ」とは詩聖ギヨオテの言葉であります。眞實――然り、眞實のみが詩人の寶です。眞實は詩人の魔法杖です、詩人はこの杖さへふるへば、いかなる人をも自分の思ふがままにする事が出來るのです。若し、いかに巧妙なる技巧と、間然するところなき修辭と、新樣式とを具備し

てゐようとも、眞實の一點を缺いでゐたならば、その詩はただの骨董品にすぎないのです、美しい玩具にすぎないのです。眞實であるか否か――これがその詩の價値を定める第一の、否むしろ唯一の標準です。眞實から出發したものでさへあれば、その詩は必ずや人の心を動かすに違ひありません。至誠天に通ずといふ言葉がある、この言葉の如き、とりもなほさず、眞實の力を喝破したものに他ならない。然らば、眞實とは何であるか？ 眞實から生れた詩とはどんな詩であるか？――

眞實は虛僞の反對です。單なる技巧で作つた、筆さきでまとめ上げた詩、それは美しい言葉や、むづかしい文字や、氣の利いた言廻しばかりで出來上つてゐるのにしろ、何等の生命も何等の力もありません。なぜかと言へば、それは心から生れたものでなく、手先きで繼ぎ合せ、こね廻し、でつち上げられた虛僞の詩だからです。つくり花だからです。人形だからです。細工物だからです。そんな詩は、その當時、よし人の目を眩惑して、その華かな文字や、絕倫な技巧によつて、いかにも立派な詩のやうに思はせて、一世の賞讚を博し、博士を感服させ、幾千の崇拜者を得ようとも、決して長續きはしません。もともとその背景に何等の眞實な生活がなく、生命がなく、その中に何等の眞實な感情をも含んでゐないのですから、その巧みに驅使せられてゐる美しい言葉が時代の趣味に後れたものとなり、その絕倫の技巧が古くさいものとなり、習俗的なものとなるや否や、直ちにそのぼろが露れ、その無意義、無價値な事、そのノンセンスな事が暴露されて、もはや世の中から顧られなくなつてしまひます。之に反して、自分の眞實の歡喜、自分の眞實の苦悶、自分の眞實の感情を歌つたものならば、よし美しい言葉は用ゐなくとも、よし技巧に何等の妙味もなくとも、深く人の心を動かし、人の心に沁み通つて容易に忘れ難いものとなり、長く永く生命を保持して行くに違ひありません。なぜといふのに、人間の眞實の感情は永久に古くなるといふ事はないからです、人間が全く別のものとならぬ限り、また人間の滅びない限り、その生命は常にあらたです。よしまた不幸にして、いろいろの事情から

その當時認められなくとも、いつかは認められる時が來ます。

眞實とは要するにまごころです、眞實の詩とは即ちまごころからの詩――心から出た詩の謂です。心から心へ――これこそ詩人の最後の願望でなければなりません。心から出た詩にして始めて心へ入る事が出來ます。詩人は其詩に於て他のいかなる事をも誇るべきではない、誇つてもいいけれど、それは愚かな事にすぎません。ただ「これは心から書かれたのだ」と言ふ時こそ、詩人は會心の微笑を浮べていいのです、その誇りは決して傲慢でもなければ、痴愚でもない。それこそは寂しい詩人の慰めでなければならない。

古來、大詩人と言はれる程の人はみな眞實の詩人でした。今、その一例としてウォルフガング・フオン・ギョオテを擧げて見ませう。ギョオテは眞實の詩人でした、彼以上に眞實の詩人はあり得ないと思はれる位に眞實の人でした、人間が眞實だつたのです。然し彼は眞實を意識して求めたのではない、彼は何より故意を嫌ふ、彼は小鳥の歌ふやうに歌つた。彼の詩は作らうとして作つたのではない、それは感情の壓迫からして自づと內から外へ溢れ出たのです。彼は後年、その詩作の全部を「一大告白の斷片」と呼んでゐる、また「何人も散文に於て懺悔するものに非ず」とも歌つてゐる。彼の詩は懺悔であつた、彼は自分の實際に經驗したところを詩材にして、これに技巧の磨きをかけて（それは技巧詩人の修飾とは違ふ、技巧詩人は銅や錫に鍍金をするのであるが、ギョオテは純金に磨きをかけたのである）渾然たる名篇としたのである。彼は自分の詩を偶成詩（Gelegenheitdichtung）と呼んだ、或る經驗、或る機會に遭うて詩を作るのがその詩作の特質だつたからである。

それからまた特にギョオテの詩の特色となつてゐるのは、經驗の合一といふ事で、他の詩人が零砕な經驗を誇張したり引きのばしたりして歌ふのに反し、彼は澤山の經驗を惜氣もなく一篇の詩に投込んだ、これは無盡藏の經驗を有してゐるからでもあるが、一つは彼の詩が靈感の產物で、或る機會の來るまで無量の經驗は腦中にやすんでゐて、

一旦靈感(インスピレエション)が來つて詩興湧き上る時、殘りなくそれを吐き出したからである。かうして、かの有名な『月に寄す(アン・デン・モント)』る詩の如き、失戀のために『若きヱルテルの悲み』を抱いてギヨオテの閑亭のほとりなるイルム川に投じたラスペルヒとよぶワイマル宮の女官に關する經驗と、相愛の仲なるスタイン夫人に對する經驗と、親友ブレッシングについての經驗との三種の經驗の合一したものだと云ふ事です。かやうな例は他の詩人にあつては容易に見出しがたい事だらうと思はれます。

　けれども經驗派の詩人はギヨオテに限りません。私の信ずるところでは、恐らく近代第一であるばかりでなく、古往今來最も完全な抒情詩人であつた（人間としてはギヨオテの最も完全な人であつたのに對し、最も不完全な人であつたが）かのデカダン詩人ポオル・ヴェルレエンの如きまたその代表的な一人です。彼もまた小鳥の如く歌つた、彼もまたブリュクセルの監獄に於て、かの讃(ほ)むべき『智慧(サアジェス)』中の名詩、

ああ質朴なる人生は
　かしこなりけり
かの平和なる物のひびきは
　街(まち)より來る
……………………
君　過ぎし日に何をかなせし
君　今ここに唯だなげく
語れや　君　そも若き折り
　何をか爲せし

（ヴェルレエン）

を作り、或はカフエエ・フランセエに於て、或は娼婦の腕の中に、或は教會堂の扉によつて、彼の詩神は屢々彼を虜にしたのである。彼もまた經驗の豐富な詩人であつた。ギヨオテが超人的の力をもつてゐたならば、彼は沒人的な力をもつてゐた。ああ、誰かギヨオテと共にフリイデリケ、リリの愛人となり、ワイマルの總理大臣となり、スタイン夫人の情夫となり、伊太利の旅客となり、科學上の發見者となり、『フアウスト』の作者となり得たらう！　然しながら、よし我々がかやうな艷福家、幸福兒、一大天才となり得たらうとも、果して我々はかの美少年アルテュウル・ランボオの情人、母を蹴つておのれが「太陽」（彼はランボオをかう呼んだ）の腕を射たブリュクセルの一囚人、巴里の小カフエのアブサント泥醉の客、憫むべき娼婦の愛憐の涙に咽ぶ老ファウン、美しい、恐らくは美しいよりもより以上の、汚穢の淸淨に充ち滿ちたあの賢い、恐らくは賢いよりもより以上の『智慧』の作者となり得たらうか？

ああ悲しいかな、私たちは、尠くともこの私は、とても、どうあつても、さうはなり得ないのである。顧れば、自分の經驗のいかに貧しい事よ！――もとより、經驗は必ずしも外部の經驗をのみ指すものでない、いなむしろ、より大切なのは內部の、內面的の經驗である。外面的の經驗は運命の意志にある、自ら求めるのもいいが、それにもまた力量がいる、そして周圍の壓迫はその力量を二倍三倍にもしなければ破られない。然るに內面的の經驗は他人から何の干涉をも受けないで積む事が出來る、私たちは詩人として大を成す爲めには、まづ何よりもこの內部經驗を積まなければなりません。ギヨオテ、ヴェルレエンもまたより多く內部經驗の人だつたのです。

內部經驗とはどんなものか？――思考、空想（想像）、感受性の鋭敏な働き。まづ空想について言ふ。空想の豐富、想像力の旺盛は詩人として大變な強みです。いかにその外部經驗は乏しくとも、これさへあれば決して悲しむを要しない。想像力は我々を伊太利どころか天國へでも地獄へでも連れて行く。けれども抒情詩人は敍事詩人――散文では小說家――の如く事物を說述し、描寫するのを主としないで、自己の感情氣分を抒べるのを專らその事とする。從つて

詩人は例へば失戀した牧者を想像するにしても、その內生活を想像しなければならない、自分自ら牧者となり、牧者と一緒に嘆き悲しまなければならない。そしてそれを自分の實感として感じなければならないです。そしたらば、それはまた立派に自己の經驗となり、自分の實際より得たものに敢て劣らないものとなり得るのです。かやうに實感は詩に於て何よりも尊ぶべきもので、經驗より生れた詩が尊いのも實感が充實してゐるからです。空想から生れたものも、それが實感となつて居れば力强いのであるが、若しその然らざる時には、いかに奇拔であり、奔放であり、豐富であつても、畢竟影の薄いものである。

ところで單に實感と言つただけでははつきりわからないかも知れない。これをよくわかるやうに說明すれば、我々が今親しくして、互に相愛してゐた友人をなくしたとする、親友の死に遭つたとする、その時に起つて來るはげしい悲嘆哀悼の情――これが卽ち實感です。實感は我々の享受する感動の强さです。だから詩人は常に感動する人でなければなりません。抑も、實感は或る先輩の詩人の言を借りて言へば、「麥芽のやうなものである、詩といふ全體を膨らます要素である。實感のない詩は力がない、どんなに手でうまく造らへて見ても泥人形は結局泥人形である」然らば私たちはよろしく常に心を銳くし、聰くして、心を絕えず生々と働かせて、あらん限りの實感を攝取し、享受して、感動の生を營み、私たちの空想をも實感のなまなましい鮮紅色をもつて彩るやうにしなければなりません。それ位に强い感動力をもたなければなりません。

十三、模倣と獨創

模倣と技巧の修練――模倣より獨創へ――人間を作ること

どんなえらい詩人でも、はじめのうちは、模倣を脱する事は出來ません。と言ふより、自分より先きへ出た大詩人の模倣を以てその詩作を始めるのが極く自然な事なのです。だから模倣といふ事は必ずしも恥づべき事ではありません。ただ然し、一生の間、人の模倣ばかりやつてゐるやうではいけません。そんな風なら、いつそ思ひ切つて詩を棄ててしまふ事です。どんな小さいものでもいいから、他人には書けない、自分でなければ作る事の出來ないものを作つてこそ、始めてその人は、詩人として存在の價値があります。いや、その人に本當に個性があるならば、その人が本當に感じ、本當に考へ、本當の自分の聲で歌つたならば、決して人眞似にはならぬ筈なのです。

けれども、世の中の事は、どんな事でもはじめからうまくやれるものではありません。必ず修練が要ります。例へば大工とか、左官とか云つたやうな職業にしてもです。大工が家を建てたり、左官が壁を塗つたりするのは藝術とは言へない、異なる技術に過ぎないのですが、それにしても、小僧の時から長年、年期奉公をして叩き込まれてやつと一人前の職人になれるのです。藝術――詩作にしてもやはり修練は必要です。もつとも職人の職は修練さへ積めば多少器用な生れつきの人には誰れにも出來るのに反して、詩の方は單に器用だといふだけでは十分でない、其人に詩人の魂が無ければ、修練はいくら積んでも、いい詩人にはなれません。技巧の上手な、そつのない器用な詩は出來るでせうが、本當の詩は作れません。ここに藝術と技術との相違があるのです。けれども、いづれにしても修練を要する事は事實です。そしてその修練とは畢竟多讀と多作とに外ならない、――多く讀み多く作ることによつてのみ詩作の技巧の上達は期し得られるのです。

多く學び多く忘れたのちでなければ本當のものは出來ない。まづ多く讀むのが何よりも必要である。多く讀めば詩といふものに對する目が自と開かれて來る、そして今度は自分で作りたくなる、そこで多く作ればいいのです。が、この多作時代は修練の時代で、この時代のものにはあまり價値のあるものは出來ません。といふのは、その時代はど

うしても模倣の時代だからです。

私の經驗から言つても――私は十三四の時分から詩作を始めましたが、それから十六七までの作で今殘つてゐるのを見るに、いづれも藤村、有明、寛、泣菫などといふ先輩諸氏の模倣に過ぎません。その言葉づかひがどんなにうまくても、まるで藤村や有明そつくりであつても、たいした價値はないので、今見るとただ顔があかくなるばかりです。けれども、さうした模倣の間に自づと作詩の技巧を會得するので、この意味から、模倣といふ事はむしろ最初の習作時代には必要な事と云つていいと思ひます。模倣それ自らに意義があるといふわけではないが、後になつて自分の詩風をつくり、自分の特色を發揮する時に必要な技巧の修練に役立つからです。

ところで私が範とした藤村、有明等の人々自身は模倣をしなかつたかと言ふに、これまた模倣から出發したのです、のみならず、その自家の詩風を建設して獨創期に入つたのちでも、これらの大家はかなり模倣家だつたやうに思はれる。藤村氏は近松や漢詩などに最も影響せられてゐるし、有明氏は英吉利のロセッティや、佛蘭西の象徴派に非常な影響を受けてゐる。もつともこんな風に、一人前になつてからの模倣は單なる模倣ではなく、むしろ暗示を受けるとか、影響を受けるとか言つた方が適當なのです、それは既に確固たる自己を有してゐるからです。然しながら今の日本の詩人の中にはいかにも大家然と構へ込んでゐながら隨分子供らしい露骨な模倣をする人もあります。それは畢竟詩人としての天分が稀薄なところに由來する事と思ひます。私たちはお互に、模倣時代はなるべく早く通過して、獨創を出すやうにしなければなりません、それにはやはり人間として自分を完成させるのが何よりです、自分の人格を築き上げる事です。さうしたならば、自然と獨創が出て來ると私は信じてゐます。

一四、感興——詩はどんな時に出來るか？

靈感の問題——人工的に感興をよぶ方法——レオパルヂの詩作の態度——
私の經驗

詩はいつでも出來るものではない。詩作の氣分にならなければ、いくら焦つたところで結局駄目なのです。そして、所謂「感興」といふのが、卽ちこの尊い獨特の氣分に與へられた名前です。

感興は詩作の上に何よりも大切なもので、いくら深遠な思想や、奔放な感情が頭に充ち、胸に溢れてゐようとも感興が來らなければ、これを外にあらはす事は出來ません。文筆を執つた事のある人は、誰れでも知つてゐるでせうが、書くべき事が頭腦に一杯になつてゐるやうな氣がして、机に向つて筆を執つて見ると一向に書けない、たまたま少し書きかけて見ても一向につまらなくて、あらばかりが見える、こんな筈ぢやなかつたが、もつと美しい思想だつた筈だがと我ながらあきれてしまつて、ただもう茫然自失する——それは要するに感興が生じてゐないからの事です。感興さへあれば、決してそんな事はない、自分の書いてゐるものに缺點があらうなどとは考へもしない、いや全心それに傾注されて、その他の事はてんで顧る餘裕すらないのです。もつともかうした際には、夢中で書いてゐるうちは、一大傑作のやうに信じ切つてゐたものが、一旦感興が失せてから見ると、支離滅裂でたわいもないものだつたりするのに呆れかへつてしまふやうな事も間々經驗するところではあるが。

文章——散文ですらかうである。散文は感興も感興だがもうもう散文的な事柄を書くのだから、まだまだ努力の力で出來やすいが、詩となると、一層微妙なもので、殆んど感興の力に俟たなければならぬものです。詩人にとつては、

感興といふ事はゆるがせに出來ない問題なのです。

だから、古の詩人は感興といふことを非常に重んじたものです。彼等はこの感興を靈感と稱し、これを極めて神聖視して、かのシエレイのごときは、これについて、一篇の論文を書いてゐる位です。そして靈感がやつて來なければ、いつまでも、その起つて來るのをぢつと待つといふ風でした。ところが、近代の詩人はそんなまどろつこしい、暢氣な態度をとつて滿足してゐることが出來なくなつて、感興を人工的に作つて行くやうになりました。卽ち、靈感は神聖な神の息吹から生れるものではなくして、自分の精神力の統一から生ずるものだといふ事を信ずるやうになつたのです。これは非常な進歩に違ひありません。

感興といふものは實に不思議なものです。感興のある時に書いた詩には、その詩人の平常夢想もしなかつたやうな(もつとも全然自分の考へも感じもしなかつた事が書けるものではないから、これは表現が遺憾なく出來て、平常の不十分な考へ方を完全に補ひ作つて現れるところから、そんな風に感じるのに外ならない。)美しい文句や、力強い言廻しが後から後からと現れてゐる。これに反して、感興のない時に書いたものは、おなじ思想、おなじ感情を歌つてゐながらも、その結果は大變な違ひで、氣の乘らない、影の薄い、ミゼラブルな文句になつてしまつてゐる。これほど感興といふものは大切なのです。ところが、その大切な感興を自分の力で招き寄せる事が出來るといふのは、大變有難い事ではありませんか。もつとも、必要といふものは何よりも力強いもので、どうしてもこれこれの枚數を書かなければやつて行けないとなれば、感興もへちまも無いので、いやでもおうでも書かなければなりません。無理强ひに書かせられてゐるうちには、自然と興が湧いて來て、思つたよりも樂に書けるといふやうな事は、我々の日常經驗するところです。が、詩だとさうは行かない。詩といふものはさうした努力で成すべき性質のものでないからです。

けれども自ら感興を作る必要は詩人にとつてもないわけでもなからう。しからばどうして感興を喚ぶべきか？　か

の散文の詩人ともいふべき小川未明氏は「何うしても感興の動かぬ時には自ら感興を呼ぶために、毎日のやうに當てもなく町を歩く。そして空想に耽つて感興の來るのを待つたり、又、最も刺戟を與へるやうな書物、例へばソログウブの或る作だとか、又ボオドレエルの詩だとかを讀んだりする」と言つてゐる。散歩などは確かにいい方法で、ワアヅワアスの如きは毎朝早く散歩に出かけて、歸つて來てから詩作したといふ事ですが、場所は都會の喧騒の間でも、郊外や田園の林の中でも、いづれにしても詩興をそそるに違ひありません、またすぐれた詩人の詩を讀むのもいい事です。それを讀んでゐるうちに、ふとその句からして自分の經驗が聯想されて、詩興が動いて、つひに一篇の詩が出來るといふやうな事は珍しくはないのです。が、ただ其詩の單なる模倣となつたのではつまらないからこれはよくよく注意を要する。西洋の詩人では、シルレルの如きは腐つた林檎の香を嗅ぐと詩興が湧いて來るので、いつも林檎を机の上から離さなかつたといふ事だし、墺太利のグリルパルツェルの如きは、音樂を聽くと創作の氣分になれたといふ。音樂には確かに人を詩作に誘く力があるやうに思はれる。また自然の音樂——小鳥の歌や、小川のせせらぎなども異常な力をもつてゐるやうですが、これらの自然のリズムが、人間の心のリズムを喚起すのはまことに理由のある事と思はれます。

然し詩人は感興が無いのに無理に感興を喚んで詩作する必要はまあなからうと思はれる。いたづらに多作するよりも、少數のすぐれた作を出した方がいいのですから、靜かに心の動くのを待つ事です。作り出すよりは、自然と溢れ出るといふ風にしたらいいと思ふ。

伊太利の厭世詩人ジアコモ・レオパルヂは、机に向つてゐる時でも、散歩に出る時でも小さなノオトブックをかたはらから手から、離さないで、詩興が動けば、一語の消しも直しもしないで、一息に書き下してしまつてから一度聲をあげて讀んで見るやうにしてゐたといふ事です。そして私が『靈魂の秋』の終に添へて置いたレオパルヂのあの初めの

詩の如きはそんな風にして、寂しい人氣のない海岸にひとり踞つて書いたのださうです。そして彼はどんなに早く書いても、自分の思想をあやまつて表白するやうな事はなかつたのです。そしてこのレオパルヂのやり方は詩の細工人ならぬ、眞實の詩人にとつては最も正しいものではないかと私は考へずにはゐられません。

なほ、序に私の經驗をも書き添へて置きませう。私は一體にいつでも物事を調子で考へ、調子を感じるといふ方です。文章を書いても調子で書きます。だから書いて行きながら一々聲立てて讀むのが常です――どんな俗事を書いた文章でも。この點から言へば、私は多分天成の詩人なのでせう。一體、韻律をもつて考へるといふ事は詩人には免れない事であるばかりでなく、また必要事だらうと思ひます。さうして考へたなら、その考へは單なる概念や、思想の形骸にはならずに直ちにその詩人の血となり、生命となつて現れるのだと思ひます。

私の詩作のやり方は、やはりノオトに、感ずるがままに書き附けて行くといふ風です。もしその時多忙であつたりすると、その心に浮んだままをざつとノオトにひかへて置き、他日それを取出して見ると、その時の氣分が再現する。そこで始めてそれを一篇の詩にまとめるのですが、その氣分がどうしても思出せない場合には、斷片のままにして置く。これが私の詩集に短い斷片の多いわけです。しかし、この斷片を無理に一篇の詩にまとめようとすると、力のない、熱のない、影の薄い言葉で、肝心の生命まで殺してしまふやうになるから、むしろそのままにして置く方が賢明なやり方です。それからどんな時に多くがが出來るかといふと、大抵友達と話したあととか、ある事實に出逢つた時とか、すべて心を動かした時のやうですがさういふ大切な時は十分利用しなければいけません。詩興の動くときは、一晩に三四篇も出來るやうです、これは平常たまつてゐたのがこの際一時に溢れ出るからで、その代り詩興の湧かない時には、ただの一篇だつて出來つこはないのです。

十五、推敲はどんな風にするか？——推敲の實例

推敲に伴ふ危險——推敲と感興との關係

近世第一の詩人的哲學者なるニイチエは「文章を改めるのは思想そのものを改めるのに他ならない」と言つてゐます。これは恐らく千古の眞理を道破したものだらうと思ひます。推敲はいかなる場合にも外形の、形式の推敲ではなく、直に內容の、思想の推敲です。推敲はしなければならない、然し、推敲ほど容易でないものはないのです。推敲の上手下手はその詩人の價値に大なる影響を有してゐるし、推敲のうまく行くと行かないとはその詩の生命に關すると言つても敢て過言ではありません。

詩の推敲といつても文章の推敲と別に大差はない。が、詩の方が文章より一層制限せられた、無駄を許さぬ、たつた一語が全篇の死活にも關はるやうな微妙な形式のものだけに、その推敲の困難は一層である。それに單に內容の上、意味の上からのみならず、口調、即ち聲調に十分の注意を拂はなければならぬと共に、言葉の調和や、形式の整頓を無視してはならぬ點が文章よりも數倍必要なのだから、よくよく氣を附けないと、反つて元のより惡くしてしまふやうな事がないとは限らない。

私一個の經驗を話して見ると、私はあまり推敲をしない方です。北原白秋氏の如きは、最も推敲に腐心する詩人で、その苦心は昔の松本某といふ人形師が、人形の頭の髮の毛を一本々々自分で植ゑなければ承知せず、人形の着物まで自分で縫つたといふ、名人の經營慘澹に敢て讓るべしとも見えません。氏の如きは全く名人肌の人で、また立派な詩の名人と言つていいでせう。が、私は氏とは全然正反對の立場に立ち、正反對の考へをもつてゐる、これが私の推敲

といふ事について特別の考へをもつてゐる所以です。

と言つて、私は推敲を全然無用の事となすのではありません。反對に、非常に大切な事だと思つてゐます。大切な事に思ふだけに、みだりに推敲するのを恐れるのです。推敲しさへすれば必ず善くなるやうに考へるのは間違ひです。古來の大詩人の作でも、推敲してからの作と、推敲しない前のとを比べて見て、もとの方がずつとすぐれてゐると云ふやうなのは、ざらにある位です。

一體、推敲といふ事は批評家の立場に立たなければ出來ない事です。しかも、詩人ほど通例批評的の天分を缺いでゐるものはない、推敲のしぞこなひの屢々ある所以です。それに詩作をしてゐる時は、十分感興に乘つてゐるから、自分でも思ひがけもしなかつたやうな名文句が後から後からと湧いて來るといふ風だが、推敲をする時には、頭をひねつてゐるうちに感興が湧いて來れば格別、大抵感興のない時にするから、其時挿入した句などが力のない冷たいものとなつて、他との調和を破るやうな例はままある事です。だから推敲をするのにしても、感興の湧いてゐる時にすべきだと思ふ。

それから詩の出來上つた時に、どうも何處となく滿足の出來ない、物足りないやうなところがある。それでゐて、筆を加へようとすると益々面白くなつて來さうな氣がする。そんな時には、決して其上ひねくり廻すべきでない、其儘篋底にしまつて置いて、程經て、まあ一週間もたつてから取出して見れば、其時氣の附かなかつた缺點がよくわかるだらうと思ひます。出來上つた時には、「どうだよく出來たらう、すばらしい詩ぢやないか!」と言つたやうな得意の情が強いから缺點もわかりにくいが、時日が經てば經つほど、こまかなところまで氣が附いて來るものなのです。ただあまり時日が經つと、推敲するのが危險な事情があります。それは詩はもともと感情の飾りなき表白である筈だから、もうその作つた時の氣持が思出せないやうな時分に、大斧鉞を加へたりすると、まるで原作と別のものになつ

てしまふ。眞實を尙ぶ私はそんな事を喜びませんが、それでも訂正されて出來上つたものが立派なら結構です。が、そんなのはえて技巧的な、力のないものになり易いから注意しなければなりません。

その他まだ言ふべき事は多いやうな氣がしますが、一々實例について言つた方がよささうですから少しく推敲の實例を擧げてこの項を終りませう。

他の詩人諸氏の推敲のあとは知るに由ないゆゑ、私の作を擧げて見ます。『不死』――これは後の評釋の中に全部載せてある詩ですが、その第四行は、もと、

生きて　身を　墓と　なす　より

とあつたのですが、これを、

身を　墓と　なして　生きん　より

と直しました。「前のやうだとまづ調子の上から言つて、「生きて、身を」がぎくしやくした感じを與へる上に、「いとたかき譽れを得るも」といふ前の句を受けるものとして、力の弱いところがある。これに反して、後のやうにすると、餘程力強くなります。試みにこれを朗讀して御らんなさい。前のやうな五七調よりも、後のやうな八五調の方がずつと力強いことがわかります。そして、それがこの思ひ詰めた感情によく適してゐるのです。この韻律の問題は研究して行けば益々むづかしくなるもので、詩人はむしろさうした科學的の推究よりも、幾度となく自分で口ずさんで見て、調子を考へて見た方がよい。理論より經驗を重んじた方が間違ひがないと私は信じてゐます。尙また、內容的に言つても、同じ思想でも後者の如き表白をした方がずつと巧妙である。それに比べると前者は間が拔けて見える。そしてこの二つの句の感じの相違はどうでせう、これは同じ思想であつて、しかも同じ思想と言へません、同じ文字を並べてあつても、その文字の置き場によつて、その文字の有する內容の重みが違つて來る、殊に詩だと、調子の如何に

よつて、それが一層顯著にあらはれるから、餘程違つた感銘を與へるやうになるのです。だからニイチエが前述のやうに言つたのは間違ひのない觀察だと言はなければなりません。

それから第六行は、もと、

　　ここに眠るとも知られずに葬らるるも、

とあつたのですが、「葬らるる」は、ら、る、るとら行が重つて口調が惡い、それに、「ここに眠るとも知られずに」と言へば既に葬られてゐる筈だのに、「葬らるるも」と言ふのはそれ相當の理由はあるとしても一寸讀んだばかりではうなづかれませんから、かたがた「朽ちて行くとも」と直しました。それからその次ぎには、

　　獸の手に君をわたして、

と記し、さうした感情を歌はうとしたのですが、少しごたごたしさうだつたし、あまり露骨になるので、消してしまつて、直ぐ結末にしてしまひ、

　　君とあらば、不滅の神ぞ、
　　うつくしきふた柱の神と女神ぞ。

と記しました。が、どうもこれでは物足りない。力の弱い氣がする。それにこの「君とあらば」が調子が惡い。多分から考へたのでせう、實際のところは、その考へが意識に上らないうちに、私の感情は、私のペンをして、

　　君とあらまし。君とあらば
　　われ等は神ぞ、不滅の神ぞ、
　　ふたばしらの神と女神ぞ。

と記させましたが、それがまた、

君とあらまし。君とあらば
われ等は神ぞ、
ふたばしらの不滅の神ぞ、
うつくしき神と女神ぞ。

といふ現形に改められたのです。一行づつ延びた譯ですが、この三つを比較して見れば、どれが一番いいかは思量を要しないところと思ひます。なほ、此の推敲は、あとでしたものでなく、作りつつ推敲して、若くは推敲しつつ作つて行つたものでした。

十六、題のつけ方

內容あつての題――題に於ける型――二三の注意

一體に詩に限らず、小說でも、戯曲でも表題はなかなか重大なものです、中にはどうでもいいやうに思つて、等閑に附してゐる人もあるかも知れませんが。とりわけ詩の如きは、あのやうに短い暗示的な性質のものだけに、一層題のつけ方に注意しなければなりません、題のつけ方一つでその詩全體が死んでしまつたり、また反對に非常に意味の深いものとなつたりするやうな事も屢々あることです。それに元來、題といふものは、直にその內容を想はせ、その作者の趣味なり、傾向なりを端的に示すものですから、愈々以て輕視してはなりません。例へば、ここに「生ける宮」といふ詩があるとする、それを見れば直ぐその作者が象徵派の詩人だとわかる、生ける宮といふ言葉には神祕的な暗示は出てゐるけれど、明晰な理解を與へないからである。それから「歩め」と題する詩があるとする、これを見ると、

人道派、特に民衆派の詩だとわかる、作者の樂天的な、肯定的な、勇敢な態度が殘りなくこの歩めといふ命令法に現れてゐるからです。一例を擧げればまあこんな風です、もつとも中には一向要領を得ないやうな題もあるにはあるけれど、それすら何處かに作者の特徴を示してゐないやうな場合は殆んど無いのです。

作品に巧い拙いがあるやうに、題のつけ方にも巧い拙いがあります。もつとも詩人は最も言葉に敏感な人々で、それぞれ特殊な言葉の趣味をもつてゐるところに持つて來て、題そのものがとりわけ趣味性の支配を受けるものですから、相互の趣味性の相違から、甲がいい題と見なすものを乙が惡い題だと斷ずるやうな事は普通の事なのです、例へば或る散文詩人が富田碎花氏の『永遠の嘆き』といふ詩を題に不快な響があると言つて斥けた類です。が、まづ普通の見方から言つて、その詩の內容にぴつたり合つてゐて、作者の氣分をよく現してをればいいとしなければなりません。題は內容と離すべからざるものですから、表題だけ引離していいとか惡いとか論ふことは出來ない筈です。おなじ題でも內容がつまらなければつまらなくなる、つまらぬ內容にものものしい題でもついてをれば、むしろ滑稽でせう。かの白耳義の大詩人エミイル・ヴェルハアレンに "Les villages illusoires" といふ詩集があつて、『幻の田園』といふ譯をつけた人がありました。ところが我國の詩人で同じくその詩集に「幻の田園」と題した人があります、これなど不見識な事であるばかりでなく、何しろ一方が近代の大詩人なのですから、自分の折角の苦心の集をつまらなく見せる危險があつて反つて損です、もつとも我々がヴェルハアレンを生涯知らずにしまつたならまた格別ですが。

詩風に流行——はやりすたりがある如く、表題にも流行があつて、或る時代々々の型といふものがある。矢田部博士等の『新體詩抄』時代には『勸學の詩』とか『社會學の原理に題す』とかいふ漢文から來た題なぞもあつた。(私は數年前の作にこれに似通つた『醉人の詩』『アッヒム・フォン・アルニムの肖像に題す』等の題を附したが、これはそれらの模倣ではなく、また私はその題を恥としません。)七五調を主とした音律詩の時代には題は大抵型に入つてゐて、

誰のも彼(かれ)のも同じやうなただ詩的といふだけのものでしたが、最近自由詩時代に入つてから、だんだん題が個性的になて來たのは、その内容の個性的になつたのと共に喜ぶべき事です。もつともまたもや多くの模倣家によつて、新しい型(かた)が出來さうではありますが。なほ終りに、題をつける上の注意を擧げれば、(一)なるべく内容に適切な、よくその内容を代表するやうな題をえらぶこと、(二)あまり凝つたりひねくつたりした妙な題はなるべく避けること、(三)自分の個性を發揮するやうな題を選んで、人眞似は嚴に避けること、大體こんなものでせう。

十七、詩の朗吟法について

朗吟と朗讀――詩は聲を立てゝ讀むこと

詩の朗吟法といふ事は一般に閑却せられてゐます。誰れもこの問題について考へた人はないやうです。けれども、詩がその性質からして、元來目に訴へるよりは耳に訴へるものであり、讀むべきものといふよりもむしろ誦すべきものである以上、詩の朗吟法を研究するのは決して無用な事ではありません。

「鞭聲肅々」といふ漢詩の朗吟は嘗て屢々耳にしたところですが、今ではあまり聞く事がなくなりました。漢詩を朗吟する時代は既に過ぎたのかも知れません。けれども、未だそれに代るものは出て來ないやうです。デカンショや流行節の如きは少し趣味のリファインされた人には歌ふ事は出來ないでせう。で、私は高級な詩が一般に歌はれるやうな時代の早く來らんことを祈ります。『カチュウシヤの歌』や、北原白秋氏の『さすらひの唄』が蓄音機に吹き込まれてゐるといふ事は、この點から言つて喜ばしい事です。

けれど　私が詩の「朗吟」と言つたのはむしろ、「朗讀」と改べむきものかも知れません。朗吟といふ言葉な何だか

高聲を張り上げるもののやうな氣がしますから。詩は蠻聲を揚げて猛烈に怒號されるべきものでなく、反對に靜かに、人をはばかるやうな低聲で誦せられるべきものだと思ふからです。一高の健兒諸子に高唱せられるデカンシヨは勇壯活潑ではあるがあまりに粗野である、詩があのやうな粗大な曲調で、粗暴にどなられたなら、纖弱な華奢な身體をもつた詩は驚いて死んでしまふかも知れない。詩はさういふ取扱をしたくない。

そんならどうしたらいいかといふに、立派な作曲家によつて作曲せられるものなら、その曲調によるのがいいでせう。然し、さうなるともう詩の問題よりも音樂の問題です。それに、さういふ風に歌ふとなると、それは詩を鑑賞するといふよりも、素人音樂家の獨唱のお稽古といふべく、それは大にいい事でいいが、兎角、詩そのものが閑却されてしまつて、曲調が主になる傾きがあると思ひます。

で、詩を味はうとする人は、やはり自分一流の調子をもつて、その詩をしづかに口吟むがよろしい。與謝野寛氏の如き、詩を誦する上に於ても、獨特の名調子をもつてゐられて、氏の朗讀を聽くと、その詩の味ひが本當にわかつて來るやうな氣がします。また三木露風氏一派の人たちも朗讀を事とし、それぞれ研究を積んでゐる。それゆゑこの問題については若い詩人の中から卓拔な意見も現れる事と思ひます。で、私はただ今私自身も自己の長い間の讀詩より得た自分の調子をもつてゐる事を告げ、若き詩人諸氏にも詩を味ふとき必ず聲を立てて讀まれん事を望んで置きます。

十八、大詩人の詩訓——その解説

ヴェルハアレン——ミユツセ——ギヨオテ

私の考へるところによれば、詩人の志すところはたつた一つあるばかりである。即ち、教訓詩を作る場合を除いて、自分を選んだ形式の中に、情熱と情緒と思想とを注ぎ込んで、自己を表白すべきである。そして、その形式たるや、一般に認められてゐる法則とか、或は一定の定まつた詩形に據ると云ふよりは、むしろ自己の心境に應じて發見すべきものである。

眞の詩人の思考に上るものの一切は、その詩人の生命の全體に反響して、骨格、筋肉、神經に至るまで、皆それに應ずる。それは外物より精神に到達する情緒に動かされるからである。此の忠實にして唐突な感應は、詩人の全心に一つの動搖を與へ、一つの特殊な發動を生ずる。此の内心の深大なる運動は、ここに始めて詩人に節奏を供し、律格を與へる。韻脚、類音は、ただこの節奏（リズム）を顯著にし、整頓して、これを築き上げるものに過ぎない。

詩人はその性質から言つて一個の昂奮家である。必ずやその情熱と思想とは、一種豐富、熱烈、最高の生命を與へられ、壯大となり、旺盛となつて、つひに美に到達するに至る。

されば、詩人の直接の目的は自己を表白するに在り、間接の目的は美に達するに在る。（エミイル・ヴェルハアレン）

ヴェルハアレンは新白耳義詩派の大詩人で、その詩は北米（アメリカ）のホイットマンの詩と共に、新しい詩人に非常な影響を及ぼしてゐます。右に掲げた論議はよく彼の信條を表してゐるものと思ひます。形式などはどうでもよろしい、形式に拘泥せずと、思ふがまゝ、感ずるが儘に歌へばよろしい、即ち詩形と云ふものはこれと言つて定つてゐる譯ではない、自分の心持にふさはしい、自分獨特の詩形を創り出すべきものだといふのです。そして教訓詩（道徳的思想、又は極端に走らぬ中庸を得たる人生觀を寓した詩をいふ。）を特に例外としたのは、教訓詩が他の詩と異つて、

全然感情を伴はない、理智の産物だからです。

本當のいゝ詩を作らうと思へば、詩人はその全身、その全心を動かしてかゝらなければならぬ。單に筆先きでいい加減にでつち上げたのでは決して人を動かすものでない。深い感動の底から深い韻律(リズム)は生れて來るのです。そして韻脚(音律のこと)類音(同音を並べたもの)卽ち日本の詩で言へば七五調とか、五七調とかいつたやうな約束は、大したものではない、むしろ枝葉の問題だといふのは、たしかに名言と云はねばなりません。

詩人は昂奮家でなければならない。ナイイヴな感激家でなければならない。感動しやすい、ものに感じやすい、卽ち多感といふ事が何よりも必要です。ヴェルハアレンのこの言葉もまたそれから出發してゐる。

二

さまざまの追憶(おもひで)によつて想ひをかまへ、……刹那の夢を永遠に傳へよ。眞を愛し、美を愛し、その諸調を求めよ。歌へ、笑へ、泣け、躊躇することなく、かつ笑ひ、かつ語り、かつ嘆き、かつ望みして、その中から意味の深い、情趣に富んだ作をせよ。涙を眞珠に變へるのは詩人の情であり、財(たから)であり、命であり、望である。

(ド・ミュッセ)

ミュッセは佛蘭西浪漫派(ふらんすロマンティックスクウル)の大立もの。情熱と涙との詩人と呼ばれるだけにこの言がある。この言葉の意味は說明するまでもありますまい。うれしい時には笑ひ、悲しい時には泣きして、その感情をそのまゝ作り飾りせずに歌へば立派な詩が出來る。それこそ詩人の特權である。

三

形式の奈何にかかはらず、長く力を失はないで、人の心を動かす事を言ふのが若い詩人のなすべき務めである。單に物にさからふ心、物を嫌ふ心、物を語る心、若くは物を打消すのみなる事は決して言葉に現してはいけない。それは何の益もないであらう。

私は我が友なる若い人達に勸告する、めいめいに自分の生涯を考へて見る事を、さうしたならば、詩の技巧が少し整つて來れば、それだけでその思想は愈々善くなつて來るであらう。

詩の中に含まれてゐるものは、即ち又詩人の生涯に含まれてゐるものに外ならぬ。それは誰も奪はず、誰も縮めず、ただ時に蔽うて暗くすることがあるに過ぎない。何事によらず、影を顧みて自ら喜ぶやうな事に基いてゐるものは私の取らぬところである。

私は今私の友とする人々に告げたい。君等は守らなければならぬ法則があるのではない。法則は自分で作るべきものである。ただ一篇の詩が出來上つたならば、その詩に含まれてゐる意味が自分の經歴から來たものであるかどうかを考へて見る事である、またその經歴のあらはすところが以前よりも進歩してゐるかどうかを考へて見る事である。譬へば別れた戀人、自分を棄てた戀人、又はなくなつた戀人をいつまでも戀ひ慕つてゐるのは、進歩の道ではない。かうした感情を歌つた詩は、その言葉はどんなに巧妙でも所詮益のない事である。

詩人は時勢に從つて、その詩風をも進歩させるやうに努力しなければならぬ。さうしたならば、いつでも直ぐに自分の心の活動したかしないかがわかる。また後になつて顧れば、自分の心の活動したかしなかつたかがわかる。

（ギヨオテ）

いかにもギヨオテのギヨオテらしいところをよく現してゐる言葉です。大變有益な敎訓です。「單に物にさからふ心」云々の戒めはいかにもオリムピエエルだつたこの大詩人の言葉らしい。が、私は必ずしもさうした心持を歌

つてはいけないとは思ひません、これは私のギヨオテと意見を異にするところです。
自分の生涯をよく考へて見ると云ふ事は、單に詩を作る上からばかりでなくても、甚だ必要な事です。またギヨオテは一々自分の閲歷、經驗に基いて詩を作つた人であるから、一詩成る毎にそれが自分の經驗から來たものかどうかを考へて見よと言つたのであるが、これは大に味はふべき言葉です。殊に、その經歷の進步に云ひ及んだあたりは單なる詩訓たるのみならず立派な人生訓です。法則、則ち詩形を自分で作るべききのとしたのもヴェルハアレンと同意見で、これは詩人の忘るべからざる眞理です。時勢と共に詩風を進めて行くといふ事は、最も必要な事で、いつまでも舊慣を墨守すべきではない、そしてその心さへ活動してをれば、詩風は必ず進步して行くに違ひありません。

十九、『靈魂の秋』の中から

これまでのところで、詩とはどんなものか、詩を作るには大體どんな風にしたらいいか概略述べ盡したやうですから、今度はもつと具體的な實例について說明を與へたらいいやうに思はれる。それには詩の評釋が何よりですから、便宜上、私自身の作『靈魂の秋』の中から數篇を拔いて評釋をして見ます。つまり自分の詩作の經驗を直接その詩について述べて見て、自ら詩の作り方を會得して頂かうといふのです。

つばめ、つばめ、我家のつばめ、
迷子になつたの？
向うのたあかい瓦の屋根に
早くいつてとまれ！

つばめ、つばめ、
かはいい私の妹よ。

これは『子供の歌』と題し女詩で、子供の心持になつて歌つたものである。『つばめ、つばめ』と繰返して呼んだところに、子供らしい素直さと、のんびりした調子とが現れる。これを「燕よ、燕よ」といふ風にでもすればぶちこはしになつてしまふ。第一調子が悪い。それから「かはいい私の妹よ」と云ふのは、とりわけ子供の心持を出してゐるし、妹と燕を呼んだところその子供が女の兒だとわかる。これをかはいい私の弟よとしたのでは感じがそぐはない。燕はやはり妹と思はれても弟とは思はれないのだから。この詩の面白味はその單純で、飽くまで子供らしいところにある。然るにその中に、例へば「少女のやうな燕」などといふ句が入れば全體の調和を破つてしまふ。子供が少女などといふ言葉を使ふ筈がないからである。かやうにその詩の性質によつて言葉を選擇するのは必要な事である。

ゆうべの夢はまさ夢か
窓のほとりに鏡をするゑて
髪といてゐる肩の瘦せ、
それも苦勞をしたしるし。
ぢつと面を見合せて、
言葉もなくてはらはらと
落つる涙がとめられぬ。

これは『おもかげ』といふ詩の一節で、長いこと他鄕に流寓してゐる人が、一夜故鄕に自分を待つてゐる妻のことを夢に見て、目醒めてからその夢をいろいろと思ひ返して、最愛の妻は「生きてゐるやら死んだやら」と案じる心持

を歌つた詩で、ふと氣が附くと、自分は故鄕の家の窓の外に立つてゐる、窓の中には窓際に鏡臺をすゑて、妻が髮をといてゐる、げつそり面窶れがして、もとから華奢な撫肩だつたのが、すつかり瘦せてしまつていたいたしい位なのを見ると、どんなに自分の留守の間に苦勞をした事であらうと、可哀相に思つてぢつと見てゐると、向うでもふと氣が附いて此方を見る、目と目が出會ふ、ぢつと見合つて、何とも言はないで二人は泣いてしまふ。さうした夢を考へては「ああこれが、またと此世で見られうか。」と嘆ずるのである。この詩は俗謠の調子で歌つてある。これをいかめしい調子で歌つたりすると、この綿々たる情緒はぶちこはされてしまふ。かうした人情味に富んだ、もののあはれのこもつた心持を歌ふのには、やはりかうした民謠風の調子でなければいけない。調子はやはりその內容にふさはしいものを選ばなければいけない。

巷にきく追分の節にも
秋のひびきはこもれり、
そは人の涙をさそふ、
こころなき尺八の音も
ありとあらゆる苦みを、
おもひでと嘆きのかぎり、
身のうちに湧きかへらしむ、
そは熱き涙となりて溢れ出づる、
——かくてこそ人に喜びはあれ。

これは『秋思』と題せられたもの、初秋の夜なぞ、都會に住む人は必ず知つてゐるであらう、街頭に立つて尺八の

音に行人の歩みをとゞめさせてゐる盲人のあることを。或人は心なく聞き流してしまふであらう、また或人は上手だとか下手だとかその音色を批評しながら聞くであらう。また中には獨歩の『女難』などを思出して、その盲人の姿を興味をもつて見る人もあらう。ところが、多感な詩人は、よしその尺八がどんな心なき口から吹かれようとも、深い秋の悲みを感ぜずにはゐられないのである。ましてそれが追分ででもあれば――この總日本的な哀切なメロディは尺八に最もふさはしく、尺八の音は秋の夜に聞いても最も哀れ深いものである――

　鳥も通はぬ八丈が島へ
　やらるるこの身はいとはねど、
　あとにのこりし妻や子が
　どうしてその日をおくるやら……

といふ歌の文句からして既に身に沁みるやうな哀愁を帶びてゐるあの追分の節ででもあらうならば、――忘れてゐたあらゆる昔の夢、なくなつた慕はしい人の面影、人の世の嘆き、悲み、あらゆるものが形なき雲のやうに胸に湧上つて來るであらう、さながら電氣にでも打たれたやうに、何とも知れぬものが身體中を閃き渡るのを感ずるであらう。そして双眼はひとりでに濕ふに違ひない。然し、この悲みは、この音樂の與へる甘い悲みは、これこそは人生の喜びであると結んだところに、作者の思想が現れてゐる。

「音樂は空氣の詩である」と獨逸の作家ジァン・パウルの言葉である。抒情詩の極致は恐らく音樂かも知れない。私もまたポオル・ヹルレエンと共に「音樂こそ第一なれ」と云ひたい。音樂の與へる感動は全く震撼的である。詩が音樂を、即ちこころよい調子を伴はなければ、その人を動かす力は半減してしまふだらう。然し、私は絃音（三味線の如き）よりも管音（尺八や笛の如き）の方に一層動かされる。そして本當の音は管音の響をもつたものでなくてはならない

と思ふ。オスカア・ワイルドはアポロンの竪琴に對して、ボオドレエルやヱルレエンの抒情詩をマアシアスの葦笛の音にたとへた。そして我々日本人の尺八であるかも知れない。私は曾て詩人小林愛雄氏と共に音樂學校の管絃樂を聽いて、その妙味を說明せられて、尠からぬ感激を受けた事があつたが、然しそれさへもこの市井の間に聞く名も無き盲人の尺八の音ほどに私の心緒を動かし得たかは疑はしい。私もまた尺八の詩人となりたい——あの寂しい、哀れ深い音色をもつて、人の涙に訴へたいと思ふ。

　空いろの果ては無けれど
　我が靈は何處にかいこふべき。
　ああかへれ、月日とともに、
　ああ二十歳のとしを伴ひて、

天は限りなく廣い。空いろに限りなくのびて、果ても見えないが、然しその廣い空間にさへ、私の靈をゆだねて、安らかに眠り入る事の出來るものは見出されない、その人の手を外にしては。しかもその人はもう此世にゐないのである。恐らくは雲の彼方にその人の靈は漂うてゐるかも知れないが、やはり現身のその人が見たい、「ああかへれ」とその人に呼ぶ。然し、歸るならば其の樂しい月日を持つて歸つてくれ、美しい二十歳のとしの若さを持つて歸つてくれといふので、なくなつた美しい人に對する思慕をうたつた詩である。

　川竹の枯れて亂るる水かがみ、
　浮いた朽木も流れてくれれば、
　何に追はれて泥龜の
　しどろもどろの水搔に

秋の名殘はやれ裂けて、
さやけき月が並木の枝に
暮れて今宵も知らぬ顔。

これは『秋の小唄』と題したもの。どんな機會でこの詩が出來たかは今はもう忘れてしまつたが、景に託して情を抒べた詩の一つで、はじめの行は「川竹の枯れて亂るる水かがみ」といふ風に韻を踏んであるけれど、これは自然とさうなつたのである。この詩は俳句の境地に近いもので、閑寂とでもいつたやうな感じが出てゐる。

間違ひの圓きかたまり、
無限大なる空間を踊り廻る。
その上に出來損ひの人形が
厚顏きはまる踊ををどる。
ああ、しらじらしき嘘の上なる眞赤な嘘よ！

『二重の踊』と題した作。これは思想詩で、厭世的な考へを歌つたもの。「間違ひのまるきかたまり」とは、無論地球のことである。その地球が無際限なる宇宙の空間を、厚顏に踊り廻つてゐる——ところがその地球の上には、また人間といふ厚顏な生物が厚顏に踊り廻つてゐるといふ思想からして『二重の踊』と題したのである。「出來損ひの人形」といふうらには人間は運命といふ知られざる意志のあやつる人形にすぎないといふ宿命論的の考へが潜んでゐるのである。非常に陰鬱な思想を、輕い踊るやうな調子で歌つたところに、この詩の面白味はあるかと思ふ。

あはれわが胸こそ
あめつちのあやしき鏡、

悲しくも、嬉しくも、うつるが儘に
くもりてはまた照れど、
よろこびは消えやすく
かなしみはながくとどまる。
くだくるまでは眠りがたきに
絶えず人の世の影をうつして
とこしへに止む日もあらぬ
なげきをぞする。

これはやや長いが、然し「断篇」である。調子はクラシックで、形式が餘り整ひ過ぎてゐるために、技巧で作つたもののやうに思ふ人もあるかも知れないが、實は、この裏には非常な情熱と悲愁とが含まれてゐるのである。「いと古き調(しらべ)にいと古き想ひをのせて、われはとこしへの嘆きをあげん」といふ私の標語(モットオ)を理解する人はまた此事をも理解してくれるであらう。人間の胸は――心は全世界をうつす不思議な鏡である。悲みも映れば喜びもうつる、悲みがうつれば鏡は曇る、涙の目にうつるものは朧(おぼろ)である。喜びが映れば鏡は晴れやかに輝く、喜ばしい瞳のやうに。然し鏡はくもりがちである、人生には歡樂よりも哀愁が多いのである、歡樂でさへも極まるところは哀愁である。しかし砕かれるまではやはり人間は、この人生の喜怒哀樂をうつしてゐなければならない、そして、愈々息の絶えるまでは悲嘆の聲を擧げてゐなければならない――そしてその悲嘆の中からまた詩は生れて來るのである。

くづれたる土藏の壁に、
忘られたる詩人の遺稿に、

青ざめし女の息に、
黄に朽ちし秋の木の葉に、
永遠の祕密のささやきはあり。
ここに魅するが如き死の匂ひは匂ふ。

これは『アッヒム・フォンアルニムの肖像に題す』る詩の一節である。アルニムは獨逸のロマンティシストで、あやしい神祕の世界、廢滅の世界の詩人である。そのアルニムの肖像に、若い私は自分の面影を見出したのであつた。考へて見れば、私ほど廢滅を愛する人も無からう。私は盛んなもの、勢ひのあるものより、常に衰へたもの、力のないものを愛した。青々と繁つてゐる若葉よりは黄に朽ちた秋の落葉を愛した、頰の紅（くれなゐ）なまるまる肥つた少女よりは、三十を越した病み上りらしい夫人の蒼ざめた容姿を愛した。人生の成功者よりは失敗者を愛した。晝よりは夜を愛した——私がノヷリスに傾倒したのは極めて自然の事である——それ故生よりも死の方が意味深く思はれるのである。私が熱烈なニヒリズムの詩人となつたのは、その傾向を推し進めて行つた結果にすぎない。然し恐らくはそれは間違つた考へであらう。間違ひであつてもよい、それは私の趣味である——私はこんなにロマンティシストなのである。私の詩もいつかは忘られてしまふであらう。その時、はじめて人はその中に永遠の祕密のささやきを聞くであらう、今私が北村透谷や中野逍遙の詩にそれを味つてゐるやうに、

いとたかき人とならまし、
うつくしき人とならまし、
のちの世に慕はるる人とならまし。
人によきことをなさまし、

世のために血を流さまし、
くるしみをおのれ一人にとりておかまし。

これは『あはれなる基督の弟子の歌』と題する詩である。私はここであんなにも純一であつた、曾つての自分の淸らかな面影を見て、限りなき愛着を感ぜずにはゐられない。おまへはその時旣に美しかつた、そして私自身が今旣におまへを愛慕せずにはゐられないのである。美しい小理想家よ！　おまへは殉教者の光榮を夢想してゐた。人道の戰士として斃れんことを願つてゐた。ああ、思へば私は少年の時から、美しい妻をもつて、立派な門構への家にすんで、自動車で出入するやうな生活に、人生の幸福を見出さなかつたのである。私はどんなことがあつても、平凡な幸福を一擲し去つたところに、眞に意義ある生活を建設することが出來ると信じてゐたのである。さうした私的な、夢想(ドリウム)にすぎなかつたか！　心よ、否と答へよ。悲しいかな、私の魂は今やゆだねられてしまつたけれども、然しこの塵の中からして、なほ昔の失はれた理想を、心よ、おまへは求めなければならぬ。私は幾年かの後、この詩を讀んで、自(おのづか)らほがらかな心持になる。そしてやや老いた私の心に再び靑春を謳(うた)したいと願はずにはゐられない。

涙は戀のなかうどなり、
軟かになりし心に愛は沁み入る。
幸福の與へし戀は不幸に破らる。
されど悲みの結びし戀は喜びに破れじ。
ああ破船の後ただ二人殘りし男と女との戀！
破られたる船に海水はたのしく押入る、
やぶれたる胸に愛はたのしく忍び入る。

私はこの詩に大詩人の氣息を感ずる。大詩人でなくして、どうしてこのやうな高調に達した感情を緊縮した言葉で歌ひ得よう！――この傲慢な自負の言葉は、然し道化者の自負として聞かれねばならない。（自負そのものがもともと道化だといふ事は別として。）なぜといふのに、この大詩人は、かはいさうに、たつた七行の大詩人に過ぎないのだもの。友よ、この大詩人の戯畫を、この第二流の小詩人を、『息の短い笛吹き』を笑つてくれ。然し、この詩によし大詩人の氣息がないにしても、その精神は尊い。涙によつて結ばれた戀を最も純な、最も美しいものと見る心は、最の上に身を救つた二人の破船者にアダムとイヴとの幸福の復活を見たのである。ハイネの歌つた「私はあなたを愛しますとおまへが言ふならば、私は悲しくて泣かずにゐられない」（女の言葉が嘘だからといふのではない、この二人の愛情がいつまで續くだらうかを疑ふからである）といふやうな複雑な、近代的な心持から見ると、何といふ單純さであらう！　然し不幸な人を純粋にする、不幸な者の感情には過剰がない！

ひと夏は苦しく過ぎて
わくら葉のはやも散りくる、
秋風に我れも取られん。
これも我が運とおもへば
神も怨まず、ただ泣くのみ。
おのが身はなほよけれども、
我が夫のなげきはいかに。

胸を病む一夫人の悲みを歌つた『ある女の一生』の一節である。ここに Sufferinghumanity の詩人がある。これを讀むと私は、

涙のうちにながらへて
寢られぬ夜半の床のうちに
泣きあかしつる人ならで
誰か知るべき汝が力

（森鷗外氏譯）

といふギヨオテが彈絃者をして運命を嘆ぜしめた句を思出さずにはゐられない。運命は常に無慈悲である。かやうな美しい心と、すぐれた容姿とをもつた幸福なる夫人をすら用捨しないその冷酷さよ、私はそれに深く動かされた、自らまた涙に濡れた麵麭を食べて來た私は。そして「寢られぬ夜半の床のうちに」私はこの詩を作つたのである。然しいさぎよくあきらめながらも、しかもなほ夫の愛にひかされてゐるその夫人の心持を十分歌ひ得たかどうかは自分でも覺束ない。それほど私の實感は、充實し得なかつたかも知れない。實感の充實は詩に最も大切な事である。若し詩人が例へば勞働者の感情を歌はうと思ふなら、十分勞働者の氣持になりきつて、勞働者の實感を以て歌はなければならない。でないと、その詩は空虛なものになつてしまふ。なほこの詩には、

うるはしき浪子のごとく
うるはしく我れも死なまし、

といふやうな句もある　浪子とはもちろん『不如歸』の浪子のことである。こんな固有名詞を、平氣で詩中に用ゐるのを、定めし低級だと思ふ詩人もあるであらう。が、然し私はこの名を恥としない。この薄命な夫人が、浪子の生涯に多くの慰藉を得たのは事實であるし、また私は街頭の流行唄の作者をも決して輕蔑すべきものでないと思ひ、また羨んでさへもゐるのだから。

せめて一度はその手をにぎりしめ

長くかぼそい指さきに、唇をあてたい、
この涙をこのやうに無駄に
ああ馬鹿らしい、
なんにもない紙の上に落そより、
あなたの髪に、額に落したい。

『はつ戀』の一節。この中には愚かなはつ戀の嘆きが少しの飾り氣もなく現はれてゐると思ふ。臆病な少年はどんなに無駄の涙をこぼしたらう！　手紙を書かうとしても、どうしてもそれを書くだけの勇氣はなく、ましてその手をにぎることなどどうして出來よう、そんな事を恥づべき事と思ひ、自分の趣味に反する事と思ふ心持がないとしても。しかもその長くかぼそい華奢な指が――それはまるまるとした指のつけ根にくぼみの出來るやうな、處女らしい手ではなくつて、靑い筋のはつきり見えるやうな苦勞をしてきたやうな手で、音樂家に見るやうな細長い指には指輪などは一つもなかつた――私はどんなに好きだつたらう！　けれども、

わたしの心が臆病なのか
それともあなたの心が冷たくて
こはれた風車のやうに
風が吹いてもまはらぬのか、

その戀は私が「あだの涙」を流したばかりだつたのである。私より年上だつたその人の心は「こはれた風車」ではなくつて、ただ私の愛の風が弱かつたのかも知れない。ここに言ふべき格言がある、戀するものは大膽でなくてはならない。――然し少年といふものは大膽であり得ないのである。かくて初戀は常に純潔なものである。

二十、『感傷の春』の中から

『感傷の春』は私の第二の集である。『靈魂の秋』が、『心の秋』とも云ふべき成熟と共に衰頽を示す時代の作をより多く收めたのに對し、『感傷の春』の方は青春の曙も云ふべき美しい時代の若々しい作をより多く收めてゐるので、一層なつかしい思ひがしますからそれを少し評釋をして見たいと思ひます。

つめたき水に影うつる
わが面影も老いてけり、
桐の葉かげに立ちよれば
烏なくなり秋の夜を。

これは明の高靑邱の詩にもとづいたものであるが、飜譯といふよりはむしろ創作に近い。この四行きりの詩で、原作はたしか長いこと他郷に放浪してゐた人の氣持を歌つたものだつたと思ふ。いかにも寂しい感じが全體に漲つてゐる。これまた一寸俳句の境地に近いところがあつて、言外に餘情を含ませてある。この言外の味といふものは一寸說明の出來ぬものであるが、繰返して讀んでゐるうちには自づと會得が出來るものである。表に現れた意味だけでは何でもないやうなのに、何となく捨て難い味ひがして、何處となくいいやうな氣のする詩や歌は、すべて此の言外の餘情を含んでゐるのである。そして詩や歌のやうな短い形式のものはすつかり言ひ盡してしまふ事は出來ないから、かうして言外に餘情を存せしめるやうにしなければいけない。

書翰のうしろでなくこほろぎ、

寢もやらで、今夜（こよひ）もひと夜、
ああ、私の心は何をおもふ？
やつぱりあのこと、あの人のこと。

四行詩である。終夜こほろぎのなく聲を聞きながら、遠くにゐる戀人のことを思つてゐる氣持を歌つたもの、無駄のないのがこの作の取得（とりえ）である。

あなたを一度見てからは
昔の私でありません、
もはや子供でなくなつて
あなたを戀しと思ふ心になりました。
あなたは一度私の頭を撫でて下さつた、
いまでは私の心にいつも觸れてくれます、
だけど、あなたはもう遠方にいらしつた。
さうしてあなたがえらくおなりになつた時、
私も女になりました……
私はあなたのお姿を胸にうかべては
何とも知れぬ涙が頬を流れます、
愚かな少女の夢を笑つて下さいませ……

『少女の夢』といふ詩で、純なやさしい少女の心持を歌つたもの。丁度高等女學校に入つた位の年頃の少女が、年上

の靑年を懷しく慕はしく思つて、人知れず、その人との樂しい生活を夢みてゐるその心持ほど、世に尊く美しいものはあるまい。少女の夢の中の主人公はきつと親切な、男らしい、眞面目な靑年に違ひない、そして一度何かの機會で出會つて親しくなつた時に、まだほんの子供のやうに思つて、その可愛らしい頭を撫でてやつた少女が、ひそかに自分を思つてゐようなどとは夢想してもゐないに違ひない。しかるに、彼が學問の爲めか、或は職務の爲めに、何處か遠いところに行つたあとに、その少女は夕暮の窓にもたれて、「君います空を眺めて」は故知れぬ淚をほろほろと流してゐる……これはほんの斷片にすぎないから、まだ推敲すべき餘地は十分あるのですが、推敲したためそのシンプルなところを無くしてはと思つてその儘にしてあるのです。

ちりくる四月の花を見るとき、
コンヴェンショナルた悲みに襲はる、
すたれたる悲みをまたも悲む。
ちりくる四月の花を見るとき、
春のなかばにして秋の悲みを知る、
美しきものの短命をさらにさとりて。

美しく雲のやうに、今を盛りと咲き誇つてゐる櫻の花を見てゐると、しみじみと人生の無常を感ぜずにはゐられない。さかりの花は將に散り初めようとする花だからである。「櫻の花を見てゐると春のさかりに秋の悲みを感ずる」と言つた獨逸の哲學者ケエベル博士の言葉は私の同感に堪へぬところである。この詩はその花のはらはらとちりくるのを見て歌つたもの。花といへば無論櫻のことで敢て「四月の」といふ形容をする必要もないのだが、調子のためにさういつたのである。花の散るのを見て無常を感ずるといふのは、まことにありふれた、珍しくない、古臭い感情で、

新しがりやの詩人だと、一口につまらない、陳腐だ、古くさいと貶してしまひさうである。それゆゑコンヴェンショナルな悲みとか、すたれたる悲みとか言つたのである。コンヴェンショナルとは習俗的な、型にはまつたと云ふ意味の英語で、わざとこんな言葉を遣つたのは、無暗に新しがる詩人に對する反抗からでもある。どんなに珍しからぬ古い感情にしろ、實際自分で本當にさう感じたならば、かまはずどしどし歌つていい。若しその人の感情にして、つけ燒刄や人眞似でなくつて、本當の心の底から出たものでさへあれば、必ずコンヴェンショナルなものでなく、獨特なもの、清新なものであるに相違ないと私は思ふ。

花の命は本當に脆い、春の夜の夢のやうに短い。無邪氣なこの國の人たちが、花見に唄ひさざめく日は幾日とない、それは直ぐ消えてしまふ。そして、三春の行樂、今誰が邊にかあるの感に堪へざらしめる。實に櫻の花は潔い。忽ち開き忽ち散る。我々は支那人や、西洋人のやうな執着を求めてはゐるが、然し櫻の花のかうした未練氣のないところはやつぱり好ましい。櫻の花は何といつても日本の國民性をよく代表してゐる花である。思ふに日本人の美德は實にこの櫻の花のやうな潔いところに存するかも知れない。私は落花を見る每に、美しい少女の死を聞いたときと同じやうに、

滅びゆくものは美しく、
美しきものは滅びゆく。

といふ二行の美しい詩句を思出す。げに Only the transient is beautiful といつたシルレルの言葉は限りなき眞理を含んでゐる。そして私もまたかう言ひたいのである、生滅するもののみが美しく、瞬間的なものほど尊いと。

身をくるしみにゆだぬるは
ああ、ただ一人のあればこそ。

ひろき世界に一人のみ
我れを涙にひき入るる。

『エテルカに』與へた詩である。エテルカとは匈牙利の詩人ペテフィが年若くしてみまかりし戀人に與へた名である。そしてこの詩の作者も亦そのエテルカを持つてゐるに違ひない。この詩の意味はたつた一人の人のためばつかりに自分はこんなに苦んでゐるといふのだが、「身をくるしみにゆだぬる」と言ふところから見ると、自分から進んで苦んでゐるのに違ひない。だからそれは樂しい苦みである、戀の苦みであるといふ事がわかる。終の二行は初めの二行の說明で、「君ゆゑに涙はてなし」といふ心持であるが、これを、たつた一人の君によつて、はじめてもののあはれを知る身となつたといふ風に解すれば一層面白からう。

落つる涙は水とともに
行方もしらず流るれど、
のこる嘆きに蘆の葉も
心もともにうちふるひ、
ふるへながらに暮れゆけば、
ほのかに月はのぼり來て、
心も水となりて流る。

私の故鄕の町には市街を貫いて一條の河が流れてゐる。その上流には蘆の葉がさわさわと風に戰いでゐる。ある夏の夕方、私は其處に腰をおろして、河の流れを見戍りながら、いろいろな感慨に耽つてゐると、おのづとセンティメンタルな涙が頰を傳はつて來た。涙は水と共に流れてゆくけれど、私の嘆きは蘆と共にとりのこされてゐた、けれども

そこへ涼しげな月が美しい光を投げると、私の心も水のやうに溶けて流れてしまふやうな氣持がした。

靑蚊帳は風にゆらぎて、
その中に我が讀みし書(ほん)、
その中に彼女の縫ひし着物(きもの)、——
その書物(しよもつ)も、着物も、
やがて用なきものとなれり。
(その甘きささやきをなど
洩らすべき、年へたる今日(けふ)。)
窓のそと木の葉の上に、さびしき月は
ひそやかに二人(ふたり)をのぞきぬ。

はじめてのきす、——
我は知る、その唇の
いかに小さく、いかに軟かなりしかを。
かたく祕められしこの祕密を
ふるさとに持ち歸りてし
彼女も、ここに我も、秋となれども、
美しき夏の一夜(ひとよ)を

忘れざるべし、我も彼女も。

『追憶の戀』過ぎし日の幸福の回想である。此の美しい Midsummer-Night's Dream（眞夏の夜の夢）は、一つの自然派風の短篇小説になるでせう。そしてこれを若しモオパッサンやゾラをして書かしめたならばどんなものが出來上つたでせうか。然しこの詩にはそんな自然派風の匂ひは少しもない。ただ美しい情趣に充ちてゐるばかりである。これを若し散文にしたならば、どんなに詩的に書かうとしてもかうは行かないでせう。ここに詩と散文との相違がよく現れてゐると思ふ。美しい夏の夜の、窓のある部屋、多分二階の六疊の間ででもあらうか、そこに靑々とした蚊帳が吊られてゐて、その蚊帳の中には、蚊を避けるために、一人は書物をもつて、一人は縫物をもつて入つてゐる。はじめのうちは、一人は書物に讀みふけり、一人は何か考へ事でもしてゐるやうな風で、手ばやく針をはこばせてゐたが、ふとしたはずみでどちらかが聲をかける、多分「いい風です事ね」とか、「精が出ますね」とかいふ言葉だつたらうが、それをきつかけに話がはじまる、そして暫くの後には、その書物も着物も傍らに投げやられてしまふ。この「やがて用なきものとなれり」の句は不倫な比較ではあるが、ダンテの『神曲』中のパオロとフランチェスカの戀物話に見える「この日また讀むことなし」といふのと同工異曲の技巧である。終の方の「彼女も、ここに我も、秋となれども」は私の自ら得意とする句で、「秋となれども」には「人生の秋」の意もある。

いつかまた我はかへらむ
あたたかき母のふところ
うつくしき世の戀びとも
わが母になどかまさらむ
わがこころたゞに疲れぬ

かへらなむいざ母のむね

「母」を慕うて作つた詩。どんなにやさしい戀人の愛でも母の愛ほどにやさしいものではない。どんなに樂しい戀でも、焦立たしい、人の精根を疲らすやうな或物を含んでゐる。疲れたもののかへるべきところはただ母の胸の外にはない。これはさうした母の胸にかへらうといふ素朴(ナイイヴ)な心持を歌つたもので、調子もまた素朴(ナイイヴ)である。

雜草の中によわよわしく菫はさきぬ、
そは荒き手につまれて萎れぬ、
ただそれのみ——
幾千度(いくちたび)となくくりかへさるる女の悲劇。

『小さき悲劇』——女性の悲しい運命をたつた四行で歌はうとしたもの。これを一篇の長篇小説にすれば、モオパッサン『女の一生(ユヌ・ヴイ)』のやうな作になるでせう。「脆きものよ、汝の名は女なり」と沙翁(シエクスピア)がハムレットに言はせた言葉は恐らく永遠に忘れられる事はないでせう。女性といふものはそんなにも、生れながらに悲しい運命を授けられてゐるのです。可憐な少女が卑むべき無情な男子に誘惑せられ、飜弄せられて、いたましい最期を遂げた實例は我々の一々記憶しきれない位聞いてゐるところです。詩に、幾千度とあるけれど、これはいくらいくらと限定した數ではなく、ただ非常に多い、無數だといふ意を現してゐるのに過ぎない。「つまれけりすてられにけりふまれけりすぐせつたなき名もあらぬ花」とは或る女詩人の歌です。この詩もそれと同じ心持を歌つたものですが、この歌の方が女として女の身のあはれを歌つた極く主觀的なものなのに反して詩の方はずつと客觀的である。

戀する少女よ、出て御らん、
四月の公園へ行つて御らん、

そんなに家にばかりこもつてゐると
心ばかりか身體まで病氣になりますよ。
少し散歩をしてお出でなさい、
花見をする愉快な人たちが
あなたのうさをはらしませう。
そこには甘い疲れをたのしんで、
ベンチに頭を伏せてゐる眠り人もあり、
動物園に牡獅子も寢てゐます、
二羽の水鳥は濁つた水をあげてます、
孔雀は羽をひろげてあなたに媚びる。
あなたもベンチに腰かける、
そこには山吹が咲いてます、
あなたも種のちがつた山吹だ。
戀しい人を待つために
いつも格子に身をよせて、
通る人を見迎へ、見送りして、
さうして萎れるまでさうしてゐるならば、
さうして戀しい思ひも悲みも

小さく疊んで祕めておくならば、
あなたはほんとに山吹だ。
そんなら少女よ、かうお言ひ、
さやうなら、私は家へ歸つて行く、
家の格子に身をよせて、
丁度、山吹、おまへのやうに
戀しい人を待ちませう、さやうなら。
戀する少女よ、さう言つて
四月の公園からかへりなさい。

『燕が少女にいふのには』これは大分長い詩だけれど、自分で大好きなものですから、それでここに引かせていただきます。この詩は私のよく通る上野公園に近い或る裏町に、いつも格子にもたれながら、とほりを眺めて、往來の人を見迎へ、見送りしてゐる美しい少女があつたので、ある夜その少女の事をふと想ひ出して、出來たもので、その作つた時は別に燕に言はせるつもりではなかつたのですが、燕が言ふのだとしたら、その少女の家の軒端に巢うてゐる燕が話しかけるのだとしたなら一層面白いと思つて、今の題をつけたのです。その頃私は動物園へ行つて見るのが樂みだつたので、よく仕事や勉强に疲れると出かけては、いろんな動物の面白さうに戲れたり、悲しさうに踞つたりしてゐるのを飽かず眺めてゐたものです。それから山吹の花は動物園の中にあつたか外にあつたかは忘れましたが、隨分どつさり咲いてゐたのを覺えてゐます。その後他で山吹の花を見る毎に、よくその頃見たあの花を思ひ出します。そしてその時分私はその山吹の花とその少女との間に何だか相似た共通なものがあるやうな氣がしました。一體山吹は

山吹色と云へば直ぐ小判が聯想されたりして、極く俗つぽい花のやうに思はれてゐますが、私はさうは思ひません、そして大好きです。そしてある女詩人が「いはぬ思ひいはぬ嘆きのもしもあらばひそかにかたれ山吹の花」と歌つたその歌をよく山吹の花を解したものとして長く忘れないでゐる位です。かうして、公園の散歩、動物園の有様、裏町の少女、山吹の花、これらのものが集つてこの詩が出來たわけです。少女を、戀する少女としたのは私の想像ですが、何だかそんなやうな氣もしました。

その不幸を泣く時あり、
その幸福をたたふる時あり、
あはれその短き生は美しき夢。

この世は夢である、皮肉に見れば醜い夢であり、感傷的に見れば悲しい夢である。この詩を作つたをりは素朴な、樂天的（オプテイミスティック）な、調和的な心持だつたので、それで『美しき夢』と言つたものであらう。

夢にしてうつつを思へば、
うつつより夢を思へば、
ときがたし、この生が夢かうつつか。

時に夢の中で現（うつつ）を思ふといふやうな事はなからうが、夢そのものを現實世界での經驗の再現と見れば、夢そのものがとりも直さず現（うつつ）を思ふ事である、ここに言ふのはその意である。夢が本當の生か、この生が夢か、これは古から多くの詩人の歌つて來た題目で、敢て珍しくはない。

我が生はいづくにありや？
ここにあるこれか？　これならば、

こは我が頭腦の考へしものにあらぬか？

「我れ思ふ、故に我れ在り」とは佛蘭西の大哲デカルトの有名な命題である。一體、自分の生命は何處にある、自分は本當に存在してゐるか、常識を離れて、少し形而上的に考へて來ると、直ぐかうした疑問に遭遇する。が、ほかのあらゆる事は疑つても自分の考へてゐる事だけは確かである、考へてゐる限り自分も存在してゐるのである。それを詩人はこの存在そのものも、要するに自分の頭腦の考へ出した夢に、幻影に、概念にすぎないのではなからうかと疑つたのである。こんな考へはよし、哲學的には不合理でも詩的には許されるのである。

この生がむしろ死なるか？
かの死がまことの生なるか？
知らずして、知らぬが故に、我もかくてあるよ。

人間はみな自分は生きてゐると思つてゐる。これが生で、あれが――あの不可知の世界が死だと思つてゐるが。この生が反對に死で、かの死が本當の生なのではあるまいか。これは非常な問題である。が、それは我々にわからない、わからないからこそ我々はかうして生きてゐるのである。以上の三篇は "La vida es sueno" (「人生は夢なり」といふ意味で、西班牙の大詩人カルデロンの劇詩の標題である) と題した哲學的な詩で、思想だけ離してみるとつまらないが、微妙な韻律によつて生命を有してゐるのである。

秋はさびしき心のうちに
さびしき歌を夜すがら歌ふ、
軒をめぐる雨だれの音、
戸におとづるる風のささやき、

秋はさびしき我が生に
夜もすがら守唄うたふ、
やさしき母のごとくに
よりそひて、我が搖籃に、
秋はいく度かへり來て、またかへり來て、
世にひとりなるみなし兒を眠りに誘ふ。

『秋の歌』中の一篇。ヴェルレエンの『秋の歌』なんぞに比べると、とてもくらべものにならないのに、恥しくも思ひ、悲しくも思ふのですけれど、これでも私の本當の感情を歌つたものです。私は一年中で秋ほど好きな時はありません。高山樗牛は「秋は哲人の考ふべき時、詩人の歌ふべき時」といふやうな意味の事を言つてゐますが、全く秋は一番詩にふさはしい時です。行く雲も、吹く風も、夜もすがら窓を打ち、軒端をめぐる雨の音も、何とはなしに心を動かさずにはおかない。秋風とか、秋雨とかいふ言葉を聞いただけでも、もうしみじみした、なつかしい感じがするではありませんか。まことに秋ほど自然が我々の心に觸れる時は無いでせう。この詩はさうした秋の心持を歌ひ、且つは母のやうにいく度となくかへつて來て、やさしくいたはつてくれる秋に對する愛慕の情を抒べたものです。「眠りに誘ふ」とあるのは秋が安息の時、成熟の時、枯死の時だからです。『靈魂の秋』の『秋の斷片』中にも「あゝ秋よ、眠よ」といふ句がある。私は秋の木の葉の落ちるのを見る毎に「眠れ、眠れ、枯れた葉よ」と言はずにはゐられない。そして自分もその葉の樣に眠れる日はいつだらうと考へる。

音もなく落つる秋の木の葉、
音もなくふるふおとろへし蛾の翼、

音もなく出づる我が嘆息(ためいき)、
　ああ、このすべてに、いかにああ死はかくれたる！

これは今言つた心持を一層はつきりと歌つてゐる。秋の木の葉と、蛾の翼と、自分の嘆息と、この三つを並べたところに面白味があるのです。これが病氣で死にかかつてゐる人の作でもあれば、最後の一句が一層痛切に響くでせうが、さうでなくとも差支はない。はらはらと落ちる木の葉を見たり、死にかかつてゐる蛾の翼のふるへを見たりして嘆息する人は、必ずや人間の免れがたい運命なる死を思つて嘆息するでせうから。

　こぼれ落つる秋の一葉(ひとは)に
　天地の祕密も、
　人間の運命も、
　我が生の深き意味(いはれ)も、
　すべてがこもりすべてが讀まる。

前の詩と同じくこの詩も『秋の歌』中の一(ひとつ)。一葉(えふ)の秋の落葉に天地の祕密から自分の生涯の意義迄も讀み得られるといふこの考へ方には、同感して下さる方が尠くなからうと思ふ。林檎の落ちるのを見て引力の原理を發見したのはニウトンでした。物質的な西洋人のニュウトンが引力の原理を發見した時、我々東洋人の中からは枯葉の落ちるのを見て世の無常を觀じて出家した人を出してゐます。もつとも斷つて置きますが、この「こぼれ落つる秋の一葉」は單に人生の無常を敎へるだけではありません。

　うつくしきこの一瞬に
　かぎりなき永遠を汝(な)が生くるとき、

生も死も、すでにあとなし。
そのときぞ、汝れは神なる、
不死の神、至高の神ぞ――そのきすのとき。

これは『永遠はこの今にあり』と題したものゝ一篇。永遠を時間の無限の連續と考へるのは常識的な、間違つた考へ方です。永遠はそんな數量的に測られるべきものではありません。むしろ質量的に測るべきものです。ツルゲエネフの『散文詩』を讀まれた方は、その中の「止まれ！」といふ一篇を覺えてゐられるでせう。「……この瞬間に、お前は超越したのである、あらゆる無常のもの、流轉するものを超越したのである、此のお前の瞬間は永遠に不滅であらう。」といふあの思想は、さすがに哲學者と呼ばれた人だけあると思ふ。一瞬は永遠であり、永遠は一瞬である。最も美しき最も充實したる一瞬を經驗した事のある人は、その時永遠の息吹を額に感じたに違ひない。その瞬間には、人は既に生死の境を超越してしまふ。一切の「無常のもの、流轉するもの」を超越してしまふ。其時、人はもはや人間ではない、神である、不滅にして最高の神である。そして、その最も美しい最も充實した瞬間とはどんな時であらうか？――それは接吻の時である。愛情の最高頂に達した。そのきすの時である。この詩は極端なる戀愛讚美の詩で、表面は哲學的ではあるが、その裏には非常な情熱が漲つてゐるのである。「そのきすのとき」と最も肝心な句を最後に點出したところにこの詩の生命がある。まづ試みにこの詩を一氣に朗吟して御らんなさい、この詩の內容の含んでゐる韻律が漸層をなして高まつて行き、「そのきすのとき」に於て最高頂に達して、ここにこの句が千鈞の力を有つてゐる事がわかるだらうと思ひます。

愛する人よ、君により
永遠を我れは愛する、

そのさびしき面に、やさしき手に、
我れは永遠のあらはれを見る。
君によつて我が生くるとき、
我が生は墓のかなたの
　限りなきいのちを捉ふ。

『永遠の愛』の一節。愛する人の姿に永遠の象を見、その人によつて永遠を愛するといふのは前の詩と同じ思想です。永遠といふ抽象的な概念に對する渇望と、熱烈な戀愛の情との結合、ここに深い意味もあり、新しい味ひもあるのです。

君を得ずに生きてあるより
君を得て死なんとおもふ。
いとたかき譽れを得るも
身を墓となして生きんより、
世に忘れられ、沙漠のはてに
ここに眠るとも知られずに朽ちて行くとも、
君とあらまし。君とあらば、
われ等は神ぞ、
うつくしき神と女神ぞ、
ふたばしらの不滅の神ぞ。

これもおなじ系統に屬する詩で、「不死」と題する。愛する人を得ないで徒らに生きてゐるよりは、死んでもいいからその人を自分のものにしたい。いや、むしろその人と一緒に死んでしまひたい。どんなに高い名譽を得たところで、自分自らがまるで墓のやうになつて、冷たい石のやうになつて生きてゐるよりは、どんなに世間から忘れられ、名もなく、富もなく、その日の食べものにさへも事をかいで、沙漠のはてに人知れず餓死してしまはうとも、その墓さへも有たぬ人間にならうとも、愛する人と一緒にゐたい、一緒に死にたい。その人と一緒にゐたならば、どんなに困らうと、餓ゑようと、自分たちは神である、神であり、女神であるといふこの思想は非常な情熱をもつてでなければ考へられないであらう。兎角粗野な文字は情熱的に思はれ、流麗典雅な文字はさうでないやうに思はれるが、それは誤つてゐる。奔放な情熱を典雅な文字に盛つてこそ詩人は初めてその本領を發揮したものと云ひ得られるのである。この詩もまた漸層的に力強くなつて行つてゐる。殊に、「われ等は神ぞ」以下の三行は、愛するものは神となり得るといふ思想を三たび繰返して、その繰返す度毎に、だんだん强調してゐる。そこに注意せられたい。また「身を墓となして生きんより」といふのは自畫自賛のやうで烏滸がましくはあるが、簡潔に力強く歌へてゐると思つてゐる。若しこれを「生きて身を墓となさんより」「墓の如くになりて生きんより」などとすれば、ずつと力の弱いものとなり、またこの場合の高調した感情にふさはぬ間のびのしたものともなる。

二十一、どんな書物を讀んだらいゝか

讀書の範圍と讀書法――詩の味ひ方

詩人となるのにはどんな書物を讀んだらいいでせうか？　つまり、詩人としての素養を築くのに必要な書物はどん

なものでせうか？　これは面白い題目です。が、その前に讀書といふ事がどれ位の利益を伴ふものか、或はまたどの位の不利益を伴ふものかを述べて見たいと思ひます。かういふと或は不審に思ふ人があるかも知れません、讀書は必ず利益をのみ伴ふものと信じてゐる人は、合點が行かないかも知れませんが、私の經驗では讀書が不利益になる場合も屢々あり得るのです。

讀書に於て、第一に考ふべき事は書物の選擇です、第二にはその讀み方です。この二つのうちのいづれを誤つても、その讀書は失敗です。それから、またあまり讀書を重んずると、書物に囚はれ、知識に囚はれて、折角の獨創力を無くしてしまふ虞れがあります。と言つて、何も讀書を不必要だと云ふのではありません。大に必要です。が、特に外(ほか)の何事よりも讀書を重んずべきものとは言へないのです。特に詩人はさうです。かのヴェルレエンなど、あれ程の大詩人でありながら書物をあまり讀まなかつたやうで、その知識と來ては極めて貧弱なものだつたらしく、これは惡口(わるくち)かも知れませんが、大抵耳學問だつたといふ事です。さうかと思ふと、立派な大學教授でつまらない詩を作つてゐる人も西洋には多いのです。が、ヴェルレエンがさうだつたからと言つて、自分も讀書を怠らうといふのはよくありません。今の詩に志す人たちはあんまり書物を讀まなさすぎる、或は間違つた讀み方をしてゐる。私はむしろもつと讀め、そしてもつと有効に讀めといふ勸告をしたい。

讀書もまた一つの經驗です。一つの書物は一つの新しい世界に他(ほか)ならない。一つでも餘計の知識を獲得するといふ事はたしかに愉快な事です。が、その爲めに肝心の自己を忘却してはつまらない。自分の目で、自分の五官で、自分の心臟(ハアト)で、自然を見、自然に接し、自然を感ずるのが詩人に取つて何よりも必要な事なのです。それに知識に囚へられて、その書物、その知識を通じて、即ち他人の目、他人の五官、他人の心臟(ハアト)を以て、この現前の世界に對するやうになつては駄目です。獨創力を無くしてしまふと云ふのは、つまりこの事です。書物を讀め、然し書物に囚へられるな

――これこそ忘れてはならぬ讀書訓でせう。

さて、愈々本題です。詩人は何を、いかに讀むべき乎? すぐれた詩人の詩集を讀むのが何より大切です。これは言ふ迄もない事です。が、ここに私は一寸言つて置きたい事がある。今の詩作に志す人を見るのに、いづれもその讀書の仕方が大變偏してゐるやうに思はれます。詩集だとか。詩論だとか、歐羅巴の詩人の紹介だとかに限られてゐて、其他の詩に直接關係のないものは餘り讀まないといつた風です。ところで、これは大變な心得違ひです。

これは私の持論なのですが、詩人が詩に囚はれる時その詩人はもう本當の詩人でない。詩人が普通の意味での「詩人らしい」詩人になるのはむしろその墮落です。詩人は全人格でなければならない、一個の人間でなければならない。一個の人間であつて、始めてその詩に意義がある。かのギヨオテを御覽なさい。彼は先づ何よりも人間であつた、一個の人間であつた、一個の人間として、その人間らしい喜びや悲みを歌つた。さればこそギヨオテの詩はよく萬人の心に觸れ、いかなる敎養のない人の心をも動かすのです。然るに世には「俺は詩人だぞ!」と云つたやうな顏をして、詩らしい事、詩的な文句ばかり並べようと考へてゐる詩人がある。そんな人の詩に限つて、ひとりよがりになつて、ちつとも他人の心を動かす事がない。それはいたづらに文字を弄んだ昔の花鳥風月の歌人と毫も選ぶところはない。そんな人は詩人としてもつまらないばかりでなく、人間としても憫むべき影のやうな人間です。

ですから、詩人だとて詩に關する書物ばかり讀むのはよろしくない。「俺は詩人だ、哲學や宗教の本は無用だ!」なぞと考へちや大間違ひです。我々がかうして此の世に存在してゐる限り、生や死や運命や善惡や、生存の目的だとか社會の狀態だとか、いろいろな人生問題、社會問題を考へずにはゐられない筈です。尠くとも眞面目な生き方をしようとする人、してゐる人はさうあるべき筈です。さうすれば、いくら詩人でも、トルストイの論文を讀む氣にもならうし、プラトンやシヨオペンハウエルの哲學を讀む必要をも感じて來る筈です。來るに今の詩人と云はれる人たちの

多くは、どうやら詩歌に關する諸問題、韻律(リズム)だとか象徴だとかいふやうな問題にのみ沒頭して、人間としての生活、人生に對する眞劍な考察を忘れてゐるやうに見えるのは私の殘念に思つてゐるところです。

以上述べ來つたところで、詩人だからとて詩歌に關する書物をのみ讀むべきでない事は了解されたらうと思ひますから、今度はさし當つて詩を作る上に必要な讀書に就いてお話しいたしませう。

まづ詩集。どんな詩集を讀んだらいいか？　英語の出來る人ならば隨分澤山のいい詩集が讀めるでせうが、ここでは日本語で書かれたものばかりについて言ふ事にします。日本の詩はその歷史が極く短く、所謂新體詩といふものが興つてから今まで僅々二十年餘りにしきやならないので、從つてすぐれた詩人もあまりなく、古典(クラシック)（模範になるもの）ともすべきものはむしろ僅少です。僅少と云つてもそれを全部讀むのはなかなか大變ですから、初學の人は、個々の詩人の集を讀む前に、まづ澤山の詩人の佳作のみを選んで集めた所謂詞華集(アンソロジイ)を讀んだ方がいいと思ふのですが、生憎我國にはまだいい詞華集(アンソロジイ)がありません。新潮社から出てゐる『明治詩歌選』が今のところ一番いいやうです。入つてゐる詩人の數が少い代り、代表的な人の模範的な作が多く收められてゐますから、然し今のところでは、日本人の作よりも外國の詩人の譯詩を多く讀むべきでせう。ただ言葉の微妙な味ひを知る上から、日本人の作を閑却してはなりません、別して古來の名著、詩歌上の古典(クラシック)なる『萬葉集』を始め、歷代の歌集（歌集と雖も必讀せねばなりません、言葉のこまかな味ひを知る上だけで言つても）、實朝(さねとも)の『金塊集』、西行の『山家集』から芭蕉、蕪村の俳句（俳句も歌と同じ事）、とりわけ民謠を讀む必要があります。が、かうした必讀の書物については次ぎに一項目を設けて批評と說明とを添へる事とし、讀書法について一言してこの項を終りませう。

「雜讀するな、精讀せよ」といふのは讀書上の教訓として千古の名言です。徒らに多くを貪る時は、胃を壞すばかりです。滋養になるものを少量に攝取するのが最も必要です。おなじ詩を讀むにしても、澤山の詩人の詩を讀み漁(あさ)るよ

りは、少數の自分の好きな詩人を讀む事です。好きな詩人の作でも、就中大好きな詩があつたならば、始めの句から終りの句まですつかり諳誦してしまふ位、くり返して讀み味ふ事です。また好きな詩ならば自然さういふ事になります。一體、詩といふものは、單に一度素讀したのみでは、十分その味がわかるものではありません。よしわかつたにしても、繰返し繰返し讀んでゐるうちには、なほ一層親しいものとなり、作者の心持が自分の心持と同じやうにわかつて來て、自分が詩を作る上に餘程の利益があります。その詩の全體がすつかり自分の頭腦の中に同化されてゐますから、單なる模倣にならないで、しかもよくその長所を自作の中に攝取する事が出來るのです。詩の味ひ方はまさにかうすべきものだらうと私は思ひます。

二十二、一讀すべき詩及び詩集に關する書物
――その批評

一、詩　集

『藤村詩集』*島崎藤村著。主情主義の絶頂を示してゐるものといふべく、その價値は今更めて言ふを須ゐないでせう。

『抒情詩』國木田獨歩、田山花袋、松岡國男、太田玉茗、矢崎嵯峨の舍、宮崎湖處子等六氏の集。これも主情主義の時代の美しい收穫の一つで、覇氣に富んだ力のある獨歩の詩や、いかにも若々しい花袋氏の作も興味がありますが、松岡(柳田)國男氏の『野邊のゆきき』が最も優れてゐます。今その中の「夕ぐれ眠のさめし時」を引いて見ませう。

うたて此世はをぐらきに
何しにわれはさめつらむ、
いざ今いち度かへらばや、
うつくしかりし夢の世に。
（松岡國男）

『天地有情*』土井晩翠著。晩翠氏はシルレルなぞと同じやうな觀念抒情詩を作つた人で、當時世に迎へられたのは、その漢詩の調子が人を喜ばせたからでせう。『暮鐘』の一篇がその代表作です。

『暮笛集』『ゆく春』『白羊宮*』薄田泣菫著。技巧に囚はれて天眞を失つたのが泣菫氏の詩風の一大缺點です。耳遠い古語を復興したなどは感心しません。が、藤村氏の作より新しい感情を巧妙なる措辭に託したところは學ぶべきものがあります。

『東西南北』『紫』『毒草』（晶子女史と合著）『檞の葉*』與謝野寛著。與謝野氏は新詩社を興して、雜誌「明星」に據つて新詩の發達に努力した詩壇の一大恩人で、我國の浪漫主義（ロマンティシズム）の大立物として、佛蘭西のユウゴオにも比せらるべき人でせう。殊にその醇正の趣味と、圓熟せる技巧とは初學者の範とすべきものがあります。左の一篇の小曲を見てもそれはわかるでせう。

祇園のさくら散りがたに
ひと夜の君は黑瞳（くろめ）がち、
上目するとき身に沁みき、
そは忘れてもありなむか、
わかき愁のさはなるに。

『獨絃哀歌』『春鳥集』『有明集』蒲原有明著。『春鳥集』以下は象徵詩によつて詩壇を騷がしたものですが、象徵詩ならずとも一體に有明氏の作は難解です。
『非蘇悲歌』『闇の盃盤』岩野泡鳴著。岩野泡鳴氏は異色ある思想家で、從つてその詩も一番思想的であり、且つ深刻であるが、言葉が粗雜で、表現が獨特なため、初學者の模範にはなりかねます。

あはれ　御空　の　一つ星
戀しの　君　は　いづこ　ぞや。
共に　波元に　手　を　取りて、
なれに　誓ひし　樂しみも、
今は　覺めたる　夢うつつ。

（泡鳴）

これは『永劫の力』といふソネットの冒頭の一節で、「波元」などといふ無理な言葉はありますが、氏の作としてはまづ穩健なものと言つていゝでせう。
『無弦弓』『塔影』『劒影』河井醉茗著。――『花守』『二十八宿』横瀨夜雨著。――『孔雀船』伊良子淸白著。――『頌榮』一色醒川著。以上の四氏は所謂「文庫派」の代表的詩人です。河井醉茗氏の詩は情熱を缺いてはゐるが、平明にして溫藉なのを以て稱せられる。夜雨氏は筑波根山下の病詩人、その詩哀切を極めてゐる。伊良子淸白氏の『孔雀船』は氣韻の高い淸純の詩集。一色醒川氏の『頌榮』は薄倖なりし故人の高潔な人格を偲ばせるもので、宗教詩集として重んずべきものです。
『あこがれ』『啄木遺稿』*石川啄木著。石川啄木は恐らく新體詩なるものゝ起つて以來の最も意義ある詩人だらうと思ひます。その『啄木歌集』中に收められた歌の如きも、近代人の心のありのまゝの寫象として意味深く、我が短

歌界を革新せんとしたものですが、その詩もまた立派な本當の詩です。『あこがれ』はその二十歳にもならぬうちの作を集めたものですが、その天才は既に十分現れてゐて、森鷗外博士を驚嘆させたといふ事です。が、晩年の詩の方が一層眞實なのは言ふ迄もない。

『邪宗門』『思ひ出』『東京景物詩』『わすれなぐさ』北原白秋著。感覺の詩人として、小唄の作者として白秋氏はたしかに名人です。才で作るやうな傾きのあるのは惜むべきですが、『思ひ出』の如きは三誦すべき名品に富んでゐます。

『露風集』『良心』『白き手の獵人』三木露風著。『露風集』が一番すぐれてゐるでせう。抒情の小曲がよい。象徴詩となつてからは餘程偏したものになつてゐる。

『路傍の花』『かなたの空』『勝利』川路柳虹著。川路氏の作は最近のものゝ方がいゝやうです。『勝利』中の口語の詩がもつともすぐれてゐます。

『我が斷片』『我が環境』岡田哲藏著。二册ともはじめ英語で記し、あとで著者自ら日本語に譯したものです。英語の分は英米の文壇でも評判に上つてゐると云ひます。著者は、一個の哲人で、且つ立派な近代人（モダアン）です、この二册は哲學詩として驚嘆すべき名著だと思ひます。

『太陽の子』福士幸次郎著。福士氏は新しい自由詩の詩人中最もすぐれた人で、言葉の遊戯などを決してしない人でありますが、私の特に推重したいのは、その熱烈な人格とその思想家たるところです。「鍛冶屋のポカンさん」を歌つた次ぎの詩の如き模範的の自由詩だらうと思ひます。

ここの息子はポカンさん、
とんてんかんと泣く相鎚に、

苺の初熟が食べたいと
鐵碪臺をたたくとさ
手を熱々と熱てらしてたたくとさ。

（幸次郎）

福士氏の友人で昨年銚子の海でシェレェのやうな美しい死を遂げた、三富朽葉、今井白楊の二詩人にも澤山美しい自由詩があります。此外新しい詩人の主なる集を擧げると、『砂金』（西條八十著）*『果樹園』（柳澤健著）『月光とピエロオ』（堀口大學著）*『月に吠える』（萩原朔太郎著）*『愛の詩集』（室生犀星著）『末日頌』（富田碎花著）*『轉身の頌』（日夏耿之介著）*『自分は見た』（千家元麿著）『農民の言葉』（福田正夫著）及び、『靈魂の秋』*『感傷の春』（生田春月著）等です。

二、詞華集（名詩選集）

*『明治詩歌選』藤村、晩翠、晶子、泣菫、有明、寛六氏の作を收む。諸家の後年の作のないのは殘念ですが、代表的な人々の青春時代の名作を大部分網羅してあるのがその特色です。
*『茶摘唄叶』九隻編。晩村、藤村、春月、蝶衣其他諸詩人の民謠詩の選集です。
『明治詩集』吉野臥城編。あまり價値のない詩人の作の多いのが缺點です。
*『心の響』水野葉舟編。詩人の數はかなり多いが、餘程偏つてゐる弊があります。

三、譯詩集

*『於母影』（『水沫集』の附錄）森鷗外著。鷗外博士等のＳ・Ｓ・Ｓ（新聲社）の事業にして、後の詩壇に多くの感化を及

ぼしたもの。バイロン、ギョオテ、ハイネ、レナウ、ホフマン、シェエクスピヤ、ケルネル其他の名作を收めてゐる。

わがうへにしもあらなくに
などかくおつるなみだぞも
ふみくだかれしはなさうび
よはなれのみのうきよかは

（獨、ゲロック）

『海潮音』上田敏著。上田博士の事業中最も後まで傳へられるのは恐らくこの一卷でせう、全く、この集ほど今日に至るまで深大の影響を我が詩壇に及ぼしてゐる譯詩集は他にありません。象徴詩もまたこの集によつて始めて我國に傳へられたのです。佛蘭西高踏派象徴派の作より、英獨伊プロヴァンスの名品に及ぶ一大詞華集です。

山のあなたの空とほく
幸ひ住むと人のいふ、
ああわれ人と尋めゆきて
涙さしぐみかへり來ぬ、
山のあなたの空とほく
幸ひ住むと人のいふ。

（獨、カアル・ブッセ）

*『珊瑚集』永井荷風著。『ふらんす物語』の作者の洗煉せられた趣味を示す名著で、ヴェルレエン、レニエ、ゲラン等の絶品の外、散文や紹介も入つてゐます。今、有名なヴェルレエンの『白き月』の一節を引いて譯筆の一斑を示せば、

底なき鏡の

池水に
影いとくらき水やなぎ
その柳には風が泣く
いざや夢みん、二人(ふたり)して

（佛、ヴェルレエン）

といふ風で、森、上田の二博士とはまた違つた味ひがあります。

『*獨逸詩歌講話』『*現代獨逸詩人』秋元蘆風編。獨逸詩を味はうとする人には頗る重寶な書物。

『*近代詞華集』『*現代萬葉集』小林愛雄著。共に英吉利を中心として歐洲近代の詩を集めた物。

風、風――荒野のジプシイよ
私の樹のなかに鳴つてゐる！
私の心のすべては、
おまへの響に醉つてゐる。
クロオヴアの香ひで甘く、
海の呼吸(いき)では辛(から)い、
風、風――流浪者の愛人よ、
私の樹のなかに鳴つてゐる！

（英、ジョン・ガルスワアシイ）

『*リラの花』與謝野寛著。著者の佛蘭西土産で、レニエエ、ヴェルハアレン等の作を始め、最近の新しい詩人たちの珍しい作の多く收められてゐる點で珍重すべき譯詩集です。

『*沙羅の木』森鷗外著。口語譯の試みで、デエメル、クラブント、ビヨルンソン等の作を收む。

『現代英詩抄』山宮允著。愛蘭詩人の作を多く収め、且つ英和對譯にしたのがその特色です。

『昨日の花』堀口大學著。これも著者の洋行土産で、グウルモン、サメン、ポオル・フォオル、ヴェルレエン等の佛蘭西詩を集めてゐる。ヴェルレエンの『風』の一節、

噫纖細くも爽かなる
風の響やささやきや！
そは鳥のごとささ鳴きし
はた蟲のごと忍び泣く

（佛、ヴェルレエン）

以上は主なる譯詩の選集であるが、一詩人の譯集の主なるものを擧げると、

『ハイネの詩』尾上柴舟著。これ迄出た譯詩集でこの書位廣く一般に讀まれたものは外にありません、七五調で押通した爲め平板にはなつてゐますが、ニイチエをして「古今を通じ萬國に亙つてハイネに匹敵する甘いそして情熱ある音樂を求めても駄目であつた」と嘆じさせたハイネの妙想を傳へたものゆゑ、この書がかやうな人氣を得たのは無理もありません。明治四十年ごろ金華山沖で入水した女學生の手に此書が在つたといふ事さへ傳へられてゐるのも、ハイネのロマンテシズムの魅力を證據立てるものです。序に、私はハイネの詩の全集の口語譯をしようと思つて大分譯してゐますが、今その中の一篇をお目にかけませう。

たのしい春がやつて來て
いろんな花がひらくとき、
そのとき私の胸からも
愛のおもひが萌え出した。

たのしい春がやつて來て
いろんな小鳥がうたふとき、
こひしい人の手をとつて
私は燃ゆる思ひをうちあけた。

（獨、ハイネ）

『ヴェルレエン詩抄』川路柳虹著。ポオル・ヴェルレエンは言ふまでもなく、近代佛蘭西第一の詩人で、その作ばかり集めたものはこの書の外にはありません。なほ此外に『テニソンの詩』（片上天弦著）『キイツの詩』（田山花袋著）『ゲエテの詩』（橋本青雨著）『バイロン傑作集』（木村鷹太郎著）『シェレイの詩』（小原無弦著）『ユウゴオの詩』（同）『シルレルの詩』（秋元蘆風著）*『バイロンの詩』（兒玉花外著）等隨分澤山出てゐるやうですが、二册のバイロン集の外は、皆絶版になつてゐるやうです。

『民主々義の方へ』カアペンタア著、富田碎花譯。英吉利の哲人カアペンタアの自由詩の集。彼の民主思想は立派な人格の背景をもつてゐます。なほカアペンタアの宗としたホイットマンの『草の葉』の譯集がまだ出てゐないのは何より殘念です。

*『ルバイヤト』片野脫牛譯。
波斯の詩人オマア・カイヤムの四行詩の集。快樂主義的の思想を華麗の字句に盛る。

*『新生』中山昌樹譯。
ダンテの青春の記念。美しきソネット、カンツォオネに散文の解説が附いてゐる。

*『散文詩』ツルゲエネフ著、生田春月譯。

四、詩論、作法書

『新體詩作法』岩野泡鳴著。これは岩野氏の博士論文だといふ事で、堂々たる一篇の韻律論です。從つて初學者には難解だらうと思ひます。

『*新體詩作法』河井醉茗著。評釋の多い、親切な本ですが、かなり古い出版ゆゑ、新しい時代の詩を知る事の出來ないのが殘念です。

『新體詩研究』吉野臥城著。この書も同じ事です。

『*新しい詩とその作り方』室生犀星著。詩の作法書といふより、むしろ一篇の散文詩とも見るべき興味ある本です。著者の愛すべき人格が一めんに溢れてゐます。

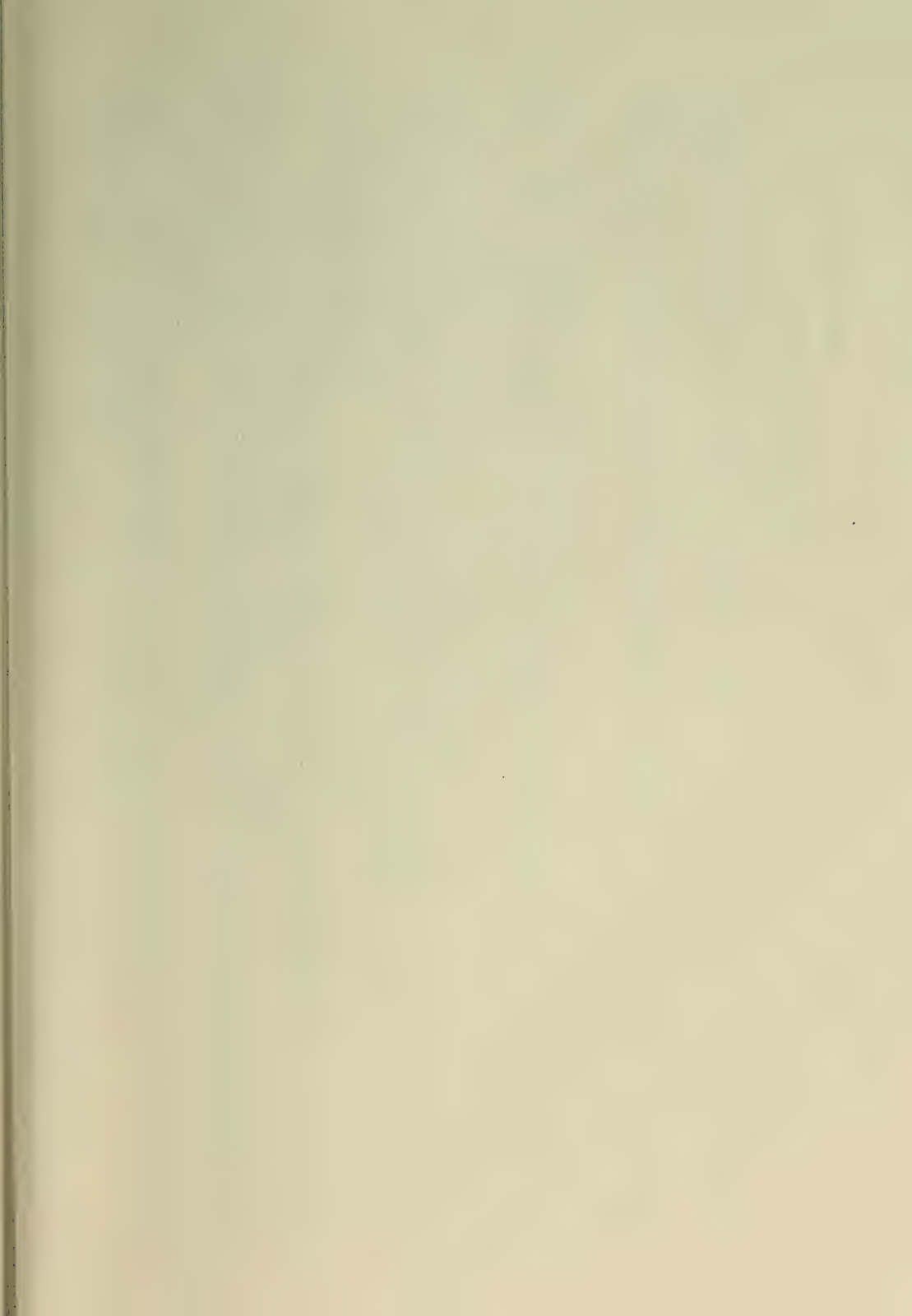
『*露風詩話』三木露風著。三木氏の詩訓で、中には象徴論もあります。

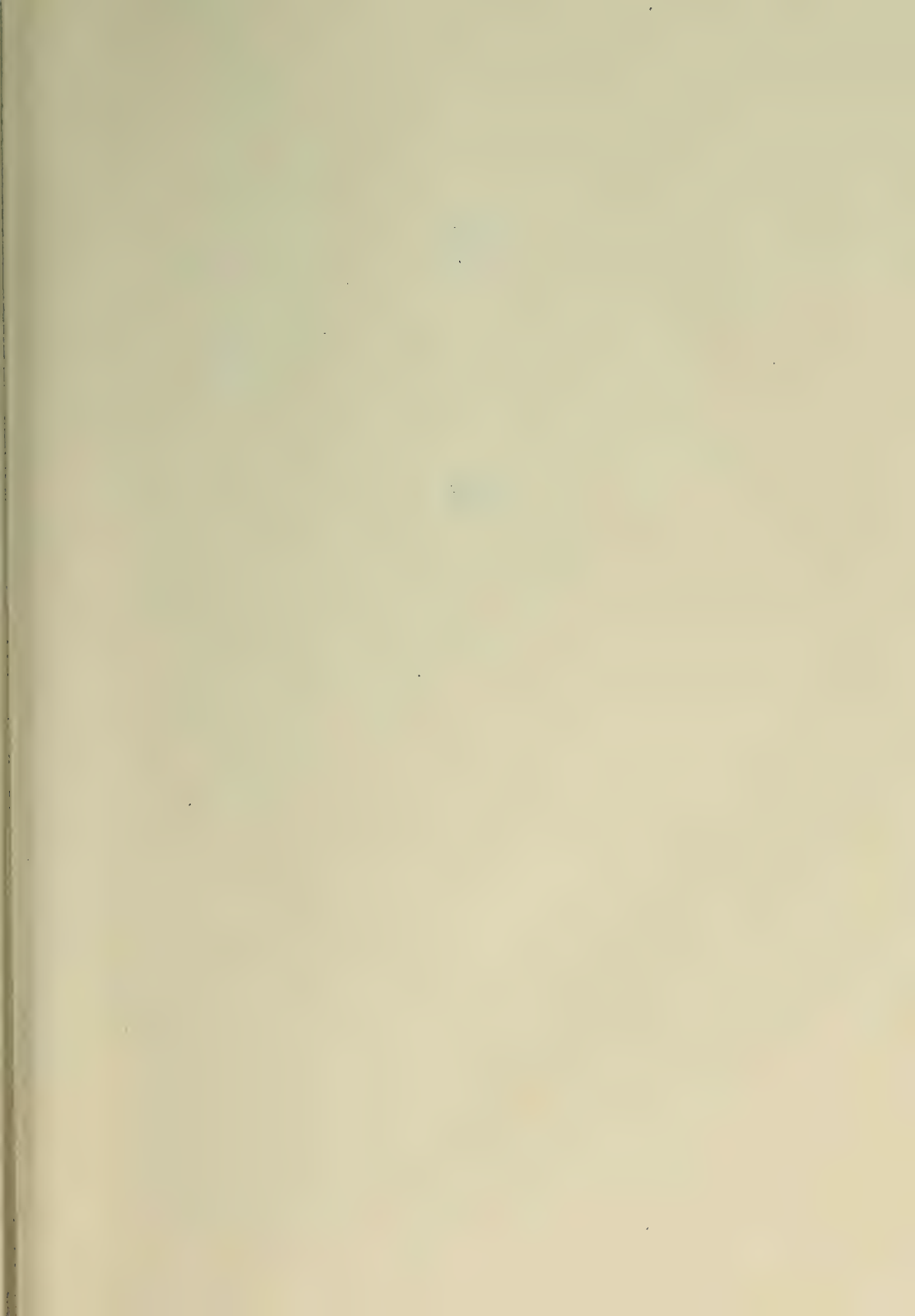
『*日本詩歌論』野口米次郎著。著者が英文で書いた日本の詩歌の特質を論じた長論文を他の人が邦譯したもので、獨創的な見解に富んでをります。

五、雜　　著

『*表徴派の文學運動』岩野泡鳴譯。アァサア・シモンズが佛蘭西のサンボリストを論じた名著。飜譯が泡鳴氏一流の棒譯で難解なだけが缺點です。

『文藝論集』『*文藝講話』『*獨語と對話』上田敏著。上田博士の歐洲文藝の紹介を集めた名著。その譯詩集と共に多くの詩人に深い感化を及ぼしたものです。

『悪魔主義の思想と文藝』岩野泡鳴著。ボオドレエル等の惡魔主義の研究。
『露國現代の思潮及文學』昇曙夢著。露國の現代詩人バリモント、ソログウプ、プウニン、プリュウソフ等の輪廓を知る上に有益な書物です。
『ゲエテの詩研究』𤇆釜天飈。――『ハイネ評傳』藤浪由之著。――『ブラウニング』帆足理一郎著。『詩宗プウシキン』八杉貞利著。――『ギヨオテ傳』森鷗外著。――『詩聖ダンテ』上田敏著。
――個々の詩人について著はされた比較的新しい著述はまづこの位のものでせう。（右の中* 印を附したものゝ外はすべて絶版のやうです。）

書翰

○

御手紙及び御寄送下さつた「新港灣」所載の御作とともに拜讀しました。私の集についての御感想はうれしく思ひました、あの『靈魂の秋』の後半の憂鬱な皮肉な心持が、若いあなたの心に共鳴を喚んだのは、一見不思議のやうですけれど、さうではない。

若い心はつねに眞劍なものです、そして眞摯な心は人生の虚僞に堪へないで、自づから憂鬱にもなり、皮肉にもなるのです。そして私もその時期を通過しました。

私は、君がこれから益々、詩と哲學との世界を勇しく進んで行かれる事を希望します。

遠く離れたる弟子にとの御言葉、それは私には異議はありません、が、師とか弟子とか云ふのは四角張つていやですから、同じ詩を愛する友達として、一緒に手をとつて行きませう。

「幕は幾度も變つた」は君の言葉の通り私の作の影響があり〱と見えてゐますが、然し決して惡いことはありません。

誰でもはじめは先輩の感化のもとに、出發するものなのです、それからだん〱に自分の本色が發揮されるのです、私は君がいつまでも詩と人生とを愛しられる事を希望します。

よし世間的な詩人とはならなくとも、眞に詩を愛する人こそ、本當の意味の詩人だと私は思つてゐます。

今は夜です、いつも〱仕事に追はれてつひお返事も遲れましたが、その仕事のひまに、この手紙を書きました。

北の方はもうずゐぶん寒いでせう、からだを大切にして勉強なさい。

まだ書きたいのですが、これで筆を擱きませう。

大正八年十二月五日

生田春月

竹内映二郎様

○

お手紙うれしく拜見しました。

私の昔の詩を愛して下さる由を聞き、まさにさうあるべきだと今更に領會しました。私自身、詩人として最も高調に達してゐたのは、秋の斷片などを作つた時分だと信じてゐるのですから。然しこれからは、あんな作も出來さうにありません。(でもあの時分のもので、未發表のものが、まだありますから、それは此の次ぎに出す集に入れます、『春月小曲集』にも、その時分のものを大分入れましたが、まだ散逸したのを探し出せばありさうです)その代り、これからは『片隅の幸福』に入れたやうな感想をどしどし書いて行かうと思つてゐます。たゞ私自身の內生活の遲々として進まない事だけが殘念です。

御送りになつた感想は、その純粹な氣持を喜びます。思想はもつと深めなければならぬでせうが、方向は大變いいと思ひます。

虛無思想の研究は、自分でも不滿の點が多いのを恥ぢてゐますから、絕版になつたのを幸ひに思つてゐるのです。

然し、いつかは厭世思想の研究と題して、もつとしつかりした研究を發表したいと思つてゐます。
厭世思想に最もたしかなシステムを立てたものは、やはりショオペンハウエルの「意志と現識としての世界」です、これはぜひ讀む必要があります。
詩人ではハイネ、バイロン、レオパルヂ、レナウなどが最も沈痛な世界苦を表白した人で、ハイネの沈痛な詩風は、その『最後の詩集』『ロマンツエロ』に於て見ることが出來ます。
然し、同じ厭世觀と云つても、詩人のはどうしても氣分としてのペシミズムで、一つの哲學としてのシステムを見るには、やはりショペンハウエル、ハルトマン、あたりでせう。右お質問に簡單にお答へいたします。
小品集歌へる隣人は多分小鳥のやうにといふ題になるでせう。これは今度越山堂から出る長篇小說流離の愛と、殆んど同時に出る事になるでせう、出ましたら御批評をお知らせ下されば幸甚です。
十月には御上京の由、お目にかかれるのを樂しみにしてゐます、そしてそのをりにいろ〱お話しいたしたいと存じてゐます。
序にお質問の哲學書で、一寸思ひ浮ぶだけを、ここに書きつけておきませう。

ショペンハウエル　意志と現識としての世界
同　處世哲學
同　隨想錄
ハルトマン　宗教哲學（姉崎博士譯）
ヴオルテエル　カンデイド（Voltair, Candide）
樂天觀を嘲笑せる哲學的小說、これは Madem Library の中にその英譯があります。

大正九年九月九日　　生田春月

竹内暎二郎様

○

過日は御手紙有難う、身體の方が安心で何よりに思ひます。これからは一意專念に御勉強を祈つてゐます。僕の小説も九月に愈々出ますから、出たらぜひ批評を聞かせて下さい。僕の詩と小説との關係を論じて見て下されば大いに有益です。どれ位の異同があるでせうか。

詩社もぜひ今秋からやりたいものです、大いに僕等の會を盛んにしたいと思つてゐるのです。君の言葉通り全く自然のままの事には違ひありません。

いつかの日には折角來て下すつたのに、お目にかかれず今でも深く殘念に思つてをります。

この次ぎの日曜あたりやつて來ませんか、いろんな質問にも手紙では十分答へられないで、もどかしい氣がします。

大分暑くなつたやうですから、身體を大切にして盛んに讀み且つ作るといふ風にして下さい。今日はとりあへず右まで。

大正十年八月二日　　生田春月

竹内暎二郎様

○

御手紙拜見、民衆詩對抒情並に思想詩の問題、詩人は一切の物の包含であるべきで、特に民衆詩と限定するのは、自己の境地を狹くする事です。自繩自縛する事です。

若しそれが、宗教對社會主義の問題となれば自ら別ですが、私は今の民衆派詩人の立場は、不徹底で薄弱だと思ひます。我々もまた民衆詩人たるに何の妨げもない、我々も亦民衆の一人であるから。

社會主義まで行けば、またそこに確乎たる立脚地があるが、さうでない限りあまり權威はないのです。

然し、これは今度詳しく書いてみたいと思つてゐます、白鳥君等との對談の結果もまた知らせて下さい。君の手紙を少し訂正して、紙上に出して、それに對する答として僕の意見を公表してもいいと思つてゐます。

今の詩人の弱點は、物を外面的に形式的に見るところにある。形式に囚はれて、形式によつて分類したり、非難したり、論議したりする。文語口語の問題もそれです。

もつと內容から、本質から見て行かなくては、眞實に徹することは出來ません。

僕はこの月半ばに信州の方へ講演に行く筈(多分)ですが、もしそれが延期にでもなつたら秋田の方へ、一寸遊びに行つてもいいと思つてゐます。

とにかく、來春講演の事は、大いに喜びます。ぜひあの北裏日本の海のほとりに行つて見たいものです。

文藝通報、十一月號やつと校正がすみました。百ページなので、なかなか骨が折れましたが、ずゐぶん充實した雜誌になりました。

君の『澄める青空』評まだ御禮もいひませんでしたが、有難う。今度のにのせました、御手洗修のも出ます。右とりあへず。

大正十一年十一月六日

生田春月

竹内暎二郎様

○

度々御たより有難う。多忙にまぎれすつかり御ぶさたしました。『幼き者のうたへる』も拜讀、感想申述べたいけれど、それもまたの機會にゆづります。

お才の詩集は意味だけははつきり分るやうです。僕のロングフエロウも同じ本やから出ますお送りしませう、それからいつぞやは土崎秋田支部の高橋ゆき、佐々木戚子その他六名の高女四年南組の人たちから、手紙をくれて、來春になると私たちは學校を出て方々へ散らなければならぬゆゑ、それまでのうちに秋田に來て下さいとの事でした。僕もそれまでに御地に行つてみたいと思つてゐます、が二月頃ではまだ非常に寒いでせうね。今日はとりあへず右まで、忙しいので閉口してゐます、然し大いに働かねばなりません。

大正十一年十二月十八日

生田春月

竹内暎二郎様

〇

御手紙拜見、秋も更けましたね、東京の秋は一層悲しい。こんな悲しい秋は生れてはじめてです。幸ひに何のさはりもなく生きのびた事につけても、しみ〴〵と人生の測りがたい運命が感じられて、愈々ペシミズムのいろどりが心に強くなつて行きます。

只昔とちがふのは、そこに宗教的な一脈の流れが貫いてゐて、直ちに絶望とならず絶叫とならない事です、これからは一層思索にもつとめ、詩作にもはげみたいのです。

秋には旅したいとその準備もしてゐました。が、この落着なさではそれも出來ません。

まづ十月一杯『相寄る魂』に努力して十一月にその印刷にかかり、それがすめばいくらか世間も落つくでせうから、それからゆつくり旅が出來たらしたいと思ひます。

秋田や土崎、船川の方は別に物騷なことはないでせうね？

詩と人生も十月號（九月號訂正）がもう出來ます、が、第三種がまだ開通しないので、一寸當分送れません。

「新抒情詩」もこんな事ですから少しおくれるでせう、その代りいいものにしたいものです。

御惠送の震災御見舞金五圓たしかに拜受、御禮申上げます。

これは同人費の五ヶ月分といふ事にして、詩と人生社の方へまはすことに致します。

右よろしく御了諒下さい。

[illegible]　[illegible]

生田春月

大正十二年十月一日

竹内暎二郎様

客觀詩は必ずしも客觀にのみ執するには及ばないから、出來るだけつとめるやうにさへすればいゝのです。
そのため詩作がむづかしくなるといけないから、一言。
いづれ余は他日、秋田へは行けるやうになつたら多でも行くつもりです　右。

○

長らく御無沙汰しました、大震後から發奮して、『相寄る魂』の完成につとめ、先月などは一ヶ月に三百枚も書いて、つひに先月末に完成して、もう校正を見てゐるやうなわけで、度々の御手紙にも返事が差し上げられなかつたのです。
君の御不幸についても、慰めの手紙を書きたいと思ひながら、それも出來ないでしまひました。
その後はいかゞですか、然しもう大分心持も落着いた事と思ひます、どうぞあまりペシミスティックにならぬやうに、心を勵まして下さい。さすがのペシミストであつた僕も、ペシミズムともオプテイミズムともつかぬ境地まで行かねばならぬと思ふのです。

君と共にこの事に就いて、いつか親しく話せる時もありませう、僕も秋田へは必ず又行きますから御父上樣のこと、どうぞ心落しなく、なほ御攝養御努力を俟ちます。
この頃は、『相寄る魂』がすむと直ぐ感想集の編纂にかかつてゐるので、なほ心が自由になりません。
今度のは『靜かな友達』といふ題です。これがすんだら詳しく書きます、大分さむくなりました。御自愛を祈ります。

大正十二年十二月三日

生田春月

竹内暎二郎樣

○

先日の『自然の惠み』と一緒にお手紙を差し上げようと存じながらおくれて終ひました。御近況を承り安心しました。新しい生活に順應しようとの御努力は善い事です、人生の價値は、常に手短な日常生活の中にある事が、私にもだん〳〵はつきりわかつて來ました。
レオパルヂの詩集はドイツ譯二種註文したのですが兩方とも絶版でした。それでドイツの古本屋で探してもらふ事をたのんでおきました、本が來たら譯してみたいと思つてゐます。ハイネの小說中にはまだ三四篇拔いてあるのですが、なるべく一篇の詩集から選みたいと思つてゐます。

レオパルヂの評傳は手に入つたので今よんでゐます、ただその中に引用された詩がみな原文なのは悲觀しました。
秋田の人が今大分文壇に活動をはじめてゐるのはうれしいですね。
詩は生活なりの信條は善い、その生活から溢れたものが、いつかは私たちを喜ばせてくれる日のある事を信じて待ちませう。
あの北の、はまなすの濱で、君の瞑想がより深い詩となる事を祈つてゐます。
私は伊香保の方に二月ほど行つてゐたのですつかり仕事もおくれ、手紙の返事もおくれてしまひました。
これから一層の努力をしたいものです。

大正十四年七月七日

生田春月

竹内瑛二郎様

○

久しく御ぶさたしました、いつぞやは御家の御不幸を承り、早速御見舞申すべきのところ、伊香保の方にずつとゐて、歸つてから拜見いたし、すつかり遲くなつて申しはぐれた形です。
秋田行きもそんなわけで、今年は小生の都合から云つても出來ませんでしたから、その點は御心にかけられないように。そして、不幸の雲がはれて、再び詩の世界に立ちかへられむことを望んでゐます。

私の方も、今年は頗る多事で、苦しみばかり多く、それにも負けないために、仕事につとめて來ました。人生は年毎に、より苦しくより灰色になるばかりのやうです、御地はもう雪の事とおもひます、これからまた一多の寂寥がつづくのですね。

先日は又また結構なもの頂きました、御禮の申しようもありません、いつも〳〵心にかけながらも、御ぶさた勝ですまないと思ひます。

今日も明日もと仕事に追はれ、そのくせその結果は、いつもつまらない事ばかりで、一層心が屈するばかりです。でも、最近に、感想集、またレオパルヂ、ヘルデルリン等二十人ほどの評傳めいたものを出します。本が出たらお目にかけませう。

今年もおしつまりました、何となく慌しい落ちつかぬ氣持です、切に御自愛を祈ります。

大正十四年十二月十九日

生田春月

竹内暎二郎様

○

隨分ながくお手紙を差し上げませんでした。實は二月から六百枚の飜譯を大急ぎでやり、萬事を放擲して執筆してゐたので失禮してゐました。まだ百枚ほど、この五六日に仕上げねばならぬ有様です。頭がすつかり疲れてし

まひました。

先日はまた、あんな御配慮にあづかつて恐縮でした。折角ですから頂戴いたしておきませう。いつぞや約束の短册色紙、仕事が片づいたらきつと書きます。

「海鳴」はいい本になつて、僕も喜んでゐます、本になつてみると一層、詩が本味をもつてゐる事を感じさせます、伊福部隆輝君など賞めてゐました、何かに批評でも書く氣でゐるやうです。

まだ寄贈する人思ひ付いたら又おしらせいたします。

然し、本は大分賣れた由、喜んでゐます、まだどれほど殘つてゐますか？

先　秋田の郡部の青年から、私の批評（序文）をよんだと云つて、共鳴の手紙をよこした人がありました。

あな　の詩、際物詩、流行詩でないから、その效果は徐々にあらはれるとおもひます。

少しおちついたら又書きます、今日はとりあへず御禮かたぐ。

昭和五年四月二日

生田春月

竹内暎二郎様

○

社から御手紙を屆けてくれるのがおくれて御返事がおくれました。御許しを乞ふ。

明年は早稻田の文科に御入りになるお考への由、それは大變結構に思ひます。御上京になつたら、いつでも御遊びにいらつしやい。僕は話下手ですからそれだけは始めから斷つておきます。がでもいろ〳〵お話し申せるのはうれしい事です。ゲーテをお好きなのはいゝ事だと思ひます。ゲーテの偉大は眞に疑ひのないものでゲーテだけは一生かかつて研究しても決して損にはならないのです。ゲーテの英譯では Aster Library の Goethe's Poems（一圓五十錢位）が一番容易に手に入ります。丸善か中西屋にはある筈です。Bohn's Library 中の Goethe's Warks は英譯中で一番完備したもので、全部で十四卷あつて（一冊各二圓五十錢位）重立つた作品は大抵入つてゐます。日本のものでは、森鷗外さんの『ギヨオテ傳』『フアウスト考』『ギヨツツ』（これはゲーテの脚本の處女作）高木好雄氏譯『伊太利紀行』生田長江氏譯『我が生活より』前篇（後篇は未刊）增富氏譯『イフイゲニイ』などがあります。

今年はまだ小說が二三飜譯されるさうです。

僕もゲエテ詩集を補訂して、ゲエテ全詩集を出すやうになるかもしれません、まだ未定ですけれど。

『虛無思想の硏究』は僕の手もとにも一冊きりありませんし、それに少しも自信のないものですから（もつとまとまつてしつかりしたものに直したいと思つてゐます）別にお讀みになるほどのものはないと思ひます。然し今度御出でになつたらお目にかけてもよろしいのです。小生の詩に對する御言葉はうれしく存じました。御同感していたゞいたので、自分でもそれらの作を讀み返して見たいと思つたほどです。今年からは愈々散文の世界に入つて行かうと思つてゐます。詩ほどに行けるか否かは疑問ですけれど。

とりあへず御返事まで、

大正九年一月六日

生田春月

渡邊陸三様

○

再度の御手紙拜見。

クララ、ミリッチを御對照の由、あの小生の譯は英譯とそんなに違ひはないでせう！ あの作はツルゲニエフの最後の作でなかなかいいものだと小生も思ひます。それから「ファウスト」の方も好きです。三篇中ではこの「ファウスト」が一番自信のある譯です。ハイネに關する御感想は殊に感興を以て通讀いたしました。全體を通じて、ハイネその人よりもむしろあなたの氣質がはつきりと窺れるのを反つて滿足に思ひました。やさしい弱い心、それゆゑ反抗的に、思ひ切つた事をもやる――私はハイネをそんな風に解釋してゐます。そしてかうしたハイネならばあなたに同感を禁じがたからしめるのは無理のない事と思ひます。私もさうしたハイネの面目をはつきりさせるため全集の譯が二三卷ぐらゐ進んだら「ハイネの一生」と題する評傳を書いて見たいと思つてをります。

それから英語でハイネを知るには William Sharp の著した Heine 傳が最も簡便です。M. Arnold の Essays in Criticism の中にもいゝ批評があります。

飜譯がお出來になりましたらいつでも拜見させて頂きます。今日はとりあへずこれだけにて。

大正九年十月七日

渡邊陸三様

生田春月

○

先日の御手紙に御返事いたします。ハイネの英譯では Bowring のものが一番完全です。量も多く殆んどハイネの詩の全作の九分通りまで收めてあります。また譯しぶりも出來るだけ忠實に逐字的にしてあります。Unterweyer のものはあまりいい譯ではありません。高い本で量は少ないし、譯も餘程違へてあります。その他のものは小生に知りません。まづ Bowring を推奬します。ハイネに關する小生の意見は一寸一口では云へません。いづれ評傳『ハイネの一生』に十分書いて見たいと思つてゐます。がそれもまだ當分は着手出來さうもありません。がそれまでにいづれ何かの機會に感想でも書かうと思つてゐます。それまで待つて下さい。斷篇を書き記しました。今日はこれで。それから今度若い方の詩を集めた『純情詩集』といふのを出しますから、自信のある作がお出來でしたらお送り下さい。その中に掲げますから。

大正九年十月三十一日

生田春月

渡邊陸三様

○

大分暑くなりました。いつぞやは僕に對する批評を大變面白く拜讀、今日はそれについて、またいろいろな事を書いて見たいと思ひます。あくまで詩の人で小說家ではないといふ御評言はたしかに當つてゐると思ひます。然し詩といひ小說と云つても、たゞ形式が變るだけで、いづれも詩に外ならないのだと、僕は自分の作について考へてゐます。今度長篇「相寄る魂」も愈々九月に出版されるはこびとなり、只今校正中ですが、それが出たら一つ君の御批評が聞きたいと思ひます。どれ程、詩と相違してゐるか、或ひは同じ思想がいかように違つて表現されてゐるか、それを聞いたなら餘程參考になる事と思ひます。此間のも大變參考になりましたから。

ハイネ全集は書肆が小さな爲め少し重荷らしいので、今度或ひは新潮社の方から出すかも知れません。今一應内諾を得たところです。

創作が一きりついたら、また一奮發して完成したいものと思ひます。叙事詩「アッタトロル」と「冬物語」及悲劇二篇をやつて見たいと思つてゐます。君の飜譯の方はどうですか、今やはりツルゲエネフですかこの次ぎには少し論文の方もやつて見てはいかゞですか、その方のものも少し讀みつけるようすると、いいと思ひます。僕が御すゝめしたいのは、容易に手に入りやすい本では Scatt Library 中の

Essays, dialoyues and thought of Count G. Leopardi.

Obermann by. Seuancour

の二册です。後者はフランスのペシミストで、全部書簡體で文章も讀みやすい、レオパルヂの方はもう御存知でせう、近頃春秋社からその飜譯「大自然と靈魂との對話」といふのが出てゐます。單に文學上から云つてもしつ

かりとした思想的基礎を築くには、有名な評論は一讀する必要があります。今日はこれで、そのうちまた、御身體御大切に。それから此間家內の者より繪葉書を御願ひしたさうですが、御面倒ですみませんが、いつでもいいですから見付かりましたら御願ひします。

大正十年八月二日

生田春月

渡邊陸三樣

○

お手紙拜見、君の感想面白く拜讀、夢窓國師の『夢中問答』は禪宗聖典(無我山房出版)に入つてゐます。本はまだおかへしにならなくても結構です。要つたらその時云ひますからそれまで置いといて下さい。片瀨もこれからよくなりますね、今年は割りに寂しいでせう、そのうち田口君なり僕なりおたづねしたいと思つてゐます、以上とりあへず。

大正十三年六月三十日

生田春月

渡邊陸三樣

○

おたより有難う、すつかり秋の感じになりました、これから青空を眺める時です、そのうちおたづねしたいと思つてゐます、秋になつたら少し諸方を歩き廻りたいのですから。この頃はシエリイを時々よみます、今の僕の心持はハイネよりもシエリイに親しくなりました。（ハイネならば“Für die Mouche”の詩人ハイネで、ブッフ、デル、リイデルのハイネではないのです）そのハイネの全集も多少の制限を附して新しく出版出來さうになりました。

これは去年の十二月歩いた裏日本の溫泉場です。こゝで私は佗しい冬の空と湖水の波とを眺めながら、人生の歸趨を考へました。

大正十三年九月九日

生田春月

渡邊陸三様

○

先日は御手紙有難う、湘南の秋をおもひやれば遊意動かずにゐません。十月に入れば少し動けるやうになりますから、江の島位まで行きたいと思つてゐます。そのせつはいろいろお話したいものです。秋になつて大分詩が生

れます。先日は丸善に獨逸書展覽會があつて、行つて見ました。レオパルヂの評傳があつたので註文しておきました。ハイネも大分來てゐます。いつか行つて見ませんか、僕も同道して行つてみてもいいのです。會期中は本をそのままにしておくので隨分いろいろのものが見られます。

大正十三年九月二十六日

生田春月

渡邊陸三様

○

先日は御たより拜見、溫泉へ行つて仕事をしたいと思つたため、湘南へは行けなかつたのですが、一度はぜひ約束を果たすつもりですから、その時にはいろいろ話したいものです、ハイネのカルペス編の全集は一寸ありません、僕の持つてゐるエルステルの分なら（これが一番よろし）今古本屋に出てゐます、ねだんは聞いてみませんでしたが。此間からハイネとレオパルヂとの評傳二册ともよみました、今ワインゲルの Über die lazten dinge をよんでゐます。おはなししたい事が山のやうです。ハイネの評傳では（一九二二年出版の最新のものウォルフといふ人の著これまで知らなかつた新しい事實を澤山しりました、感想はどしどしかいておきなさい、そしたら發表は必ずできますから、戯曲もいいと思ひます。君の言葉通り戰ひの外はないのです、僕なども外部の戰ひとともに、內部の戰ひに苦しめられる日も多いのですが、戰ひそのものの中に意義を見出して行きたいと思つてゐます。

最近大分新しい刺戟を受け、今度は少し深味のある仕事をしたいと思つてゐます。餘はいづれ又。

大正十三年十一月二十九日

生田春月

渡邊陸三樣

○

渡邊君。いつかは江の島まで行つたのに、お宅がわからず、おたづね出來なくて殘念でした、が、今度は田口君にきいてわかつたので、きつとおたづね出來るとおもひます。先月からずつとこちらに來てすごしました。山の中で朝夕の雲を眺めながら、おのづから悠久な天地を瞑想する事多し。

田口君、おたより有難う、あの波の美しい海岸を二人で歩いてゐる姿を想像すると微笑ましい氣持がします。

陶淵明集一冊を持つて來てとき〲よみます。

山氣日夕佳
飛鳥相共還
此間有眞味
欲辨已忘言

といふ詩句のおもむきがはじめてわかつたやうな氣がされます。

大正十四年三月十三日　　　生田春月

渡邊陸三様

○

先般のお手紙拝受、早速御返事認める筈のところ、小生、先月上旬より直陽炎痔疾併發ずつと病臥、未だに起上られぬ始末で、失禮してゐました。いろ〳〵社會も變り、個人の身の上も變る今日、僕自身も半夜めざめて一身の處置に惑ふ事が多いのです。片瀬の生活の幾年ののちいろいろ悩み多きことはるかに察して居ります。どうか丈夫になつて下さい、社會は頑健なる肉體を以てせずば征服しがたいのです。僕も自分の弱さを悲しむのです。御自愛をいのる。詳しき手紙はまた後日に。

昭和三年十月三十日　　　生田春月

渡邊陸三様

○

七月三十日附お手紙、久しぶりに御感想をうかがへて、なつかしいものでした。やつぱりこんなお手紙ときどき貰ひたいと思ひます。そのくせ、こちらはなか〳〵長い手紙は書けないのですけれど。夏の片瀬の狀況、おもしろく思ひました、折角おさそひを受けながらこの夏は門外不出、今一生けんめいに書いてゐるのです。秋になつたらゆつくり話したい、詩は千枚になつたら打切りにして、今度は散文をかくつもりです、もうあと六七十枚で千枚です。最近は少し象徵詩をかきました。「メリケとヘルデルリン」お氣に入つて結構でした。少し涼しくなつたら御上京いかが。またおたより下さい。カフエのフエミニンのこと大變おもしろく、土地の氣分がよく出てゐました。

昭和四年八月十四日

生田春月

渡邊陸三様

○

秋もふけました。その後お變りもありませんか。八月も九月も、たうとうおたづね出來ませんでした。九月にはまた腸をいためて昨今やうやく少しよくなつた始末、昨年も今年も、秋は私には禍ひです。一日一日で、すつかり氣分の變るやうな片雲のやうな心で生きてゐるのも寂しい事です。またおたより下さい。近頃何かおよみでしたか。僕は先月は本ばかり讀んでくらしました。エミイル・ルウドキツヒの「ゲエテ」やらベルトラムの「ニイチ

エ」やら、ゲエテの「西東詩集」やらを。ベルトラムの「ニイチエ」は何遍よんでもおもしろい、自分があんまりニイチエと共通點の多いのにおどろきます。

昭和四年十月五日

生田春月

勝邊陸三様

○

一昨日はあひにく途中によつたため、歸宅がおくれてお目にかかれなくて、殘念でした。

丸善の洋書の分、おくれてすみませんでした。爲替券を同封しておきましたから、御面倒ながらよろしくお願します。

それから私の詩集が今度出來ましたから、落合のお宅の方へお送りいたしますから、おひまのせつ御讀み下されば幸甚です。右とりあへず要用まで

五月十五日

生田春月

眞船正己様

○

おたより有難う。また、先日は山梨時事で、僕の今日についての好き言葉、社會主義的世界觀と、虚無主義的世界觀との間に立つて、その矛盾に惱んでゐるといふのは、まさしく正鵠を得たものです、その惱みは奥へ行けば行くほど、どうにもならぬやうな大きな問題にぶつつかるばかりです、然し、理解されない寂しさを嘆じてゐた男も、あまり理解されだすと空恐ろしくなるのは面白い、これも矛盾ですね。佐藤君はさぞがつかりしてゐる事でせう、僕は子供を失つた悲しみは知らないが、滿洲郎の死で幾分それが分つたやうに思つてゐます、でも、大分いゝ詩が出來たさうで喜んでゐます、抒情小曲集出來ました、サインしてありますが、久しぶりで話もきゝたいし夜分でも御來遊いかゞ、ビールの泡も此頃はよく立ちますよ。

昭和四年六月五日　　生田春月

麻生恒太郎様

○

此間は山形からのおたより拜受、旅はどうでした、先日佐藤君より聞きましたが、もうよほどいゝやうですか、

案じてゐます、何しろ近代文明は鋭敏な人には堪へられないものです。そして、遲鈍なものには、何の甲斐もないといふ、矛盾をもつてゐますね、僕は精神的の壓迫で（アメリカニズムの）神經衰弱になつたのです。そのうち氣が向いたら御來遊いかが。心持を煩はすやうではいけないけれど、靜養の妨げとならないやうでしたら。奥樣によろしくおつたへ下さい。

二三日前、詩人全集に入れる詩の選拔をやつて草臥れました　君の意見うかがひたいところが大分ありましたが。

昭和四年八月十六日

生田春月

麻生恒太郎樣

○

先日は「靜かな人生」御惠送にあづかりうれしく拜讀、杉原君が持つて來てくれたとき丁度伊福部君がゐて、感心してゐましたよ。當然の事です。僕の感想は、山梨時事に佐藤、杉原二君の集と一緒に書くつもりです。最近元氣の由、何よりです。僕は元氣か不元氣か頗る病症不明、到不得歸來無別事。奥樣によろしく。山梨時事の御作いいですね。

昭和四年十月九日

生田春月

麻生恒太郎様

○

春月論草稿、毎信おもしろく拜見。僕もときどき、その批評の批評や、その材料の提供をやりたい。

一昨夜はよみうり講堂に、ＡＮＡの講演をききに行つたら、僕にもやれと言はれて閉口、仕方なければ、自由の歌でも朗吟しようと思つた位だつたが、そのうち中止々々の連續で、たうとう解散させられてしまつた。相不變、こんな小ぜり合ひばかりだ。それから四五人で、銀座に出て、不二屋でお茶をのみ、皆と別れてから岡本潤君と丹頂で一杯やり、かへつたのは十二時すぎ。あんな會へ行くと、昔の名殘で、顔なじみの連中に會ふ。大杉の近くにゐたアナキストで、キリストのやうな顔をしてゐる川口啓介君に久しぶりで會つた。

八太舟三氏（此人は今石川三四郎先生と對立して、アナの重望を負うた理論家でしつかりした人だ。）の分業否定說をきいた。僕など、最も同感するものが多かつたが、現實の問題として考へると、まだなか／＼難點が多いやうに思はれる。組織の問題で、僕のアナルシズムはいつもつまづくのだ。卽ち實行の上で。實行、それはどうしたらいいか、いかなる運動が實行と言へるか。だが、何としても、勞働者の中に行くと、インテリの悲哀を痛感する。Ａの人々はみな好人物で、率直で、端的で、氣持が實にいい。

昭和四年十一月十七日

生田春月

麻生恒太郎様

〇

先夜は失禮、いつコオランを出て、何處をどうしたか分らないが、朝目をさましてみると、あの近所で、××君と割床でねてゐた。むかうのへやには××君と、××君とがゐた。昨日は一日ねてしまつた。かう弱蟲では、ヴイヨンの兄弟もなさけない話だ。

さて火箭の事、大によろし、君の活躍ぶりもうれしかつた。ただ多少僕にイケンあり、××××攻撃は少し證文の出しおくれではあるまいか。今何等の勢力なく、弟子にも背かれんとしてゐる有樣だから。僕が舊怨で、君に筆をとらせたやうに誤解されて、お互ひにつまらないだけで、實際的效果はあまりないと思ふ。もつと當面の問題をとらへてはいかが。只今會田君の「新興詩學の旗の下に」來る、詩と詩論一派の詩學を排しての論、多少參考になると思ふ。當面の問題は、詩學問題だと思ふ。詩論一派の主張は、僕からみると、僞古典主義だと思ふ。すべての形式主義は僞古典主義だ。詩學をえらい事のやうに思ふのは、學問恐怖病から來る。

××君のポエジイ論、詩を散文にかく論、僕としては是正すべき點を多く見る。××君など、當面に活動してゐる人だから論ずるに足ると思ふ。あくまで錦旗をかかげて進むを要す。それには、こちらの思想的立場を明確にするを急務とす。一切の法則を否定する僕の立場は、詩學の樹立を、一つの拘束、桎梏の制定と見る。この點はまだ彼等の詩論をよくよんでゐないので、明確な斷言は出來ないが、多分この見方はまちがひではないだらうと思ふ。佐藤君のプロ概念詩排撃はよろし。いづれもつと詳しく直接話したい。が、一寸氣のついたまま。

技術に對する世界觀の對立。(會出)。形式主義に對する本質主義が僕の立場である。この點、われらもその觀點を明らかにすべきである。但、君の論をよめば又どうおもふか分らぬ。

昭和四年十二月二日

生田春月

麻生恒太郎様

〇

只今御手紙拜讀、コイツハ駄目ダ云々、アンマリ意外デ一寸驚いた。僕がそんな事を言つたとは思へない。あのときはすつかり醉つぱらつてゐて、一切記憶にない。コオランに入つて小野君に何か言つた事だけは覺えてゐるが、それから一切記憶になし。然しどんなに醉つてゐても、君を罵倒する筈はない。君は僕の最大の理解者ではないか。何かの思ひちがひではないだらうか。そんな事を言つたなら、何か言つただけのキッカケがあるはず。君の方がキオクがたしかなら、その順序をききたし。とにかく會つて話したい。明日は山水樓の會へ行くから、明後日でも來たまへ。雜誌の事も話したし。實は大島君が行人社で出したいとの事、その前、僕は中西書店に話して、その贊成をえて大體きめてゐたのだが、そのため一寸停頓してゐるのでもある、より重大な理由は、僕自身の立場の點ではあるが、それについて君のイケンもうかがひたし。

昭和四年十二月二日

生田春月

麻生恒太郎様

○

物語、おもしろく拜見。だが、あれは讀みきりかしらん。詩なんかなんだいは、一寸蛇足の氣がした。が、femmes が生のすべてだとさへ思ふ僕には、その意氣はうれし。詩を放下して詩を得べし、ファンムもまた。君の意氣壯なるに反して、僕は困つた事が出來て弱つてゐる。世界文學全集の譯詩、十日までにまとめろとの指令に接し、まだ譯してないのもあるので、こちらが怠慢だつたので文句は言へないけれど、これから一生ケンメイにやらなくちやならない。それで五日の會合は少しさきへのばしたいゆゑ、諸君へ左樣おつたへを乞ふ。新年は何處かへ出かけて仕事するつもりですから。

昭和四年十二月三十日

生田春月

麻生恒太郎様

○

先夜は失禮、丁度高熱を出して寢てゐたので、會へなくて殘念でした。あれからずつとよくならず、まだ外出もできない始末で、弱つてゐます。十一日、十二日の强酒が祟つたやうに思つてゐます。〔宣言〕は內野君から、二月號編輯〆切つた後で、三月號にぜひといふ事なので、君への答へは三月號にのせてもらふ事にしました。それから先日、片田江君が來ての話に、「藝術復興」に、僕の周圍の人達の詩をずつとのせてくれるといふので、まづ君の詩を出してくれるやうたのみました。あつたらやつて下さい。次いで佐藤君其他の方も君からよろしく。僕は昨日あたり大分よくなつてゐたのに、昨夜の寒氣でまた熱が出て、意外の長びきに弱つたけれど、それでも今日は少し詩をかきました。いづれよくなつて、仕事も片づいたらゆつくり話したし。原稿は直接片田江君あて送つて下さつてもよく、僕宛でもよろし。

昭和五年一月九日　　　　生田春月

麻生恒太郎様

〇

お手紙拜見、あれはお返しに及ばなかつた、けれど、折角ゆゑ拜受しておきます。
今日は仕事がすんだら、歡談いたしたく、それまでは仕事々々です。愛誦の散文も今日は書かないでしまひました。山村暮鳥論を期待してゐます。

昭和五年三月二十一日

生田春月

麻生恒太郎様

○

度々の御たよりうれしく拜讀、東京の酷暑の中では、白河の涼風がしみじみ偲ばれます。想像ではいつもあの高原であなたと話すのですが、今年も出かけられないやうです。

折角親切に云つて下さつて、一緒に甲子へでも行けたらとは思ひながら、こちらにしばりつけられてゐる事が殘念ですが仕方ありません。

八月には小田原へおいでになりますか、東京へ御滯在でしたら御立寄り下さい。

昭和二年七月二十七日

生田春月

大島庸夫様

○

一昨夜はわざわざ御見送り下さつて、ほんとに有難くうれしい事でした。
この六甲のラジウム溫泉で昨夜は泊りました。今は一人の客もなくしづかです。
今日は又大阪の方へ出て人をたづねたり、歩きまはるつもりです。
關西の氣分のすつかり違つてゐるのには驚きます。いづれ余は後日、

昭和三年三月十八日

生田春月

大島庸夫様

〇

おたより拜讀、山の樣子がはつきり分つて興深く、且つ遊意しきりに動きました。
それに昨日から校正がまた出だして、ここ七日位の間にすつかり出切るといふ事で、東京の外へ行けない四人になつてしまひました。
いつでも行けないので、ほんとうに殘念です。長篇の方大いに進むことをいのつてゐます。感想も拜見したいものです。
「北村透谷論」を十五日迄に書かねばならぬのに、その校正で大いに弱つてゐます。
御大切に。

昭和三年八月八日　　生田春月

大島庸夫様

○

前略

國民の坂井君に話してみましたところ、二枚位水谷氏に書いて頂けるならのせてくれるさうです。さうでなければ自分の方で書くとのこと。二枚位では書きにくいでせうが、水谷君の方に君からお話下されば幸甚。

雜誌の事など、そのうちにお話したいと思つてゐます、このごろ内外とも多事、仕事もはかどらないで閉口してゐます。まづは。

昭和四年十一月三十日　　生田春月

大島庸夫様

○

毒ある蛇は人恐るれど
また踏まれ打たるることあり。
君はしづかにひとり生きて
巷のそとに詩をば思ふ。
抑へられ抑へられても
心善き人何の幸ぞ
魂を汚さるるなし。

「庭の靑」に涙そそぎて
「詩神を焼いて」君立つとき
君が五十年、また徒爾ならじ。
詩匠ありて人を傷つけ
おのれを汚す名聞地獄。
心汚さず眸若く
詩を愛する人、君幸あれ。

いつぞやは失禮いたしました。また過日は亡弟のため御懇篤な御弔詞をたまはり感銘いたしました。別封で山家文學論集おめにかけました。おひまのせつ御瞥見たまはらば幸甚です。

餘はいづれ御拜眉のせつ万々。

二月十七日

生田春月

正富汪洋様

〇

前略

益々御清祥の御事と存じます。さて突然ですが、此度、大島庸夫と申す若き新進の詩人が『烈風々景』と申すを出版しました。詩風態度ともに御共感をいただけると存じますので、著者におくらせるやうに申しました。御一讀の御感想を「新進詩人」におかかげ下さらば、小生感謝します。どうかよろしくお願ひ申します。

生田春月

正富汪洋様

〇

「東方の星」六月號たまはり拙著『旅ゆく一人』について御懇篤、精到なる御批評を拜讀いたし、得るところ尠からず感謝いたします。オリエンタリズムについての御努力はいつも多大の敬意と共感とを禁じえないところで、東洋の詩人の優越については深く信ずるところあり、お言葉の如くその方面に漸次說き及ぼして行きたいと思つてをります。それから本號での文壇に對する御批評は、全く同感で、近來痛快を覺えたものでした。參上して申上べきですが、今日はとりあへず御禮迄。匆々

大正十五年六月五日

生田春月

高須芳次郎様

○

先般は拙著御高評下さいまして有難うございました。小生只今この阿波の方にまゐつてゐます。私の先代が詩人であつたので、先秦の文學より明清の詩まで隨分揃つてゐるのでそればかりよんでオリエンタリズムの雰圍氣に浸つて喜んでをります。

まづは御機嫌うかがひまで御健勝を願上ます。

七月十六日

阿波國相島村にて
生田春月

高須芳次郎様

○

中西悟堂様

思ひがけなく、御懇篤な御手紙たまはり、殊に、私にとつては、宿命的な意味をもつ、拙作についての強い感動と同感との御表白、まつたく、青年のやうな感激を、潮のやうに湧き立たせつつ、拜讀いたしました。いつも孤獨な私にとつては、實に力強い激勵でもあり、慰藉でもありました。あの作は必ずしも純然たる自傳的作品ではなく、半ばは創作であり、想像の產物ですが、心の眞實は十分出しえたと思つてゐます。ジヤンジヤックは最も強い影響を受けた人で、私はヴオルテエルよりも、ルツソオの方が好きです。故芥川氏などと私のちがふところは、そこだと思ひます。

最近のお心持は、とくに意味深く拜讀、調和ある人間生活への綜合、もつとも感ずるところ多く、これまた、私の問題です、文學時代に發表した作の時分は、私の心のもつともラヂカルになり、闘爭的になつてゐたときですが、私には、その時もどうも唯物的になりえなかつたのです。マルキシズムとは、つひに一致しえない事が、愈々明白になりました。今私の心に、最も近い人は、石川三四郎氏です。然し、いづれにしても、我々の道は險しいのです、今の時代は全く適歸するところを失つた時代で、その點で、あなたの惱みは、また、私の惱みでもあり

ます。
そのうちこちらにお序のせつは御立寄り下さい、いろいろお話しができたらうれしい事です。私はこの月はじめから、又腸を害し、今ねたりおきたりで、そのため御禮の手紙もおくれましたが、別に大した事はありませんから、よくなりましたら、秋の散歩に、おたづね出來たらとも思つてをります。詩壇の事についてもいろいろ申述べたい事もあります。なほ末筆ながら奥樣によろしく。

昭和四年九月七日　　　　生田春月

中西悟堂樣

○

御手紙拜見いたしました。新潮の御感想を拜讀して、私のものを――つまらぬものですから、眞面目に讀んで頂いたのを、感謝してゐたのでしたが、親切な御手紙を拜見して、一層喜ばしく感じました。未だ相見ずとも魂と魂との目に見えぬ紐もて結ばれてゐる事を感ずるならば、それは百年の知己にもまさるものだと思ひます。親しく談るべき日のある事がいい期待となりました。若し序もあらば、日曜はいつもをりますから御來遊下さらば嬉しいと思ひます。然しそのうちに自然お目にかかれる節もあるかも知れませんが。末筆ながら、どうぞ益々御精進のほどを祈つてをります、今日はとりあへずこの心持を述べるだけにいたします。

五月二十一日

生田春月

武野藤介様

○

御手紙拜誦、西崎滿洲郎の死について、御懇篤な御慰問をたまはり感銘いたしました。貴兄こそ御令閨を失はれて、さだめし御落膽の御事と存じ、御くやみも申上ぐべきのところ、あのやうなかかりにて、ついその機をも得ませんでした、何卒意氣沮喪せらるることなく本年は倍舊の御活動を祈り上げます。先年の事については、小生はもともと關知する事なく、常に舊に變らぬ友情もて、御活動の事を喜びつつありましたので、お目にかかる機もあらばと存じてゐた次第でした。

又荊妻も、只今にては、少しも隔意の事なき模樣ですから、その點は御介意下さらぬやう願ひます。

小生も本年は少し積極的に生活いたし度く從來の出不精を一掃して、知友をお訪ねする心組ですから、中野方面へは始終行きますから、また貴兄にお目にかかる機會もこれあるべく、その節には萬々申上げます。

只今御横臥中の由、御自愛を祈ります。

右とりあへず御禮かたがた書き認めました。

二月二日

生田春月

武野藤介様

○

御手紙留守宅から廻送してまゐりましたので拜見、御申越の原稿は、まにあひますかどうか知りませんが、丁度十枚ほど書いてゐたものがありましたから、御送りいたします「二匹の猩々」といふ題で變でお困りでしたら「孤獨人の落想」とでもお直し下さい。

小生は、當分こちらに滯在してゐますが、來月中旬には歸京しますから、御ひまの節は御來遊下さい。關口君にも度々お世話になり、お手紙をいただいたりしてゐながら、まだ一度もお目にかかつてゐませんが、どうぞ宜しく仰有つて下さい。

この秋は、小生も少し出歩いて、皆様にお會ひしたいなどと思つてゐます。

いつぞやは御著たまはり十分御禮も申しませんでしたが、その後も御制作につとめられてゐる事を遠く拜見してゐました。文壇も大分動いてゐるやうに見え、眞面目な勞作もおそまきながら少しづつ認められて行くやうな傾向が見えますから、御精進を祈ります。

いづれお目にかかつたせつ、いろいろと申し上ますがまづは右まで。

なほ原稿と引替に、稿料下さるとのこと、さうでしたら、御面倒でもこちらの方に御送り下されば幸甚です。

また掲載の新聞もどうぞ。

昭和二年九月二十三日

上州伊香保にて

生田春月

坂本石創様

こちらは秋が靜かです御來遊いかがですか。

○

久々のおたよりいただき、且つ結構なタオルをいただき、それが貴兄の監督の下に出來た品なることをおもへば、一層有難いものです。

あまり忙しいことはいけないけれど、變つた生活はかへつていいと思ひます。僕などはどうにもかうにも生活を變へられず、變へても食へない無能のために、やつぱり無理な生活をしてゐる始末です。新しい材料、變つた生活の體驗の堆積を期待してゐます。

ここ當分は、次ぎの準備に沒頭しながら、しづかに形勢を觀望してゐた方が、より賢いみちだと、ますます考へられます。僕はいろいろな事がますます面白くなく、生きてゐるのも張合ひがないやうな氣持です。

南豫の風光、一度は賞したいと思ひながらも、當分別府へも行けさうにありません。

最近また腸をそこねてゐますし、それでなくも長い旅がひどくおつくうになつて、――一日二日の旅ですら氣がすすまない始末――一日一日、むいみに送つてゐるのです。ときどき貴兄のあの元氣な聲を聞きたいと思ふことあり、會ひたくなつても、當分は會へませんね。

いづれ上京するとのお言葉をたのしみに、待つてゐます。奧君には先日會ひましたがカロリン群島へでも逃げて行きたいなど云つてゐます。

僕はいつまで東京にしばられてゐますか、もうおさらばをしてもいいのですが。

末筆ながら、奧樣へよろしく、家内よりもくれぐれもよろしく申しました。

大作、放擲しないで、つづけて下さい。努力は必ずむくはれる、珠は必づ光を發す。

これだけは僕の確く信ずるところです。貴兄の十餘年の努力精進がむくはれないで畢る事は斷じて無し。御自重を祈ります。

九月二十七日　　　　生田春月

坂本石創樣

○

御手紙拜見しました。大變いい氣持がしました。もし訪ねて下さるのでしたら日曜日が在宅日です。他の日だと

前以て葉書でも頂かないと外出する事があります。電車は江戸川でお下りになつて、矢來の交番の下までお行きになつて、そこにある田中銀行の横をお入りになると石段を下つて突當りの家の向つて左側の小さな家です。詳しい事はお目にかかつた節にゆづります。匆々。

大正九年二月二十四日　　生田春月

佐々木高明様

○

只今は結構なもの頂戴いたし有難御禮申上げます。
先刻、百合子様は拙宅へお立寄り大變お元氣で何よりでした、今頃はさかんにお話の事と察します。
私の仕事ももう少し殘つてゐるのがそのうち片づきますから新年にはぜひおたづね申したいと存じてをりますがまづは御禮迄。
乍末筆おからだ御大切に。

昭和三年十二月二十七日　　春月生

石川先生

座下

○

先夜はおそくまで失禮いたしました。

拍子の合はないダンスの相手でさぞお疲れになつたのではあるまいかと、大いに恐縮してをります。

ネットラウを見付けましたからお屆けいたします。

ピエール・ラムスの無政府主義宣言は私の持つてゐる本の中に入つてゐるかと思つてゐましたら入つてゐませんでした。

マラテスタ傳か、どちらかいい方をさきに譯してみたいと思つてゐますが、いづれお目にかかりましたせつに、

善き新年をお祈りします。

百合子さまによろしくおつたへ下さい、クリスマスの夜の樂しさの御禮をも。

昭和三年十二月三十日

生田春月

石川三四郎樣

侍史

○

信州の山からのおたより、心弱い後進の身の上を御案じ下さつた深情のおことば、拜讀いたし、思はず眼底が曇つてまゐりました。本當に感謝いたします、それ程に期待して頂いてゐる事を思へば、感謝と同時に、身の引きしまるやうな思ひがいたします。昨年からのいろ／＼の激動のあとで、はからずお目にかかれて、御指導を受けるやうになつたのは、私の幸福だつたとつく／″＼有難いと思ひました。

もはや御歸京になりましたか、山の靜かな氣分と、爽快な空氣とは、いい慰安であつた事と存じます。大分長らく御ぶさたいたし、しば／＼お目にかかりたくなるのですが、この數ヶ月はとかく引籠りがちで、勞作に從つてゐたものですから、もう何年もお目にかからなかつたやうな氣持さへいたします。

先般は、カアペンタア翁逝去の報をうけたまはり、さだめし感慨無量の事と存上げます、あの老齢の事ですから、人生の途半ばにして挫折した人とは事變り、異常な衝動は與へなくとも、やはり精神界の偉大な星斗の消え去つた事は、寂しい事です。御著『哲人カアペンタア』を愛讀した日の事も偲ばれ、いろ／＼お話承りたく存じます。

私の詩に書きました山本飼山のこと、私自身の惱みについてのよき御言葉、感深く肝銘したところですが、私自身はとにかく、山本飼山の惱みは、正しいところはよく知りませんけれど、今でも靑年にとつては、避けえられない危險な暗礁のやうに思はれます。その暗礁にふれて難破した靑年のいくたりかを私も知つてゐます。時代の激瀾はあまりに一本氣な弱く傷つきやすい心にとつては、おそろしいものです。

けれど、私は幾分年とつて來たせゐか、やはり一圖に破滅へは進めません。まだ〳〵仕事をやらなければ、死んでも死ねないやうな思ひです。その際、あの防柵の下積みにでもならうといふお言葉は、力強い鞭韃として、ともすれば折れさうになる心の上に落ちかかりました。私もお言葉によつて、今一倍の氣力を出して、働いてみたいとおもひます。しばらくお目にかからないあひだに、考へた事もありますし、やつて見たいと思つたこともありますゆゑ、そのうち、おうかがひいたし、萬々おはなし承りたく存じてをります。

一嵐來て、めつきり涼しく、秋めいてまゐりました。武藏野の秋のこころよさが、これからは味はれませう。

その野みちをお伴してさまよひうる事を樂しみつつ。

末筆ながら、どうぞ御からだ御大切になすつて下さい、そして、その點では、百合子さんのお言葉におしたがひ下さるやうに。百合子さんにもどうぞくれ〴〵もよろしく、家內は只今大島へまゐつてをります、二三日したらかへります、まづは御禮かた〴〵、

昭和四年八月十六日　　春月生

石川先生

○

お手紙うれしく拜讀、それからいろいろ結構なものおとどけ下さいまして、殊に、同志の人の厚情になる、先生

と對の臺灣服は、うれしく／＼拜受、いづれ口づから御禮申述べたいと思ひますが、今はとりあへず手紙で御禮まで。

長の旅行で、隨分お疲れでしたことゝおもひます。御靜養をいのります。あなたの御留守中に、パパをおたづねしたいと思ひながら、風邪でずつとねてゐて、直つたと思ふと、またぶりかへして、ついおたづねも出來ませんでした。どうぞ／＼先生に、よろしく仰しやつて下さい、もつとよくなつたら、溫かい日に、おたづねいたします。

ルクリユ號の詩を二三日中に書いておとどけいたします、ルクリユ號はいいですね。僕ももつと精を出して、いろ／＼「デイナミツク」のために盡したいものです。

今月中はとぢこもつて仕事をしてゐますから、おいで下さらばうれしいのです。（月はじめにも片付かないかもしれませんが）まづは御禮迄。

昭和五年一月二十八日

春月生

望月百合子様

○

十五日のルクリユ記念祭の日は失禮しました。その後、おからだはいかがですか、案じてゐます、あまり無理を

しないで、御靜養をいのつてゐます。私も十日位には仕事が片づきますから、また、先生にお目にかかりに上りたいと思つてゐます。『地人論』の校正はもうすつかりすみましたか。今度は我々の間で手分けして新聞雜誌に批評紹介を書きませう。伊福部君なども書きたいと云つてゐました。「スバル」で『或るコゼットの手紙』を拜見しました。いろ〳〵考へさせられました。何よりもあなたの御元氣を祈ります。

同封の爲替は「デイナミツク」の誌代のかはりです、四月號から十部づつお送り下さい、少し地方の人に送つてみたいと思ひますから。それから新年號が一部ありましたら序に送つて下さい。余はいづれ近日參上の折に申上げます。

昭和五年四月二日

生田春月

先生にどうぞよろしく〳〵

望月百合子様

○

我汝を愛す。この一語を以て、私はこの手紙を書き始めます。

私が始めて御身の名前を知つたのは、つい一週間程前のことでした。私は偶然『戀愛及び生活難に對して』と題する御身の感想を讀んで、忽ち異常な感激に充たされました。私の感激はそのまま私を沈默させて置かない。私

は取りあへず「新潮」の二月號に現はるべき私の『人格的評論』の中にその批評を書きました。然しそれは批評といはうよりも、私の感激の表白で、御身に對する敬意と無意識の愛とを現はしたものでした。
私は御身に對する戀愛をだん〳〵と明白に意識して來ました。一週間經過した今はもう私はこの意志を御身に傳へないではゐられなくなつたのです。然り、私の命は明日はもう無いかも知れぬ。また御身は明日いかなる人を愛し、いかなる人に愛せられるかわからぬ。けれども、私が御身を愛したと云ふ事は、必ず御身に告げて置かなければならぬ。此故に私はこの手紙を御身に送ります。私はこの外に、私の愛を御身に傳へるべき穩當な手段、若くはその捷徑を發見することが出來ませんから。

私は御身の感想に對する批評を書き終つてから、御身についてより詳しい事を知らうと欲した。それで早速もと青鞜社と關係の深かつた生田長江先生の御宅へ伺つて聞いて見ましたが、唯何でも「女子文壇」の訪問記者として生田先生のところへ、一度あなたが來られたことがあると云ふ事しかわかりませんでした。その時先生は、あなたのいかにも苦勞して來た人らしい謙遜と、柔かな感じとについて話された。その謙遜は私の最も愛するところで、あなたの文の明かに示してゐるところです。
歸つてから、私は『昔の男に對して』と『自己の或る心に與ふ』とを讀みました。私は既に御身の過去と現在と、御身の靈と肉とを悉く理解したやうに信じます。御身の感想は悉く血と涙を以つて書かれてある。御身の心中には、偉大に對する渴望がある。
御身は未だ明白に意識し得ぬ、ある理想を抱いてゐる。それが拍車のやうに御身を驅るやうに思はれる。要するに、御身は未だ芽にすぎない。けれども私はかゝる芽をふかく尊敬する。

私は長いこと愛すべき女性に渇望してゐた。しかし、或る者はあまりに淺薄不眞面目であつた。或る者は、あまりに平凡であつた。或る者は、虚僞であつた。愛すると共に敬すべき女、若くは、人格的に愛すべき女性はこの世に無いのではあるまいか、と私は疑つた。然るに今、私はあなたを見出した。私はあなたを愛せずには居られない。

私は人としての御身を敬し、女としての御身を愛したいと思ふ。二人の關係は友達でもいい、夫婦でもいい。否その凡てゞあらねばならぬ。そして私があなたに取つて、最も價値あるものであり、あなたが私に取つて最も價値あるものでなくてはならぬ。二人は相獲て、また相失ふべからざる人であるのを感ずる。今私があなたを獲なければ、二人の生涯は共に誤つた、不完全なものとなることを信ずる。

私はあなたの容貌を知らない。世間の人の云ふ美貌は私には何等の價もない。私はあなたの精神を見た。それは美しいものであつた。そして私は靈と肉とを同一のものだと信ずるが故に、私はあなたの肉體を美しいものだと信ずる。世間の人の云ふ內容のない美、死んだ美を私は愛しない。言ひ換へれば美と認めないのです。私の認める美は生命のある美なのです。よし世間では美と認めなくとも。

あなたの感想文はとりも直さず、あなた自身の肖像ではありませんか。私はこれを外にして、あなたの肖像を求めようとは思ひません。

私はあなたを愛する。

私は自分をあなたの求めてゐられる男子だと信じます。私は終世あなたの友として、あなたの戀人として、あなたの夫として、あなたを愛すべき男だと思ふ。

然し私はいかなる人間であらうか。いかなる男であらうか。私はあなたの書いた各行にこの問を讀んだ。私はその各行を引き來つて、自分の答をあなたにしなければなりません。けれども私は只僅かの文字しかここに書くまいと思ふ。私の人物は自分の吹聽にも、先輩の推奬にもよらず。只あなた自身の眼によつて判斷して頂きたいと思ひます。

私は　才子ではありません。私は、氣の利いた人間ではありません、けれども誠實と熱情とをもつて居ます。そしてあなたの「昔の男」は、それを持つてゐたでせうか。私は、自らあなたの「昔の男」とは正反對の人間だと思ふ。

私の中には英雄と赤兒とがある。その英雄とは理想家たるヒユウマニストたる私にかりに與へた名稱で必ずしも小兒の觀念中の英雄ではありませんけれど、この英雄があなたを翼のうちに抱へて美しい天に連れて行くと共に、私の中の小兒は、卽ち日常生活中の私はあなたに育てゝ貰はねばならない、あなたの乳を吸はなければ大きくなる事が出來ないと思ひます。私があなたの父であると同樣に、あなたは私の母でなくてはなりません。

「私は私を眺めて、血に濡れてゐる女を見た。泥にまみれて來る姿を見た。あの弱い女が、よくあれだけの忍ぶことをした。よく耐へた女であつた。よく切り拔けて來た女であつた。この女のあはれな隱忍な生活はみじめであつた。この女の戰ひが、どれほど性質(たち)惡い戰であつたか」云々のところを、私は涙なくして讀むことは出來な

かつた。

あなたは苦んで來た。あなたの苦みはどれ程であつたらうか。神がこれを知るのみだ。あなたの戰は悪戰苦鬪であつたに違ひない。あなたの胸は今も血を流してゐるのに違ひない。さう云ふ苦痛を私も嘗めて來た。あなたが自活して來てから十年になると云ふ。私も苦痛の中に一人育つて來てから十年になります。私は今ここで自分の經歷を語らうとは思ひませんが、私は底の底まで貧乏と云ふ苦いものを味つて來たのです。私は自らゲエテの所謂「涙に濕うたパンを食て、寢られぬ夜を泣き明かした」人間だと信じてゐます。かくて私は始めて人間となる事が出來た。私は自分の貧しいのを恥としない。私はこの人格をもつて立つ、私は私の眞の男子であるのを感ずる、とまれ、私等は同一の苦を嘗めた人間である。

けれども孤獨はいかに寂寥であらう。ただ一人戰ふと云ふ事はいかに心細い事であらう。御身も必ずやかかる思ひを經驗してゐられるに違ひない。

人ひとりなるはよからずとはエホバの言葉である。アダムはイヴを要する。

けれども今私は御身を愛する。私の心は御身なくして生きて行かれないのを感ずる、そして御身も亦私なくして生きて行かれない人となることをかたく信ずる。御身は私のイヴである。私は御身が私を御身のアダムと見ないとは信じられない。さうすれば、我々は決して孤獨ではない。我々は手を携へて進む事が出來る。我々は更によき戰を戰ふ事が出來る。

私は御身の現在の生活のいかに慘憺たるものなるかを見た。御身のに比ぶれば、私の生活は尙多少の餘裕を存してゐる。私は私の愛するものを一日でも餘計苦しめたくない。私は自分の戰友の危急にどうして一刻も傍觀して

ゐられよう。私は愛する御身を顧みないでゐる事は出來ぬ。私は御身と生活を倶にしたければならぬ。勿論私はその爲め御身が、もはや其日の生活に困ることのない身分になるものとは云はぬ。けれども我々が夫たり妻たる時には、いかにその日の食に困り、理想にいたる路のけはしきに、灯なき部屋に二人相抱いて、幾夜かを泣き明かすとしても、いかに我々はいかに幸福であらう。勵ましつ、勵まされつ、助けつ、助けられつ、敬しつ、敬せられつ、愛しつ、愛せられつ、我々は人類のために戰ふことが出來る。
私の愛は戯れでない、私はこの愛を苦痛の中に育てて行きたい。涙の中に結びたい。私は曾て左のやうな斷片の詩を作つた。

涙は戀のなかうどなり、
軟かになりし心に愛は沁み入る。
幸福の與へし戀は不幸に破らる。
されどかなしみの結びし戀はよろこびに破れじ
ああ破船の後ただ二人殘りし男と女との戀!
破られし船に海水はたのしく押入る
やぶられたる胸に愛はたのしく忍び入る。

まことに私とあなたとは破船ののち、無人島にただ二人生き殘つた人間ではありますまいか。私は今日この日から、新しい二人の生活を築かなければならぬのを感じます。我等の戀は不幸から生れなければならぬ、そして美

しい晴々した青空に飛んで行かなければならぬ。

殘念ながらあなたは未だ私の書いたものを見られた事がないやうに思はれる。私は未だあまりに僅かしか書いてゐない。私は現在に生きず未來に生きてゐる。けれどもあなたの感想があなたの肖像であると同樣に、私の書いたものは私の自畫像なのですから、あなたに讀んで頂きたい。それも、然し僅かの詩と飜譯と二月から書き出す事になつた評論とに過ぎません。

私はあまりに高い野心を抱いてをります、この大望は俗人の嗤ひを買ふにすぎぬであらうが、あなたにはまつさきに打ち明けなければならぬ。即ち、私は人類を救はうと思ふ。そのため私は藝術家になるかも知れぬ、宗教家になるかも知れぬ。けれども金持にならうとも華族にならうとも思はない、即ち氣樂な生活の人とならうとは思はない。

だから私がいかに御身を愛してゐようとも御身が金持を愛し、氣樂な生活を好む人ならば、私はそれを知ると同時に自己の迷ひを悟つて沈默して、再び一人の道を辿らなければならぬ。けれども私は御身がそんな女だとは信じない。私は御身に對する私の愛を神の與へたものだと信じてゐます。

私は御身を呑氣な生活の仲間とは思はぬ、理想家の辿るべき、苦痛の旅の道連れだと思ふ、互に慰め合ひ、導き合うて、少しでも高いところへ行きたいと思ひます。

求めよさらば與へられん。この眞理は御身のための眞理であり、また私のための眞理である、されば、私はこの私の大なる突然の戀愛が御身を驚かし度を失はしめるものとは信じない。これは本當に突然であらうか。否、私は御身が私を求めつつあつたのを知つてゐる。丁度私が御身を求めつつあつたのと同じやうに。

御身の「私は私の夫の具體的の存在を求めてはゐまい」との言は何と云ふ悲しい言葉であらう。けれどもそれは本當ではない。否、それは御身がその夫に自己の存在を想起せしめようとした言葉だと思ふ。私は、御身の今幸福なるを云ふ。私自身幸福であるから。私は、今御身に於て、むしろ、失つたものを再び手に返したやうな喜びを感ずる。恐らく、幾千年の前、我々は、やはりかうした幸福を味つた夫婦ではなかつたらうか。

また考へて見ると、私は既に今は御身の夫であるやうにも思はれる。我々は離れてゐる。離れた處で別々の仕事をしてゐる。それで今御身に逢ひたくなつて、この手紙を書いてゐるのではあるまいか。私は御身を愛する。私は今既に御身を抱いてゐるのを感ずる、私は夫である。御身は妻である。私は御身を愛する。御身もまた私を愛するであらう。

私はこの目前の世界の外に、電車が走り自動車が行き、あらゆる僞りと不正との行はれるこの世界の外に、別に一個の世界を自分の中にもつてゐる。この世界をそのまま目前の世界に移して來ようとするのが、私の欲望であり、同時に使命なのです。私はあなたをその世界の中に導き入れずには居られぬ。あなたは自ら小さな女だと云ふ。あなたは眞珠だ。私はその眞珠を採つて來て磨くべき人間ではありますまいか。あなたは私の生活を飾り、私の額の汗を拭つて下さる。そして私はあなたの「我」を引出し、あなたを今より更にすぐれた女とし、あなたの涙を拭うでせう。あなたは私にないものを下さるであらうし、私はあなたに缺けてゐるものを差上げるでせう。

プラトオの說はいかに詩的であらう。かくて我々二人は一個の完きものとなるのです。愛なきところに生命はない。愛し愛される事なくして、人はどうして生きて行く事が出來るであらうか。そしてあなたは既に私の「自我」

の一部となつてゐる。私は今あなたの喜びと苦みとを自分のもののやうに感ずる。
多分私はあなたより年が若いかも知れぬ。けれどもそれが何であらう。私があなたのよき夫たるべき唯一の男子たるに何のさまたげがあらう。

あなたが曾て多くの男を見、多くの男に苦んだのは、只私を獲んがためだつたのです。同時に、私が多くの女を見、多くの女に苦しんだのは、只あなたを獲んが爲めだつたのです。

私は曾て○○○○○○○○○○を見た。そのため私はこの手紙を書くに餘程の躊躇を覺えました。何だか○○○と同じやうな人間に見られはすまいかと恐れたからです。けれども私は決して輕薄な人間ではない。私は苦勞をしてゐる。私はここで○○○○○○○○○○○○私は何よりもあなたが愼重た態度をとつて、私を十分批判して下さるやうに希望します。私は夢のやうな戀はしたくありません。私は打算的な戀を忌むと共に、○○○浮いた戀を好みません。あなたは一個の人として自己に恥ぢないやうな態度を以て私の言葉に對して下さるでせう。私も亦立派な人間としての態度であなたに對する。

世の多くの人の戀愛は虚僞の上に立つ。彼等はみえを張り、少しでも體裁をよくしたいと努める。互に上面(うはべ)だけの體裁をつくろつていい加減の事をいつてゐる。其結果彼等は自らその罰を受けるのです。けれ共私は何等の虚飾もなく御身に對したい。同時に何等の飾もなく御身の私に對せられん事を望みます。私は赤裸々なる私の全身をあなたにお目にかけませう。さうすればあなたは私の凡てを知る事が出來る。そしてあなたは私の人格を尊敬されるでせう。只皮相の判斷を下してはいけません。私も亦皮相の判斷に迷はされまいと思ふ。人間である以上二人とも多少の缺點はあるでせうが是れは互に矯正して行きたい。

私は今期待に燃えてゐます。早く一刻も早くあなたを見なければならぬ、あなたと語らなければならぬ。然るに

私はあなたのところを知らない。私はそれを知るに道なきに苦んだのですが、「女子文壇」と云ふ一事から河井酔茗氏に聞けばわかるだらうと思ひ。早速同氏をたづねて、場合によつては氏の手を通じて御身と逢つてもいいと考へました。尙同氏にきいてわからなければ、あらゆる手段を盡して探らうと思ひます。とまれ、この手紙は書き了ると共に封じて、御身のところを知るまではかたく身につけてゐようと思ひます。

今私は大きい聲で叫んだ。山彥はこれに答へるであらうか。私は答へると深く信じてゐる。若し答へなければ――それは信ずべからざる事である。以上が例の昨夜お話した手紙なのです。このあとの文句は一度逢つた以上は無用のものなので除いてしまひました。

唯今は御葉書ありがたうございます。あなたこそ無事に歸りましたか。電車賃など借りて若しそれがあなたのあの時持つてゐた最後の金で、さう云ふ事を私に言ふ事が出來ないため、自分は步いて歸つたのではあるまいかと、一晩それればかしが氣になりました。無事に歸りましたか。昨夜雪があんなにつもつたのも何だか意味があるやうに思はれます。あなたと詳しい話の出來なかつたのは何より殘念です。十三日頃には少しひまになりますから(それ以内だつてかまひません)下宿へ來て下さいますか。何しろ人の多い下宿だから、あまりいい感じはしないでせうから、やはり長江先生のお宅がいいかも知れません。二階があいてゐるのですから、又先生の奥樣にもお目にかかつてお話を承つた方がいいと思ひますから。
あれだけ話したばかりでは、私の人物はよくおわかりにならなかつたでせう。よくわからないから、あなたはまだ私を愛する事は出來ないでせう。いかがです。

今仕事が八方から身體を取巻いてゐるため氣が落ちつきません。御手紙下さい。待つてをります。

大正三年二月十五日　　　　春月生

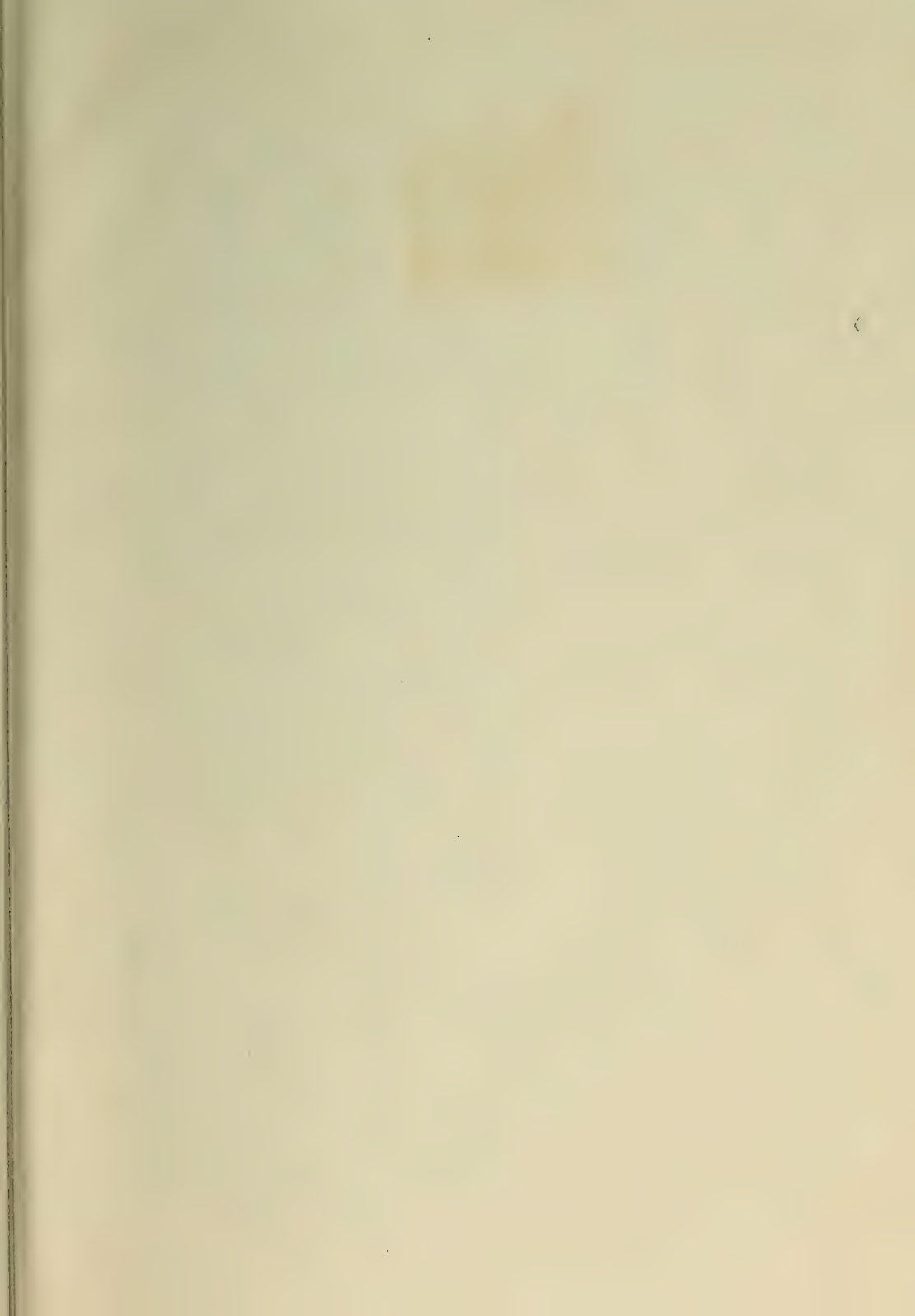
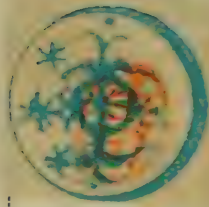
西崎花世様

○

手紙を見た。國へ行く事は出來ない、賛成する人も少い。僕は今休養する必要はない、刺戟を欲してゐる、刺戟によつて何か書いて見なければならない。靜かな自然の中では反つて隋眠を貪ることとなる虞れがある。僕はおまへの國へ歸つた事についてはあまりいい事とは思つてゐない。あの朝三上君のところで、たづ子さんとは往來をも斷つてしまふ事を話して置いたのに、あの日廣津君等と酒を飮んで夜晩く歸つて見るとあの始末だつたから少からず意外に思つた。然し別に咎めようとは思はない。休息して來るのもいいだらう。ただ親類の人たちに對して僕が面目を失つたのはたしかだ。相當の準備もなく國へ歸したのだから。しかしどうでもいい。僕は今自炊をしてゐる、この方が氣樂なやうな氣もする、また淋しいやうな氣持もする。歸られたら早く歸つた方がいいだらう。山田さんとは往來を斷つて、堀木君によつて仕事を仲介して貰つてゐる、僕はあの人を全然遠ざけてしまひたいのだ、が、それはおまへが歸つて來てからにしてもいい。ともかく僕があの人をちつとも愛してゐない事は確かだ、その方の心配はいらない。僕は今書く事ばかり考へてゐる。今年の中に何かすばらしい仕事をしたい

と思つてゐる。辭引ももうぢきすむ。まづは右まで。皆樣によろしく傳へてくれ。旅費や土産物の心配をする事が出來なかつたのをうらむ。

大正六年五月二十日　　　　清

花世樣

生田春月全集

第九卷

昭和六年十一月十日印刷
昭和六年十一月十五日發行

編輯者　生田花世
同　生田博孝
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町七十一番地

發行所　新潮社
電話牛込 長八八五番 八八六番 八八七番 八八八番 八九〇番
振替東京 一七四二番

印刷者　佐々木俊一
富士印刷株式會社

製本者　植木瀧藏

全十巻目次

══全部完了══